流山運動公園周辺地区
埋蔵文化財調査報告書6

－流山市後平井中通遺跡（ながれやま　うしろひらいなかどおり）－

序　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第３７集として、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市後平井中通遺跡の発掘調査報告書です。

これまでに行われた調査では、旧石器時代の石器集中地点、縄文時代前期及び後期の集落跡、古代の竪穴住居跡、中・近世の塚・土塁など、地域の歴史を知る上での貴重な成果を数多く得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和３年３月

千 葉 県 教 育 委 員 会

文化財課長　田 中 文 昭

凡　例

1　本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は、千葉県流山市後平井字中通に所在する後平井中通遺跡（遺跡コード　220-032）の第１次から第35次までの成果を収録している。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、平成25年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第１章に掲載した。

5　本書の執筆は以下の通りで、編集は安井が行った。

第１章・第３章・第５章・第６章第２～４節　安井健一

第２章・第６章第１節　落合章雄

第４章　齋藤修佑

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで以下の機関及び方々からご指導、ご協力を得た。

千葉県県土整備部市街地整備課・流山区画整理事務所、流山市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団、上守秀明、栗田則久、小林清隆、齋藤弘道、津田芳男、橋本勝雄

7　本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

8　本書で使用した地形図は下記の通りである。

第１・２・17・39・213・220図　流山市発行　1/2,500　流山市都市計画地図

第15図　参謀本部陸軍部測量局作成　1/20,000　迅速測図「流山村」

第16図　国土地理院発行　1:25,000「流山」（NI-54-25-1-2）・「松戸」（NI-54-25-2-1）平成17年発行

9　図版１で使用した航空写真（遺跡周辺航空写真）は、昭和48年に京葉測量株式会社が撮影したものである。

【遺構種別記号】

SB：掘立柱建物跡　SD：溝状遺構、区画整形遺構　SE：井戸　SF：炉跡　SH：ピット・柱穴群

SI：竪穴住居跡　SK：土坑、陥穴、地下式坑、方形竪穴状遺構　SM：塚

SX：台地整形区画、蔵骨器、土塁

本 文 目 次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　調査の経緯と経過…… 1
　　２　調査の方法と調査概要…… 1
　第２節　遺跡の位置と環境…… 15
　　１　遺跡の地理的環境…… 15
　　２　周辺の遺跡と歴史的環境…… 16
第２章　旧石器時代の遺構と遺物…… 35
　第１節　概要…… 35
　第２節　遺構と遺物…… 35
　　１　第１ブロック…… 35
　　２　第２ブロック…… 35
　　３　第３ブロック…… 38
　　４　第４ブロック…… 38
　　５　第５ブロック…… 45
　　６　単独出土遺物…… 54
第３章　縄文時代の遺構と遺物…… 61
　第１節　概要…… 61
　第２節　遺構と遺物…… 61
　　１　北側調査区の遺構群…… 61
　　（１）竪穴住居跡と関連する土坑・ピット…… 63
　　（２）その他の土坑・ピットなど…… 158
　　２　南側調査区の遺構群…… 212
　　３　遺構外出土遺物…… 240
　　（１）縄文土器…… 240
　　（２）縄文時代土製品…… 261
　　（３）縄文時代石器…… 269
　　４　貝層…… 271
　　（１）貝サンプルの採取地点と分析方法…… 271
　　（２）分析結果…… 271
第４章　奈良・平安時代の遺構と遺物…… 279
　第１節　概要…… 279
　第２節　遺構と遺物…… 279
　　１　竪穴住居跡…… 279

2　土坑・埋設土器…… 287
第５章　中・近世の遺構と遺物…… 291
第１節　概要…… 291
第２節　遺構と遺物…… 291
1　南側調査区の遺構群…… 291
（１）(12)調査区…… 291
（２）(21)調査区…… 301
（３）(3)南側・(8)調査区…… 304
（４）(16)・(17)・(29)調査区…… 304
2　西側調査区の遺構群…… 310
（１）(25)調査区東側…… 310
（２）(25)西側・(30)・(34)・(24)調査区…… 312
3　北側調査区の遺構…… 322
（１）(27)調査区…… 322
（２）(31)調査区…… 326
（３）その他の調査区…… 327
第６章　まとめ…… 342
第１節　旧石器時代…… 342
第２節　縄文時代…… 343
1　時期ごとの様相について…… 343
2　竪穴住居跡について…… 346
3　出土遺物について…… 347
第３節　奈良・平安時代…… 347
第４節　中・近世…… 348

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡……2
第２図　後平井中通遺跡全体図と地形……3
第３図　上層確認調査トレンチ配置及びグリッド配置……4
第４図　下層確認調査グリッド配置……5
第５図　上層本調査範囲及び遺構全体図の図郭割付……6
第６図　上層遺構全体図（１）……7
第７図　上層遺構全体図（２）……8
第８図　上層遺構全体図（３）……9
第９図　上層遺構全体図（４）……10
第10図　上層遺構全体図（５）……11
第11図　上層遺構全体図（６）……12
第12図　上層遺構全体図（７）……13
第13図　上層遺構全体図（８）……14
第14図　上層遺構全体図（９）……15
第15図　遺跡の立地と周辺の地形……24
第16図　遺跡の位置と周辺の遺跡……25
第17図　旧石器時代ブロック分布全体図……36
第18図　第１ブロック器種別・石材別分布……37
第19図　第１ブロック出土遺物……38
第20図　第２ブロック器種別・石材別分布……39
第21図　第２ブロック出土遺物……40
第22図　第３ブロック器種別・石材別分布……41
第23図　第３ブロック出土遺物（１）……42
第24図　第３ブロック出土遺物（２）……43
第25図　第３ブロック出土遺物（３）……44
第26図　第３ブロック出土遺物（４）……45
第27図　第４ブロック器種別分布……46
第28図　第４ブロック石材別分布……47
第29図　第４ブロック出土遺物……47
第30図　第５ブロック器種別分布……48
第31図　第５ブロック石材別分布……49
第32図　第５ブロック出土遺物（１）……50
第33図　第５ブロック出土遺物（２）……51
第34図　第５ブロック出土遺物（３）……52
第35図　第５ブロック出土遺物（４）……53
第36図　第５ブロック出土遺物（５）……54
第37図　単独出土遺物（１）……55
第38図　単独出土遺物（２）……56
第39図　縄文時代遺構全体図……62
第40図　(3)SI003住居跡、出土遺物……64
第41図　(3)SI012住居跡……65
第42図　(3)SI012住居跡出入口施設、(3)SK011土坑……66
第43図　(3)SI012住居跡出土遺物（１）……67
第44図　(3)SI012住居跡出土遺物（２）、(3)SK011土坑出土遺物……68
第45図　(3)SI031住居跡、出土遺物……69
第46図　(3)SI032住居跡……71
第47図　(3)SK026～ 028・033・034・036～ 039土坑……72
第48図　(3)SI032住居跡、(3)SK027土坑出土遺物……73
第49図　(3)SK026 ～ 028・033・034・036 ～ 038 土坑出土遺物……74
第50図　(3)SI035住居跡、出土遺物……77
第51図　(3)SI045・046住居跡、(3)SK076・077土坑……79
第52図　(3)SI045住居跡、(3)SK076・077土坑出土遺物……80
第53図　(3)SI046住居跡出土遺物……81
第54図　(3)SI048住居跡、出土遺物……82
第55図　(3)SI072・073竪穴状遺構、出土遺物……82
第56図　(3)SI078 ～ 081住居跡、(3)SK082 ～ 085・087土坑……84
第57図　(3)SK082 ～ 084・087土坑……85

第58図　(3)SI078・079・081住居跡出土遺物……86
第59図　(3)SI079・081住居跡出土遺物……87
第60図　(3)SI079～ 081住居跡、(3)SK082・083・087土坑出土遺物 ……88
第61図　(3)SI104住居跡、出土遺物(1)……90
第62図　(3)SI104住居跡出土遺物(2)……91
第63図　(3)SI104住居跡出土遺物(3)……92
第64図　(3)SI104住居跡出土遺物(4)……93
第65図　(3)SI118住居跡、(3)SK115土坑、出土遺物……94
第66図　(3)SI136住居跡、出土遺物、(3)SK098・099土坑 ……96
第67図　(3)SK093 ～ 097土坑 …… 97
第68図　(3)SK093 ～ 095・099土坑出土遺物……98
第69図　(3)SI139住居跡…… 100
第70図　(3)SK141 ～ 144・184・185土坑 …… 101
第71図　(3)SI139住居跡出土遺物(1)…… 102
第72図　(3)SI139住居跡出土遺物(2)、(3)SK183土坑出土遺物 …… 103
第73図　(3)SI140住居跡、出土遺物(1)…… 105
第74図　(3)SI140住居跡出土遺物(2)…… 106
第75図　(3)SI140住居跡出土遺物(3)…… 107
第76図　(3)SI140住居跡出土遺物(4)…… 108
第77図　(3)SI147住居跡…… 109
第78図　(3)SI147住居跡出土遺物…… 110
第79図　(3)SI161住居跡、(3)SK162土坑、出土遺物…… 111
第80図　(3)SI161住居跡出土遺物…… 112
第81図　(3)SI163住居跡、(3)SK164・173・174土坑…… 114
第82図　(3)SI163住居跡出土遺物(1)…… 115
第83図　(3)SI163住居跡出土遺物(2)、(3)SK164・173土坑出土遺物…… 116
第84図　(3)SI165住居跡、(3)SK126 ～ 130土坑 …… 118
第85図　(3)SI165住居跡、(3)SK126 ～ 130土坑出土遺物…… 119
第86図　(3)SI177住居跡、(3)SK176土坑、出土遺物…… 121
第87図　(3)SI179住居跡、出土遺物…… 122
第88図　(3)SI181住居跡、(3)SK182土坑 ……122
第89図　(3)SI180住居跡、出土遺物…… 123
第90図　(6)SI006・007住居跡、(6)SK008土坑、出土遺物…… 124
第91図　(13)SI001住居跡、出土遺物 …… 126
第92図　(13)SI002住居跡、出土遺物 …… 127
第93図　(13)SI003住居跡 …… 128
第94図　(13)SI003住居跡出土遺物 …… 129
第95図　(13)SI004住居跡、出土遺物 …… 130
第96図　(13)SI005住居跡、出土遺物 …… 131
第97図　(13)SI006住居跡、出土遺物 ……133
第98図　(13)SI007・008住居跡(1)…… 134
第99図　(13)SI007・008住居跡(2)…… 135
第100図　(13)SI007住居跡出土遺物…… 136
第101図　(13)SI008住居跡出土遺物…… 137
第102図　(13)SI009住居跡、出土遺物(1)…… 138
第103図　(13)SI009住居跡出土遺物(2)…… 139
第104図　(13)SI012 ～ 014住居跡(1)…… 140
第105図　(13)SI012 ～ 014住居跡(2)、(13)SI012住居跡出土遺物(1)…… 141
第106図　(13)SI012 ～ 014住居跡遺物分布…… 142
第107図　(13)SI012住居跡出土遺物(2)…… 143
第108図　(13)SI012住居跡出土遺物(3)、(13)SI013住居跡出土遺物(1)…… 144
第109図　(13)SI013住居跡出土遺物(2)…… 145
第110図　(13)SI013住居跡出土遺物(3)…… 146
第111図　(13)SI013住居跡出土遺物(4)…… 147
第112図　(13)SI014住居跡出土遺物(1)…… 148
第113図　(13)SI014住居跡出土遺物(2)…… 149
第114図　(13)SI014住居跡出土遺物(3)…… 150
第115図　(13)SI014住居跡出土遺物(4)…… 151
第116図　(13)SI014住居跡出土遺物(5)…… 152
第117図　(15)SI127住居跡、出土遺物…… 153
第118図　(19)SI001 ～ 004住居跡…… 154

第119図　(19)SI001 ～ 004住居跡出土遺物…… 155
第120図　(19)SK005 ～ 008土坑、出土遺物…… 157
第121図　(35)SF001炉跡、(26)SK001、(35)SK001～ 006土坑、出土遺物 …… 158
第122図　(13)SK010・011・015、(22)SK001・002土坑…… 160
第123図　(13)SK015土坑出土遺物（１） …… 161
第124図　(13)SK015土坑出土遺物（２） …… 162
第125図　(13)SK015土坑出土遺物（３）、(13)SK010・011、(22)SK001・002土坑出土遺物 …… 163
第126図　(6)SK001・002・004・005・009土坑 164
第127図　(6)SK003・010・011土坑、(6)SH001ピット …… 165
第128図　(6)SK002・003・009・011土坑出土遺物 …… 167
第129図　(15)SK101 ～ 113土坑 …… 169
第130図　(15)SK101・102・104・106・113土坑出土遺物 …… 170
第131図　(3)SK004・005・010・014・015土坑、(3)SH013・018ピット …… 171
第132図　(3)SK019 ～ 022・029・030土坑…… 173
第133図　(3)SK004・005・010・014・015・020・022・029・030土坑、(3)SH013・018ピット出土遺物 …… 174
第134図　(3)SK023・024・040 ～ 044土坑、(3)SH025ピット …… 177
第135図　(3)SK068 ～ 071・074・075土坑、(3)SH047・062・067ピット …… 178
第136図　(3)SK023・024・040・041・043・044・068 ～ 071土坑、(3)SH047・062・067ピット出土遺物 …… 179
第137図　(3)SK074・075土坑出土遺物 …… 180
第138図　(3)SK086・088 ～ 092・113・114土坑、(3)SH138ピット群 …… 182
第139図　(3)SK086・089 ～ 092・113・114土坑、(3)SH138ピット群出土遺物 …… 183
第140図　(3)SK102・103・106 ～ 108・110・112土坑、(3)SH105ピット群、(3)SH109ピット …… 185
第141図　(3)SK116・117・119土坑、(3)SH132ピット群 …… 186
第142図　(3)SK120・122 ～ 125土坑、(3)SH178ピット群 …… 188
第143図　(3)SK102・103・106・109・116・117・120～122・124土坑、(3)SH105・132・178ピット群、(3)SH109ピット出土遺物 …… 189
第144図　(3)SK131・133 ～ 135・137・145・146・175土坑 …… 191
第145図　(3)SK131・134・137・145土坑出土遺物 …… 192
第146図　(3)SK166 ～ 172、(5)SK210土坑、(3)SH186ピット(埋設土器) …… 194
第147図　(3)SK167 ～ 170土坑出土遺物…… 195
第148図　(3)SK171・172、(5)SK210土坑、(3)SH186ピット出土遺物 …… 196
第149図　(5)SK208・209・211～216・218土坑 198
第150図　(5)SK217・219・220、(6)SK027～029土坑…… 199
第151図　(6)SK015・018・019・021・023 ～025土坑、(6)SH016・017・020・022・026ピット…… 200
第152図　(5)SK208・209・211 ～ 215・219土坑出土遺物 …… 201
第153図　(5)SK213・217土坑、(6)SH016・023・026・029ピット出土遺物 …… 203
第154図　(15)南側調査区土坑・ピット …… 205
第155図　(15)SK114 ～ 125土坑 …… 206
第156図　(15)SK114 ～ 122土坑出土遺物 …… 207
第157図　(15)SK123・125・126・136・137・144・145・147・148・150土坑出土遺物 … 209
第158図　(15)SK146土坑、(15)SH161・165・168・174～176・181・183・186・198

ピット出土遺物 …… 211
第159図 (21)SI001住居跡…… 213
第160図 (21)SI001住居跡出土遺物（１）…… 214
第161図 (21)SI001住居跡出土遺物（２）…… 215
第162図 (21)SI003住居跡…… 216
第163図 (21)SI003住居跡出土遺物（１）…… 217
第164図 (21)SI003住居跡出土遺物（２）…… 218
第165図 (3)SI156住居跡、出土遺物 …… 219
第166図 (3)SI159住居跡 …… 219
第167図 (3)SI159住居跡出土遺物 …… 220
第168図 (3)SI160住居跡、(3)SK189・190土坑 222
第169図 (3)SI160住居跡、(3)SK190土坑出土遺物 …… 223
第170図 (3)SI191住居跡 …… 224
第171図 (3)SI192住居跡、(3)SK201土坑 …… 225
第172図 (3)SI191・192住居跡出土遺物…… 226
第173図 (3)SI195住居跡、(3)SK199土坑 …… 228
第174図 (3)SI195住居跡、(3)SK199土坑出土遺物 …… 229
第175図 (3)SK151 ～ 155・157・158・202土坑 …… 231
第176図 (3)SK196 ～ 198・200・203・204土坑 …… 233
第177図 (3)SK188・194・205土坑、(21)SK006土坑 …… 234
第178図 (21)SK002・004・005土坑 …… 235
第179図 (3)SK154・157・158・188・194・196～198・204・205土坑出土遺物 … 236
第180図 (21)SK002・004 ～ 006土坑出土遺物 …… 238
第181図 (12)SK006・008・010土坑、出土遺物 …… 239
第182図 遺構外出土縄文土器（１） …… 241
第183図 遺構外出土縄文土器（２） …… 242
第184図 遺構外出土縄文土器（３） …… 243
第185図 遺構外出土縄文土器（４） …… 244
第186図 遺構外出土縄文土器（５） …… 245
第187図 遺構外出土縄文土器（６） …… 246
第188図 遺構外出土縄文土器（７） …… 247
第189図 遺構外出土縄文土器（８） …… 248
第190図 遺構外出土縄文土器（９） …… 249
第191図 遺構外出土縄文土器(10) …… 250
第192図 遺構外出土縄文土器(11) …… 251
第193図 遺構外出土縄文土器(12) …… 252
第194図 遺構外出土縄文土器(13) …… 253
第195図 遺構外出土縄文土器(14) …… 254
第196図 遺構外出土縄文土器(15) …… 255
第197図 遺構外出土縄文土器(16) …… 256
第198図 遺構外出土縄文土器(注口土器１） … 257
第199図 遺構外出土縄文土器(注口土器２） … 258
第200図 遺構外出土縄文土器(注口土器３） … 259
第201図 遺構外出土縄文時代土製品（１）、石製品 …… 260
第202図 遺構外出土縄文時代土製品（２） …… 261
第203図 遺構外出土縄文時代石器（１） …… 262
第204図 遺構外出土縄文時代石器（２） …… 263
第205図 遺構外出土縄文時代石器（３） …… 264
第206図 遺構外出土縄文時代石器（４） …… 265
第207図 遺構外出土縄文時代石器（５） …… 266
第208図 遺構外出土縄文時代石器（６） …… 267
第209図 遺構外出土縄文時代石器（７） …… 268
第210図 遺構外出土縄文時代石器（８） …… 269
第211図 遺構外出土縄文時代石器（９） …… 270
第212図 貝種組成グラフ …… 276
第213図 奈良・平安時代遺構全体図 …… 280
第214図 (26)SI001住居跡…… 281
第215図 (26)SI001住居跡出土遺物…… 282
第216図 (26)SI002住居跡、出土遺物…… 283
第217図 (6)SI030住居跡、出土遺物 …… 285
第218図 (34)SI001住居跡、出土遺物…… 286
第219図 (3)SK193土坑、(7)SX003埋設土器、出土遺物 …… 288
第220図 中・近世遺構全体図 …… 292
第221図 (12)SM001塚、(12)SX002土塁、

(12)SD003溝状遺構（１） …… 294
第222図　(12)SM001塚、(12)SX002土塁、(12)SD003溝状遺構（２） …… 295
第223図　(12)SK005・007・009土坑、(12)SE012井戸状遺構…… 296
第224図　(12)SK004土坑群 …… 298
第225図　(12)調査区出土中・近世遺物（１） … 298
第226図　(12)調査区出土中・近世遺物（２） … 299
第227図　(12)調査区出土中・近世遺物（３） … 300
第228図　(21)SX001土塁、(21)SD001 ～ 004溝状遺構（１） …… 302
第229図　(21)SX001土塁、(21)SD001 ～ 004溝状遺構（２）、出土遺物 …… 303
第230図　(3)SD206・207溝状遺構 …… 305
第231図　(8)SD001・002、(16)SD001、(17)SD001・002、(29)SD001溝状遺構 … 306
第232図　(3)(8)調査区出土中・近世遺物 …… 307
第233図　(3)(8)(12)(21)以外の南側調査区出土中・近世遺物 …… 307
第234図　(25)SX001柱穴群、(25)SX011台地整形、(25)SK009土坑（１） …… 308
第235図　(25)SX001柱穴群、(25)SX011台地整形、(25)SK009土坑（２）、出土遺物、(25)SK010土坑 …… 309
第236図　(25)SK007地下式坑、(25)SK008方形竪穴遺構 …… 311
第237図　(25)SD001 ～ 003、(30)SD001・002溝状遺構 …… 313
第238図　(25)SK001・003地下式坑…… 314
第239図　(25)SK002・004 ～ 006土坑…… 315
第240図　(30)SK001 ～ 003土坑 …… 316
第241図　(30)SK004 ～ 006・008・012 ～ 014土坑 …… 317
第242図　(30)SD003、(34)SD001・002溝状遺構 …… 318
第243図　(30)SK015土坑、(25)(30)調査区出土遺物 …… 319
第244図　(24)SD001溝状遺構、(24)調査区出土遺物 …… 321
第245図　(27)調査区遺構群、出土遺物 …… 323
第246図　(31)調査区遺構群、出土遺物 …… 324
第247図　(15)SD201 ～ 203溝状遺構、出土遺物 …… 325
第248図　(3)SD002、(6)SD001、(7)SD001溝状遺構、出土遺物 …… 326
第249図　(10)SK222、(22)SK003・004土坑、出土遺物 …… 327
第250図　(9)SD001・002、(10)SD220・221、(19)SD001 ～ 003、(35)SD001溝状遺構 …… 328
第251図　北側調査区出土中・近世遺物 …… 330
第252図　出土銭貨（１） …… 331
第253図　出土銭貨（２） …… 332
第254図　北側調査区縄文時代遺構 …… 344
第255図　南側調査区縄文時代遺構 …… 345
第256図　出入口施設を持つ竪穴住居 …… 346

表 目 次

第１表　後平井中通遺跡(1)～(35)調査一覧 ……26
第２表　後平井中通遺跡上層遺構一覧……28
第３表　周辺遺跡一覧……34
第４表　旧石器時代出土石器属性表……57
第５表　旧石器ブロック別組成表……60
第６表　縄文時代土製品属性表…… 273
第７表　縄文時代石器属性表…… 274
第８表　縄文時代貝サンプル一覧…… 276
第９表　出土貝類種名一覧…… 276
第10表　出土貝類同定結果…… 277
第11表　奈良・平安時代遺物観察表…… 289
第12表　中・近世土器・陶磁器観察表…… 333
第13表　中・近世遺物（石製品等）観察表…… 336
第14表　中・近世銭貨一覧表…… 340

図 版 目 次

巻頭図版１　後平井中通遺跡縄文時代集落航空写真
巻頭図版２　(3)SI160竪穴住居跡
(21)SI003竪穴住居跡貝層検出状況
巻頭図版３　(3)SI104竪穴住居跡
(3)SI147竪穴住居跡

図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　第２ブロック遺物出土状況
第３ブロック遺物出土状況
第５ブロック遺物出土状況
３次調査区縄文時代包含層調査状況
(3)SI003北西から
(3)SI012、(3)SK005・011・014・015、
(3)SH013南東から
(3)SI012出入口施設南東から
(3)SI031真上から
図版３　(3)SI032・035、(3)SK026・028・033・034・039真上から
(3)SI032南から（15次調査区）
(3)SK026・027・036遺物出土状況西から
(3)SK027・036・038北から
(3)SI045・046、(3)SK068・088～092北から
(3)SK076・077北から
(3)SI048、(3)SK029・030・040～044・086・113・114、(3)SH025・047・062真上から
(3)SI072・073北から
図版４　(3)SI078～081、(3)SK082～085・087真上から
(3)SI104、(3)SH109東から
(3)SI118、(3)SK112・115・131東から
(3)SI136、(3)SK093～099・108・110南東から
(3)SI139、(3)SK125・141～145・183～185南東から
(3)SI140、(3)SK146東から
(3)SI147南から
(3)SI161、(3)SK162南西から
図版５　(3)SI163、(3)SK164・171～174南東から
(3)SI163北から（７次調査区）
(3)SI165、(3)SK126～130・134・137・172東から
(3)SI177、(3)SK175・176西から
(3)SI179南東から
(3)SI180南東から
(3)SI181、(3)SK182西から
(6)SI006・007南西から
図版６　(6)SK008南から
(13)SI001北から
(13)SI002西から（南側）
(13)SI002西から（北側）
(13)SI003東から
(13)SI004北西から
(13)SI005北から
(13)SI006北東から
図版７　(13)SI007東から
(13)SI007埋設土器
(13)SI008北東から
(13)SI008炉と埋設土器
(13)SI009東から
(13)SI012～014北西から
(13)SI013北東から
(13)SI014南東から
図版８　(15)SI127ほか15次調査区土坑・ピット群西から
(19)SI001～004東から
(19)SK005・006南東から
(19)SK007南西から
(19)SK008東から
(35)SF001南から
(13)SK010東から

(13)SK011東から
図版９　(13)SK015遺物出土状況南から
(13)SK015東から
(22)SK001南から
(22)SK002南から
(6)SK001南東から
(6)SK002東から
(6)SK003南西から
(6)SK004北東から
図版10　(6)SK005北西から
(6)SK009南から
(6)SK011南から
15次調査区M34-88・89・98・99グリッド遺構群
(15)SK101遺物出土状況南から
(15)SK101南から
(15)SK102南から
(15)SK103～105南から
図版11　(15)SK106南西から
(15)SK108・110～113南東から
(3)SK004北東から
(3)SK010北東から
(3)SK019南から
(3)SK020～022南西から
(3)SK023南から
(3)SK024南から
図版12　(3)SK069～071南西から
(3)SK074遺物出土状況
(3)SK102・103・106・107真上から
(3)SK116・117南西から
(3)SK122南から
(3)SK123南西から
(3)SK166～170、(3)SH186真上から
(3)SK170遺物出土状況
図版13　(3)SH186西から（土器検出状況）
(3)SH186断面
(5)SK208南から
(5)SK209北から
(5)SK210南から
(5)SK211南から
(5)SK212東から
(5)SK213東から
図版14　(5)SK214南東から
(5)SK215西から
(5)SK216西から
(5)SK217西から
(5)SK218南から
(5)SK219東から
(6)SK015西から
(6)SH016・017西から
図版15　(6)SK018・019西から
(6)SH020・022西から
(6)SK021南西から
(6)SK023西から
(6)SK024西から
(6)SK025北から
(6)SH026西から
(15)SK114・115西から
図版16　(15)SK116・144、(15)SH186～189南から
(15)SK117 ～ 120・172・173、(15)SH184 南から
(15)SK120遺物出土状況
(15)SK122南から
(15)SK123・145・148南から
(15)SK141西から
(21)SI001貝層検出状況北から
(21)SI001貝層断面
図版17　(21)SI001北から
(21)SI003貝層検出状況北東から
(21)SI003北東から
(3)SI156北から
(3)SI159南から
(3)SI159炉と埋設土器
(3)SI160、(3)SK189・190南西から
(3)SI160炉と埋設土器
図版18　(3)SI160貝ブロック検出状況

(3)SI191南東から
(3)SI192、(3)SK201東から
(3)SI195、(3)SK199北から
(3)SK152南から
(3)SK153北西から
(3)SK154南から
(3)SK155南から
図版19 (3)SK157北東から
(3)SK158南東から
(3)SK188東から
(3)SK194南西から
(3)SK196北から
(3)SK197北東から
(3)SK198北東から
(3)SK200北から
図版20 (3)SK202南から
(3)SK203・204南東から
(3)SK205南から（遺物出土状況）
(21)SK002貝ブロック検出状況
(21)SK002・004・005北東から
(21)SK006東から
(12)SK006北西から
(12)SK008東から
図版21 (6)SI030西から（６次調査区）
(6)SI030南から（７次調査区）
(34)SI001南から
(3)SK193北西から
(7)SX003南から
(12)SM001調査前全景南から
(12)SM001東西ベルト南から
(12)SM001、(12)SD003南北ベルト東から
図版22 (12)SM001頂上部遺物出土状況
(12)SX002調査前全景南西から
(12)SX002南北ベルト西から
(12)SK007西から
(12)SK009北東から
(12)SE011北から
(12)SD003西側東から
(12)SD003東端部南から
図版23 (21)SX001調査前全景東から
(21)SX001南北ベルト東から
(3)SD206西から
(30)SK001東から
(30)SK002南東から
(30)SK003南から
(30)SK008北から
(30)SK014南西から
図版24 (30)SD001西から
(30)SD002南東から
(30)SD003西から
(30)SK015南から
(24)SD001西から
(31)SB001北西から
(15)SD201・202南から
(15)SD203南から
図版25 旧石器時代石器（１）
図版26 旧石器時代石器（２）
図版27 旧石器時代石器（３）
図版28 旧石器時代石器（４）
図版29 旧石器時代石器（５）
図版30 旧石器時代石器（６）
図版31 旧石器時代石器（７）
図版32 旧石器時代石器（８）
図版33 遺構出土縄文土器（１）
図版34 遺構出土縄文土器（２）
図版35 遺構出土縄文土器（３）
図版36 遺構出土縄文土器（４）
図版37 遺構出土縄文土器（５）
図版38 遺構出土縄文土器（６）
図版39 遺構出土縄文土器（７）
図版40 遺構出土縄文土器（８）
図版41 遺構出土縄文土器（９）
図版42 遺構出土縄文土器（10）
図版43 遺構出土縄文土器（11）
図版44 遺構出土縄文土器（12）
図版45 遺構出土縄文土器（13）

図版46　遺構出土縄文土器（14）
図版47　遺構出土縄文土器（15）
図版48　遺構出土縄文土器（16）
図版49　遺構出土縄文土器（17）
図版50　遺構出土縄文土器（18）
図版51　遺構出土縄文土器（19）
図版52　遺構出土縄文土器（20）
図版53　遺構出土縄文土器（21）
図版54　遺構出土縄文土器（22）
図版55　遺構出土縄文土器（23）
図版56　遺構出土縄文土器（24）
図版57　遺構出土縄文土器（25）
図版58　遺構出土縄文土器（26）
図版59　遺構出土縄文土器（27）
図版60　遺構出土縄文土器（28）
図版61　遺構出土縄文土器（29）
図版62　遺構出土縄文土器（30）
図版63　遺構出土縄文土器（31）
図版64　遺構出土縄文土器（32）
図版65　遺構出土縄文土器（33）
図版66　遺構出土縄文土器（34）
図版67　遺構出土縄文土器（35）
図版68　遺構出土縄文土器（36）
図版69　遺構出土縄文土器（37）
図版70　遺構出土縄文土器（38）
図版71　遺構出土縄文土器（39）
図版72　遺構出土縄文土器（40）
図版73　遺構出土縄文土器（41）
図版74　遺構出土縄文土器（42）
図版75　遺構出土縄文土器（43）
図版76　遺構出土縄文土器（44）
図版77　遺構出土縄文土器（45）
図版78　遺構出土縄文土器（46）
図版79　遺構出土縄文土器（47）
図版80　遺構出土縄文土器（48）
図版81　遺構出土縄文土器（49）
図版82　遺構出土縄文土器（50）
図版83　遺構外出土縄文土器（１）
図版84　遺構外出土縄文土器（２）
図版85　遺構外出土縄文土器（３）
図版86　遺構外出土縄文土器（４）
図版87　遺構外出土縄文土器（５）
図版88　遺構外出土縄文土器（６）
図版89　遺構外出土縄文土器（７）
図版90　遺構外出土縄文土器（８）
図版91　遺構外出土縄文土器（９）
図版92　遺構外出土縄文土器（10）
図版93　遺構外出土縄文土器（11）、縄文時代土製品（１）
図版94　縄文時代土製品（２）
図版95　縄文時代石器（１、剥片石器）
図版96　縄文時代石器（２、遺構出土石斧類）
図版97　縄文時代石器（３、遺構出土石棒・磨石類）
図版98　縄文時代石器（４、遺構出土軽石製品）
図版99　縄文時代石器（５、遺構出土石皿）
図版100　縄文時代石器（６、遺構出土石斧類①）
図版101　縄文時代石器（７、遺構出土石斧類②）
図版102　縄文時代石器（８、遺構出土磨石類①）
図版103　縄文時代石器（９、遺構出土磨石類②・石棒類）
図版104　縄文時代石器（10、遺構出土軽石製品・石皿）
図版105　奈良・平安時代遺物（１）
図版106　奈良・平安時代遺物（２）
図版107　中・近世遺物（１）
図版108　中・近世遺物（２）
図版109　中・近世遺物（３）
図版110　中・近世遺物（４）
図版111　中・近世遺物（５）
図版112　中・近世遺物（銭貨１）
図版113　中・近世遺物（銭貨２）

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、常磐新線（現・つくばエクスプレス）の建設に関連して流山運動公園周辺地区土地区画整理事業を計画し、事業実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長あてに提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に27か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認して、その旨回答した（第１図）。

その後、両者は事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講じることとした。記録保存のための発掘調査は、財団法人千葉県文化財センター（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）が実施することとなり、千葉県企業庁との間に委託契約が締結され、平成９年度から発掘調査が開始された（平成18年度から千葉県県土整備部が事業を引き継ぐ）。

後平井中通遺跡は、流山市後平井字中通ほかに所在し、面積は約84,000㎡を測る。このうち約92％にあたる77,412㎡について、平成９年度から平成29年度まで、準備が整った地点から35次にわたって発掘調査を行った（第２図）。

発掘調査及び整理作業に関わった各年度の担当職員、作業内容等は第１表のとおりである。上層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し10％程度の確認トレンチを設定し、遺構の時期と広がりを確認した。その結果、合わせて15か所の地点の計10,774㎡が本調査となった（第３・５図）。それ以外の調査区についてはトレンチの拡張等で対応した。

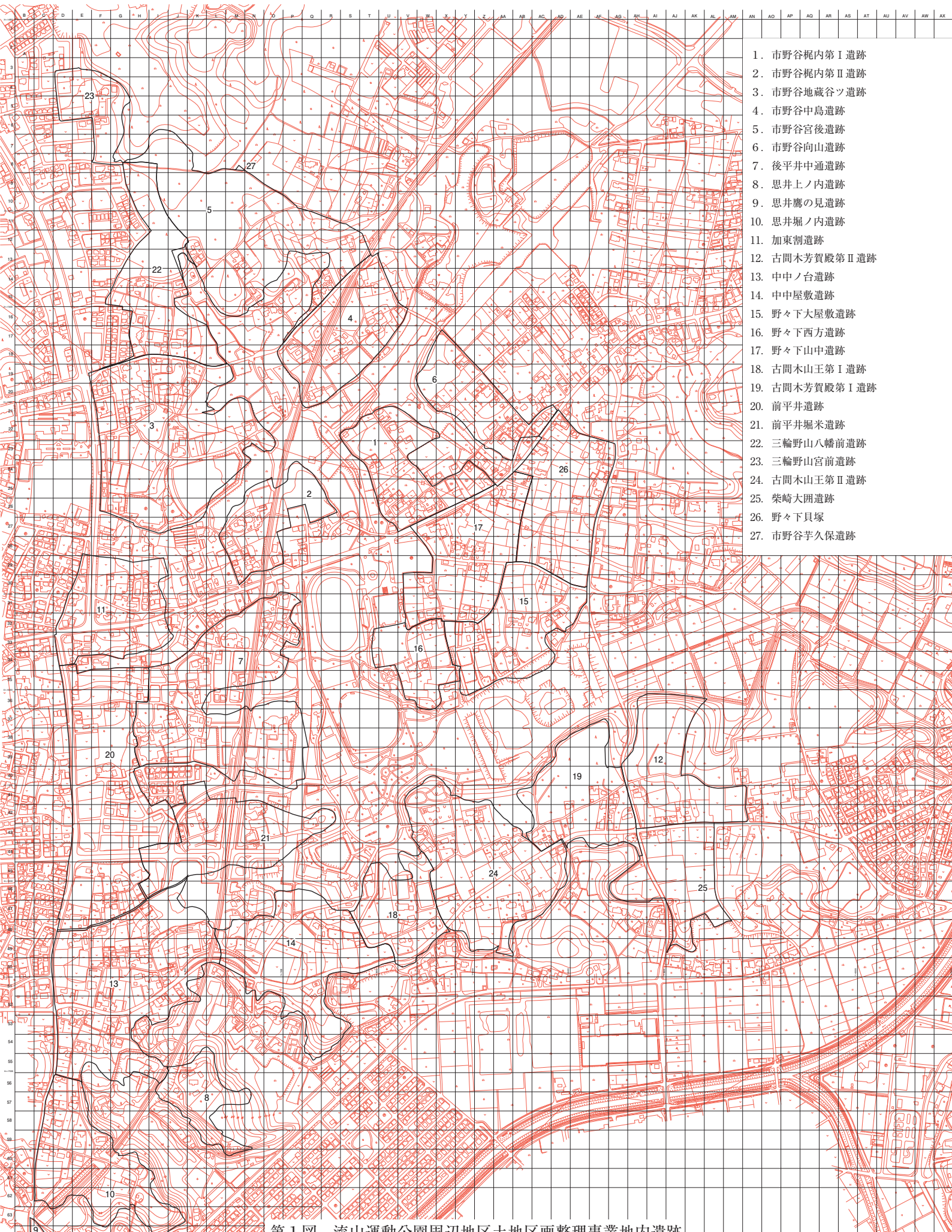
下層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し４％程度の確認グリッドを設定し、石器出土地点の層位と広がりを確認した。その結果、合わせて２か所の地点の計558㎡が本調査となった（第４図）。それ以外の石器出土地点についてはグリッドの拡張等で対応した。なお、遺跡の外縁部付近では立川ローム層が流失している場所が多く、確認調査を全面もしくは部分的に省略している。

事業地内における遺跡の調査成果としては、これまでに思井堀ノ内遺跡について、中世編及び旧石器～奈良・平安時代編の２冊の報告書が財団法人千葉県教育振興財団（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）により刊行され[1・2]、思井上ノ内遺跡と中中屋敷遺跡、前平井堀米遺跡の報告書が千葉県教育委員会から刊行されている[3・4・5]。本書は本事業にかかる発掘調査報告書の６冊目となる。

後平井中通遺跡の整理作業は、平成24年度に公益財団法人千葉県教育振興財団が、更に平成25年度から令和２年度まで千葉県教育庁教育振興部文化財課が引き継いで実施し、令和２年度に報告書刊行に至った。

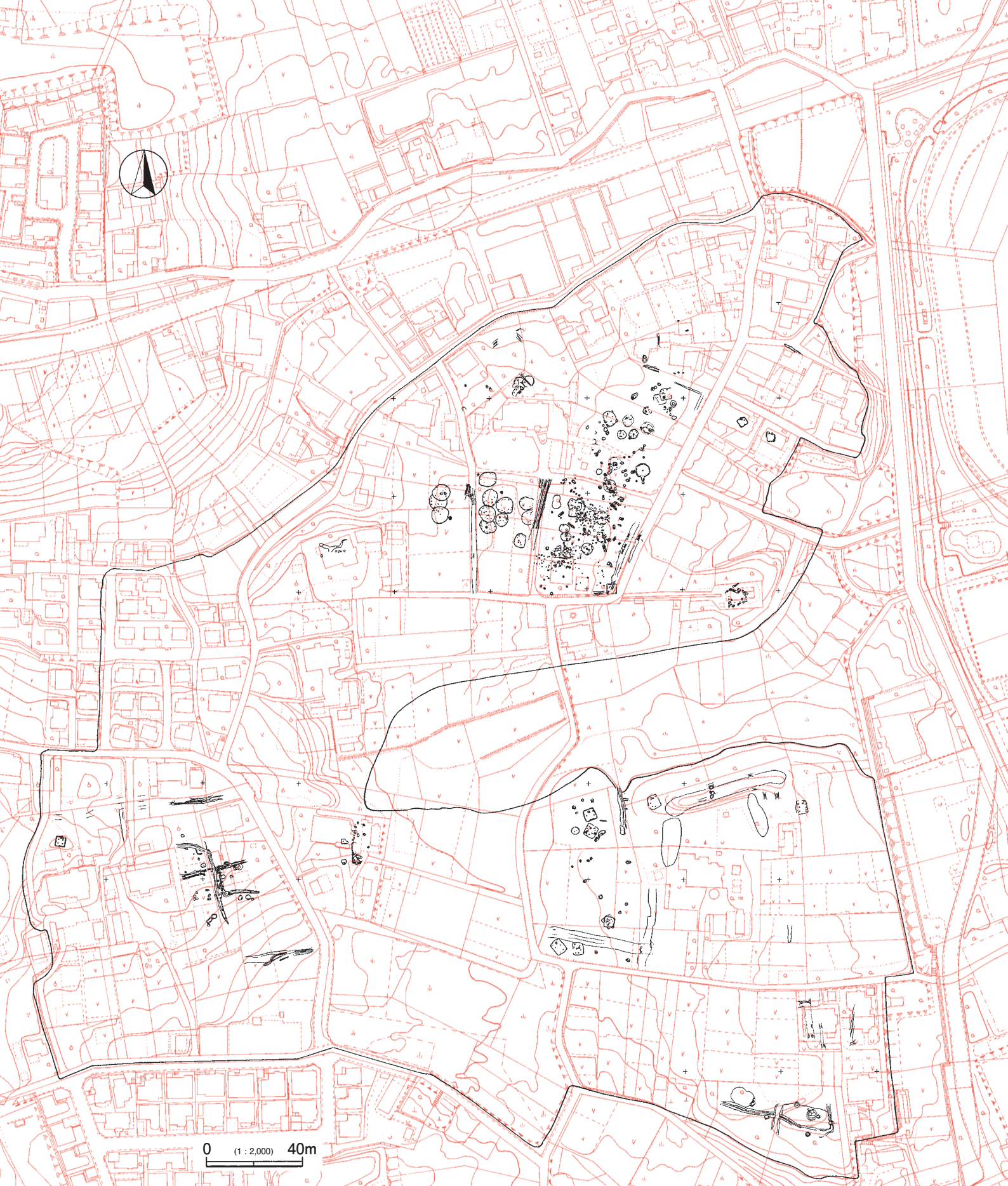
２　調査の方法と調査概要

調査にあたっては、区画整理事業地内の遺跡を網羅するように、日本測地系に基づくグリッド設定を行った。Ｘ＝－14,800m、Ｙ＝＋7,600mを起点とする40m×40mの方眼を大グリッドとし、北から南へ１～67、西から東へＡ～Ｚ及びAA～ANとし、大グリッドはアルファベットと数字の組み合わせにより「Ｃ２」

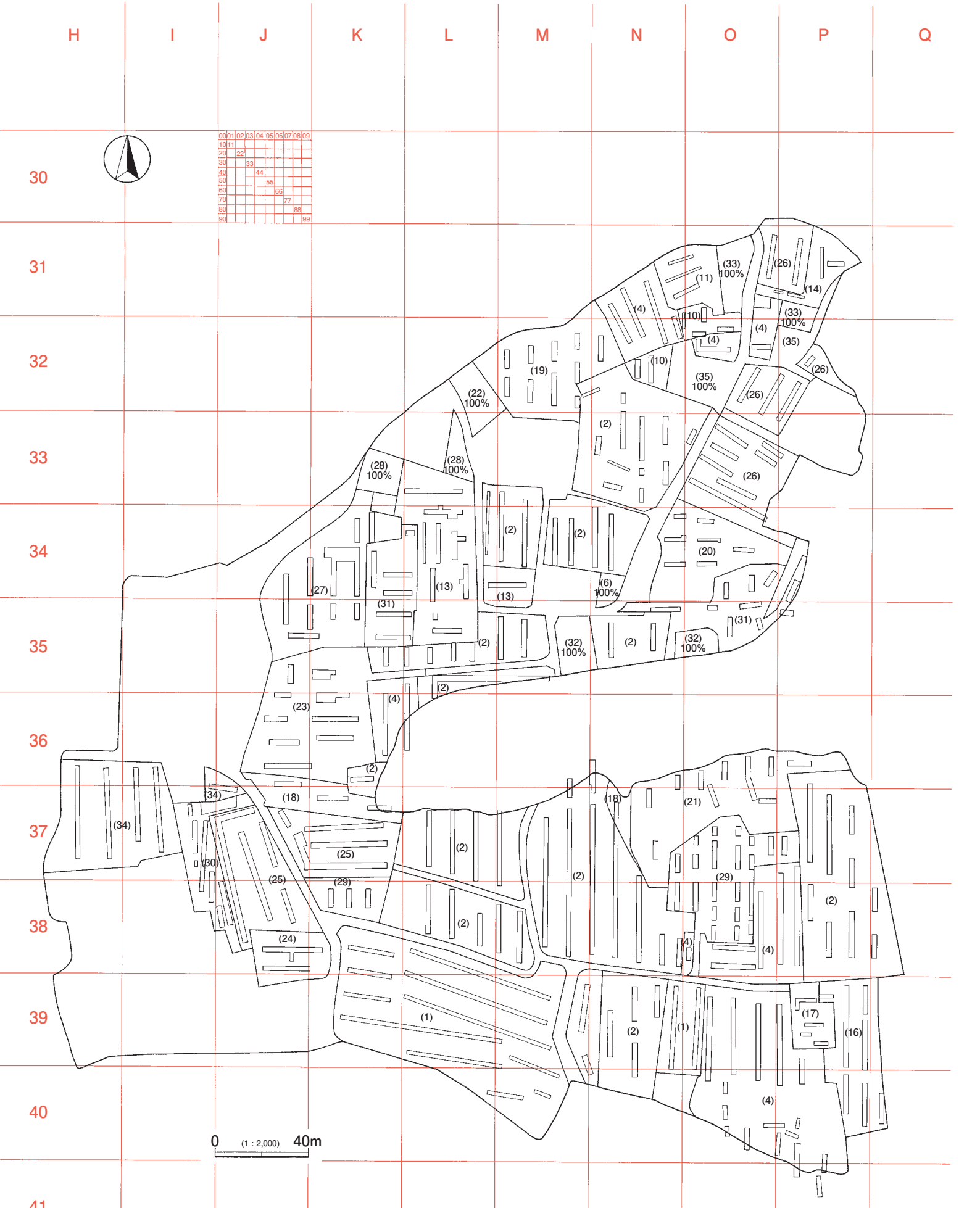


1．市野谷梶内第Ⅰ遺跡
2．市野谷梶内第Ⅱ遺跡
3．市野谷地蔵谷ツ遺跡
4．市野谷中島遺跡
5．市野谷宮後遺跡
6．市野谷向山遺跡
7．後平井中通遺跡
8．思井上ノ内遺跡
9．思井鷹の見遺跡
10．思井堀ノ内遺跡
11．加東割遺跡
12．古間木芳賀殿第Ⅱ遺跡
13．中中ノ台遺跡
14．中中屋敷遺跡
15．野々下大屋敷遺跡
16．野々下西方遺跡
17．野々下山中遺跡
18．古間木山王第Ⅰ遺跡
19．古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡
20．前平井遺跡
21．前平井堀米遺跡
22．三輪野山八幡前遺跡
23．三輪野山宮前遺跡
24．古間木山王第Ⅱ遺跡
25．柴崎大囲遺跡
26．野々下貝塚
27．市野谷芋久保遺跡

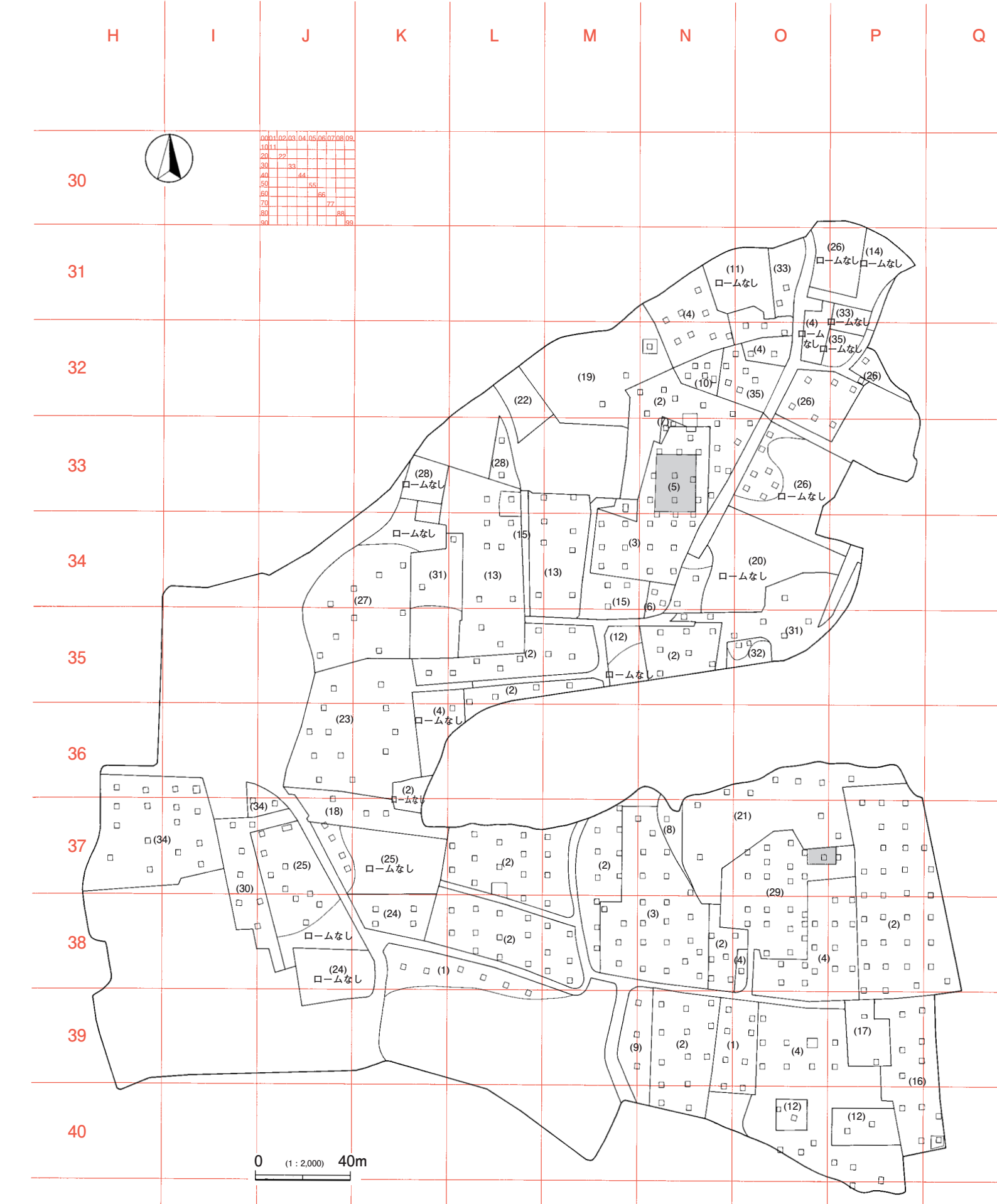
第１図　流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡



第２図　後平井中通遺跡全体図と地形

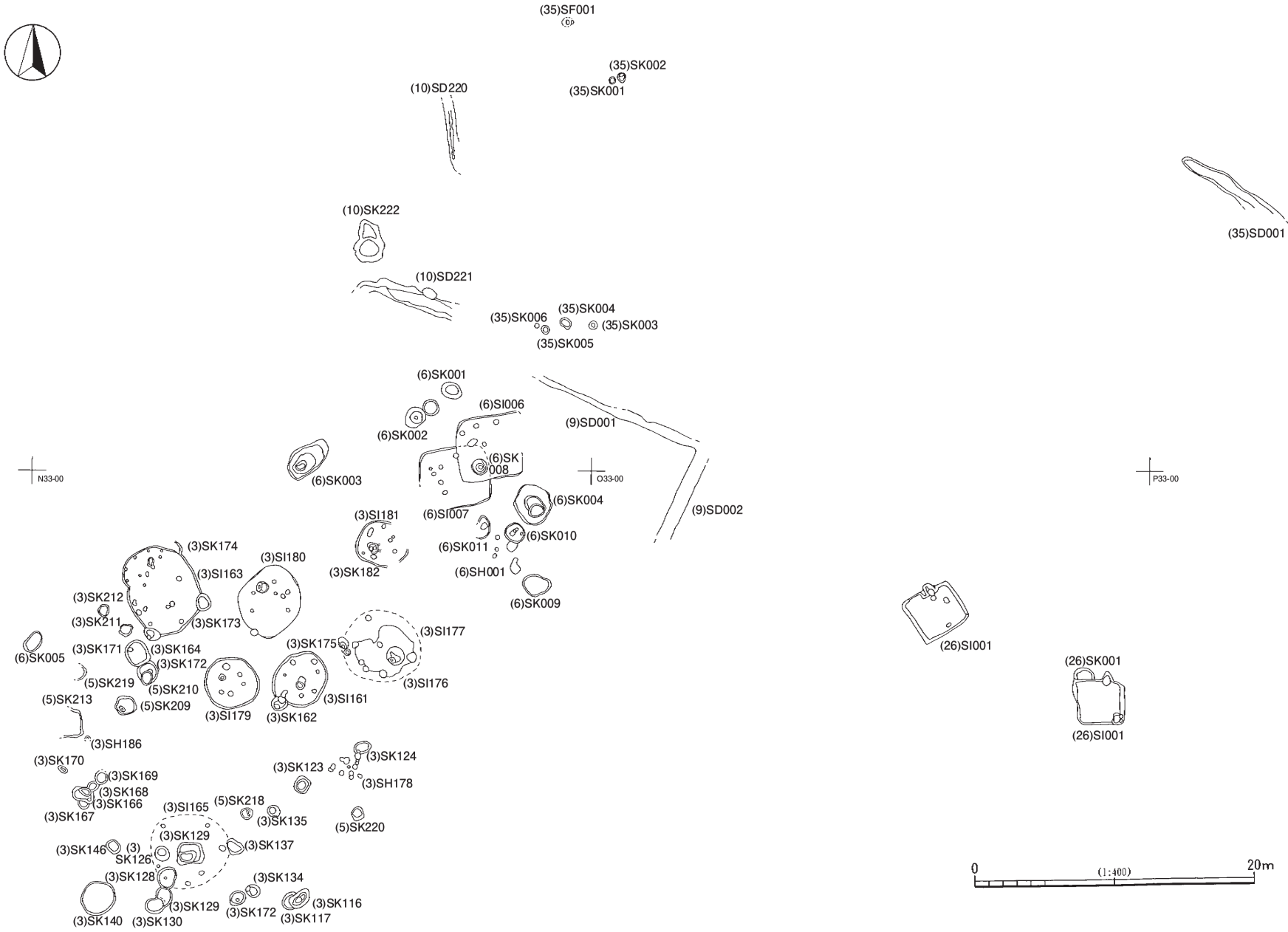


第３図　上層確認調査トレンチ配置及びグリッド配置

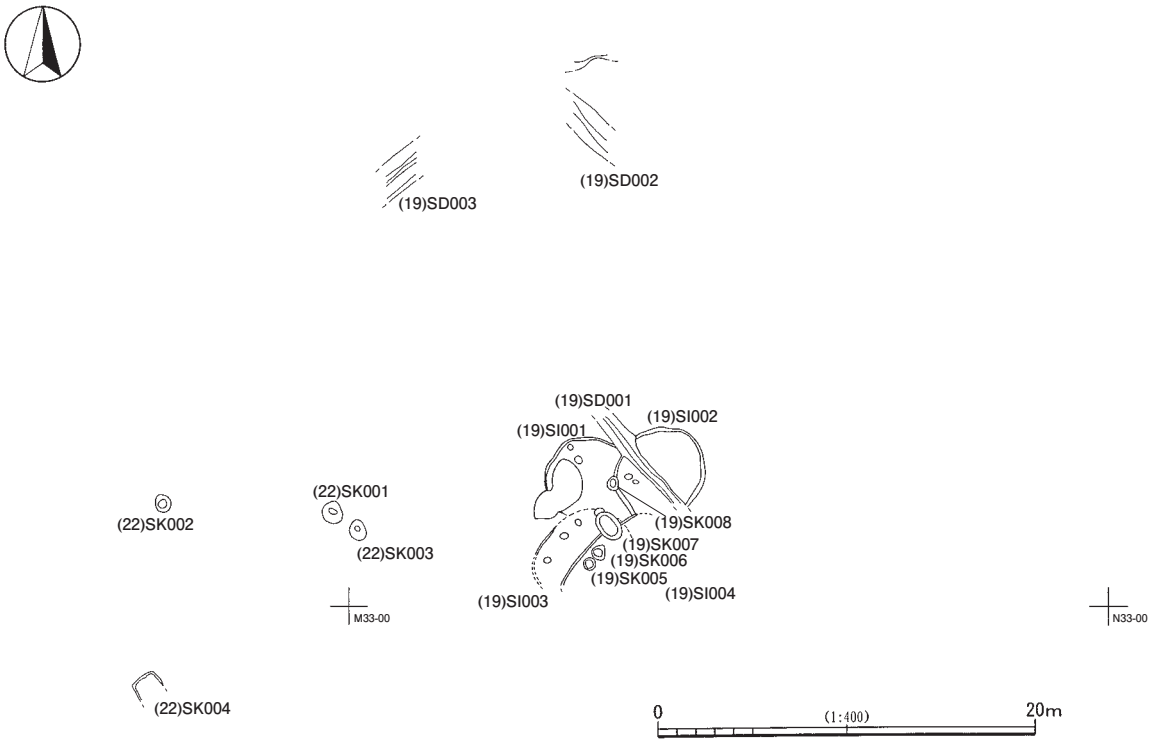


第４図　下層確認調査グリッド配置

第５図　上層本調査範囲及び遺構全体図の図郭割付



第６図　上層遺構全体図（１）



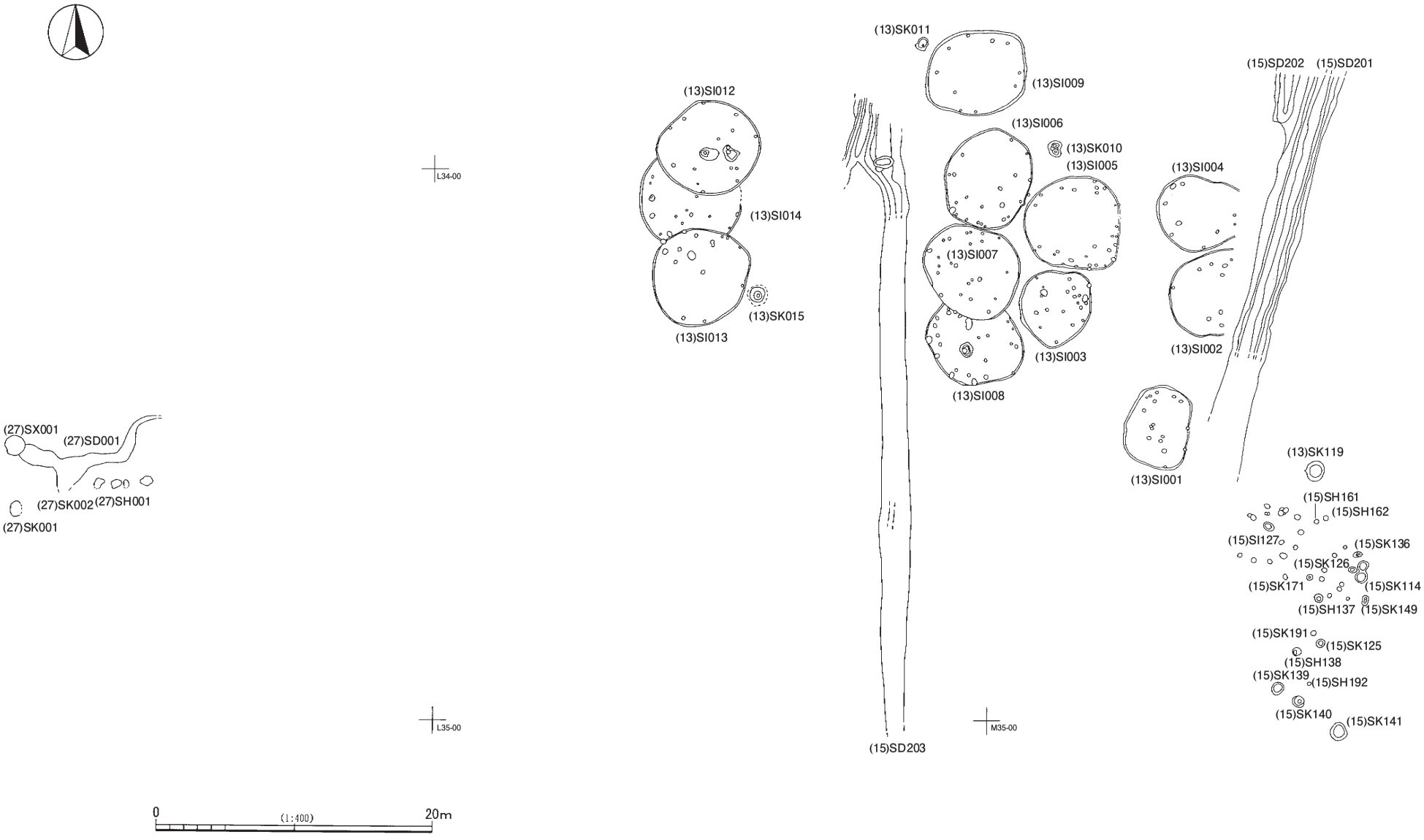
第７図　上層遺構全体図（２）

「K11」のように表示することとした。今回報告する後平井中通遺跡(１)～(35)は、大グリッドで示すとＮ30～Ｐ30・Ｌ31～Ｐ31・Ｋ32～Ｐ32・Ｊ33～Ｐ33・Ｈ34～Ｐ34・Ｈ35～Ｐ35・Ｈ36～Ｐ36・Ｈ37～Ｑ37・Ｈ38～Ｑ38・Ｈ39～Ｑ39・Ｌ40～Ｑ40グリッドの範囲にあたる。大グリッドの中は、更に４ｍ×４ｍの小グリッドに100分割し、小グリッドは北西角から東へ00、01、02…、南へ00、10、20…とし、南東角を99とした。これにより、大グリッドとの組み合わせで、例えば「Ｎ49－25」などのように小地区名を表示することとした（第３図）。

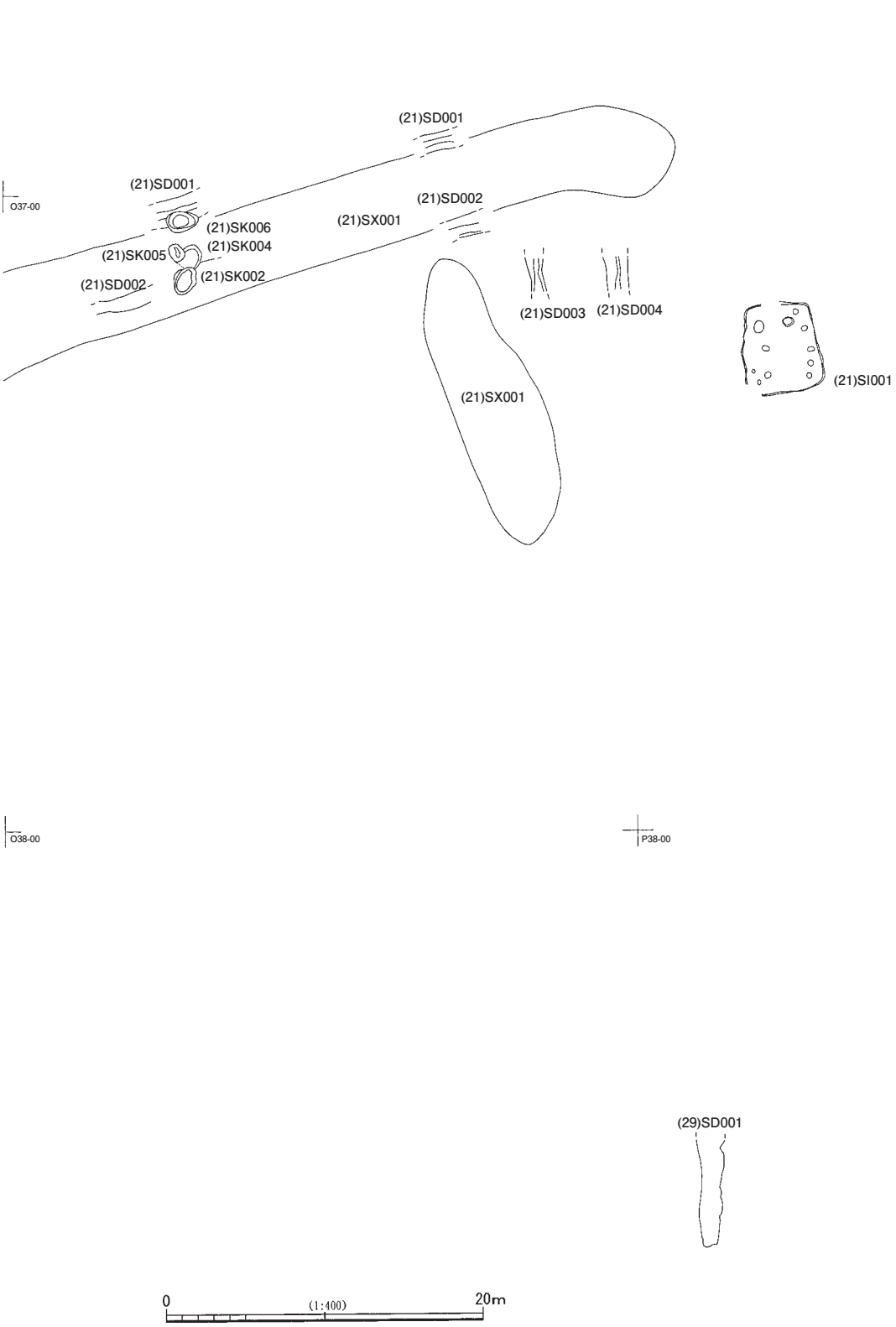
遺構名については、24次調査までは遺構の時代や種別に関係なく３桁の数字の連番とし、25次調査以降は遺構種別記号と３桁の数字とを組み合わせた遺構名を付している（６～９次調査では記号ではなく遺構種別そのものと３桁数字が組み合わされている）。遺物への注記は原則調査時の遺構名で行ったが、整理作業を進める中で検出された遺構の検証を行った結果、各調査次に付された遺構名をそのまま報告書に掲載すると混乱を招く一方で、新たな通し番号を付け直すことは大きな労力を要すると判断された。そのため、基本的に調査時の番号を踏襲し、遺構種別記号の前に()で調査次の番号を付すことで区別することとした。その上で24次調査までの遺構については調査次と遺構種別記号、３桁の数字とを組み合わせた遺構名を付け直した。遺構種別記号は凡例に示したとおりであり、調査時と本報告における遺構名対照表は第２表のとおりである。

調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代石器集中地点５か所、縄文時代竪穴住居跡もしくは竪穴状遺構57軒、炉跡の可能性が強い焼土遺構１基、土坑224基、柱穴状ピット54基、ピット群５群、陥穴４基、奈良・平安時代竪穴住居跡４軒、土坑１基、埋設土器１基、中・近世塚１か所、土塁２条、台地整形区画

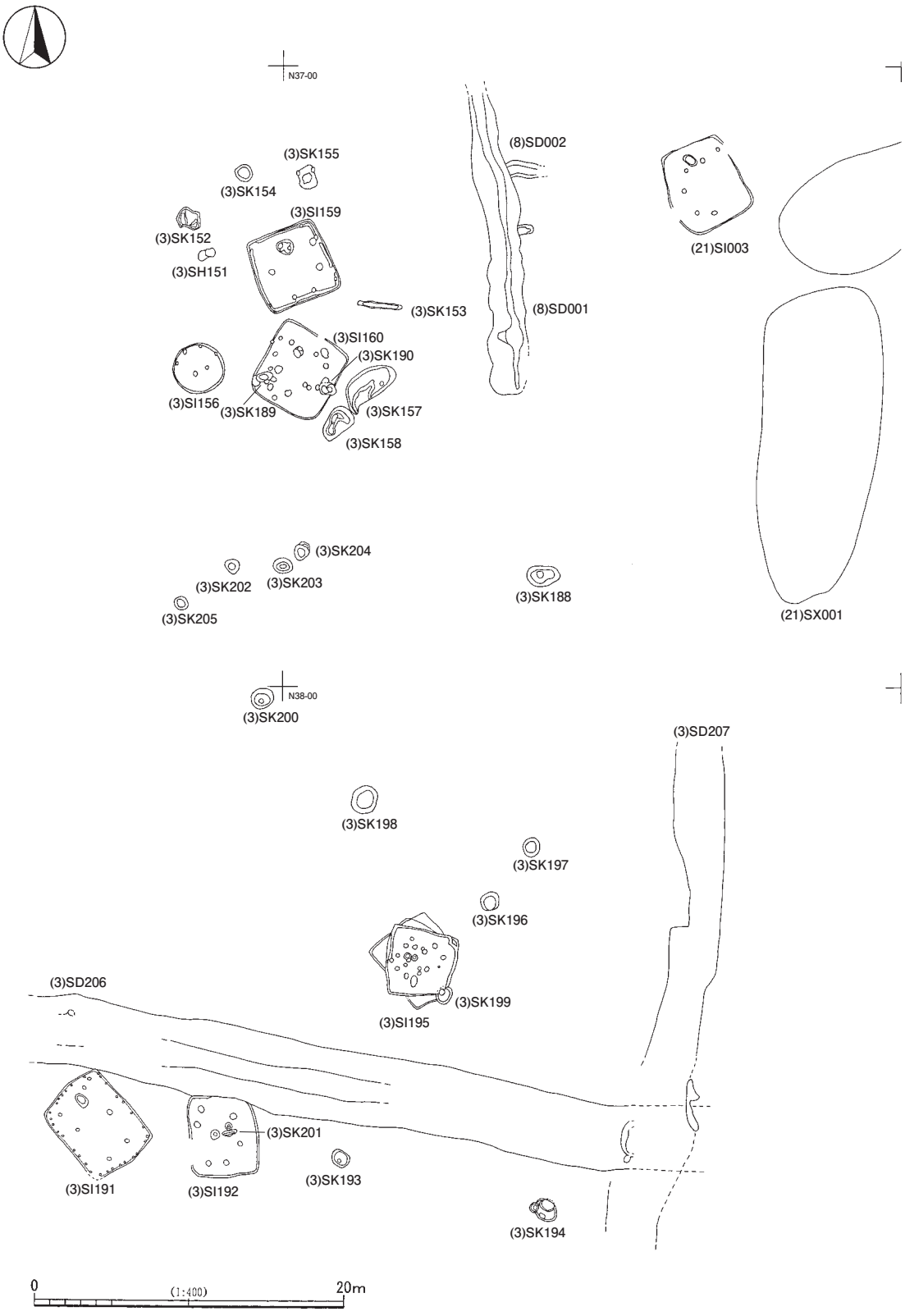
第８図　上層遺構全体図（３）



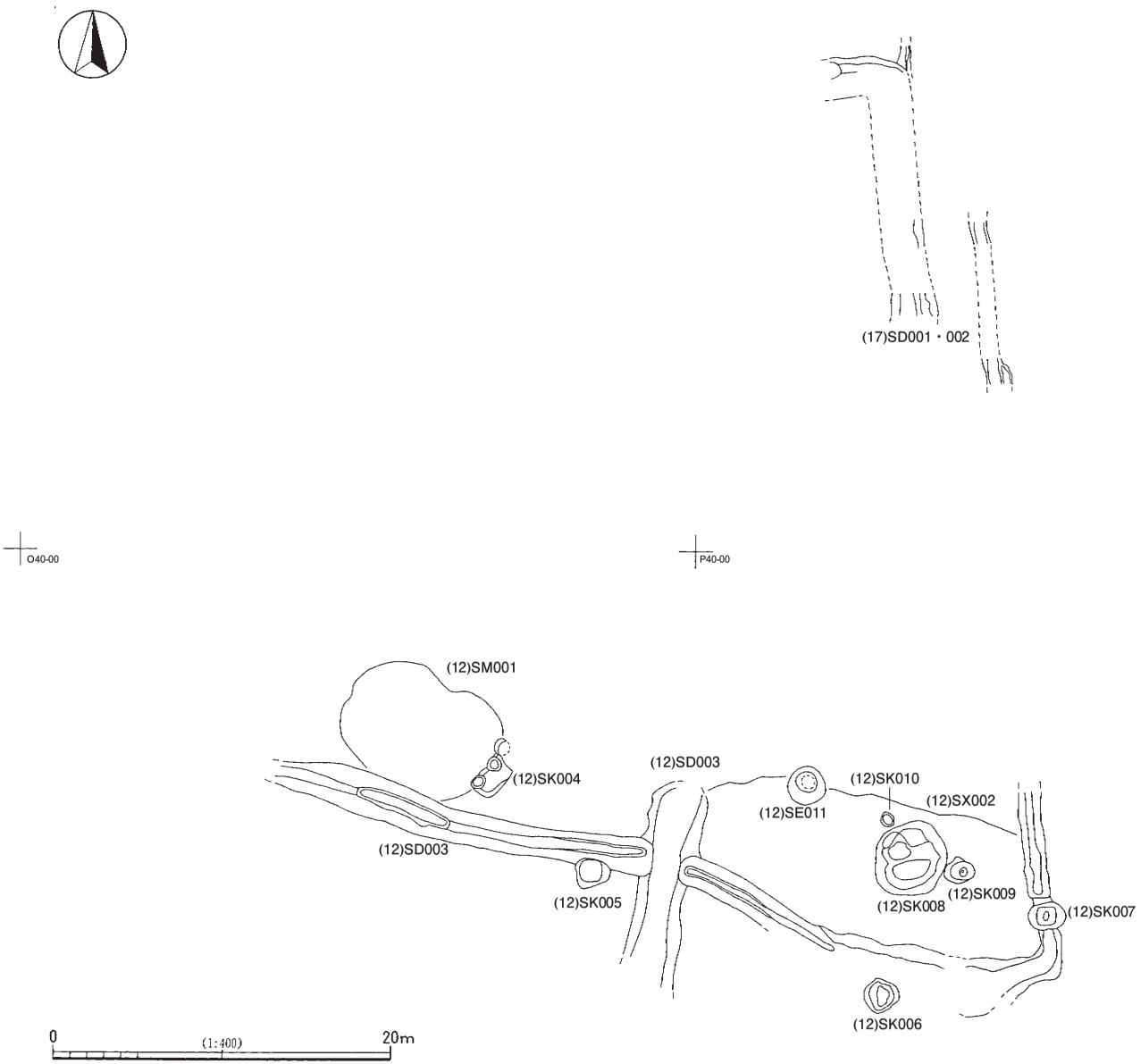
第９図　上層遺構全体図（４）



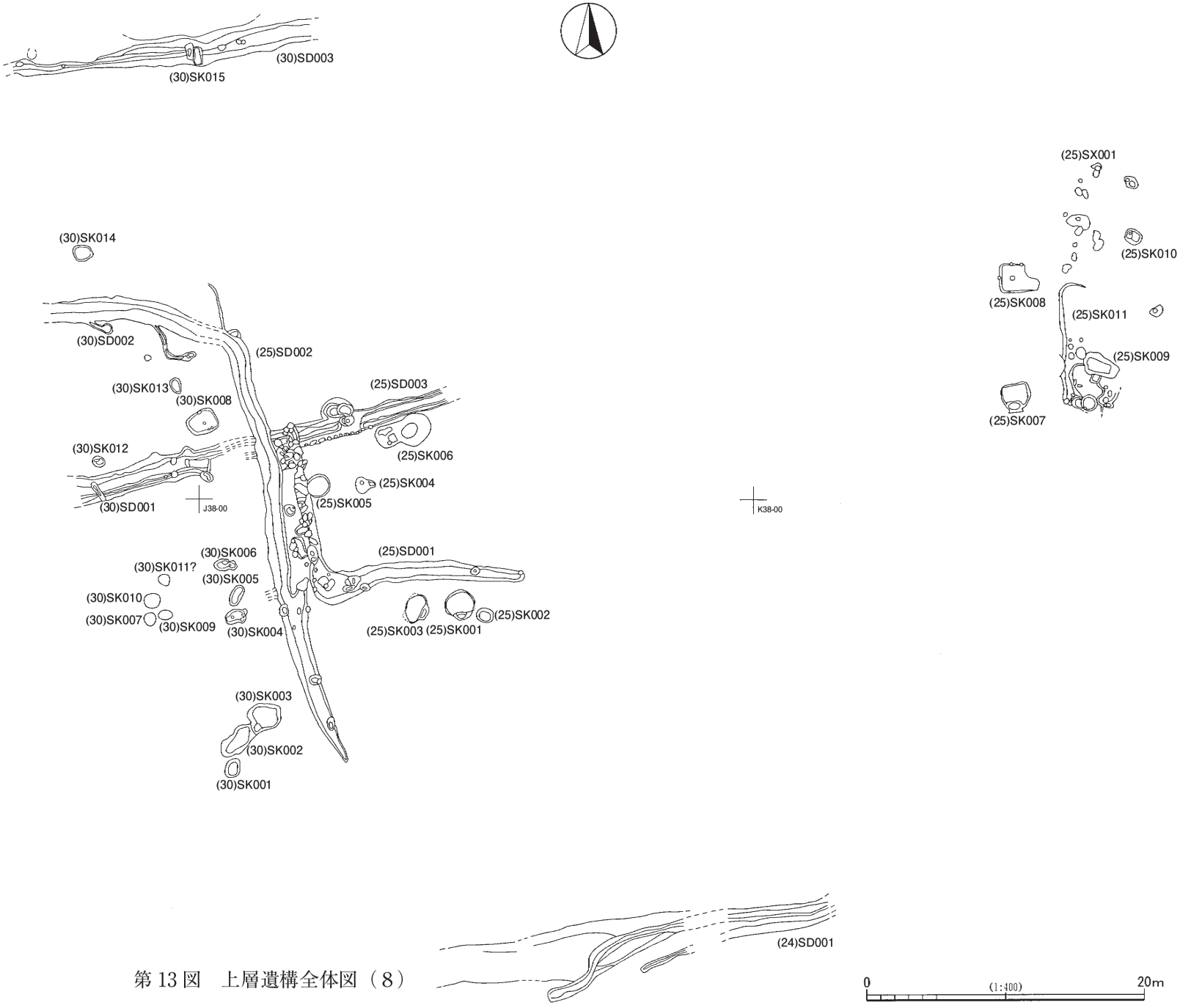
第 10 図　上層遺構全体図（5）



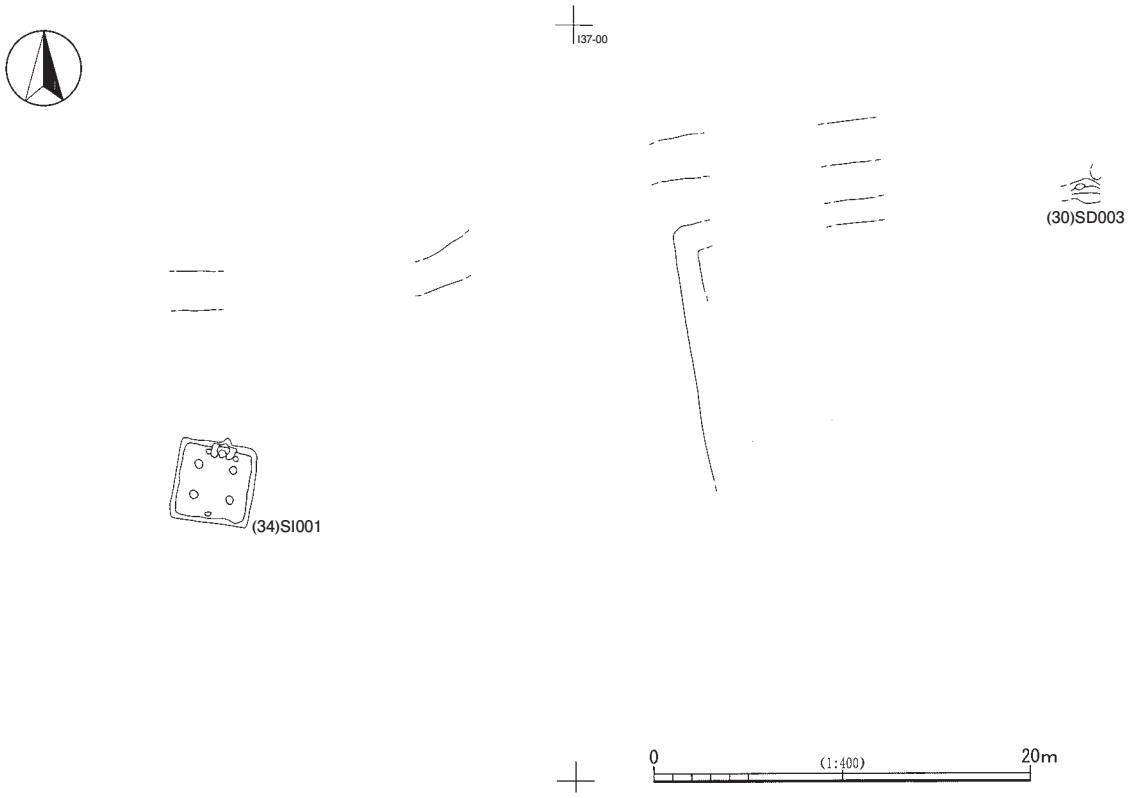
第 11 図　上層遺構全体図（6）



第12図　上層遺構全体図（7）



第 13 図　上層遺構全体図（８）



第 14 図　上層遺構全体図（９）

１か所、地下式坑３基、方形竪穴遺構１基、土坑28基（うち土坑墓１基）、井戸状遺構２基、溝状遺構38条、礎石建物跡１棟、ピット群１群、単独ピット４基である（第６～14図）。

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の地理的環境

後平井中通遺跡は、流山市後平井字中通ほかに所在している。流山市は千葉県の北西部に位置し、江戸川に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接している。遺跡はこの流山市の南西部、標高23.5ｍの下総台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ東京湾へ注いでおり、南側は松戸市との境をなす支流の坂川が流れている。遺跡の立地する台地は、東側の下総台地を開析して江戸川や坂川の流れる古東京湾沿岸に形成された広い低地へと半島状に突出す形状を呈しており、更に両河川に注ぐ小支谷によって複雑に開析された舌状台地が連なる。これらの舌状台地上はほぼ全て埋蔵文化財包蔵地であることが確認されており、後平井中通遺跡は坂川の支流に面した東向きの舌状台地上に立地する。背面の台地西側は同様の舌状台地を介して江戸川を望める地形にあり、当遺跡は西側の江戸川と南東側の坂川、そして台地下に広がる低地をあたかも眼下に納める位置にあると言ってもよい。遺跡の南側を流れる坂川についてみると、遺跡付近から南西へ約3.5kmの地点で江戸川へと合流する小河川であるが、沿岸の坂川低地はこの地域では最大規模の開析谷であり、東側に広がる下総台地へと複雑に深く入り込んでいる。このためその谷頭は遺跡の北東側約7.5kmにある手賀沼と、そこに注ぐ小河川に接するような地点にまで延びている。ちなみに後平井中通遺跡から東側そして北側の台地へと入り込

む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は分水嶺をなし、台地の幅がわずかに300m～500mである。手賀沼は利根川（古鬼怒川）、霞ヶ浦（香取海）を経て太平洋へと通じる水系にあり、その意味では坂川上流にある本遺跡周辺は太平洋水系の手賀沼と東京湾を結ぶ結節点のような位置と言える（第15図）。

2　周辺の遺跡と歴史的環境

流山市は高度経済成長期から首都圏のベッドタウンとして開発が進められ、数多くの遺跡が調査されている。それらの調査歴を全て網羅すると膨大なものとなることから、ここでは運動公園の事業地とその周辺を中心に、代表的な調査成果を示してこの地域の歴史的環境を俯瞰したい（第16図、第３表）。ただし運動公園事業地の発掘調査は未だ継続中であり未報告資料も多いため、あくまで暫定的なものであることをお断りしておく。

流山市内の旧石器時代の遺跡は近年、運動公園事業地及び隣接する流山新市街地地区土地区画整理事業地内（以下、新市街地地区と略す）において著しく資料が増加している。思井堀ノ内遺跡（５）[2]、思井上ノ内遺跡（16）[3]、中中屋敷遺跡（29）[4]、前平井堀米遺跡（15）[5]、三輪野山北浦（旧三輪野山第Ⅱ）遺跡（56）[6・17]、西初石五丁目遺跡（63）[7・11・12・15・16]、市野谷入台遺跡（61）[8・11]、市野谷二反田遺跡（58）[9]、大久保遺跡（60）[10・15]、市野谷向山遺跡（52）[10・11・13・16]、東初石六丁目第Ⅰ遺跡（79）[10]、東初石六丁目第Ⅱ遺跡（77）[10]、市野谷中島遺跡（51）[11・13・15]、市野谷芋久保遺跡（57）[15]、市野谷立野遺跡（59）[12・13・15・16]、地図の外になるが十太夫第Ⅱ遺跡[10]、桐ヶ谷新田第I遺跡、中野久木遺跡、若葉台遺跡、桐ヶ谷南割（上貝塚）遺跡などで石器群が検出されている。思井堀ノ内遺跡ではⅢ層からⅨ層にかけて11ブロック、思井上ノ内遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて３ブロック、中中屋敷遺跡ではⅢ層からＸ層にかけて４ブロック、前平井堀米遺跡ではⅥ層からⅨ層にかけて２ブロック（内１ブロックは礫群）、三輪野山北浦遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて６ブロック、市野谷入台遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて26ブロック、市野谷二反田遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて12ブロック、西初石五丁目遺跡ではⅢ層からⅨ層にかけて６ブロック、大久保遺跡ではⅢ～Ⅳ層とⅨ層で44ブロック、市野谷向山遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて22ブロック、東初石六丁目第Ⅰ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて３ブロック、東初石六丁目第Ⅱ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて５ブロック、十太夫第Ⅱ遺跡ではⅤ層からⅥ層にかけて１ブロック、市野谷中島遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて１ブロック、市野谷芋久保遺跡ではⅢ層からＸ層にかけて46ブロック、市野谷立野遺跡ではⅢ層からⅣ層にかけて５ブロックがそれぞれ調査されている。その他、上層遺構覆土中からの遺物出土事例は数多く報告されている。

縄文時代の遺跡はきわめて多い。草創期は遺構の検出事例はなく、長崎遺跡（116）[18]で有茎尖頭器の出土が報告されるなどごくわずかな遺物の出土しか確認されていないが、早期になると特に後半の条痕文期において遺構の検出事例が増え、遺物も多くの遺跡で出土するようになる。思井堀ノ内遺跡では野島式から鵜ガ島台式期を中心とする竪穴住居跡２軒、炉穴35基などが検出され、思井上ノ内遺跡では鵜ガ島台式を中心とする早期後葉の竪穴住居跡２軒、土坑２基、炉穴25基などが検出されている。三輪野山第Ⅲ遺跡（55）[19]では鵜ガ島台式期の竪穴住居跡１軒と炉穴10基が調査されている。炉穴の検出例は数多く、三輪野山道六神遺跡（53）[17]や大原神社遺跡（12）[20]、平和台遺跡（11）[21・22]、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡（42）[23]、三輪野山八重塚遺跡（43）[24・25]、加北谷津第Ⅱ遺跡（39）[26]、西平井二階畑遺跡（３）[30]、市野谷立野

遺跡、名都借宮ノ脇遺跡（名都借第Ⅱ遺跡）（129）[31・32]などで報告されている。市野谷立野遺跡ではこのほか早期と思われる大規模な礫群が検出されている。これらの遺跡は野島式期から茅山下層式期を中心とし、茅山上層式以降の早期末になると遺跡数は急速に減少する。その中で中中屋敷遺跡では早期末から前期初頭を中心とする竪穴住居跡３軒、炉穴７基、土坑４基などが検出されているほか、三輪野山八重塚遺跡、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡で同時期の遺物が出土している。前期は初頭の花積下層式期では遺跡数の少ない状況が続くが、坂川を隔てた対岸にあたる松戸市の幸田貝塚（83）[33]は、花積下層式期から関山式期を中心とした多数の竪穴住居跡と大規模な貝層が形成されており、当地域における拠点的な集落である。流山市内では同時期の遺構は少なく、加町畑遺跡（26）[27・28・29]で関山式期の竪穴住居跡が検出されている程度であるが、黒浜式期に至ると多数の遺構が確認されている。竪穴住居跡の検出事例では、思井堀ノ内遺跡、市野谷芋久保遺跡、市野谷向山遺跡[12]、市野谷立野遺跡、西初石五丁目遺跡、下花輪荒井前（旧下花輪第Ⅱ）遺跡（69）[34]、三輪野山八幡前遺跡（旧下屋敷遺跡）（46）[17・35]、加北谷津第Ⅰ遺跡（40）[26]、加北谷津第Ⅱ遺跡、三輪野山八重塚遺跡[36・37・38]、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡、大畔西割遺跡（65）[39]、三輪野山宮前遺跡（54）[17・40]などが挙げられる。三輪野山宮前遺跡では黒浜式から諸磯ｂ式ないしは浮島Ⅱ式までの竪穴住居跡のほか、完形に近い土器や玉類を伴う土坑群が検出されており、墓域と推測される。諸磯・浮島式期ではほかに長崎遺跡で貝層を伴う竪穴住居跡から良好な資料が出土しており、三輪野山宮前遺跡、三輪野山八幡前遺跡では竪穴住居跡が検出されている。なお、新市街地地区でも同時期の遺構が検出されており、市野谷芋久保遺跡や市野谷立野遺跡、市野谷向山遺跡などで竪穴住居跡が確認されているが、内陸部に位置するためか全体に遺構数は少なく密度は希薄である。中期では前半の五領ヶ台式期から阿玉台･勝坂式期までは遺跡が少ないが、中葉から後半にかけて遺跡が増加する。野々下元木戸遺跡（119）[41・42]と向下遺跡（121）[43]は包蔵地としては別々に扱われているが本来は同一の集落跡と考えられるもので、中期後半から後期前葉までの竪穴住居跡と土坑群、貝ブロックを伴うピットなどが検出されている。名都借宮ノ脇遺跡では中期中葉の竪穴住居跡とフラスコ状土坑が検出されている。また地図の外になるが、中野久木谷頭遺跡では中峠式期から加曽利Ｅ式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。一方で中期後葉以降になると、台地奥の分水嶺に近い地域で少数の竪穴住居跡もしくは土坑が散在する事例もみられ、十太夫第Ⅲ遺跡（80）[12・15]や大久保遺跡[12]などが代表的である。中期末から後期初頭にかけては一時的な遺跡数の減少が認められるが、その中で市野谷向山遺跡は中期後葉から後期初頭にかけての集落が形成されており、運動公園事業地側は現在調査進行中であるが多くの成果が上がっている。後期前葉の堀之内１式以降になると多くの遺跡が所在する。思井上ノ内遺跡では堀之内１式から加曽利Ｂ１式にかけての竪穴住居跡11軒、土坑14基、貝ブロック８か所、埋葬人骨などが検出されている。後平井中通遺跡が立地する江戸川と坂川に挟まれた台地の南端（先端）部には鰭ヶ崎（前ヶ崎）貝塚（10）が存在する[44]。1952年に酒詰仲男氏と岡田茂弘氏に率いられた学習院高等科史学部が調査を実施し、堀之内式期から加曽利Ｂ式期にかけての遺構群が濃密に分布することが明らかになっている。目を北に転じると、市野谷二反田遺跡では後期初頭の称名寺式期を中心とする竪穴住居跡が13軒検出されているほか、大久保遺跡[12]ではやはり称名寺式の埋設土器を伴う竪穴住居跡が検出されており、後期初頭は内陸部の遺跡で集落が営まれる傾向にある。古間木茱萸木谷遺跡（37）[45]では部分的な調査ではあるが後期の竪穴住居跡が検出され、集落の存在が想定される。三輪野山貝塚（45）[46・47・48]では後期から晩期にかけて100軒を超える竪穴住居跡、５か所の貝層、20基余りの土坑墓群、晩期中葉と考えられる道路状遺構、水場遺構、埋葬人骨などが検出

されているほか、環状に構築された竪穴住居跡をはじめとする遺構群に囲まれるようにすり鉢状に削られた窪地が存在する。削られた土砂は周囲に盛り上げられたと考えられ、いわゆる環状盛土と中央窪地の関係をよく示す成果である。三輪野山貝塚に関連すると思われる遺構は周辺遺跡からも検出されており、東側の三輪野山八幡前遺跡では三輪野山貝塚の中央窪地と一体になっていると思われる窪地が続いていて、それを取り囲むように後期前葉から晩期前葉にかけての竪穴住居跡が多数検出されているほか、窪地から集落東側へ延びる道路状遺構が検出されている。三輪野山宮前遺跡などでも同時期の竪穴住居跡や掘立柱建物が検出されている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚のほか、野々下貝塚（33）[49・50]、上貝塚貝塚（139）[6]、地図の外になるが上新宿貝塚は大規模な環状貝塚として知られている。いずれの貝塚も後期前葉の堀之内式期あたりから形成が開始され、晩期中頃まで存続するのが確認されているが、晩期終末頃は遺構・遺物ともほとんどみられなくなる。

弥生時代は遺跡の分布が希薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山北浦遺跡で中期の須和田式土器が出土し、下花輪荒井前遺跡で宮の台式期の住居跡が検出されている。加村台遺跡（25）[51・52]では中期から後期の竪穴住居跡のほか、環濠と推測されるＶ字溝が検出されている。坂川流域では対岸の松戸市内で中芝遺跡（84）、道六神遺跡（85）、原の山遺跡（88）があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が大きく増加してくる。前期から中期にかけては、江戸川流域では三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡、三輪野山第Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡等が、また坂川流域では市野谷地域で市野谷宮尻遺跡（62）[53]、市野谷入台遺跡、市野谷向山遺跡等が各々集落群を形成している。三輪野山道六神遺跡では北陸系の土器が、三輪野山宮前遺跡では東海系の土器が出土しており、他地域との交流を示すものと言える。市野谷地区は坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。市野谷宮尻遺跡は３世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の竪穴住居跡が90軒検出され、そのうちの１軒から東日本で最も古い墨書土器が出土している。市野谷入台遺跡では前期から中期にかけての竪穴住居跡が35軒検出されているほか、小規模ながら石製模造品の製作跡も検出されており、江戸川流域では最古級に位置づけられる。同じく坂川水系の最奥部に位置する西初石五丁目遺跡では前期の竪穴住居跡が20軒検出されており、そのうち１軒から小形仿製鏡が出土している。野々下元木戸遺跡と向下遺跡からは前期の竪穴住居跡が19軒検出されている。西初石五丁目遺跡や野々下元木戸遺跡・向下遺跡の竪穴住居は比較的短期間の構築にとどまっており、開拓集落的な様相を呈している。中期には市野谷向山遺跡などで集落が形成されるものの、全体としては遺構数の減少が認められるが、後期になると集落規模は再度拡大し、遺跡も更に増加する。また三輪野山地区や市野谷地区以外にも分布域が広がり、江戸川に近接する加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡、加町畑遺跡、加北谷津第Ⅰ遺跡、同第Ⅱ遺跡、平和台遺跡等が顕著な集落遺跡群を形成してくる。とりわけ加町畑遺跡は後期の竪穴住居跡74軒のみならず、奈良・平安時代の竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡17棟が検出されており、拠点的集落の一つである。加村台遺跡は台地西端に位置し、やはり後期に多数の竪穴住居が構築される。太日川（現江戸川）を通じた河川交易の拠点としての性格が想定される。一方古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳（64）が、本遺跡の南約500mには前方後円墳の三本松古墳（鰭ヶ崎塚の越遺跡内）が、そして加地区に終末期古墳の北谷津古墳（加北谷津第Ⅱ遺跡内）が所在している。

奈良時代から平安時代になると遺跡は飛躍的に増大する。思井上ノ内遺跡や思井堀ノ内遺跡の所在する思井地区から前平井遺跡（14）や平和台遺跡、加町畑遺跡、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。思井堀ノ内遺跡からは８世紀後半から10世紀初頭にかけての竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡６棟、土器焼成遺構や鍛冶遺構が検出されたほか、「庄」と記された墨書土器40点以上や緑釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、当地における拠点集落であるとともに初期荘園であった可能性が強い。思井上ノ内遺跡からは８世紀前半から10世紀にかけての竪穴住居跡16軒、掘立柱建物10棟、土器焼成遺構４基などが検出され、前平井遺跡は調査継続中であるが、70軒を超える竪穴住居跡が検出されている。前平井地区の北側は加地区となるが、ここは特に集落遺跡の発達が目覚ましく、既に古墳時代から多数の竪穴住居跡が作られるが、奈良時代前半に一時的に減少するものの後半になって飛躍的に増大する。加町畑遺跡では竪穴住居のほか掘立柱建物も多数構築され、武蔵国から多数の土器が搬入されるなど、当地区の中心的な位置を占めていたと推測される。更に目を北に転じると、三輪野山地区には式内社比定社の茂侶神社が存在するが、神社の南側に広がる三輪野山宮前遺跡では社殿から南へ約150ｍの地点で９世紀前半以前と考えられる掘立柱建物群が検出されたほか、近接する８世紀後半の竪穴住居跡からは巡方やガラス玉、耳環などが、９世紀初頭の竪穴住居跡からは下総国分寺と同笵の六葉宝相華文軒丸瓦が出土しており、三輪野山遺跡群の古代集落の中でも中心的な位置に当たると考えられる。神社の西側に当たる三輪野山北浦遺跡では、９世紀後半の竪穴住居跡から皇朝十二銭の一つである隆平永寶が出土している。神社の南西側に当たる三輪野山道六神遺跡では、鍛冶遺構を伴う竪穴住居跡が検出されている。平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山廃寺（138）[54]が、鰭ヶ崎地区には平安時代創建とされる東福寺（10、鰭ヶ崎貝塚と同位置）が立地しているが、茂侶神社を含めたこれらの３寺社は下総国府と常陸国府を結ぶ古代東海道ないしはその支路沿いに立地していたと考えられており、奈良・平安時代の集落も３寺社の間に集中する。一方でより東側の中地区や市野谷地区では、前平井堀米遺跡や市野谷中島遺跡[12]などで集落が形成されるものの、規模は小さく短期間で終息する。坂川の上流域に当たる地区は遺構密度も相対的に低くなることから、古道とともに太日川を利用した水運も重要な役割を果たしていたと考えられる。これらの遺跡群が古代葛飾郡桑原郷の中核をなす集落群であるとする指摘もされている[3]。

鎌倉時代以降の中・近世遺跡の多くは戦国期以降の遺跡であり、地下式坑や土坑墓そして屋敷跡と考えられている台地整形区画等が検出されている。鎌倉時代から室町時代前半の遺跡は千葉県内の他地域と同様少ないが、注目されるのは思井堀ノ内遺跡[1・55]で、13世紀～15世紀にかけての掘立柱建物群、方形周溝区画墓、土坑群、地下式坑群が検出されている。特に方形周溝区画墓からは青磁碗・皿、白磁皿、和鏡、円形木製品、木櫛、菊花形皿などに加え、出土品としては他に例を見ない掛幅装絹本着色画が副葬された成人女性骨が出土している[56]。時期は13世紀後半～14世紀初頭と考えられ、被葬者は13世紀代に当地を支配していた地頭矢木式部太夫胤家の妻である可能性が指摘されている。なお、掘立柱建物群も同時期と考えられ、矢木氏の居館であると推測される。市野谷入台遺跡では13世紀台と考えられる方形竪穴建物群が検出されている。戦国期になると多くの城郭が築かれるようになる。江戸川流域では本遺跡北方2.3㎞の花輪城跡（67）、坂川対岸の南1.7㎞の小金城跡（94）、同東1.7㎞と2.2㎞にある名都借城跡（124）、前ヶ崎城跡（122）があるが、これらは戦国期に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。更に本遺跡周辺をみると中中ノ台遺跡（４）、中中屋敷遺跡[4・57]、前平井遺跡、前平井堀米遺跡、加東割遺跡（28）

[58·59]、加町畑遺跡、西平井根郷遺跡（２）[30]、西平井二階畑遺跡、三輪野山宮前遺跡[60]、三輪野山道六神遺跡[61]、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が確認されており、思井地区から西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続き拠点的な位置を占めていたことが想定される。

近世になると下総台地には軍用馬育成のため、徳川幕府によって牧が設けられた。流山市周辺は小金牧の一つ、上野牧の範囲に当たる。ただし運動公園事業地はほとんどが牧の範囲の外になるため、遺構としては三輪野山野馬土手（140）が存在する程度である。新市街地地区においては駒木野馬土手（141）[14]、市野谷駒木野馬土手（142）[14·16]、十太夫野馬土手（143）[16]の調査が行われている。事業地外にはその他、大畔野馬土手（144）、市野谷･野々下野馬土手（145）、長崎一丁目野馬土手（146）、野々下野馬土手（147）などが所在するが、これらは多くが牧の外縁部に沿って構築されている。明治以降の農地開拓や軍用地造成、そして戦後の宅地開発によりこれらは大部分が姿を消し、周辺にわずかに残されるのみとなっている。

注

1　(財)千葉県教育振興財団　2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書１－流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）－』(財)千葉県教育振興財団

2　(財)千葉県教育振興財団　2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器～奈良・平安時代編）－』(財)千葉県教育振興財団

3　千葉県教育委員会　2016『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書３－流山市思井上ノ内遺跡－』千葉県教育委員会

4　千葉県教育委員会　2017『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書４－流山市中中屋敷遺跡－』千葉県教育委員会

5　千葉県教育委員会　2020『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書５－流山市前平井堀米遺跡－』千葉県教育委員会

6　(財)千葉県文化財センター　1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書－流山市南割遺跡・上貝塚第Ⅱ遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡－』(財)千葉県文化財センター
なお、この報告書に掲載されている三輪野山第Ⅱ遺跡の調査範囲は、現在の三輪野山北浦遺跡と三輪野山道六神遺跡の２遺跡にまたがっている。また、下花輪第Ⅲ遺跡は現在桐ヶ谷浅間後遺跡と呼称されている。

7　(財)千葉県教育振興財団　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市西初石五丁目遺跡－』(財)千葉県教育振興財団

8　(財)千葉県教育振興財団　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書３－流山市市野谷入台遺跡－』(財)千葉県教育振興財団

9　(財)千葉県教育振興財団　2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書４－流山市市野谷二反田遺跡－』(財)千葉県教育振興財団

10　(財)千葉県教育振興財団　2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書５－流山市大久保遺跡（下層）・市野谷向山遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡－』(財)千葉県教育振興財団

11　(公財)千葉県教育振興財団　2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書６－流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡－旧石器時代編』(公財)千葉県教育振興財団

12　(公財)千葉県教育振興財団　2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書７－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡（上層）・市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ

遺跡（上層）・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』(公財)千葉県教育振興財団
13 (公財)千葉県教育振興財団　2016『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書８－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・十太夫第Ⅲ遺跡－』(公財)千葉県教育振興財団
14 (公財)千葉県教育振興財団　2017『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書９－流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野野馬土手、流山市駒木野野馬土手－』(公財)千葉県教育振興財団
15 (公財)千葉県教育振興財団　2017『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書10－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（下層）・西初石五丁目遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』(公財)千葉県教育振興財団
16 (公財)千葉県教育振興財団　2019『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書11－流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石五丁目遺跡・市野谷駒木野野馬土手・十太夫野馬土手－』(公財)千葉県教育振興財団
17 流山市教育委員会　2015『流山市三輪野山遺跡群発掘調査概要報告書』流山市教育委員会
18 流山市遺跡調査会　1985『千葉県流山市長崎遺跡』流山市遺跡調査会
19 流山市教育委員会　1988『千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡』流山市教育委員会
20 山武考古学研究所　1982『大原神社遺跡』山武考古学研究所
21 流山市教育委員会　1993『千葉県流山市平和台遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会
22 流山市教育委員会　2003「Ⅰ．平和台遺跡(2)」『平成13年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
23 流山市教育委員会　1985『千葉県流山市三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡』流山市教育委員会
24 三輪野山八重塚遺跡調査会　1982『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡』三輪野山八重塚遺跡調査会
25 流山市遺跡調査会　1985『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡Ｂ地点』流山市遺跡調査会
26 流山市教育委員会　1989『加地区遺跡群Ⅰ』流山市教育委員会
27 流山市教育委員会　1991『加地区遺跡群Ⅱ』流山市教育委員会
28 流山市教育委員会　1994『加地区遺跡群Ⅲ』流山市教育委員会
29 流山市教育委員会　2000『加地区遺跡群Ⅳ』流山市教育委員会
30 流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室　2004『流山市西平井・鰭ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室
31 流山市教育委員会　1989『千葉県流山市名都借第Ⅱ遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会
32 (有)勾玉工房Mogi　2015『流山市名都借宮ノ脇遺跡－特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』流山市教育委員会
33 古里節夫　2000「幸田貝塚」『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器･縄文時代）』千葉県
なお、ここでは省略したが、この遺跡については主に松戸市教育委員会によって数多くの調査が行われ、概報も多数刊行されている。
34 (財)千葉県教育振興財団　2010『流山市下花輪荒井前遺跡－高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)千葉県教育振興財団
35 下屋敷遺跡調査会・流山市教育委員会　1986『流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
36 流山市教育委員会　1991「Ⅲ．三輪野山八重塚遺跡Ｆ地点」『平成二年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
37 流山市教育委員会　2002「Ⅰ．三輪野山八重塚遺跡Ⅰ・Ｊ地点」『平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
38 (株)東京航業研究所　2015『流山市三輪野山八重塚遺跡Ｋ地点－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－』(株)東京航業研究所

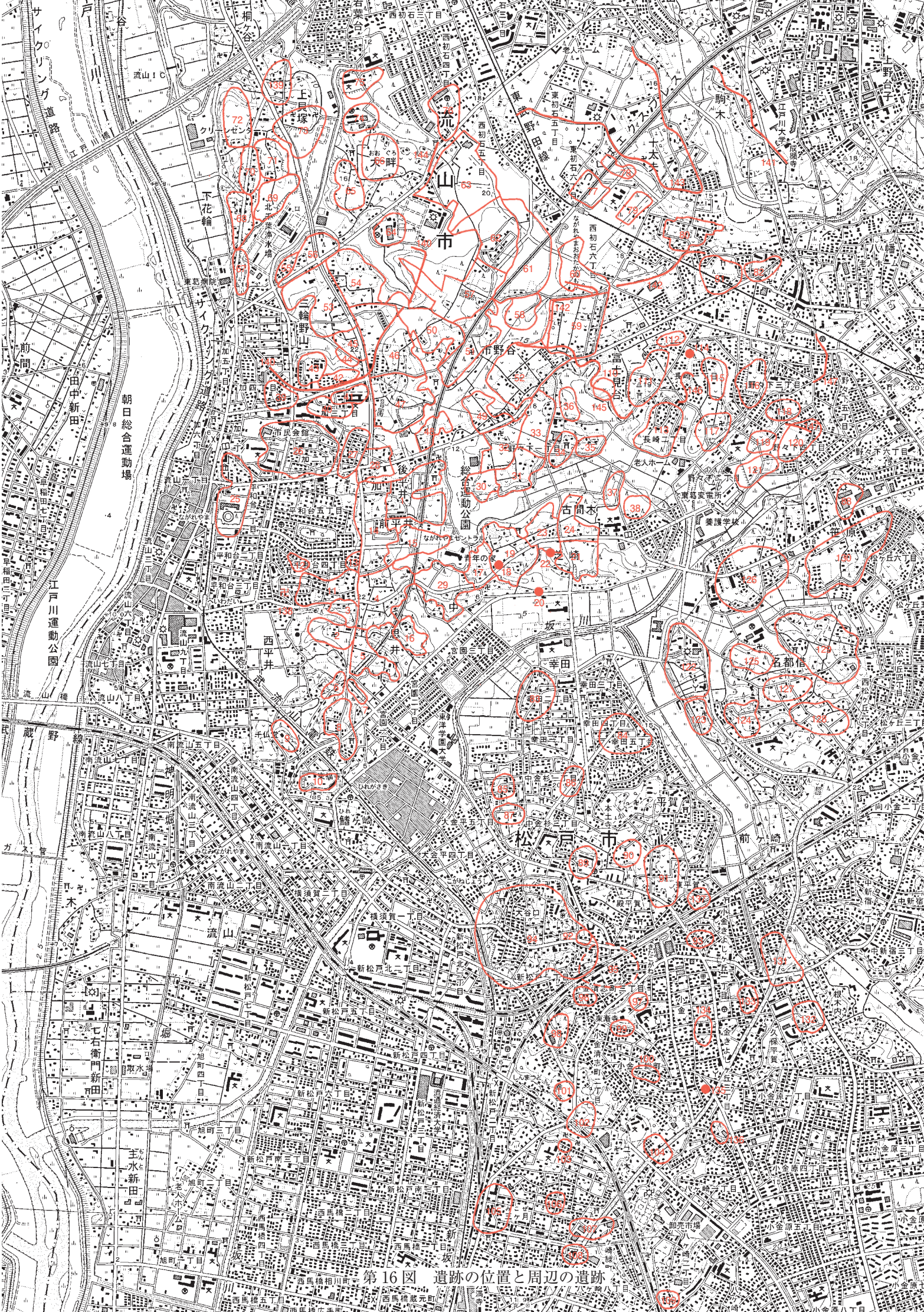
39　流山市教育委員会　2003「Ⅰ．大畔西割遺跡」『平成14年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
40　流山市教育委員会　2010「Ⅱ．三輪野山宮前遺跡Ａ地点８」『平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
41　(株)地域文化財コンサルタント　2009『流山市野々下元木戸遺跡（第３次調査)』(株)地域文化財コンサルタント
42　(株)東京航業研究所　2011『流山市野々下元木戸遺跡（第２次調査)』(株)東京航業研究所・流山市教育委員会
43　流山市教育委員会・(株)地域文化財研究所　2012『向下遺跡　野々下元木戸遺跡（第４次)』流山市教育委員会
44　酒詰仲男・岡田茂弘他　刊行年不詳（1952～1953?）『千葉県前ヶ崎貝塚発掘調査報告』学習院高等科史学部
なお、この文献は正式に刊行されたものではなく、手書きの原稿と実測図、拓本などから構成されている。
45　流山市教育委員会　1997「Ⅱ．古間木茱萸木谷遺跡」『平成８年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
46　(財)千葉県文化財センター　2001『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書－流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前－』(財)千葉県文化財センター
47　(財)千葉県文化財センター　2004『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書（２）－流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡－』(財)千葉県文化財センター
48　流山市教育委員会　2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市教育委員会
49　(財)千葉県文化財センター　1995『流山市野々下貝塚確認調査報告書』(財)千葉県文化財センター
50　流山市教育委員会　2013「Ⅲ．野々下貝塚」『平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
51　大成エンジニアリング(株)　2017『千葉県流山市加村台遺跡Ｋ地点発掘調査報告書』(有)常陽エステート
52　流山市教育委員会　2019「Ⅴ．加村台遺跡Ｌ地点」『平成29年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
53　(財)千葉県教育振興財団　2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書１－流山市市野谷宮尻遺跡－』(財)千葉県教育振興財団
54　辻　史郎　1998「119　流山廃寺」『千葉県の歴史　資料編　考古３（奈良･平安時代)』千葉県
55　流山市教育委員会　2007「Ⅴ．思井堀ノ内遺跡」『平成17年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
56　大久保奈奈　2013「思井堀ノ内遺跡中世墓副葬品詳細調査報告」『研究紀要28』(公財)千葉県教育振興財団
57　流山市教育委員会　1998「Ⅰ．中中屋敷遺跡」『平成９年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
58　(財)千葉県文化財センター　1997『流山市若宮第Ⅱ遺跡－都市計画道路３・３・２号線（新川南流山線）埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)千葉県文化財センター
なお、調査範囲は若宮第Ⅱ遺跡から加東割遺跡にまたがっており、中世遺構が検出された部分は加東割遺跡の範囲内に当たる。
59　(株)地域文化財研究所　2014『加東割遺跡　３次』(株)地域文化財研究所
60　流山市教育委員会　2011「Ⅲ．三輪野山宮前遺跡Ａ地点８－２」『平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
61　北澤　滋　1998「三輪野山遺跡群（三輪野山道六神遺跡Ｂ地点)」『千葉県の歴史　資料編　中世１（考古資料)』千葉県

上記以外の関連文献

(財)千葉県文化財センター　1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)－』(財)千葉県文化財センター
(財)千葉県文化財センター　1994『流山市上新宿貝塚発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
千葉県教育委員会　1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』千葉県教育委員会
流山市立博物館市史編さん係編　2001『流山市史　通史編Ⅰ』流山市教育委員会

(財)千葉県教育振興財団編　2006『県内遺跡詳細分布調査報告書　房総の近世牧跡』千葉県教育委員会
流山市立博物館編　2015『ふるさと流山のあゆみ』流山市教育委員会
千葉県教育委員会　2018『流山市三輪野山北浦遺跡－県道越谷流山線事業埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉県教育委員会

第15図　遺跡の立地と周辺の地形



第16図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１表　後平井中通遺跡 (1) ～ (35) 調査一覧

調査次	年度	事業名	調査期間	調査体制			担当者	対象面積(㎡)	確認調査(㎡) 上層 確認面積	上層 対象面積	確認調査(㎡) 下層 確認面積	下層 対象面積	本調査(㎡) 上層	本調査(㎡) 下層	完了面積(㎡)	備考
(1)	平成９	流山運動公園周辺地区	H10.2.16～H10.2.20	財団法人千葉県文化財センター	北部調査事務所	調査部長　西山太郎 所長　折原　繁	主任技師　落合章雄	5,546	964	5,546	56	5,546	0	0	5,546	
(2)	平成10	運動公園周辺地区	H10.12.1～H11.1.29	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼沢　豊 所長　鈴木定明	室長　蔀　淳一	19,353	1,935	19,353	594	13,533	—	0	13,533	確認調査のみ　上層は(3)・(6)・(7)・(13)・(15)・(21)で本調査へ
(3)	平成11	運動公園周辺地区	H11.10.1～H12.3.27	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼沢　豊 所長　及川淳一	研究員　山田貴久 研究員　廣瀬和之	4,500	—	—	96	2,400	4,500	0	2,400	(2)で確認し本調査決定した範囲(4,500㎡)
(4)	平成11	運動公園周辺地区	H12.1.5～H12.2.29	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼沢　豊 所長　及川淳一	研究員　山田貴久 研究員　廣瀬和之	6,934	694	6,934	276	6,284	—	0	6,284	確認調査のみ　上層は(12)・(29)で本調査へ
(5)	平成12	運動公園周辺地区(1)	H12.4.6～H12.4.28	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼沢　豊 所長　及川淳一	室長　蔀　淳一	2,100	—	—	104	2,100	—	450	2,100	(3)上層本調査範囲の下層確認・本調査
(6)	平成12	運動公園周辺地区(4)	H12.9.1～H12.11.9	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼沢　豊 所長　及川淳一	上席研究員　織田良昭	770	90	526	8	132	638	—	638	一部(2)で確認し本調査決定した範囲
(7)-1	平成12	運動公園周辺地区(5)	H13.3.1～H13.3.29	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼沢　豊 所長　及川淳一	上席研究員　織田良昭	335	—	—	—	—	335	—	—	一部(2)で確認し本調査決定した範囲
(7)-2	平成12	運動公園周辺地区(1)	H13.4.5～H13.4.27	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　佐久間豊 所長　田坂　浩	上席研究員　織田良昭	335	—	—	12	335	—	0	—	(7)-1上層本調査範囲の下層確認調査
(8)	平成13	運動公園周辺地区(1)	H13.4.5～H13.4.27	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　佐久間豊 所長　田坂　浩	上席研究員　織田良昭	116	—	—	8	116	116	0	116	
(9)	平成13	運動公園周辺地区(2)	H13.9.3～H13.9.14	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　佐久間豊 所長　田坂　浩	上席研究員　森本和男	546	55	546	12	546	112	0	546	
(10)	平成13	運動公園周辺地区(2)	H14.2.18～H14.3.15	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　佐久間豊 所長　田坂　浩	室長　郷堀英司	549	109	549	36	549	0	0	549	
(11)	平成13	運動公園周辺地区(2)	H14.9.11	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　斎木　勝 所長　田坂　浩	室長　郷堀英司	593	45	593	3	593	0	0	593	
(12)	平成14	運動公園周辺地区(4)	H15.7.1～H15.9.30	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　斎木　勝 所長　田坂　浩	上席研究員　郷堀英司	585	—	—	12	585	585	0	585	(4)で確認し本調査決定した範囲
(13)	平成15	運動公園周辺地区(4)	H15.10.1～H16.1.30	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　斎木　勝 所長　田坂　浩	上席研究員　織田良昭	3,187	345	2,467	104	3,187	1,140	0	3,187	一部(2)で確認し本調査決定した範囲(720㎡)
(14)	平成15	運動公園周辺地区(4)	H16.1.13～H16.1.23	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長兼企画課長　斎木　勝 所長　田坂　浩	上席研究員　織田良昭	533	50	533	0	533	0	0	533	
(15)	平成16	運動公園周辺地区	H16.5.24～H16.6.30	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員　岡田光広	848	—	—	18	848	848	0	848	一部(2)で確認し本調査決定した範囲（道路部分）
(16)	平成16	運動公園周辺地区(2)	H17.1.6～H17.1.19	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員　福田　誠	1,514	151	1,514	64	1,514	0	0	1,514	
(17)	平成17	運動公園周辺地区(1)	H17.6.23～H17.6.30	財団法人千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員　郷堀英司	329	51	329	7	329	0	0	329	
(18)	平成18	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園)	H18.12.11～H18.12.15	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	主席研究員兼副所長　高橋博文	831	70	831	12	831	0	0	831	
(19)	平成18	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園)	H18.6.16～H18.7.12	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	主席研究員兼副所長　高橋博文	1,634	194	1,634	44	1,634	198	0	1,634	
(20)	平成18	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園)	H18.7.13～H18.7.14	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	主席研究員兼副所長　高橋博文	1,313	128	1,313	—	—	0	—	1,313	

調査次	年度	事業名	調査期間	調査体制			担当者	対象面積(㎡)	確認調査(㎡) 上層 確認面積 ／ 対象面積	確認調査(㎡) 下層 確認面積 ／ 対象面積	本調査(㎡) 上層	本調査(㎡) 下層	完了面積(㎡)	備考
(21)	平成18	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園)	H18.7.18～H18.8.25	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	主席研究員兼副所長 高橋博文	2,144	184 ／ 1,944	40 ／ 2,144	328	0	2,144	一部(2)で確認し本調査決定した範囲(200㎡)
(22)	平成18	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園)	H19.1.22～H19.1.31	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員　豊田秀治	396	396 ／ 396	— ／ —	0	—	396	
(23)	平成19	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園)	H19.7.17～H19.7.30	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　矢戸三男 主席研究員兼所長 及川淳一	上席研究員　土屋潤一郎	2,539	266 ／ 2,539	48 ／ 2,539	0	0	2,539	
(24)	平成20	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園2)	H20.8.6～H20.8.12	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　大原正義 主席研究員兼所長 及川淳一	主席研究員兼副所長 岡田誠造	1,044	132 ／ 1,044	0 ／ 1,044	0	0	1,044	
(25)	平成20	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園3)	H20.8.18～H20.10.22	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　大原正義 主席研究員兼所長 及川淳一	上席研究員　柴田龍司	2,548	255 ／ 2,548	148 ／ 2,548	1,008	0	2,548	
(26)	平成20	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園3)	H20.10.23～H20.12.16	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　大原正義 主席研究員兼所長 及川淳一	上席研究員　柴田龍司	3,128	312 ／ 3,128	60 ／ 3,128	273	0	3,128	
(27)	平成20	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園3)	H20.12.17～H21.1.13	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　大原正義 主席研究員兼所長 及川淳一	上席研究員　柴田龍司	2,360	314 ／ 2,360	36 ／ 2,360	0	0	2,360	
(28)	平成22	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園1)	H22.4.26～H22.5.7	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　及川淳一 主席研究員兼所長 橋本勝雄	上席研究員　田島　新	423	423 ／ 423	8 ／ 423	0	0	423	
(29)	平成22	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園4)	H22.8.2～H22.8.30	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　及川淳一 主席研究員兼所長 橋本勝雄	上席研究員　田島　新	2,832	276 ／ 2,767	144 ／ 2,832	65	108	2,832	上層本調査65㎡は(4)で確認し本調査決定した範囲
(30)	平成22	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園6)	H23.2.23～H23.3.18	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　及川淳一 主席研究員兼所長 橋本勝雄	主席研究員兼副所長 岡田誠造	752	188 ／ 752	28 ／ 752	564	0	752	
(31)	平成23	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園2)	H23.8.11～H23.9.9	財団法人千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査研究部長　及川淳一 主席研究員兼所長 橋本勝雄	主席研究員　雨宮龍太郎	1,791	254 ／ 1,791	36 ／ 1,791	0	0	1,791	
(32)	平成24	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園2)	H24.7.2～H24.7.9	公益財団法人千葉県教育振興財団	調査研究部調査2課	部長　関口達彦 課長　橋本勝雄	主任上席文化財主事 鳴田浩司	468	468 ／ 468	8 ／ 468	0	0	468	
(33)	平成24	つくばエクスプレス沿線整備委託(運動公園2)	H24.7.10～H24.7.30	公益財団法人千葉県教育振興財団	調査研究部調査2課	部長　関口達彦 課長　橋本勝雄	主任上席文化財主事 鳴田浩司	715	715 ／ 715	8 ／ 715	0	0	715	
(34)	平成28	運動公園周辺地区	H28.9.1～H28.11.4	千葉県教育庁教育振興部文化財課	発掘調査班	課長　永沼律朗 班長　田井知二	主任上席文化財主事 落合章雄	2,574	294 ／ 2,574	72 ／ 2,574	64	0	2,574	
(35)	平成29	運動公園周辺地区	H29.6.1～H29.6.16	千葉県教育庁教育振興部文化財課	発掘調査班	課長　萩原恭一 班長　山田貴久	文化財主事　川田航平	1,247	1,247 ／ 1,247	28 ／ 1,247	0	0	1,247	
面積合計								77,412	10,605 ／ 67,364	2,130 ／ 66,160	10,774	558	68,040	

第２表　後平井中通遺跡上層遺構一覧

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	位置（グリッド）	備　考
(3)	平成 11	(3)SI003	003	竪穴住居跡	縄文	M34－59･69、N34－50･60	
			012				
			006				出入口施設
			007				出入口施設
(3)	平成 11	(3)SI012	008	竪穴住居跡	縄文	N34－40～42･51･52	出入口施設
			009				出入口施設
			016				P13
			017				P12
(3)	平成 11	(3)SI031	031	竪穴住居跡	縄文	M34－58･59･68･69	
(3)	平成 11	(3)SI032	032	竪穴住居跡	縄文	M34－57･58･67･68	一部 (15) で調査
(3)	平成 11	(3)SI035	035	竪穴住居跡	縄文	M34－56･65～67	一部 (15) で調査
(3)	平成 11	(3)SI045	045	竪穴住居跡	縄文	M34－47･48	
(3)	平成 11	(3)SI046	046	竪穴住居跡	縄文	M34－37･38･47･48	
			048				
			049				P6
			050				P8
			051				P5
			052				P2
			053				P19
			054				P4
			055				P3
(3)	平成 11	(3)SI048	056	竪穴住居跡	縄文	M34－29･39、N34－20･30	P1
			057				P18
			058				P17
			059				P16
			060				P15
			061				P14
			063				P12
			064				P13
			065				P11
			066				P9
(3)	平成 11	(3)SI072	072	竪穴住居跡	縄文	M34－06･07･16･17	
(3)	平成 11	(3)SI073	073	竪穴住居跡	縄文	M34－06･07･16･17	
(3)	平成 11	(3)SI078	078	竪穴住居跡	縄文	M34－18･19･28･29	
(3)	平成 11	(3)SI079	079	竪穴住居跡	縄文	M34－07～09･17～19	
(3)	平成 11	(3)SI080	080	竪穴住居跡	縄文	M34－08･09･19	
(3)	平成 11	(3)SI081	081	竪穴住居跡	縄文	M34－08･18	
(3)	平成 11	(3)SI104	104	竪穴住居跡	縄文	N34－10･11･20～22･30･31	
(3)	平成 11	(3)SI118	118	竪穴住居跡	縄文	M34－19･29、N34－10･20	
			121				P16
			136				
(3)	平成 11	(3)SI136	100	竪穴住居跡	縄文	N34－02･03･12･13	P7
			101				P17
			111				P18
(3)	平成 11	(3)SI139	139	竪穴住居跡	縄文	N33－81･82･91･92	
(3)	平成 11	(3)SI140	140	竪穴住居跡	縄文	N33－70･71	
			147				
(3)	平成 11	(3)SI147	148	竪穴住居跡	縄文	N33－65･66･75･76･85･86	出入口施設
			149				出入口施設
			150				出入口施設
(3)	平成 11	(3)SI156	156	竪穴住居跡	縄文	M37－48･49･58･59	
(3)	平成 11	(3)SI159	159	竪穴住居跡	縄文	M37－29･39、N37－20･30	
(3)	平成 11	(3)SI160	160	竪穴住居跡	縄文	M37－49･59、N37－40･50	
(3)	平成 11	(3)SI161	161	竪穴住居跡	縄文	N33－34･35･44･45	
(3)	平成 11	(3)SI163	163	竪穴住居跡	縄文	N33－11･12･21～23	一部 (7) で調査
(3)	平成 11	(3)SI165	165	竪穴住居跡	縄文	N33－62･63･72･73	
(3)	平成 11	(3)SI177	177	竪穴住居跡	縄文	N33－25･26･35･36	
(3)	平成 11	(3)SI179	179	竪穴住居跡	縄文	N33－33･34･43･44	
(3)	平成 11	(3)SI180	180	竪穴住居跡	縄文	N33－13･14･23･24	
(3)	平成 11	(3)SI181	181	竪穴住居跡	縄文	N33－05･06･15･16	
(3)	平成 11	(3)SI191	191	竪穴住居跡	縄文	M38－66･67･76･77	
(3)	平成 11	(3)SI192	192	竪穴住居跡	縄文	M38－68･69･78･79	
(3)	平成 11	(3)SI195	195	竪穴住居跡	縄文	N38－31･32･41･42	
(3)	平成 11	(3)SK004	004	土坑	縄文	N34－42	
(3)	平成 11	(3)SK005	005	土坑	縄文	N34－42･52	
(3)	平成 11	(3)SK010	010	土坑	縄文	N34－53	
(3)	平成 11	(3)SK011	011	土坑	縄文	N34－41	
(3)	平成 11	(3)SK014	014	土坑	縄文	N34－40	
(3)	平成 11	(3)SK015	015	土坑	縄文	N34－50･51	
(3)	平成 11	(3)SK019	019	土坑	縄文	N34－55･56	
(3)	平成 11	(3)SK020	020	土坑	縄文	N34－57	
(3)	平成 11	(3)SK021	021	土坑	縄文	N34－56･57	
(3)	平成 11	(3)SK022	022	土坑	縄文	N34－56･57･67	
(3)	平成 11	(3)SK023	023	土坑	縄文	M34－58	
(3)	平成 11	(3)SK024	024	土坑	縄文	M34－49	
(3)	平成 11	(3)SK026	026	土坑	縄文	M34－58	
(3)	平成 11	(3)SK027	027	土坑	縄文	M34－57	
(3)	平成 11	(3)SK028	028	土坑	縄文	M34－57･67	
(3)	平成 11	(3)SK029	029	土坑	縄文	N34－30･40	
(3)	平成 11	(3)SK030	030	土坑	縄文	N34－40	
(3)	平成 11	(3)SK033	033	土坑	縄文	M34－67･68	

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	位置（グリッド）	備　考
(3)	平成 11	(3)SK034	034	土坑	縄文	M34－67	
(3)	平成 11	(3)SK036	036	土坑	縄文	M34－57	
(3)	平成 11	(3)SK037	037	土坑	縄文	M34－57	
(3)	平成 11	(3)SK038	038	土坑	縄文	M34－57	
(3)	平成 11	(3)SK039	039	土坑	縄文	M34－67･68	
(3)	平成 11	(3)SK040	040	土坑	縄文	M34－39	
(3)	平成 11	(3)SK041	041	土坑	縄文	M34－39	
(3)	平成 11	(3)SK042	042	土坑	縄文	M34－39･49	
(3)	平成 11	(3)SK043	043	土坑	縄文	M34－49	
(3)	平成 11	(3)SK044	044	土坑	縄文	M34－49	
(3)	平成 11	(3)SK068	068	土坑	縄文	M34－48	
(3)	平成 11	(3)SK069	069	土坑	縄文	M34－17･27	
(3)	平成 11	(3)SK070	070	土坑	縄文	M34－27	
(3)	平成 11	(3)SK071	071	土坑	縄文	M34－26･27	
(3)	平成 11	(3)SK074	074	土坑	縄文	M34－16･26	
(3)	平成 11	(3)SK075	075	土坑	縄文	M34－27	
(3)	平成 11	(3)SK077	077	土坑	縄文	M34－47	
(3)	平成 11	(3)SK082	082	土坑	縄文	M34－09	
(3)	平成 11	(3)SK083	083	土坑	縄文	M34－09	
(3)	平成 11	(3)SK084	084	土坑	縄文	M34－28･29	
(3)	平成 11	(3)SK085	085	土坑	縄文	M34－28	
(3)	平成 11	(3)SK086	086	土坑	縄文	N34－28･29	
(3)	平成 11	(3)SK087	087	土坑	縄文	M34－19･29	
(3)	平成 11	(3)SK088	088	土坑	縄文	M34－37･38	
(3)	平成 11	(3)SK089	089	土坑	縄文	M34－38	
(3)	平成 11	(3)SK090	090	土坑	縄文	M34－38	
(3)	平成 11	(3)SK091	091	土坑	縄文	M34－38	
(3)	平成 11	(3)SK092	092	土坑	縄文	M34－38	
(3)	平成 11	(3)SK093	093	土坑	縄文	N34－02･03･12	
(3)	平成 11	(3)SK094	094	土坑	縄文	N34－02･12	
(3)	平成 11	(3)SK095	095	土坑	縄文	N34－12	
(3)	平成 11	(3)SK097	097	土坑	縄文	N34－12	
(3)	平成 11	(3)SK098	098	土坑	縄文	N34－03	
(3)	平成 11	(3)SK099	099	土坑	縄文	N34－03･13	
(3)	平成 11	(3)SK102	102	土坑	縄文	N34－23	
(3)	平成 11	(3)SK103	103	土坑	縄文	N34－13･23	
(3)	平成 11	(3)SK106	106	土坑	縄文	N34－32	
(3)	平成 11	(3)SK107	107	土坑	縄文	N34－33	
(3)	平成 11	(3)SK110	110	土坑	縄文	N34－12	
(3)	平成 11	(3)SK112	112	土坑	縄文	M34－19	
(3)	平成 11	(3)SK113	113	土坑	縄文	M34－29	
(3)	平成 11	(3)SK114	114	土坑	縄文	M34－29	
(3)	平成 11	(3)SK115	115	土坑	縄文	M34－29	
(3)	平成 11	(3)SK117	117	土坑	縄文	N33－74	
(3)	平成 11	(3)SK119	119	土坑	縄文	N34－01	
(3)	平成 11	(3)SK120	120	土坑	縄文	N34－01	
(3)	平成 11	(3)SK122	122	土坑	縄文	N33－93	
(3)	平成 11	(3)SK123	123	土坑	縄文	N33－54	
(3)	平成 11	(3)SK124	124	土坑	縄文	N33－45･46･55･56	
(3)	平成 11	(3)SK125	125	土坑	縄文	N33－91	
(3)	平成 11	(3)SK126	126	土坑	縄文	N33－62･72	
(3)	平成 11	(3)SK127	127	土坑	縄文	N33－62･63･72･73	
(3)	平成 11	(3)SK128	128	土坑	縄文	N33－72	
(3)	平成 11	(3)SK129	129	土坑	縄文	N33－72	
(3)	平成 11	(3)SK130	130	土坑	縄文	N33－72	
(3)	平成 11	(3)SK131	131	土坑	縄文	M33－19	
(3)	平成 11	(3)SK133	133	土坑	縄文	N33－73	
(3)	平成 11	(3)SK134	134	土坑	縄文	N33－73･74	
(3)	平成 11	(3)SK135	135	土坑	縄文	N33－64	
(3)	平成 11	(3)SK137	137	土坑	縄文	N33－63	
(3)	平成 11	(3)SK141	141	土坑	縄文	N33－92･93	
(3)	平成 11	(3)SK142	142	土坑	縄文	N33－92	(3)SI139 出入口施設か？
(3)	平成 11	(3)SK143	143	土坑	縄文	N33－92	(3)SI139 出入口施設か？
(3)	平成 11	(3)SK144	144	土坑	縄文	N33－81･91	
(3)	平成 11	(3)SK145	145	土坑	縄文	N33－81･82	
(3)	平成 11	(3)SK146	146	土坑	縄文	N33－61	
(3)	平成 11	(3)SK151	151	土坑	縄文	M37－28･38	
(3)	平成 11	(3)SK152	152	土坑	縄文	M37－28	
(3)	平成 11	(3)SK153	153	土坑	縄文	N37－31	
(3)	平成 11	(3)SK154	154	土坑	縄文	M37－19	
(3)	平成 11	(3)SK155	155	土坑	縄文	N37－10	
(3)	平成 11	(3)SK157	157	土坑	縄文	N37－41･51	
(3)	平成 11	(3)SK158	158	土坑	縄文	N37－50･51･61	
(3)	平成 11	(3)SK162	162	土坑	縄文	N33－44	
(3)	平成 11	(3)SK164	164	土坑	縄文	N33－22･32	
(3)	平成 11	(3)SK166	166	土坑	縄文	N33－50･51	
(3)	平成 11	(3)SK167	167	土坑	縄文	N33－50･51･60･61	
(3)	平成 11	(3)SK168	168	土坑	縄文	N33－51	
(3)	平成 11	(3)SK169	169	土坑	縄文	N33－51	
(3)	平成 11	(3)SK170	170	土坑	縄文	N33－50	
(3)	平成 11	(3)SK171	171	土坑	縄文	N33－31･32	
(3)	平成 11	(3)SK172	172	土坑	縄文	N33－31･32	
(3)	平成 11	(3)SK173	173	土坑	縄文	N33－22･23	

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	位置（グリッド）	備　考
(3)	平成 11	(3)SK174	174	土坑	縄文	N33－12	(7) 調査区からは検出されず
(3)	平成 11	(3)SK175	175	土坑	縄文	N33－35	
(3)	平成 11	(3)SK176	176	土坑	縄文	N33－36	
(3)	平成 11	(3)SK182	182	土坑	縄文	N33－16	
(3)	平成 11	(3)SK183	183	土坑	縄文	N33－81･91･92	
(3)	平成 11	(3)SK184	184	土坑	縄文	N33－82	
(3)	平成 11	(3)SK185	185	土坑	縄文	N33－82･92	
(3)	平成 11	(3)SK188	188	土坑	縄文	N37－83･84	
(3)	平成 11	(3)SK189	189	土坑	縄文	M37－49･59	
(3)	平成 11	(3)SK190	190	土坑	縄文	N37－50	
(3)	平成 11	(3)SK193	193	土坑	古代以降	N38－70･71	
(3)	平成 11	(3)SK194	194	土坑	縄文	N38－84	
(3)	平成 11	(3)SK196	196	土坑	縄文	N38－33	
(3)	平成 11	(3)SK197	197	土坑	縄文	N38－23･24	
(3)	平成 11	(3)SK198	198	土坑	縄文	N38－11･21	
(3)	平成 11	(3)SK199	199	土坑	縄文	N38－42･52	
(3)	平成 11	(3)SK200	200	土坑	縄文	M38－09	
(3)	平成 11	(3)SK201	201	土坑	縄文	M38－79	
(3)	平成 11	(3)SK202	202	土坑	縄文	M37－79･89	
(3)	平成 11	(3)SK203	203	土坑	縄文	M37－79･89、N37－70･80	
(3)	平成 11	(3)SK204	204	土坑	縄文	N37－70	
(3)	平成 11	(3)SK205	205	土坑	縄文	M37－88	
(3)	平成 11	(3)SH013	013	ピット	縄文	N34－40	
(3)	平成 11	(3)SH018	018	ピット	縄文	N34－50	
(3)	平成 11	(3)SH025	025	ピット	縄文	M34－49	
(3)	平成 11	(3)SH047	047	ピット	縄文	N34－30	
(3)	平成 11	(3)SH062	062	ピット	縄文	M34－39	
(3)	平成 11	(3)SH067	067	ピット	縄文	M34－49	
(3)	平成 11	(3)SH105	105	ピット群	縄文	N34－31	
(3)	平成 11	(3)SH108	108	ピット	縄文	N34－12	
(3)	平成 11	(3)SH109	109	ピット	縄文	N34－12	
(3)	平成 11	(3)SH132	132	ピット群	縄文	M34－00･10･11	
(3)	平成 11	(3)SH138	138（M34-28・29 周辺ピット群）	ピット群	縄文	M34－28･29･38	
(3)	平成 11	(3)SH178	178	ピット群	縄文	N33－55	
(3)	平成 11	(3)SH186	186	ピット	縄文	N33－40･41	
(3)	平成 11	(3)SK076	076	陥穴	縄文	M34－47	
(3)	平成 11	(3)SK096	096	陥穴	縄文	N34－12･13	
(3)	平成 11	(3)SK116	116	陥穴	縄文	N34－77	
(3)	平成 11	(3)SD002	002	溝状遺構	中・近世	N34-34･35･44･53･54･63･64･72･73･82･83･92、N35-00～02	(6)SD001、(7)SD002 と同一
(3)	平成 11	(3)SD206	206	溝状遺構	中・近世	M38－46･56～59･66～69、N38－50･51･60～67･70～77	
(3)	平成 11	(3)SD207	207	溝状遺構	中・近世	N38-16･17･26･27･36･37･46･47･55･56･65･66･75･76･85･86	
(3)	平成 11	欠番	001	（石器集中地点）	（旧石器）	－	（第４ブロック）
(3)	平成 11	欠番	187	－	－	－	
(5)	平成 12	(5)SK208	208	土坑	縄文	N33－85	
(5)	平成 12	(5)SK209	209	土坑	縄文	N33－41	
(5)	平成 12	(5)SK210	210	土坑	縄文	N33－31･32	
(5)	平成 12	(5)SK211	211	土坑	縄文	N33－21	
(5)	平成 12	(5)SK212	212	土坑	縄文	N33－21	
(5)	平成 12	(5)SK213	213	土坑	縄文	N33－40	
(5)	平成 12	(5)SK214	214	土坑	縄文	N33－73･74･83･84	
(5)	平成 12	(5)SK215	215	土坑	縄文	N33－84	
(5)	平成 12	(5)SK216	216	土坑	縄文	N33－84	
(5)	平成 12	(5)SK217	217	土坑	縄文	N33－71･72･81･82	
(5)	平成 12	(5)SK218	218	土坑	縄文	N33－63	
(5)	平成 12	(5)SK219	219	土坑	縄文	N33－30	
(5)	平成 12	(5)SK220	220	土坑	縄文	N33－65	
(6)	平成 12	(6)SI006	竪穴状遺構 06	竪穴住居跡	縄文	N32－88･97･98、N33－07･08	(9) 調査区からは検出されず
(6)	平成 12	(6)SI007	竪穴状遺構 07	竪穴住居跡	縄文	N32－96～98、N33－06～08	
(6)	平成 12	(6)SI030	住 30	竪穴住居跡	奈良・平安	N34－92･93、N35－02･03	一部 (7) で調査
(6)	平成 12	(6)SK001	土坑 01	土坑	縄文	N32－87	
(6)	平成 12	(6)SK002	土坑 02	土坑	縄文	N32－86･87･96･97	
(6)	平成 12	(6)SK003	土坑 03	土坑	縄文	N32－94･95、N33－04･05	
(6)	平成 12	(6)SK004	土坑 04	土坑	縄文	N33－08･09	
(6)	平成 12	(6)SK005	土坑 05	土坑	縄文	M33－29･39、N33－20･30	
(6)	平成 12	(6)SK008	土坑 08	土坑	縄文	N32－97･98、N33－07･08	
(6)	平成 12	(6)SK009	土坑 09	土坑	縄文	N33－18･19･28･29	
(6)	平成 12	(6)SK010	土坑 10	土坑	縄文	N33－08･18	
(6)	平成 12	(6)SK011	土坑 11	土坑	縄文	N33－08･18	
(6)	平成 12	(6)SK015	土坑 15	土坑	縄文	N34－71	
(6)	平成 12	(6)SK018	土坑 18	土坑	縄文	N34－81	
(6)	平成 12	(6)SK019	土坑 19	土坑	縄文	N34－81	
(6)	平成 12	(6)SK021	土坑 21	土坑	縄文	N34－81	
(6)	平成 12	(6)SK023	土坑 23	土坑	縄文	N34－81	
(6)	平成 12	(6)SK024	土坑 24	土坑	縄文	N34－91	
(6)	平成 12	(6)SK025	土坑 25	土坑	縄文	N34－91	
(6)	平成 12	(6)SK027	土坑 27	土坑	縄文	N34－72	
(6)	平成 12	(6)SK028	土坑 28	土坑	縄文	N34－72	
(6)	平成 12	(6)SK029	土坑 29	土坑	縄文	N34－72	
(6)	平成 12	(6)SH016	土坑 16	ピット	縄文	N34－71	
(6)	平成 12	(6)SH017	土坑 17	ピット	縄文	N34－71	
(6)	平成 12	(6)SH020	土坑 20	ピット	縄文	N34－81	

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	位置（グリッド）	備　考
(6)	平成 12	(6)SH022	土坑 22	ピット	縄文	N34－81	
(6)	平成 12	(6)SH026	土坑 26	ピット	縄文	N34－91	
(6)	平成 12	(6)SH001	P1 ～ P5	ピット群	縄文？	N33－18	詳細記録無し
(6)	平成 12	(6)SD001	溝 1	溝状遺構	中・近世	N34-34·35·44·53·54·63·64·72·73·82·83·92、N35-00~02	(3)SD002、(7)SD002 と同一
(7)	平成 12	(3)SI163	163	竪穴住居跡	縄文	N33－11·12·21～23	一部 (3) で調査
(7)	平成 12	(6)SI030	住 30	竪穴住居跡	奈良・平安	N34－92·93、N35－02·03	一部 (6) で調査
(7)	平成 12	(7)SX003	(番号無し)	埋設土器	奈良・平安	N34－45·55	
(7)	平成 12	(7)SD001	溝	溝状遺構	中・近世	N34－35·45·54·55·64·74	
(7)	平成 12	(7)SD002	溝 2	溝状遺構	中・近世	N34-34·35·44·53·54·63·64·72·73·82·83·92、N35-00~02	(3)SD002、(6)SD001 と同一
(8)	平成 13	(8)SD001	溝 01(竹林部)	溝状遺構	中・近世	N37－03·13·23·33·43·53	
(8)	平成 13	(8)SD002	溝 02(竹林部)	溝状遺構	中・近世	N37－13·14	
(9)	平成 13	(9)SD001	溝 1	溝状遺構	中・近世	N32－89、O32－80·90·91	
(9)	平成 13	(9)SD002	溝 2	溝状遺構	近世以降	O32－91·92、O33－01·11	
(10)	平成 13	(10)SK222	222	土坑	中・近世	N32－55·56·65·66	
(10)	平成 13	(10)SD220	220	溝状遺構	近世以降	N32－37·47	
(10)	平成 13	(10)SD221	221	溝状遺構	中・近世	N32－65～67·76·77	
(12)	平成 15	(12)SK005	005	土坑墓	中・近世	O40－48	
(12)	平成 15	(12)SK004	004	土坑群	中・近世	O40－27·36·37	
(12)	平成 15	(12)SK006	006	土坑	縄文	P40－62·63	
(12)	平成 15	(12)SK007	007	土坑	中・近世	P40－54·55	
(12)	平成 15	(12)SK008	008	土坑	縄文	P40－32·33·42·43	
(12)	平成 15	(12)SK009	009	土坑	中・近世	P40－43·44	
(12)	平成 15	(12)SK010	010	土坑	縄文	P40－32·42	
(12)	平成 15	(12)SE011	011	井戸状遺構	中・近世	P40－31	
(12)	平成 15	(12)SM001	001	塚	近世	O40－14～16·24～27·34～36	グリッドはおおよその範囲
(12)	平成 15	(12)SX002	002	土塁	中・近世	O40－39·49·59、P40－30～36·40～46·50～56·61～66	グリッドはおおよその範囲
(12)	平成 15	(12)SD003	003	溝状遺構	中・近世	O40－33~37·39·45~49·59·69、P40－30·34·35·40·44·45·50~55·64·65	
(13)	平成 15	(13)SI001	0001	竪穴住居跡	縄文	M34－32·33·42·43·52·53	
(13)	平成 15	(13)SI002	0002	竪穴住居跡	縄文	M34－13·14·23·24	
(13)	平成 15	(13)SI003	0003	竪穴住居跡	縄文	M34－10·11·20·21·30·31	
(13)	平成 15	(13)SI004	0004	竪穴住居跡	縄文	M34－03·04·13·14	
(13)	平成 15	(13)SI005	0005	竪穴住居跡	縄文	M34－00～02·10～12	
(13)	平成 15	(13)SI006	0006	竪穴住居跡	縄文	L33－99、L34－09·19、M33－90、M34－00·10	
(13)	平成 15	(13)SI007	0007	竪穴住居跡	縄文	L34－18·19·28·29、M34－10·20	
(13)	平成 15	(13)SI008	0008	竪穴住居跡	縄文	L34－28·29·38·39、M34－20·30	
(13)	平成 15	(13)SI009	0009	竪穴住居跡	縄文	L33－78·79·88·89、M33－70·80	
(13)	平成 15	(13)SI012	012	竪穴住居跡	縄文	L33－84·85·94·95、L34－04·05	
(13)	平成 15	(13)SI013	013	竪穴住居跡	縄文	L34－13～15·23～25	
(13)	平成 15	(13)SI014	014	竪穴住居跡	縄文	L33－93·94、L34－03～05·13～15	
(13)	平成 15	(13)SK010	010	土坑	縄文	M33－91	
(13)	平成 15	(13)SK011	011	土坑	縄文	L33－78	
(13)	平成 15	(13)SK015	015	土坑	縄文	L34－25·26	
(15)	平成 16	(3)SI032	001	竪穴住居跡	縄文	M34－57·58·67·68	一部 (3) で調査
(15)	平成 16	(3)SI035	130	竪穴住居跡	縄文	M34－56·65～67	P13
			131				P11
			132				P12
			133				P10
			134				P9
			135				P8
			142				P6
			143				P7
			P11				P15
			P12				P14
(15)	平成 16	(15)SI127	127	竪穴住居跡	縄文	M34－64·65·74·75	P11
			128				P12
			129				P13
			P1				P1
			P2				P2
			P3				P3
			P4				P4
			P5				P5
			P6				P6
			P7				P7
			P8				P8
			P9				P9
			P10				P10
(15)	平成 16	(15)SK101	101	土坑	縄文	M34－08	
(15)	平成 16	(15)SK102	102	土坑	縄文	M34－09	
(15)	平成 16	(15)SK103	103	土坑	縄文	M33－98	
(15)	平成 16	(15)SK104	104	土坑	縄文	M33－98	
(15)	平成 16	(15)SK105	105	土坑	縄文	M33－98	
(15)	平成 16	(15)SK106	106	土坑	縄文	M33－88·98	
(15)	平成 16	(15)SK107	107	土坑	縄文	M33－88·98	
(15)	平成 16	(15)SK108	108	土坑	縄文	M33－87	
(15)	平成 16	(15)SK109	109	土坑	縄文	M33－88	
(15)	平成 16	(15)SK110	110	土坑	縄文	M33－87	
(15)	平成 16	(15)SK111	111	土坑	縄文	M33－87	
(15)	平成 16	(15)SK112	112	土坑	縄文	M33－87·97	
(15)	平成 16	(15)SK113	113	土坑	縄文	M33－87	
(15)	平成 16	(15)SK114	114	土坑	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SK115	115	土坑	縄文	M34－76·77	

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	位置（グリッド）	備　考
(15)	平成 16	(15)SK116	116	土坑	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SK117	117	土坑	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SK118	118	土坑	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SK119	119	土坑	縄文	M34－67	
(15)	平成 16	(15)SK120	120	土坑	縄文	M34－67	
(15)	平成 16	(15)SK121	121	土坑	縄文	M34－67	
(15)	平成 16	(15)SK122	122	土坑	縄文	M34－77･78	
(15)	平成 16	(15)SK123	123	土坑	縄文	M34－78	
(15)	平成 16	(15)SK124	124	土坑	縄文	M34－87	
(15)	平成 16	(15)SK125	125	土坑	縄文	M34－85･86	
(15)	平成 16	(15)SK126	126	土坑	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SK136	136	土坑	縄文	M34－66	
(15)	平成 16	(15)SK137	137	土坑	縄文	M34－75･76	
(15)	平成 16	(15)SK138	138	土坑	縄文	M34－85	
(15)	平成 16	(15)SK139	139	土坑	縄文	M34－95	
(15)	平成 16	(15)SK140	140	土坑	縄文	M34－95	
(15)	平成 16	(15)SK141	141	土坑	縄文	M35－06	
(15)	平成 16	(15)SK144	144	土坑	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SK145	145	土坑	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SK146	146	土坑	縄文	M34－68	
(15)	平成 16	(15)SK147	147	土坑	縄文	M34－78	
(15)	平成 16	(15)SK148	148	土坑	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SK149	149	土坑	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SK150	150	土坑	縄文	M34－75	
(15)	平成 16	(15)SK151	151	土坑	縄文	N34－80	
(15)	平成 16	(15)SK152	152	土坑	縄文	M34－67･68	
(15)	平成 16	(15)SK153	153	土坑	縄文	M34－97･98	
(15)	平成 16	(15)SH163	P13	ピット	縄文	M34－66	
(15)	平成 16	(15)SH164	P14	ピット	縄文	M34－66･76	
(15)	平成 16	(15)SH165	P15	ピット	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SH166	P16	ピット	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SH167	P17	ピット	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SH168	P18	ピット	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SH169	P19	ピット	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SH170	P20	ピット	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SH171	P21	ピット	縄文	M34－75	
(15)	平成 16	(15)SH172	P22	ピット	縄文	M34－67	
(15)	平成 16	(15)SH173	P23	ピット	縄文	M34－67	
(15)	平成 16	(15)SH174	P24	ピット	縄文	M34－68	
(15)	平成 16	(15)SH175	P25	ピット	縄文	M34－68	
(15)	平成 16	(15)SH176	P26	ピット	縄文	M34－68	
(15)	平成 16	(15)SH177	P27	ピット	縄文	M34－69	
(15)	平成 16	(15)SH178	P28	ピット	縄文	M34－69	
(15)	平成 16	(15)SH179	P29	ピット	縄文	M34－69	
(15)	平成 16	(15)SH180	P30	ピット	縄文	M34－78	
(15)	平成 16	(15)SH181	P31	ピット	縄文	M34－78	
(15)	平成 16	(15)SH182	P32	ピット	縄文	M34－78	
(15)	平成 16	(15)SH183	P33	ピット	縄文	M34－78	
(15)	平成 16	(15)SH184	P34	ピット	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SH185	P35	ピット	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SH186	P36	ピット	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SH187	P37	ピット	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SH188	P38	ピット	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SH189	P39	ピット	縄文	M34－77	
(15)	平成 16	(15)SH190	P40	ピット	縄文	M34－76	
(15)	平成 16	(15)SH191	P41	ピット	縄文	M34－85	
(15)	平成 16	(15)SH192	P42	ピット	縄文	M34－95	
(15)	平成 16	(15)SH193	P43	ピット	縄文	M34－78	
(15)	平成 16	(15)SH194	P44	ピット	縄文	M34－79	
(15)	平成 16	(15)SH195	P45	ピット	縄文	M34－87	
(15)	平成 16	(15)SH196	P46	ピット	縄文	M34－98	
(15)	平成 16	(15)SH197	P47	ピット	縄文	M34－89	
(15)	平成 16	(15)SH198	P48	ピット	縄文	M34－99	
(15)	平成 16	(15)SD201	201	溝状遺構	中・近世	M33－85･86･95･96、M34－04･05･14･15･24･25･34･35･44･54	
(15)	平成 16	(15)SD202	202	溝状遺構	中・近世	M33－85･95	
(15)	平成 16	(15)SD203	203	溝状遺構	中・近世	L33－87･97･98、L34－07･08･18･28･38･48･58･68･78･88･98、L35－08	
(16)	平成 16	(16)SD001	001	溝状遺構	中・近世	P39－37･47･57･67･77	
(17)	平成 17	(17)SD001	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	P39－22･23･32･33･42･43･52･53･62･63	
(17)	平成 17	(17)SD002	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	P39－54･64･74	
(19)	平成 18	(19)SI001	001	竪穴住居跡	縄文	M32－72･73･82･83	
(19)	平成 18	(19)SI002	002	竪穴住居跡	縄文	M32－73･74･83･84	
(19)	平成 18	(19)SI003	003	竪穴住居跡	縄文	M32－82･83･92･93	
(19)	平成 18	(19)SI004	004	竪穴住居跡	縄文	M32－83･92～94	
(19)	平成 18	(19)SK005	005	土坑	縄文	M32－93	
(19)	平成 18	(19)SK006	006	土坑	縄文	M32－93	
(19)	平成 18	(19)SK007	007	土坑	縄文	M32－83･93	
(19)	平成 18	(19)SK008	008	土坑	縄文	M32－83	
(19)	平成 18	(19)SD001	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	M32－73･83･84	
(19)	平成 18	(19)SD002	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	M32－33･43	
(19)	平成 18	(19)SD003	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	M32－30･40	
(21)	平成 18	(21)SI001	001	竪穴住居跡	縄文	P37－11･12･21･22･31･32	
(21)	平成 18	(21)SI003	003	竪穴住居跡	縄文	N37－16･17･26･27	
(21)	平成 18	(21)SK002	002	土坑	縄文	O37－12･13	

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時代	位置（グリッド）	備　考
(21)	平成 18	(21)SK004	004	土坑	縄文	O37－02･03･12･13	
(21)	平成 18	(21)SK005	005	土坑	縄文	O37－02･12	
(21)	平成 18	(21)SK006	006	陥穴	縄文	O37－02･03	
(21)	平成 18	(21)SX001	(番号無し)	土塁	中・近世	N37－18･19･27～29･37～39･47～49･57～59･67～69･77･78、O36－85～89･93～99、O37－00～09･10～17･20～22･26～28･37～39･47～48、P36－90	グリッドはおおよその範囲
(21)	平成 18	(21)SD001	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	O36－87･92～97、O37－02･03	
(21)	平成 18	(21)SD002	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	O37－03～07･11～13	
(21)	平成 18	(21)SD003	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	O37－18	
(21)	平成 18	(21)SD004	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	O37－19	
(22)	平成 18	(22)SK001	001	土坑	縄文	L32－89	
(22)	平成 18	(22)SK002	002	土坑	縄文	L32－87	
(22)	平成 18	(22)SK003	003	土坑	中・近世	M32－80･90	
(22)	平成 18	(22)SK004	(番号無し)	土坑	中・近世	L33－07･17	
(24)	平成 20	(24)SD001	001	溝状遺構	中・近世	J38－75～79･84～88･96、K38－70･71	
(25)	平成 20	(25)SX011	SK011	台地整形区画	中・近世	K37－65･75･76･85･86	
(25)	平成 20	(25)SK008	SK008	方形竪穴遺構	中世	K37－54･55･64･65	
(25)	平成 20	(25)SK001	SK001	地下式坑	中世	J38－14･24	
(25)	平成 20	(25)SK003	SK003	地下式坑	中世	J38－13･14･23･24	
(25)	平成 20	(25)SK007	SK007	地下式坑	中世	K37－74･84	
(25)	平成 20	(25)SK002	SK002	土坑	中世	J38－15･25	
(25)	平成 20	(25)SK004	SK004	土坑	中・近世	J37－92･93	
(25)	平成 20	(25)SK005	SK005	土坑	中・近世	J37－91･92	
(25)	平成 20	(25)SK006	SK006	土坑	中・近世	J37－83･84･93	
(25)	平成 20	(25)SK009	SK009	土坑	中・近世	K37－75･76	
(25)	平成 20	(25)SK010	SK010	土坑	中・近世	K37－56	
(25)	平成 20	(25)SX001	SX001	柱穴群	中・近世	K37－36･45･46･55･56･67	
(25)	平成 20	(25)SD001	SD001	溝状遺構	中・近世	J37－81･91、J38－01･02･11～15	
(25)	平成 20	(25)SD002	SD002	溝状遺構	中・近世	J37－60･70･80･81･91、J38－01･11･21･22･31･32･42	(30)SD002 と同一
(25)	平成 20	(25)SD003	SD003	溝状遺構	中・近世	J37－80～84･90～92	(30)SD001 と同一
(26)	平成 20	(26)SI001	SI-001	竪穴住居跡	奈良・平安	O33－16･25･26･35･36	
(26)	平成 20	(26)SI002	SI-002	竪穴住居跡	奈良・平安	O33－38･39･48･49	
(26)	平成 20	(26)SK001	SK-001	土坑	縄文	O33－38	
(27)	平成 20	(27)SK001	SK001	土坑？	近世	K34－62	未掘
(27)	平成 20	(27)SK002	SK002	土坑？	近世	K34－53	未掘
(27)	平成 20	(27)SX001	SX001	井戸？	近世	K34－42･52	未掘
(27)	平成 20	(27)SD001	SD001	溝状遺構？	近世	K34－44･52～54	未掘
(27)	平成 20	(27)SH001	(番号無し)	ピット	近世	K34－53･54	
(27)	平成 20	(27)SH002	(番号無し)	ピット	近世	K34－54	
(27)	平成 20	(27)SH003	(番号無し)	ピット	近世	K34－54	
(27)	平成 20	(27)SH004	(番号無し)	ピット？	近世	K34－54	未掘
(29)	平成 22	(29)SD001	SD-001	溝状遺構	中・近世	P38－40･41･50･51･60･61	
(30)	平成 22	(30)SK001	SK-001	土坑	中・近世	J38－40･50	
(30)	平成 22	(30)SK002	SK-002	土坑	中・近世	J38－40･41	
(30)	平成 22	(30)SK003	SK-003	土坑	中・近世	J38－30･31･40･41	
(30)	平成 22	(30)SK004	SK-004	土坑	中・近世	J38－10･20	
(30)	平成 22	(30)SK005	SK-005	土坑	中・近世	J38－10	
(30)	平成 22	(30)SK006	SK-006	土坑	中・近世	J38－10	
(30)	平成 22	(30)SK008	SK-008	土坑	中・近世	I37－89、J37－80	
(30)	平成 22	(30)SK012	SK-012	土坑	中・近世	I37－98	
(30)	平成 22	(30)SK013	SK-013	土坑	中・近世	I37－79･89	
(30)	平成 22	(30)SK014	SK-014	土坑	中・近世	I37－57･58	
(30)	平成 22	(30)SK015	SK-015	土坑	中・近世	I37－19･29、J37－10･20	
(30)	平成 22	(30)SD001	SD-001	溝状遺構	中・近世	I37－97～99、I38－07･08、J37－90	(25)SD003 と同一
(30)	平成 22	(30)SD002	SD-002	溝状遺構	中・近世	I37－67～69･78･79	(25)SD002 と同一
(30)	平成 22	(30)SD003	SD-003	溝状遺構	中・近世	I37－18･19･26～29、J37－10･11･21	(34)SD001 と同一？
(30)	平成 22	(30)SK007	SK-007	土坑？	中・近世？	I39－29	詳細記録無し
(30)	平成 22	(30)SK009	SK-009	土坑？	中・近世？	I39－29	詳細記録無し
(30)	平成 22	(30)SK010	SK-010	土坑？	中・近世？	I38－19	詳細記録無し
(30)	平成 22	(30)SK011	SK-011	土坑？	中・近世？	I38－19	詳細記録無し
(31)	平成 23	(31)SB001	SB-01	礎石建物跡？	近世	O34－94～96、O35－04～06･14～16	
(34)	平成 28	(34)SI001	SI-001	竪穴住居跡	奈良・平安	H37－54･55･64･65	
(34)	平成 28	(34)SD001	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	I37－21～23･31･41･51	(30)SD003 と同一？
(34)	平成 28	(34)SD002	(番号無し)	溝状遺構	中・近世	H37－19･28･29･34～38、I37－10～13･20	
(35)	平成 29	(35)SK001	SK-001	土坑	縄文	O32－20･30	
(35)	平成 29	(35)SK002	SK-002	土坑	縄文	O32－20･30	
(35)	平成 29	(35)SK003	SK-003	土坑	縄文	N32－79、O32－70	
(35)	平成 29	(35)SK004	SK-004	土坑	縄文	N32－79	
(35)	平成 29	(35)SK005	SK-005	土坑	縄文	N32－79	
(35)	平成 29	(35)SK006	SK-006	土坑	縄文	N32－78･79	
(35)	平成 29	(35)SF001	SF-001	炉跡	縄文	N32－19	
(35)	平成 29	(35)SD001	SD-001	溝状遺構	中・近世	P32－40･41･51･52	

第３表　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	時　　代
1	後平井中通遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、奈良・平安、中・近世
2	西平井根郷遺跡	縄文、中世
3	西平井二階畑遺跡	縄文、中世
4	中中ノ台遺跡	平安、中・近世
5	思井堀ノ内遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後）、古墳（中）、奈良・平安、中・近世
6	西平井大崎遺跡	縄文
7	思井鷹の見遺跡	縄文（早・前）、古墳、近世
8	鰭ヶ崎塚の越遺跡 （三本松古墳）	古墳（後）
9	鰭ヶ崎塚の越台遺跡	古墳（後）
10	鰭ヶ崎貝塚	縄文（早・中・後）、平安
11	平和台遺跡	縄文（中）、古墳、平安、中・近世
12	大原神社遺跡	縄文（早）、古墳（後）、平安
13	宮本遺跡	縄文（早）、平安
14	前平井遺跡	縄文（前・中）、平安
15	前平井堀米遺跡	古墳（後）、奈良・平安
16	思井上ノ内遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後）、古墳、奈良・平安、中・近世
17	古間木山王第Ⅰ遺跡	縄文（前）、平安
18	古間木第Ⅰ塚	近世
19	古間木山王第Ⅱ遺跡	縄文、古墳（後）、奈良・平安
20	芝崎第２号墳遺跡	古墳
21	芝崎大囲遺跡	縄文（前・中）、古墳、平安
22	芝崎第１号墳遺跡	古墳
23	古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡	縄文（前・中）、平安
24	古間木芳賀殿第Ⅱ遺跡	縄文（後）、平安
25	加村台遺跡・旧本多藩陣屋跡	弥生（中）、古墳（後）、平安、近世
26	加町畑遺跡	縄文、古墳、奈良・平安
27	加若宮第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
28	加東割遺跡	縄文（前）、中・近世
29	中中屋敷遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、奈良・平安、中・近世
30	野々下西方遺跡	縄文（前・中）
31	野々下大屋敷遺跡	縄文（後）、平安
32	野々下山中遺跡	縄文（前）、平安
33	野々下貝塚	縄文（前・中・後・晩）
34	野々下根郷第Ⅰ遺跡	平安
35	野々下根郷第Ⅱ遺跡	縄文（後）、平安
36	野々下篠塚	縄文（後）、近世
37	古間木茱萸木谷遺跡	縄文（早・前・後）
38	古間木遠田遺跡	縄文（前）
39	加北谷津第Ⅱ遺跡 （北谷津古墳）	縄文、古墳、平安
40	加北谷津第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
41	加若宮第Ⅱ遺跡	縄文、平安
42	三輪野山八重塚Ⅱ遺跡	縄文（早）、平安
43	三輪野山八重塚	縄文、古墳、平安
44	三輪野山低地遺跡	縄文（後・晩）
45	三輪野山貝塚	旧石器、縄文（前・中・後・晩）
46	三輪野山八幡前遺跡	縄文、古墳、平安、近世
47	市野谷地蔵谷ッ遺跡	古墳（後）、平安
48	市野谷梶内第Ⅱ遺跡	縄文
49	市野谷梶内第Ⅰ遺跡	縄文（前・中）、古墳（中・後）
50	市野谷宮後遺跡	縄文
51	市野谷中島遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、奈良・平安、近世
52	市野谷向山遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、古墳（中・後）、平安、中・近世
53	三輪野山道六神遺跡	縄文、古墳、平安、中・近世
54	三輪野山宮前遺跡	縄文（前）、古墳（後）、平安、近世
55	三輪野山第Ⅲ遺跡	縄文、古墳（後）、平安、近世
56	三輪野山北浦遺跡	旧石器、縄文（前・後）、古墳、平安、近世
57	市野谷芋久保遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、中・近世
58	市野谷二反田遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、古墳（前・後）、奈良・平安、中・近世
59	市野谷立野遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、古墳（後）、近世
60	大久保遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、奈良、近世
61	市野谷入台遺跡	旧石器、縄文（前・中・後・晩）、古墳（前・中）、奈良、中・近世
62	市野谷宮尻遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、古墳（前・後）、奈良・平安
63	西初石五丁目遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、弥生、古墳（前）、奈良・平安、近世
64	三輪野山向原古墳	縄文（前）、弥生、古墳（前）
65	大畔西割遺跡	縄文（早・中）、古墳（後）、平安
66	大畔中ノ割遺跡	縄文（早・前・中）、平安
67	花輪城跡	中世
68	下花輪林下遺跡	縄文（後）、古墳（後）
69	下花輪荒井前遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後）、弥生、古墳、奈良・平安、中・近世
70	下花輪西山遺跡	縄文、古墳、中世

番号	遺　跡　名	時　　代
71	下花輪荒井遺跡	縄文（中・後）、平安、近世
72	上貝塚大門遺跡	縄文（前・後）、平安
73	桐ヶ谷浅間後遺跡	旧石器、縄文（前・後）、平安
74	大畔台遺跡	縄文（前）、古墳、中世
75	西初石桜窪遺跡	縄文（前・中・後）、近世
76	花山東遺跡	旧石器、縄文、奈良・平安
77	東初石六丁目第Ⅱ遺跡	旧石器、縄文（前・後）、平安
78	十太夫第Ⅰ遺跡	縄文（早・前・中・後）、平安、近世
79	東初石六丁目第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文（中・後・晩）、平安、近世
80	十太夫第Ⅲ遺跡	縄文（早・前・中・後・晩）、平安
81	諏訪神社遺跡	縄文（中）
82	駒木諏訪腰遺跡	縄文（前）
83	幸田貝塚	旧石器、縄文（前・中・後）、古墳
84	中芝遺跡	弥生（後）、古墳（前・中・後）
85	道六神遺跡	縄文（早・前・中・晩）、弥生（後）、古墳（後）、奈良・平安
86	木戸口（中金）遺跡	縄文（晩）、古墳（中）
87	中金杉台遺跡	縄文（後）
88	原の山遺跡	縄文（早・前）、弥生、古墳（中・後）、平安
89	殿平賀遺跡	縄文（後）
90	殿平賀向堀遺跡	縄文（中）
91	東平賀遺跡	旧石器、縄文（前・中・後）、中世
92	殿平賀向山遺跡	旧石器、縄文（早・前）、古墳（前・中・後）
93	東平賀向台遺跡	古墳
94	小金城跡 （大谷口小金城跡）	縄文、古墳、平安、中世
95	小金古墳群	古墳
96	西（小金）（北小金）遺跡	縄文（前・中・後）
97	境外Ⅱ遺跡	旧石器、縄文（前）
98	溜ノ上（溜の脇）遺跡	旧石器、縄文（早・前・中・後・晩）、古墳（前・中・後）
99	境外（北小金駅付近）（東漸寺）遺跡	縄文（前・後）
100	山王前遺跡	縄文（前・中）
101	熊ノ脇遺跡	縄文（早・前・中）
102	幸谷城跡	中世
103	観音下遺跡	縄文（後）
104	後田遺跡	縄文（中・後）、平安、近世
105	馬橋城跡	中世
106	上野台（二ッ木向台Ⅱ）遺跡	弥生（後）
107	二ッ木向台（二ッ木）（二ッ木第２）遺跡	縄文（早・前・後）、弥生（後）、古墳（後）
108	勢至前遺跡	縄文（早・前）、古墳（後）
109	入遺跡	縄文（前）
110	富士見台(Ⅰ）遺跡	
111	長崎天形星遺跡	縄文（中）、古墳（中・後）
112	富士見台（Ⅱ）遺跡	縄文（中・後）
113	長崎五斗代遺跡	縄文(中)
114	長崎塚群	近世
115	長崎五枚割遺跡	縄文（前・中）、平安
116	長崎遺跡	縄文（早・前・中・後）
117	長崎金乗院遺跡	古墳、平安
118	野々下長田遺跡	縄文（早・前・中・後）
119	野々下元木戸遺跡	縄文（中・後）、古墳（後）、平安
120	野々下土手内遺跡	縄文（中）
121	向下遺跡	縄文（中・後）、平安
122	前ヶ崎城跡	中世
123	前ヶ崎遺跡	縄文（前）
124	名都借城跡	中世
125	清滝院前遺跡	縄文（前）、平安、近世
126	笹原（Ⅰ）遺跡	縄文（中）、弥生、古墳
127	名都借笹堀込遺跡	縄文（前・中）、平安
128	名都借並木遺跡	縄文（中）、平安
129	名都借宮ノ脇遺跡	縄文（中）
130	笹原（Ⅱ）遺跡	縄文（中）
131	根木内城跡	中・近世
132	根木内遺跡	縄文（前・中・後）、中・近世
133	行人台遺跡・行人台城跡	縄文（早・前・中）、古墳（中・後）、中世
134	久保平賀（殿平賀向山）遺跡	古墳
135	久保平賀古墳	古墳
136	二ッ木溜台遺跡	縄文（前）
137	仲通遺跡	旧石器、縄文（前・中）、古墳（中）
138	流山廃寺遺跡	奈良
139	上貝塚貝塚	旧石器、縄文（前・中・後・晩）、中・近世
140	三輪野山野馬土手	近世
141	駒木野馬土手	近世
142	市野谷駒木野馬土手	近世
143	十太夫野馬土手	近世
144	大畔野馬土手	近世
145	市野谷・野々下野馬土手	近世
146	長崎一丁目野馬土手	近世
147	野々下野馬土手	近世

第２章　旧石器時代の遺構と遺物

第１節　概要（第17図）

後平井中通遺跡の所在する台地は、坂川により形成された沖積地を東に臨み、また凝灰質粘性土壌が地表面から浅い深度に位置する地点も多いことから、湧水点が多く、このため湧水点から坂川に流入する小河川により複雑に開析された舌状台地となる。

坂川は江戸川水系の一級河川であり、流山市内を流れる小河川の中でも水量・流域面積共に最大規模である。水源は流山市野々下二丁目付近とされるが、つくばエクスプレスおおたかの森駅付近にも水源を辿ることができる。この水源から南西に流下した川は、市野谷芋久保遺跡や市野谷宮後遺跡付近の湧水点からの小河川を取り込み、市野谷地蔵谷ツ遺跡、市野谷梶内第Ⅱ遺跡付近で流路を南に変える。現在の総合運動公園が所在する地点であり、後平井中通遺跡も右岸側の台地上に所在する。後平井中通遺跡から300ｍ程流下すると都市計画道路３・４・11号線（野々下思井線）が通る台地に遮られ、東に流路を変える。この台地の東端を巻き込むように再び南西に向きを変え、広大な沖積低地を形成し江戸川に合流する。

このように流山市の地形は小河川により複雑に形成されており、要因として第四紀更新世の急激な隆起が考えられる。標高の高い地点からの湧水は、同じく標高の高い地点に凝灰質粘性土が位置しているためであり、関東ローム層が形成される直前まで水成層が形成される環境であったことが窺える。埋蔵文化財調査においても、粘性土壌から第２黒色帯付近に属する文化層の石器群の検出例が多いことも肯定できる。

第２節　遺構と遺物

１　第１ブロック（第18・19図、図版25）

坂川に流入する小河川に開析された小支谷の最深部、標高20ｍの台地緩斜面部に位置する。黒曜石製とチャート製の剥片及び安山岩製の礫片３点で構成され、J37-32グリッドからJ37-42グリッドにかけて東西４ｍの範囲に遺物が集中する。出土層位は不明であるが、ローム層中の出土および出土標高から地表面から0.5ｍ～0.8ｍ程の深度であり、おそらくハードローム層上面の出土であろう。

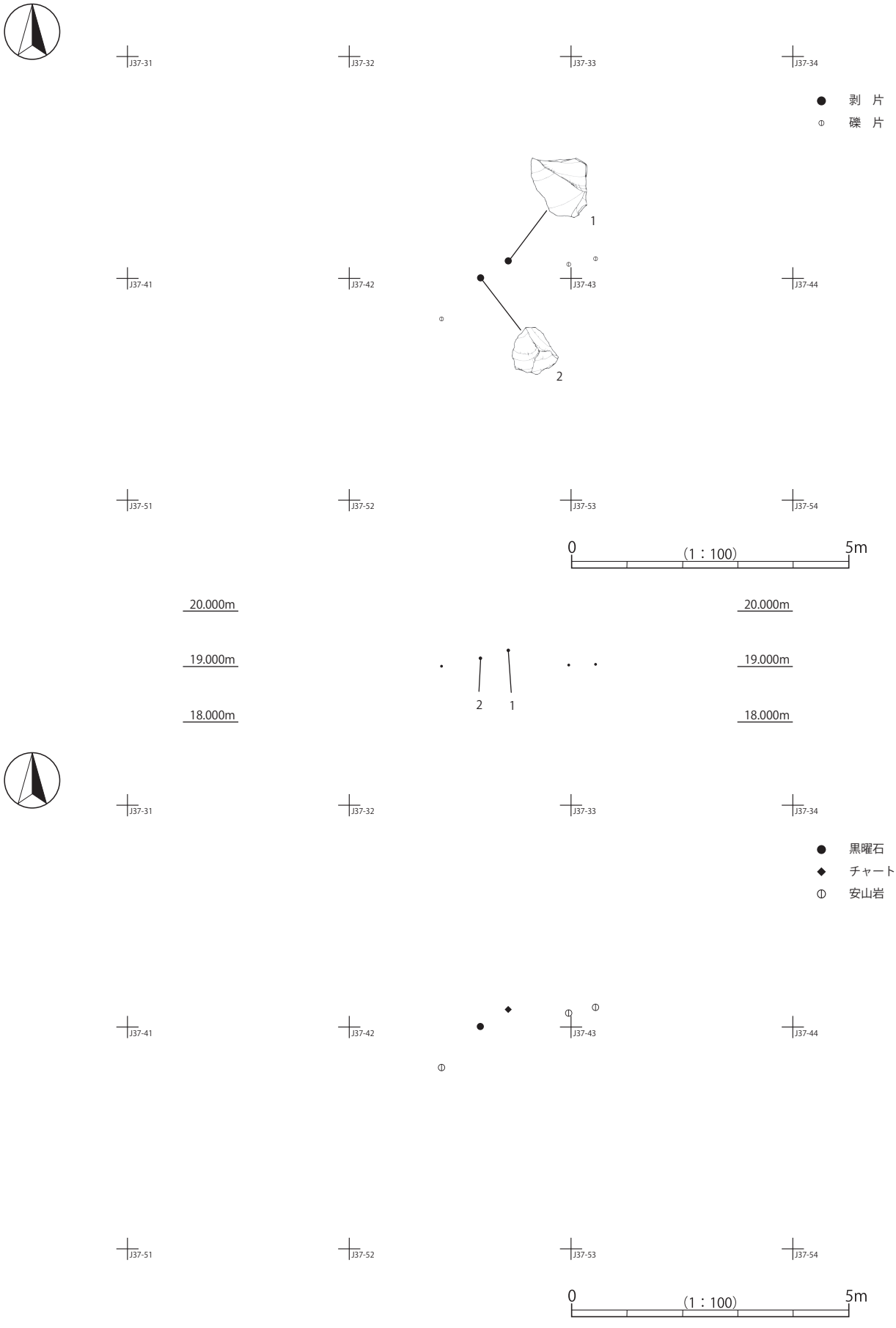
１は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。縦長剥片の中途で折断し、折断面に側縁部からの微細な調整が認められる。背面を構成する剥離の方向は腹面の剥離方向と一致し、縦長剥片の作出を意図していることが窺える。２はチャート製の剥片である。矮小な打面を有し、末端部付近に最大幅をもつ不定形剥片である。

２　第２ブロック（第20・21図、図版２・25）

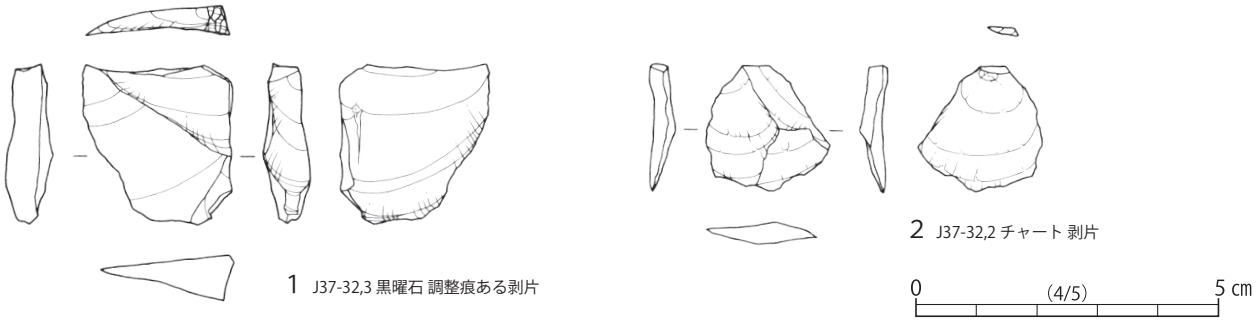
北に向かい緩やかに下る標高14ｍの台地緩斜面部に位置する。調整痕の認められる剥片１点、剥片２点、石核１点で構成される。L33-86・87グリッドにかけて散布し、出土標高は13.6ｍ～13.8ｍである。出土層位は不明であるが、ソフトローム層からハードローム層にかけての所属と考えられる。

１は流紋岩製の調整痕の認められる剥片である。打面に対し長軸が斜軸となる石刃状剥片で、背面を構成する剥離の方向は腹面の剥離方向と同一である。片側縁の背面側に微細な調整痕が認められ、一部打面に近い部位には使用による微細な剥落痕も認められる。２は黒色頁岩の石核である。立方体に近い形状で

第 17 図　旧石器時代ブロック分布全体図



第 18 図　第 1 ブロック器種別・石材別分布



第19図　第１ブロック出土遺物

あり、最終剥離面は上面を打面とし正面図側に剥片を作出した一連の剥離である。

３　第３ブロック（第22～26図、図版２・25～28）

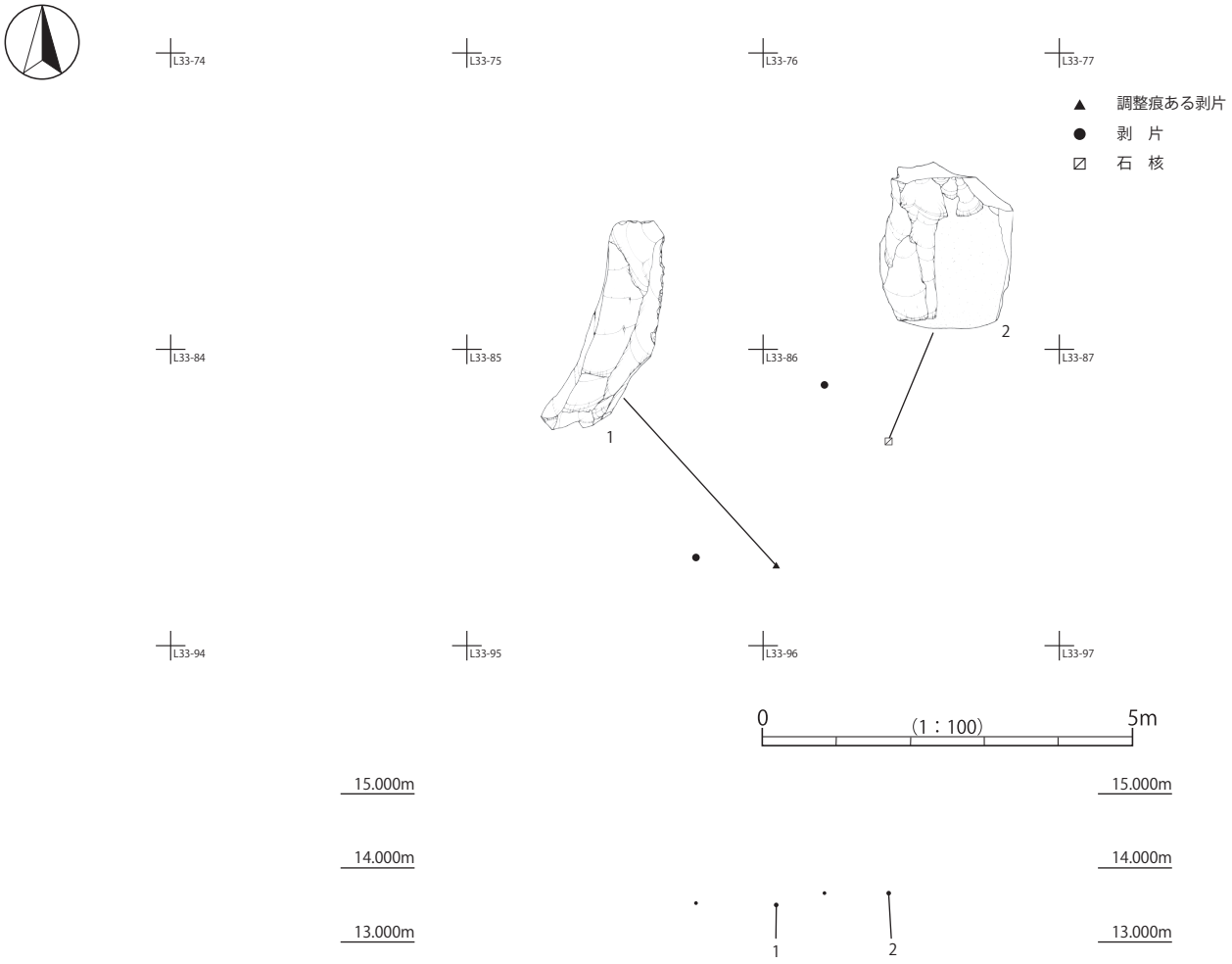
坂川に流入する小河川により開析された台地の平坦部に所在する。ブロックの北側には東西方向にわたる帯状の微高地が見られるが、ブロックを検出した地点の標高は微高地よりも１ｍほど下がる。立川ローム層の状況が不明瞭であるが、後世の削平により旧地形が大きく変えられていると考えられる。出土層位は不明であるが、出土標高が16m前後であることと削平された深度を鑑み、旧地表面から1.5m下に位置することが想定される。近隣の第４ブロックの立川ローム層の堆積状況と照合すると、Ⅸ層付近に対比できる。

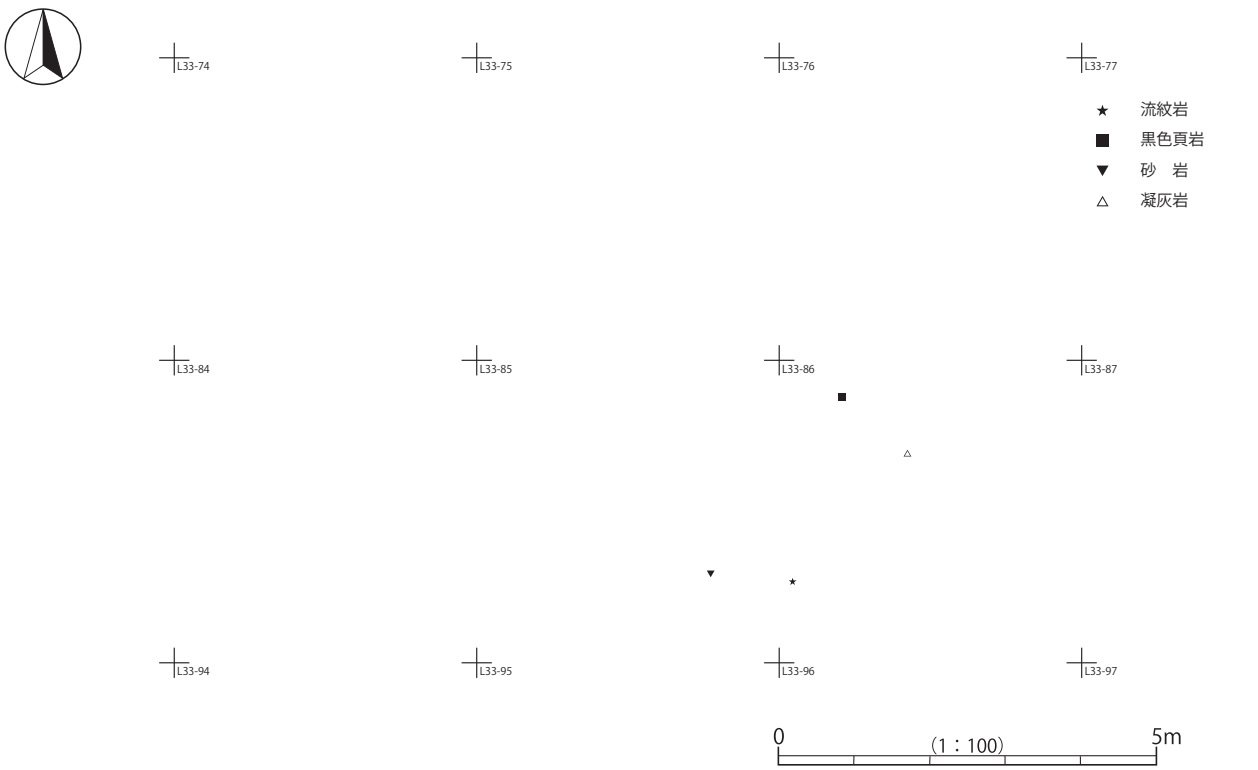
第３ブロックの石器組成は、定型的な石器は含まれず、調整痕の認められる剥片、剥片、石核で構成される。使用石材は黒曜石の剥片１点の他25点は黒色安山岩で占められる。O37-59グリッドを中心に集中区で直径３ｍ、分布範囲は長軸５ｍ程の楕円形状を呈する。

１は黒色安山岩製の調整痕の認められる剥片である。縦長剥片であるが、中途付近に最大幅をもち、片側縁側に極端に張り出す感のある形状である。調整は素材剥片の打面側に認められ、打面を除去するような微細な調整が背面側から施される。２は黒色安山岩製の大型の縦長剥片であり、打面部直下に最大幅を有する。全体に薄い作りであり、末端部は鋭く尖る。３・４は黒色安山岩製の不定形剥片であり、背面には原礫面が遺存する。５は黒曜石製の小型不定形剥片である。末端部はヒンジ・フラクチュアとなる。６は黒色安山岩製の石核である。円礫を素材とし、打面転移を行いながら剥片を作出している。剥離工程初期段階の剥離は裏面に見られる一連の剥離痕であり、次の段階でこの剥離を打面とし上面、正面右側からの剥片剥離を行っている。７・８は黒色安山岩製の接合資料である。７は剥片２点と打割した石核との接合例である。７－１・２の剥片は共に部厚な作りであり、原礫面を打面とし作出される。７－３の石核に見られる剥離痕からは部厚な大型剥片を作出している様子は看取できないことから、剥片剥離工程の初期段階に原礫打割の目的で作出された剥片と考えられる。８は剥片３点と石核の接合例である。８－１・２の剥片は背面に大きく原礫面を有し、１の作出後、打点を大きく移動し２を作出している。このため８－１・２は石核整形を目的として作出された剥片と考えられる。８－３は最終打面から作出された剥片であり、この剥片を作出後数回の剥片剥離の後作業を終了している。

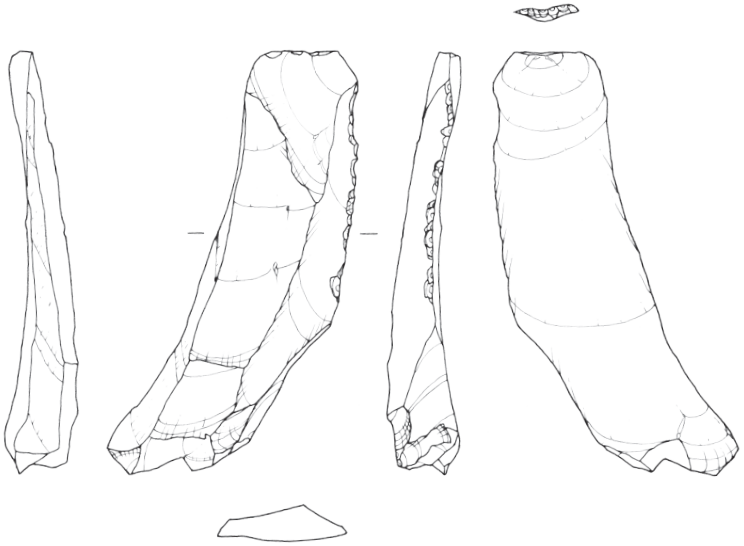
４　第４ブロック（第27～29図、図版28）

坂川に流入する小河川により開析された舌状台地の付け根付近、標高15m付近に所在する。M38-37グリッドからM38-47グリッドにかけて石器が点在し、特に集中区は形成しない。黒色安山岩、チャート、

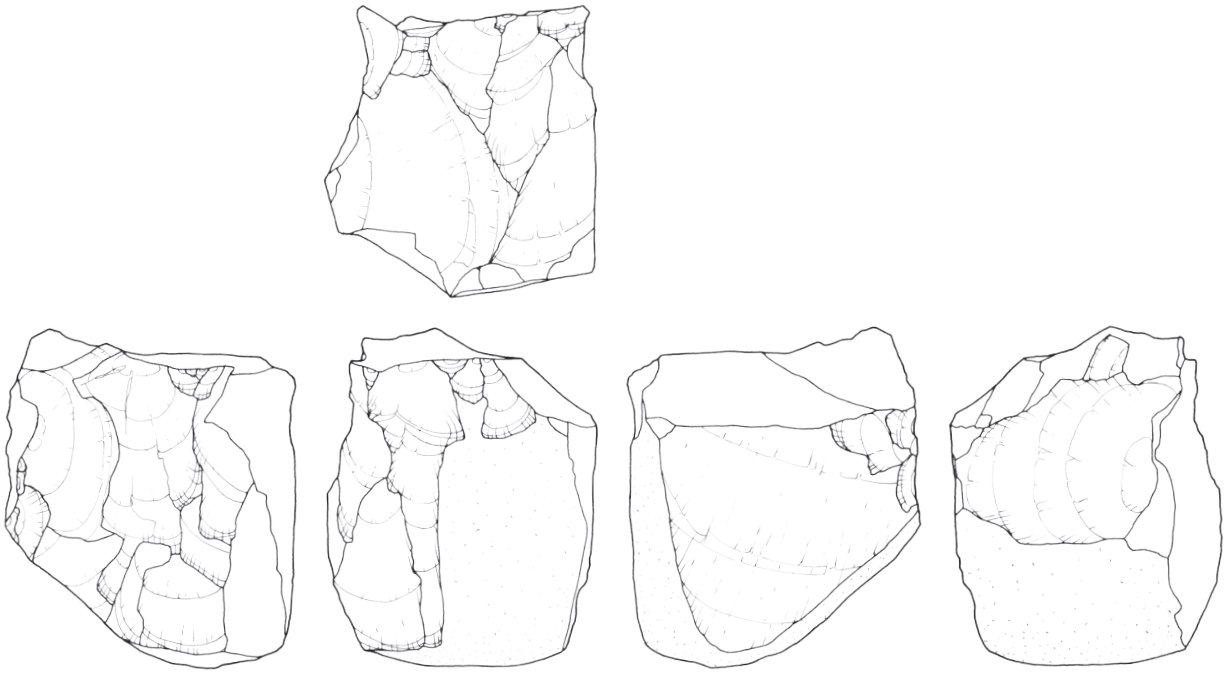




第 20 図　第 2 ブロック器種別・石材別分布



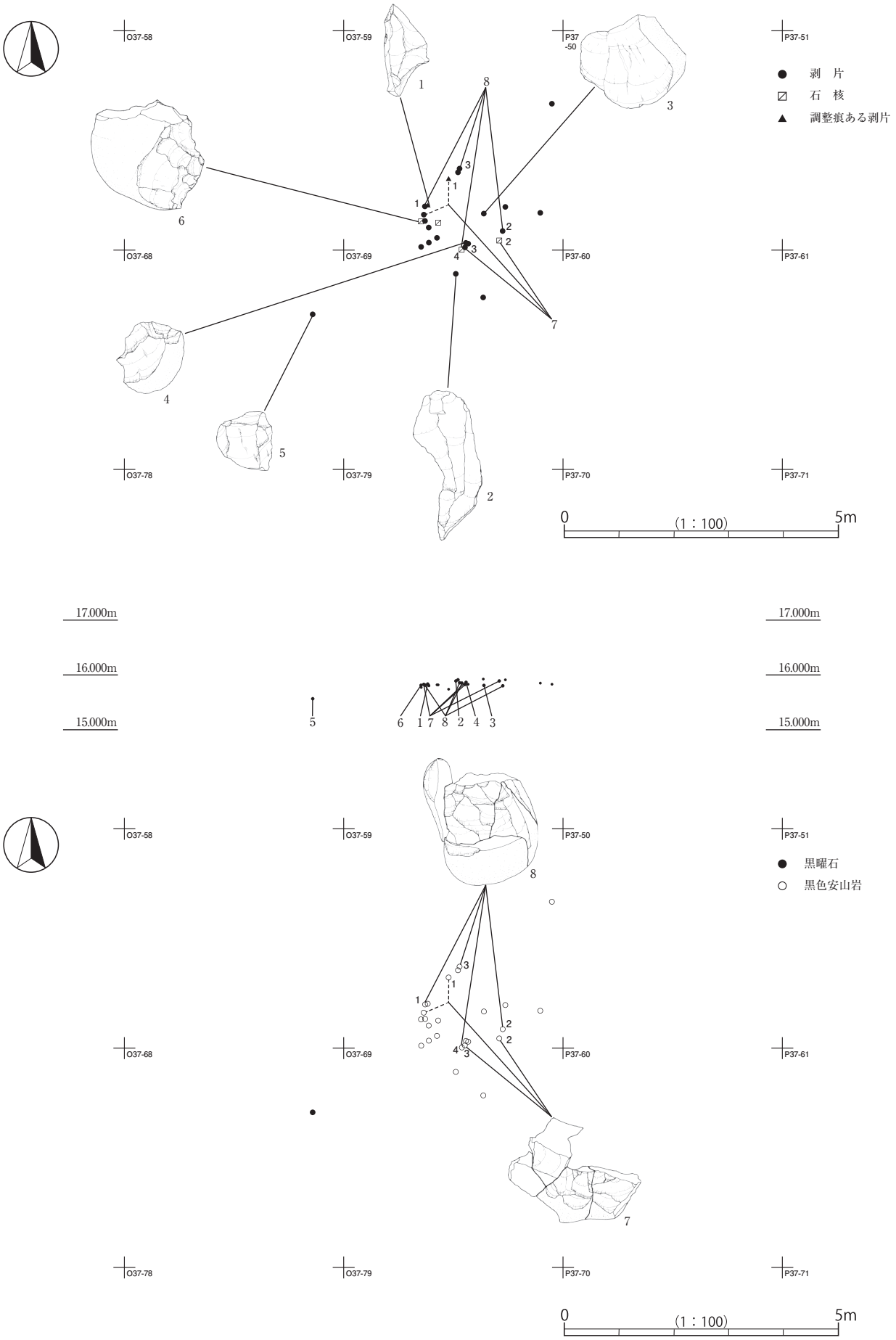
1 L33-86,1 流紋岩 調整痕ある剥片



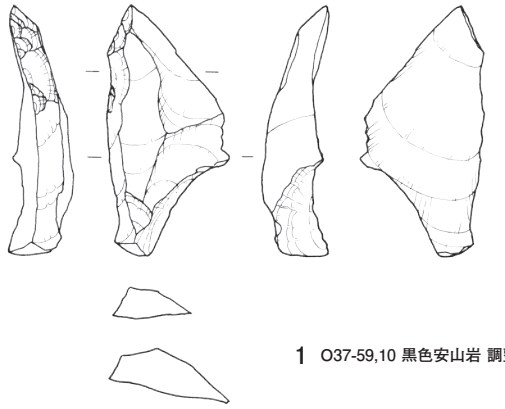
2 L33-86,4 黒色頁岩 石核

0 (4/5) 5 cm

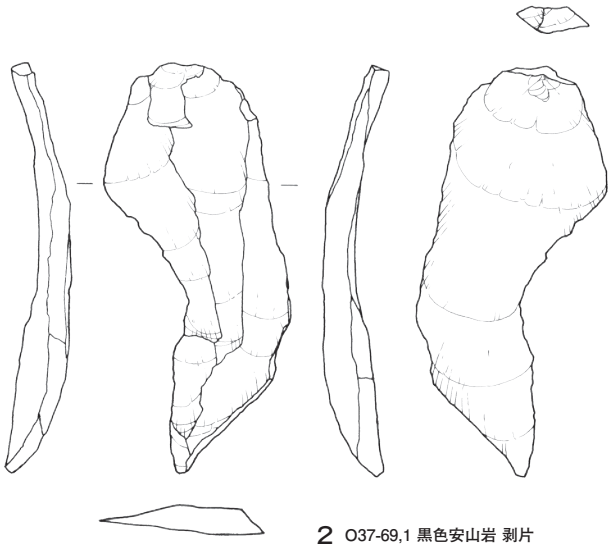
第 21 図　第 2 ブロック出土遺物



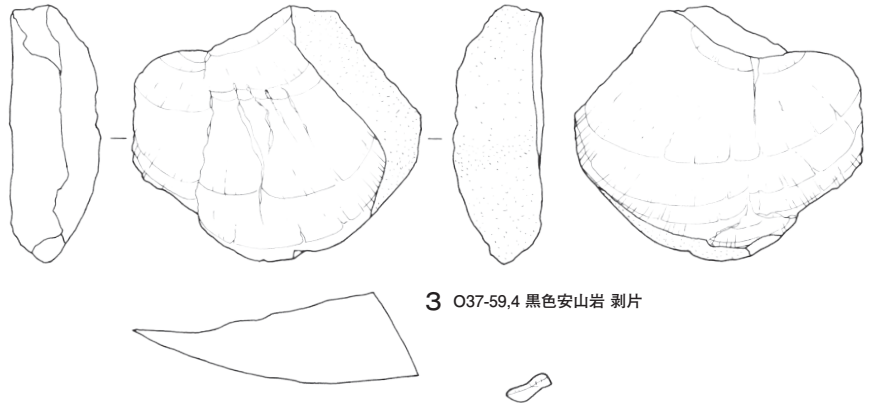
第 22 図　第 3 ブロック器種別・石材別分布



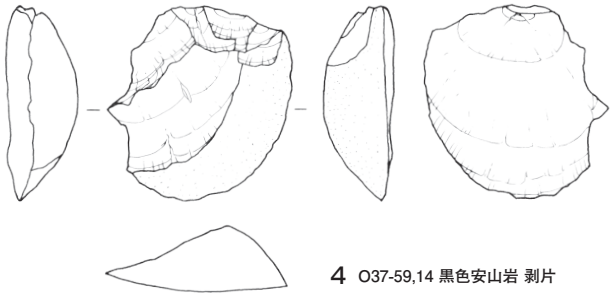
1 O37-59,10 黒色安山岩 調整痕ある剥片



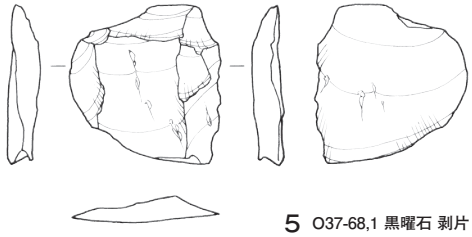
2 O37-69,1 黒色安山岩 剥片



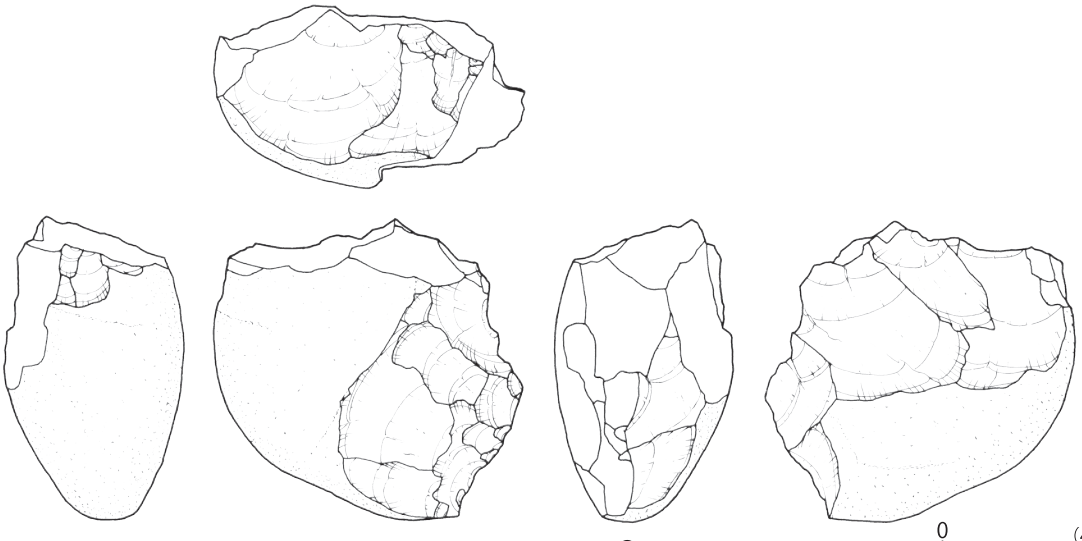
3 O37-59,4 黒色安山岩 剥片



4 O37-59,14 黒色安山岩 剥片



5 O37-68,1 黒曜石 剥片

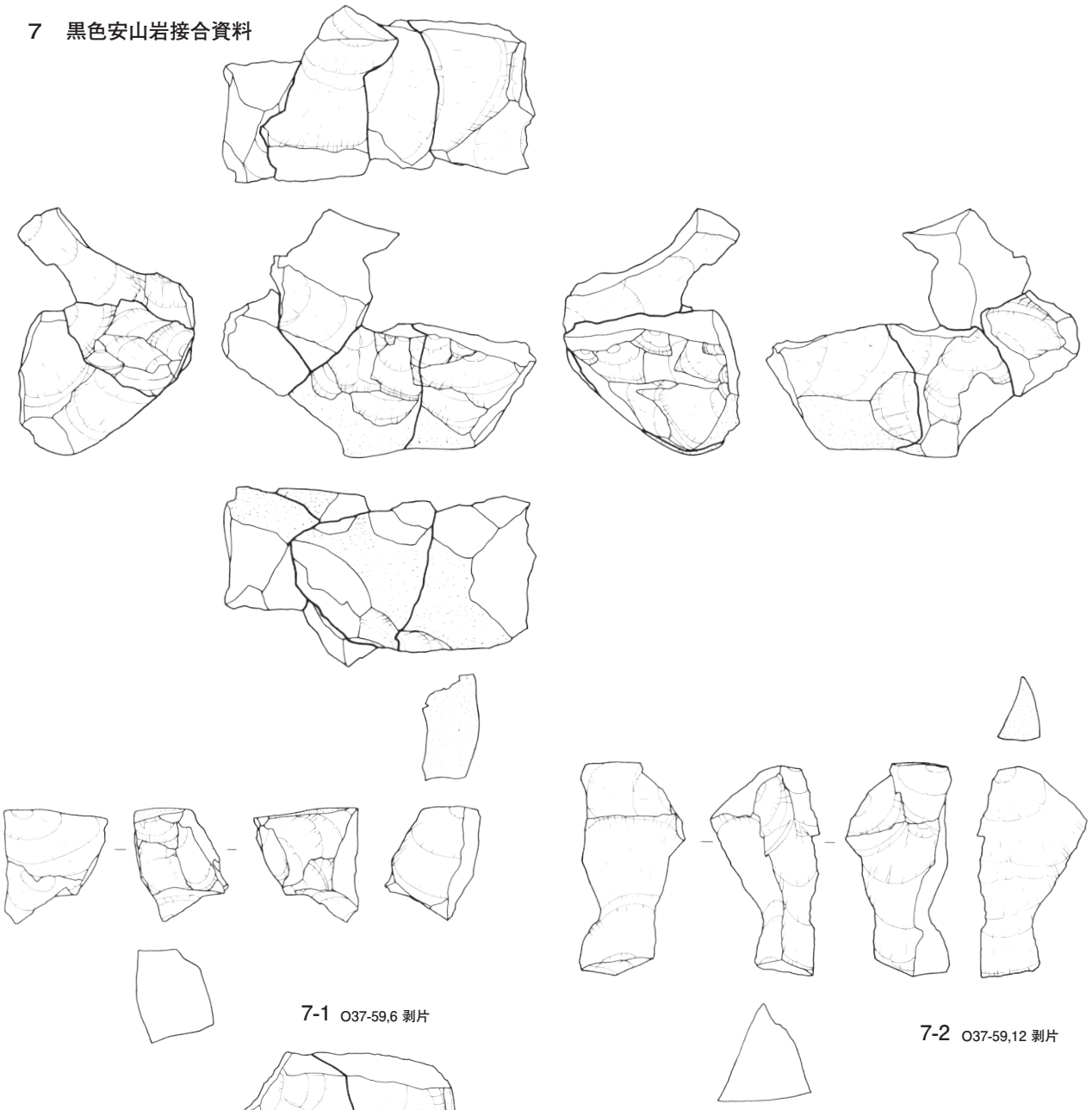


6 O37-59,11 黒色安山岩 石核

0 (4/5) 5 cm

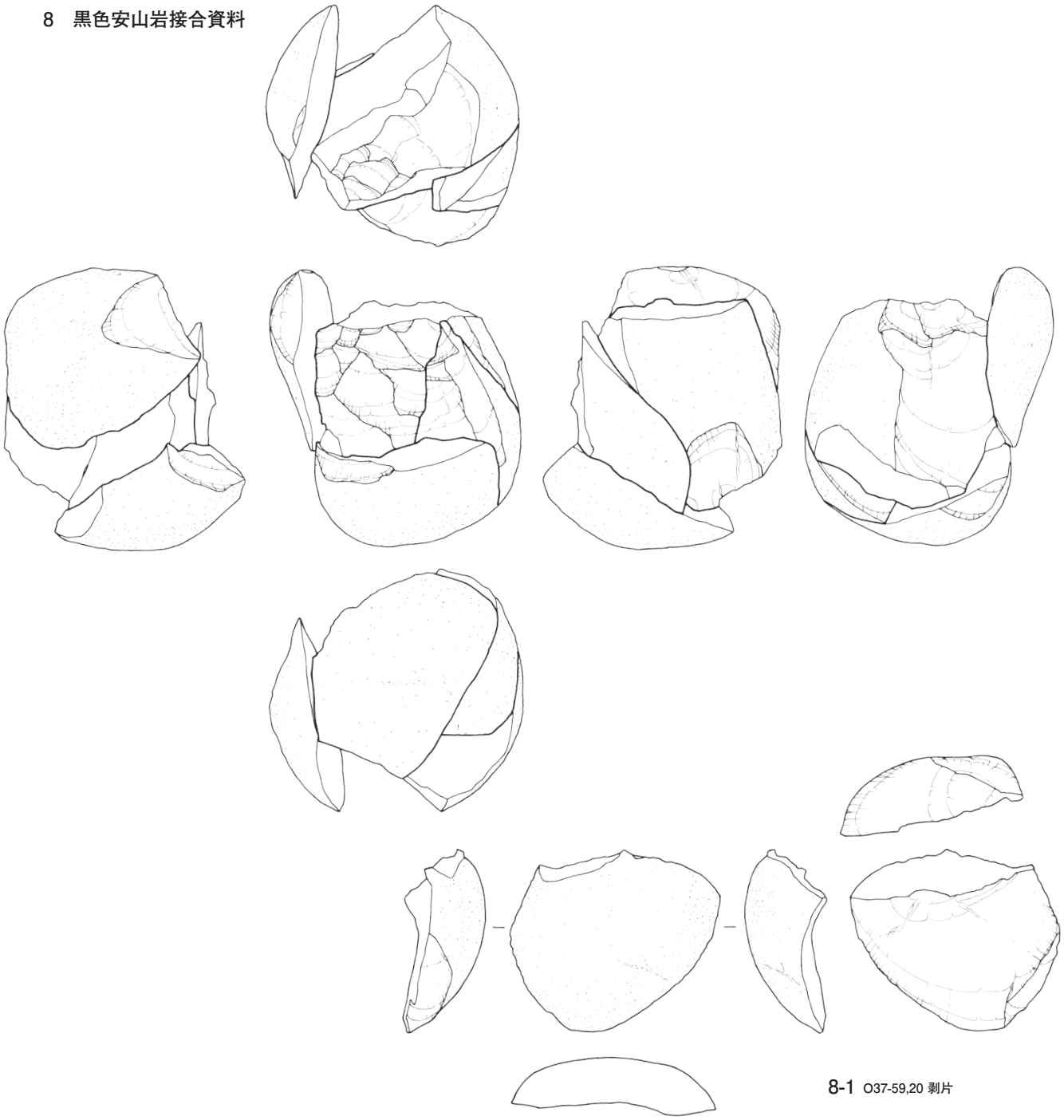
第 23 図　第 3 ブロック出土遺物（1）

7　黒色安山岩接合資料

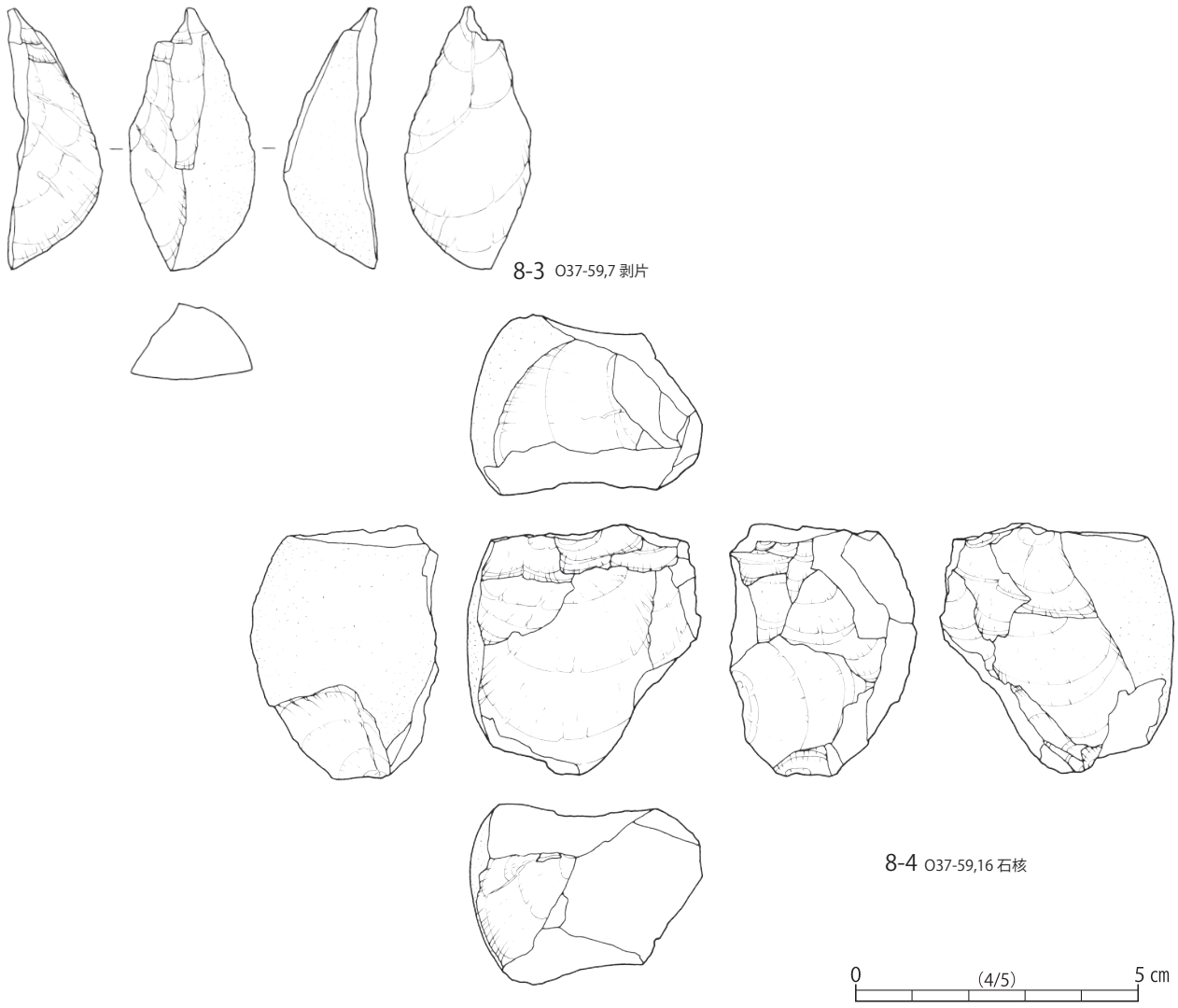


第 24 図　第 3 ブロック出土遺物（2）

8　黒色安山岩接合資料



第 25 図　第 3 ブロック出土遺物（3）

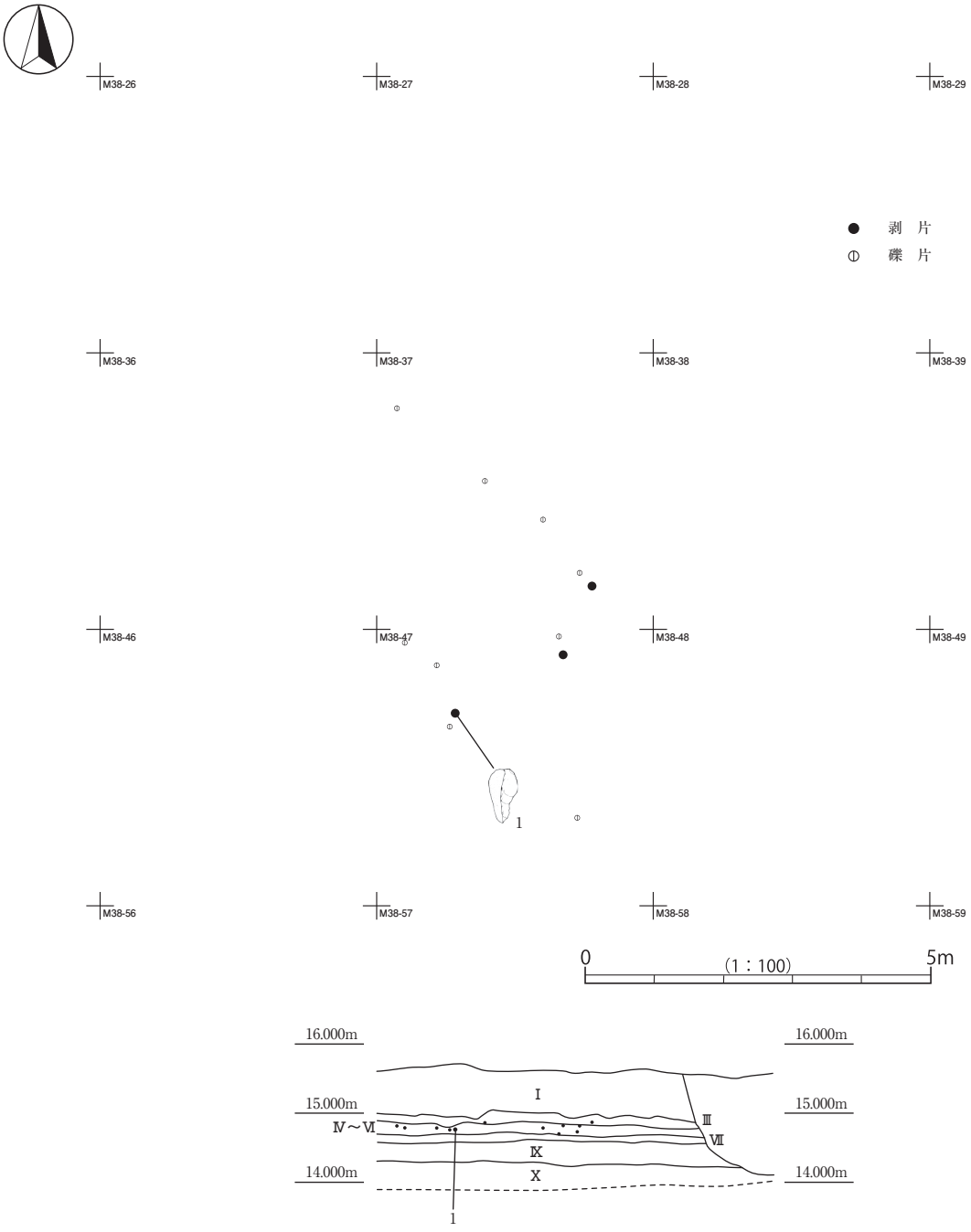


第 26 図　第３ブロック出土遺物（４）

凝灰岩の小型剥片の他、砂岩、安山岩等の破砕、礫で構成され、出土層位はⅢ層からⅥ層にかけてである。１は黒色安山岩製の剥片である。小型の縦長剥片であり、打面を広く設定し作出される。背面には原礫面が遺存する。

５　第５ブロック（第 30 ～ 36 図、図版２・28 ～ 31）

坂川に流入する小河川に開析された舌状台地に所在する。北側及び南東から進入する浅い谷の合流点であり、この地点の標高は14mを測る。分布域は南北13m、東西14mを測り、N33-42グリッド付近に１か所、N33-33グリッド付近に１か所、N33-53グリッド付近に１か所、N33-62グリッド付近に１か所の合計４か所の集中区が認められる。石器の出土点数は140点を数え、点数的、重量比的にも黒色頁岩が半数を占める。他の石材は黒色安山岩、安山岩（トロトロ石）、ホルンフェルス、チャート、頁岩が使用される。定型的な石器はナイフ形石器が挙げられ、黒色頁岩、黒色安山岩、安山岩（トロトロ石）製の個体が見られる。剥片石器の他、礫・礫片が共伴し、個体数、重量比でもチャート製の個体が主体となる。石器の出土層位はⅡｃ層～Ⅲ層とされた層からⅤ層にかけてである。標高差は0.45m、平均標高は13.532mとなり、ソフ



第 27 図　第 4 ブロック器種別分布

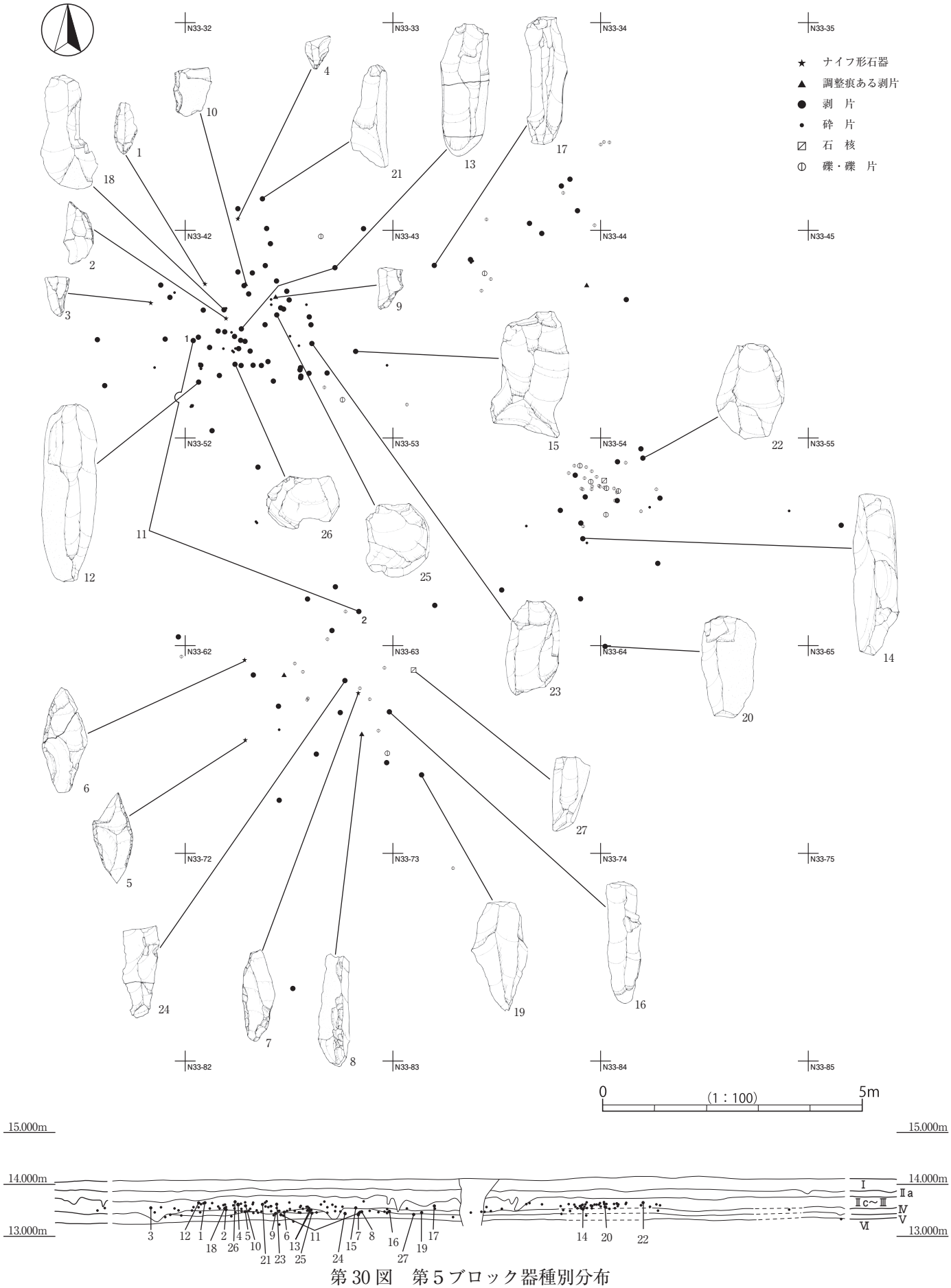
トローム層の下部に該当する。

１～７はナイフ形石器である。１～４は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とし、２以外のものは素材剥片の打面側を基部とし、素材剥片の打面を除去するように背腹両面に調整が施される。３・４は基部のみの遺存であるが、１と同様に片側縁のほぼ全域に調整が施されたものと考えられる。２の調整は片側縁の先端部から中途で終了しており、形状も同石材の他のナイフ形石器とは異なる。５・６は黒色安山岩製のナイフ形石器である。前述した黒色頁岩製のナイフ形石器と比較すると大型であることが指摘できる。５については両側縁に対して調整が施されるが、腹面への調整は皆無である。６は縦長剥片を素材とし、二側縁

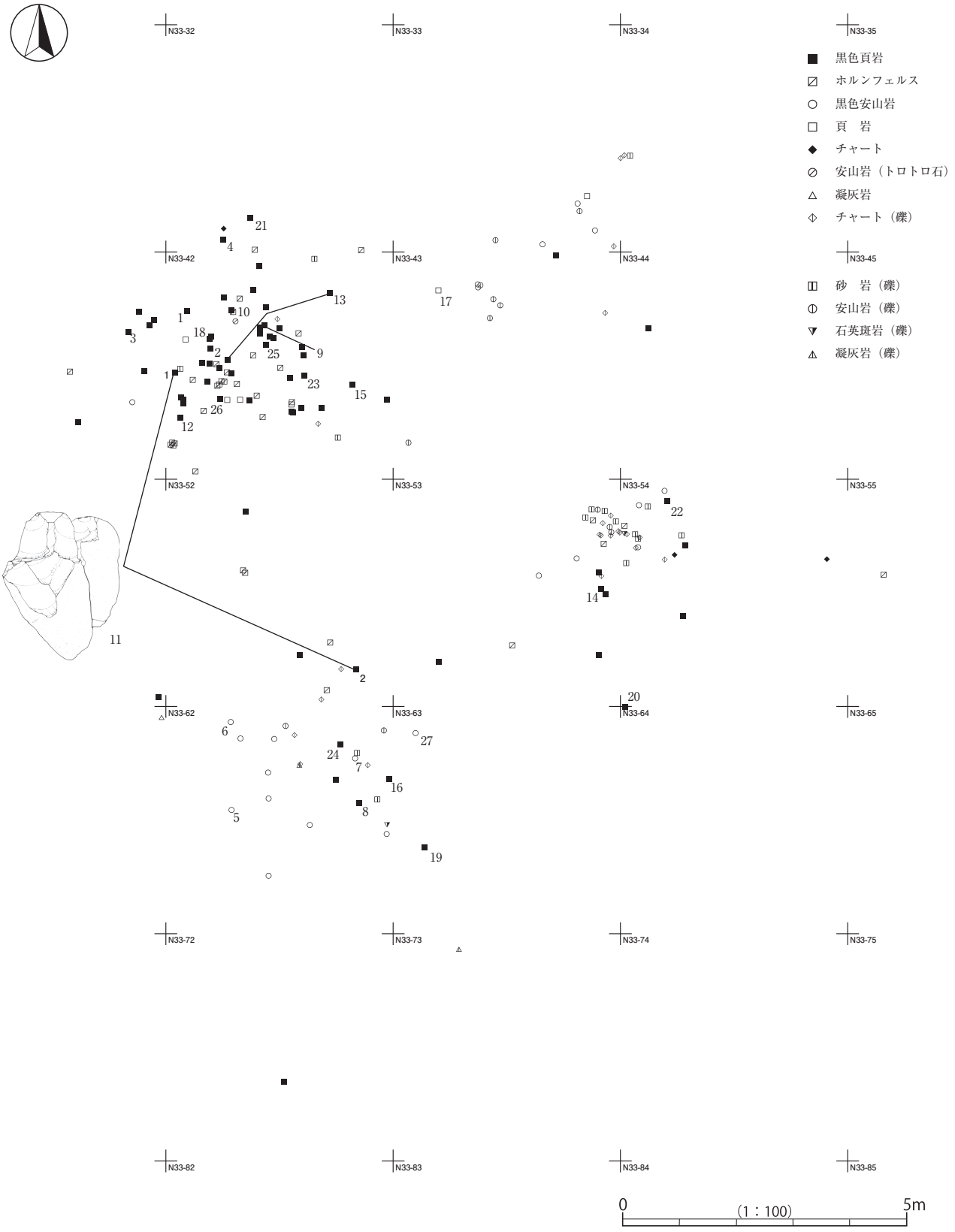
第 28 図　第４ブロック石材別分布

第 29 図　第４ブロック出土遺物

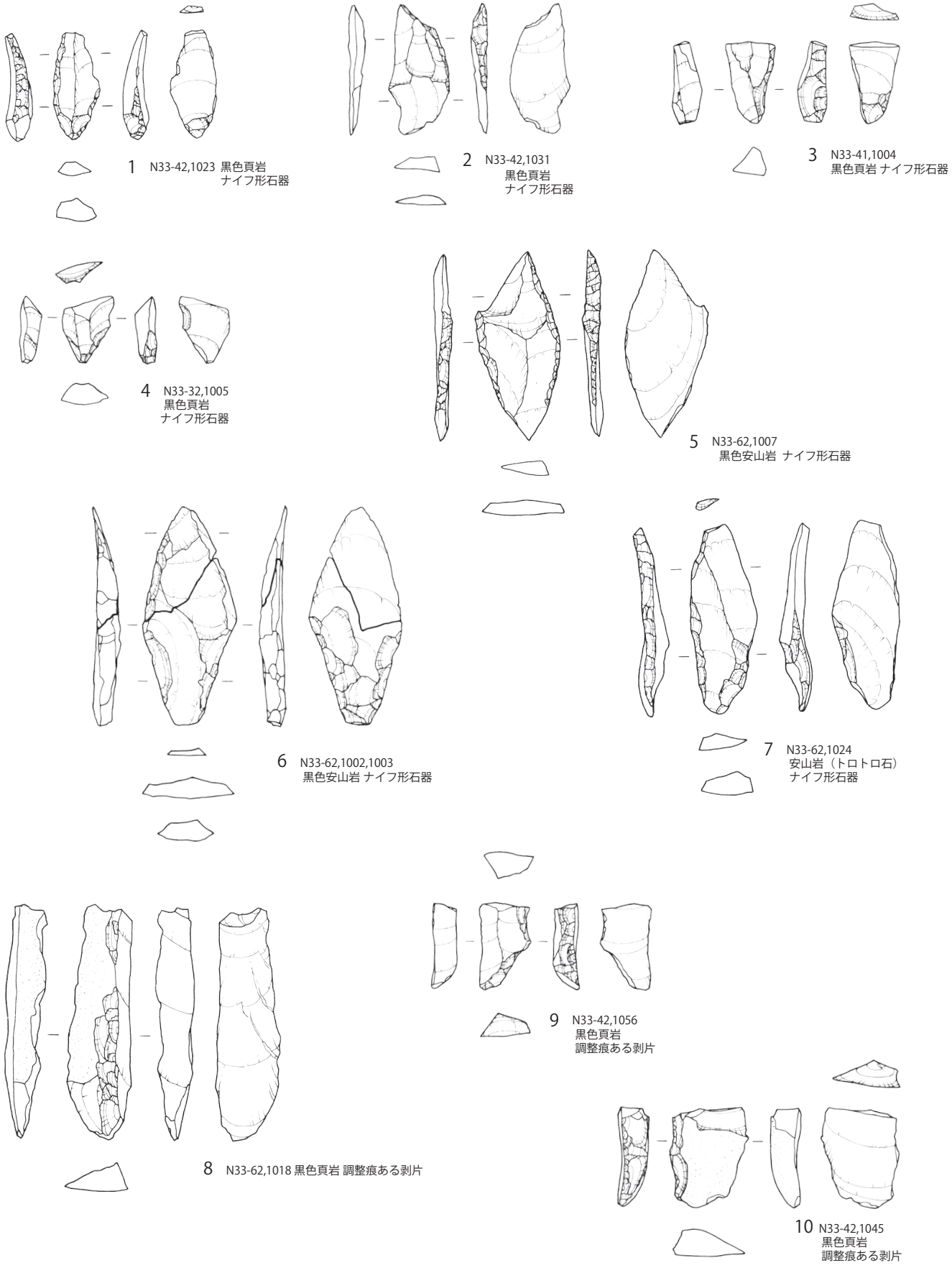
及び腹面基部付近には緻密な調整が施される。７は安山岩（トロトロ石）製の縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面を背面側からの調整により除去している。調整は２側縁に対して施されるが、腹面側の調整は見られない。８～10は黒色頁岩製の調整痕の認められる剥片である。８は縦長剥片の背面稜部位に対し、調整が密に施される。９・10は縦長剥片の片側縁に腹面側からの調整が密に施される。両者とも剥片の打面側が欠損しており、この部位の調整は不明であるが、ナイフ形石器の作出を意図している可能性も考えられる。11は黒色頁岩製の剥片２点の接合資料である。部厚な大型剥片の接合例であり、各々の打面は石核に対して同方向であるが剥離工程を異にし、11－１の剥片を作出後に打面再生が行われ、11－２を作出している。12～26は黒色頁岩製の剥片である。一様に縦長剥片であり、背面構成も腹面の剥離の方向とほぼ同一方向の剥離である。縦長剥片の連続的な作出を意図していることが顕著に



第 30 図　第 5 ブロック器種別分布

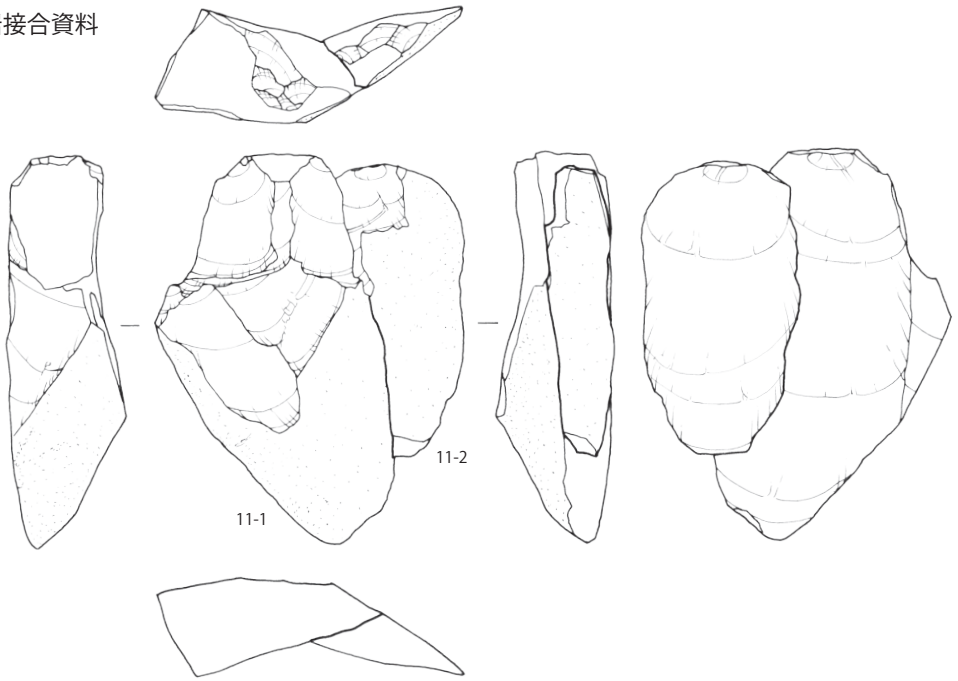


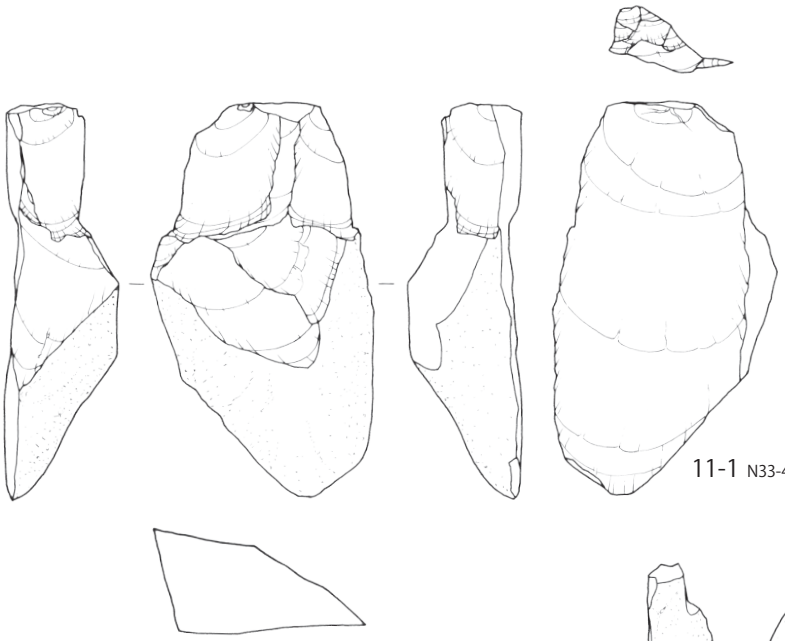
第 31 図　第５ブロック石材別分布

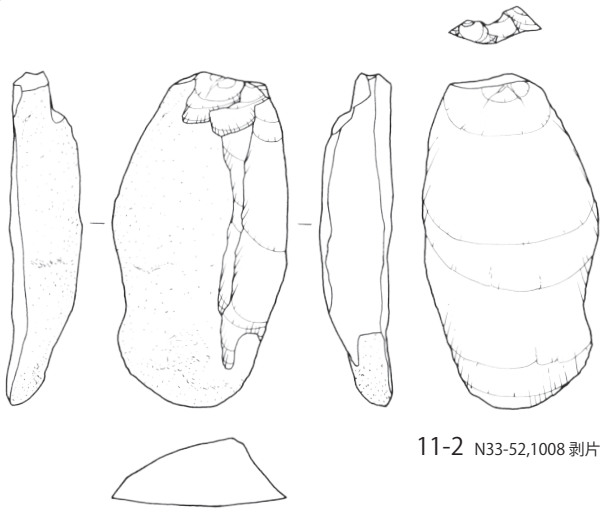


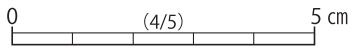
第 32 図　第 5 ブロック出土遺物（1）

11　黒色頁岩接合資料

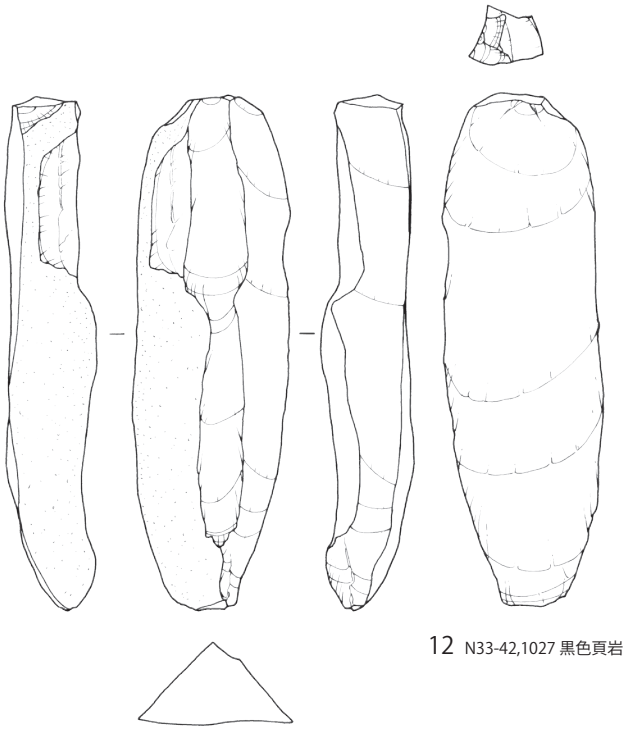




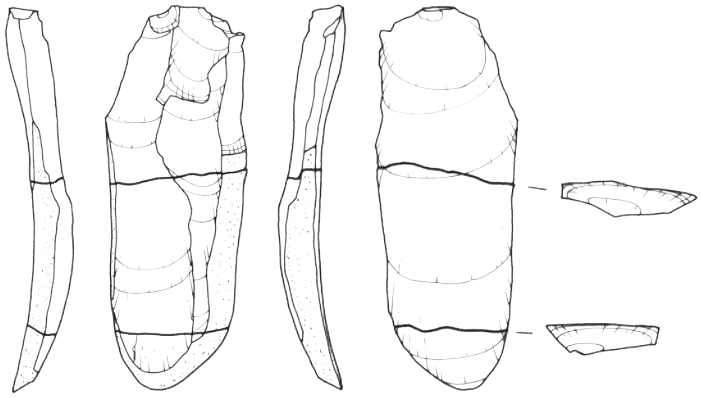




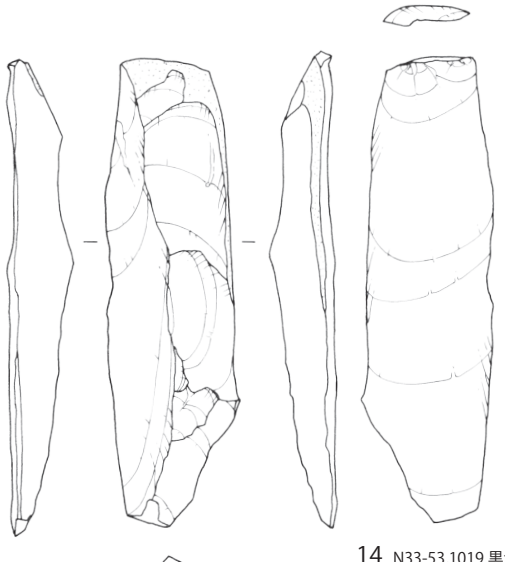
第 33 図　第 5 ブロック出土遺物（2）



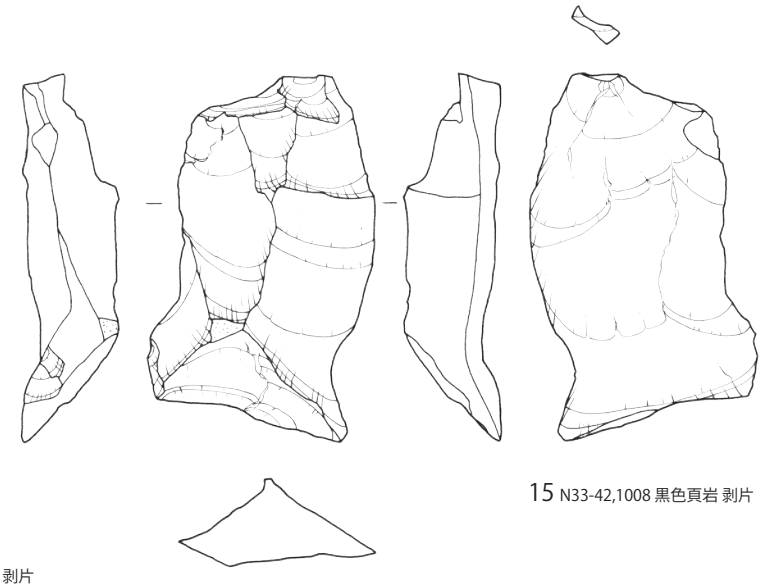
12 N33-42,1027 黒色頁岩 剥片



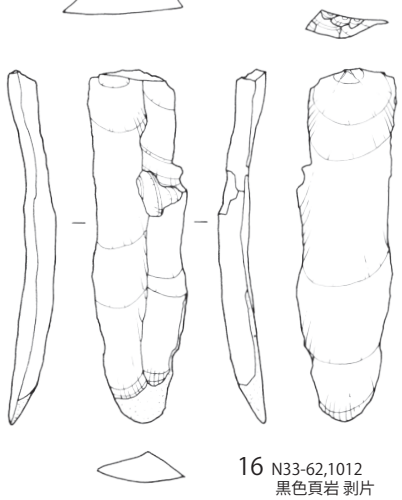
13 N33-42,1019,1053 黒色頁岩 剥片



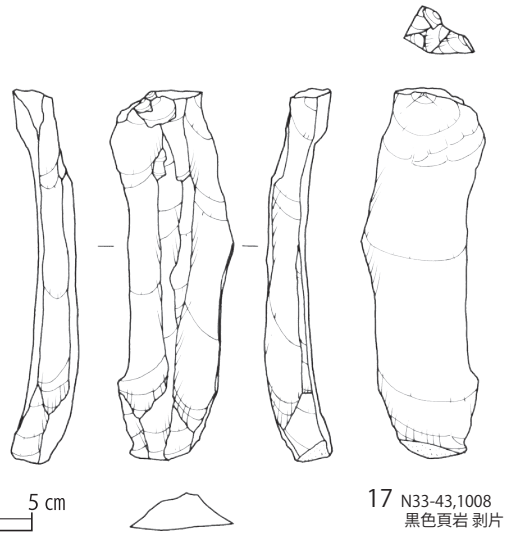
14 N33-53,1019 黒色頁岩 剥片



15 N33-42,1008 黒色頁岩 剥片



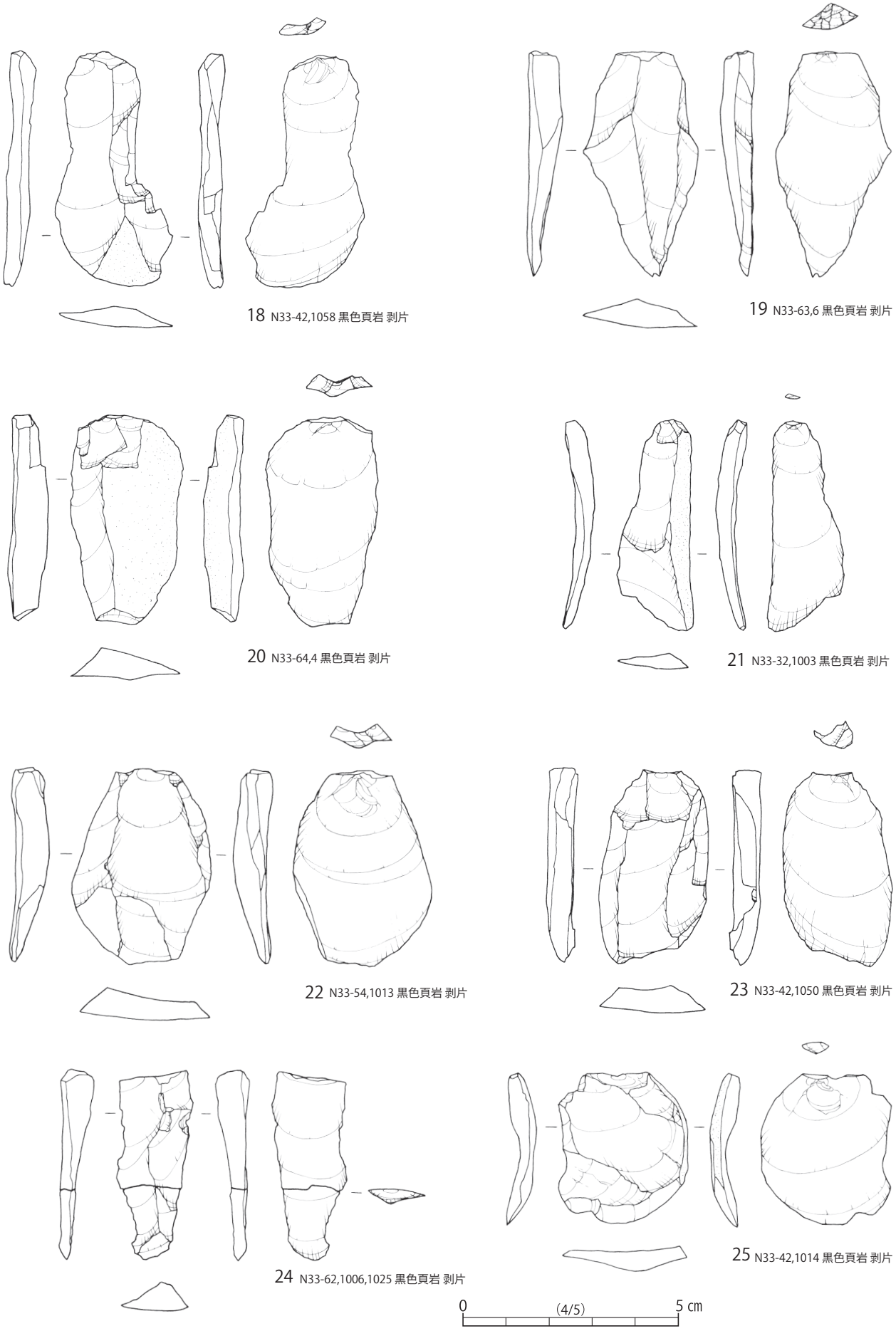
16 N33-62,1012
黒色頁岩 剥片



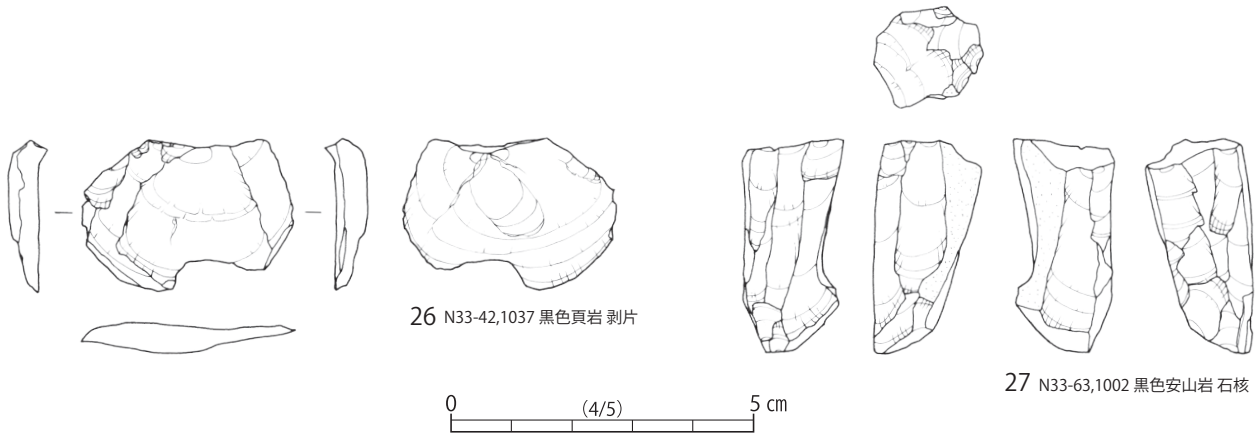
17 N33-43,1008
黒色頁岩 剥片

0 (4/5) 5 cm

第 34 図　第 5 ブロック出土遺物（3）



第 35 図　第 5 ブロック出土遺物（4）



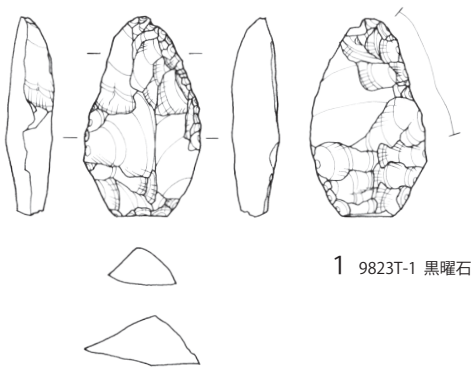
第 36 図　第５ブロック出土遺物（５）

窺える。剥片の断面形状は背面に明瞭な１条の稜線を有し二等辺三角形を呈するもの（12・14・16）、複数の稜線を有し扁平な台形を呈するもの（13・17 ～ 24）の２種が認められる。25・26 は不定形剥片で、背面に見られる剥離の方向は一定しないため、石核整形もしくは打面再生を目的として作出された剥片と考えられる。27 は黒色安山岩製の石核である。長軸５㎝に満たない小型石核であるが、同一方向に設定された打面から連続的に剥片を作出しているため、逆角錐に近い形状となる。

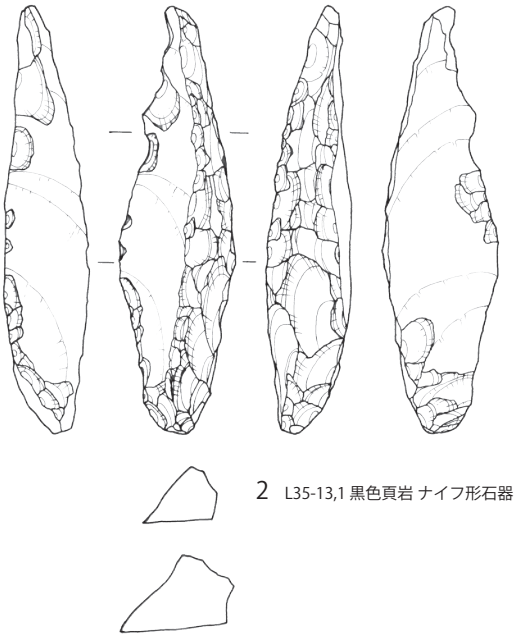
6　単独出土遺物（第 37・38 図、図版 32）

後平井中通遺跡の調査では、当該時期の単独出土石器が数多く出土した。前述したブロックに属する可能性のある石器も見受けられるが、帰属させる根拠に欠けるため、それらを含め単独出土遺物として扱った。

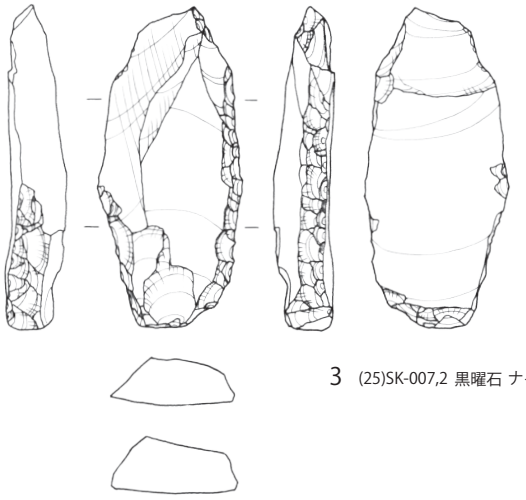
１は黒曜石製の槍先形尖頭器である。部厚な縦長剥片を素材とし、剥片末端部を先端部に設定し製品化している。先端部から基部にかけて丸みを帯び、基部が欠損するが中央よりやや基部側に最大幅をもつ形状である。背腹両面に調整がみられ、先端部から左側縁に対して樋状剥離が認められる。２～９はナイフ形石器である。２は黒色頁岩製の縦長剥片の打面側を基部に設定し、調整は主に素材剥片の片側縁に施され、背腹両面から密に行われている。３は透明度の高い黒曜石製であり、大型の縦長剥片を素材としている。末端部に厚みのある素材剥片であり、末端部を基部側に設定し、先端部に該当する素材剥片打面部は調整により除去される。調整は右側縁の全てと左側縁の基部に対して行われ、腹面側からの密な調整が施される。４は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とし、素材剥片の末端部側を先端部に設定し、鋭利な先端部を作出している。基部に近い部位に最大幅をもち、この部位より基部にかけて急激に横幅が減少する形状である。５は頁岩製の横長剥片を素材とし、調整は主に素材剥片の打面部に対して施される。６は頁岩製の部厚な横長剥片を素材とし、素材剥片の打面部を除去するような調整が施される。この部位の調整は腹面側から急角度で行われており、このため横断面は正方形に近い形状となる。７は黒色安山岩製の横長剥片を素材とし、素材剥片の打面を除去するような調整が施される。先端部に近い部位に最大厚をもつ形状である。８は黒色安山岩製の不定形剥片を素材とし､素材剥片の末端部から片側縁にかけて調整が施される。９は黒曜石製の部厚な横長剥片を素材とし、素材剥片の打面部に対し背腹両面からの調整により製品化している。急角度の調整であるため、横断面は正三角形に近い形状となる。10はチャート製の調整痕の認められる剥片である。部厚な縦長剥片の打面部を除去後、折面からの調整が背面に施される。



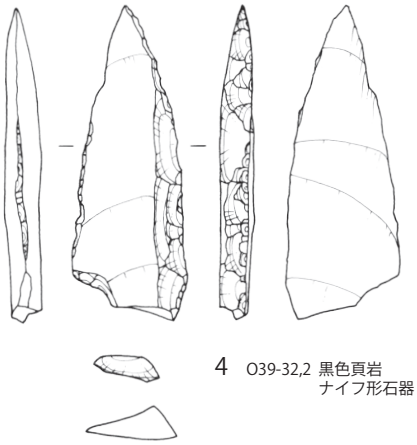
1 9823T-1 黒曜石 尖頭器



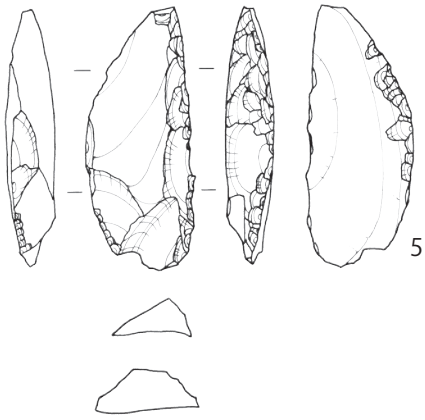
2 L35-13,1 黒色頁岩 ナイフ形石器



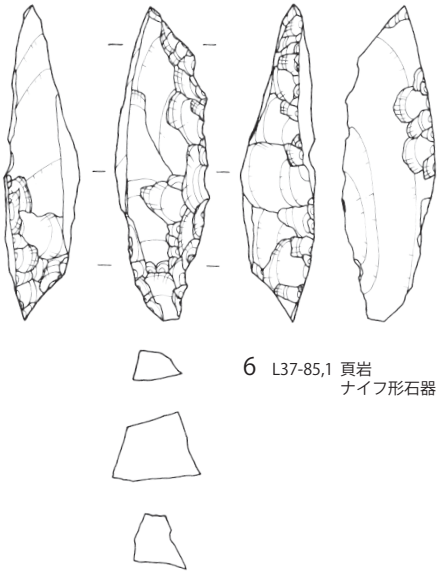
3 (25)SK-007,2 黒曜石 ナイフ形石器



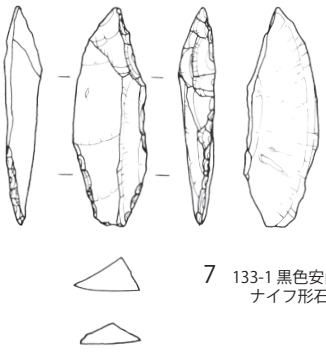
4 O39-32,2 黒色頁岩
ナイフ形石器



5 N32-20,2 頁岩 ナイフ形石器



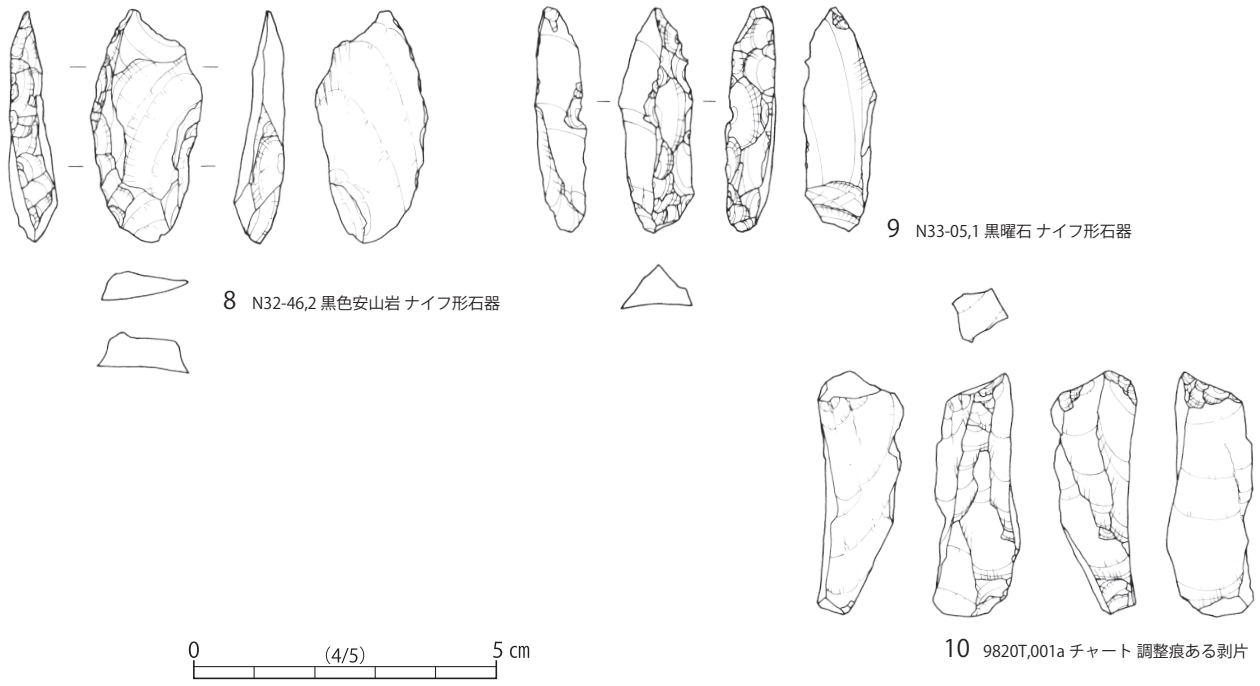
6 L37-85,1 頁岩
ナイフ形石器



7 133-1 黒色安山岩
ナイフ形石器

0 (4/5) 5 cm

第 37 図　単独出土遺物（1）



第 38 図　単独出土遺物（２）

第４表　旧石器時代出土石器属性表

挿図番号	調査次数	ブロック	グリッド	遺物番号	枝記	器種	石材	母岩番号	接合番号	接合順序	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X	Y	Z	備考
	25	1	J37-32	1		礫片	安山岩							3.02	-16255.747	7571.959	19.027	
第19図2	25	1	J37-32	2		剥片	チャート				2.08	2.05	0.38	1.28	-16255.686	7570.869	19.292	
第19図1	25	1	J37-32	3		剥片	黒曜石				2.73	2.47	0.72	4.19	-16255.990	7570.366	19.150	
	25	1	J37-33	1		礫片	安山岩							0.93	-16255.646	7572.443	19.040	
	25	1	J37-42	1		礫片	安山岩							2.20	-16256.731	7569.665	19.006	
	13	2	L33-85	2		剥片	砂岩				5.42	3.02	1.55	32.49	-16114.810	7663.094	13.525	
第21図1	13	2	L33-86	1		調整痕ある剥片	流紋岩				7.11	4.02	0.95	15.12	-16114.929	7664.177	13.500	
	13	2	L33-86	3		剥片	黒色頁岩				3.18	2.41	0.89	6.25	-16112.481	7664.829	13.660	
第21図2	13	2	L33-86	4		石核	黒色頁岩				5.27	5.65	5.37	171.12	-16113.243	7665.696	13.659	
	29	3	O37-59	1		剥片	黒色安山岩	1			2.68	2.19	0.48	3.10	-16261.331	7799.798	15.855	
	29	3	O37-59	2		剥片	黒色安山岩	1			3.29	2.40	0.57	4.27	-16263.319	7799.587	15.875	
	29	3	O37-59	3		剥片	黒色安山岩	1			2.43	1.58	1.24	5.63	-16263.213	7798.949	15.936	
第23図3	29	3	O37-59	4		剥片	黒色安山岩	3			4.01	4.67	1.45	28.65	-16263.334	7798.558	15.834	
第24図7-3	29	3	O37-59	5		石核	黒色安山岩	1		b	2.71	3.32	2.69	24.35	-16263.824	7798.837	15.915	
第24図7-1	29	3	O37-59	6		剥片	黒色安山岩	1		a	2.25	2.15	1.39	8.86	-16262.581	7798.084	15.936	
第26図8-3	29	3	O37-59	7		剥片	黒色安山岩	2		c	4.69	2.21	1.38	12.63	-16282.516	7798.114	15.881	
	29	3	O37-59	8		調整痕ある剥片	黒色安山岩	2			2.46	1.72	0.65	3.05	-16262.710	7797.914	15.764	
第25図8-2	29	3	O37-59	9		剥片	黒色安山岩	2		a	3.55	4.18	1.29	20.10	-16263.204	7797.485	15.840	
第23図1	29	3	O37-59	10		調整痕ある剥片	黒色安山岩	2			4.18	2.07	0.65	5.77	-16263.192	7797.532	15.859	
第23図6	29	3	O37-59	11		石核	黒色安山岩	3			5.55	47.90	2.97	90.76	-16263.475	7797.411	15.837	
第24図7-2	29	3	O37-59	12		剥片	黒色安山岩	1		a	4.21	2.07	1.98	12.18	-16263.354	7797.461	15.853	
	29	3	O37-59	13		剥片	黒色安山岩	2			3.85	2.14	0.70	6.04	-16263.880	7798.270	15.855	
第23図4	29	3	O37-59	14		剥片	黒色安山岩	1			3.18	3.10	1.12	10.37	-16263.869	7798.232	15.891	
第24図7-3	29	3	O37-59	15		石核	黒色安山岩	1		c	3.89	2.56	2.18	23.69	-16263.951	7798.211	15.851	
第26図8-4	29	3	O37-59	16		石核	黒色安山岩	2		d	4.57	4.12	3.25	72.61	-16263.989	7798.155	15.877	
	29	3	O37-59	17		剥片	黒色安山岩	1			3.25	2.37	0.35	3.47	-16263.777	7797.702	15.845	
	29	3	O37-59	18		剥片	黒色安山岩	2			2.30	1.53	0.48	2.17	-16263.863	7797.555	15.826	
	29	3	O37-59	19		剥片	黒色安山岩	1			1.98	1.95	0.58	2.85	-16263.957	7797.414	15.797	
第25図8-1	29	3	O37-59	20		剥片	黒色安山岩	2		b	4.30	3.74	1.45	28.83	-16263.654	7798.902	15.827	
	29	3	O37-59	21		石核	黒色安山岩	4			4.78	2.31	1.75	23.26	-16263.495	7797.723	15.844	
	29	3	O37-59	22		剥片	黒色安山岩	2			3.04	2.95	0.76	6.33	-16263.589	7797.552	15.837	
	29	3	O37-59	23		剥片	黒色安山岩	2			3.75	1.69	0.62	4.13	-16263.469	7797.485	15.835	
第23図5	29	3	O37-68	1		剥片	黒曜石				2.61	2.54	0.54	3.36	-16265.171	7795.436	15.591	
第23図2	29	3	O37-69	1		剥片	黒色安山岩	3			6.77	3.01	0.56	10.19	-16264.433	7798.046	15.915	
	29	3	O37-69	2		剥片	黒色安山岩	1			2.84	2.50	0.67	4.01	-16264.864	7798.546	15.950	
	3	4	001	1		礫片	砂岩							34.25	-16298.727	7710.901	14.730	
	3	4	001	2		剥片	凝灰岩				2.77	1.82	0.43	2.97	-16296.368	7710.698	14.820	
	3	4	001	3		礫片	安山岩							74.32	-16296.103	7710.636	14.700	
	3	4	001	4		剥片	チャート				3.01	2.13	1.05	5.17	-16295.374	7711.115	14.868	
	3	4	001	5		礫片	砂岩							113.08	-16295.183	7710.936	14.816	
	3	4	001	6		礫片	砂岩							28.25	-16294.413	7710.407	14.785	
	3	4	001	7		礫片	安山岩							4.15	-16293.854	7709.566	14.861	
	3	4	001	8		礫片	チャート							4.98	-16292.802	7708.293	14.815	
	3	4	001	9		礫片	石英斑岩							15.35	-16296.194	7708.407	14.787	
	3	4	001	10		礫片	安山岩							24.93	-16296.521	7708.869	14.785	
第29図1	3	4	001	11		剥片	黒色安山岩				1.91	1.03	0.45	0.66	-16297.214	7709.137	14.763	
	3	4	001	12		礫片	凝灰岩							5.69	-16297.408	7709.057	14.758	
	5	5	N33-32	1002		剥片	ホルンフェルス				1.69	2.27	0.61	2.50	-16095.951	7729.564	13.674	
第35図21	5	5	N33-32	1003		剥片	黒色頁岩	1			4.88	1.76	0.43	3.28	-16095.387	7729.485	13.615	
	5	5	N33-32	1004		剥片	チャート				2.42	1.61	1.28	4.07	-16095.574	7729.017	13.624	
第32図4	5	5	N33-32	1005		ナイフ形石器	黒色頁岩	1			1.67	1.12	0.41	0.79	-16095.768	7729.013	13.610	
	5	5	N33-32	1006		剥片	ホルンフェルス				2.31	2.85	0.75	5.53	-16095.967	7731.436	13.673	
	5	5	N33-33	1002		礫片	安山岩							7.32	-16095.788	7733.804	13.564	
	5	5	N33-33	1003		剥片	黒色安山岩				1.48	1.86	0.63	1.18	-16095.865	7734.635	13.529	
	5	5	N33-33	1004		礫片	安山岩							2.98	-16095.279	7735.279	13.505	
	5	5	N33-33	1005		剥片	頁岩				2.57	1.49	0.19	0.79	-16095.012	7735.411	13.488	
	5	5	N33-33	1006		剥片	黒色安山岩				1.29	1.89	0.32	1.00	-16095.623	7735.559	13.537	
	5	5	N33-33	1007		礫片	チャート							16.87	-16095.903	7735.883	13.611	
	5	5	N33-33	1008		剥片	黒色安山岩				2.39	2.75	0.45	2.57	-16095.149	7735.246	13.432	
	5	5	N33-34	1002		礫片	チャート							25.86	-16094.300	7736.066	13.658	
	5	5	N33-34	1003		礫片	チャート							3.57	-16094.348	7736.004	13.574	
	5	5	N33-34	1004		礫片	砂岩							9.97	-16094.307	7736.171	13.529	
	5	5	N33-41	1001		剥片	黒色頁岩	1			1.45	1.32	0.47	0.71	-16097.038	7727.537	13.559	
	5	5	N33-41	1002		砕片	黒色頁岩	1			0.84	1.31	0.21	0.29	-16097.182	7727.793	13.537	
	5	5	N33-41	1003		剥片	黒色頁岩	2			1.71	1.09	0.27	0.64	-16097.270	7727.716	13.414	
第32図3	5	5	N33-41	1004		ナイフ形石器	黒色頁岩	1			1.81	1.14	0.65	1.31	-16097.379	7727.340	13.548	
	5	5	N33-41	1005		砕片	黒色安山岩				0.67	0.71	0.23	0.17	-16098.614	7727.414	13.461	
	5	5	N33-41	1006		剥片	ホルンフェルス				2.00	1.68	0.43	1.59	-16098.079	7726.314	13.497	
	5	5	N33-41	1007		剥片	黒色頁岩	1			3.52	1.51	0.31	2.22	-16098.958	7726.452	13.544	
	5	5	N33-41	1008		剥片	黒色頁岩	2			2.69	2.61	0.59	3.21	-16098.807	7727.613	13.370	
	5	5	N33-42	1002		礫	砂岩				4.72	3.75	1.67	41.93	-16099.274	7731.029	13.570	
	5	5	N33-42	1003		剥片	ホルンフェルス				1.42	1.10	0.39	0.91	-16099.846	7728.510	13.640	
	5	5	N33-42	1004	a	砕片	ホルンフェルス				0.72	0.85	0.24	0.36	-16099.369	7728.125	13.497	
	5	5	N33-42	1004	b	砕片	ホルンフェルス				0.81	0.76	0.29	0.22	-16099.369	7728.125	13.497	
	5	5	N33-42	1004	c	砕片	ホルンフェルス				0.87	0.97	0.24	0.25	-16099.369	7728.125	13.497	
	5	5	N33-42	1004	d	砕片	ホルンフェルス				1.12	0.43	0.23	0.11	-16099.369	7728.125	13.497	
	5	5	N33-42	1005		礫	砂岩				8.72	3.57	2.69	97.32	-16096.121	7730.621	13.613	
	5	5	N33-42	1006		剥片	黒色頁岩	2			3.71	3.57	0.82	8.49	-16098.746	7730.736	13.560	
	5	5	N33-42	1007		剥片	黒色頁岩	1			2.97	1.89	0.47	2.84	-16096.716	7730.896	13.485	
第34図15	5	5	N33-42	1008		剥片	黒色頁岩	1			6.01	3.67	1.48	26.53	-16098.331	7731.287	13.548	
	5	5	N33-42	1009		剥片	黒色頁岩	1			2.51	0.93	0.37	0.79	-16097.341	7730.012	13.651	
	5	5	N33-42	1010		砕片	ホルンフェルス				1.32	1.41	0.28	0.53	-16097.435	7730.339	13.567	
	5	5	N33-42	1011		砕片	黒色頁岩	1			1.39	0.93	0.23	0.35	-16098.605	7731.891	13.524	
	5	5	N33-42	1012		砕片	ホルンフェルス				1.11	1.77	0.62	1.16	-16098.041	7730.018	13.525	
	5	5	N33-42	1013		砕片	黒色頁岩	2			0.79	0.78	0.09	0.07	-16098.223	7730.189	13.461	
第35図25	5	5	N33-42	1014		剥片	黒色頁岩	2			3.46	2.99	0.51	5.59	-16098.179	7730.442	13.446	
	5	5	N33-42	1015		剥片	頁岩				2.37	1.91	0.37	1.80	-16098.685	7730.212	13.519	
	5	5	N33-42	1016		剥片	ホルンフェルス				1.97	1.89	0.60	2.58	-16098.652	7730.218	13.454	
	5	5	N33-42	1017	a	剥片	黒色頁岩	1			2.28	0.87	0.23	0.40	-16098.811	7730.227	13.585	
	5	5	N33-42	1017	b	剥片	黒色頁岩	1			1.98	0.47	0.32	0.20	-16098.811	7730.227	13.585	
	5	5	N33-42	1018		礫片	チャート							2.48	-16099.031	7730.683	13.669	
第34図13	5	5	N33-42	1019		剥片	黒色頁岩	1	2	a	3.69	2.20	0.53	5.40	-16097.820	7730.424	13.507	
	5	5	N33-42	1022		剥片	黒色頁岩	1			3.82	2.69	0.82	8.33	-16096.241	7729.638	13.581	
第32図1	5	5	N33-42	1023		ナイフ形石器	黒色頁岩	1			2.42	1.04	0.43	1.22	-16097.036	7728.381	13.647	

挿図番号	調査次数	ブロック	グリッド	遺物番号	枝記	器種	石材	母岩番号	接合番号	接合順序	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X	Y	Z	備考
	5	5	N33-42	1024		剥片	頁岩				3.00	3.02	0.35	2.70	-16097.539	7728.350	13.635	
	5	5	N33-42	1025		剥片	黒色頁岩	1			2.34	1.76	0.39	1.86	-16098.060	7728.258	13.559	
	5	5	N33-42	1026		砕片	黒色頁岩	2			0.51	0.92	0.12	0.07	-16098.663	7728.304	13.619	
第34図12	5	5	N33-42	1027		剥片	黒色頁岩	2			8.48	2.58	1.55	35.09	-16098.923	7728.260	13.645	
	5	5	N33-42	1028		剥片	ホルンフェルス				3.25	1.59	0.64	2.61	-16098.795	7728.663	13.538	
	5	5	N33-42	1029		砕片	黒色頁岩	2			0.92	1.13	0.32	0.36	-16098.277	7728.736	13.601	
	5	5	N33-42	1030		剥片	黒色頁岩	2			1.68	1.12	0.43	0.72	-16097.960	7728.767	13.611	
第32図2	5	5	N33-42	1031		ナイフ形石器	黒色頁岩	1			2.99	1.35	0.43	1.26	-16097.699	7728.787	13.514	
	5	5	N33-42	1032		砕片	黒色頁岩	1			1.00	1.04	0.19	0.23	-16097.503	7728.787	13.562	
	5	5	N33-42	1033		剥片	黒色頁岩	1			1.48	1.79	0.23	0.58	-16097.900	7729.087	13.485	
	5	5	N33-42	1034		剥片	黒色頁岩	1			3.87	2.92	1.18	12.31	-16098.138	7729.155	13.654	
	5	5	N33-42	1035		剥片	ホルンフェルス				2.35	2.68	0.85	5.49	-16098.277	7729.029	13.602	
	5	5	N33-42	1036		剥片	ホルンフェルス				3.24	1.65	0.51	2.52	-16098.323	7729.252	13.530	
第36図26	5	5	N33-42	1037		剥片	黒色頁岩	2			2.51	3.54	0.55	4.82	-16098.581	7728.961	13.665	
	5	5	N33-42	1038		剥片	頁岩				3.25	1.80	0.52	2.57	-16098.597	7729.309	13.649	
	5	5	N33-42	1039		剥片	ホルンフェルス				4.13	4.54	1.38	31.23	-16098.531	7729.600	13.562	
	5	5	N33-42	1040		剥片	ホルンフェルス				1.82	1.53	0.47	1.56	-16098.908	7729.704	13.406	
	5	5	N33-42	1041		剥片	頁岩				2.51	1.47	0.25	1.12			13.629	
	5	5	N33-42	1042		剥片	頁岩				2.23	2.65	0.61	2.76			13.467	
	5	5	N33-42	1043		剥片	黒色頁岩	2			2.41	1.53	0.47	2.17	-16096.675	7729.547	13.575	
	5	5	N33-42	1044		剥片	黒色頁岩	1			3.46	2.62	0.87	5.95	-16096.801	7729.021	13.620	
第32図10	5	5	N33-42	1045	a	調整痕ある剥片	黒色頁岩	2			2.32	1.71	0.68	3.19	-16097.042	7729.162	13.587	
	5	5	N33-42	1045	b	剥片	ホルンフェルス				2.20	0.75	0.31	0.56	-16097.042	7729.162	13.587	
	5	5	N33-42	1046		剥片	安山岩（トロトロ石）				3.69	2.90	0.46	6.26	-16097.219	7729.224	13.494	
	5	5	N33-42	1047		剥片	黒色頁岩	1			2.57	1.98	0.56	3.51	-16096.978	7729.717	13.545	
	5	5	N33-42	1048		砕片	黒色頁岩	1			1.09	0.72	0.18	0.20	-16097.333	7729.656	13.580	
	5	5	N33-42	1049		剥片	ホルンフェルス				2.99	1.95	0.62	3.92	-16097.821	7729.538	13.648	
第35図23	5	5	N33-42	1050		剥片	黒色頁岩	2			4.50	2.57	0.68	9.80	-16097.630	7729.762	13.618	
	5	5	N33-42	1051		剥片	ホルンフェルス				2.25	2.09	0.61	3.59	-16096.822	7729.300	13.618	
	5	5	N33-42	1052		剥片	チャート				5.45	3.62	0.98	15.28	-16097.181	7729.962	13.490	
第34図13	5	5	N33-42	1053		剥片	黒色頁岩	1	2	a	2.90	2.35	0.56	3.78	-16097.674	7730.397	13.496	
	5	5	N33-42	1055		剥片	黒色頁岩	2			1.58	1.55	0.31	0.96	-16098.756	7730.385	13.546	
第32図9	5	5	N33-42	1056		調整痕ある剥片	黒色頁岩	1			2.00	1.26	0.56	1.47	-16097.292	7729.741	13.440	
	5	5	N33-42	1057		砕片	黒色頁岩	1			0.87	1.06	0.12	0.16	-16097.433	7729.656	13.484	
第35図18	5	5	N33-42	1058		剥片	黒色頁岩	2			5.47	2.68	0.65	7.13	-16097.519	7728.762	13.537	
	5	5	N33-42	1059		剥片	黒色頁岩	1			4.39	2.01	0.75	5.04	-16097.942	7728.636	13.574	
	5	5	N33-42	1060		剥片	黒色頁岩	1			2.12	2.20	0.45	1.38	-16098.045	7728.951	13.537	
	5	5	N33-42	1061		剥片	ホルンフェルス				1.95	0.82	0.41	0.69	-16098.118	7729.074	13.628	
	5	5	N33-42	1062		剥片	黒色頁岩	1			2.31	2.57	0.92	6.08	-16098.606	7729.468	13.477	
	5	5	N33-42	1063		剥片	頁岩				4.55	2.54	0.87	11.19	-16098.118	7728.160	13.562	
	5	5	N33-42	1064		剥片	ホルンフェルス				1.89	1.85	0.51	1.78	-16098.251	7728.474	13.535	
	5	5	N33-42	1065	a	砕片	ホルンフェルス				0.88	1.15	0.23	0.26	-16098.336	7728.927	13.597	
	5	5	N33-42	1065	b	砕片	ホルンフェルス				1.09	0.92	0.30	0.41	-16098.336	7728.927	13.597	
	5	5	N33-42	1066	a	剥片	黒色頁岩	1			2.62	1.37	0.40	1.63	-16098.593	7728.288	13.462	
	5	5	N33-42	1066	b	砕片	黒色頁岩	1			1.46	0.65	0.20	0.20	-16098.593	7728.288	13.462	
	5	5	N33-42	1067		剥片	頁岩				1.89	1.50	0.31	0.86	-16098.602	7729.082	13.529	
第33図11-1	5	5	N33-42	1068		剥片	黒色頁岩	1	1	a	6.51	3.72	1.67	38.34	-16097.497	7729.844	13.415	
	5	5	N33-42	1069		砕片	ホルンフェルス				1.72	0.54	0.22	0.35	-16097.968	7728.888	13.385	
	5	5	N33-42	1070		砕片	ホルンフェルス				0.89	0.40	0.15	0.05	-16098.280	7728.968	13.461	
	5	5	N33-42	1071		剥片	黒色頁岩	1			1.89	2.22	0.39	1.48	-16097.513	7729.891	13.399	
	5	5	N33-43	1004		礫片	チャート							12.32	-16097.072	7735.733	13.654	
	5	5	N33-43	1005		剥片	黒色頁岩				1.69	1.12	0.53	1.10	-16096.063	7734.871	13.616	
	5	5	N33-43	1007		礫片	安山岩		9001					13.17	-16099.356	7732.270	13.536	
第34図17	5	5	N33-43	1008		剥片	黒色頁岩	1			6.18	2.20	0.84	10.31	-16096.678	7732.799	13.585	
	5	5	N33-43	1009		礫	安山岩		9001					310.27	-16096.831	7733.766	13.471	
	5	5	N33-43	1010	a	剥片	黒色安山岩				1.37	1.27	0.21	0.44	-16096.587	7733.501	13.457	
	5	5	N33-43	1010	b	砕片	黒色安山岩				1.15	0.62	0.22	0.23	-16096.587	7733.501	13.457	
	5	5	N33-43	1010	c	砕片	黒色安山岩				0.71	0.95	0.25	0.20	-16096.587	7733.501	13.457	
	5	5	N33-43	1011		礫片	安山岩		9001					91.42	-16096.940	7733.887	13.485	
	5	5	N33-43	1012		礫片	安山岩		9001					6.62	-16097.163	7733.704	13.473	
	5	5	N33-44	1002		剥片	黒色頁岩				2.10	1.36	0.41	0.82	-16097.336	7736.494	13.646	
	5	5	N33-51	1001		剥片	黒色頁岩	1			2.27	1.59	0.55	1.77	-16103.833	7727.872	13.500	
	5	5	N33-52	1002		剥片	黒色頁岩	1			3.25	2.19	0.32	2.30	-16100.564	7729.403	13.455	
	5	5	N33-52	1004	a	砕片	ホルンフェルス				1.01	0.57	0.18	0.16	-16101.626	7729.377	13.500	
	5	5	N33-52	1004	b	砕片	ホルンフェルス				0.80	0.38	0.10	0.03	-16101.626	7729.377	13.500	
	5	5	N33-52	1005		剥片	ホルンフェルス				1.79	1.08	0.40	0.72	-16102.872	7730.897	13.570	
	5	5	N33-52	1006		剥片	黒色頁岩	1			3.39	1.04	0.37	1.33	-16103.101	7730.359	13.570	
	5	5	N33-52	1007		礫片	チャート		9006					6.29	-16103.343	7731.084	13.430	
第33図11-2	5	5	N33-52	1008		剥片	黒色頁岩	1			5.51	2.89	1.12	18.23	-16103.344	7731.347	13.445	
	5	5	N33-52	1009		剥片	ホルンフェルス				2.57	3.26	1.09	10.80	-16103.710	7730.835	13.608	
	5	5	N33-52	1010		礫片	チャート		9006					5.52	-16103.877	7730.738	13.455	
	5	5	N33-53	1002		礫片	砂岩		9005					33.93	-16100.533	7735.494	13.610	
	5	5	N33-53	1003		礫	安山岩				5.57	3.35	2.10	42.46	-16100.535	7735.602	13.582	
	5	5	N33-53	1004		礫片	砂岩		9004					59.88	-16100.676	7735.386	13.620	
	5	5	N33-53	1005		剥片	ホルンフェルス				5.15	1.72	0.60	6.90	-16100.719	7735.516	13.630	
	5	5	N33-53	1006		礫片	チャート		9003					16.98	-16100.773	7735.690	13.568	
	5	5	N33-53	1007		礫片	砂岩							34.92	-16100.560	7735.723	13.401	
	5	5	N33-53	1008		礫片	チャート							45.06	-16100.641	7735.831	13.540	
	5	5	N33-53	1009		礫片	砂岩		9005					76.22	-16100.747	7735.924	13.611	
	5	5	N33-53	1010		礫	安山岩				3.27	3.31	2.35	34.07	-16100.842	7735.812	13.595	
	5	5	N33-53	1011		礫片	チャート							48.43	-16100.989	7735.655	13.609	
	5	5	N33-53	1012		礫片	チャート		9003					23.75	-16100.989	7735.827	13.581	
	5	5	N33-53	1013		礫片	チャート							0.84	-16100.939	7735.988	13.640	
	5	5	N33-53	1014		礫片	安山岩							65.78	-16100.932	7735.840	13.587	
	5	5	N33-53	1015		剥片	ホルンフェルス				2.03	0.87	0.35	0.82	-16101.135	7735.708	13.615	
	5	5	N33-53	1016		砕片	黒色安山岩				0.89	0.95	0.11	0.12	-16101.703	7734.570	13.620	
	5	5	N33-53	1017		剥片	黒色頁岩	1			4.63	1.45	0.75	4.24	-16101.640	7735.631	13.535	
	5	5	N33-53	1018		礫片	チャート		9002					11.91	-16101.703	7735.664	13.518	
第34図14	5	5	N33-53	1019		剥片	黒色頁岩	2			7.74	2.25	0.94	15.92	-16101.942	7735.059	13.528	
	5	5	N33-53	1020		砕片	黒色頁岩	1			0.45	1.11	0.21	0.15	-16102.021	7735.739	13.545	
	5	5	N33-53	1021		剥片	ホルンフェルス				5.20	2.54	1.19	14.64	-16102.929	7734.098	13.530	
	5	5	N33-53	1022		剥片	黒色安山岩				2.80	2.00	0.58	2.43	-16101.395	7735.232	13.582	
	5	5	N33-53	1023		剥片	黒色頁岩	2			1.83	1.62	0.40	1.57	-16103.097	7735.620	13.560	
	5	5	N33-53	1024		剥片	黒色頁岩				4.32	2.68	0.57	7.22	-16103.223	7732.809	13.535	

挿図番号	調査次数	ブロック	グリッド	遺物番号	枝記	器種	石材	母岩番号	接合番号	接合順序	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X	Y	Z	備考
	5	5	N33-53	1025		礫片	チャート		9002					26.52	-16100.976	7735.633	13.595	
	5	5	N33-53	1027		礫片	チャート							57.06	-16100.919	7735.968	13.610	
	5	5	N33-54	1002		石核	ホルンフェルス				4.23	6.97	2.26	59.82	-16100.817	7736.074	13.618	
	5	5	N33-54	1003		礫片	石英斑岩							101.00	-16100.954	7736.069	13.630	
	5	5	N33-54	1004		礫片	砂岩		9004					10.06	-16101.046	7736.312	13.634	
	5	5	N33-54	1005		礫片	砂岩		9004					54.61	-16100.971	7736.259	13.623	
	5	5	N33-54	1006		剥片	黒色安山岩				2.35	1.49	0.59	1.83	-16101.205	7736.316	13.628	
	5	5	N33-54	1007		礫	砂岩				5.07	2.52	1.88	27.61	-16101.478	7736.105	13.562	
	5	5	N33-54	1008		剥片	黒色頁岩				1.10	1.16	0.21	0.31	-16102.413	7737.106	13.494	
	5	5	N33-54	1009		礫片	チャート		9002					90.65	-16101.412	7736.779	13.599	
	5	5	N33-54	1010		砕片	チャート				0.85	0.35	0.10	0.01	-16101.333	7736.951	13.570	
	5	5	N33-54	1011		剥片	黒色頁岩	2			2.89	2.02	0.39	1.84	-16101.161	7737.145	13.597	
	5	5	N33-54	1012		礫片	砂岩							0.83	-16100.989	7737.075	13.615	
第35図22	5	5	N33-54	1013		剥片	黒色頁岩				4.58	3.21	0.70	10.42	-16100.385	7736.819	13.649	
	5	5	N33-54	1014		剥片	黒色安山岩	1			2.10	2.84	0.55	2.81	-16100.208	7736.779	13.598	
	5	5	N33-54	1015		礫片	砂岩							1.85	-16100.478	7736.484	13.622	
	5	5	N33-54	1016		剥片	黒色安山岩				2.96	1.75	0.74	3.71	-16100.460	7736.330	13.581	
	5	5	N33-54	1017		砕片	チャート				0.70	0.74	0.12	0.06	-16101.405	7739.632	13.515	
	5	5	N33-54	1018		礫	チャート				5.32	3.75	2.81	79.33	-16100.967	7736.113	13.622	
	5	5	N33-54	1019		礫	チャート				5.05	3.75	2.47	51.06	-16101.024	7736.343	13.615	
	5	5	N33-54	1020		礫片	チャート							14.24	-16101.205	7736.277	13.541	
	5	5	N33-55	1002		剥片	ホルンフェルス				2.52	0.95	0.55	1.00	-16101.681	7740.633	13.432	
	5	5	N33-61	1001		礫片	凝灰岩							1.05	-16104.208	7727.925	13.401	
第32図6	5	5	N33-62	1002		ナイフ形石器	黒色安山岩				2.87	1.25	0.44	1.52	-16104.565	7729.314	13.450	
第32図6	5	5	N33-62	1003		ナイフ形石器	黒色安山岩				3.82	2.16	0.60	3.91	-16104.574	7729.909	13.465	
	5	5	N33-62	1004		礫片	安山岩							51.46	-16104.343	7730.110	13.490	
	5	5	N33-62	1005		礫片	チャート		9006					26.07	-16104.504	7730.266	13.530	
第35図24	5	5	N33-62	1006		剥片	黒色頁岩	4		a	2.85	1.74	0.65	3.00	-16104.671	7731.078	13.441	
第32図5	5	5	N33-62	1007		ナイフ形石器	黒色安山岩				4.37	1.96	0.37	3.30	-16105.821	7729.157	13.474	
	5	5	N33-62	1008		剥片	黒色安山岩				2.65	2.40	0.64	4.40	-16105.165	7729.799	13.488	
	5	5	N33-62	1009		砕片	黒色安山岩				0.52	1.01	0.23	0.13	-16105.619	7729.812	13.490	
	5	5	N33-62	1010		剥片	黒色頁岩				1.98	0.75	0.15	0.37	-16105.289	7730.989	13.478	
	5	5	N33-62	1011		礫片	チャート							8.86	-16105.033	7731.554	13.491	
第34図16	5	5	N33-62	1012		剥片	黒色頁岩	1			5.81	1.69	0.47	4.52	-16105.275	7731.933	13.480	
	5	5	N33-62	1013		礫片	安山岩							14.77	-16104.427	7731.839	13.475	
	5	5	N33-62	1014		礫片	砂岩							18.57	-16104.821	7731.364	13.469	
	5	5	N33-62	1015		礫片	砂岩							9.16	-16105.637	7731.721	13.465	
	5	5	N33-62	1016		礫	石英斑岩				6.52	3.65	2.85	85.25	-16106.974	7731.893	13.447	
	5	5	N33-62	1017		剥片	黒色安山岩				1.70	1.48	0.48	1.10	-16106.249	7731.887	13.447	
第32図8	5	5	N33-62	1018		調整痕ある剥片	黒色頁岩	2			5.35	1.55	0.89	6.81	-16105.712	7731.399	13.472	
	5	5	N33-62	1019		剥片	黒色安山岩				3.74	2.01	0.32	2.44	-16106.091	7730.531	13.460	
	5	5	N33-62	1020		剥片	黒色安山岩				1.61	1.70	0.25	0.83	-16106.982	7729.812	13.227	
	5	5	N33-62	1021		礫片	チャート							5.04	-16105.015	7730.363	13.503	
第32図7	5	5	N33-62	1024		ナイフ形石器	安山岩（トロトロ石）				4.35	1.61	0.65	3.24	-16104.914	7731.333	13.415	
第35図24	5	5	N33-62	1025		剥片	黒色頁岩	4		a	1.77	1.32	0.35	0.61			13.424	
	5	5	N33-62	1026		礫片	凝灰岩							6.06	-16105.042	7730.350	13.494	
第35図19	5	5	N33-63	6		剥片	黒色頁岩	2			5.21	2.70	0.65	7.73	-16106.488	7732.555		
第36図27	5	5	N33-63	1002		石核	黒色安山岩				3.71	1.68	1.69	11.85	-16104.468	7732.400	13.420	
第35図20	3	5	N33-64	4		剥片	黒色頁岩	1	1	b	4.85	2.11	0.87	10.95			13.585	
	5	5	N33-72	1004		剥片	黒色頁岩				2.84	1.12	0.32	1.22	-16110.610	7730.083	13.285	
	5	5	N33-73	1002		礫片	凝灰岩							10.09	-16108.287	7733.159	13.370	
第37図6	2	単独	L37-85	1		ナイフ形石器	頁岩				5.22	1.58	1.05	8.81				
第38図10	2	単独	9820T	1	a	使用痕ある剥片	チャート				4.09	1.48	1.51	8.06				
第37図4	4	単独	O39-32	2	a	ナイフ形石器	黒色頁岩				5.18	1.89	0.58	5.39				
	4	単独	O39-32	2	b	剥片	チャート				2.01	2.76	0.92	5.52				
第37図2	13	単独	L35-13	1		ナイフ形石器	黒色頁岩				7.12	1.91	1.35	16.24				
第38図9	3	単独	N33-05	1		ナイフ形石器	黒曜石				3.65	1.20	0.76	3.05				
第37図7	3	単独	133	1		ナイフ形石器	黒色安山岩				3.67	1.25	0.61	2.52			13.296	
	5	単独	209	1		剥片	黒色頁岩				2.38	1.39	0.25	1.16			13.498	
	5	単独	209	3		剥片	黒色頁岩				3.22	1.58	0.46	2.16			13.562	
	5	単独	209	5		剥片	黒色頁岩				2.30	2.42	0.31	2.17			13.250	
	5	単独	209	6		剥片	黒色頁岩				2.50	1.72	0.48	1.85			13.445	
	5	単独	209	7		剥片	黒曜石				1.94	1.24	0.39	0.78			13.230	
	5	単独	209	15		剥片	黒色頁岩				5.43	2.20	0.38	3.67			13.390	
	5	単独	209	16		砕片	黒色頁岩				1.38	0.97	0.14	0.21			13.467	
第37図5	19	単独	N32-20	2		ナイフ形石器	頁岩				4.35	1.76	0.83	5.34			11.898	
	26	単独	O33-48	1		剥片	黒色安山岩				4.76	2.97	1.37	20.37				
	34	単独	I36-73	1		剥片	安山岩（トロトロ石）				5.41	3.47	0.68	8.43				
	25	単独	J37-58	1		剥片	黒色安山岩				1.20	1.75	0.55	0.94			17.820	
	16	単独	Q40-51	1		剥片	黒曜石				2.18	3.55	1.79	10.37			15.583	
	2	単独	9820T	1	b	剥片	チャート				2.85	1.99	0.68	4.06				
	2	単独	9820T	1	c	剥片	チャート				1.65	2.04	0.08	3.31				
	2	単独	9820T	1	d	剥片	チャート				1.85	2.30	0.85	3.74				
	2	単独	9820T	1	e	剥片	黒色安山岩				2.79	2.24	0.57	3.28				
第37図1	2	単独	9823T	1		槍先形尖頭器	黒曜石											
第38図8	10	単独	N32-46	2		ナイフ形石器	黒色安山岩				3.83	1.82	0.60	4.52			13.504	
第37図3	25	単独	SK007	2		ナイフ形石器	黒曜石				5.31	2.39	0.98	12.03				

第５表　旧石器ブロック別組成表

第１ブロック

	剥片	礫片	計	組成比
黒曜石	1		1	50.00%
	4.19g		4.19g	76.60%
チャート	1		1	50.00%
	1.28g		1.28g	23.40%
計	2		2	100.00%
	5.47g		5.47g	100.00%
組成比	100.00%		100.00%	
	100.00%		100.00%	
安山岩		3	3	100.00%
		6.15g	6.15g	100.00%
計		3	3	100.00%
		6.15g	6.15g	100.00%
組成比		100.00%	100.00%	
		100.00%	100.00%	

第２ブロック

	調整痕ある剥片	剥片	石核	計	組成比
黒色頁岩		1		1	25.00%
		6.25g		6.25g	2.78%
流紋岩	1			1	25.00%
	15.12g			15.12g	6.72%
砂岩		1		1	25.00%
		32.49g		32.49g	14.44%
凝灰岩			1	1	25.00%
			171.12g	171.12g	76.06%
計	1	2	1	4	100.00%
	15.12g	38.74g	171.12g	224.98g	100.00%
組成比	25.00%	50.00%	25.00%	100.00%	
	6.72%	17.22%	76.06%	100.00%	

第３ブロック

	調整痕ある剥片	剥片	石核	計	組成比
黒曜石		1		1	3.84%
		3.36g		3.36g	0.80%
黒色安山岩	2	19	4	25	96.16%
	8.82g	197.50g	210.98g	417.30g	99.20%
計	2	20	4	26	100.00%
	8.82g	200.86g	210.98g	420.66g	100.00%
組成比	7.69%	76.93%	15.38%	100.00%	
	2.09%	47.75%	50.16%	100.00%	

第４ブロック

	剥片	礫片	計	組成比
黒色安山岩	1		1	33.33%
	0.66g		0.66g	7.50%
チャート	1		1	33.33%
	5.17g		5.17g	58.75%
凝灰岩	1		1	33.33%
	2.97g		2.97g	33.75%
計	3		3	100.00%
	8.80g		8.80g	100.00%
組成比	100.00%		100.00%	
	100.00%		100.00%	
砂岩		3	3	33.33%
		175.58g	175.58g	57.57%
安山岩		3	3	33.33%
		103.40g	103.40g	33.90%
チャート		1	1	11.11%
		4.98g	4.98g	1.63%
石英斑岩		1	1	11.11%
		15.35g	15.35g	5.03%
凝灰岩		1	1	11.11%
		5.69g	5.69g	1.87%
計		9	9	100.00%
		305.00g	305.00g	100.00%
組成比		100.00%	100.00%	
		100.00%	100.00%	

第５ブロック

	ナイフ形石器	調整痕ある剥片	剥片	砕片	石核	礫	礫片	計	組成比
黒色頁岩	4	3	53	10				70	50.00%
	4.58g	11.47g	306.73g	2.08g				324.86g	54.17%
黒色安山岩	3		12	5	1			21	15.00%
	8.73g		24.74g	0.85g	11.85g			46.17g	7.70%
安山岩	1		1					2	1.43%
（トロトロ石）	3.24g		6.26g					9.50g	1.59%
ホルンフェルス			21	12	1			34	24.29%
			101.94g	3.89g	59.82g			165.65g	27.62%
チャート			2	2				4	2.85%
			19.35g	0.07g				19.42g	3.24%
頁岩			9					9	6.43%
			34.10g					34.10g	5.68%
計	8	3	98	29	2			140	100.00%
	16.55g	11.47g	493.12g	6.89g	71.67g			599.70g	100.00%
組成比	5.71%	2.14%	70.00%	20.72%	1.43%			100.00%	
	2.76%	1.91%	82.23%	1.14%	11.96%			100.00%	
安山岩						3	8	11	21.15%
						386.80g	253.52g	640.32g	33.71%
石英斑岩						1	1	2	3.86%
						85.25g	101.00g	186.25g	9.80%
砂岩						3	11	14	26.92%
						166.86g	310.00g	476.86g	25.11%
チャート						2	20	22	42.30%
						130.39g	448.32g	578.71g	30.47%
凝灰岩							3	3	5.77%
							17.20g	17.20g	0.91%
計						9	43	52	100.00%
						769.30g	1,130.04g	1,899.34g	100.00%
組成比						17.30%	82.70%	100.00%	
						40.51%	59.49%	100.00%	

第３章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　概要（第39図）

縄文時代の遺構の内訳は、竪穴住居跡もしくは竪穴状遺構54軒、炉跡の可能性が強い焼土遺構１基、土坑123基、柱穴状ピット７基、ピット群４群、陥穴４基である。その他遺物が出土しなかったものの、縄文時代の可能性が強いと判断される遺構は竪穴状遺構３基、土坑101基、ピット47基、ピット群１群を数える。遺構の時期は前期中葉から後葉と後期前葉を中心とする。遺跡の立地する台地は東側の谷へ注ぐ小支谷を取り囲むように東へ舌状に突出するが、遺構がまとまって存在するのは南北の台地中央付近で、調査次としては３・５・６・13・15・19・21次調査区が主に該当する。特に北側は未調査部分が存在するものの、後期前葉を中心とする密度の濃い馬蹄形集落となっている。南側の台地は前期の遺構が主体であるが、後期に比べ密度は薄く散漫な分布である一方で、貝層を伴う竪穴住居跡や土坑が検出されている。それ以外の調査区は遺構の密度は薄く、西側の台地奥は全く検出されない。

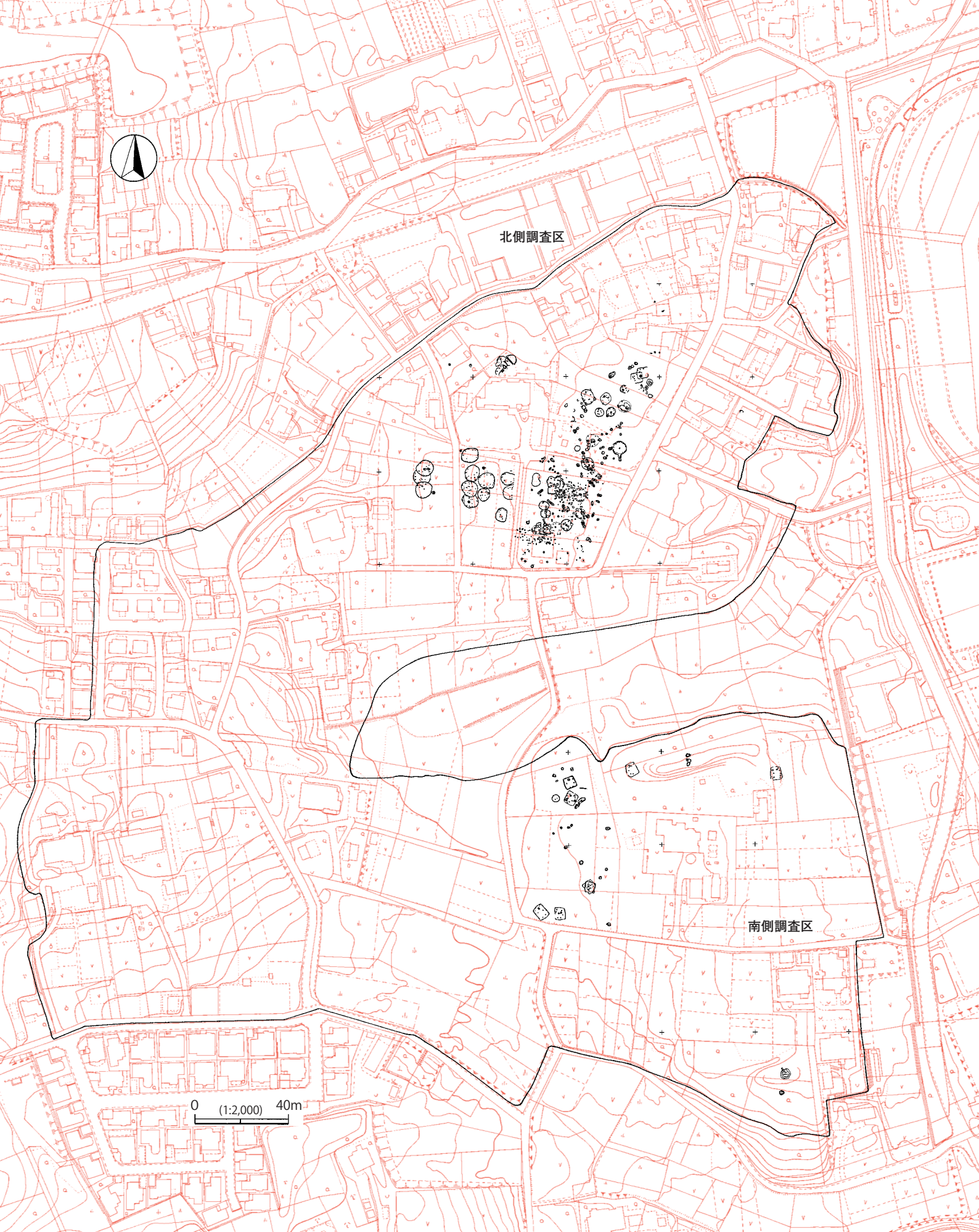
遺構はエリア別に記載することとした。また、当初は遺構種別ごとに区別して記載するつもりであったが、住居跡と重なるように検出され住居に付随するのか否か判断がつかない土坑が多かったこと、出土した遺物がどの遺構に帰属するか判断できないことがあったなどの理由から、重なっている遺構群をまとめて扱うこととした。竪穴住居跡について、図中のP○（●.●）はピット番号と深さ（単位㎝）を示しているが、現場での付番から変更したものや、新たに付番したものもある。主軸方位は各住居跡のプラン形状及び炉の位置などから判断したが、楕円形プランで炉のないものについては長軸方向で計測した。表記法は、真北（N）を０°として軸の東（E）西（W）への傾きをN-□°-EあるいはN-□°-Wとして表している。土坑類の主軸方位については、陥穴など軸の設定ができるものについて長軸中心線が真北または真南の方位からずれる角度を「主軸」とし、それ以外の主軸方向が判断できないものは省略している。表記法は竪穴住居跡に準じているが、南側へ向く場合は真南（S）を0°として、東西への軸の傾きをS-□°-EあるいはS-□°-Wとして表している。

図面の縮尺は、竪穴住居跡の全体図が１／80、竪穴住居跡の炉と炉穴、土坑、陥穴は１／40である。遺物の実測図は、土器で器形復元ができるもの及び破片ではあるが特に大きなものについては１／４、土器の破片は１／３、石器は剥片石器が２／３、礫石器が１／３である。土製品はミニチュア土器、土偶、装飾品が１／２、それ以外は１／３である。土製品・石器については第９・10表に属性をまとめてある。

第２節　遺構と遺物

１　北側調査区の遺構群

北側調査区は前節で述べたとおり後期前葉を中心とする馬蹄形集落となっている。このうち北東側から南西側の約１／２の範囲と北西側の一部が調査された。竪穴住居跡は北側が開口する馬蹄形に分布し、周辺から土坑、ピットなど多数検出され、特に南東部の３次調査区に濃密に分布している。土坑は貯蔵穴と考えられるフラスコ状を呈するものや、柱痕が認められる小ピット、陥穴などである。円形に配列した小ピット群のうちいくつかは、壁が削平された竪穴住居跡と判断されたものもある。



第 39 図　縄文時代遺構全体図

（1）竪穴住居跡と関連する土坑・ピット

(3)SI003（第40図、図版２・33）

形状と規模　調査時の記録に西側はやや掘りすぎとあるが、本来想定された範囲がどこまでなのか不明なので、残された実測図を元に記述する。形状は正円に近い楕円形を呈する。規模は長軸で現存長5.0m、短軸は4.7mを測る。南壁側のピットP6とP8の間を出入口と推測し、その中間と炉の中心を通る線を主軸と捉えた。主軸方位はN-10°-Eである。

内部の状況　壁の立上がりは緩やかで、壁高は最も高い部分で10cm、低い部分で４cmである。床面の最も深い部分でも確認面から20cmと浅い。畑の耕作で削平されているものと思われる。覆土は黄褐色土を含む暗褐色土で、壁際ほど黄褐色土の含有量が多くなる。床面はほぼ平坦で、明確な硬化面は検出されなかった。

炉　中心から検出されている。長軸88cm、短軸80cm、深さ16cmを測る。炉底付近にやや焼土が多く堆積しているが、被熱による硬化は顕著ではない。

ピット　全部で12基検出されている。P1・3・4・7・10・11の６基は深さ30cm～70cmとやや深く、P3・10・11の３基では柱痕が確認されている。これらが主柱穴と判断される。P5・9はやや浅く15cm～20cm程度であるが、柱痕が確認される。

出土遺物　１・２は黒浜式の深鉢胴部である。３は諸磯ａ式の深鉢胴部である。４～６は加曽利Ｅ式の深鉢胴部である。４は大木８b～９式の影響が強い。６は判断が難しいが、地文が櫛羽状工具と思われることや調整・焼成などから中期とした。橋状把手の根本とみられる。７～16は堀之内式に属するものである。７～12は深鉢口縁部で、７～11は堀之内１式、12・13は堀之内２式である。14～16は深鉢胴部である。17は縄文施文の深鉢胴部で、縄文は縦位施文であり、中期の可能性が高い。

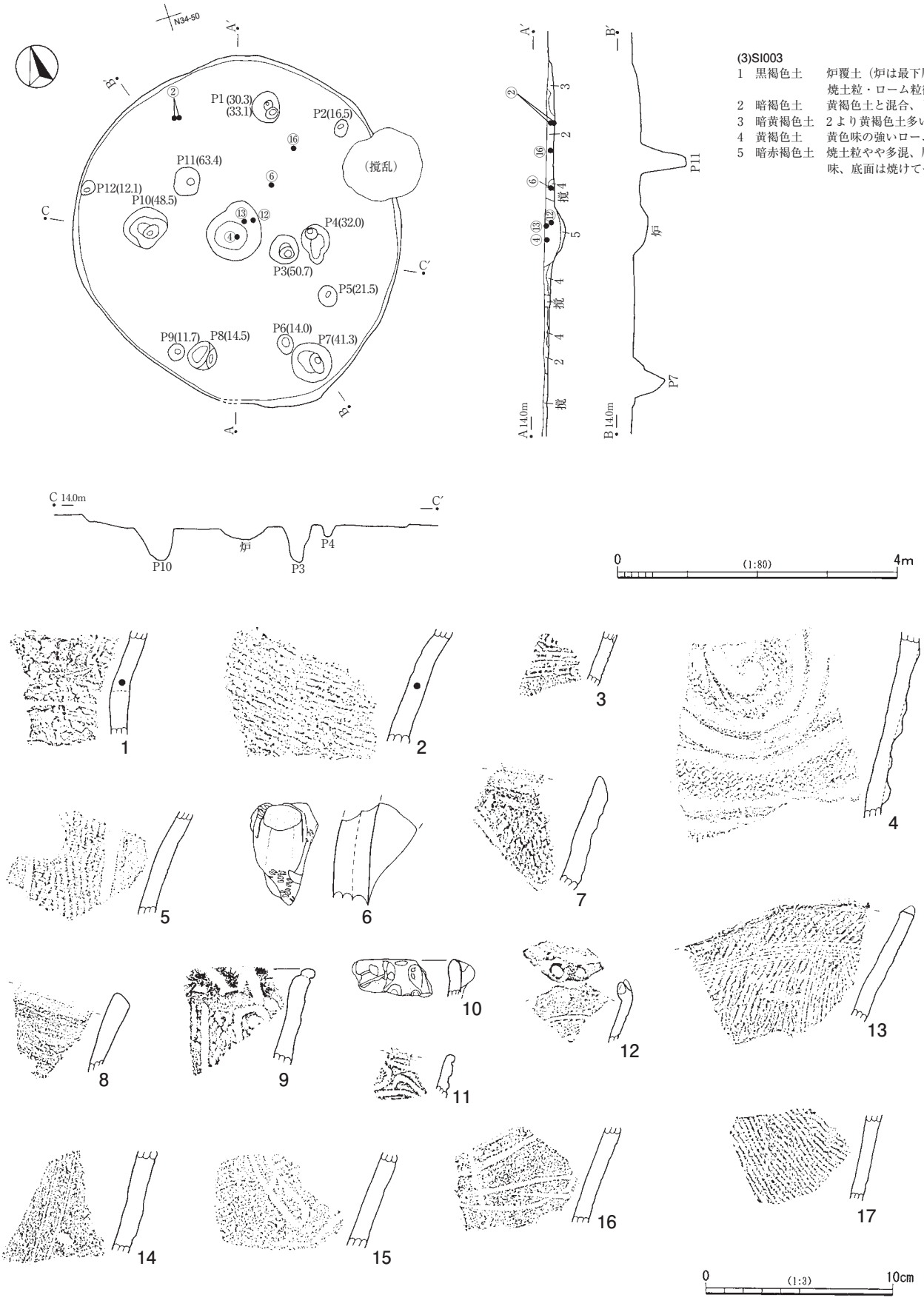
時期　主要な出土土器は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI012（第 41 ～ 44 図、図版２・33・94・95）

形状と規模　当住居跡が立地している地点は北側に向かって下る緩斜面となっているため、北側の壁が消失しており、加えて南東側は地山と住居覆土との区別が難しく若干掘りすぎているため正確な状況は不明であるが、形状は正円に近い楕円形を呈すると推測される。規模は長軸で現存長4.55m、短軸は4.4mを測る。南壁側の２基のピットP12・13の間を出入口と推測し、その中間とプランの中心を通る線を主軸と捉えた。主軸方位はN-25°-Wである。なお、南側に４基からなる土坑群が存在し、調査時は住居跡とは別個の土坑群として006 ～ 009と扱っていたが、検討した結果この住居は柄鏡形である可能性が高く、土坑群は出入口施設であろうと判断した。説明の便宜を図るため、旧番号をそのまま引用している。両者合わせた長軸長は8.8mとなる。

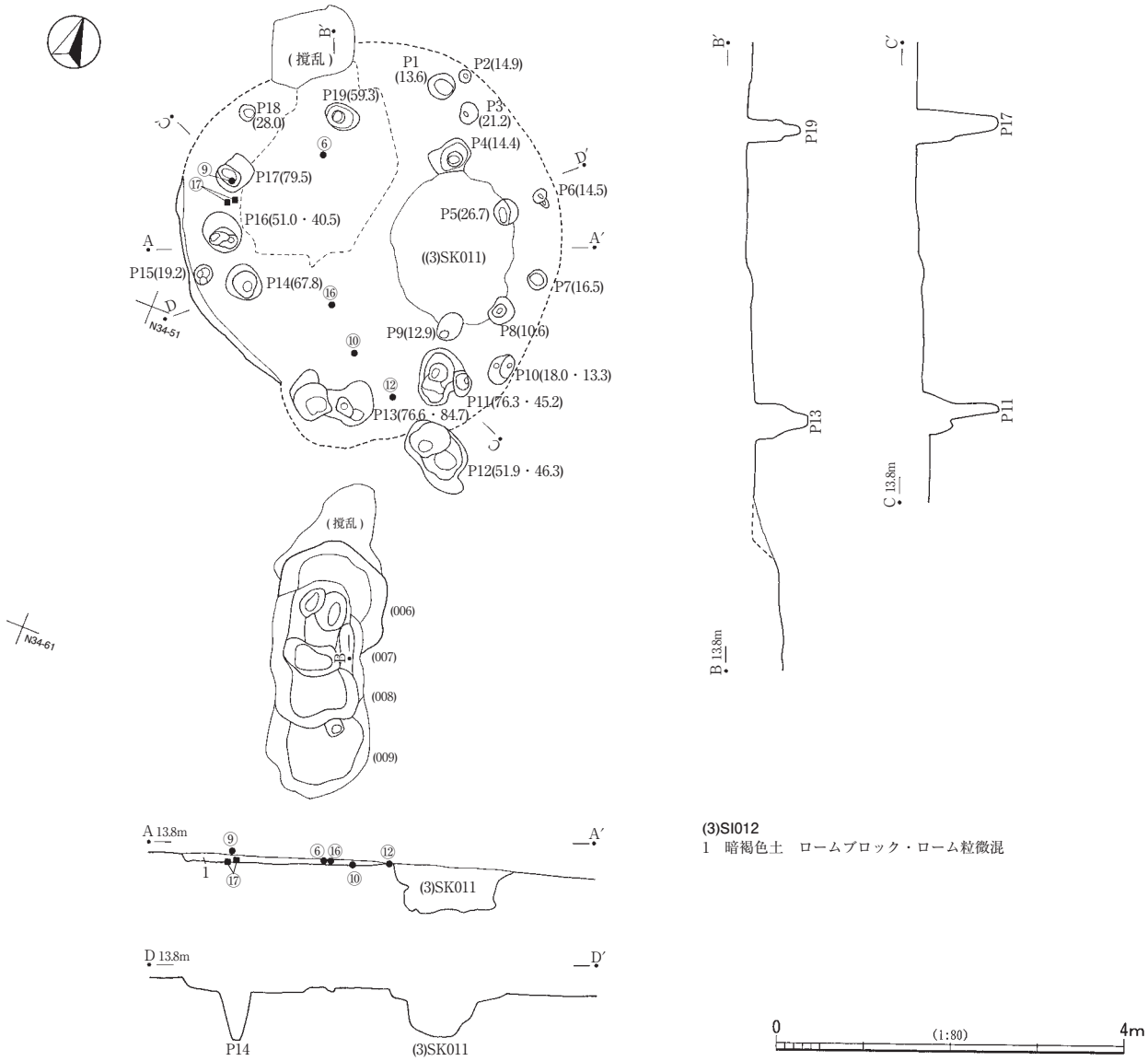
他遺構との重複関係　プラン内部の中央東側に(3)SK011土坑が検出されている。土層セクションの観察から、当住居跡より(3)SK011土坑は新しいと判断される。

内部の状況　本体側は壁がほとんど遺存しておらず、かろうじて南西部に残存するのみである。壁高は最も高い部分で10cmを測り、遺構確認面は北東に向かって下り(3)SK011付近から先は床面も流出する。覆土はロームブロックを微量含む暗褐色土で、住居内での差異は認められなかった。床面のうち、西側に残存している部分はほぼ平坦である。北西壁側に硬化面が検出されている。出入口施設は本体より深く、中央の008で60cmを測る。調査時は４基の土坑が重なり合っていると認識されていたが、覆土を検証すると、



(3)SI003
1 黒褐色土　炉覆土（炉は最下層のみ残る）、焼土粒・ローム粒微混
2 暗褐色土　黄褐色土と混合、しまりやや強
3 暗黄褐色土　2より黄褐色土多い
4 黄褐色土　黄色味の強いローム粒微混
5 暗赤褐色土　焼土粒やや多混、層全体に赤味、底面は焼けてやや硬い

第 40 図　(3)SI003 住居跡、出土遺物



第 41 図　(3)SI012 住居跡

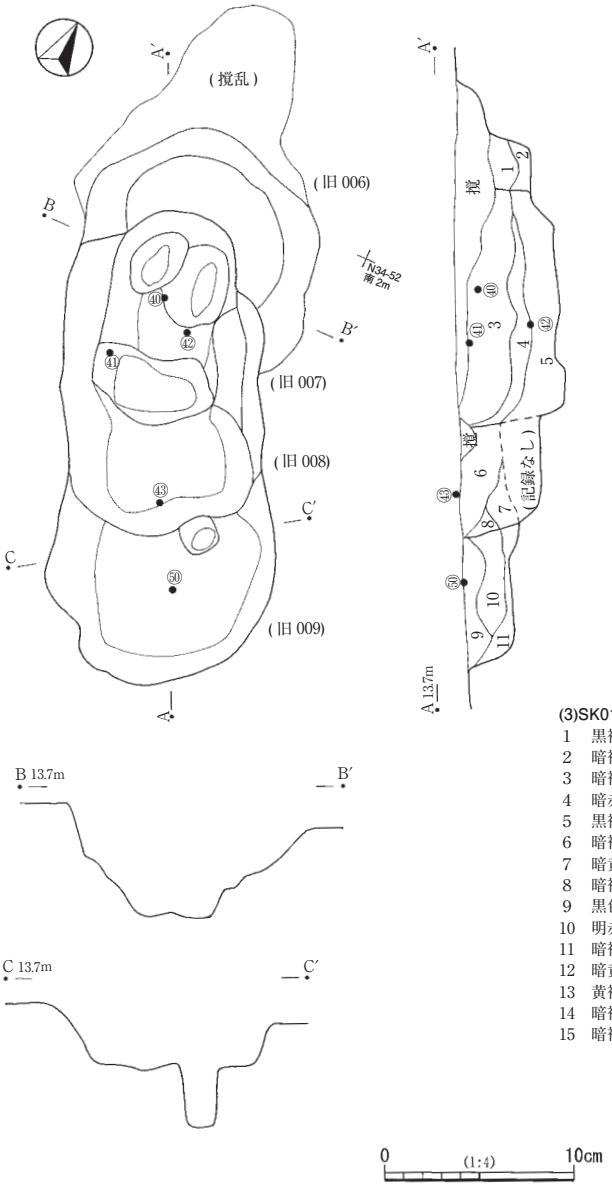
それぞれの土坑の壁とされる線を介して隣接している土層は極めて類似しており、堆積状況も壁で断絶されているのではなく全体が一様に堆積しているように見える。そうした点もこれらが出入口施設であると推測した根拠となっている。土層断面図は調査時の記録をほぼそのまま掲載したが、１と３、２と５、４と６、７と11、８と10の各層はそれぞれ同一であると思われる。

炉　検出されなかった。

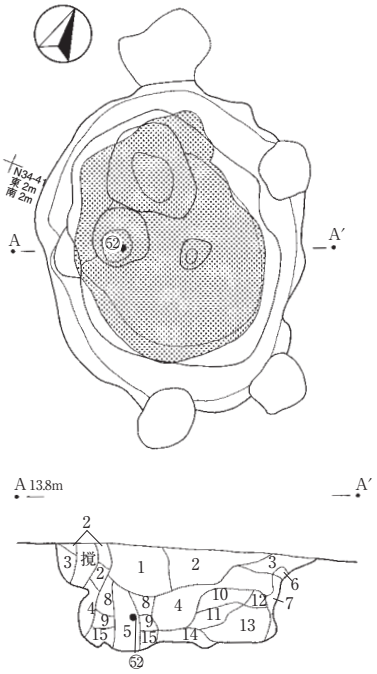
ピット　全部で12基検出されている。P11・14・16・17・19は深く主柱穴であろう。東側のピットは相対的に浅いが、床面が流れているためであろう。

出土遺物　先述したとおり当初住居跡本体と出入口施設の土坑群を別々に扱っていたため、挿図もそのようなレイアウトになっている。１～18は本体部分から出土したものである。１は黒浜式である。２は加曽利Ｅ式である。３・４は称名寺式である。５～13は堀之内式である。14は加曽利Ｂ式と思われる。15は堀之内式の注口土器と思われる。17・18はミニチュア土器である。出入口施設出土遺物は、調査時想定さ

(3)SI012 出入口施設



(3)SK011



(3)SK011

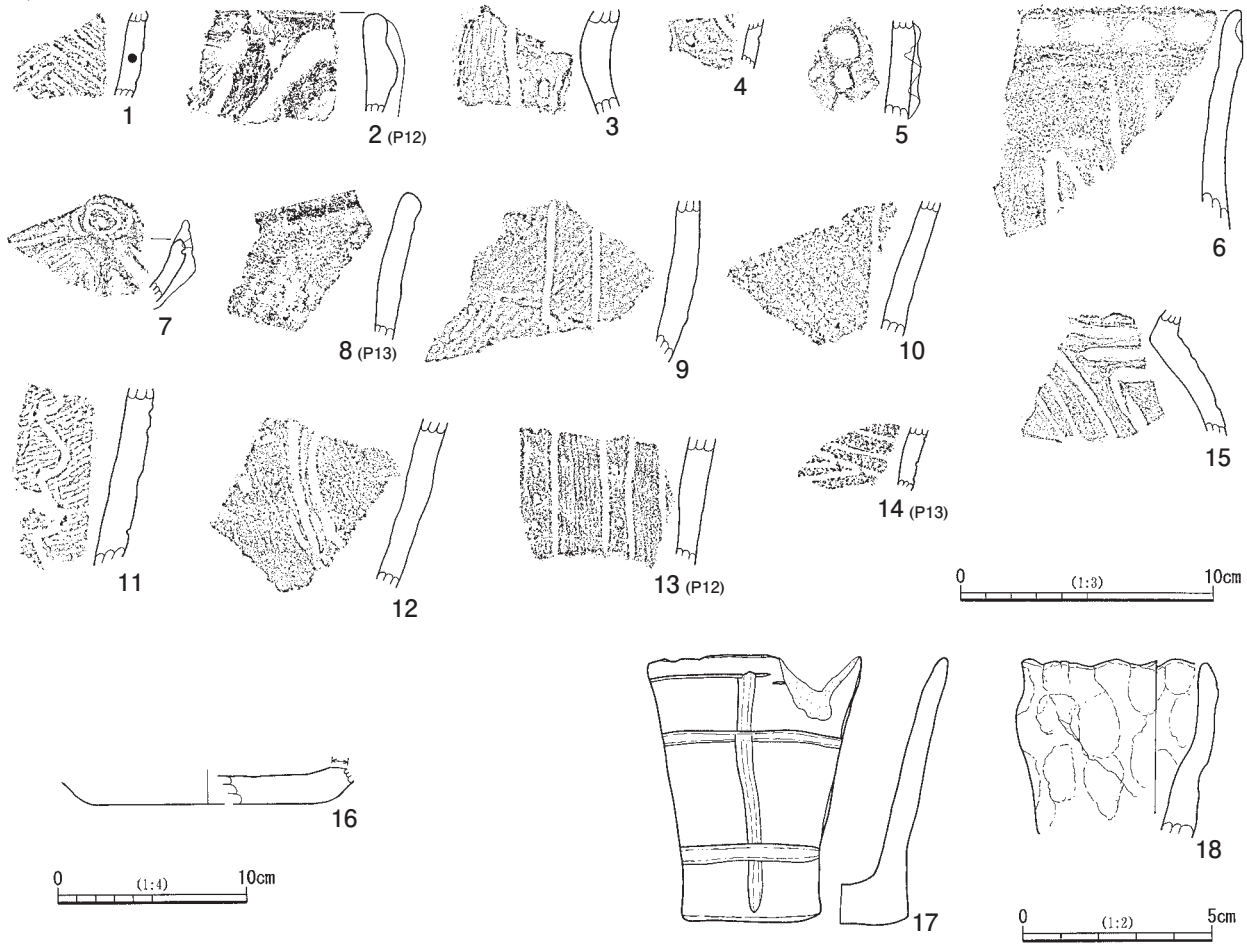
1	黒褐色土	ローム粒・焼土粒やや多混、しまり弱
2	暗褐色土	焼土粒微混、しまり弱
3	暗褐色土	φ10 ㎜ロームブロック少混
4	暗赤褐色土	焼土多混、黒色土ブロック少混
5	黒褐色土	φ5 ㎜ロームブロックやや多混、しまり弱
6	暗褐色土	φ5 ㎜ロームブロック少混、しまり弱
7	暗黄褐色土	ローム粒多混
8	暗褐色土	黄褐色土斑状
9	黒色土	φ10 ㎜黄褐色土斑状
10	明赤褐色土	φ5 ㎜焼土粒やや多混、層全体よく焼けており特に上面は硬化している
11	暗褐色土	被熱でロームブロックが変成、φ5 ㎜ロームブロック多混、しまり弱
12	暗黄褐色土	φ10 ㎜ロームブロック多混
13	黄褐色土	暗褐色土少混、粒子密
14	暗褐色土	φ10 ㎜ロームブロック多混、しまり弱
15	暗褐色土	ローム粒少混、しまり弱

(3)SI012 出入口施設

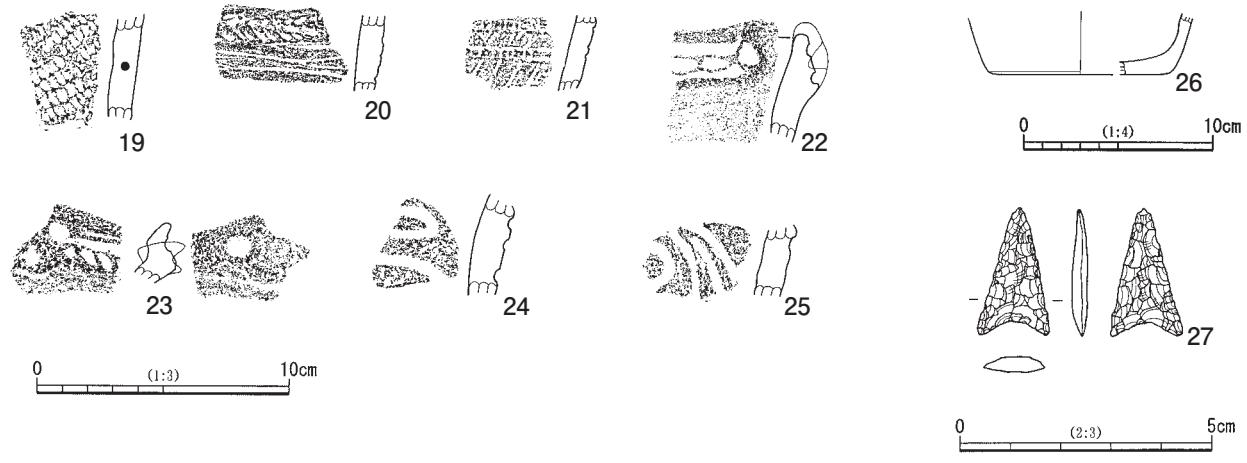
1 (006)	暗黄褐色土	3 に類似する、ローム粒やや多混
2 (006)	黄褐色土	ローム粒多混、φ20 ㎜ロームブロック少混
3 (007)	暗褐色土	ローム粒・焼土粒少混
4 (007)	暗褐色土	色調 1 より層全体が明るい、φ5 ㎜以下ローム粒やや多混
5 (007)	暗黄褐色土	ローム粒多混
6 (008)	暗褐色土	ローム粒散在、焼土粒微混
7 (008)	暗褐色土	φ50 ㎜ロームブロック、ローム粒多混
8 (008)	黒褐色土	黒色土ブロック＋ローム粒極少
9 (009)	黒褐色土	φ～5 ㎜ローム粒多混
10(009)	暗黄褐色土	φ10 ㎜ロームブロック少混
11(009)	暗褐色土	φ30 ㎜ロームブロック＋黄褐色土

第 42 図　(3)SI012 住居跡出入口施設、(3)SK011 土坑

（3）SI012

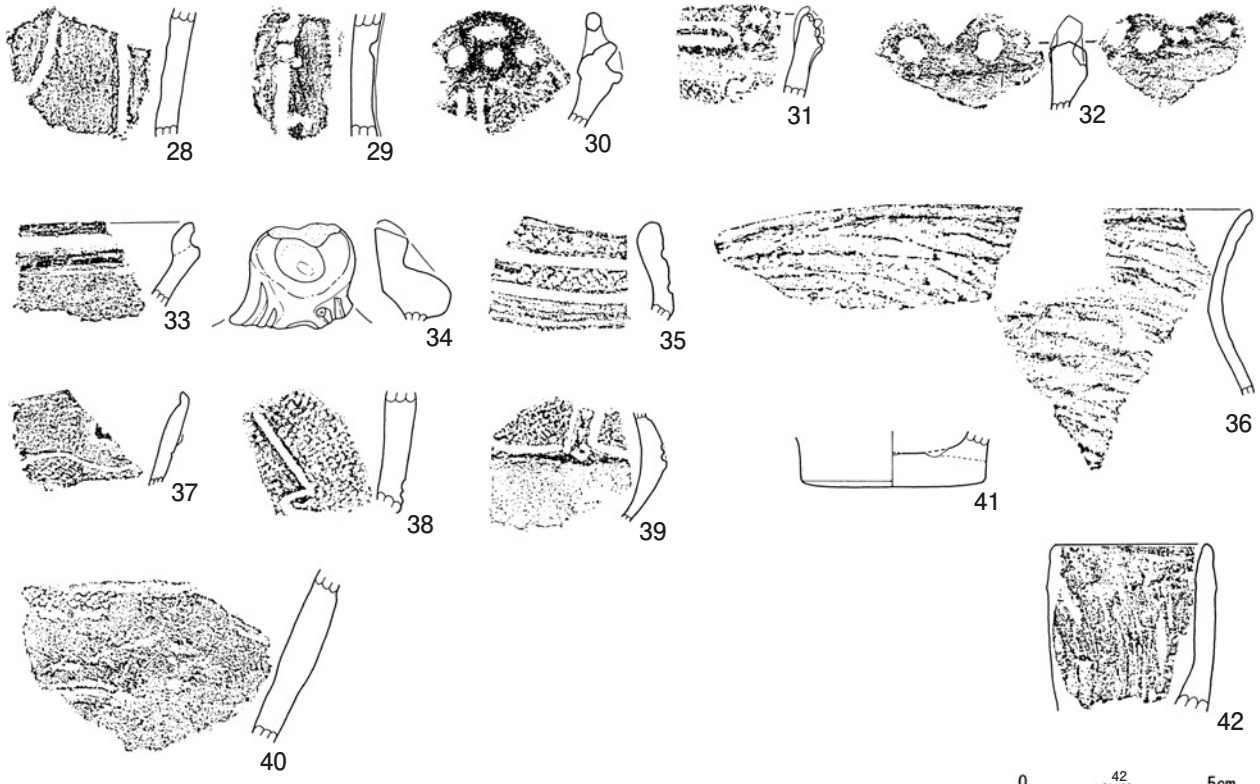


旧 006

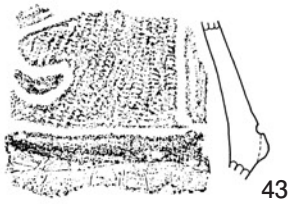


第 43 図　(3)SI012 住居跡出土遺物（１）

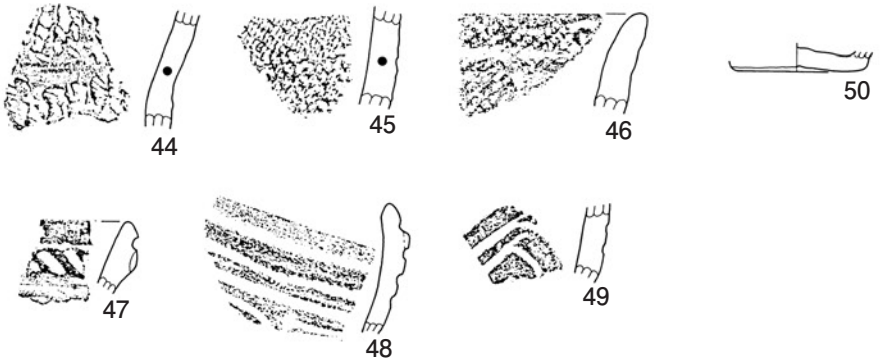
旧 007



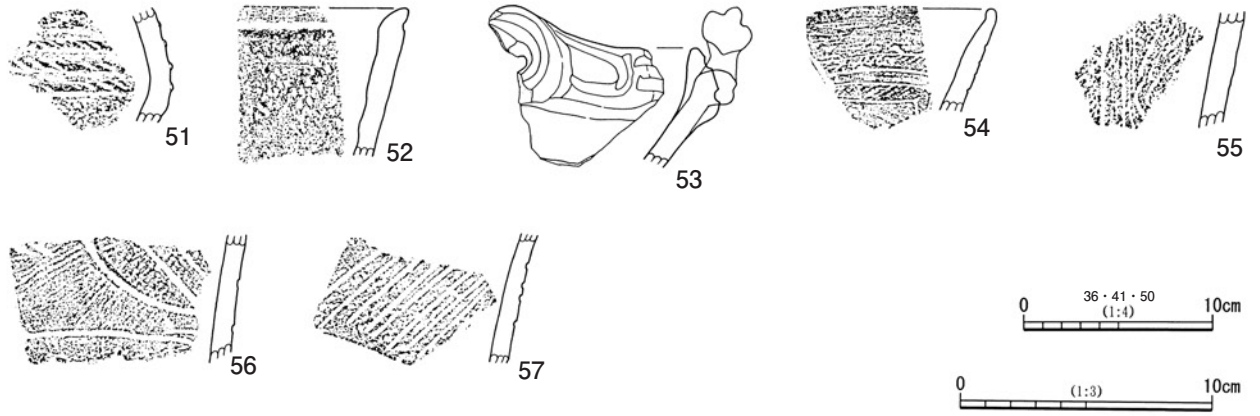
旧 008



旧 009



（3）SK011



第 44 図　(3)SI012 住居跡出土遺物（２）、(3)SK011 土坑出土遺物

第 45 図　(3)SI031 住居跡、出土遺物

れた土坑単位で掲載している。19 ～ 27は006とされた部分から出土したものである。19は黒浜式である。20・21は浮島式である。22 ～ 25は堀之内式である。27は石鏃であるが、撹乱部分からの出土で当遺構に伴うかは不明である。28 ～ 42は007とされた部分から出土したものである。28は称名寺式である。29 ～ 39は堀之内式である。42はミニチュア土器である。43は008とされた部分から出土したもので、堀之内式である。44 ～ 50は009とされた部分から出土したものである。44・45は黒浜式である。47 ～ 49は堀之内式である。

時期　主たる出土土器は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK011（第42・44図、図版２・33）

状況　(3)SI012内やや東側、住居の柱穴P4・5・8・9に囲まれるような位置に構築される。長軸長175㎝、短軸長143㎝の不整円形を呈し、深さは56㎝を測る。本来の用途は貯蔵穴と考えられるが、途中まで埋めた後柱を立てた痕跡が認められる。堆積土の５層は柱痕と考えられ、坑底部は浅いピット状を呈する。その後再び柱は抜かれ、多量の焼土を含んだ土により埋め戻されたと考えられる。

出土遺物　51は諸磯ｂ式である。52～56は堀之内式である。57は加曽利Ｂ式の粗製土器である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI031（第45図、図版２・34・35）

形状と規模　当住居跡は壁が残存しておらず、炉と柱穴のみ検出された。柱穴は直径約４ｍの円を描くように配置される。遺物の２・３はそれらの外から出土したが、関連があるものと考えた。

内部の状況　壁が残存しておらず、床面も残存しているか不明である。

炉　長軸長75㎝、短軸長65㎝の不整円形を呈し、深さは８㎝と浅い。焼土の混入量も少なく、使用頻度は低かったとみられる。

ピット　全部で７基検出されている。ほぼ等間隔であり柱穴であろう。

出土遺物　１～９はいずれも堀之内式である。１はかなり摩耗していた。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI032（第46・48図、図版３・34・35・95・96）

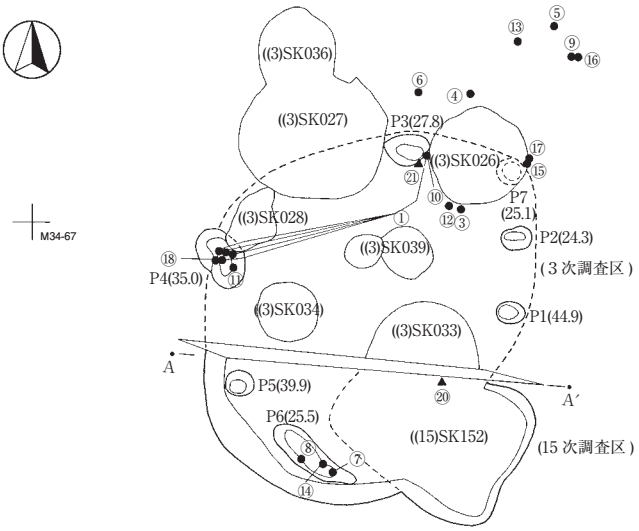
形状と規模　当住居跡は３次調査区と15次調査区にまたがって検出されている。３次調査区側は壁が残存せず、柱穴の配置によりプランを推測した。15次調査区側では壁が検出され、３次調査時の推測が妥当であったことが確認された。長軸長4.0m、短軸長3.4m、深さ25㎝を測る。

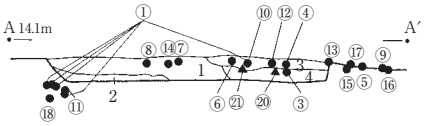
他遺構との重複関係　当住居跡には多くの土坑が重複している。３次調査区側で検出された土坑のうち(3)SK026・028については柱穴と考えられるピットが重なっており、いずれも土坑より新しいため、土坑が古く住居跡が新しいと推測される。他の(3)SK027・033・034・039については新旧関係は不明である。15次調査区側で検出された(15)SK152は、土層観察から住居跡より新しいことが確認されている。なお、図上ではつながっているように見える(3)SK033と(15)SK152は、覆土に焼土が微量含まれるなど共通点も認められるが、平面形状がやや不自然で同一の土坑とするには疑問も残る。

内部の状況　記録が残るのは15次調査区側のみである。壁は立上がりがかなり緩やかである。覆土は全体にローム粒子が多量に混入し、しまりが強い。床面は平坦であるが、特に硬化面は検出されなかった。

ピット　全部で７基検出されている。壁に沿って並ぶと思われ、南側のP6以外は柱穴であろう。

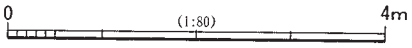
出土遺物　図中遺物番号の後に(15)と記載されているのは15次調査区側、それ以外は３次調査区側から出





(3)SI032
1　明褐色土　ローム粒多混、φ10㎜ロームブロック少混、しまり強
2　褐色土　　ローム粒やや多混、しまり強

(15)SK152
3　暗褐色土　砂粒少混、しまり極めて強
4　褐色土　　焼土粒もしくは赤色スコリア微混、しまり強



(3)SK027
1　暗褐色土　　ローム粒・焼土粒微混、しまり極めて強
2　暗褐色土　　φ5㎜黄褐色土やや多混（斑状）、しまりやや弱
3　暗褐色土　　褐色粘質土との混土、しまりやや弱
4　黄褐色土　　φ10㎜黄色土斑状、しまりやや弱
5　暗黄褐色土　ローム粒・黒色粒少混、しまりやや弱
6　褐色粘質土　φ5㎜黄褐色土斑状

(3)SK028
7　暗褐色土　　ローム粒微混、しまり強
8　暗褐色土　　ローム粒・炭化物粒やや多混、φ5㎜ロームブロック少混
9　暗褐色土　　1・2より色調暗い、ローム粒多混
10　褐色粘質土　φ3㎜ローム粒やや多混

(3)SK026
11　暗褐色土　ローム粒少混、炭化物粒微混、しまり極めて強
12　黄褐色土　φ5㎜ロームブロック微混、しまり極めて強

(3)SK036
13　暗褐色土＋黄褐色土
14　暗褐色土　φ5㎜ローム粒多混（斑状）
15　黄褐色土　しまり強

(3)SK037
16　黒褐色土　　しまり弱
17　暗褐色土
18　暗黄褐色土　φ5㎜ロームブロック少混、しまり強
19　褐色土　　φ5㎜ロームブロック多混、しまり強

(3)SK038
20　暗褐色土　炭化物粒・黒色土粒少混、しまり強
21　暗褐色土　5・7・8に比べ黄色味強い
22　暗褐色土　5に類似する、6・8より色調暗い、しまり弱
23　褐色土　　6に類似するが6より色調暗い、しまり強

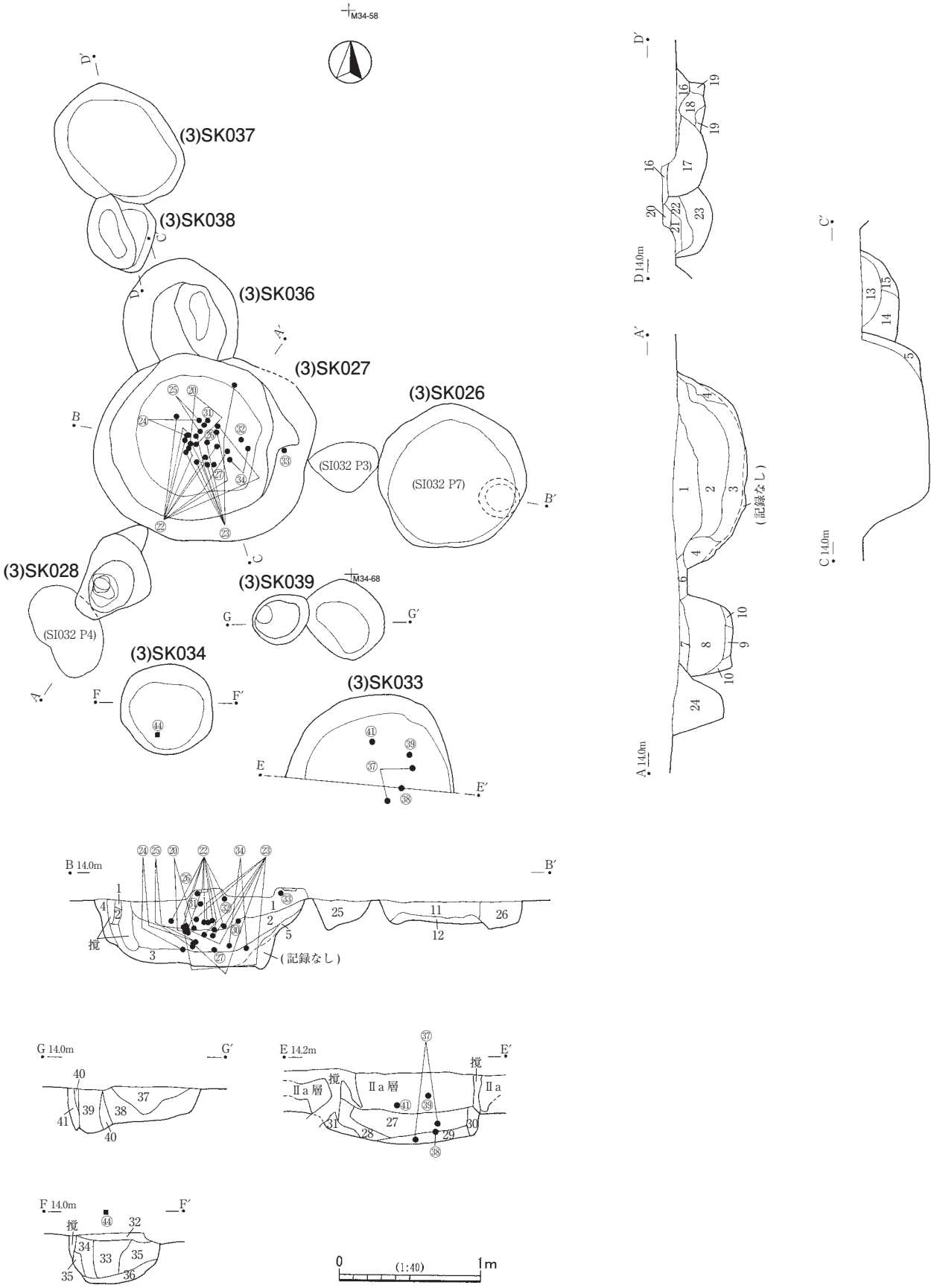
(3)SI032 P3・4・7
24　暗黄褐色土　しまり強
25　暗黄褐色土　しまり強
26　暗黄褐色土　しまり強

(3)SK033
27　暗褐色土　ローム粒・焼土粒微混、しまり強
28　暗褐色土　ローム粒微混、しまり強
29　黒褐色土　黄褐色土少混、しまりやや弱
30　黄褐色土　しまりやや強
31　暗褐色土　28より色調やや明るい、しまりやや弱、粘性やや強

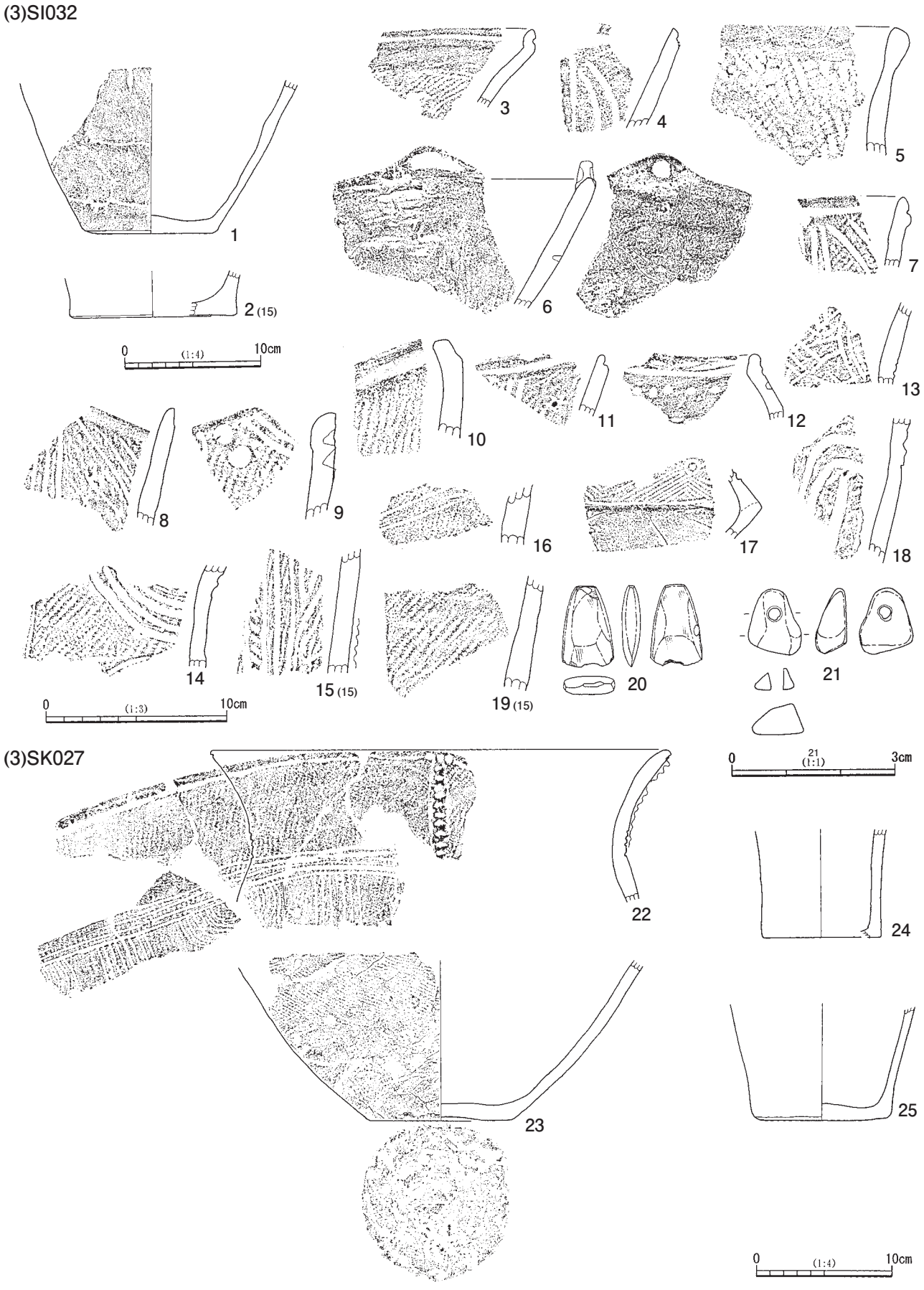
(3)SK034
32　暗褐色土　　黒色土粒微混、SI032覆土？
33　暗褐色土　　ローム粒・黒色土粒少混
34　暗褐色土　　ローム粒微混
35　暗黄褐色土　黄褐色土粒多混（散在）、粘性やや強
36　褐色粘質土　しまり強、粘性やや強

(3)SK039
37　黄褐色土　黒色土粒・ローム粒少混、粒子細、しまり強
38　暗褐色土　37より黒色土粒・ローム粒の粒子大、しまりやや弱
39　暗褐色土　覆土中色調最も黒い、φ10㎜ロームブロックやや多混、しまり強、柱痕跡？
40　暗褐色土　ローム粒多混、しまりやや弱
41　黄褐色土　ローム粒多混、しまりやや強

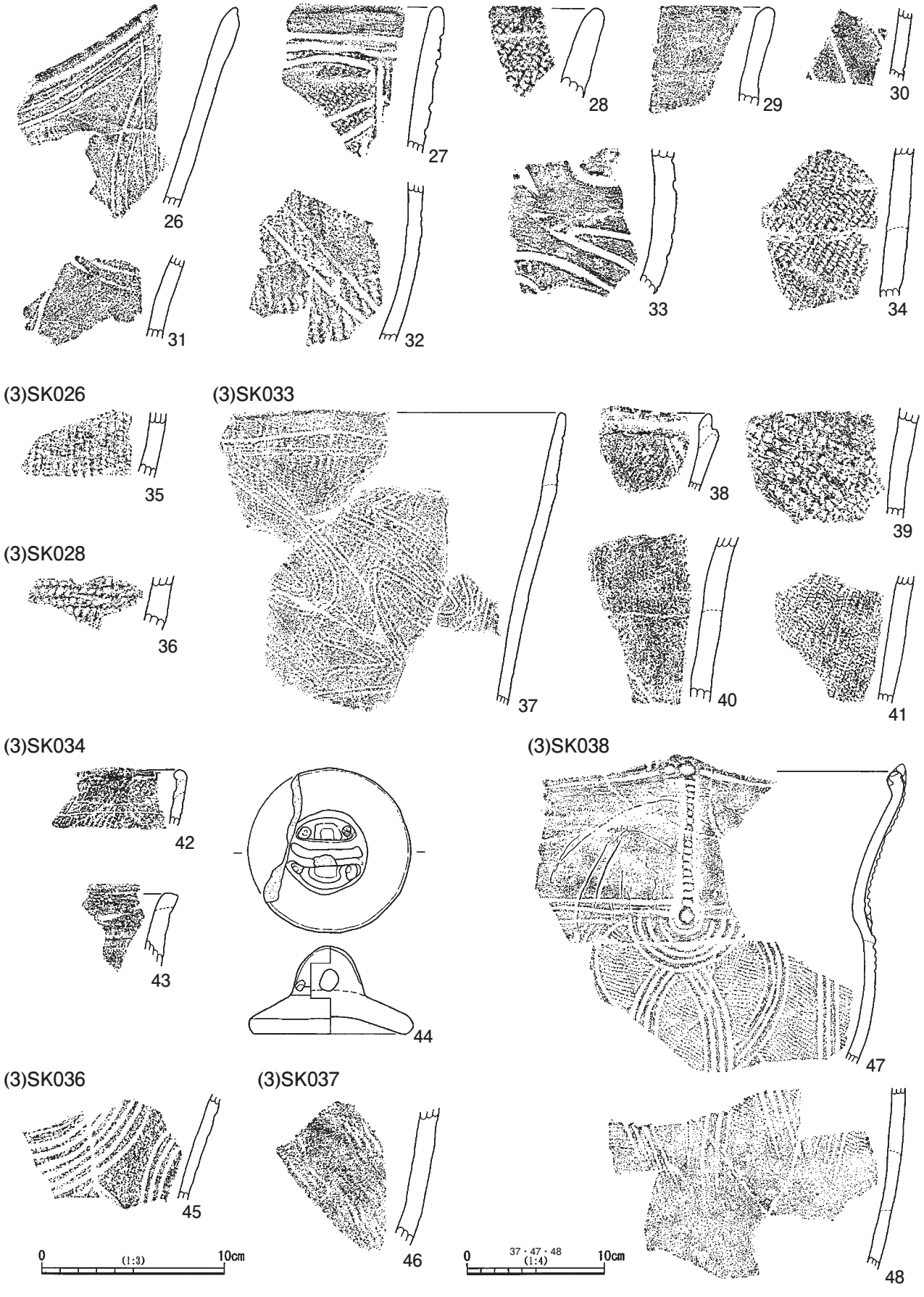
第46図　(3)SI032住居跡



第 47 図　(3)SK026 ～ 028・033・034・036 ～ 039 土坑



第 48 図　(3)SI032 住居跡、(3)SK027 土坑出土遺物



第 49 図　(3)SK026 ～ 028・033・034・036 ～ 038 土坑出土遺物

土したものである。１～19はいずれも堀之内式である。17は注口土器胴部である。20は磨製石斧である。21は翡翠製垂飾で、熱により表面が劣化し亀裂が認められる。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK026（第47・49図、図版３・36）

状況　(3)SI032住居跡の北東部に位置する。直径105cmのほぼ正円を呈し、床面はほぼ平坦で深さは15cmである。東端部には(3)SI032の柱穴と考えられるピットが存在し、土層観察からピットの方が新しいと判断される。

出土遺物　図示できるのは１点のみである。35は縄文施文の深鉢胴部で、後期前葉と推測される。

時期　出土遺物からの判断は難しいが、堀之内式期の住居跡より古いものの大きくは遡らないものと推測される。

(3)SK027（第47～49図、図版３・34・35）

状況　(3)SI032の北西部に位置し、(3)SK026からは50cm西側である。東西150cm、南北120cmの楕円形に近い不整円形を呈する。床面は東西方向に平坦で南北方向は緩やかに傾斜する。深さは53cmである。

出土遺物　22は堀之内式の深鉢口縁部である。23は堀之内式と思われる浅鉢底部である。24・25は堀之内式の深鉢底部である。26～33は堀之内式で、33は鉢であろう。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK028（第47・49図、図版３・36）

状況　(3)SI032の北西部に位置する。(3)SK027の南西側に接するように検出されている。住居の柱穴と思われるピットと重なっており、ピットより古い。坑底は円形になるものの開口部は不整形で、(3)SK027に接するように張り出した部分は土坑とは無関係の可能性がある。その張り出し部分も含めた長軸長は77cm、短軸長は50cm、深さは38cmを測る。

出土遺物　図示できるのは１点のみである。36は縄文施文の深鉢胴部で、後期前葉と推測される。

時期　出土遺物からの判断は難しいが、堀之内式期の住居跡より古いものの大きくは遡らないものと推測される。

(3)SK033（第47・49図、図版３・36）

状況　(3)SI032住居跡の東部に位置する。南半分は調査区境となっており、３次調査の際は全掘できなかった。南側の15次調査の際は(15)SK152が検出されたが、当土坑と同一かは断定できない。規模は東西長120cm、南北は65cmほどが検出されている。床面は概ね平坦で深さはⅡa層下部より22cmである。

出土遺物　37・38は堀之内式の深鉢口縁部である。39～41は縄文施文のみあるいは沈線のみであるが、やはり堀之内式と思われる。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK034（第47・49図、図版３・36・93）

状況　(3)SI032の西部に位置する。直径63cmのほぼ正円形を呈する。断面は椀形を呈し、深さは34cmを測る。

出土遺物　42・43は堀之内式の深鉢口縁部である。44は蓋形土製品で、堀之内式と考えられる。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK036（第47・49図、図版３・36）

状況　(3)SK027の北側に位置する。土層観察より(3)SK027より古いと判断される。残存している部分で南北長72㎝、東西長82㎝を測る。断面は平坦な坑底から開口部に向け緩やかに立ち上がる形状であり、深さは27㎝を測る。

出土遺物　図示できるのは１点のみである。45は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK037・038（第47・49図、図版３・36）

状況　(3)SK036の北北西側に接するように位置し、両者は重なり合っている。土層観察から判断すると(3)SK038が古く(3)SK037が新しい。(3)SK037は長軸長95㎝、短軸長78㎝の不整円形を呈する。坑底はやや凹凸があるものの概ね平坦で、深さは22㎝を測る。(3)SK038は(3)SK037の南側に位置し、残存長軸長56㎝、短軸長50㎝の不整円形を呈する。断面椀形を呈し、深さは35㎝を測る。

出土遺物　(3)SK037出土で図示できるのは１点のみである。46は縄文施文の深鉢胴部で、後期前葉と推測される。(3)SK038出土の47・48は同一個体で、深鉢の口縁部と胴部である。堀之内式である。

時期　(3)SK038の出土遺物は堀之内式に位置づけられ、それより新しい(3)SK037も近い時期と考えられる。

(3)SK039（第47図、図版３）

状況　(3)SI032住居跡の中心部に位置する。(3)SK026・027・033・034の各土坑との距離は30㎝～50㎝で、ちょうどそれらの中心に当たるような位置である。２基の土坑が重なったような瓢箪形を呈し、東西長94㎝、南北長57㎝である。深さはピット状の西側が31㎝、東側は26㎝である。西側は覆土中に柱痕跡を思わせる土層があり、(3)SI032住居跡の柱穴かもしれない。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、近接する他の遺構とほぼ同時期の堀之内式期と推定される。

(3)SI035（第50図、図版３・35・36・96）

形状と規模　当住居跡も３次調査区と15次調査区にまたがって検出されている。３次調査の際は半円形に並ぶピット５基で竪穴住居と想定した。15次調査の際は特に住居跡とは考えず独立した土坑として調査が行われたが、ピットの並び方などを検討した結果、１軒の住居跡として想定した。15基のピットが東西６ｍ、南北４ｍの範囲で概ね楕円形となるよう構築されているが、P14・15は帰属しない可能性もある。

内部の状況　どちらの調査区からも壁は検出されなかった。床面も残存しているか不明である。

炉　検出されなかった。

ピット　全部で15基検出されている。規模にばらつきがあるほか配置も不規則である。P1・3・5・10は主柱穴であろう。

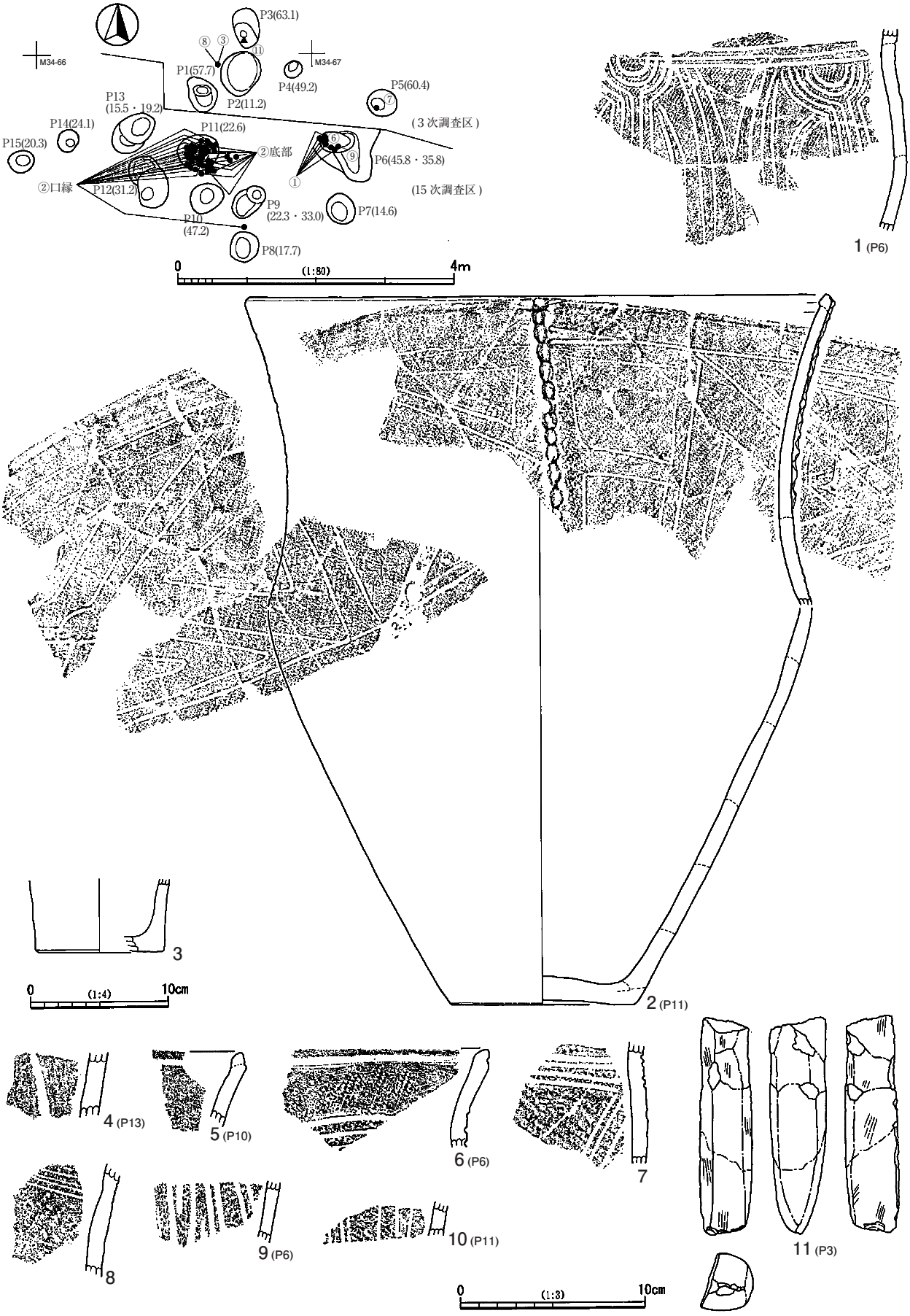
出土遺物　４は称名寺式の深鉢胴部である。２は器形復元ができる堀之内式の大形の深鉢である。熱により摩耗している。５・６は堀之内式の深鉢口縁部、１・７～10は胴部である。11は磨製石斧であるが、先端側（一点鎖線より先）は強く熱を受けており赤色変成している。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI045（第51・52図、図版３・36・37）

形状と規模　東西長4.3m、南北長3.5mの楕円形を呈する。

他遺構との重複関係　(3)SI046と接しているが、新旧関係は不明である。また、(3)SK076・077土坑が重なっているが、確認面では視認できなかったことから住居跡が新しく土坑が古いと考えられる。



第 50 図　(3)SI035 住居跡、出土遺物

内部の状況　壁はわずかに立上がりが確認できる程度で、南側は流出している。覆土についての記録はない。深さはごく浅く最深でも５㎝程度である。床面はほぼ平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉　中央部より南から検出されたP5・6の上面には焼土が堆積していたため、炉であると判断して調査を行ったが、覆土中の焼土の量はごく少なく底面にも熱を受けた痕跡が認められなかった。炉として使用されたかどうかは不明である。

ピット　７基検出されている。皿状を呈するものが多く、深さも柱穴とするには疑わしい。

出土遺物　３は加曽利Ｅ式の深鉢口縁部である。４は称名寺式の深鉢胴部である。５～12は堀之内式の深鉢口縁部、１・２・13・14・16は胴部である。15は堀之内式の浅鉢口縁部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI046（第51・53図、図版３・37・38）

形状と規模　東西長4.5m、南北長3.8mの楕円形を呈する。(3)SI045より若干大きいものの、形状は極めて類似する。

他遺構との重複関係　(3)SI045と接しているが、新旧関係は不明である。

内部の状況　壁はわずかに立上がりが確認できる程度である。覆土についての記録はない。深さはごく浅く最深でも10㎝程度である。床面はほぼ平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉　検出されなかった。

ピット　３基検出されている。皿状の浅いものしかなく、柱穴とは考えにくい。

出土遺物　遺存状況がよい資料が多かった。28・29・32・34～37は堀之内式の深鉢口縁部である。30・31・38～42は堀之内式の深鉢胴部である。33は底部で、やはり堀之内式と考えられる。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。(3)SI045より新しい資料が多く、遺構の新旧関係を示しているかもしれない。

(3)SK076・077（第51・52図、図版３・37）

状況　(3)SI045内の北部に位置する。(3)SK076は長軸長175㎝、短軸長90㎝、深さ264㎝の不整円形を呈する、いわゆる陥穴である。(3)SK077は(3)SK076と重なっているため半分程度しか残存していないが、残存部の長軸長88㎝、短軸長は34㎝、深さは31㎝を測る。

出土遺物　(3)SK076の23は黒浜式の深鉢口縁部である。24は諸磯式の深鉢口縁部である。25は分かりにくいが縄文と無文部との境が微隆起線状に膨らんでおり、加曽利Ｅ式と推測した。26・27は称名寺式の深鉢口縁部である。(3)SK077の17・18・22は黒浜式の深鉢で、17は口縁部、18は胴部、22は底部直上である。19・20は諸磯式の深鉢口縁部である。21は堀之内式の深鉢胴部である。

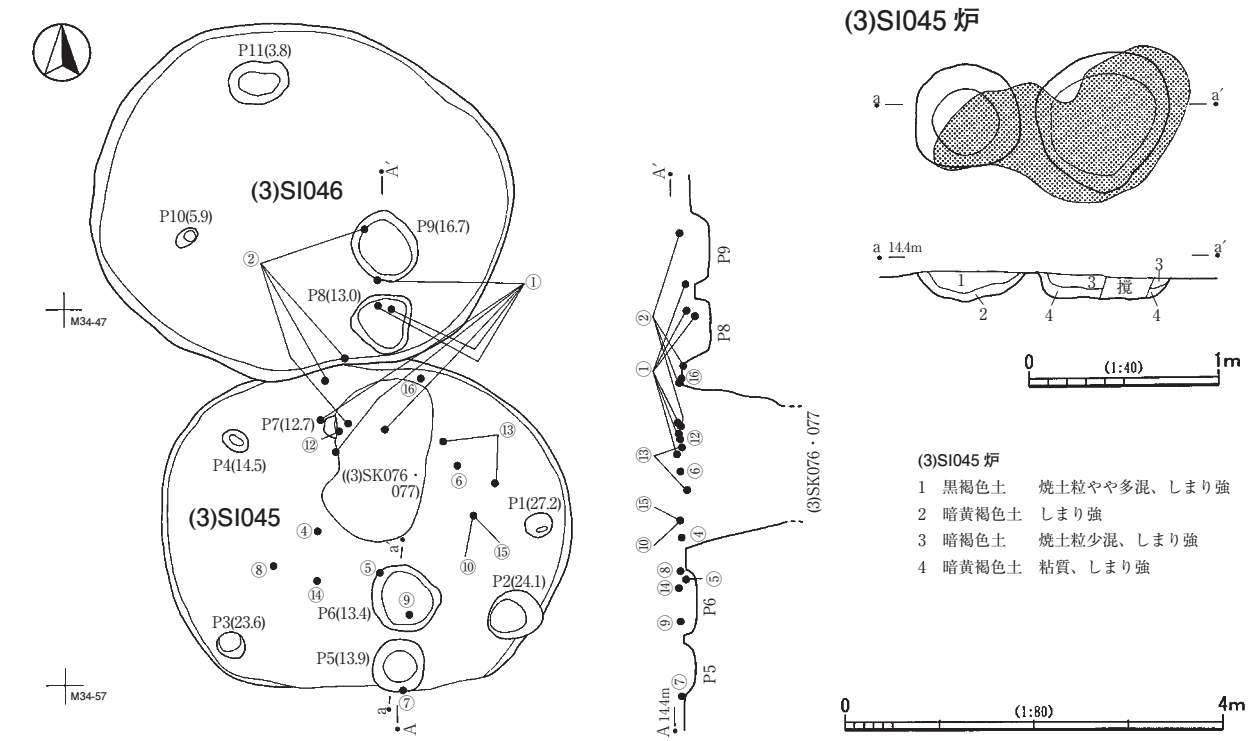
時期　主たる出土遺物は黒浜式、次いで諸磯式であること、そして陥穴の形状などから、両者とも前期中葉から後葉の遺構と考えられる。

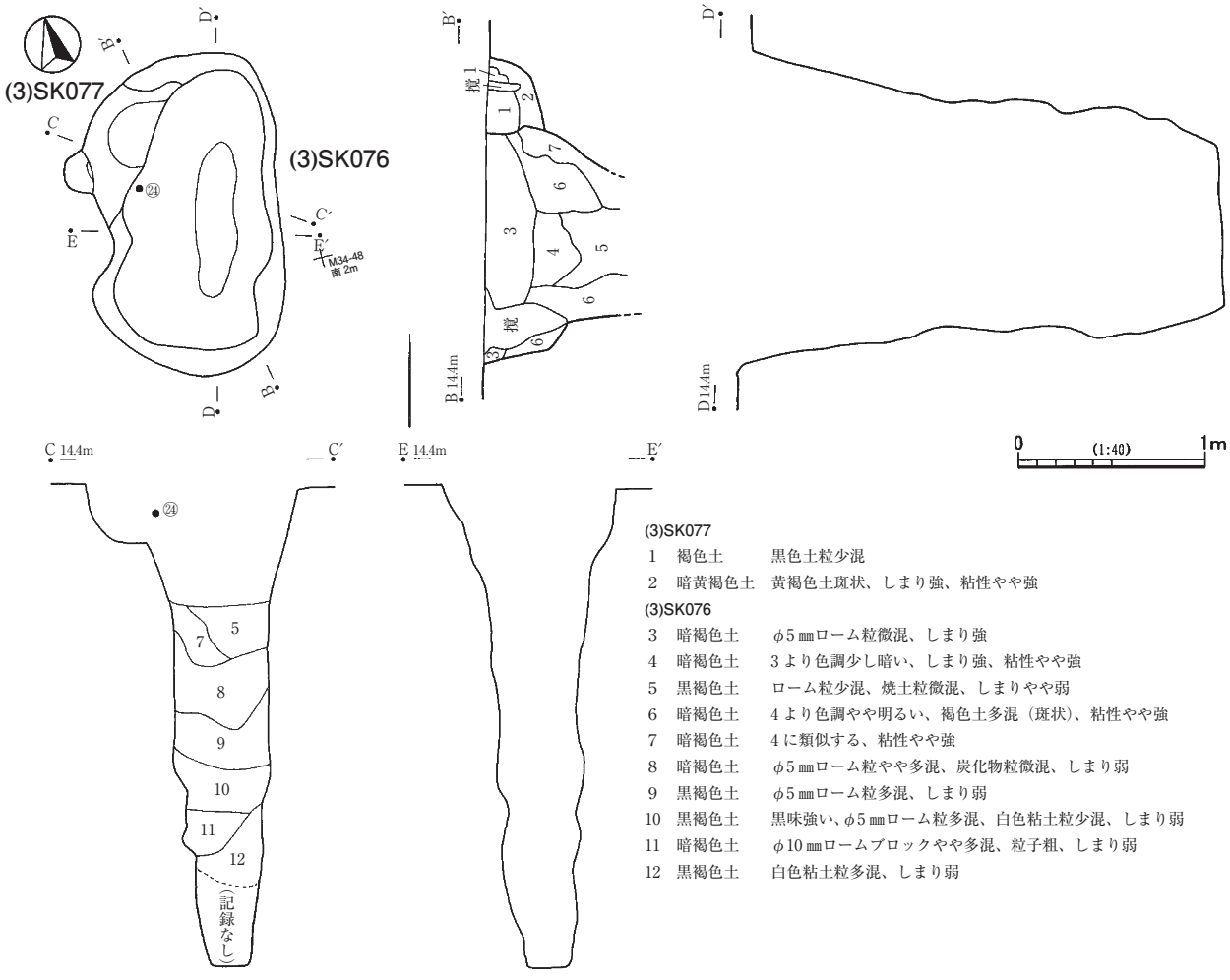
(3)SI048（第54図、図版３・38）

形状と規模　当住居跡は調査時19基からなるピット群として捉えられていたが、配置等を検討した結果住居跡の可能性があると考えた。東西6.1m、南北5.2mの楕円形状にピットが並ぶ。深さはいずれも30㎝以上あり柱穴と考えられる。

他遺構との重複関係　P10と(3)SK041が重なっているが、新旧関係は不明である。

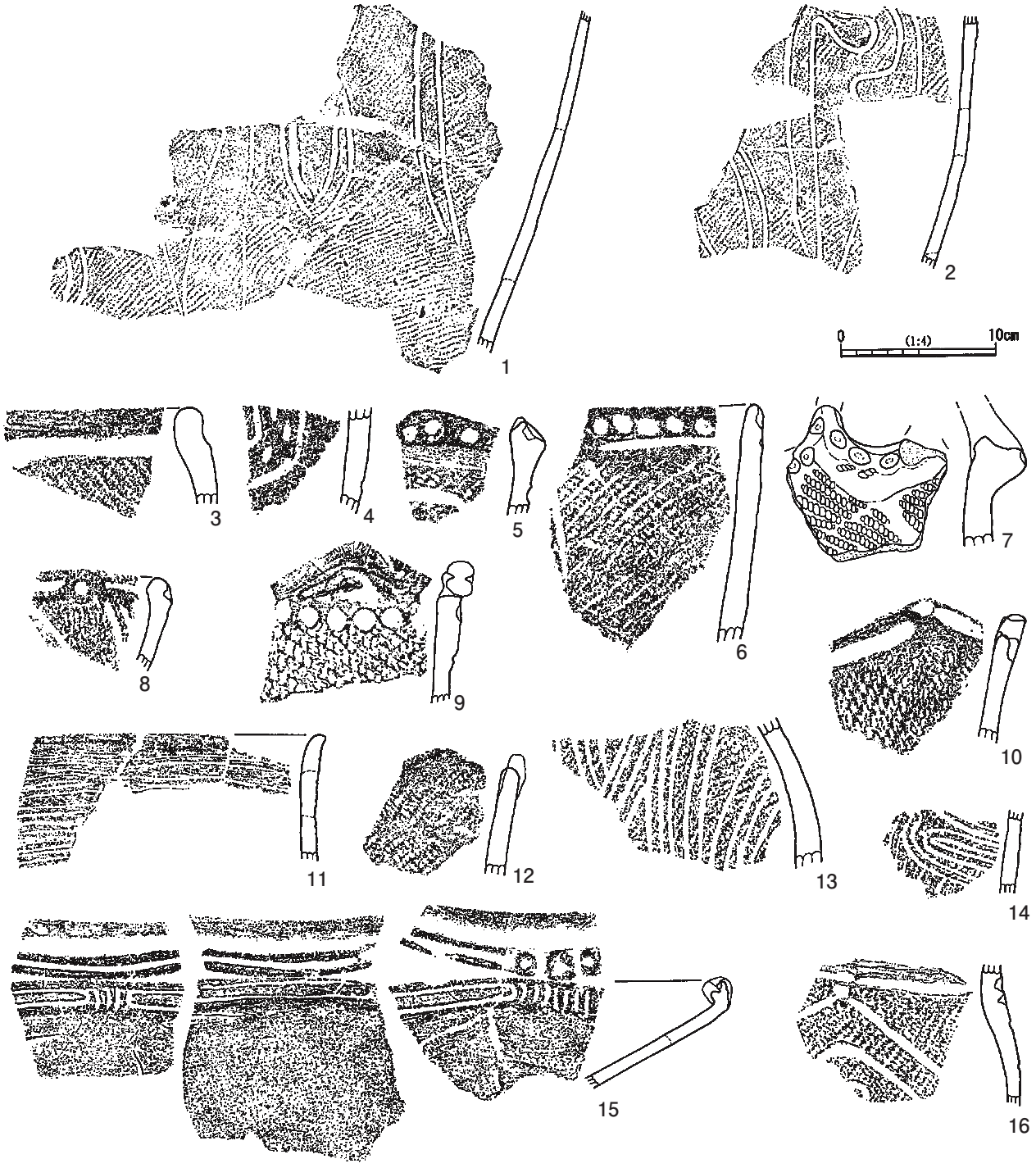
内部の状況　壁は残されておらず、床面も残存しているか不明である。



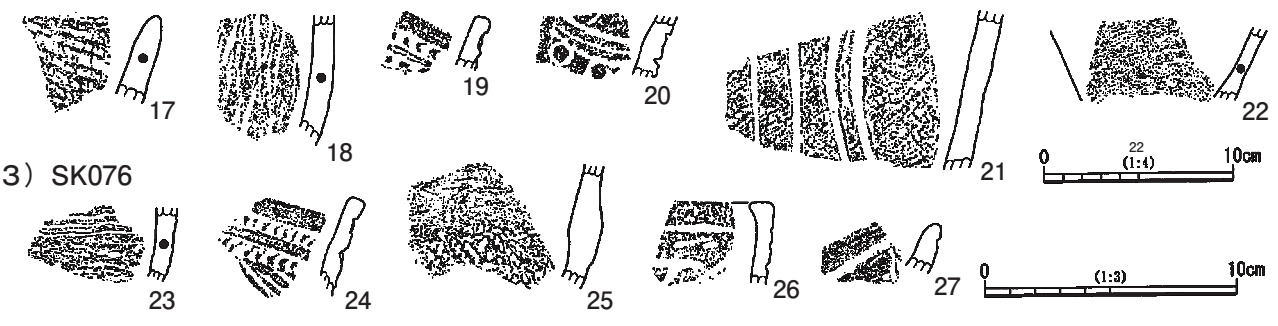


第 51 図　(3)SI045・046 住居跡、(3)SK076・077 土坑

（3）SI045

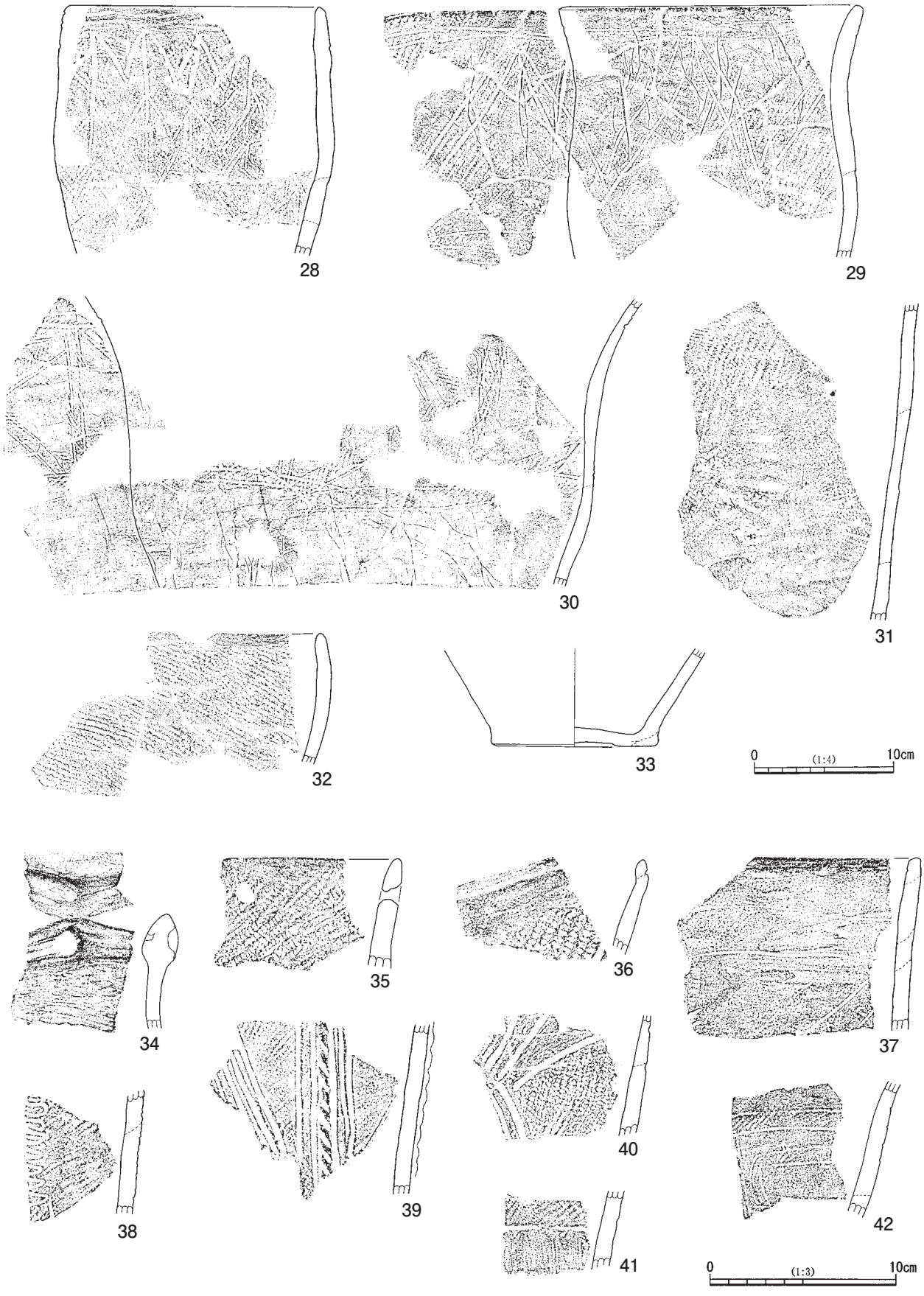


（3）SK077

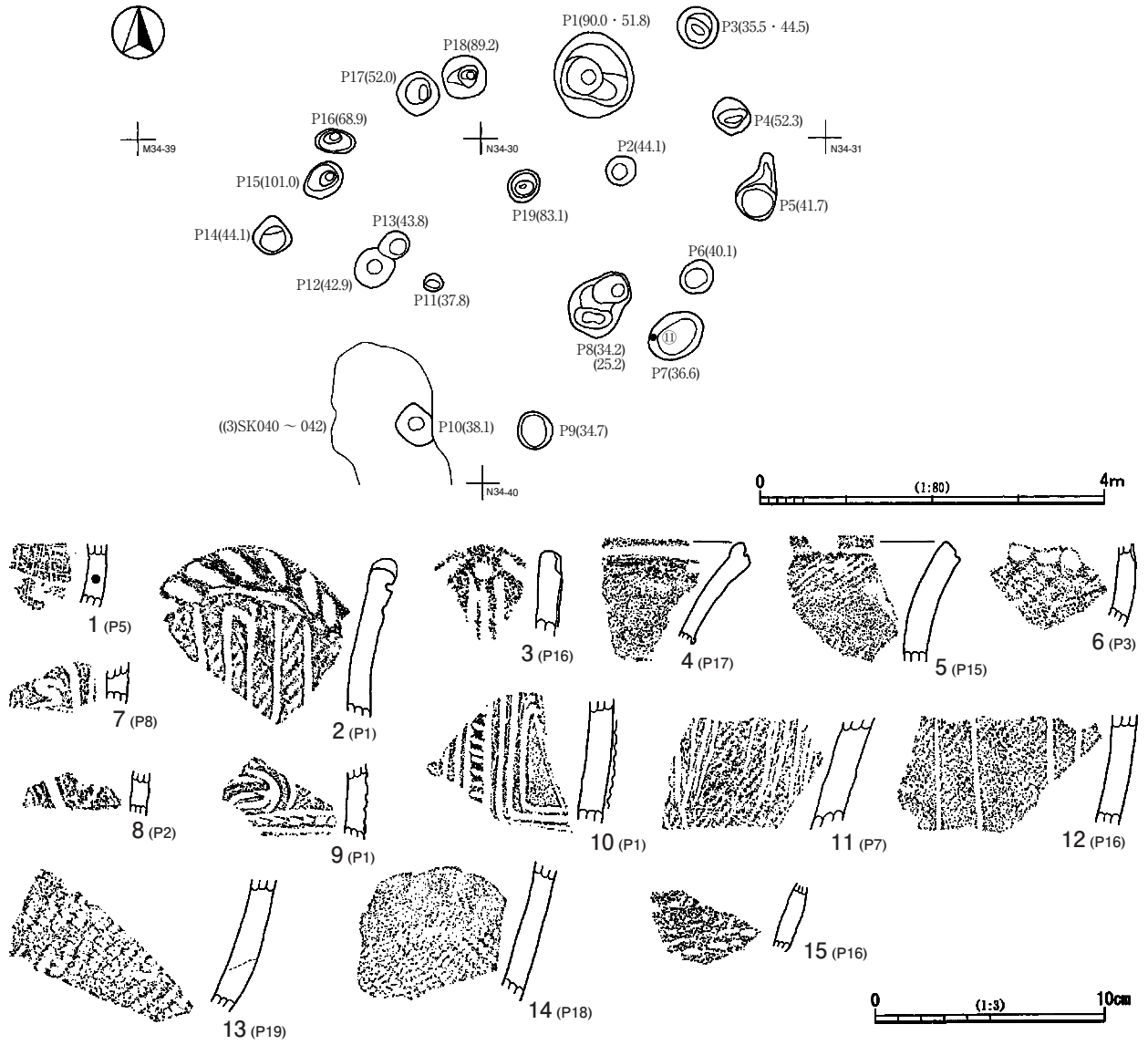


（3）SK076

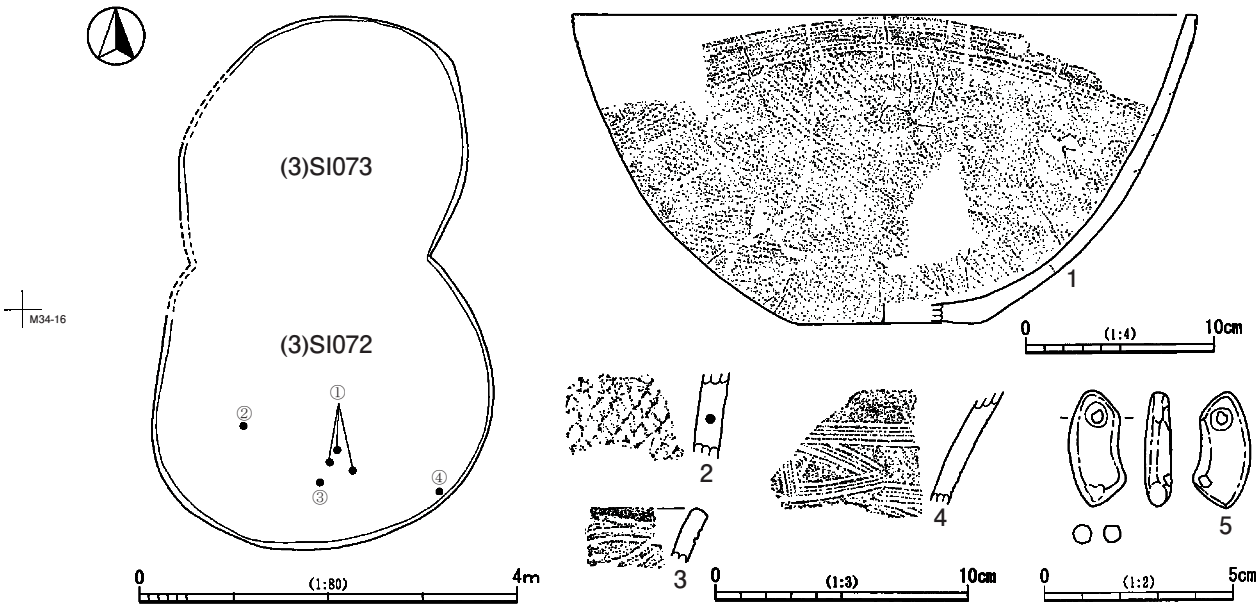
第 52 図　(3)SI045 住居跡、(3)SK076・077 土坑出土遺物



第 53 図　(3)SI046 住居跡出土遺物



第 54 図　(3)SI048 住居跡、出土遺物



第 55 図　(3)SI072・073 竪穴状遺構、出土遺物

炉　検出されていない。

出土遺物　１は黒浜式の深鉢胴部である。２～５は堀之内式の深鉢口縁部、６～12は胴部である。13～15は縄文のみの深鉢胴部破片で、堀之内式であろう。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI072・073（第55図、図版３・38・95）

形状と規模　２基の円形プランが重なり合ったような瓢箪形を呈する。別々の遺構番号が付されたが、境界は判然としない。両者を合わせた長軸長は5.7m、短軸長は(3)SI072が3.6m、(3)SI073が3.0mである。隅丸長方形を呈する単一の竪穴住居跡である可能性を指摘しておく。

内部の状況　覆土はごく浅く最深でも５cm程度である。断面が実測されていないため新旧関係は不明である。床面は平坦で、両住居跡のレベル差もない。

炉　検出されていない。

ピット　検出されていない。

出土遺物　１～４の土器はいずれも(3)SI072の範囲から出土している。２は黒浜式の深鉢胴部である。１は諸磯式の浅鉢である。３は諸磯式の深鉢口縁部、４は諸磯式の深鉢胴部である。５は滑石製の垂飾であるが、本来は玦状耳飾りだったものを欠損後に再加工したものと思われる。なおこの資料は表土剥ぎ中に(3)SI073付近から出土したもので、遺構確認面より若干上位ではあったが当住居跡に伴うものと考えてここに掲載した。

時期　(3)SI072の主たる出土遺物は諸磯式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。(3)SI073は遺物から時期を判断することはできないが、(3)SI072とは大きく隔たっていないと思われる。

(3)SI078～081（第56・58～60図、図版４・38～40・95）

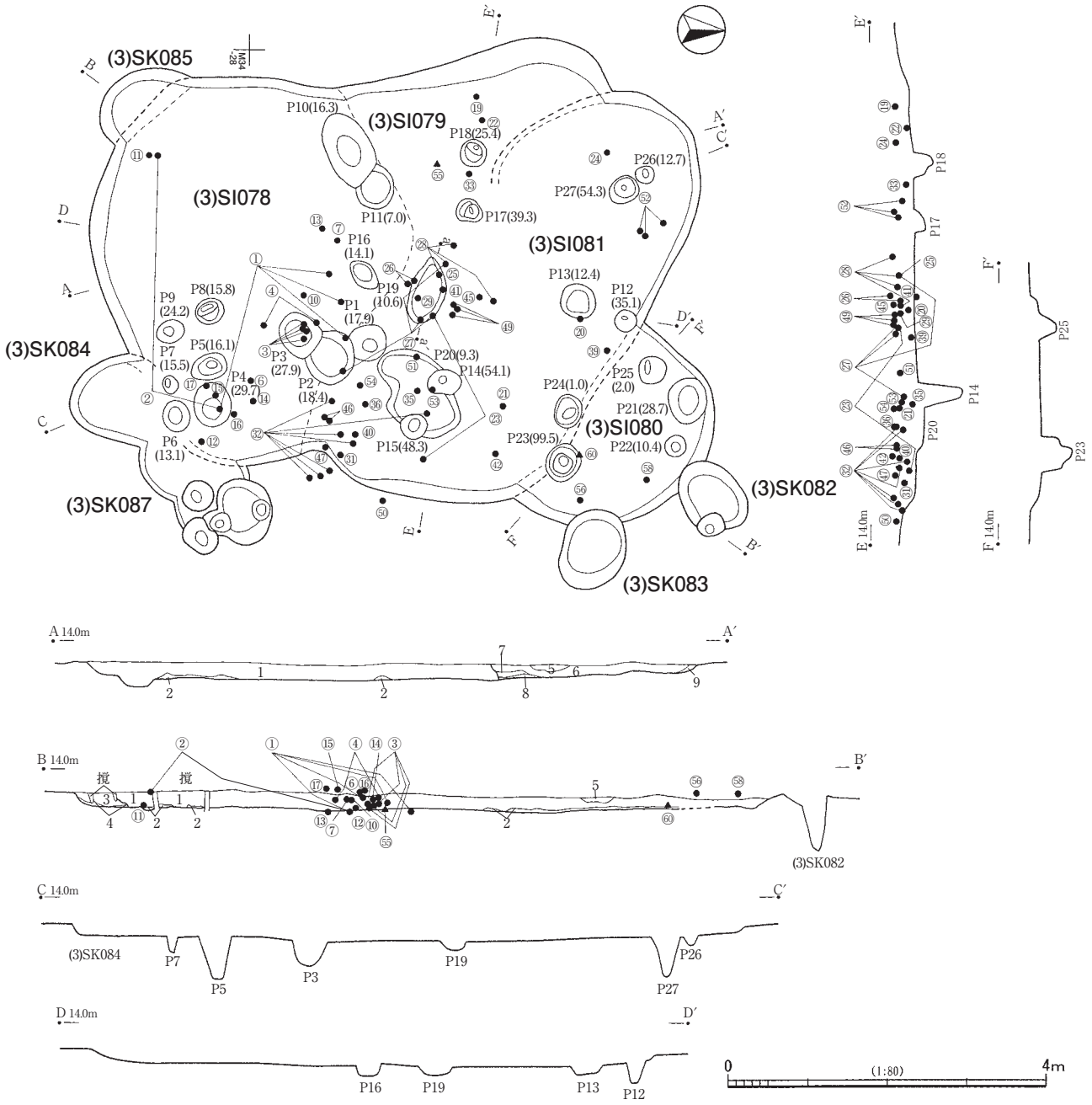
形状と規模　４軒の竪穴住居跡が重なり合っていると認識されたものであるが、個別に分離するのは不可能なので一括して説明する。住居部分は南北8.0m、東西6.1mの範囲に収まる。(3)SI078と(3)SI079及び(3)SI079と(3)SI080の境にそれぞれ引いた破線は、確認面上で把握された住居の範囲である。(3)SI081西南側の輪郭線は土層断面から推測したものである。以上の状況から判断して、(3)SI078・080・081は円形もしくはそれに類するプランと推測される。最も古いと思われる(3)SI079の形状は判然としないが、隅丸長方形の可能性がある。

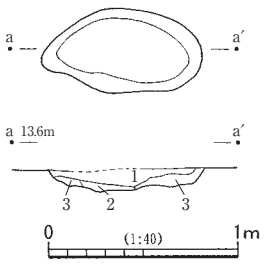
他遺構との重複関係　土坑との重複が多い。土層観察によって(3)SK085は住居より古く、(3)SK083・084は新しいと考えられる。それ以外はやや不明瞭であるが、確認面上での検出状況から(3)SK082・087とも住居群より古いと考えられる。

内部の状況　壁はいずれもなだらかに立ち上がる。深さは最深で20cm程度で、床面は各住居ともほとんどレベル差がない。表面観察による各住居の形状と新旧関係は先述したとおりであるが、覆土の観察では(3)SI081以外明確に分離できておらず詳細不明である。

炉　全体のほぼ中心部から１基検出された。位置から考えて(3)SI079に伴う可能性が強いが、断定はできない。長軸長85cm、短軸長45cmの不整円形で深さは11cmである。覆土に含まれる焼土は微量であり、熱を受けた形跡がほとんど認められないことから使用頻度は低かったとみられる。

ピット　個別の住居ごとに番号が１から振られていたが、混同しやすいので通し番号とした。全部で25基検出されているが、配置は極めて不規則でありピットと住居の帰属関係も不明である。全体に浅いものが





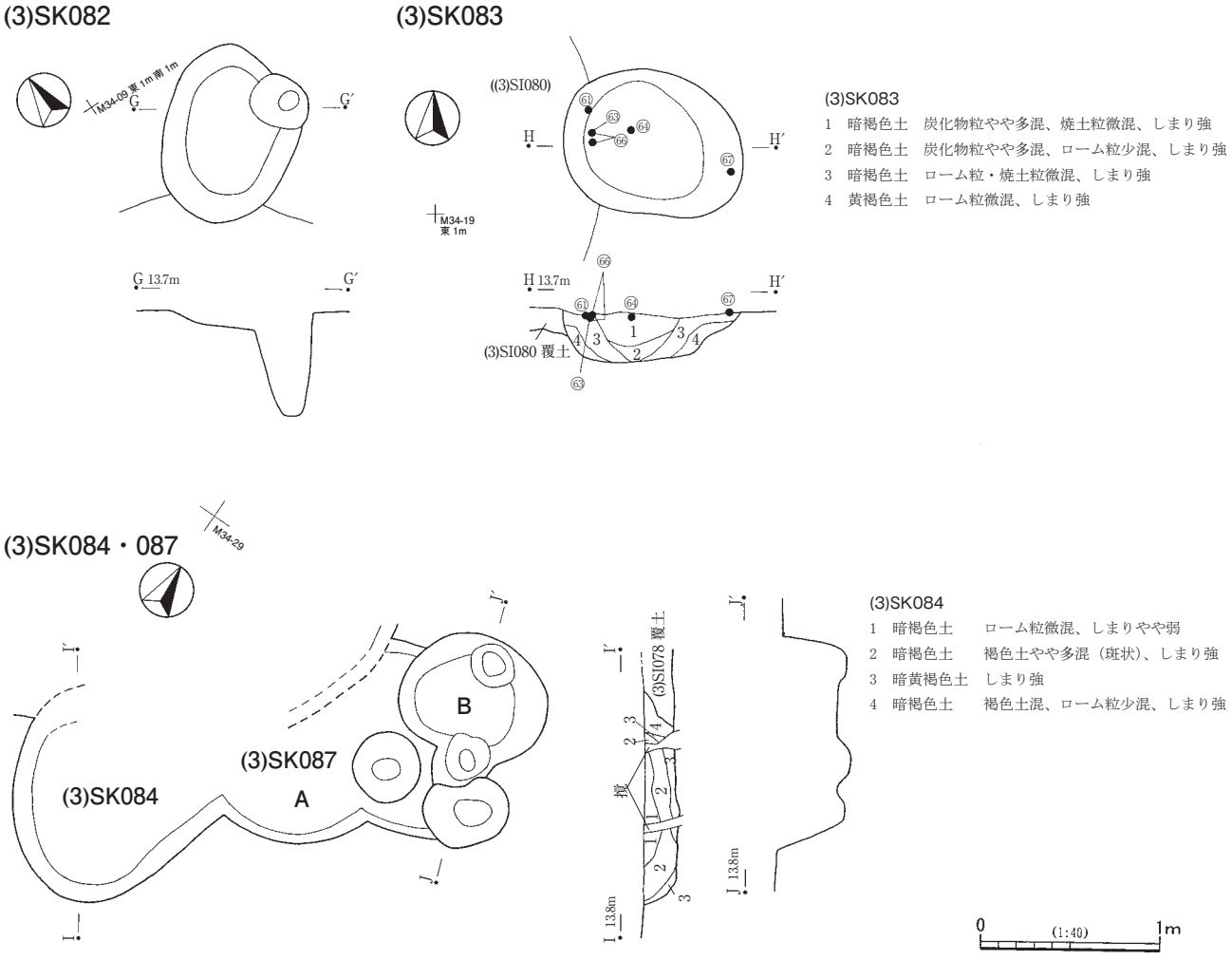
(3)SI078 炉

1　暗褐色土　　ローム粒多混、焼土粒微混、しまり強
2　暗褐色土　　1より色調明るい、ローム粒やや多混、しまり強
3　褐色粘質土　ローム粒やや多混、しまり強

(3)SI078 ～ 081、(3)SK082・083・085

1(SI078 ～ 080)　暗褐色土　ローム粒非常に多混、焼土粒微混、粒子粗、しまり強
2(SI078 ～ 080)　黄褐色土　φ50 ㎜ロームブロック多混、しまり強（貼床材？）
3(SK085)　暗褐色土　ローム粒微混、粒子粗、しまり強
4(SK085)　褐色土　ローム粒微混、しまりやや弱
5(SI081)　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまり強
6(SI081)　暗褐色土　9より色調明るい、ローム粒やや多混、9よりローム粒小径、しまり強
7(SI081)　暗褐色土　9に似る、ローム粒少混、しまり強
8(SI081)　暗黄褐色土　φ10 ㎜ロームブロックやや多混
9(SI081)　褐色土　ローム粒微混、しまり強

第 56 図　(3)SI078 ～ 081 住居跡、(3)SK082 ～ 085・087 土坑



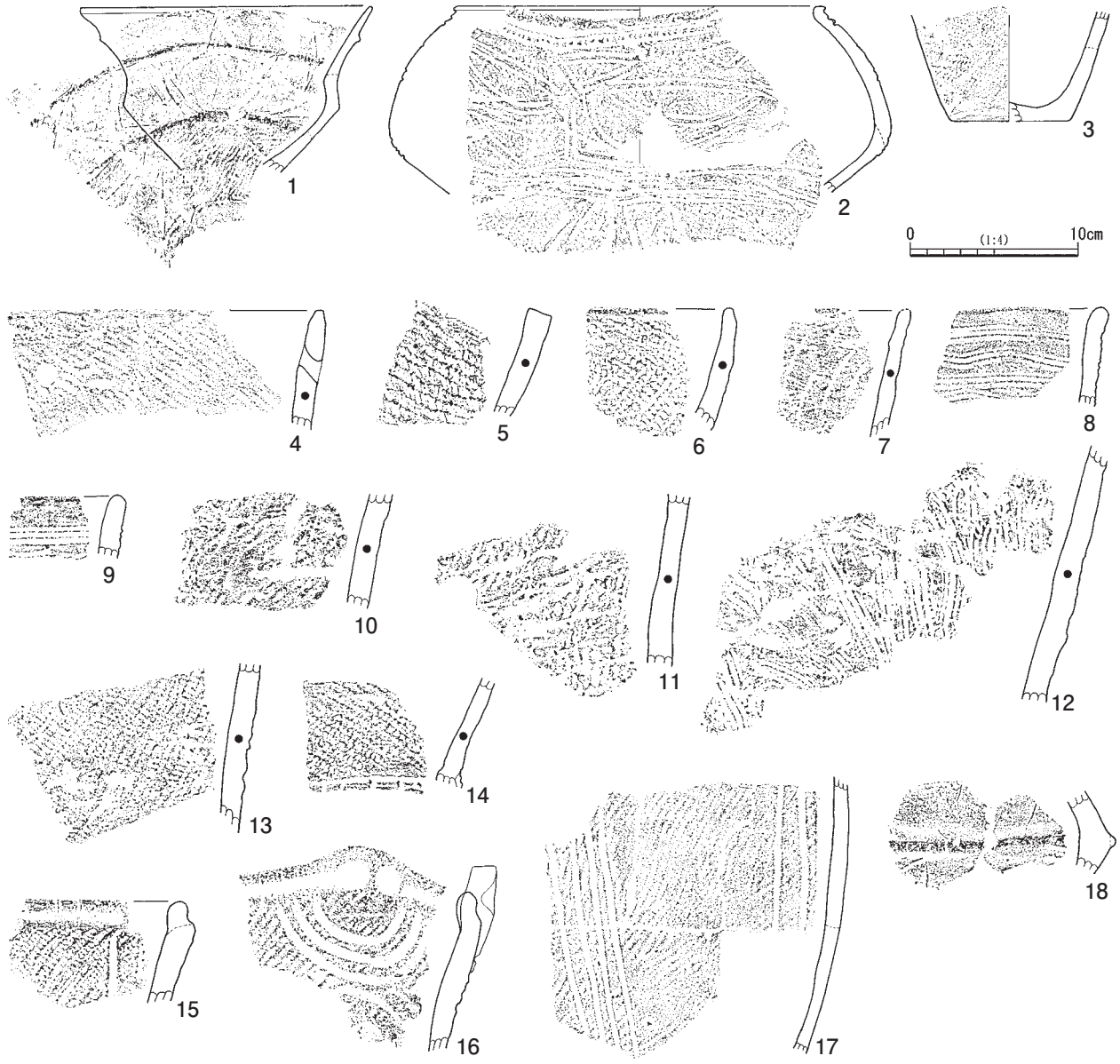
第 57 図　(3)SK082 ～ 084・087 土坑

多く柱穴の配置も判断しがたい。

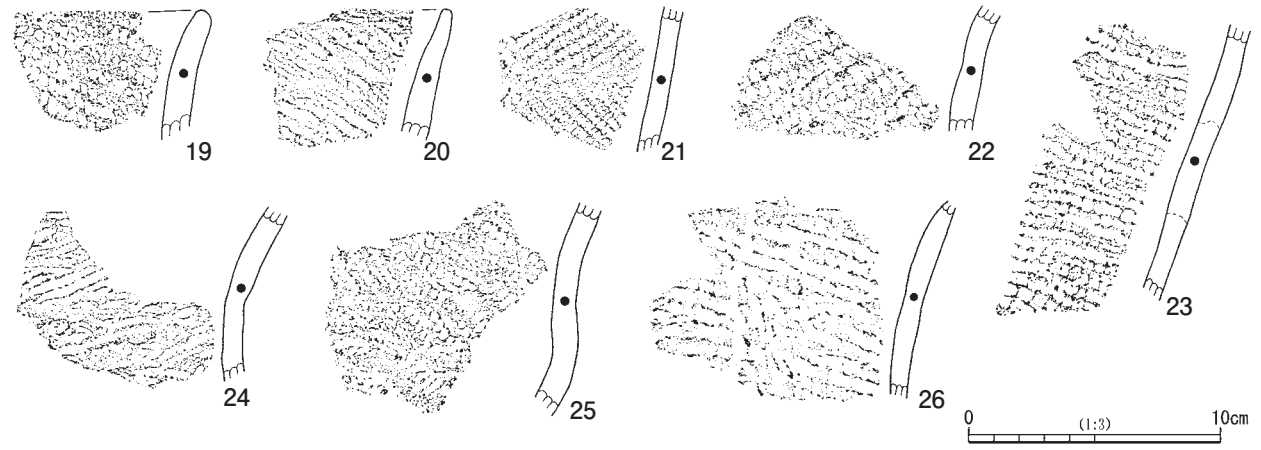
出土遺物　出土位置別にレイアウトしたが、多様な時期の遺物が入り交じった状態である。１～18は(3)SI078の範囲から出土した遺物である。４～７は黒浜式の深鉢口縁部、10 ～ 14は同じく黒浜式の深鉢胴部である。１～３は諸磯式で、１は類例に乏しい形状であるがおそらく浅鉢、２は浅鉢、３は深鉢底部である。８・９も同じく諸磯式の深鉢口縁部である。15・16は堀之内式の深鉢口縁部、17は胴部、18は注口土器と思われる。19 ～ 55は(3)SI079と(3)SI081の範囲から出土した遺物である。19・20は黒浜式の深鉢口縁部、21 ～ 26・33 ～ 36は胴部である。27 ～ 29・37・38は諸磯式の深鉢胴部である。39・40は称名寺式の深鉢口縁部と胴部である。32・41 ～ 47は堀之内式の深鉢口縁部、48 ～ 53は胴部である。54は加曽利Ｂ式の浅鉢胴部である。55はチャート製の石鏃である。56 ～ 60は(3)SI080の範囲から出土した遺物である。56・57は黒浜式の深鉢口縁部である。58は諸磯式の深鉢口縁部、59は胴部である。60は石鏃で、信州系と思われる黒曜石が素材である。

時期　出土遺物から大きく黒浜式期、諸磯式期、堀之内式期に分けられる。最も古い(3)SI079が黒浜式期

(3)SI078

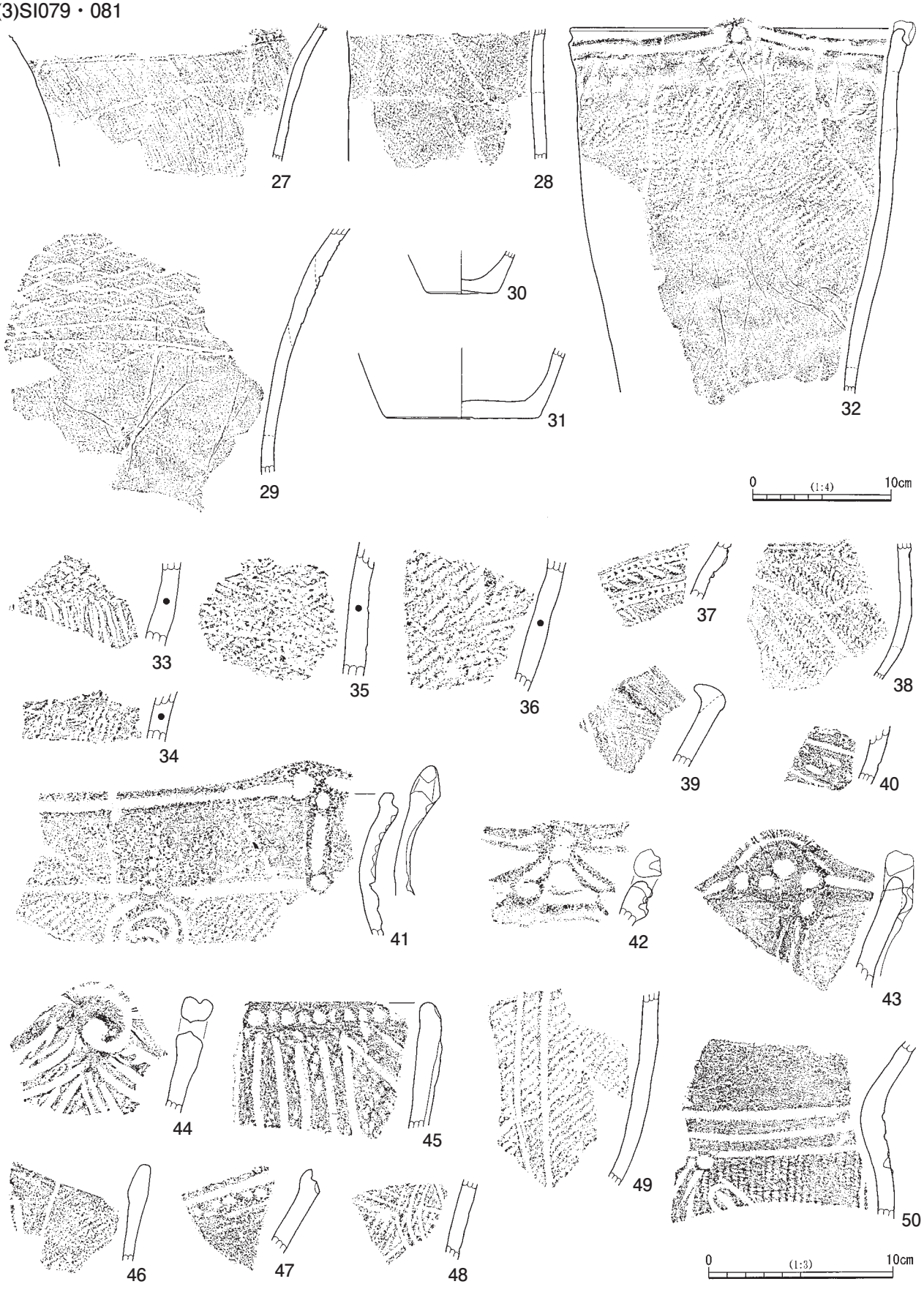


(3)SI079・081



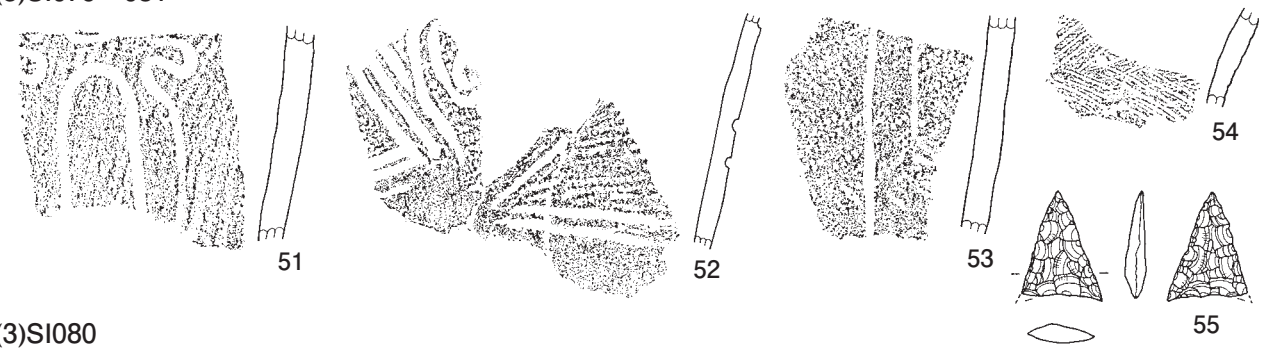
第 58 図　(3)SI078・079・081 住居跡出土遺物

(3)SI079・081

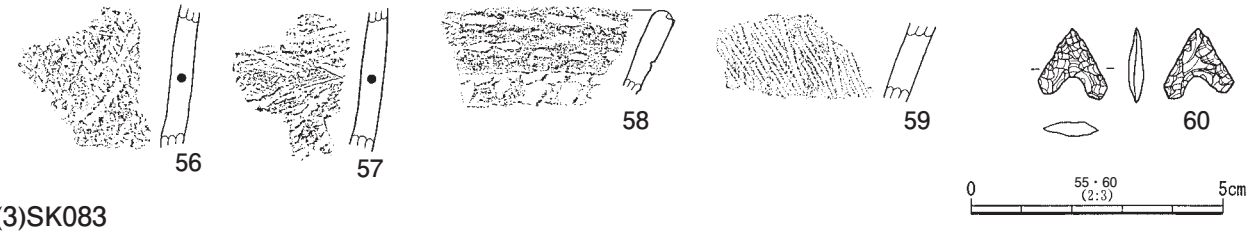


第 59 図　(3)SI079・081 住居跡出土遺物

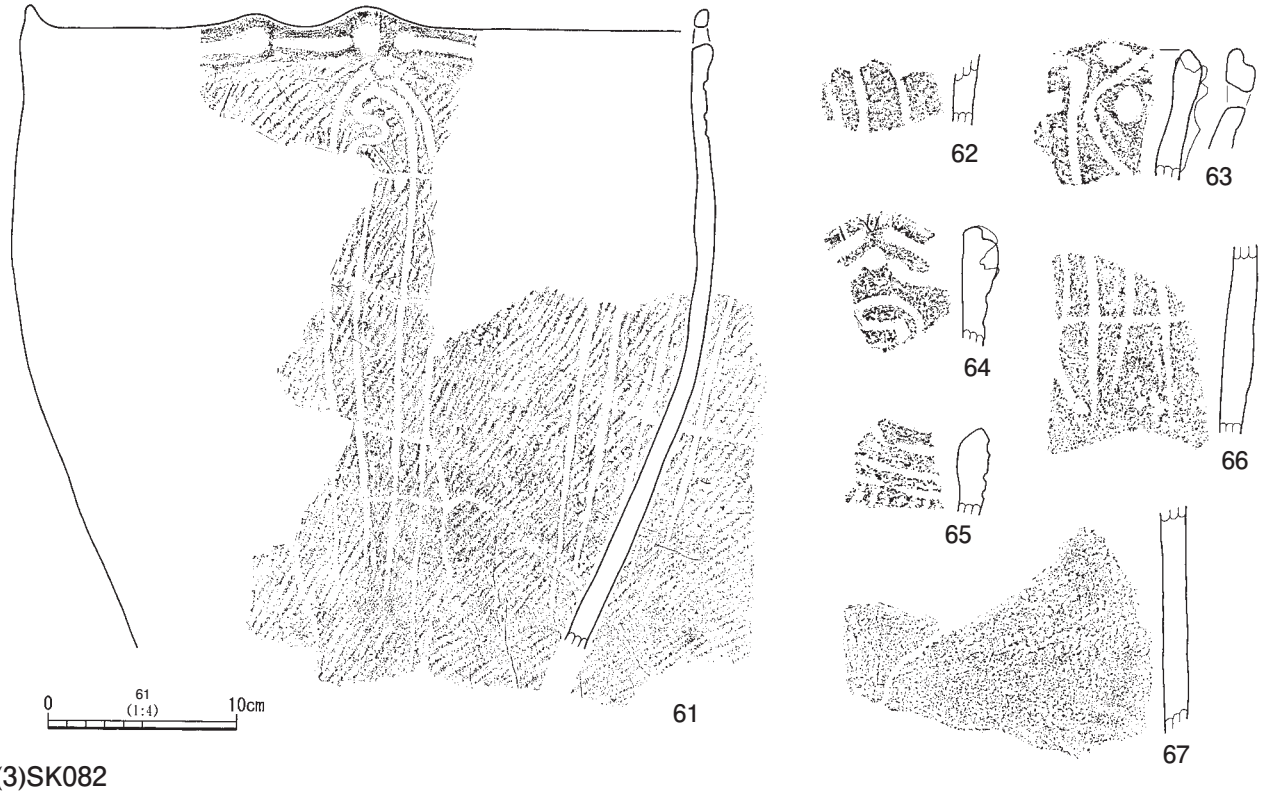
(3)SI079・081



(3)SI080

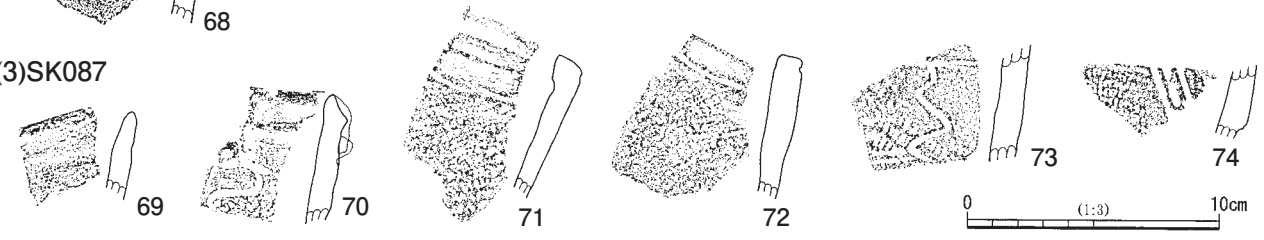


(3)SK083



(3)SK082

(3)SK087



第 60 図　(3)SI079 ～ 081 住居跡、(3)SK082・083・087 土坑出土遺物

であろうと推測され、諸磯式がまとまって出土している(3)SI078が該期と推測される。(3)SI080は前期と思われるが黒浜式期か浮島式期かは判断が難しい。最も新しいと思われる(3)SI081は堀之内式期であろう。

(3)SK082（第57・60図、図版４・41）

状況　(3)SI080の北東部に位置し、一部住居跡と重なる。土層の切り合い関係は記録されていないが、確認面の検出状況から住居より古いと判断される。長軸長100cm、短軸長80cmの不整円形を呈する。断面皿状で深さも10cm程度であるが、東側に直径30cm、深さ59cmの柱穴状ピットを伴う。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。68は縄文施文の深鉢胴部である。

時期　遺物からは時期の特定は困難である。

(3)SK083（第57・60図、図版４・40・41）

状況　(3)SI080の東部に位置し、一部住居跡と重なる。土層観察により住居跡より新しいと判断される。長軸長102cm、短軸長80cmの不整円形を呈する。断面逆台形で深さは26cmである。

出土遺物　62は称名寺式の深鉢胴部である。61は堀之内式の深鉢で、形状が復元できるものである。63～65は堀之内式の深鉢口縁部、66は胴部である。67は縄文のみの深鉢胴部破片である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK084・087（第57・60図、図版４・41）

状況　(3)SI078の南東部に位置し、一部住居跡と重なる。土層観察から(3)SK084は住居より新しいと判断される。土層の記録がない(3)SK087は、確認面での検出状況から(3)SI078及び(3)SK084いずれよりも古いと推測される。全体の規模は不明であるが残存している部分を見ると、(3)SK084は長軸長約120cm、短軸長約110cmの不整円形を呈する。断面逆台形で深さは20cmである。(3)SK087は大ぶりな円形土坑とピット状の小土坑から構成されるが、これらが一体のものか複数の土坑が切り合っているものかは不明である。南北170cm、東西140cmの範囲に位置する。深さはピット状の最も深いところで36cmを測る。

出土遺物　(3)SK084からは図示できる遺物は出土しなかった。(3)SK087の69 ～ 72は堀之内式の深鉢口縁部、73・74は胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

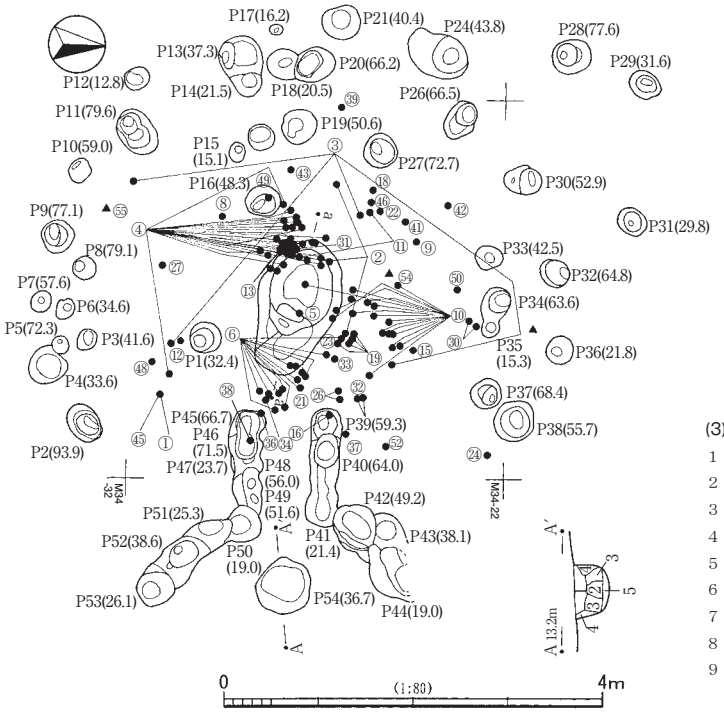
(3)SI104（第61 ～ 64図、図版４・41 ～ 43・96・99）

形状と規模　当住居跡は壁が失われているものの、円形に並ぶ柱穴と「ハ」の字状の出入口施設により、明確に住居跡と認識されるものである。柱穴列から推測される規模は竪穴本体の直径が5.7ｍ、出入口施設を含む長軸長が6.5ｍである。主軸方向はほぼ正確に真西である。

内部の状況　壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明であるが、炉の遺存状況からあまり削平されていないと思われる。

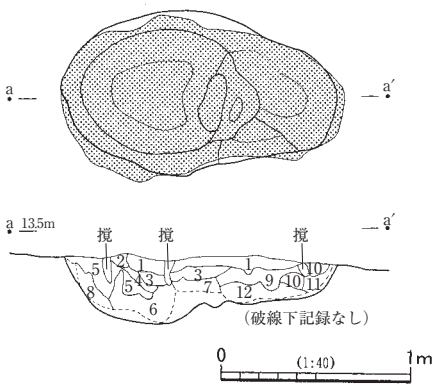
炉　中央部から規模の大きな炉が検出されている。長軸長150cm、短軸長88cmの不整円形で、住居奥側が深く掘り窪められ、手前側は一段浅くなっている。深さは奥側が33cm、手前側が25cmである。覆土中に焼土ブロックや焼土粒が多量に含まれ、底面も強く熱を受けていることから使用頻度はかなり高かったと推測される。

ピット　二重に並ぶように検出されており、建替えが行われたと考えられる。なお、P28・29・31はやや外れているが、一応関連があるものと考えた。径50cm程度のやや大きいものと、径30cm程度の概ね２種類に分類され、大きいものは深くて柱穴とされるべきものであろう。



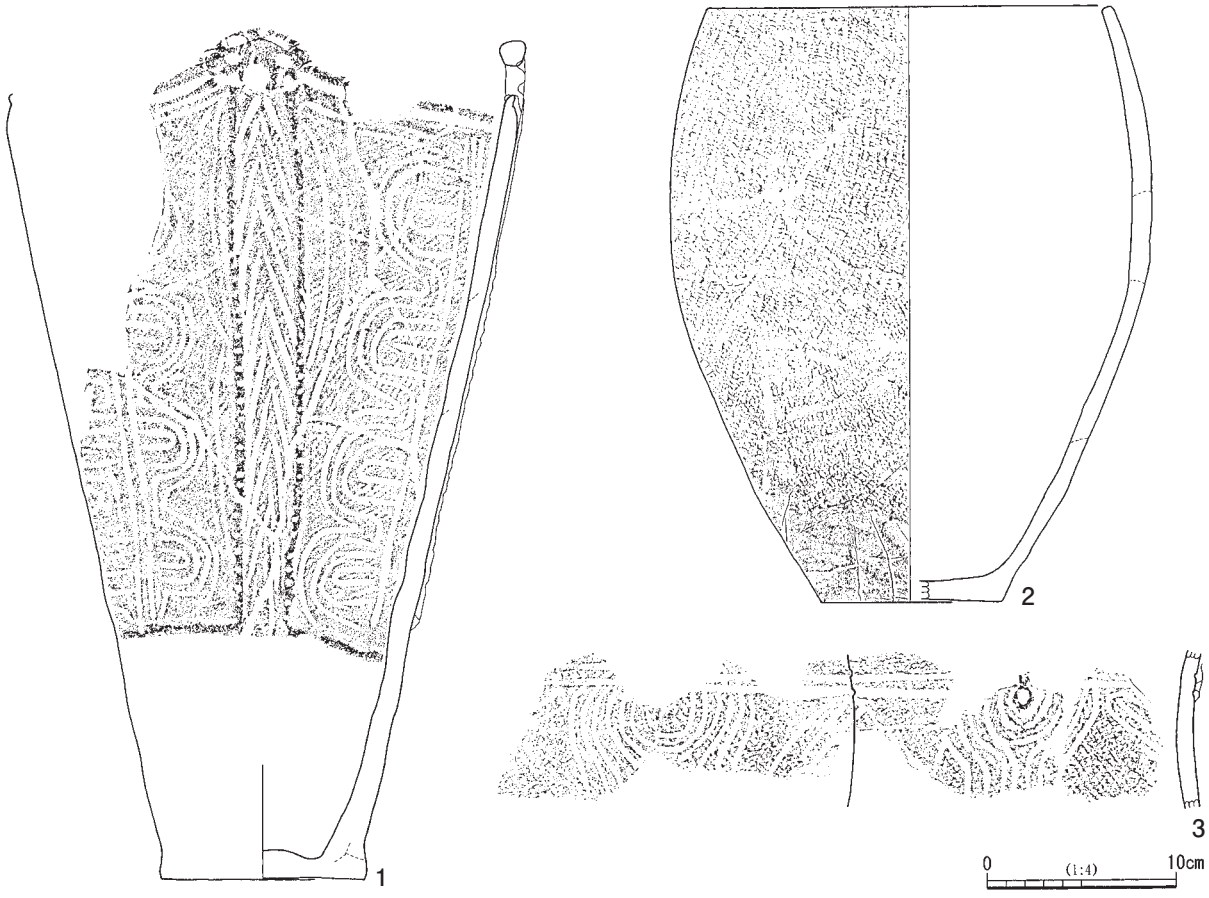
(3)SI104

1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒やや多混、しまりやや弱
2　暗褐色土　ローム粒多混、褐色土斑状、しまりやや弱
3　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや弱
4　黄褐色土＋暗褐色土　ローム粒多混、しまりやや弱
5　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多混、しまりやや弱

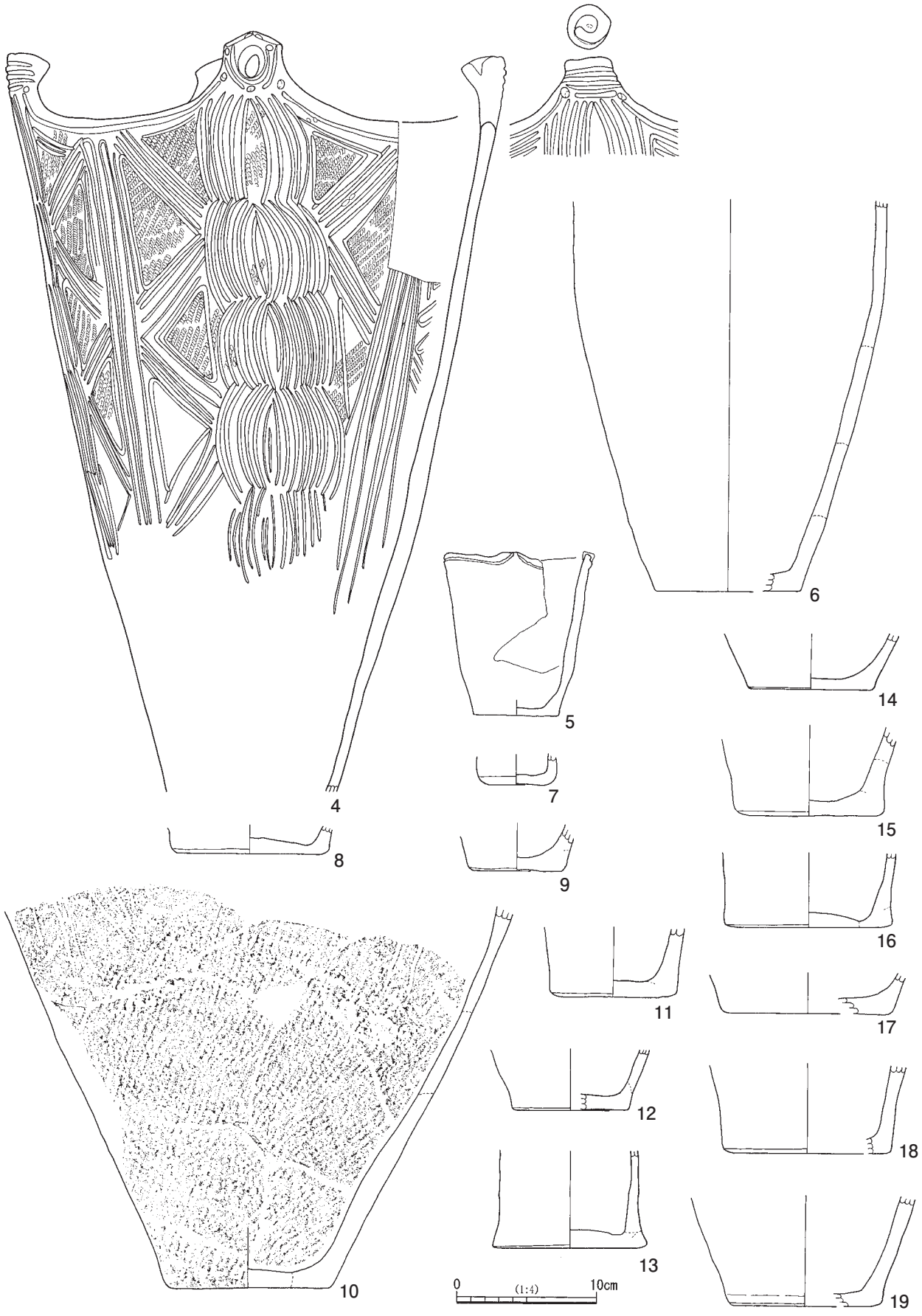


(3)SI104 炉

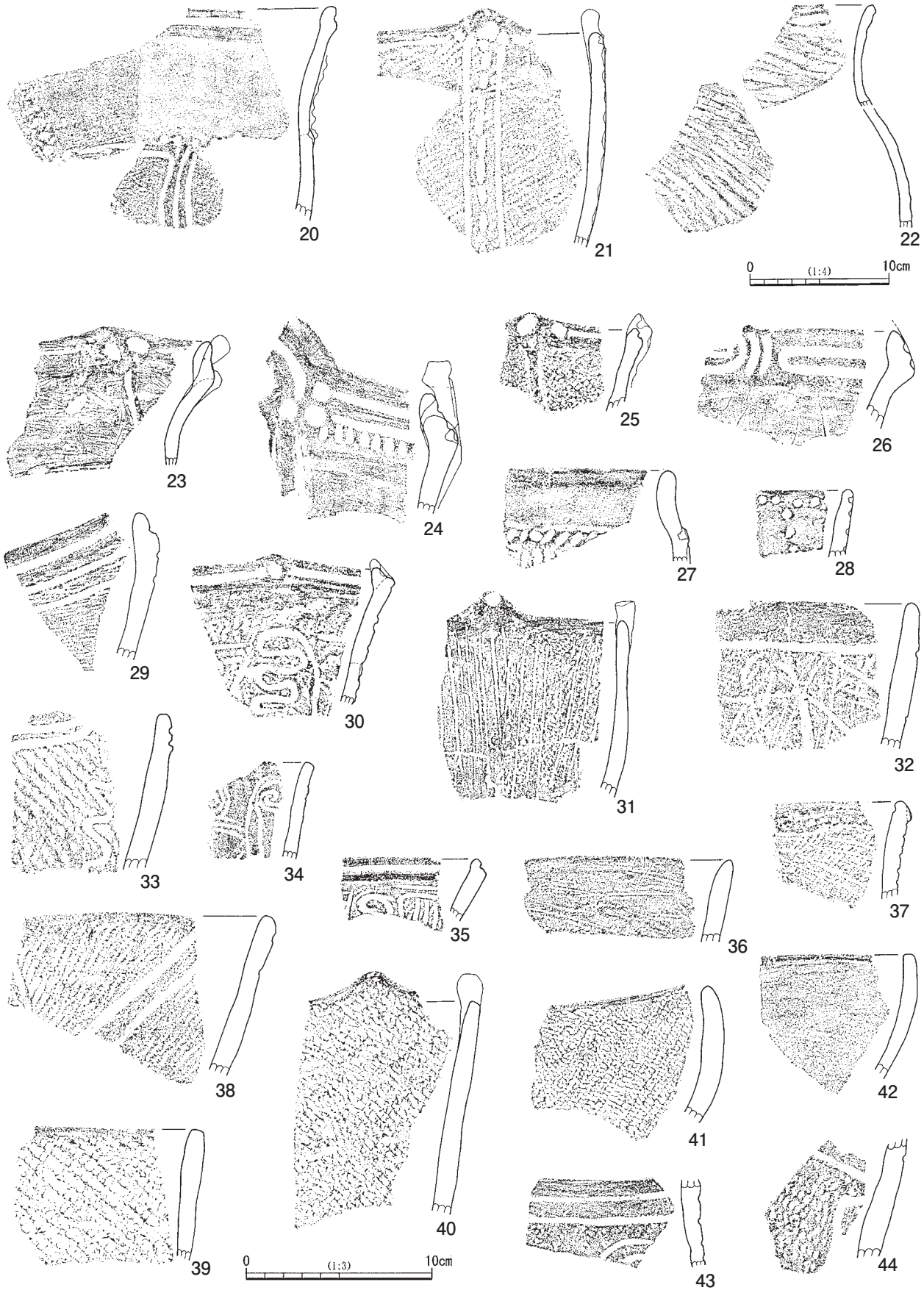
1　暗褐色土　　φ5㎜焼土ブロック・焼土粒少混、しまりやや強
2　暗黄褐色土　黒色土を斑状に含む、焼土粒微混
3　黄褐色土　　φ5㎜焼土粒・ローム粒やや多混、粒子粗、しまりやや弱
4　黒色土　　ローム粒・焼土粒微混（撹乱？）
5　暗赤褐色土　焼土粒多混、ローム粒やや多混、粒子粗、しまり弱
6　暗褐色土　　ローム粒多混、粒子粗、しまり弱
7　赤褐色土　　φ30㎜焼土ブロック多混
8　黄褐色土　　焼土粒微混、しまり弱、層上位は被熱変成
9　暗(赤)黄褐色土　層全体が赤味を帯びる、焼土粒やや多混、粒子やや粗、しまり弱
10　暗赤褐色土　焼土粒、φ5㎜焼土ブロック多混、粒子粗、しまり弱
11　暗褐色土　　層全体がやや赤味を帯びる、ローム粒・焼土粒やや多、粒子粗、しまり弱
12　黄褐色土　　層上位が被熱変成



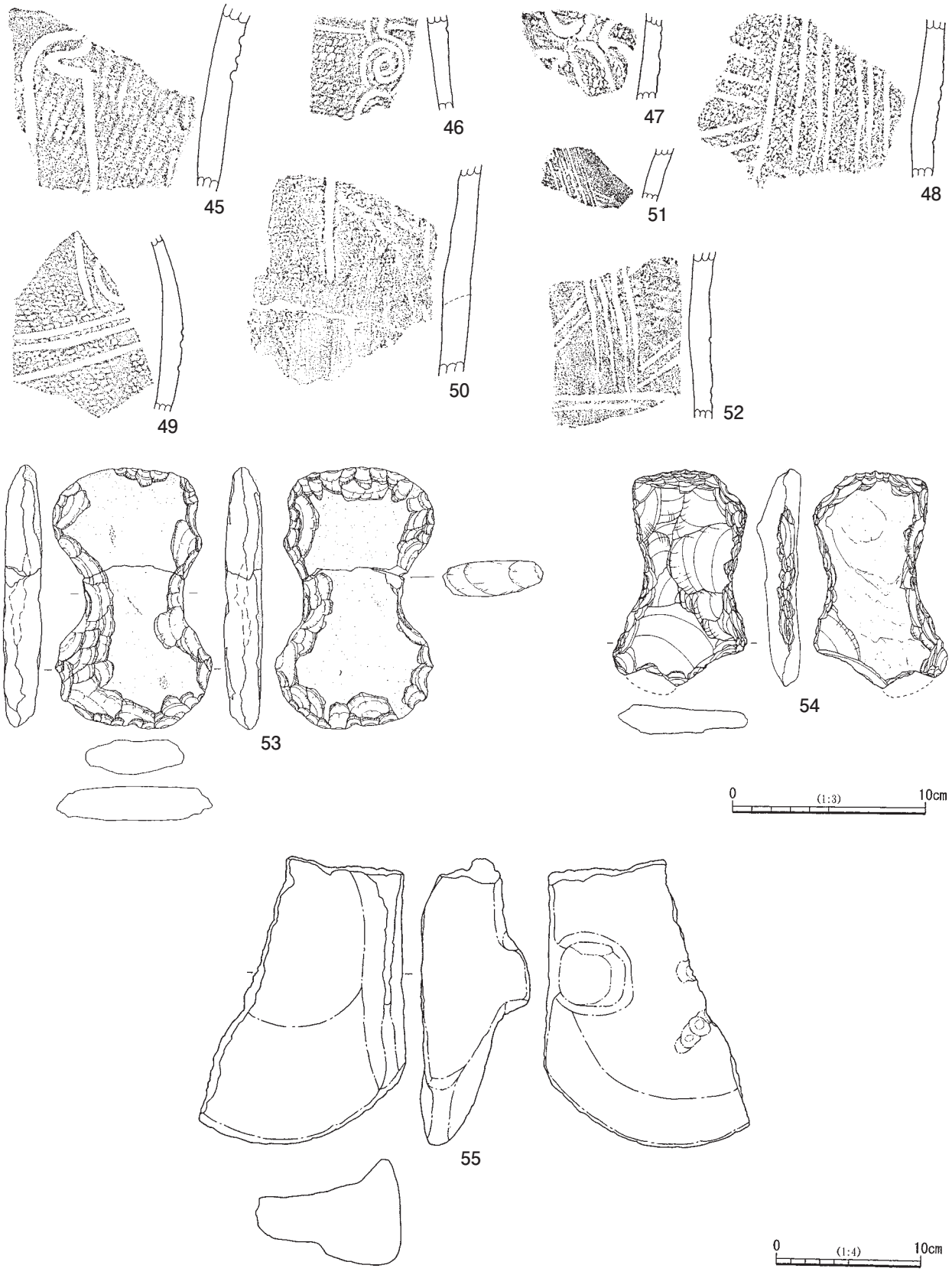
第 61 図　(3)SI104 住居跡、出土遺物（１）



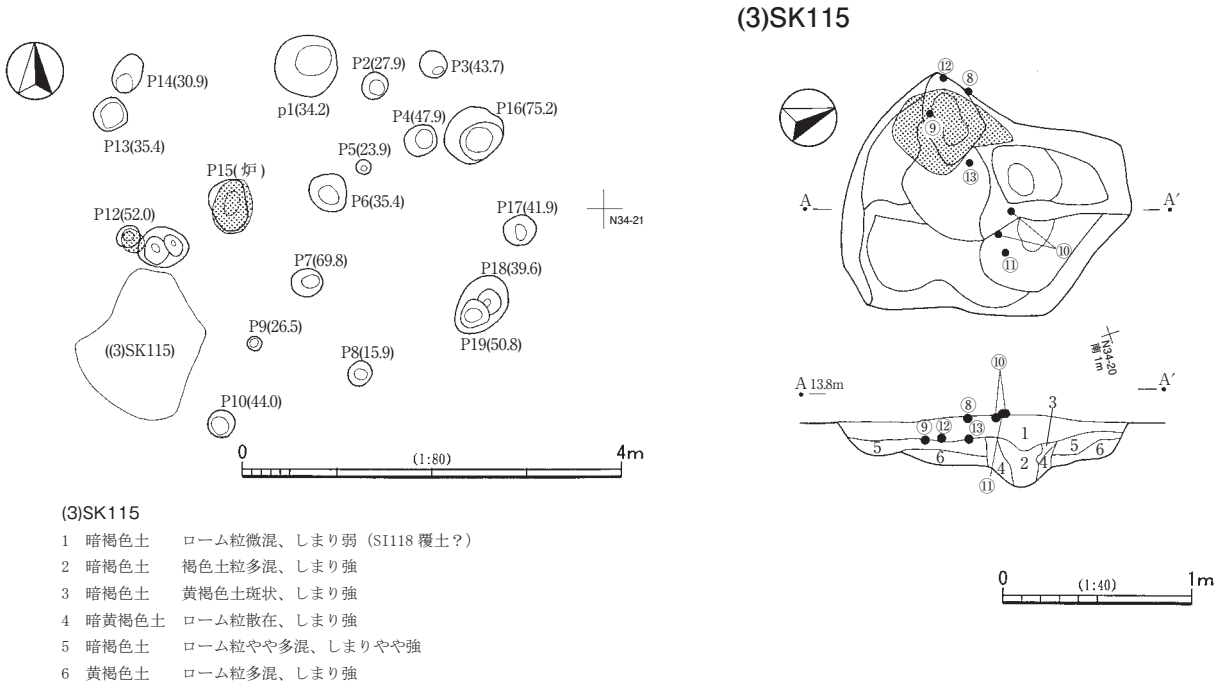
第 62 図　(3)SI104 住居跡出土遺物（２）



第 63 図　(3)SI104 住居跡出土遺物（３）



第 64 図　(3)SI104 住居跡出土遺物（４）



第 65 図　(3)SI118 住居跡、(3)SK115 土坑、出土遺物

出土遺物　極めて多量の遺物が出土している。1 ～ 19は器形復元ができる土器である。有文のものは全て堀之内式であり、無文の底部も堀之内式と考えられる。20 ～ 42は堀之内式の深鉢口縁部、43 ～ 52は胴部である。22はケズリ状の調整が顕著である。53・54は分銅形打製石斧で、54は剥片素材から作出されたものである。55は脚付石皿である。熱を受けている。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI118（第65図、図版４・43）

形状と規模　当住居跡も壁が失われているが、炉跡と円形に並ぶ柱穴状ピットが検出されたことにより設定されたものである。規模は東西4.8m、南北4.3mの範囲に及ぶ。

他遺構との重複関係　南西部に(3)SK115が位置する。新旧関係は不明である。

内部の状況　壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明であるが、炉の状況からある程度削平されている可能性がある。

炉　プラン中央よりやや西寄りに検出されたピット１基の上面に焼土が堆積しており、一応炉として扱ったが、土層断面の記録がないため覆土や床面の状況はよく分からず詳細は不明である。長軸長56㎝、短軸長38㎝の不整円形を呈し、深さは10㎝である。

ピット　先の炉を含め19基のピットが検出されている。そのうちP17～19は調査時(3)SI104の柱穴として扱われていたが、そちらのプランからはやや外れる一方で、こちらのプラン内にうまく収まるため帰属を変更した。また、(3)SK115内にもピット状の掘込みがあり、当住居の柱穴である可能性がある。

出土遺物　１・２は黒浜式の深鉢胴部である。３は堀之内式の深鉢口縁部、４～６は胴部である。7は後期深鉢の底部であろう。

時期　小破片のみなので判断は難しいが、堀之内式期と考えられる。

(3)SK115（第65図、図版４・43）

状況　(3)SI118住居跡の南西部に構築される。長軸長150㎝、短軸長125㎝の不整形を呈する。底面は安定せず起伏に富み、深さは焼土に覆われている部分が最も深く43㎝である。土層観察では埋戻しを行っている途中で柱を立て（２層が柱痕か）、それを抜いた後最後まで埋め戻しているように見える。あるいはこの柱痕は住居の柱で、すでに埋まっていた(3)SK115の場所に柱穴を掘ったものかもしれない。そうなると１層は土坑ではなく住居の覆土ということになる。いずれにしても確証はない。

出土遺物　８～11は堀之内式の深鉢口縁部である。12は縄文施文のみであるがおそらく同時期の深鉢胴部、13は底部であろう。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SI136（第66図、図版４・44・45）

形状と規模　壁は失われているが円形に並ぶピットを柱穴列と想定して設定されたものである。規模は東西7.0m、南北5.3mになるが、P19は離れており帰属しない可能性がある。

他遺構との重複関係　(3)SK093 ～ 099が重なっているが、新旧関係は不明である。

内部の状況　壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明である。

炉　検出されていない。

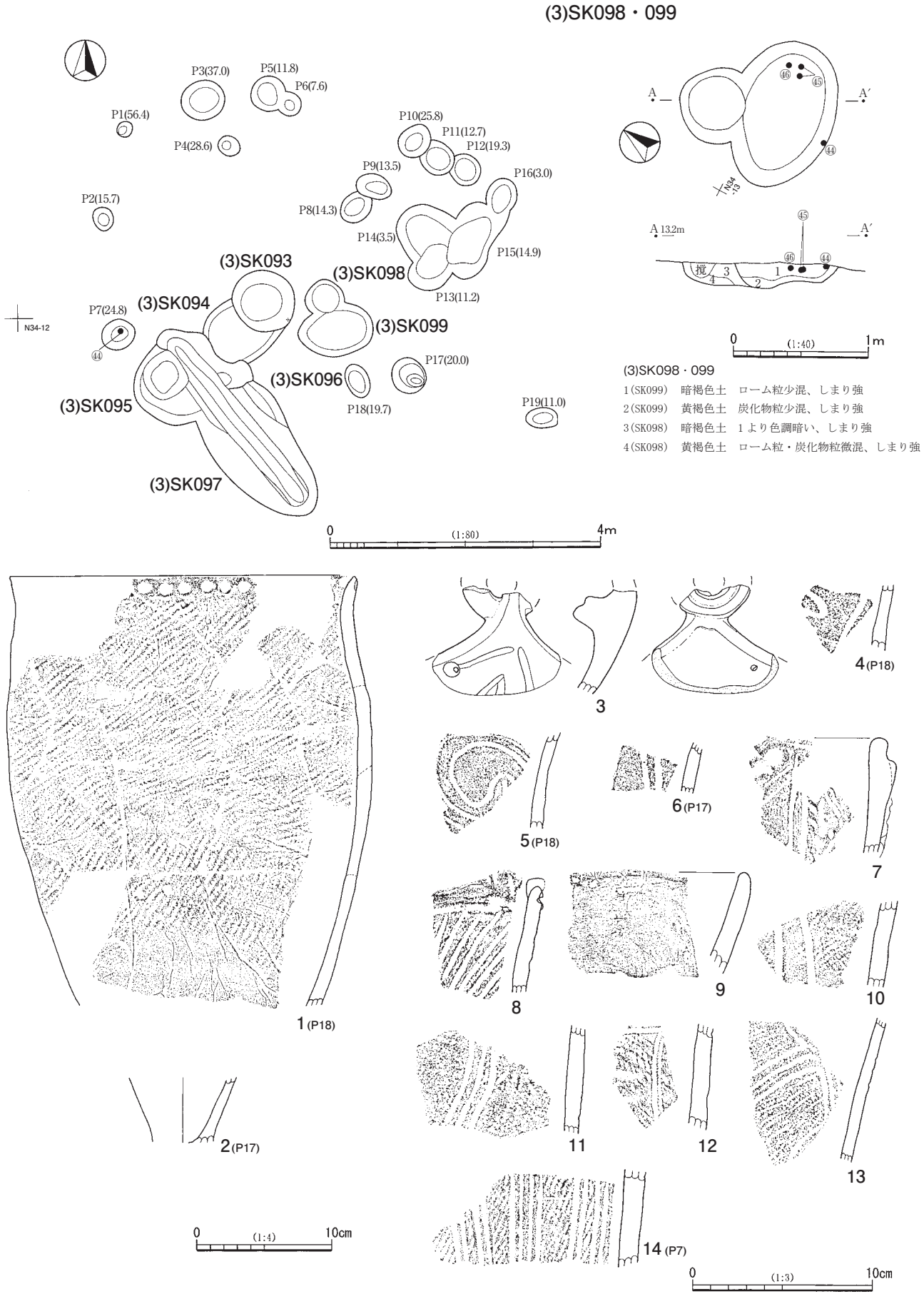
ピット　全部で19基検出されている。P7・16～18は独立したピットとして扱われていたが、当住居に帰属するものと考えた。

出土遺物　３は称名寺式の深鉢口縁部、４～６は胴部である。１は堀之内式の器形復元ができる深鉢である。７～９は堀之内式の深鉢口縁部、10～14は胴部である。

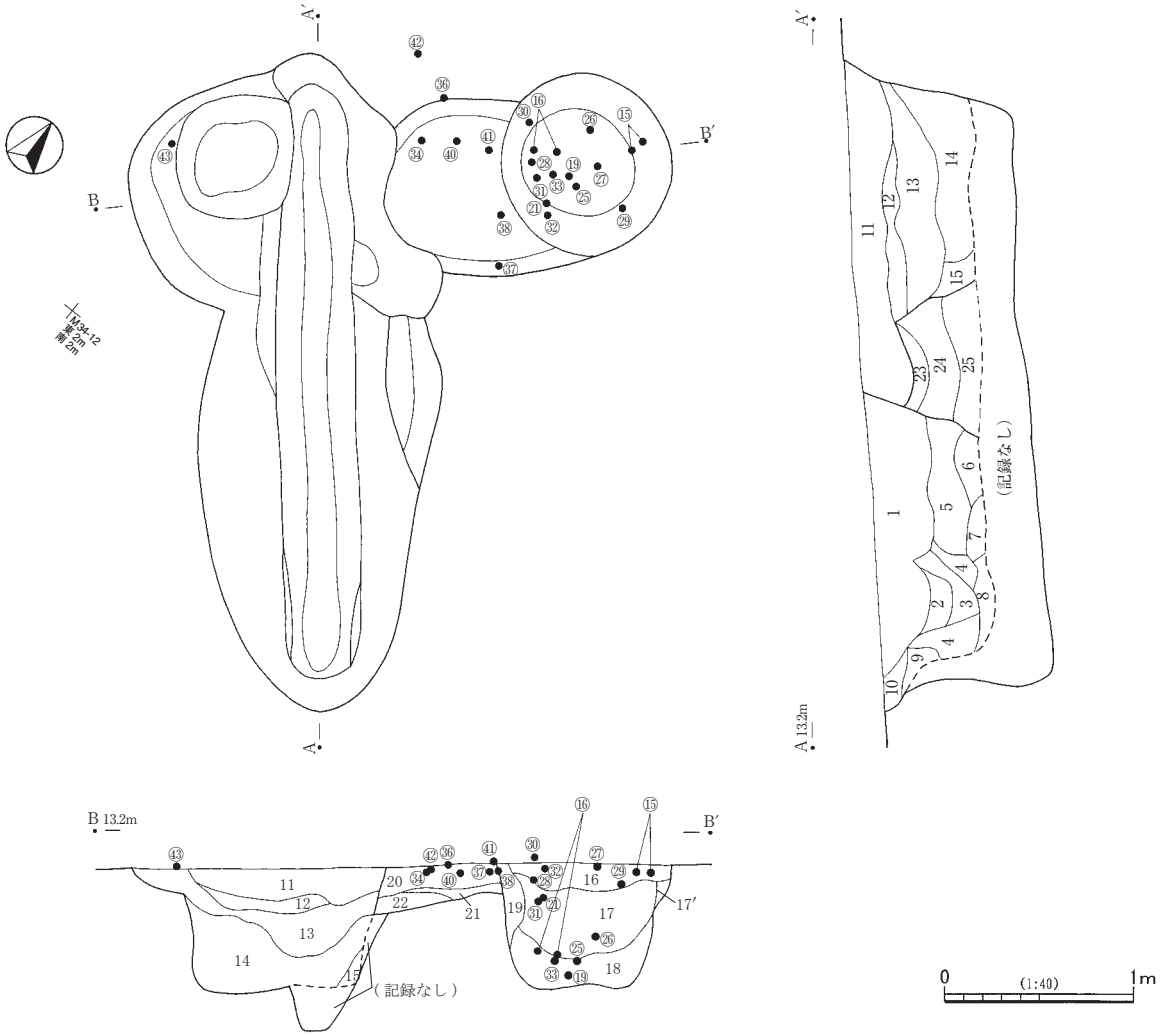
時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構も該期と考えられる。

(3)SK093～097（第67・68図、図版４・44）

状況　４基の土坑と１基の陥穴が重なり合っている。北東から南西へ、(3)SK093・094・095が重なり合っ



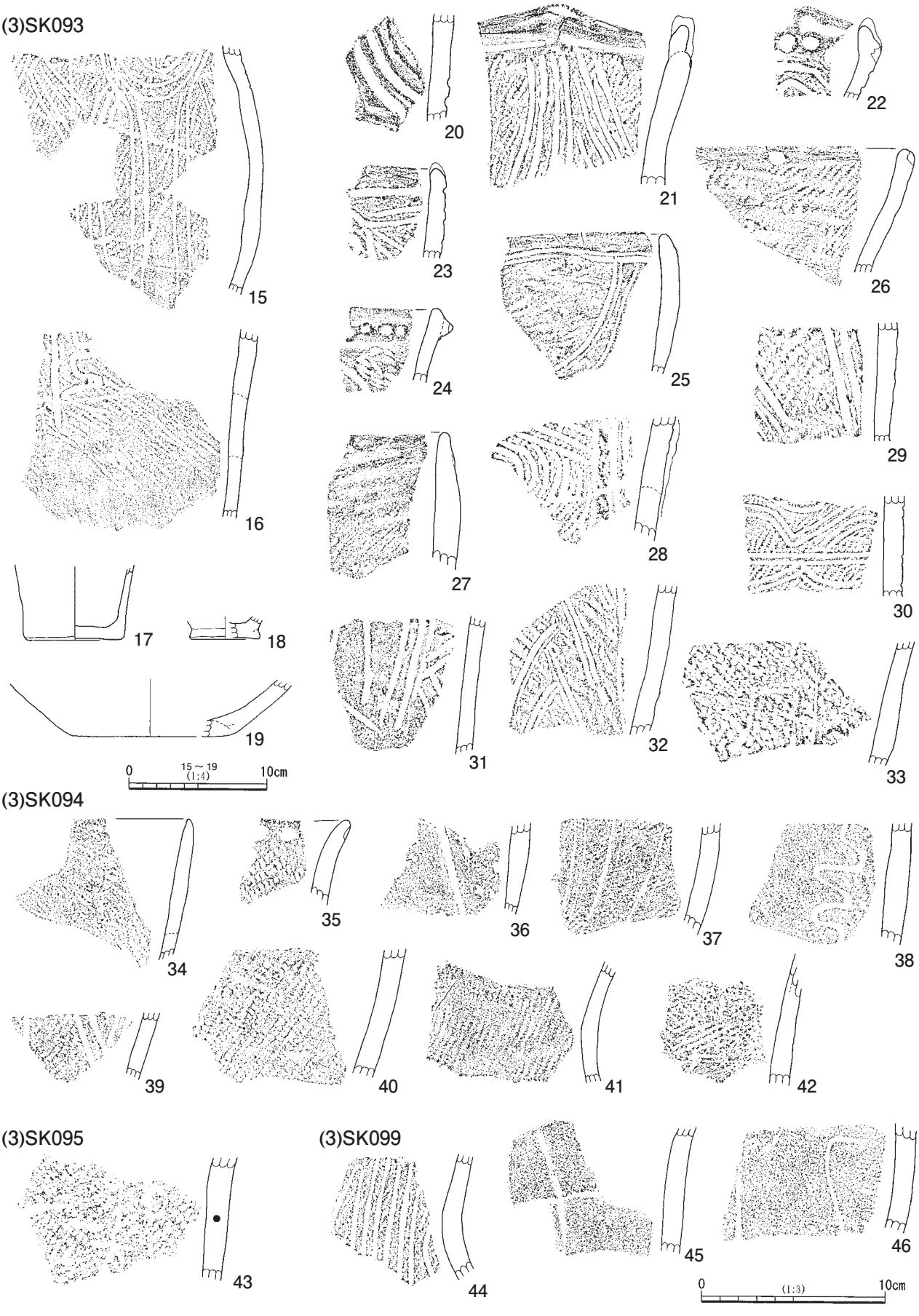
第 66 図　(3)SI136 住居跡・出土遺物、(3)SK098・099 土坑



(3)SK093 ～ 097

1（SK096） 黒褐色土 φ30 ㎜ロームブロックやや多混、しまり強、1 と 11 の分層困難
2（SK096） 黒色土 混入物極少、粒子細、しまりやや弱
3（SK096） 黒褐色土 2 に類似するが 2 より褐色土やや多混、しまりやや弱
4（SK096） 暗褐色土 混入物極少、粒子細、しまりやや弱
5（SK096） 暗褐色土 暗褐色中に褐色土を斑状に含む、しまりやや弱
6（SK096） 褐色土 φ10 ㎜ロームブロック微混、しまりやや弱
7（SK096） 黒色土 黄褐色土少混、しまりやや弱
8（SK096） 暗黄褐色土 φ10 ㎜ロームブロック少混、しまりやや弱、粘性やや強
9（SK096） 黄褐色土 φ30 ㎜ロームブロック多混、しまり強
10（SK096） 暗黄褐色土 ローム粒少混
11（SK095） 暗褐色土 1 に類似するがやや黒味が少ない、しまり強
12（SK095） 黒褐色土 褐色土混、しまり強
13（SK095） 暗褐色土 褐色土・黄褐色土多混（斑状）
14（SK095） 暗褐色土 13 に類似するが黄褐色土が少ない
15（SK095） 黒褐色土 ローム粒少混、しまり極めて弱い
16（SK093） 暗褐色土 φ10 ㎜焼土粒微混、粒子粗、しまり強
17（SK093） 暗褐色土 φ10 ㎜焼土粒 16 より多混、粘性やや強、しまり強
17′（SK093） 暗褐色土 17 より色調やや明るい
18（SK093） 黒褐色土 褐色土ブロック・褐色土粒多混、しまり弱
19（SK093） 黄褐色土 ロームブロック斑状に含む、しまり強
20（SK094） 暗褐色土 粒子粗
21（SK094） 暗褐色土 20 より黄褐色土多混、粒子粗
22（SK094） 黄褐色土 φ10 ㎜ロームブロック多混、しまり非常に強
23（SK097） 黒褐色土 12 に類似する、φ10 ㎜ロームブロック少混（斑状）、しまり強
24（SK097） 暗黄褐色土 φ30 ㎜黒色土・黄褐色土多混（斑状）、しまりやや弱
25（SK097） 褐色土 黄褐色土少混（斑状）、しまりやや弱、粘性やや強

第 67 図　(3)SK093・094・095・097 土坑



第 68 図　(3)SK093 ～ 095・099 土坑出土遺物

て並び、南東側に(3)SK096が重なっている。さらに下側に(3)SK097陥穴が存在する。各遺構の規模は判断が難しいが、(3)SK093は長軸長98cm、短軸長90cmの正円に近い楕円形、(3)SK094は長軸長110cm以上、短軸長94cmの不整円形、(3)SK095は直径115cm程度のおそらく円形、(3)SK097陥穴は長軸長347cmの長楕円形である。(3)SK096は(3)SK097とほぼ重なるため規模や形状は不明であるが、(3)SK097北東部の張出しが遺構の一部とみられる。新旧関係であるが、陥穴(3)SK097が最も古く、埋まった後(3)SK094が構築される。次いで(3)SK095→(3)SK096となる。(3)SK093は(3)SK094より新しいが、(3)SK095との新旧関係は不明である。深さは(3)SK093が65cm、(3)SK094が25cm、(3)SK095が65cm、(3)SK097が90cmである。(3)SK096は土層断面図で記録された底部の線が真の床面かどうか不明なため計測していない。

出土遺物　15 ～ 33は(3)SK093から出土した遺物である。20 ～ 27は堀之内式の深鉢口縁部、15・16・28 ～ 32は胴部である。17・18は無文の底部である。19は浅鉢もしくは注口土器の底部であろう。34 ～ 42は(3)SK094から出土した遺物である。34・35は堀之内式の深鉢口縁部、36 ～ 39は胴部である。なお、36と42は遺構外から出土したようになっているが、検出時の遺構範囲はここまで広がっているように見えたため遺構出土として取り上げたものである。43は(3)SK095から出土した遺物で、黒浜式の深鉢胴部である。(3)SK096・097からは図示できる遺物は出土しなかった。

時期　(3)SK093・094の主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、両遺構とも該期と考えられる。(3)SK095の出土遺物は黒浜式であるが、先述したとおり遺構自体は(3)SK094より新しいことが確実なため混入品であり、(3)SK097陥穴に伴うものかもしれない。(3)SK095・096は出土遺物から判断はできないが、(3)SK094に近い時期と思われる。

(3)SK098・099（第66・68図、図版４・44）

状況　(3)SI136住居跡中央部に位置する。(3)SK098は直径60cmの正円形、(3)SK099は長軸長110cm、短軸長80cmの楕円形を呈する。土層観察から(3)SK098が古く(3)SK099が新しいと判断されるが、深さはいずれも20cmで床面はほぼ同一レベルである。

出土遺物　(3)SK098からは図示できる遺物は出土しなかった。44 ～ 46は(3)SK099から出土した遺物で、いずれも堀之内式の深鉢胴部である。

時期　(3)SK099の主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。(3)SK098は(3)SK099より古いが大きく遡るとは思われず、近い時期であろう。

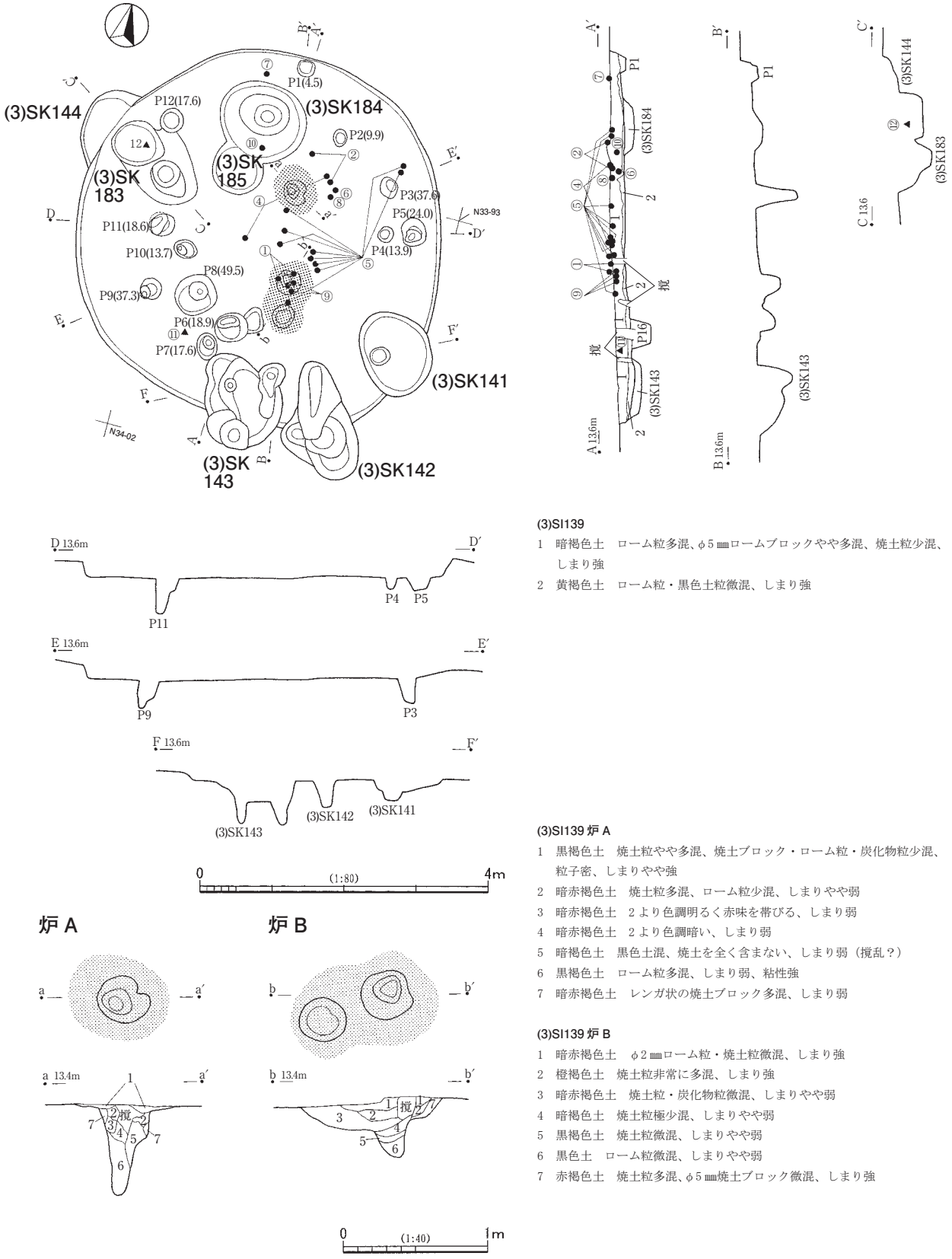
(3)SI139（第69・71・72図、図版４・45・99）

形状と規模　直径5.1ｍの正円形に近い円形を呈する。深さは20cmである。

他遺構との重複関係　(3)SK141 ～ 144・183 ～ 185の７基の土坑と重なり合う。(3)SK183 ～ 185は住居の床下から検出されたもので住居より古い。(3)SK141 ～ 144は土層断面の観察から住居より新しいと考えられるが、(3)SK142と(3)SK143については一部もしくは全体が住居跡の出入口施設の可能性がある。

内部の状況　壁は直立気味に立ち上がる。覆土はほぼ単一であるが、２層は貼床かもしれない。床面は南側に下るよう緩やかに傾斜している。硬化面は検出されなかった。

炉　住居中央部に、Ａ・Ｂ２基が縦に連なるように検出されている。Ａは直径30cm、深さ63cmのピット上に構築されているが、直接関係あるのかは不明である。Ｂは断面皿状の土坑の中に直径30cm、深さ19cmのピットと、直径33cm、深さ41cmのピット２基が掘られるという構造になっているが、上端の記録がないため詳細不明である。住居全体の平面図にあるトーンは焼土の範囲であるが、土坑の開口部の形状を示して



(3)SI139

1　暗褐色土　ローム粒多混、φ5㎜ロームブロックやや多混、焼土粒少混、しまり強

2　黄褐色土　ローム粒・黒色土粒微混、しまり強

(3)SI139 炉 A

1　黒褐色土　焼土粒やや多混、焼土ブロック・ローム粒・炭化物粒少混、粒子密、しまりやや強

2　暗赤褐色土　焼土粒多混、ローム粒少混、しまりやや弱

3　暗赤褐色土　2より色調明るく赤味を帯びる、しまり弱

4　暗赤褐色土　2より色調暗い、しまり弱

5　暗褐色土　黒色土混、焼土を全く含まない、しまり弱（撹乱？）

6　黒褐色土　ローム粒多混、しまり弱、粘性強

7　暗赤褐色土　レンガ状の焼土ブロック多混、しまり弱

(3)SI139 炉 B

1　暗赤褐色土　φ2㎜ローム粒・焼土粒微混、しまり強

2　橙褐色土　焼土粒非常に多混、しまり強

3　暗赤褐色土　焼土粒・炭化物粒微混、しまりやや弱

4　暗褐色土　焼土粒極少混、しまりやや弱

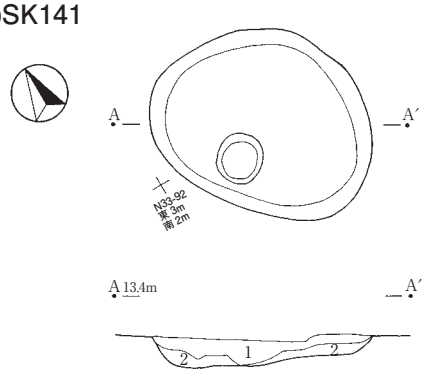
5　黒褐色土　焼土粒微混、しまりやや弱

6　黒色土　ローム粒微混、しまりやや弱

7　赤褐色土　焼土粒多混、φ5㎜焼土ブロック微混、しまり強

第 69 図　（3）SI139 住居跡

(3)SK141

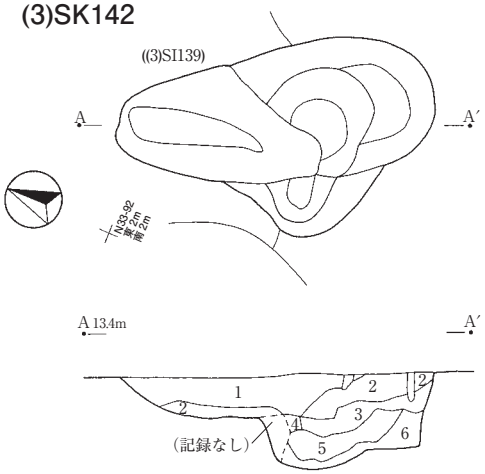


(3)SK141

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり強、貼床材？

2　黄褐色土　ローム粒・焼土粒微混

(3)SK142



(3)SK142

1　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまり強

2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒少混、しまり強

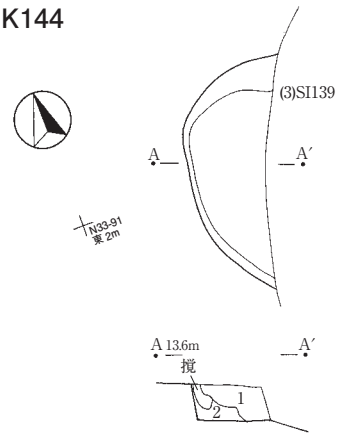
3　暗褐色土　φ5㎜ローム粒少混、しまり強

4　黄褐色土　φ10㎜ロームブロック多混、しまり強

5　黒褐色土　φ5㎜ロームブロック少混、粒子粗、しまりやや弱

6　暗褐色土　ローム粒微混、粒子密、しまりやや弱

(3)SK144

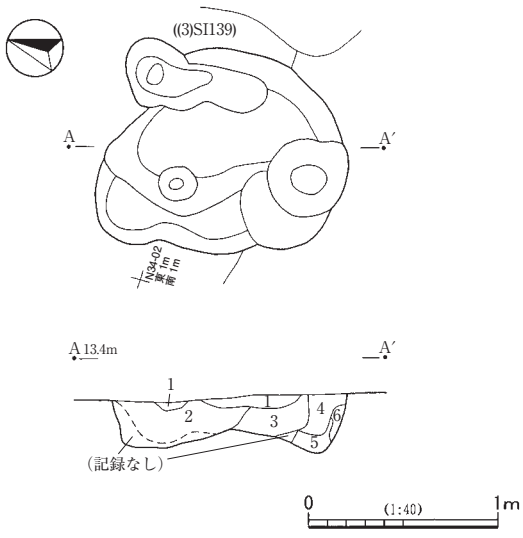


(3)SK144

1　暗褐色土　　ローム粒やや多混、しまり非常に強

2　暗黄褐色土　ローム粒やや多混、しまり非常に強

(3)SK143



(3)SK143

1　暗褐色土　ローム粒微混、しまり強

2　暗褐色土　焼土粒・φ3㎜ローム粒微混、しまり強

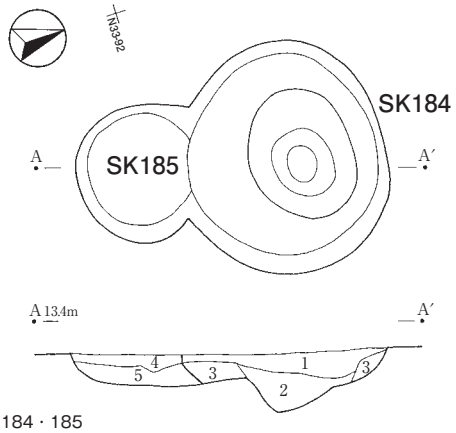
3　暗褐色土　黒色土粒やや多混、φ3㎜ローム粒微混、しまり強

4　暗褐色土　ローム粒多混、黒色土粒少混、しまり強

5　褐色土　　ローム粒多混、しまり強

6　黄褐色土　しまり非常に強

(3)SK184・185



(3)SK184・185

1(SK184)　暗褐色土　ローム粒微混、しまり強

2(SK184)　黒褐色土　ローム粒やや多混、焼土粒微混、しまりやや弱

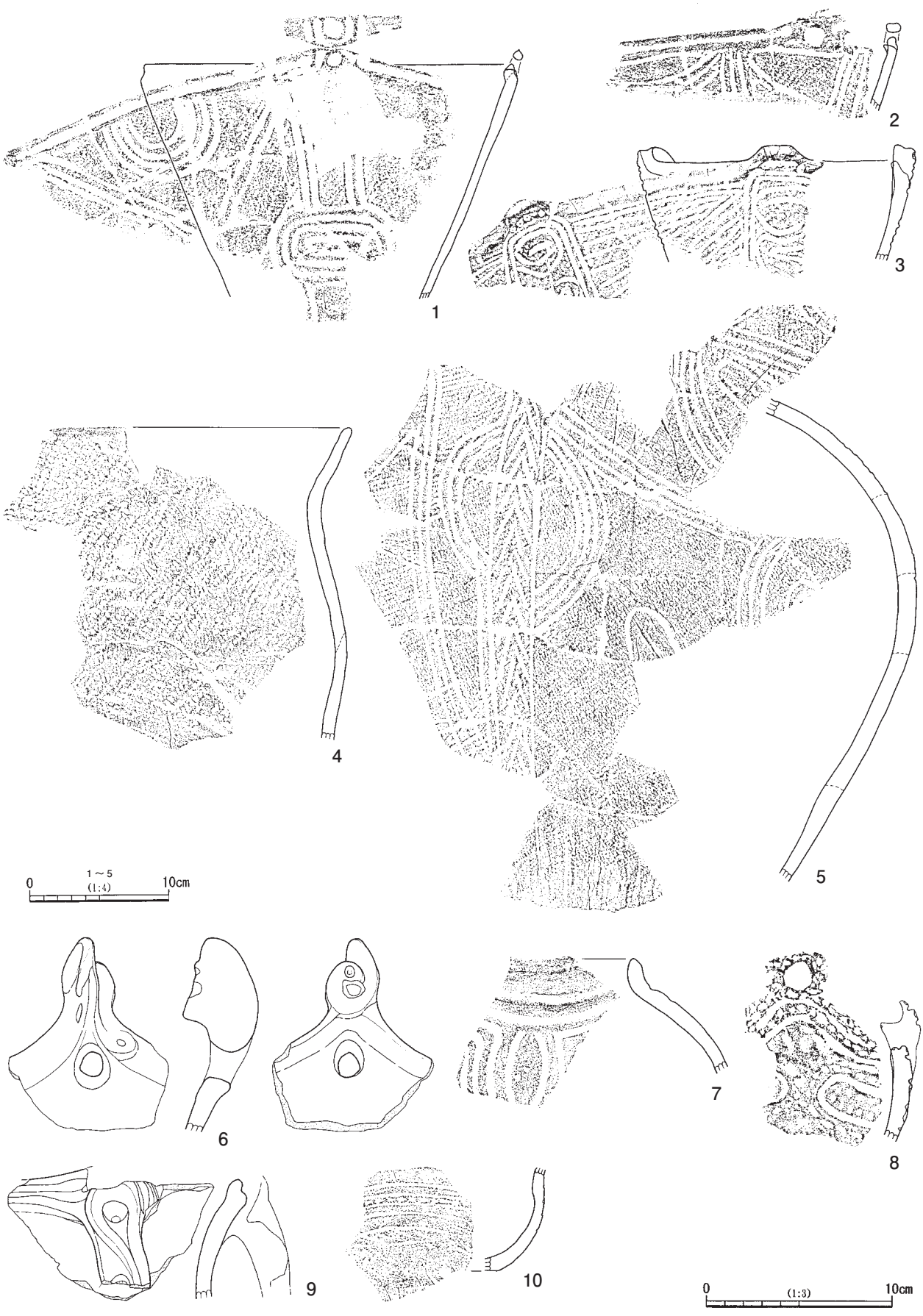
3(SK184)　褐色土　　ローム粒多混、しまり強

4(SK185)　暗褐色土　ローム粒少混、しまり非常に強

5(SK185)　暗褐色土　4より色調明るい、ローム粒少混、しまり非常に強

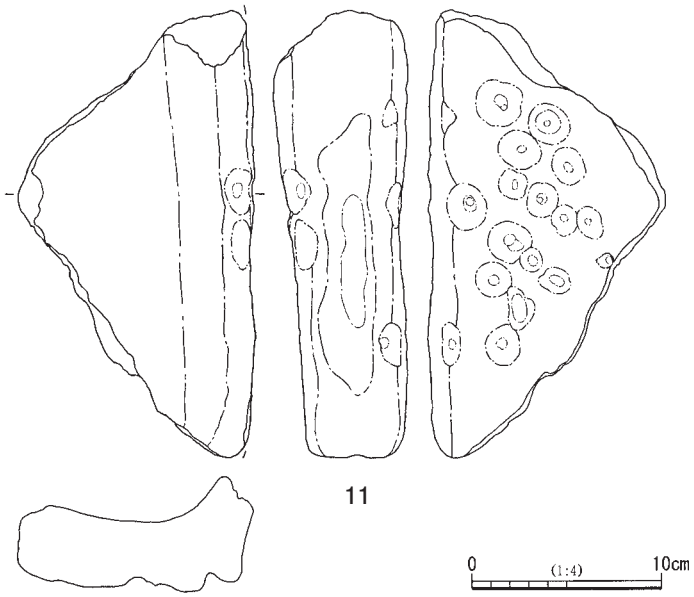
第 70 図　(3)SK141 ～ 144・184・185 土坑

(3)SI139

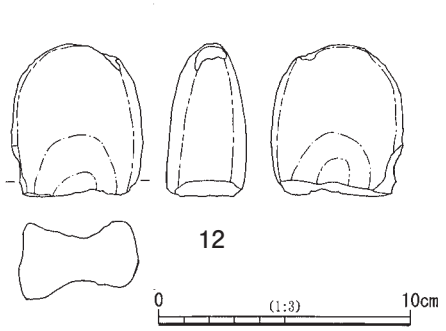


第 71 図　(3)SI139 住居跡出土遺物（１）

(3)SI139



(3)SK183



第 72 図　(3)SI139 住居跡出土遺物（２）、(3)SK183 土坑出土遺物

いると考え拡大図でも示した。

ピット　12基検出されている。P5・8などは柱穴の可能性がある。

出土遺物　６は称名寺式の深鉢口縁部である。１～４は堀之内式の深鉢口縁部である。５は同じく胴部で鉢形を呈する。この大きさでも径の復元ができないほどの大形品である。７・８は同時期の鉢形及び深鉢の口縁部で、三十稲場式の影響が見られるものである。９は堀之内式の注口土器把手である。10は堀之内式の浅鉢底部である。11は石皿で、熱を受けている。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK141（第70図、図版４）

状況　(3)SI139住居跡の南東部に位置し、大部分が住居と重なっている。長軸長120㎝、短軸長96㎝の不整円形を呈する。床面は北西側が下がるように傾斜しており、深さは最深で15㎝である。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、住居跡より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK142（第70図、図版４）

状況　(3)SI139住居跡の南部に位置し、半分が住居と重なっている。長軸長170㎝、短軸長100㎝の不整円形で、複数の土坑が重なり合っているような形状であるが、土層断面ではそうした痕跡は認められない。深さは最深で50㎝である。調査時の所見では１・２層と３層以下は別々の土坑であり、下側の土坑は住居の出入口施設の可能性があるとされていた。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、住居跡より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK143（第70図、図版４）

状況　(3)SI139住居跡の南部に位置し、半分が住居と重なっている。長軸長140㎝、短軸長110㎝の不整円形で、複数の土坑が重なり合っているような形状である。調査時の所見では土層断面図の４～６層は平面図右端のピットの覆土である可能性を指摘しており、住居の柱穴かもしれない。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、住居跡より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK144（第70図、図版４）

状況　(3)SI139住居跡の北西部に位置し、大部分が住居と重なっている。住居との境で最大長125㎝、残存幅45㎝である。断面は方形に近い逆台形で深さは20㎝である。住居側を先に掘ったため土層断面の右側は実測していないが、調査所見では住居が古く土坑が新しいとのことである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、住居跡より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK183（第69・72図、図版４・97）

状況　(3)SI139住居跡の北西部壁際に位置し、住居の床面下から検出された。長軸長76㎝、短軸長64㎝の楕円形土坑と直径40㎝のピット状土坑が組み合わされた状況で、それらを囲むように長軸長110㎝、短軸長88㎝の不整円形土坑が掘り込まれる。ただしピット状土坑は住居の柱穴の可能性がある。深さは住居の床面からそれぞれ32㎝と48㎝である。

出土遺物　図示できる土器は出土しなかった。12は磨石である。

時期　不明であるが、住居跡より古いものの大きく遡ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SK184・185（第70図、図版４）

状況　(3)SI139住居跡の北部に位置し、住居の床面下から検出された。(3)SK184は長軸長125㎝、短軸長110㎝の楕円形を呈する皿状の土坑の中央部に長軸長69㎝、短軸長56㎝の断面逆三角形の土坑が掘り込まれる。(3)SK185は直径73㎝の正円形を呈する皿状の土坑である。土層断面から(3)SK185が古く(3)SK184が新しいと判断される。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、両者とも住居跡より古いものの大きく遡ることはないと考えられ、住居に近い時期と推測される。

(3)SI140（第73～76図、図版４・46・47・99）

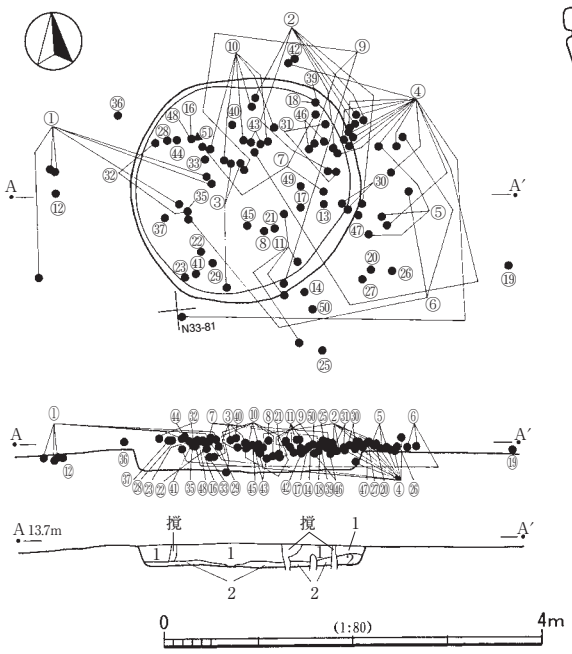
形状と規模　直径2.4ｍのほぼ正円形を呈する。

内部の状況　断面は均整のとれた逆台形で床面も平坦である。硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

ピット　検出されていない。

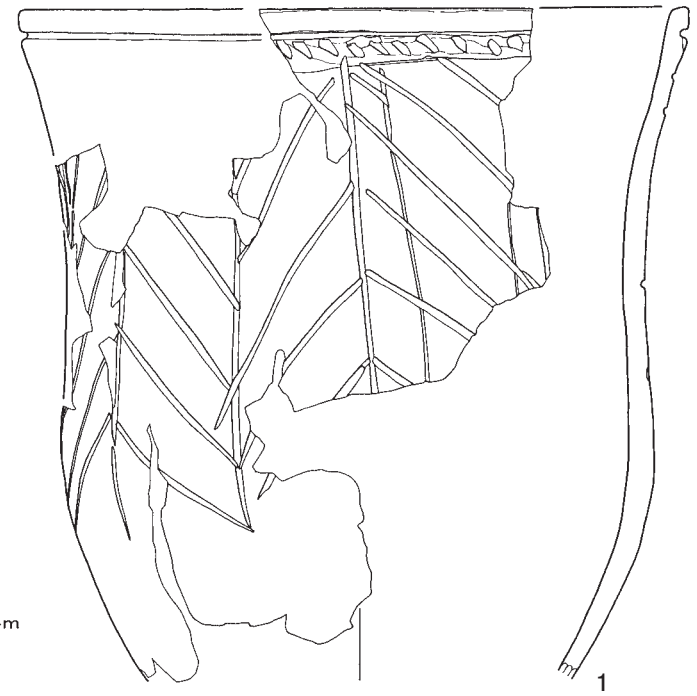
出土遺物　遺構の規模に対し極めて多量の遺物が出土した。12は浮島式の深鉢胴部である。13は称名寺式の深鉢胴部である。１～８は器形復元可能なものである。いずれも堀之内式で、８は浅鉢、それ以外は深

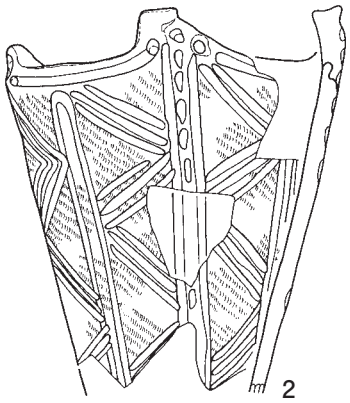


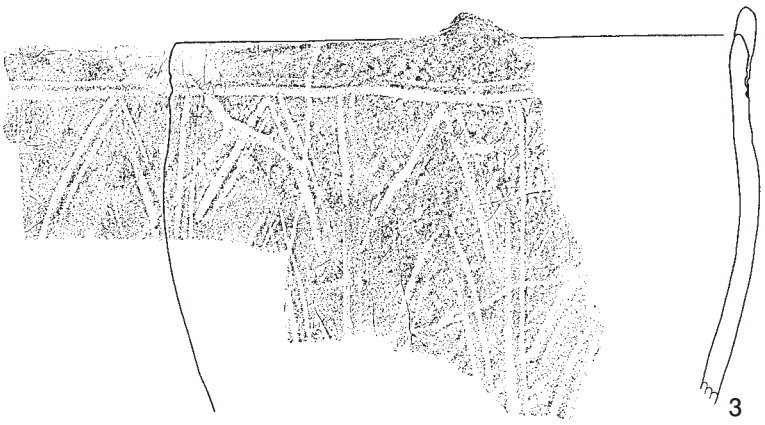
(3)SI140

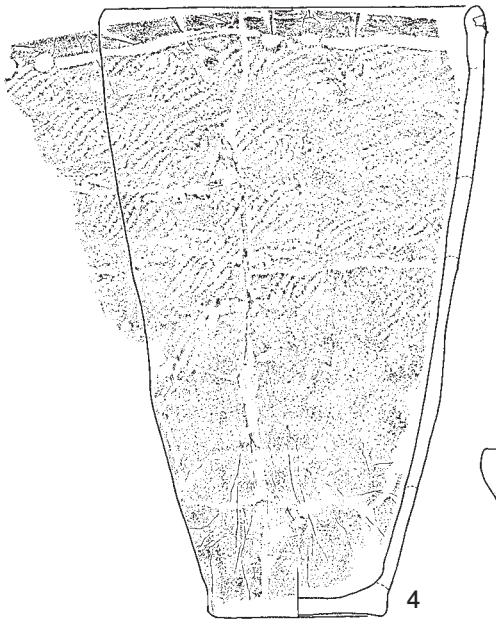
1　暗褐色土　　ローム粒少混、焼土粒微混、しまり強

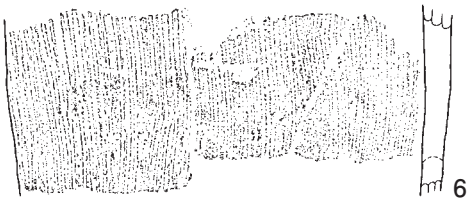
2　暗黄褐色土　ローム粒少混、しまり弱

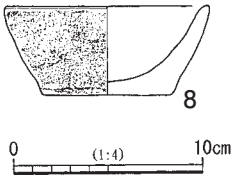






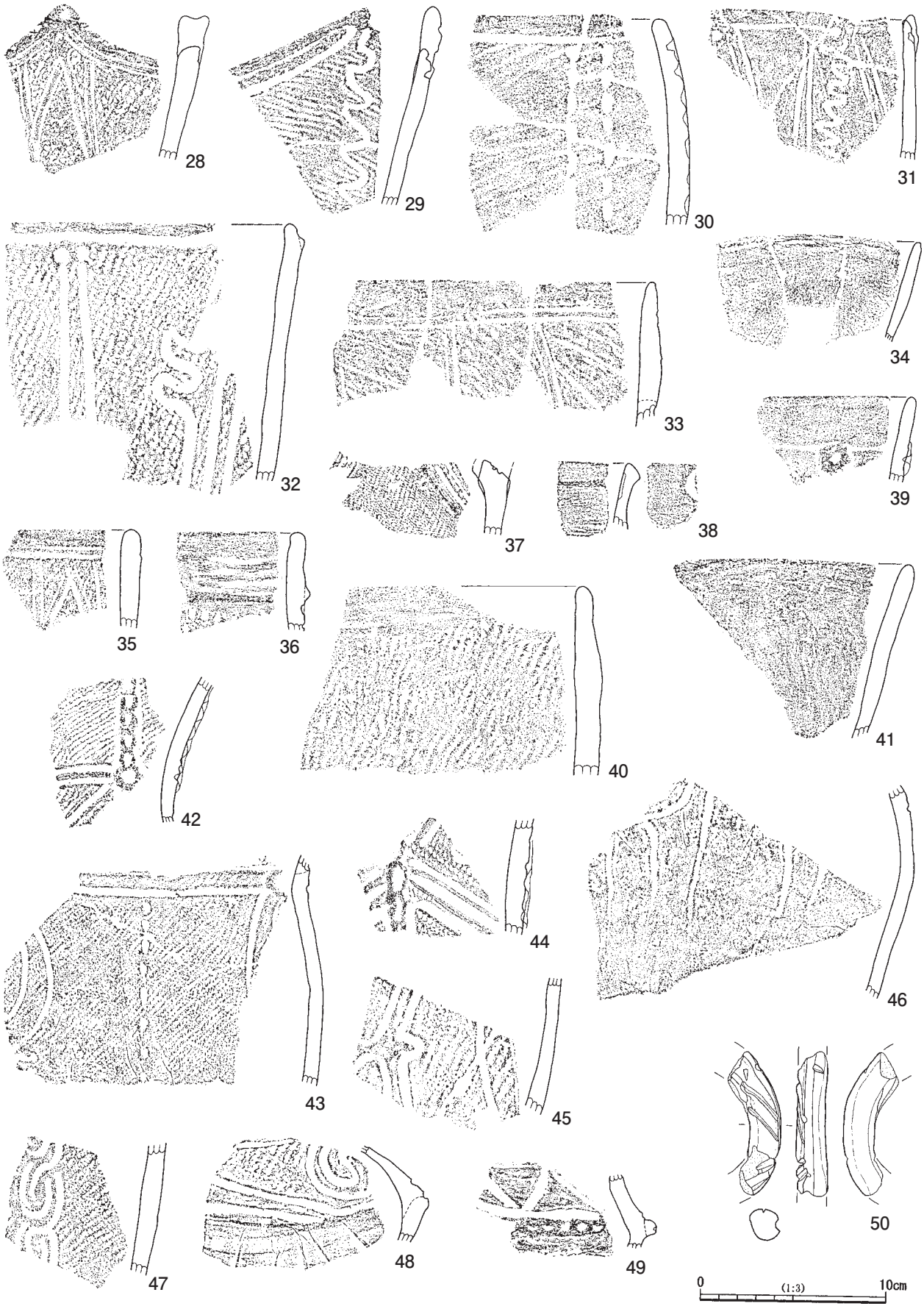




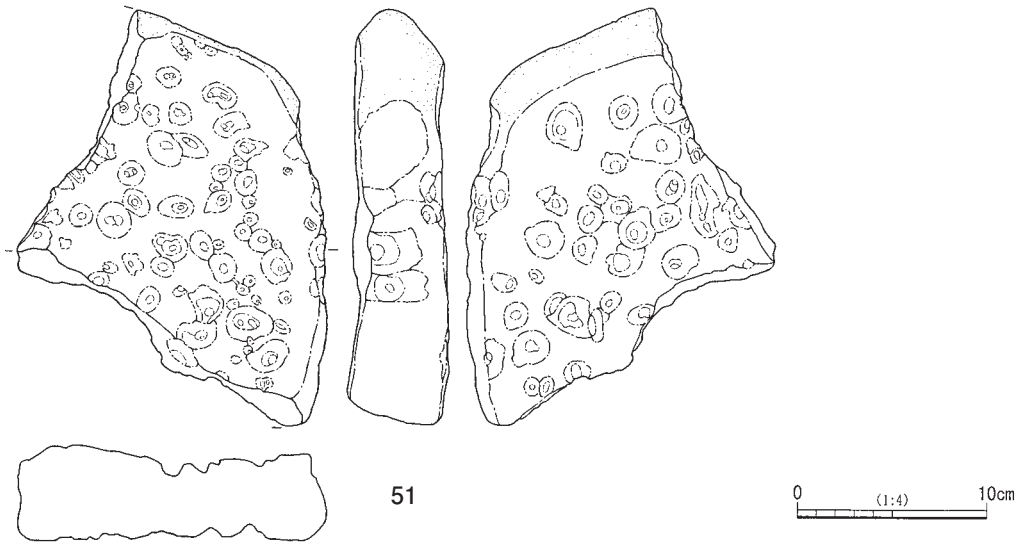


第 73 図　(3)SI140 住居跡、出土遺物（１）

第 74 図　(3)SI140 住居跡出土遺物（２）



第 75 図　(3)SI140 住居跡出土遺物（３）



第 76 図　(3)SI140 住居跡出土遺物（４）

鉢である。９・11・14 ～ 41は堀之内式の深鉢口縁部、10・42 ～ 47は胴部である。48 ～ 50は注口土器で、50は把手である。51は石皿である。両面とも磨耗著しく孔の密度もほぼ同じで、どちらが上面かは判断できない。熱を受けている。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI147（第77・78図、図版４・48・96～98）

形状と規模　当住居跡は出入口施設をもつ、いわゆる柄鏡形住居である。本体部は南北長5.6m、東西長5.8mの不整円形を呈する。南側に長さ2.9m、最大幅1.4mの出入口施設が設けられる。２基の楕円形土坑を連結したような形状を呈する。調査時は円形と住居跡と土坑との重なり合いとして捉えられていたが、一体のものと考えるのが妥当であろう。

内部の状況　断面逆台形で深さは30cmである。床面はほぼ平坦で、出入口施設までレベル差なく続く。硬化面は検出されなかった。

炉　住居のほぼ中央に構築される。掘り方は長軸長67cm、短軸長56cm、深さ43cmのピット状で、覆土に多量の焼土粒・焼土ブロックが含まれる。使用頻度が高かったと考えられる。

ピット　全部で22基検出されている。壁に沿って規則正しく一列に並ぶ。どのピットもしっかり掘り込まれており、柱穴と考えられる。出入口施設のほぼ中央にも１基ピットが検出されている。

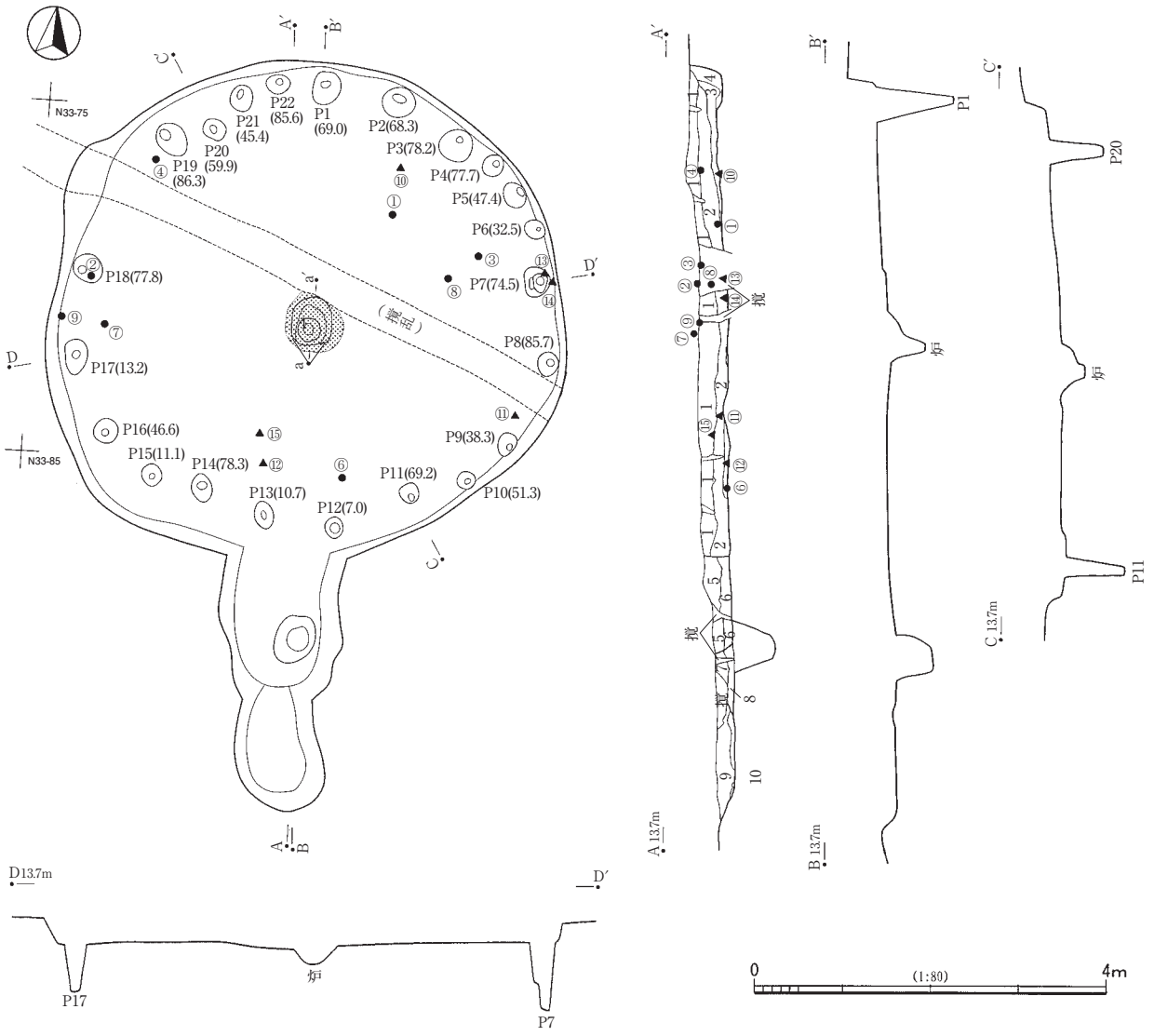
出土遺物　１～４は器形復元できる資料で、いずれも堀之内式である。３は台付土器と思われる。５～７は堀之内式深鉢口縁部、９は胴部、８は注口土器の把手である。10・11は磨製石斧である。12・13は石棒である。12は帯磁している。13は強く熱を受けており、破断した状態で出土した。14・15は軽石製品である。

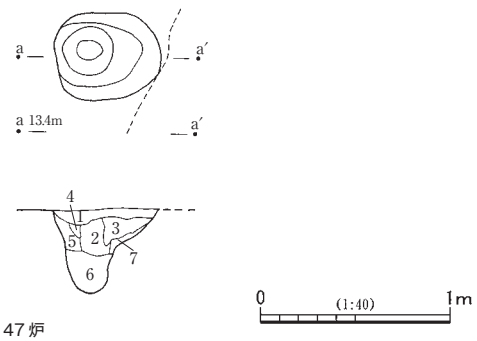
時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI161（第79・80図、図版４・48・49・96・98・99）

形状と規模　長軸長4.1m、短軸長3.6mの楕円形を呈する。

他遺構との重複関係　南西側に(3)SK162土坑が重なっている。土層観察により住居より新しいと判断され





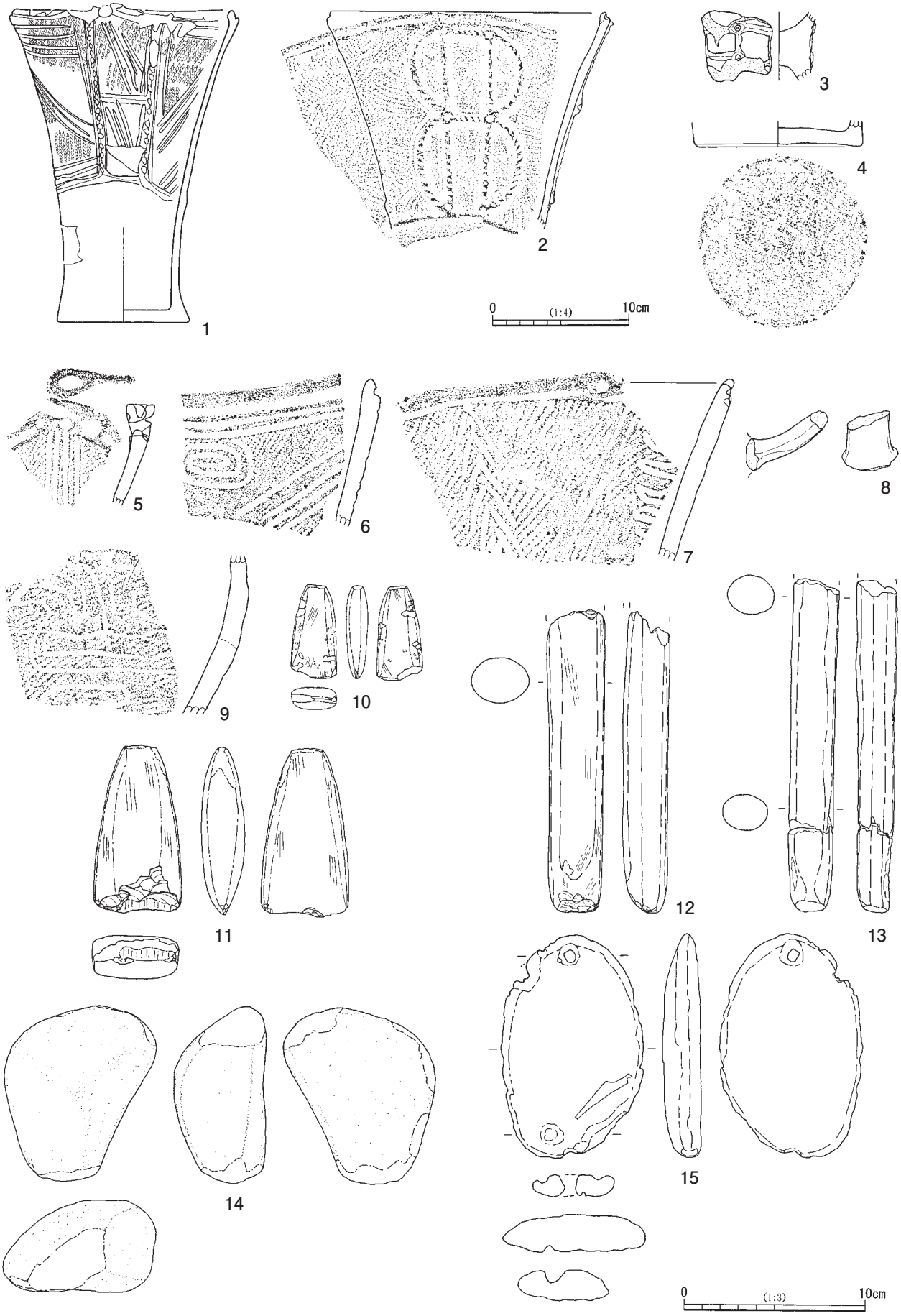
(3)SI147 炉

1 暗褐色土　焼土粒・ローム粒微混、しまり強
2 黒褐色土　焼土粒・ローム粒少混、しまり強
3 暗赤褐色土　焼土粒やや多混、しまり強、粘性やや強
4 暗褐色土　ローム粒微混、しまり強
5 褐色粘質土　ローム粒微混、しまり強
6 黒褐色土　焼土ブロック混、しまり強、粘性強
7 橙褐色土　レンガ状に被熱した焼土ブロック混

(3)SI147

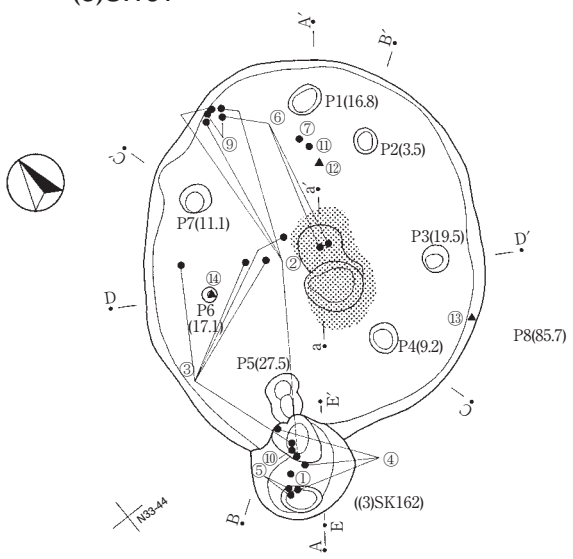
1 暗褐色土　ローム粒・φ10㎜焼土ブロック・焼土粒やや多混、粘性やや強、乾燥すると硬化顕著
2 暗褐色土　1より色調暗い、ローム粒やや多混、焼土粒少混、粘性やや強、乾燥すると硬化顕著
3 黒褐色土　2より色調暗い、ローム粒多混、焼土粒微混、粘性やや強、乾燥すると硬化顕著
4 黄褐色土　ローム粒少混
5 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微混、しまり強
6 暗褐色粘質土　焼土粒・ローム粒少混、炭化物粒微混、しまり強
7 暗褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや弱
8 暗褐色粘質土　しまり強
9 褐色土　ローム粒微混、しまり強
10 黄褐色土　しまり強、粘性やや強

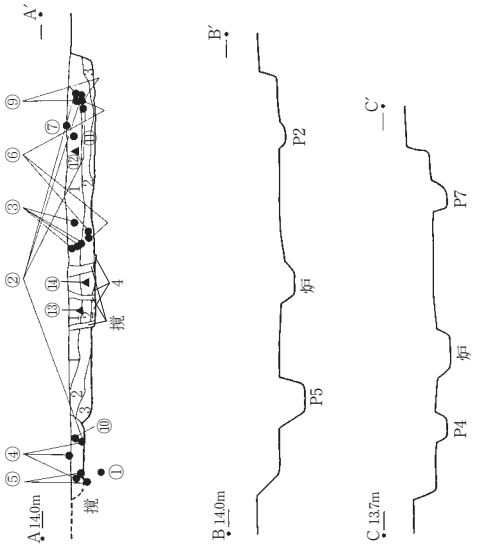
第 77 図　(3)SI147 住居跡



第 78 図　(3)SI147 住居跡出土遺物

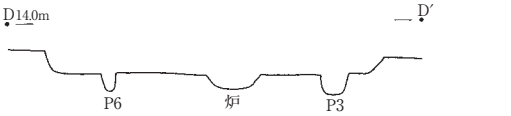
(3)SI161

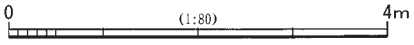


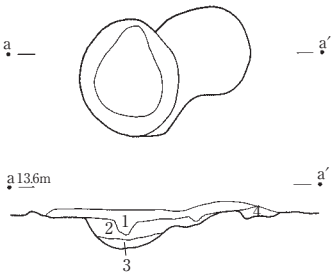


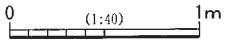
(3)SI161

1　暗褐色土　　ローム粒やや多混、焼土粒微混、粒子やや粗、しまり強
2　暗褐色土　　ローム粒・φ5㎜ロームブロック少混、粒子やや密、しまり強
3　褐色土　　焼土粒・ローム粒微混、粒子密、しまりやや弱
4　暗赤褐色土　φ5㎜焼土ブロックやや多混、ローム粒多混、しまり弱、炉覆土

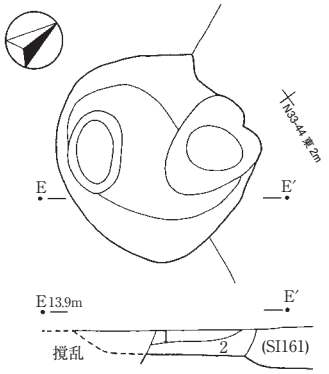








(3)SK162

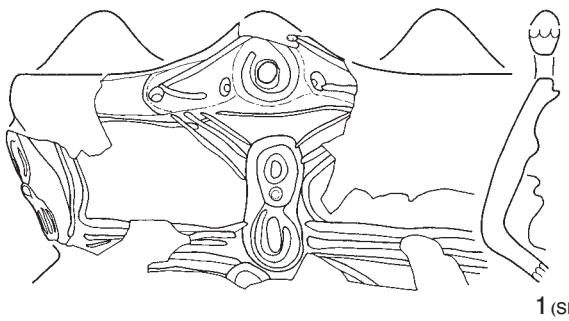


(3)SI161 炉

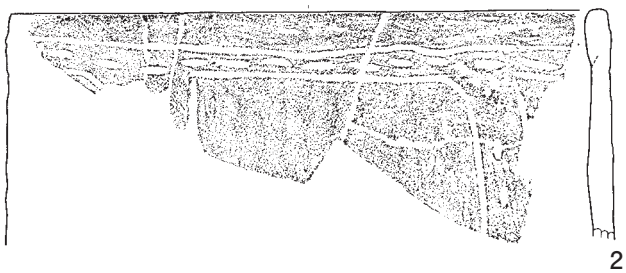
1　暗赤褐色土　焼土粒・ローム粒微混、しまり強
2　暗赤褐色土　1より黄色味強い、焼土粒多混、しまりやや弱
3　橙褐色土　　焼土粒多混、しまりやや弱
4　黄褐色土　　焼土ブロック多混、粒子粗、しまり強

(3)SK162

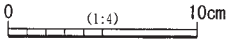
1　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまり強
2　褐色土　　φ5㎜焼土粒少混、しまり強



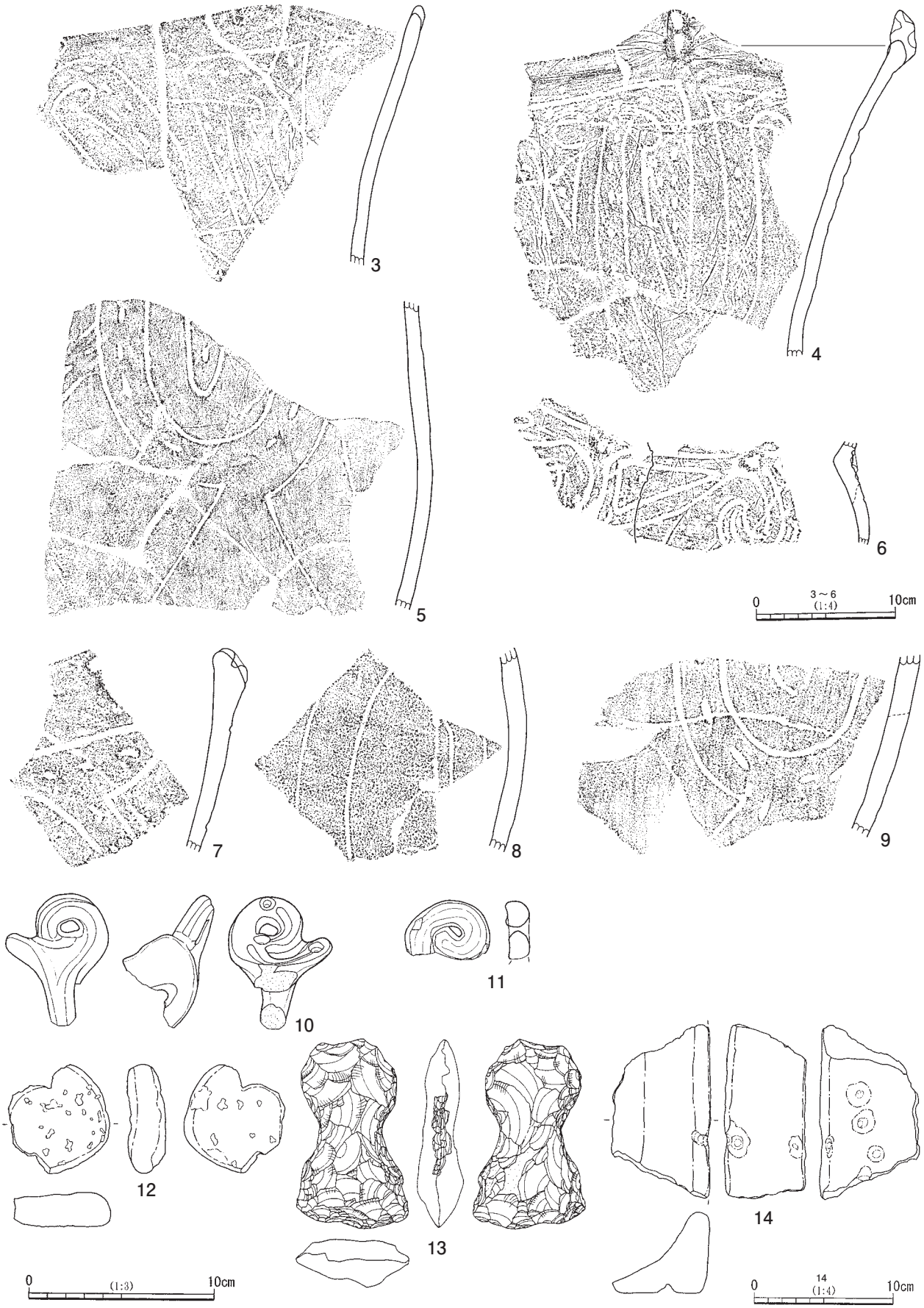
1 (SK162)



2



第 79 図　(3)SI161 住居跡、(3)SK162 土坑、出土遺物



第 80 図　(3)SI161 住居跡出土遺物

るが、住居の出入口施設である可能性も指摘しておく。

内部の状況　断面逆台形で深さは30㎝である。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は検出されなかった。

炉　住居の中央よりやや南西側に構築される。長軸長62㎝、短軸長52㎝の楕円形を呈し、北東側に同規模の張出しが存在する。

ピット　７基検出されている。壁からやや離れた位置に円弧を描くように配される。全体に浅い。

出土遺物　２～４は称名寺式の深鉢口縁部、５～９は胴部である。10・11は深鉢の把手である。12は軽石製品、13は打製石斧、14は石皿である。

時期　主たる出土遺物は称名寺式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK162（第79図、図版４・48）

状況　(3)SI161の南西側に位置する。長軸・短軸とも長さ110㎝の不整円形を呈し、内部にはピット状の掘込みが２か所認められる。断面皿状であるが遺存状況は悪い。

出土遺物　１は称名寺式の深鉢口縁部である。

時期　主たる出土遺物は称名寺式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI163、(3)SK174（第81～83図、図版５・49・50・96～98）

形状と規模　当住居跡は３次調査区と７次調査区にまたがって構築されている。長軸長6.4ｍ、短軸長5.2ｍの不整円形を呈する。西側の壁がやや不自然に曲がっており、２軒以上の重複の可能性も考えたが柱穴配置などからはそうした状況は認定できなかった。楕円形か隅丸長方形だったかもしれない。北東部に(3)SK174が重なっているが、これは３次調査区側で検出されたものの、７次調査区側では検出されなかったようで、実態は不明である。

他遺構との重複関係　(3)SK164と(3)SK173が重なっている。(3)SK164は住居より新しく、(3)SK173は住居より古い。

内部の状況　壁の立上がりはややなだらかである。覆土は全体にロームブロックや焼土粒が多量に混入しており、人為的に埋め戻されたものであろう。床面は平坦であるが、特に硬化面などは検出されなかった。

炉　プラン北部のかなり壁に近い位置に構築されている。長軸長82㎝、短軸長46㎝の不整円形を呈する。深さは５㎝とごく浅いが、覆土に焼土粒・焼土ブロックが多量に含まれており、使用頻度は高かったと考えられる。

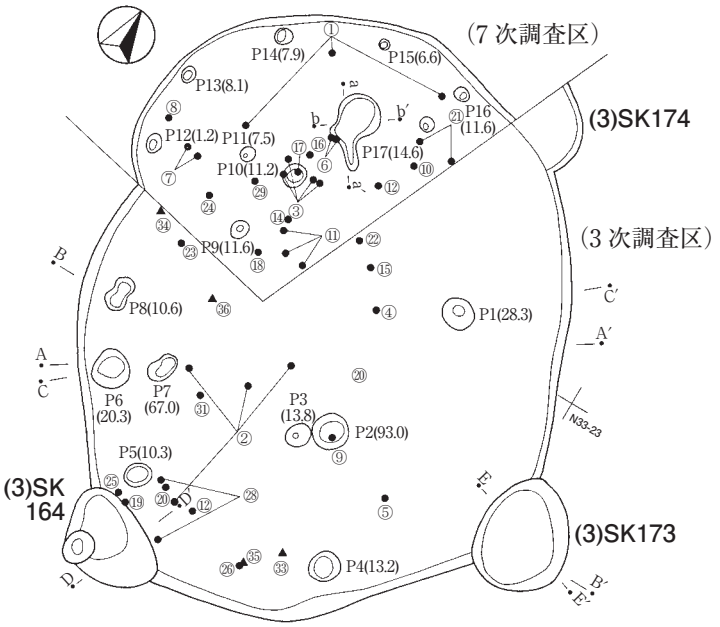
ピット　全部で17基検出されている。７次調査区側は壁に沿うようにある程度規則正しく配されるのに対し、３次調査区側は不規則な配置である。検出が不十分だった可能性がある。

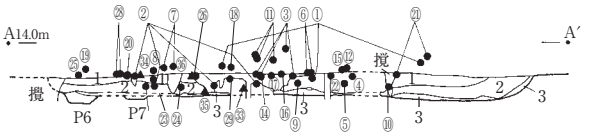
出土遺物　１・２・６～10は器形復元できる資料で、黒浜式の深鉢である。３・12～27は黒浜式の深鉢口縁部、４・５・28・29は胴部である。30・31は諸磯式の深鉢口縁部である。32は堀之内式の深鉢口縁部である。11はおそらく後期土器の底部である。33・34は磨製石斧である。35は敲石である。36は三角錐形軽石製品である。

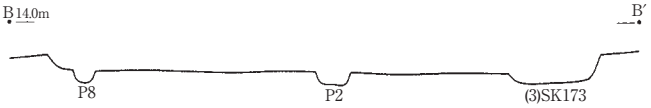
時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

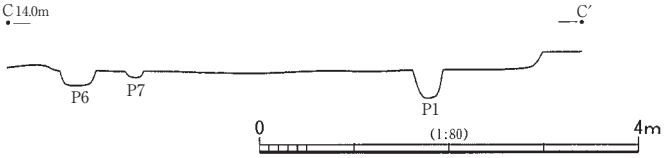
(3)SK164（第81・83図、図版５・50）

状況　(3)SI163住居跡の南部に位置し、住居と半分ほど重なっている。長軸長120㎝、短軸長84㎝の不整円形を呈する。床面には凹凸があり、最も深い部分で22㎝である。南西側には直径30㎝のピット状の掘込み









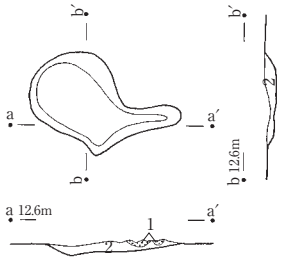
(3)SI163

1　黒褐色土　ローム粒多混、しまり強、粘性やや強、乾燥すると硬化顕著

2　黒色土　ローム粒・焼土粒多混、φ10 ㎜ロームブロック少混、1 に比べしまりやや弱、粘性やや強

3　褐色土　ローム粒やや多混、φ10 ㎜焼土ブロック少混、しまり強

(3)SI163 炉

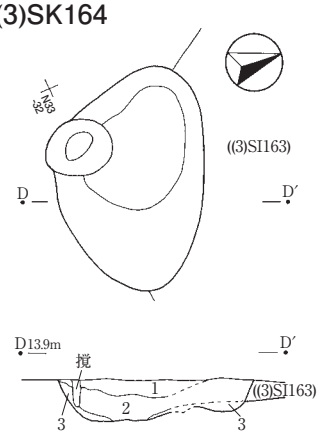


(3)SI163 炉

1　焼土ブロック

2　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒多混

(3)SK164



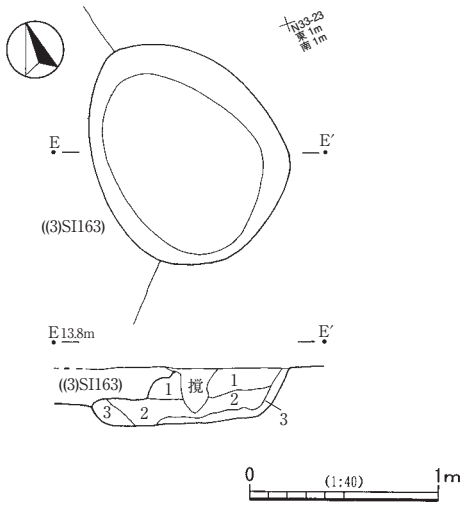
(3)SK164

1　黒褐色土　φ10 ㎜褐色土混（斑状）、しまりやや弱

2　黒褐色土　φ5 ㎜暗黄褐色土やや多混（斑状）、しまりやや弱

3　黄褐色土　φ10 ㎜ロームブロック少混、しまりやや弱

(3)SK173



(3)SK173

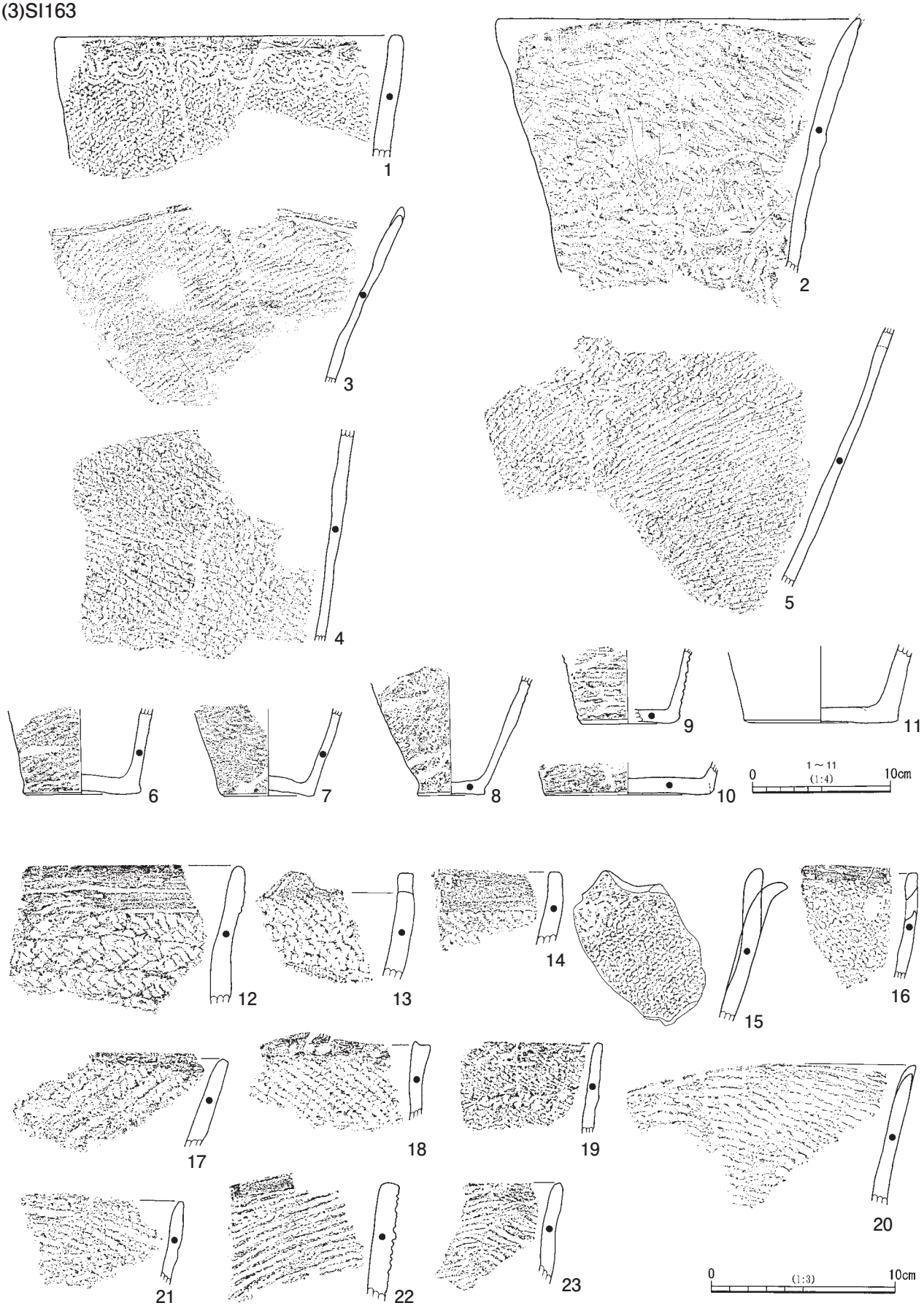
1　暗褐色土　ローム粒少混、焼土粒微混、しまり強

2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒微混、1 よりいずれも径が大きい、しまり強

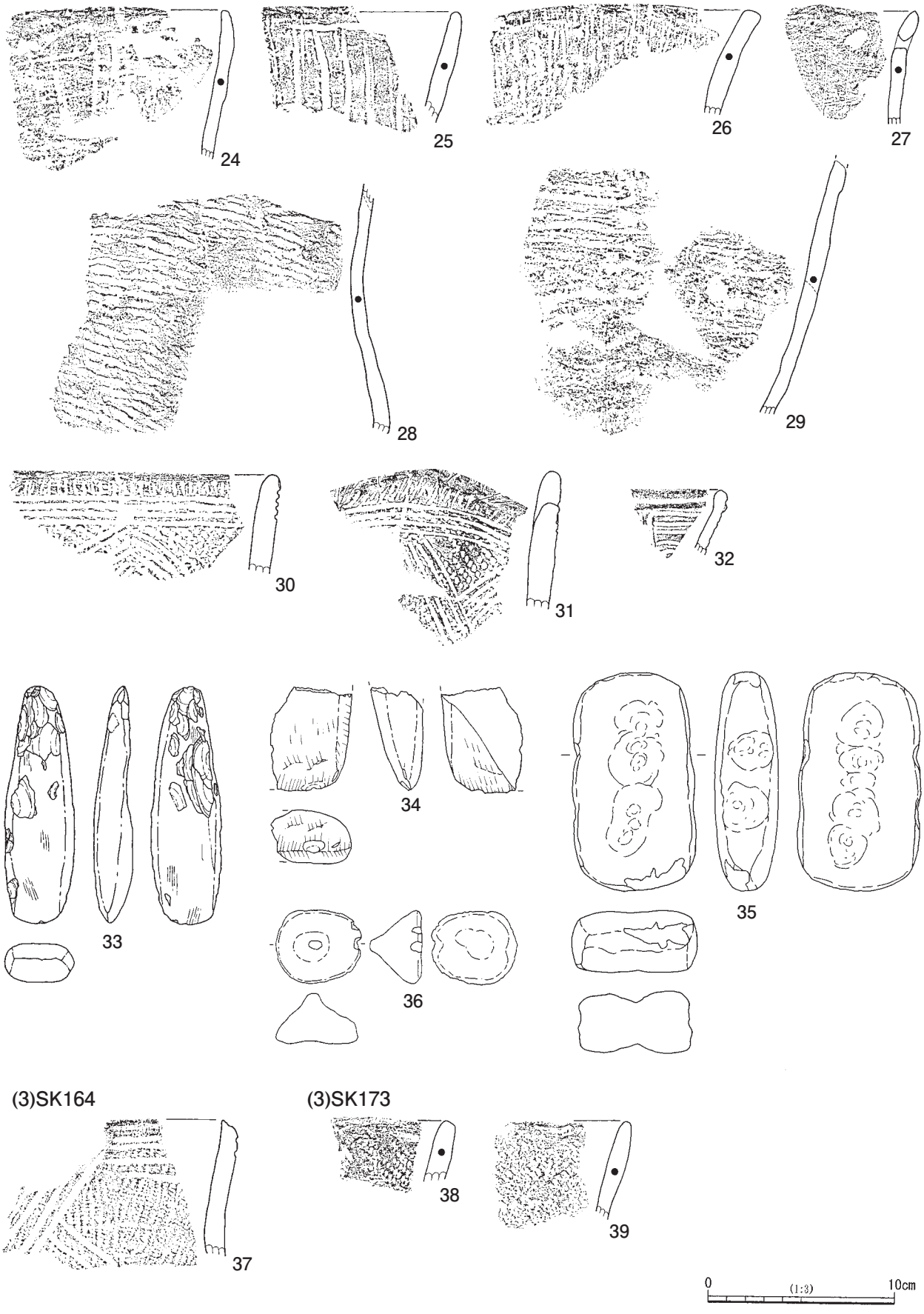
3　暗褐色土　黄褐色土との混土、しまり強

第 81 図　(3)SI163 住居跡、(3)SK164・173・174 土坑

(3)SI163



第 82 図　(3)SI163 住居跡出土遺物（１）



第 83 図　(3)SI163 住居跡出土遺物（２）、(3)SK164・173 土坑出土遺物

が存在する。土層断面の観察から住居より新しいと判断される。

出土遺物　37は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK173（第81・83図、図版５・50）

状況　(3)SI163住居跡の南部に位置し、住居と３分の１ほど重なっている。長軸長124cm、短軸長96cmの不整円形を呈する。床面はほぼ平坦で、深さは30cmである。土層断面の観察から住居より古いと判断される。

出土遺物　38・39は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI165（第84・85図、図版５・50）

形状と規模　当住居跡は南北4.6m、東西5.0mの範囲で円形に並ぶ柱穴状のピット７基から構成される。ただし７基とも小さく浅い。

他遺構との重複関係　Ｐ５と(3)SK128が重なっている。また、ピットの内側には(3)SK126・127が存在するが、いずれも新旧関係は不明である。

内部の状況　壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明である。

炉　検出されていない。

出土遺物　当住居跡に帰属するとして取り上げられているのは１であるが、平面図を見ると(3)SK128から出土しているようにも見える。堀之内式の深鉢と思われる。

時期　堀之内式期に属するものであろう。

(3)SK126（第84・85図、図版５・51）

状況　長軸長104cm、短軸長100cmの不整円形を呈する。床面は緩やかに窪んでおり、深さは38cmである。

出土遺物　２は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　堀之内式期に属するものであろう。

(3)SK127（第84・85図、図版５・51）

状況　長軸長180cm、短軸長150cmの隅丸台形状を呈する。底面は西側に向かって緩やかに下降するように傾斜しており、深さは最深で33cmである。土坑南西部には長軸長130cm、短軸長80cmの台形状を呈する一回り小さな掘込みが存在する。

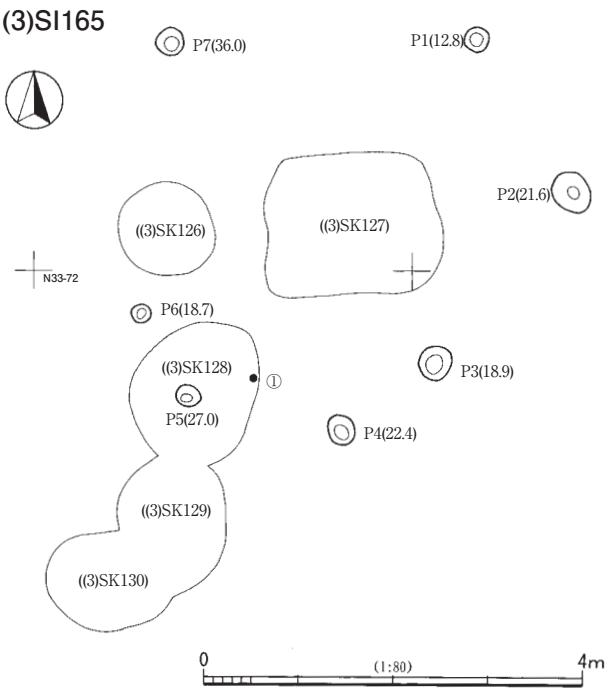
出土遺物　４は堀之内式の深鉢口縁部、３は胴部から底部である。

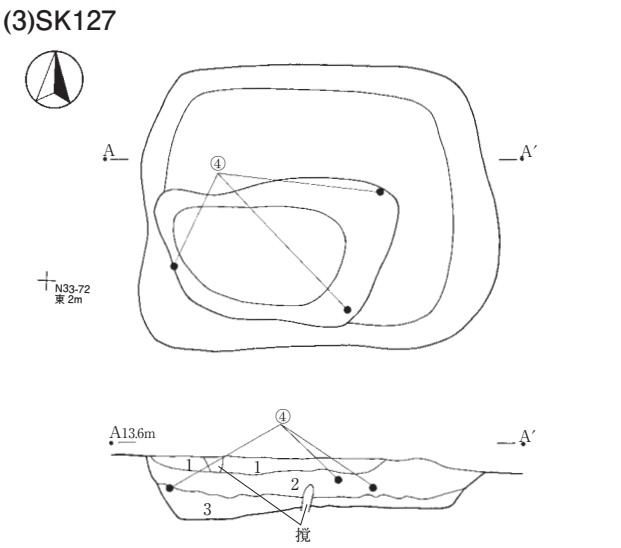
時期　出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK128～130（第84・85図、図版５・51・96）

状況　３基の土坑が重なり合っている。(3)SK128は長軸長160cm、短軸長128cmの不整円形を呈し、深さは19cmである。中心部に直径20cm ～ 26cmのピットが掘り込まれる。(3)SK129は長軸長145cm、短軸長114cmの不整円形を呈し、深さは20cmである。(3)SK130は長軸長138cm、短軸長103cmの不整円形を呈し、深さは26cmである。３基の中では(3)SK129が最も古い。

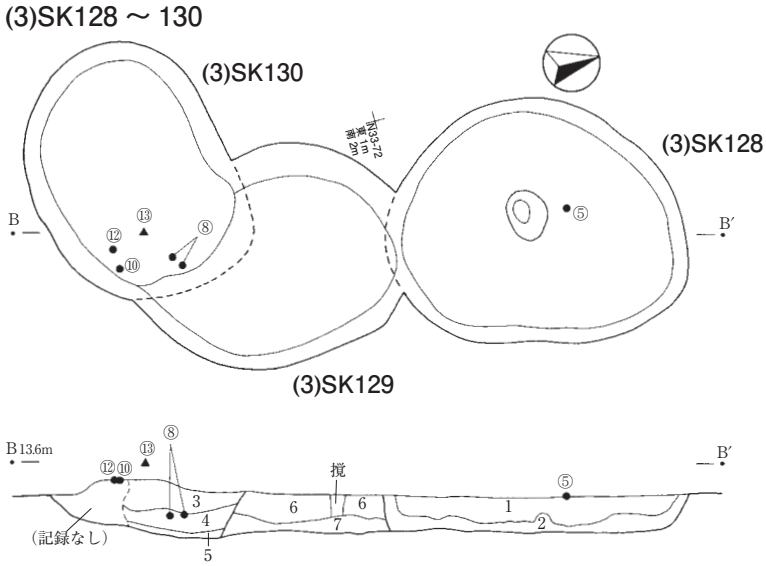
出土遺物　３基分まとめて記載する。５・６・９・10は堀之内式の深鉢口縁部、７・11は胴部である。12は堀之内式の注口土器胴部である。８はミニチュア土器で、無文であるが堀之内式であろう。13は磨製石斧である。

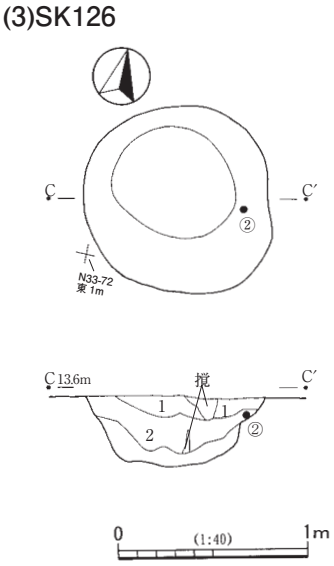




(3)SK127

1　暗褐色土　　ローム粒微混、しまりやや弱
2　暗黄褐色土　φ30 ㎜ロームブロック少混、ローム粒・炭化物粒微混、しまりやや弱
3　暗黄褐色土　φ5 ㎜ローム粒少混、しまりやや弱





(3)SK128・129・130

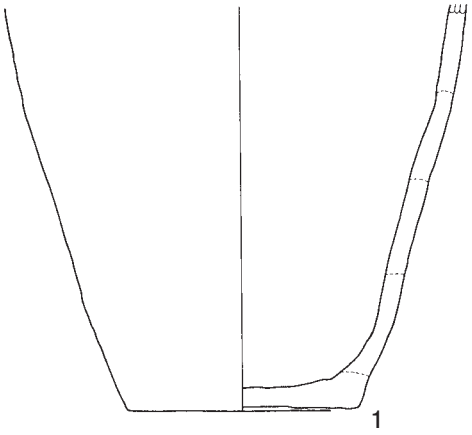
1(SK128)　暗褐色土　ローム粒・焼土粒微混、しまり強
2(SK128)　褐色土　　黄褐色土少混（斑状）、ローム粒微混、しまりやや弱
3(SK130)　暗褐色土　φ～5 ㎜ローム粒少混、焼土粒微混
4(SK130)　暗褐色土　φ5 ㎜ハードロームブロック少混
5(SK130)　褐色土　　しまり非常に強
6(SK129)　褐色土　　ローム粒微混、しまりやや弱
7(SK129)　褐色土　　暗褐色土少混、しまりやや弱

(3)SK126

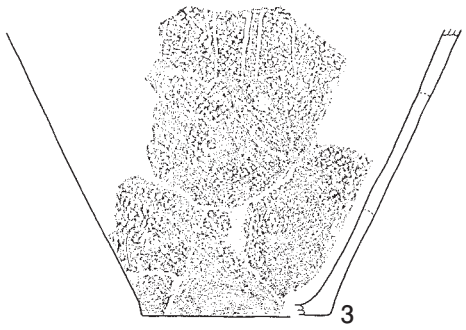
1　暗褐色土　　ローム粒・φ5 ㎜ロームブロック少混、しまり強
2　黒褐色土　　ローム粒・焼土粒・炭化物粒微混、しまり強
3　暗黄褐色土　ローム粒散在、しまり強

第 84 図　(3)SI165 住居跡、(3)SK126 ～ 130 土坑

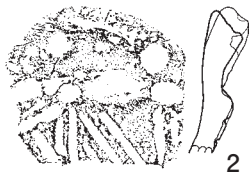
(3)SI165



(3)SK127

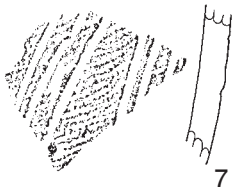


(3)SK126

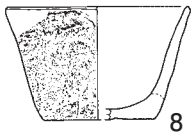


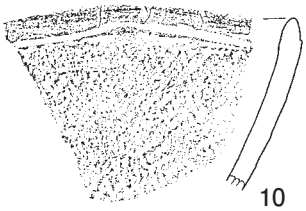
(3)SK128

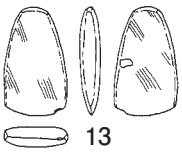
(3)SK129

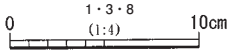


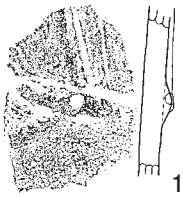
(3)SK130

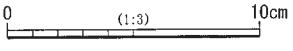












第 85 図　(3)SI165 住居跡、(3)SK126 ～ 130 土坑出土遺物

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI177（第86図、図版５・51）

形状と規模　当住居跡は南北4.0m、東西4.8mの範囲で検出された柱穴状のピット７基と硬化面から構成される。

他遺構との重複関係　中央よりやや東部に(3)SK176土坑が存在する。新旧関係は不明である。

内部の状況　壁が失われているため覆土は残存していない。ただし北西部を除きほぼ全面に硬化面が認められ、床面は残存していることが明らかである。

炉　検出されていない。東端部のP1は覆土に焼土が多量に混入しており炉を思わせるが、位置を考慮すると炉ではないと思われる。

ピット　硬化面を取り囲むように７基検出されている。壁柱穴と思われる。

出土遺物　確実に当住居跡に伴っているのは１のみである。称名寺式の深鉢口縁部である。

時期　出土遺物は少ないが称名寺式であり、当遺構の時期を示していると思われる。

(3)SK176（第86図、図版５・51）

状況　直径130cmの正円形を呈する。ただし開口部は均整がとれた形状であるのに対し、坑底は不整形である。最深で40cmを測る。西部に径35cm～50cmのピット状の掘込みが存在する。

出土遺物　６は称名寺式の深鉢口縁部、７・９～11は胴部である。２～５は堀之内式の深鉢口縁部、８は胴部である。12～15は後期土器の底部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI179（第87図、図版５・51）

形状と規模　長軸長3.9m、短軸長3.6mの不整円形を呈する。

内部の状況　断面皿状を呈し、壁の立上がりは緩やかである。床面は平坦で深さは15cmと浅い。硬化面は検出されなかった。

炉　中央より北西部から検出されている。

ピット　５基検出されている。中央部に寄った位置であり、P1・4は主柱穴であろう。

出土遺物　１・２は黒浜式の深鉢口縁部、３は胴部である。

時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI181（第88図、図版５）

形状と規模　撹乱が著しく不明な点はあるが、長軸長3.7m、短軸長3.2mの不整円形を呈すると思われる。

他遺構との重複関係　中央西寄りに(3)SK182が存在し、住居より新しい。

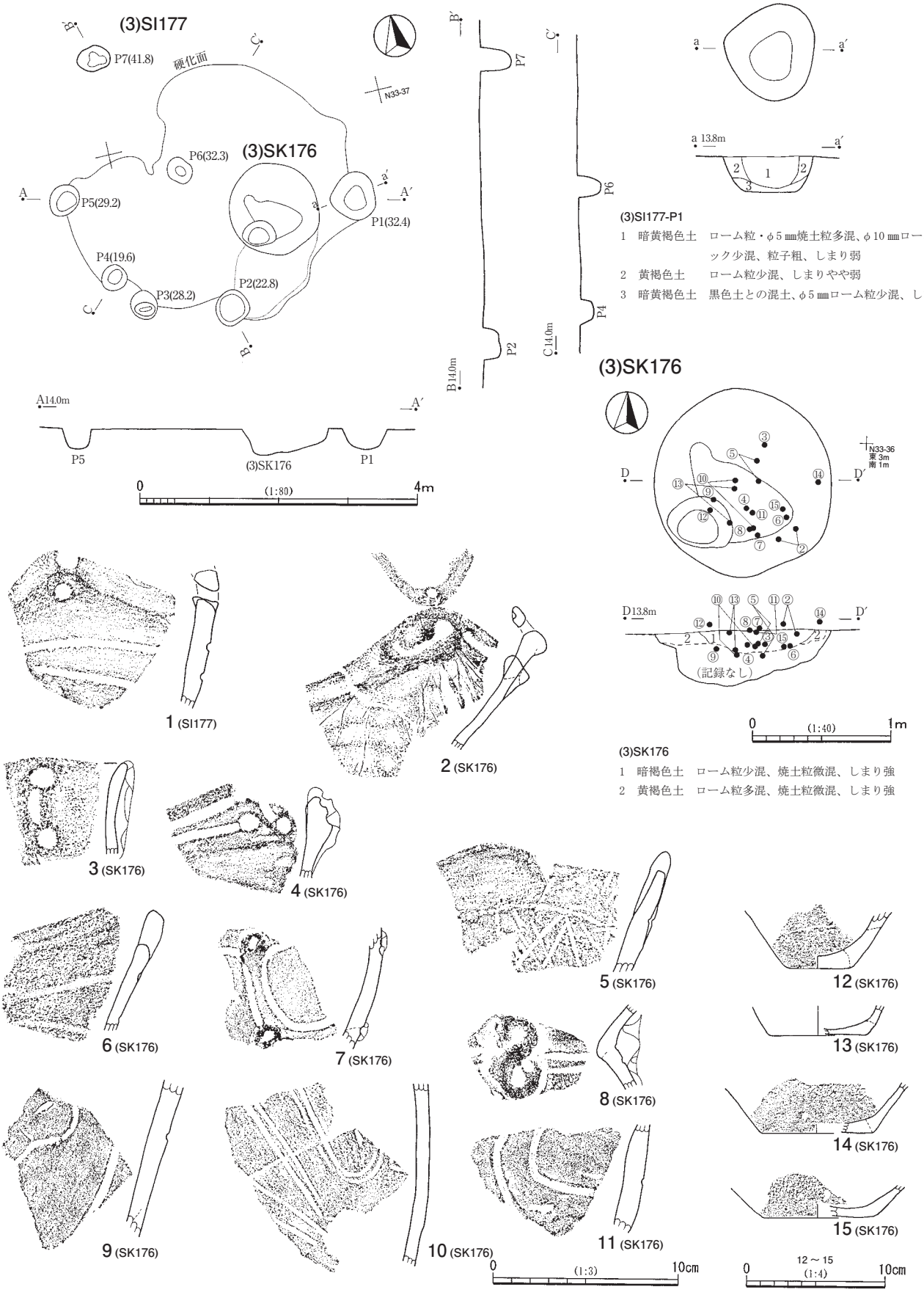
内部の状況　断面皿状を呈し、壁の立上がりは緩やかである。深さは10cmとごく浅い。床面に硬化面は検出されなかった。

炉　中央部に位置するが、土坑と撹乱によってほとんど削平されている。径約50cmの円形を呈すると思われる。

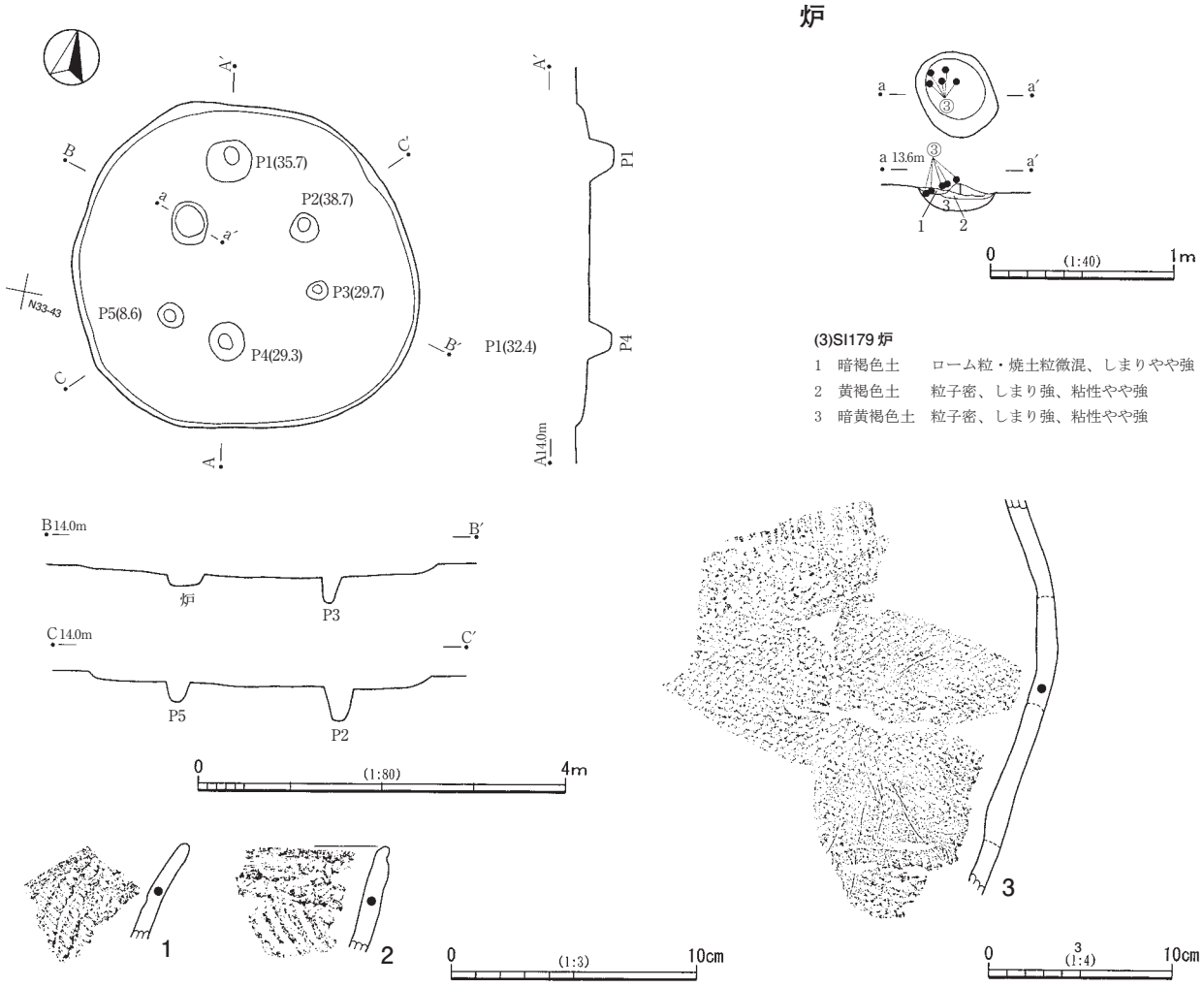
ピット　中央部に寄った位置から７基検出されている。P1・4は主柱穴であろう。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は、不明である。



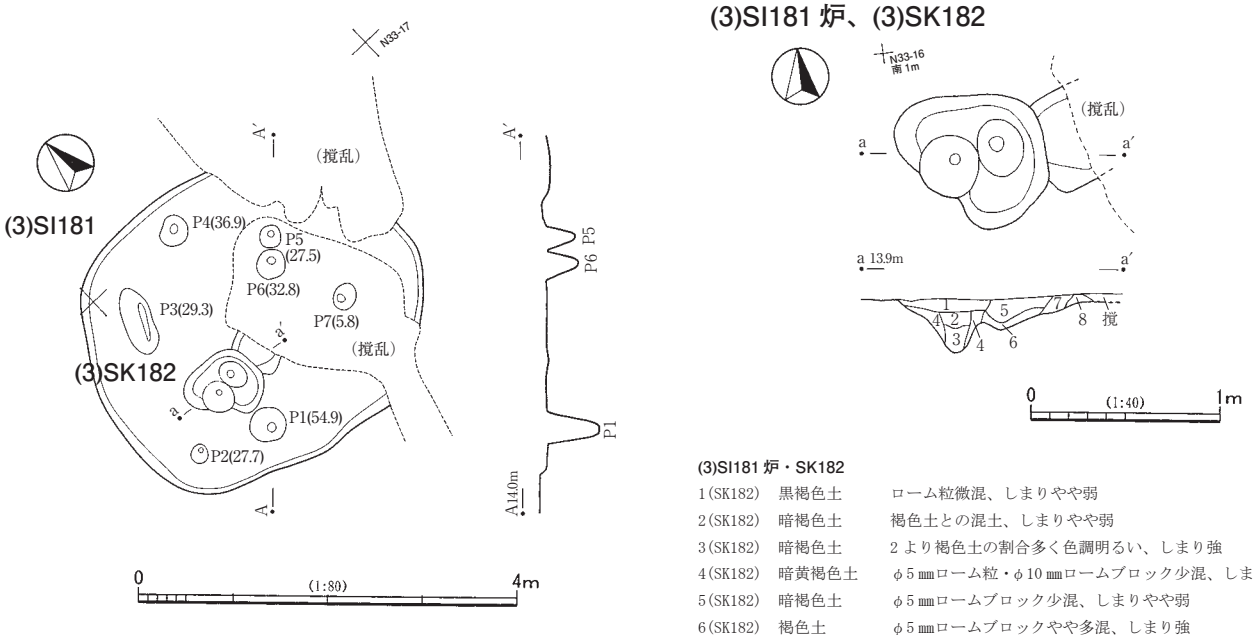
第 86 図　(3)SI177 住居跡、(3)SK176 土坑、出土遺物



(3)SI179 炉

1 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微混、しまりやや強
2 黄褐色土　粒子密、しまり強、粘性やや強
3 暗黄褐色土　粒子密、しまり強、粘性やや強

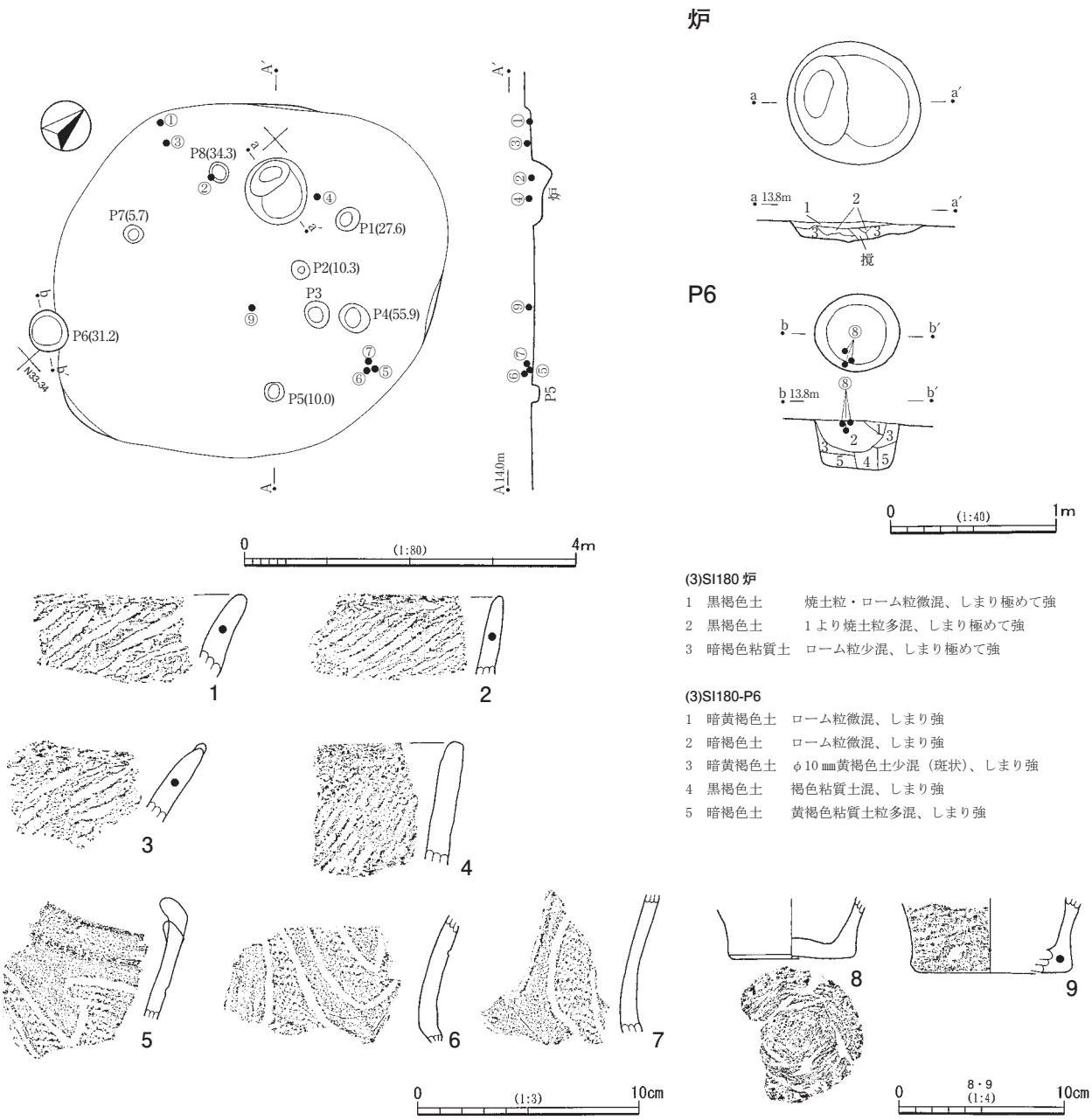
第 87 図　(3)SI179 住居跡、出土遺物



(3)SI181 炉・SK182

1(SK182)　黒褐色土　ローム粒微混、しまりやや弱
2(SK182)　暗褐色土　褐色土との混土、しまりやや弱
3(SK182)　暗褐色土　2 より褐色土の割合多く色調明るい、しまり強
4(SK182)　暗黄褐色土　φ5 ㎜ローム粒・φ10 ㎜ロームブロック少混、しまりやや強
5(SK182)　暗褐色土　φ5 ㎜ロームブロック少混、しまりやや弱
6(SK182)　褐色土　φ5 ㎜ロームブロックやや多混、しまり強
7(SK182)　黒色土　ロームブロック・φ10 ㎜黄褐色土混、しまり弱
8(SI181 炉) 暗赤褐色土　φ20 ㎜焼土ブロック混

第 88 図　(3)SI181 住居跡、(3)SK182 土坑



(3)SI180 炉

1 黒褐色土　焼土粒・ローム粒微混、しまり極めて強
2 黒褐色土　1より焼土粒多混、しまり極めて強
3 暗褐色粘質土　ローム粒少混、しまり極めて強

(3)SI180-P6

1 暗黄褐色土　ローム粒微混、しまり強
2 暗褐色土　ローム粒微混、しまり強
3 暗黄褐色土　φ10㎜黄褐色土少混（斑状）、しまり強
4 黒褐色土　褐色粘質土混、しまり強
5 暗褐色土　黄褐色粘質土粒多混、しまり強

第89図　(3)SI180住居跡、出土遺物

(3)SK182（第88図、図版５）

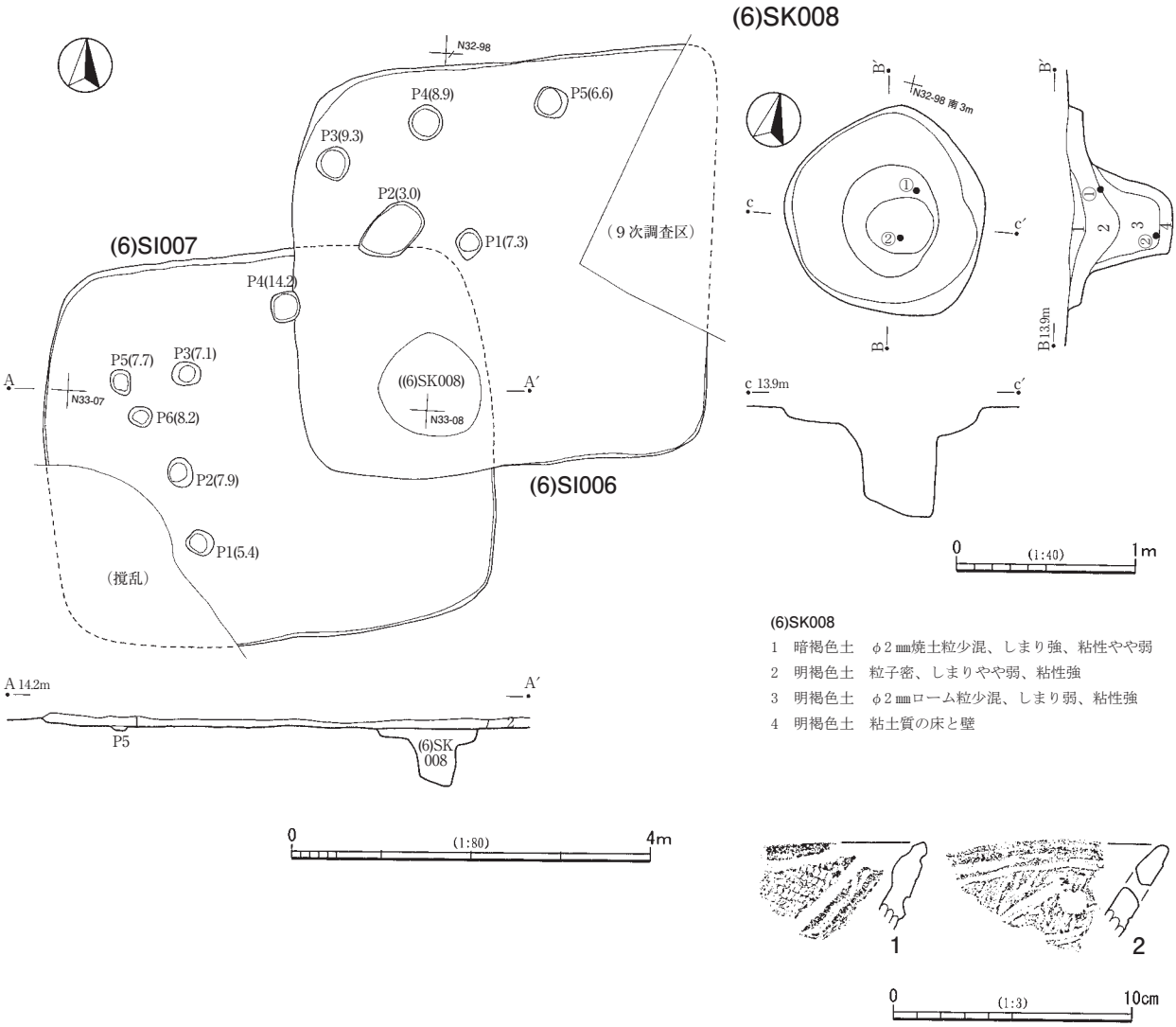
状況　(3)SI181住居跡の床面やや西寄りに位置し、住居の炉を切っている。東西長80cm、南北長70cmの不整形土坑の床に、直径25cm～30cmの摺鉢状のピット２基が連結されたような形状である。土層断面からこの２基のうち東側が古く西側が新しいと判断される。この西側のピットには柱痕と思われる土層堆積が認められるが、住居との関連はないと考えられ、性格は不明である。深さは最深で29cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SI180（第89図、図版５・52）

形状と規模　壁がほとんど残存していないため一部推定復元しているが、長軸長5.2m、短軸長4.4mの不整円形を呈する。



第 90 図　(6)SI006・007 住居跡、(6)SK008 土坑、出土遺物

内部の状況　断面皿状を呈し、壁の立上がりは緩やかである。深さは５cm以下でかろうじて掘込みが認識できる程度である。床面はほぼ残存していると思われるが、硬化面は検出されなかった。

炉　北西部に存在する。長軸長80cm、短軸長75cmの正円に近い楕円形である。西側が一段低くなっており深さが10cmである。焼土粒が混入するものの多いとは言えず、使用頻度は低かったとみられる。

ピット　全部で８基検出されている。そのうちP6は住居の壁をまたぐように位置しており、独立した土坑かもしれない。

出土遺物　１～３は黒浜式の深鉢口縁部、９は底部である。５は称名寺式の深鉢口縁部、６・７は胴部である。４は堀之内式の深鉢口縁部、８は後期土器の底部である。

時期　出土遺物は黒浜式と称名寺式に分けられ、数量はほぼ拮抗しているが、称名寺式の遺物は住居東部のごく狭い範囲からの出土であるのに対し、黒浜式の遺物は住居内の各所から出土しているため、当遺構は黒浜式期と考えられる。

(6)SI006（第90図、図版５）

形状と規模　東西長、南北長とも4.6mの隅丸方形を呈する。なお、北東側は９次調査区の範囲になるが、

検出されなかった。

他遺構との重複関係　南西部が(6)SI007及び(6)SK008と重なっており、(6)SI007より古いことは分かるが(6)SK008との新旧関係は不明である。

内部の状況　断面方形で壁はほぼ直立する。床面は平坦であるが、硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

ピット　全部で５基検出されている。配置は極めて不規則で全体に浅く、柱穴とは考えにくい。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、堀之内式を出土している(6)SK008と大きな隔たりはないと考えられる。

(6)SI007（第90図、図版５）

形状と規模　東西長5.0m、南北長4.3mの隅丸長方形を呈する。

他遺構との重複関係　北東部が(6)SI006及び(6)SK008と重なっており、いずれの遺構よりも新しい。

内部の状況　断面方形で壁はほぼ直立する。床面は平坦であるが、硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

ピット　全部で６基検出されている。配置は極めて不規則で全体に浅く、柱穴とは考えにくい。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、堀之内式を出土している(6)SK008より新しいものの大きく下ることはないと考えられ、土坑に近い時期と推測される。

(6)SK008（第90図、図版６・52）

状況　開口部は径114cmの不整円形を呈する。深さ８cmの皿状に掘り窪められ、中央部はさらに径52cm～62cmの柱穴状のピットが掘り込まれる。(3)SI007住居跡の床下から検出され、住居より古いと判断される。土層断面から、全体が同時に埋まったものと判断され、複数の遺構が重なっている状況ではないとみられる。

出土遺物　１・２は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI001（第91図、図版６・52・93）

形状と規模　長軸長6.0m、短軸長4.7mの不整形を呈する。東・南の壁は直線的であるが、北・西の壁は円弧を描いている。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは最大でも10cm程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

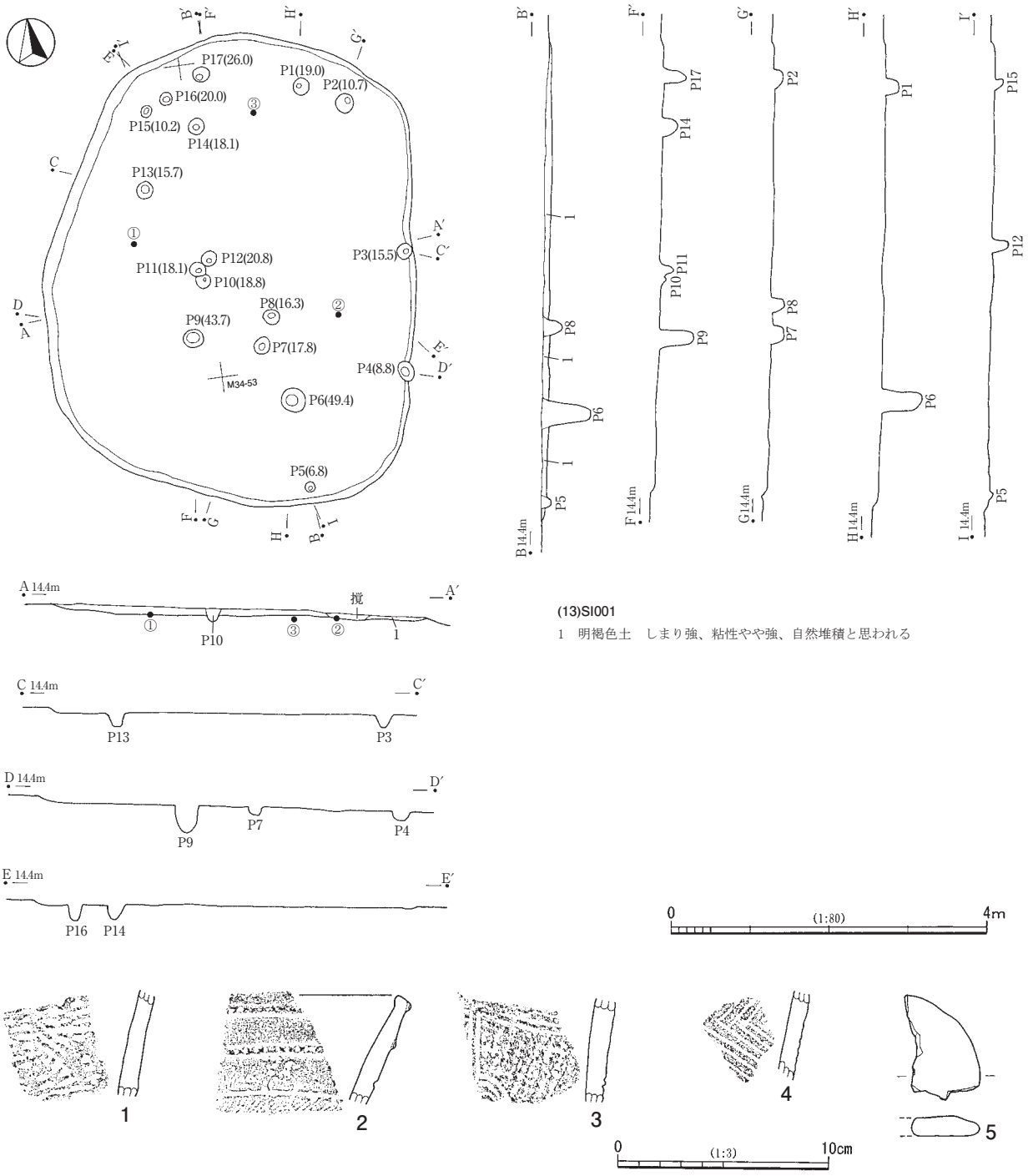
ピット　全部で17基検出されている。ただしP6・8・10は土層断面の観察から当住居跡より新しいと考えられる。

出土遺物　１は浮島式の深鉢胴部である。２は堀之内式の深鉢口縁部、３・４は深鉢胴部である。５は土製円盤である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI002（第92図、図版６・52）

形状と規模　当住居跡は13次調査区と15次調査区にまたがって構築されているが、15次調査区側には中・

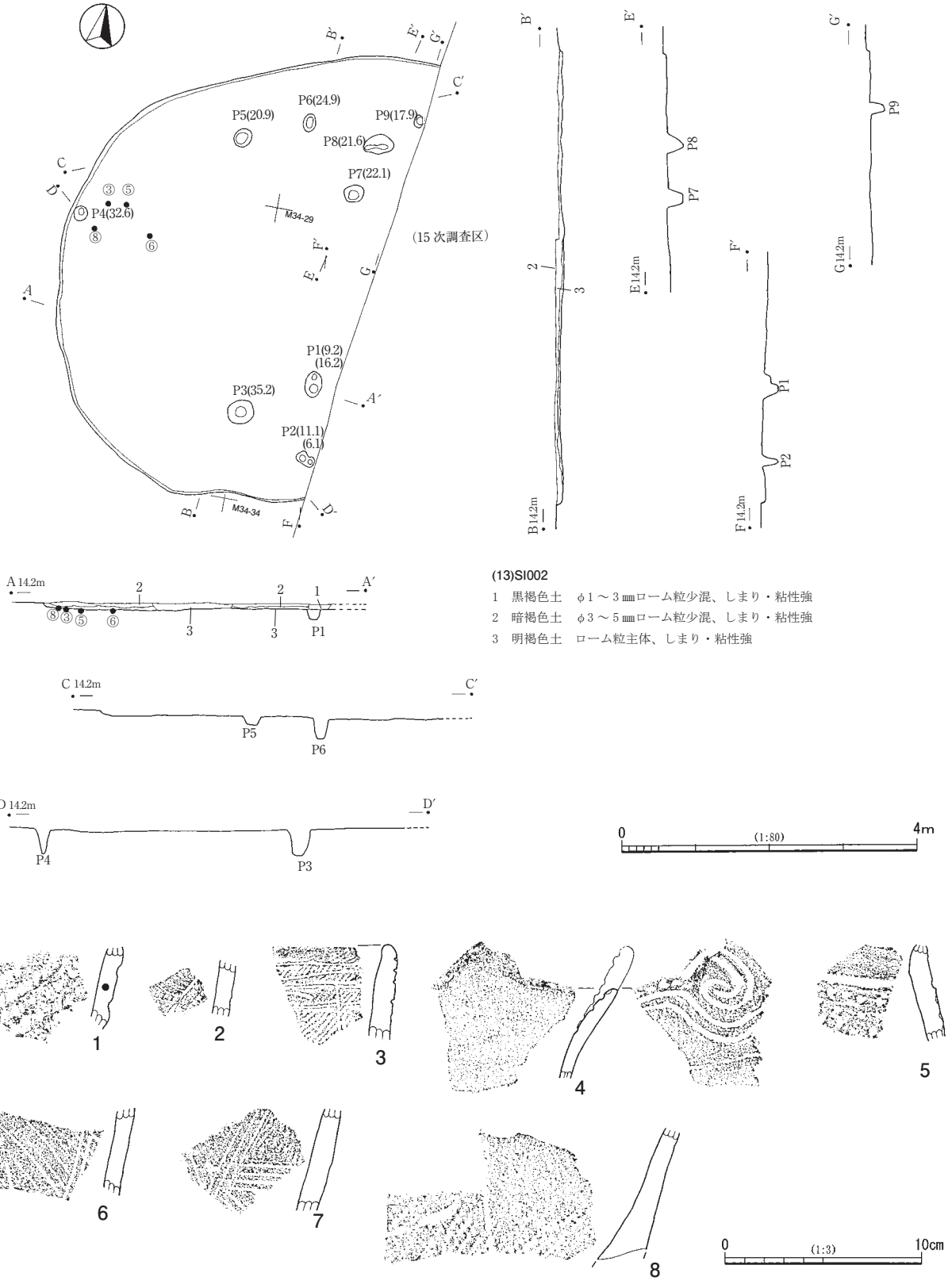


第 91 図 (13)SI001 住居跡、出土遺物

近世の(15)SD201溝状遺構が伸びており削平されたと考えられる。従って全体の規模は不明である。13次調査区での東西長は4.6m、南北長は6.1mを測る。全体形状は不整円形を呈すると思われる。

内部の状況 極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは最大でも10cm程度である。床面は中央部が微妙に窪む。硬化面は検出されなかった。

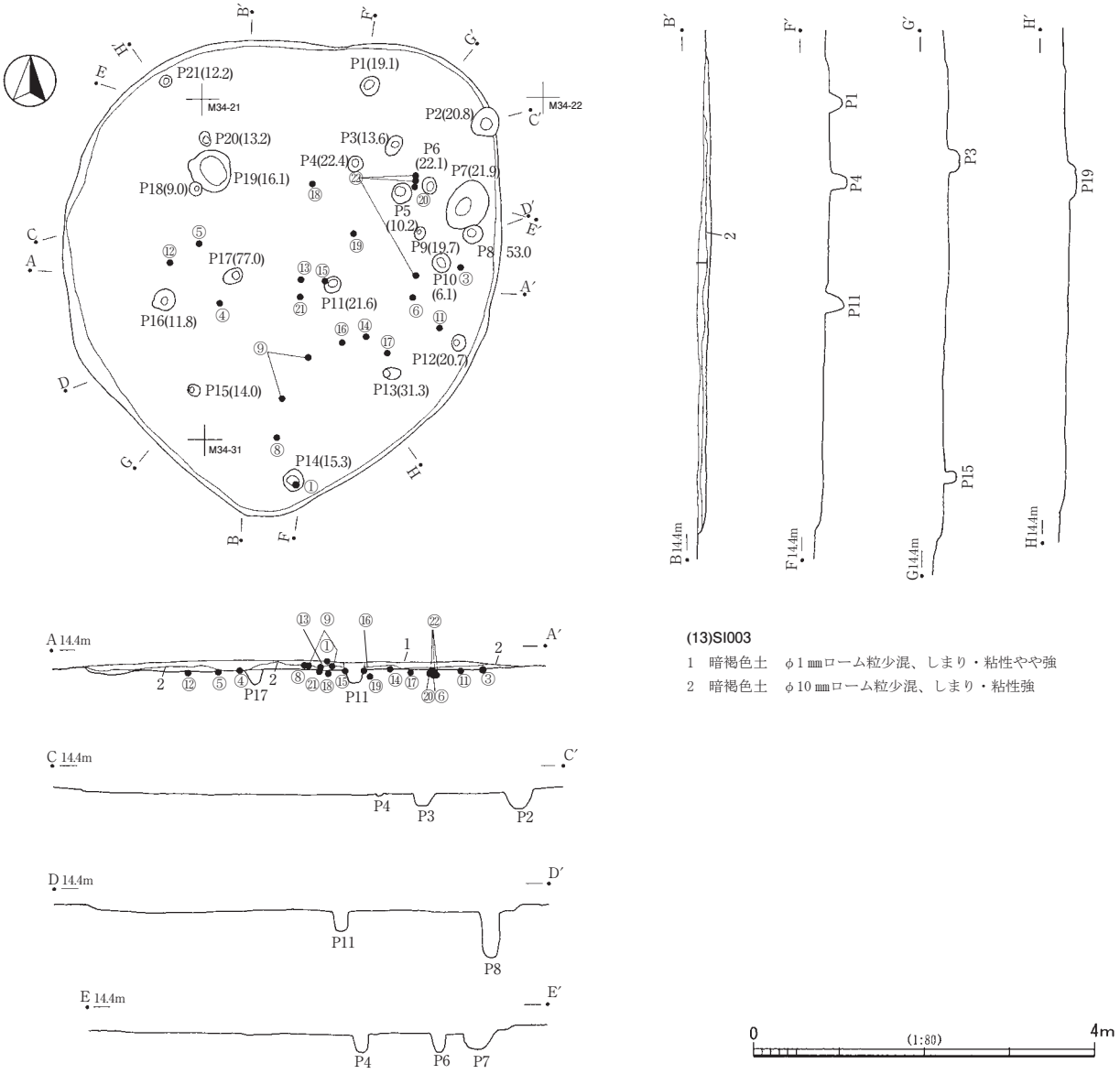
炉 検出されていない。



(13)SI002

1　黒褐色土　φ1～3㎜ローム粒少混、しまり・粘性強
2　暗褐色土　φ3～5㎜ローム粒少混、しまり・粘性強
3　明褐色土　ローム粒主体、しまり・粘性強

第 92 図　(13)SI002 住居跡、出土遺物



第 93 図　(13)SI003 住居跡

ピット　全部で９基検出されている。P3・5などが主柱穴であろう。

出土遺物　１は黒浜式の深鉢胴部である。２は興津式の深鉢胴部である。３・４は堀之内式の深鉢口縁部、５～８は胴部である。５は三十稲場式の影響がみられる。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

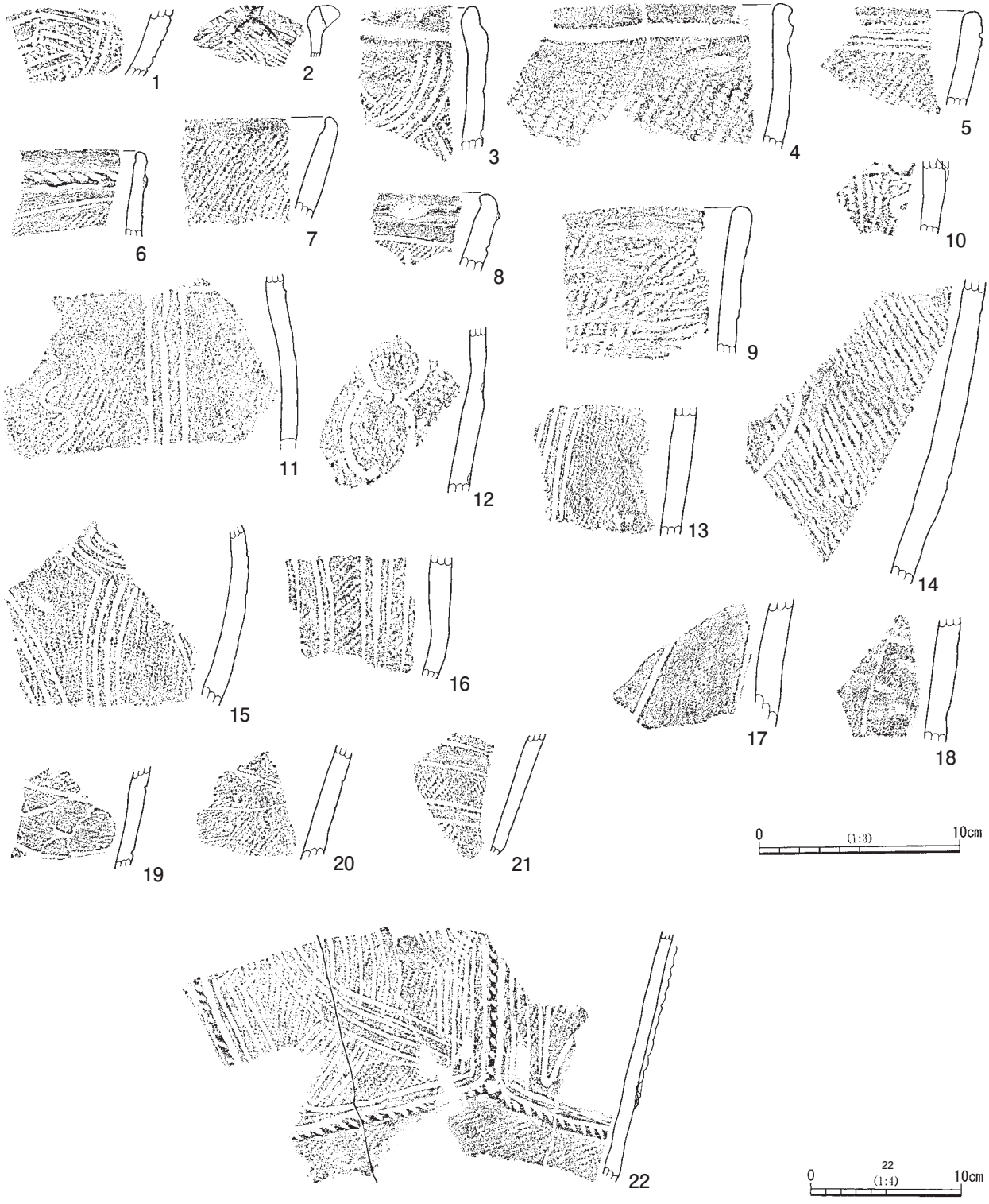
(13)SI003（第93・94図、図版６・53）

形状と規模　長軸長5.6m、短軸長5.1mの隅丸五角形ともいうべき形状を呈する。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは最大でも15cm程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

ピット　全部で21基検出されている。ただしP11は土層断面の観察から当住居跡より新しいと考えられる。

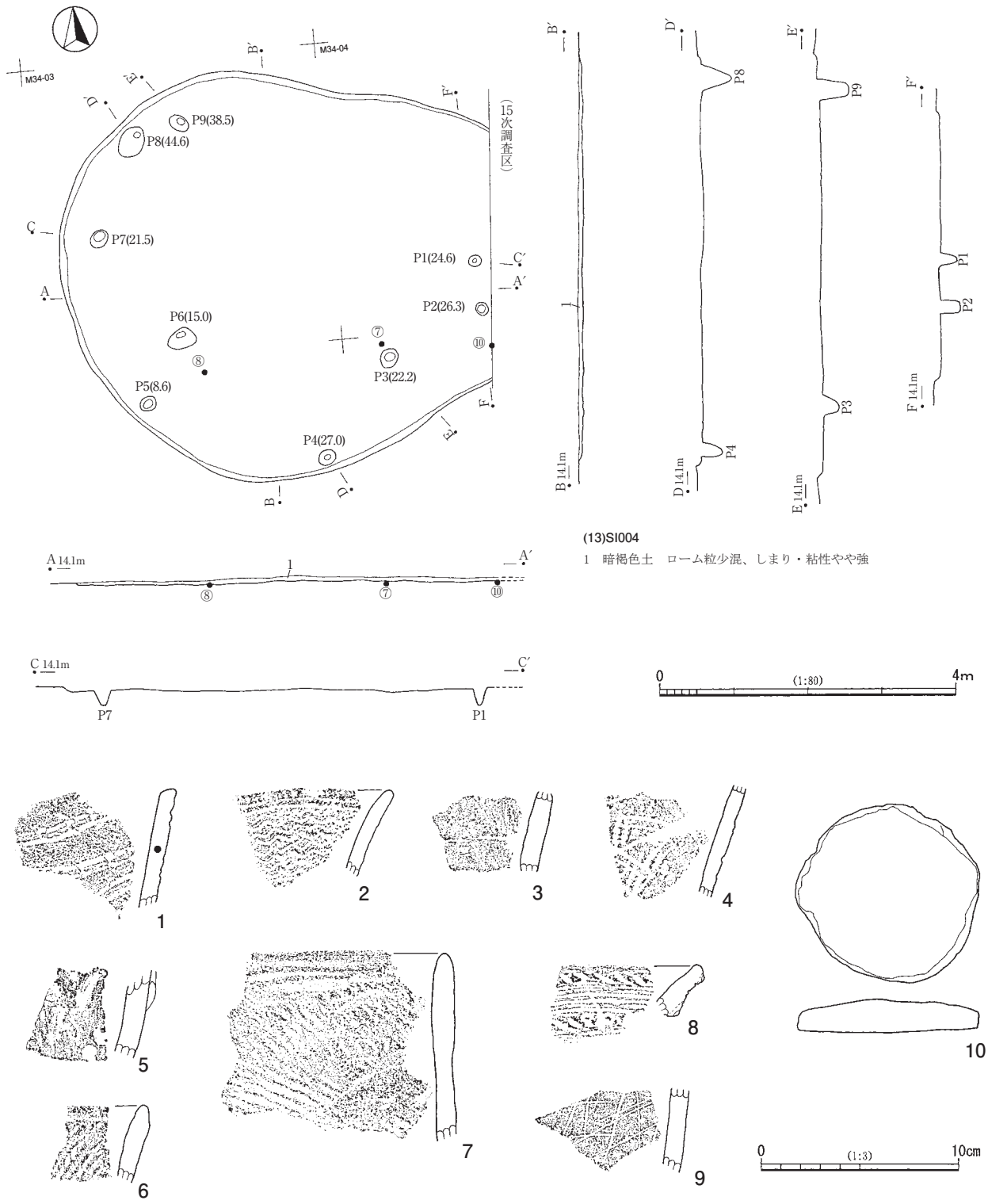


第 94 図　(13)SI003 住居跡出土遺物

出土遺物　１は諸磯式の深鉢胴部である。２は加曽利Ｅ式の深鉢口縁部である。３～９は堀之内式の深鉢口縁部、10 ～ 22は胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

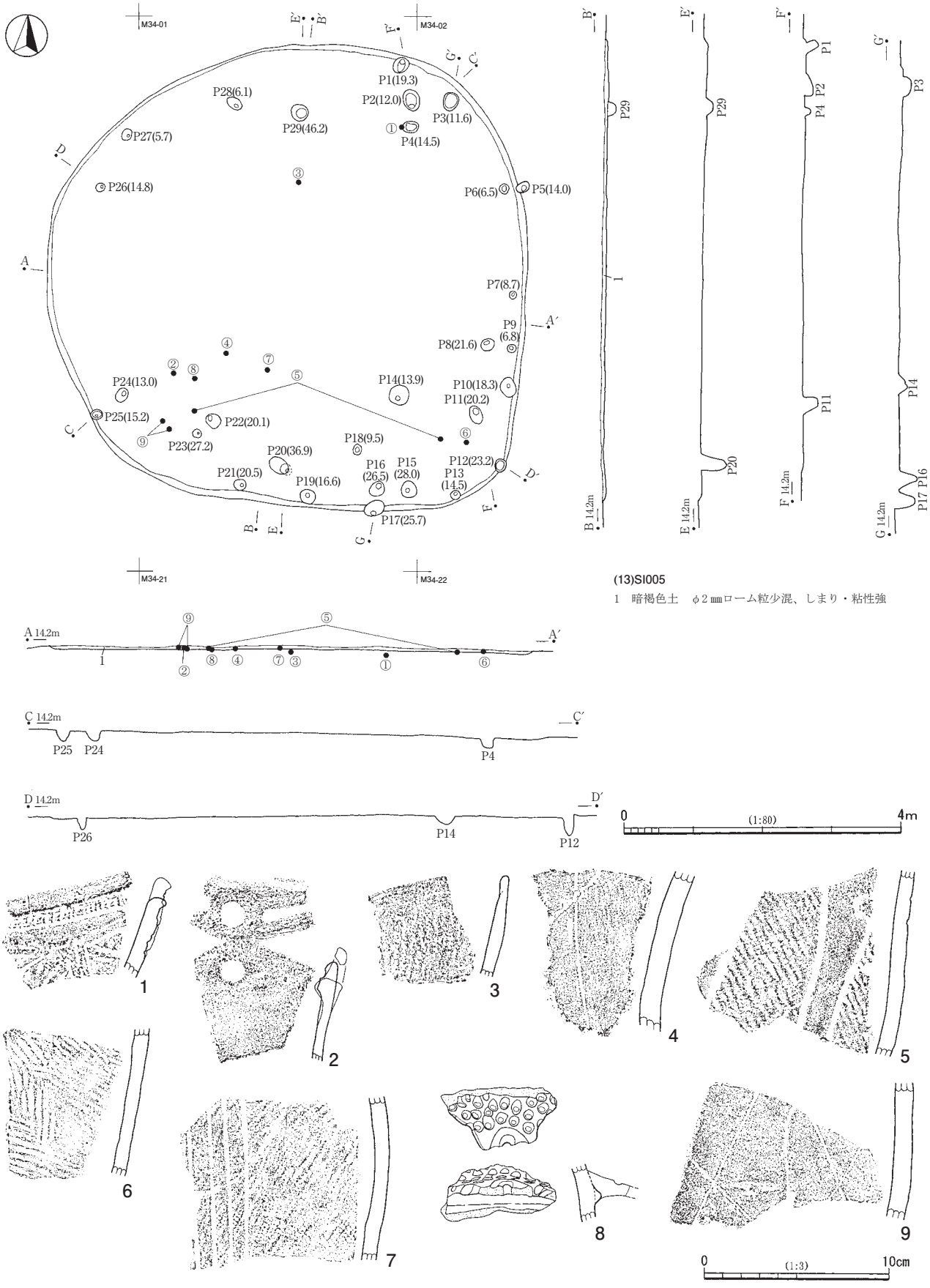
(13)SI004（第95図、図版６・52）



第 95 図　(13)SI004 住居跡、出土遺物

形状と規模　当住居跡は13次調査区と15次調査区にまたがって構築されているが、15次調査区側には中・近世の(15)SD201溝状遺構が伸びており、削平されたと考えられる。従って全体の規模は不明である。13次調査区での東西長は5.7m、南北長は5.6mを測る。全体形状は不整円形を呈すると思われる。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは最大でも７cm程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。



第 96 図　(13)SI005 住居跡、出土遺物

炉　検出されていない。

ピット　全部で９基検出されている。P8などは主柱穴と考えられる。

出土遺物　１は黒浜式の深鉢口縁部である。２は諸磯式の深鉢口縁部である。３・４は浮島式の深鉢胴部である。５は加曽利Ｅ式の深鉢胴部である。６～８は堀之内式の深鉢口縁部、９は胴部である。10は土器片円盤で、土器の底部を打ち欠いて加工したものである。

時期　出土土器数をみると前期後葉と後期前葉の双方の可能性があるが、遺構の形状や周囲の状況などから堀之内式期と考えられる。

(13)SI005（第96図、図版６・53）

形状と規模　東西長6.9m、南北長6.6mの隅丸方形と円形を組み合わせたような形状を呈する。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは最大でも８㎝程度である。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

ピット　全部で29基検出されている。南東部は２重に巡っているようにも見え、拡張が行われたかもしれない。

出土遺物　１は諸磯式の深鉢口縁部である。２・３は堀之内式の深鉢口縁部、４～９は胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SI006（第97図、図版６・53）

形状と規模　南北長6.6m、東西長6.2mの不整円形を呈する。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは最大でも５㎝程度である。床面は北側に向かって緩やかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

ピット　全部で22基検出されている。南壁側に密に存在するのに対し北側は少ない。

出土遺物　１・２は黒浜式の深鉢胴部である。４・５は堀之内式の深鉢口縁部、３・６は胴部、７は底部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式期に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

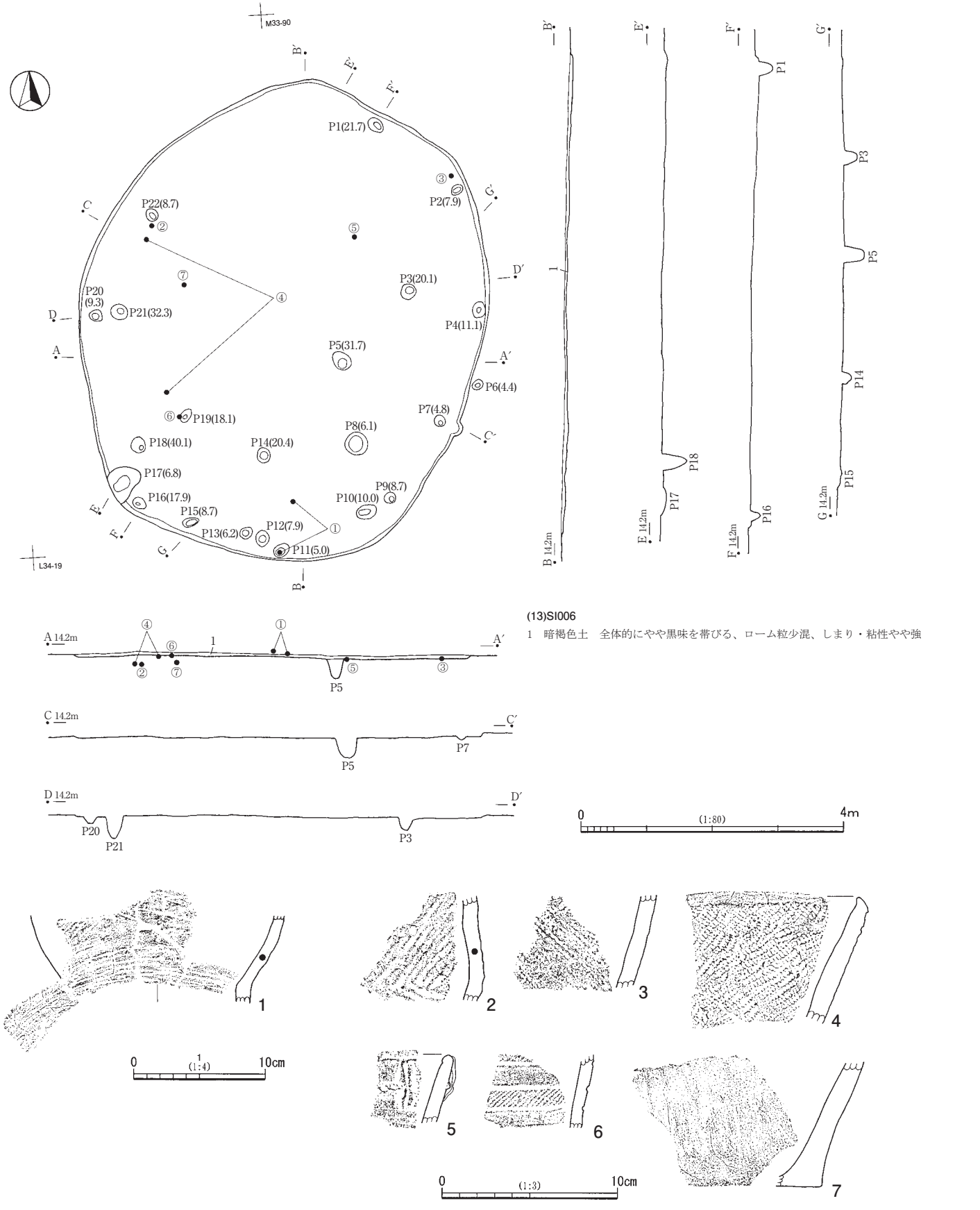
(13)SI007・008（第98～101図、図版７・54・99）

形状と規模　(13)SI007は東西長7.0m、南北長6.9mの不整円形、(13)SI008は東西長7.0m、南北長は確認できる範囲で5.9mの不整円形を呈する。土層観察では(13)SI007が新しく(13)SI008が古いことになっているが、後述するとおり疑わしい。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは(13)SI007が8cm、(13)SI008が５㎝で、(13)SI007の方がわずかに深い。床面は両方とも西側に向かって緩やかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

炉　(13)SI007からは検出されていない。(13)SI008は中央よりやや南西部に存在する。長軸長108cm、短軸長92cmの不整円形を呈する。掘込みはごく浅く皿状を呈し、内側には径30cm～35cmのピット状の掘込みが存在する。焼土粒は広い範囲に散布するが、多量に存在するのはピット状の掘込み付近に限られる。

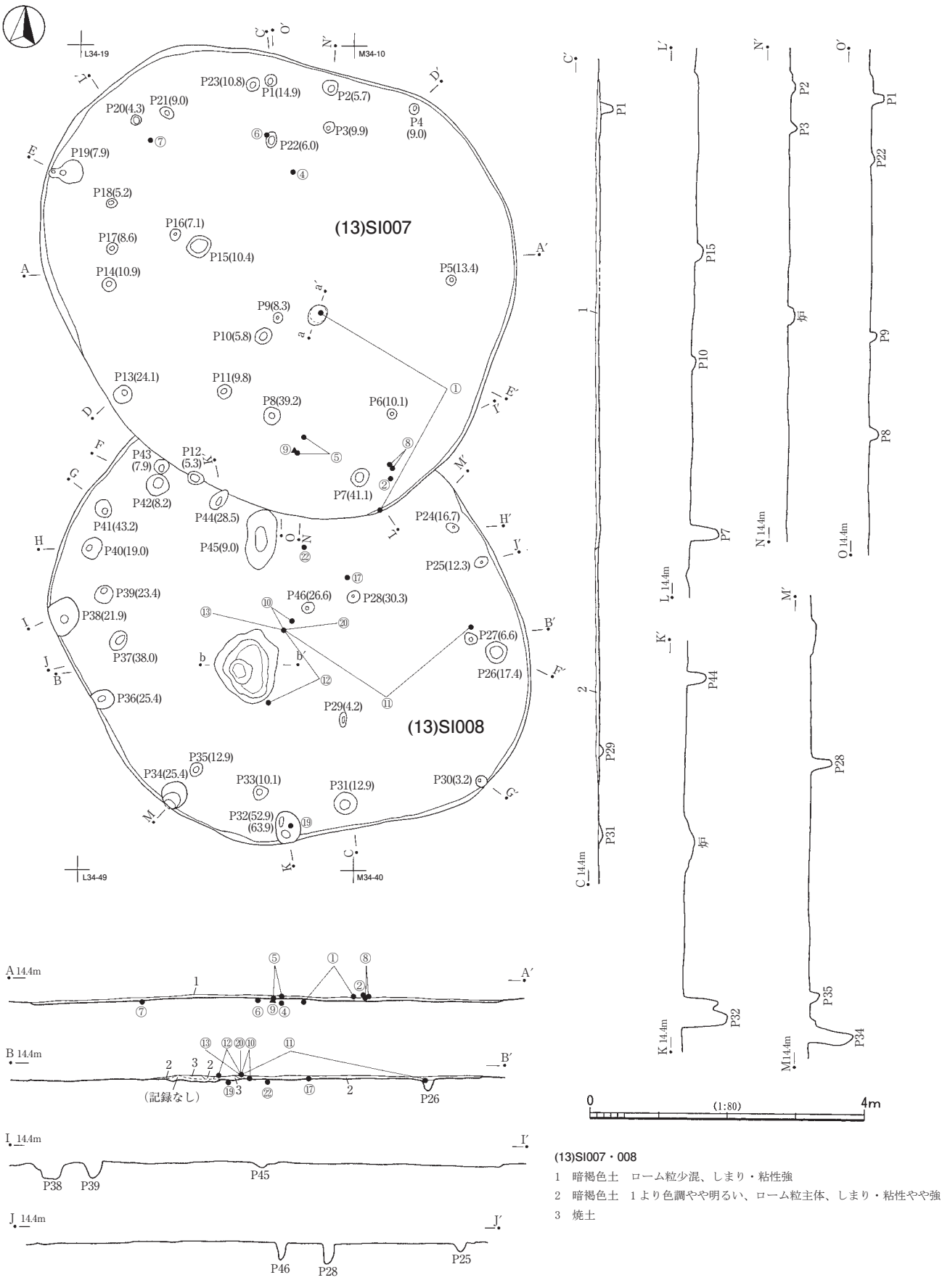
ピット　２軒合わせて46基存在し、調査時はP1～23が(13)SI007、P24～46が(13)SI008に帰属するとしていたが、両者が重なった部分にあるP7・8は断定できない。いずれも壁よりやや内側を円弧を描くように配



(13)SI006

1　暗褐色土　全体的にやや黒味を帯びる、ローム粒少混、しまり・粘性やや強

第 97 図　(13)SI006 住居跡、出土遺物



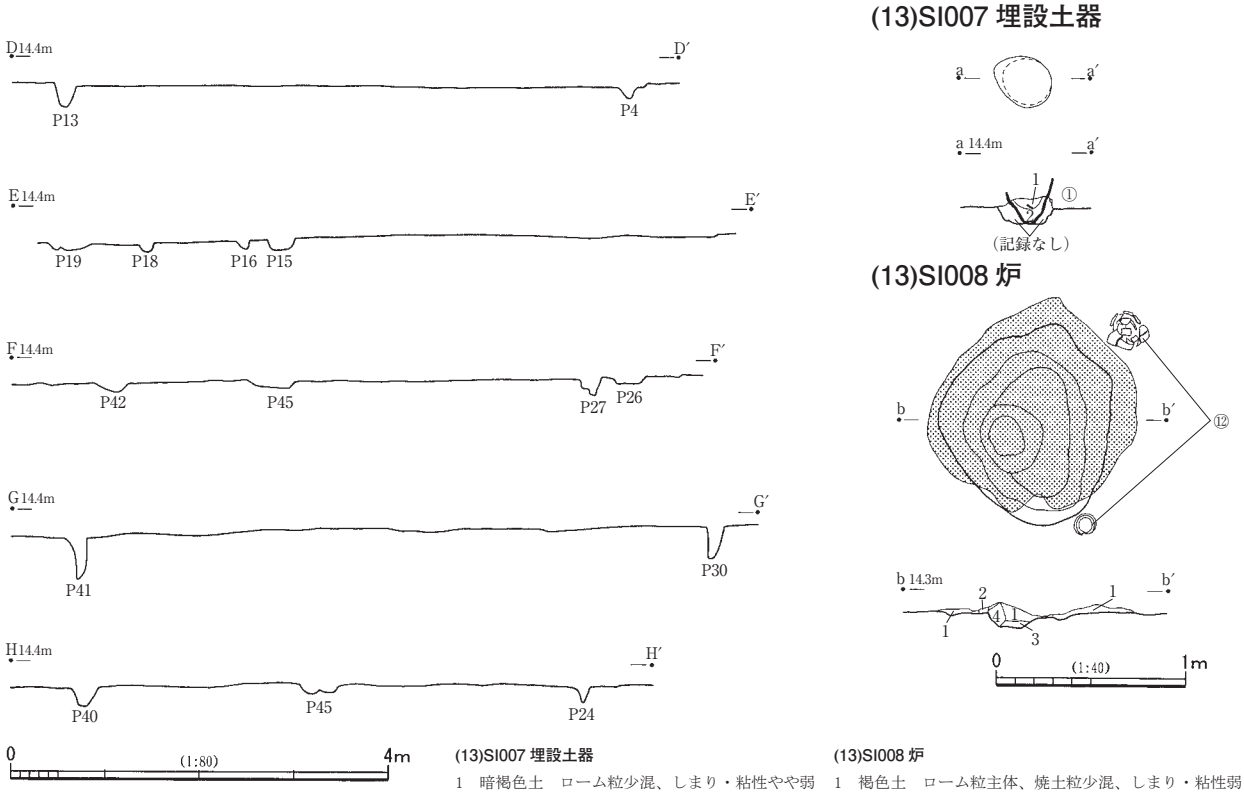
(13)SI007・008

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性強

2　暗褐色土　1より色調やや明るい、ローム粒主体、しまり・粘性やや強

3　焼土

第 98 図　(13)SI007・008 住居跡（1）



(13)SI007 埋設土器

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性やや弱
2　暗褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性やや強

(13)SI008 炉

1　褐色土　ローム粒主体、焼土粒少混、しまり・粘性弱
2　明褐色土　ローム粒主体、やや被熱
3　明褐色土　φ1～3㎜焼土粒多混
4　焼土ブロック

第 99 図　(13)SI007・008 住居跡（２）

される。(13)SI008のP8・32・34・38・41などは主柱穴であろう。

出土遺物　１～９は(13)SI007、10～25が(13)SI008出土である。１は称名寺式の深鉢で、接合しないが同一個体である。住居ほぼ中央部に底部側が埋設されていた。底部が穿孔されている。２は称名寺式の深鉢口縁部である。３・４は堀之内式の深鉢口縁部、５～８は胴部である。９は石皿で、熱を受けている。10～14は堀之内式の深鉢で、器形復元ができるものである。15は黒浜式の深鉢口縁部である。16～22は堀之内式の深鉢口縁部、23～25は胴部である。

時期　(13)SI007は堀之内式が多いものの、埋設土器は称名寺式であり遺構の時期を示していると思われる。(13)SI008の主たる出土遺物は堀之内式であり、堀之内式期と考えられる。従って遺構の新旧は(13)SI007が古く(13)SI008が新しいと判断するのが妥当であろう。

(13)SI009（第102・103図、図版７・55）

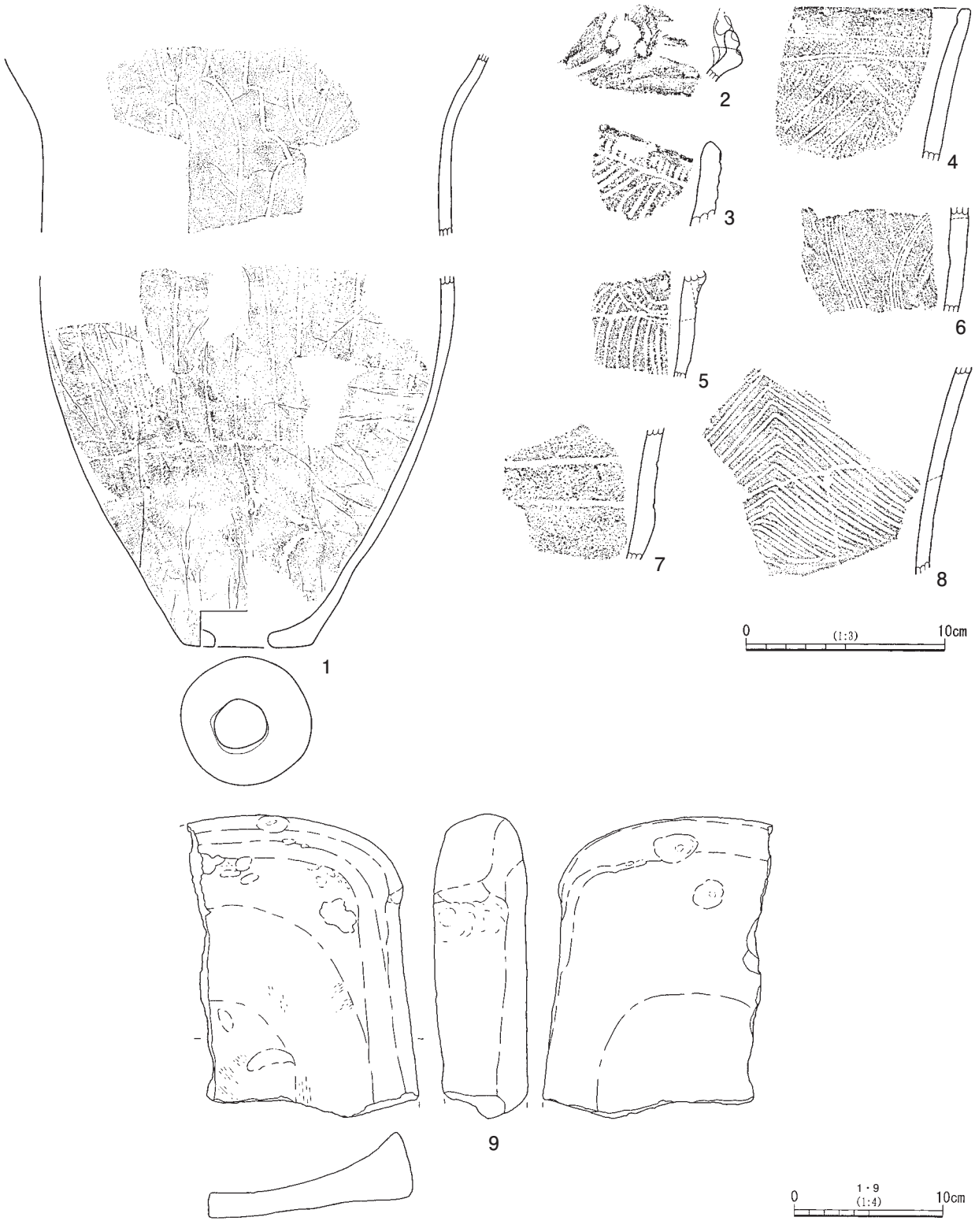
形状と規模　東西長7.2m、南北長6.2mの不整円形を呈する。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。特に東西壁はわずかの段差しかない。深さは最大でも５㎝程度である。床面は北側に向かって緩やかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

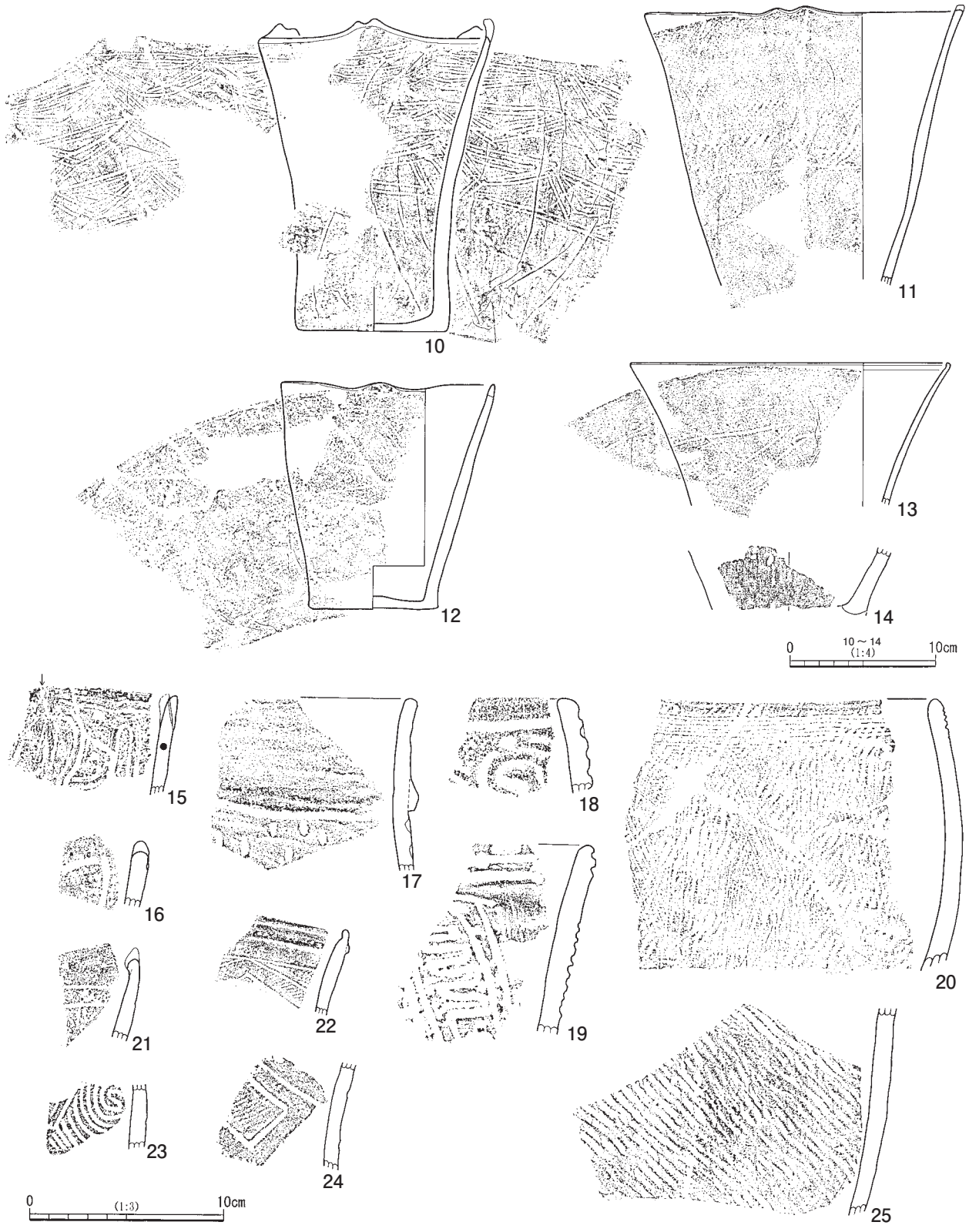
ピット　全部で10基検出されている。概ね壁に沿って配置されるが、いずれも浅くて規模が小さい。

出土遺物　１～３は堀之内式の器形復元できる深鉢である。５は諸磯式の深鉢口縁部である。６～11は堀之内式の深鉢口縁部、12～17は胴部である。

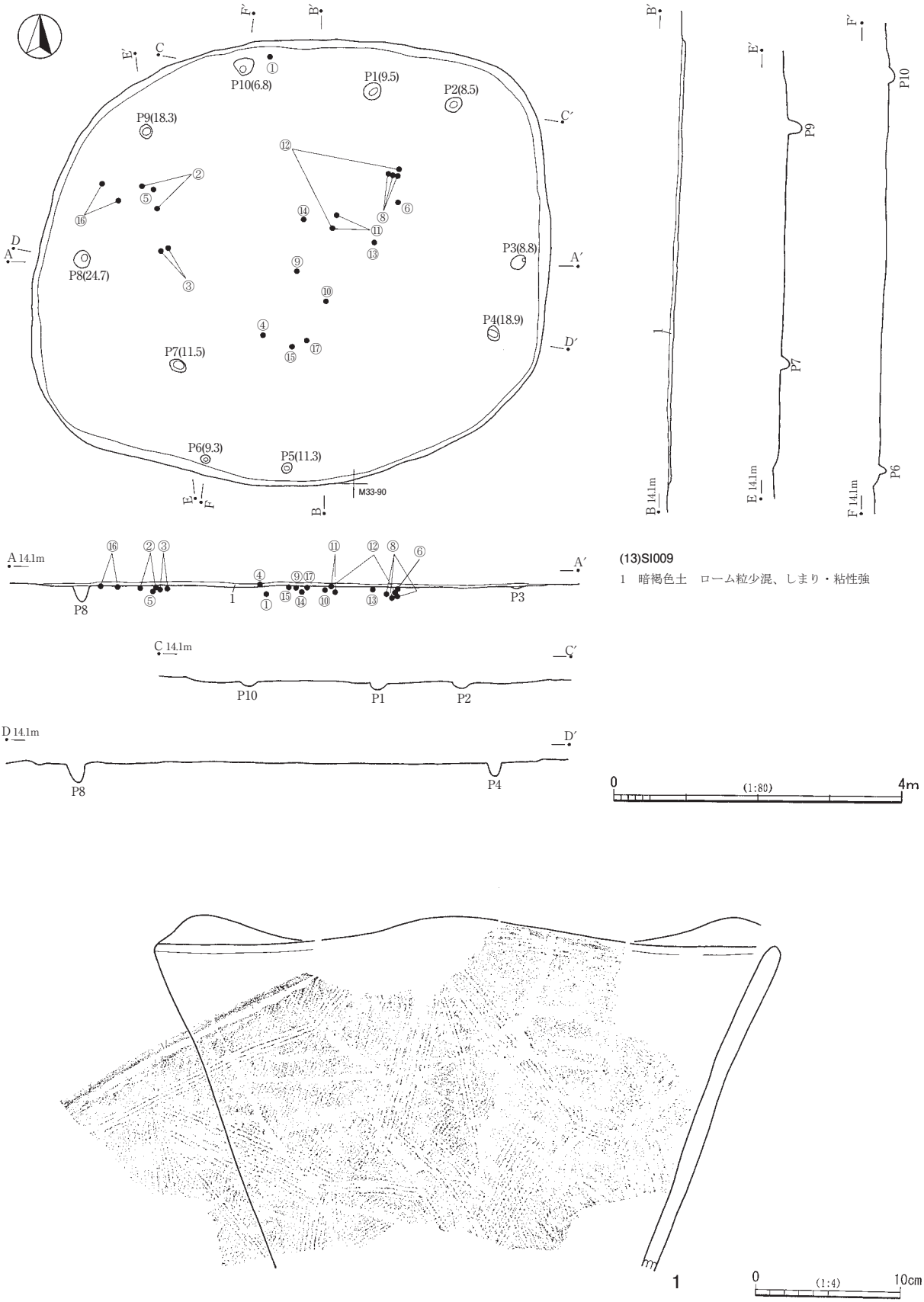


第 100 図　(13)SI007 住居跡出土遺物

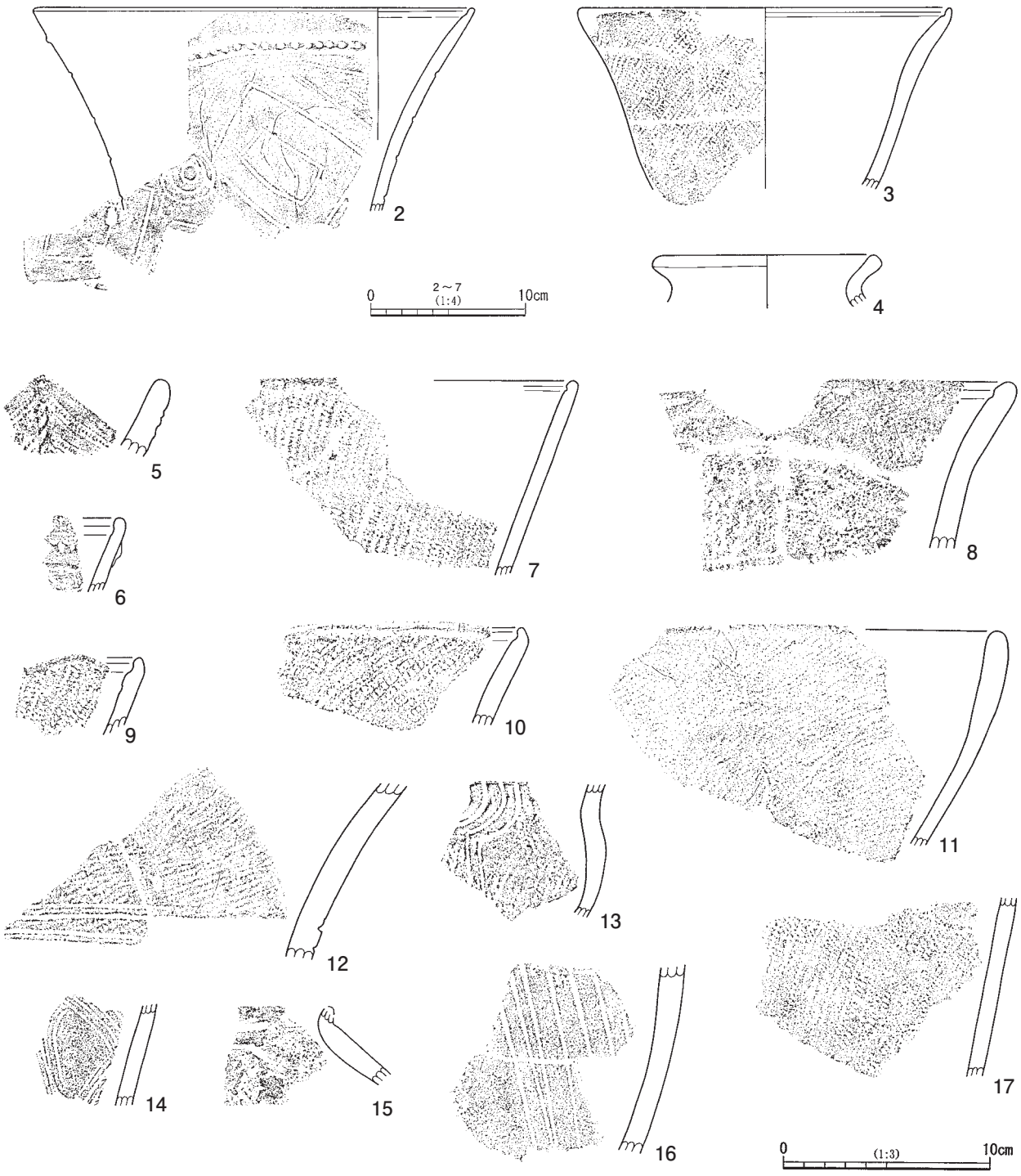
(13)SI008



第 101 図　(13)SI008 住居跡出土遺物



第 102 図　(13)SI009 住居跡、出土遺物（1）



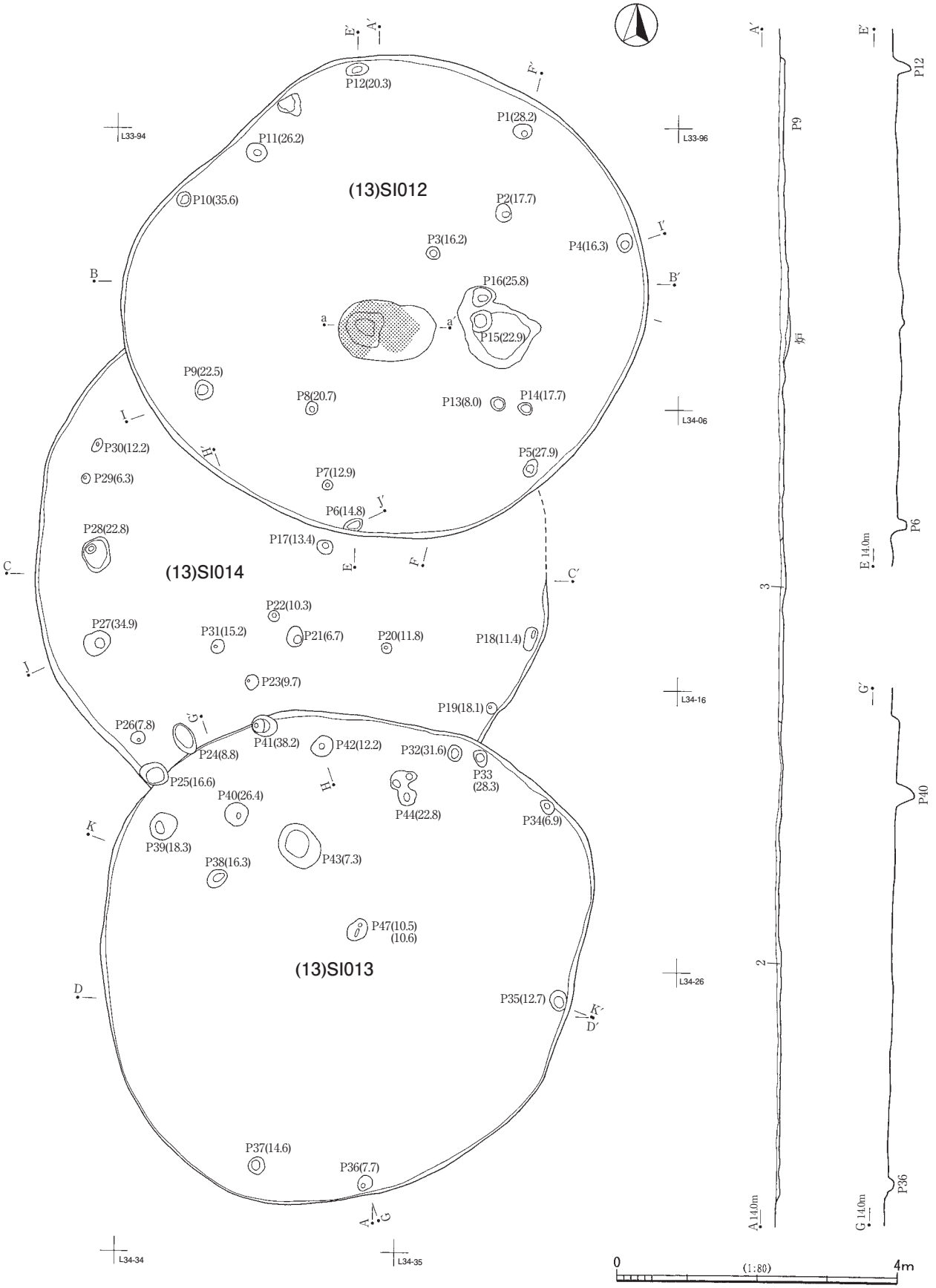
第 103 図　(13)SI009 住居跡出土遺物（２）

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置づけられ、当遺構は該期と考えられる。

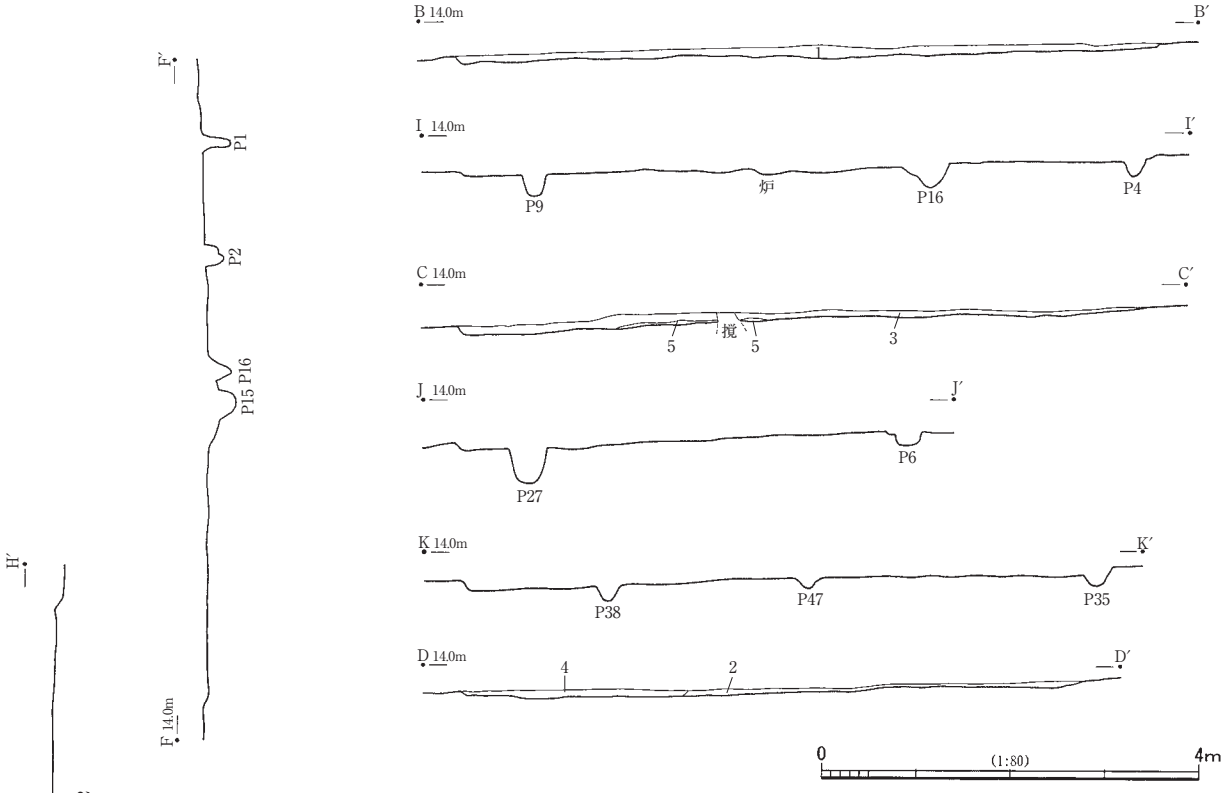
(13)SI012～014（第104～116図、図版７・56～63・93・96・97）

形状と規模　(13)SI012は東西長7.5m、南北長6.9mの不整円形、(13)SI013は東西長、南北長とも7.0mの不整円形を呈する。(13)SI014は両住居跡に切られているため全体は分からないが、東西長7.4m、南北残存長6.2mを測り、正円に近い形状を呈すると思われる。

内部の状況　極めて浅いため壁の状況も分かりにくいが、緩やかな立上がりのようである。深さは(13)

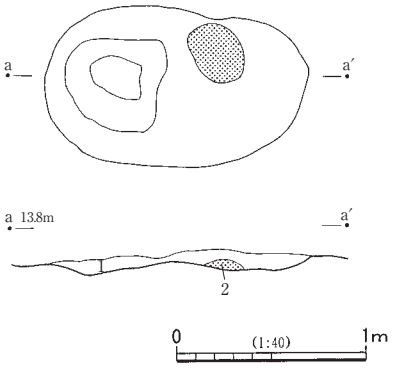


第 104 図　(13)SI012 ～ 014 住居跡（1）



(13)SI012 ～ 014

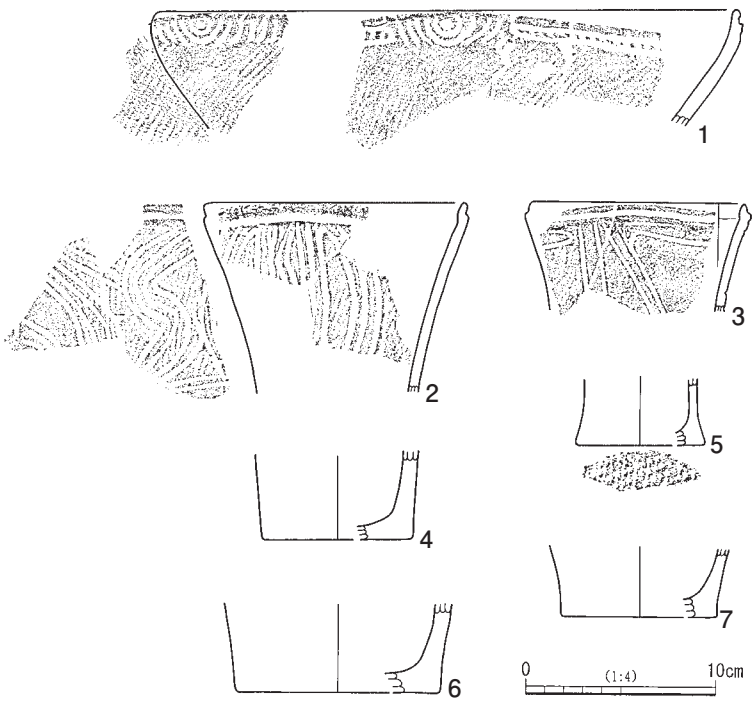
1(SI012)　明褐色土　ローム粒多混、しまり・粘性非常に強
2(SI013)　明褐色土　φ1 ～ 3㎜ローム粒少混、しまり・粘性強
3(SI014)　暗褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性強
4(SI013)　暗褐色土　φ3㎜ローム粒多混、しまり・粘性強
5(SI014)　暗褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性非常に強



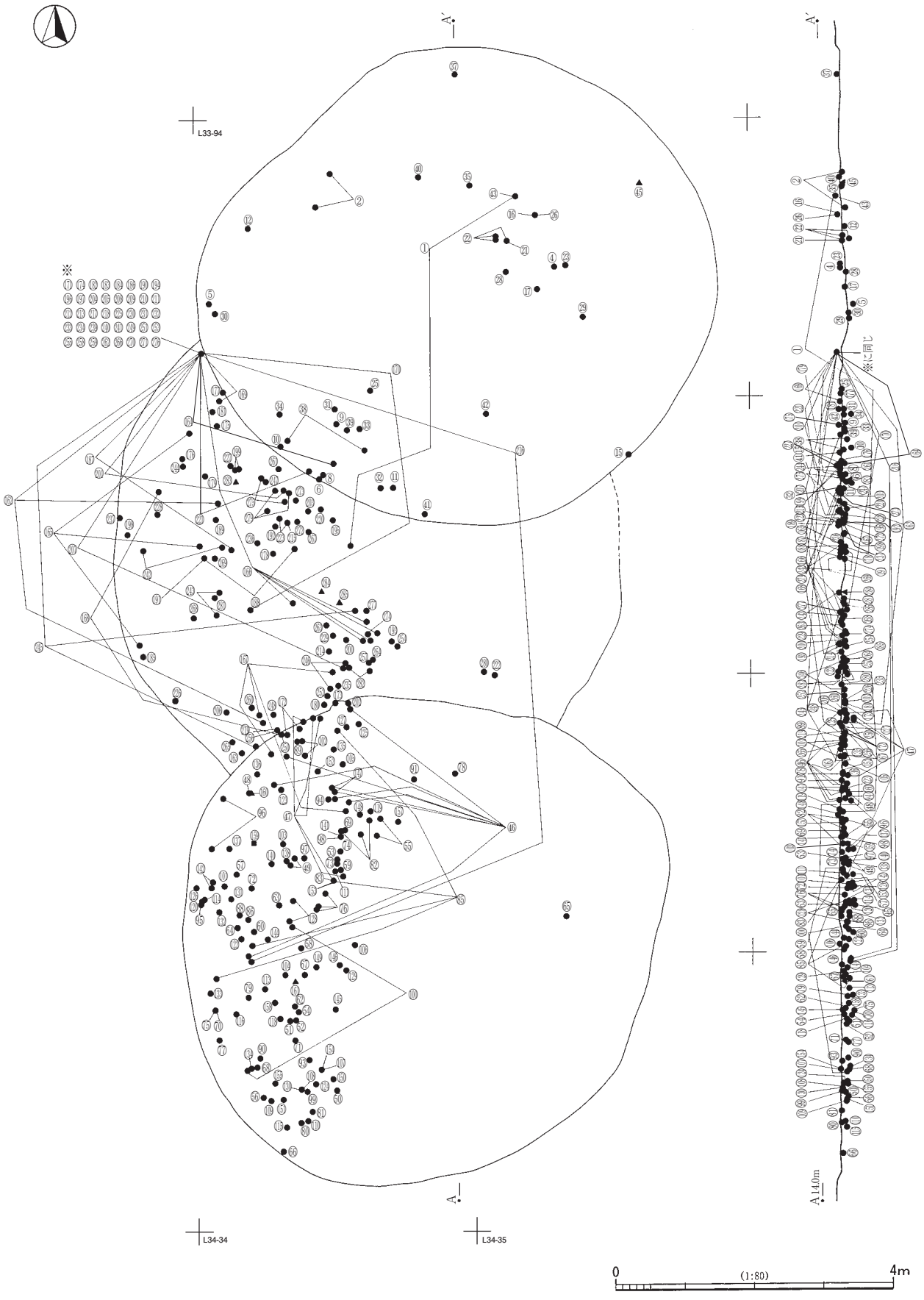
(13)SI012 炉

1　明褐色土　斑状に焼土が散布
2　焼土塊

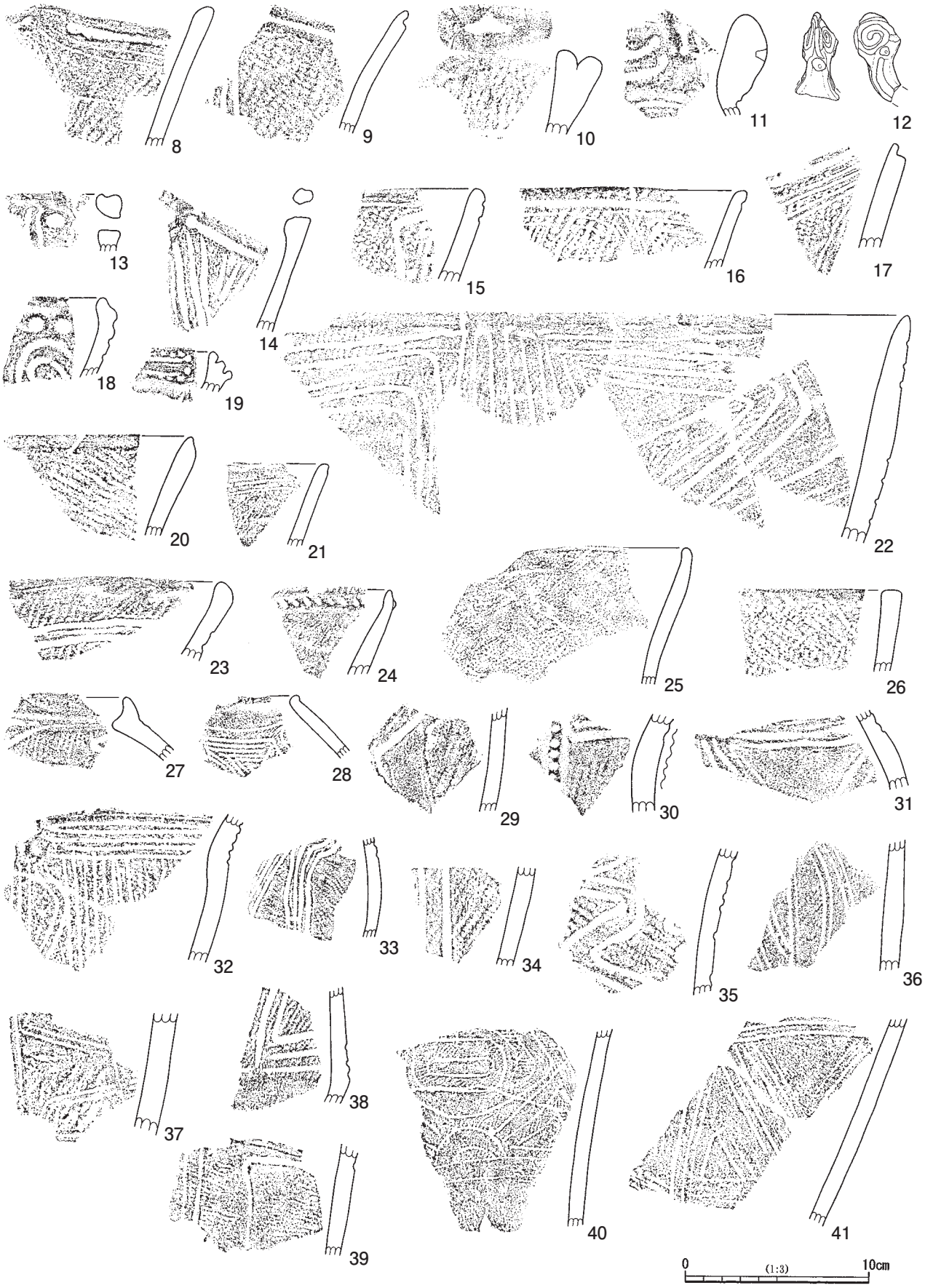
(13)SI012



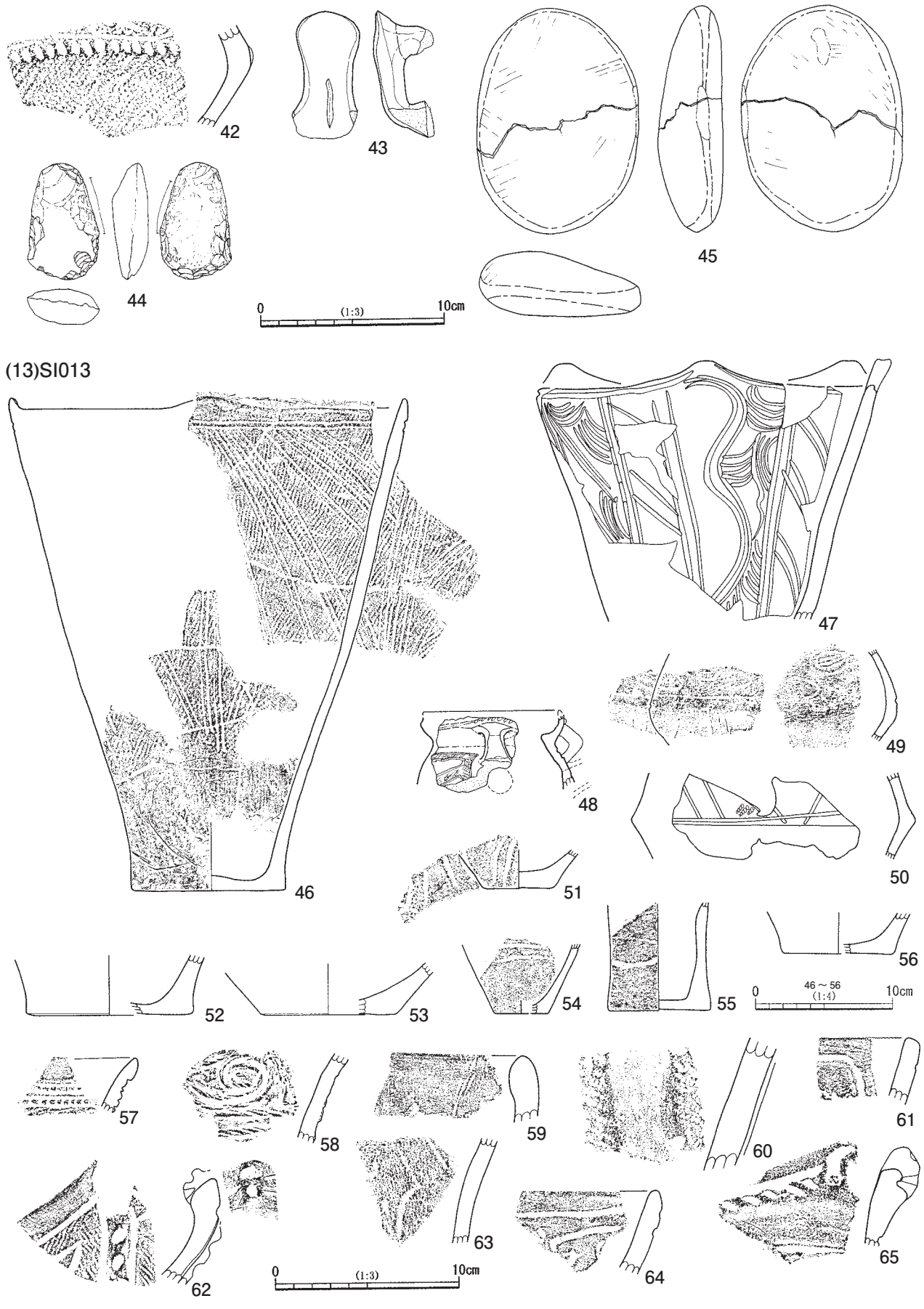
第 105 図　(13)SI012 ～ 014 住居跡（２）、(13)SI012 住居跡出土遺物（１）



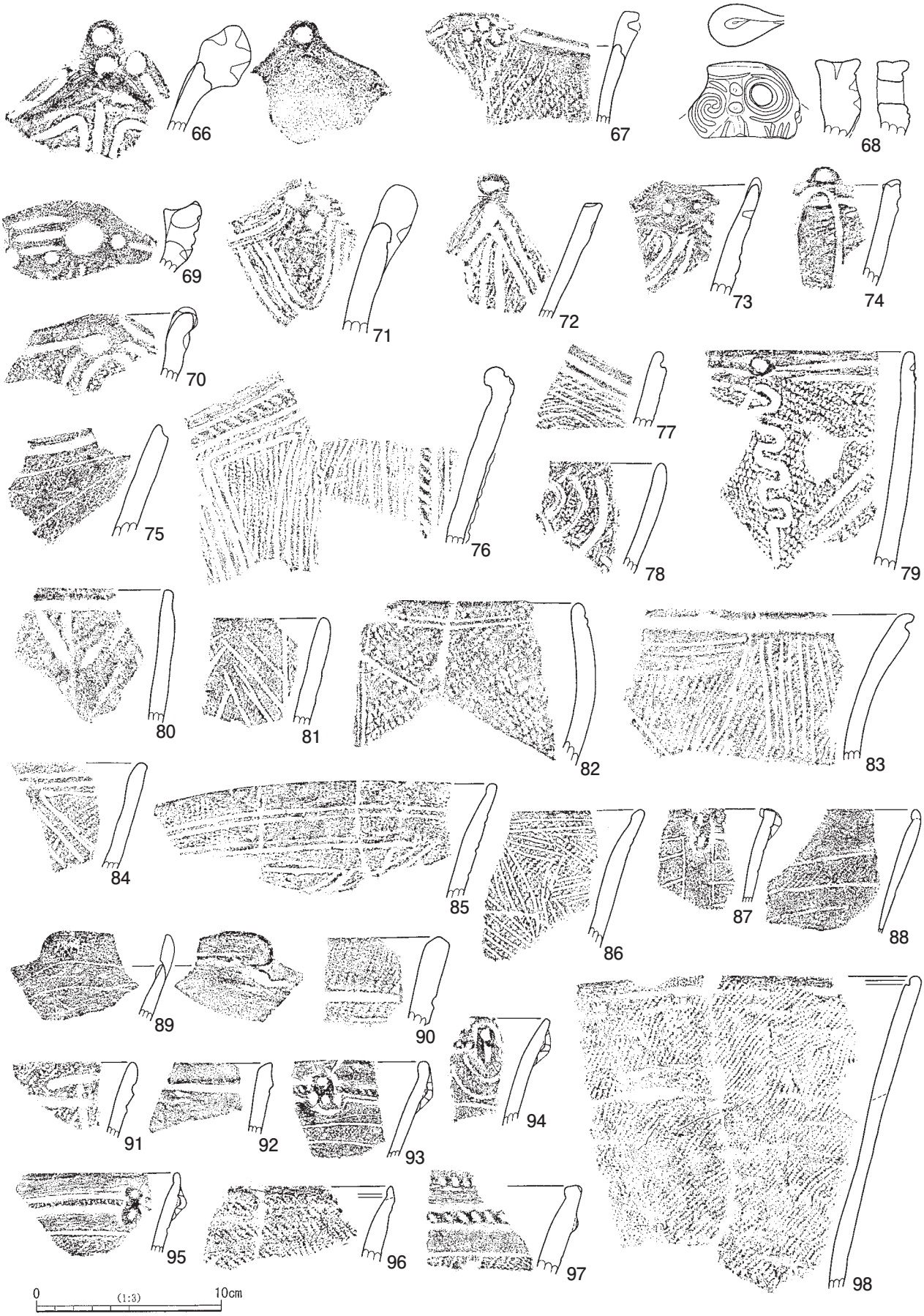
第 106 図　(13)SI012 ～ 014 住居跡遺物分布



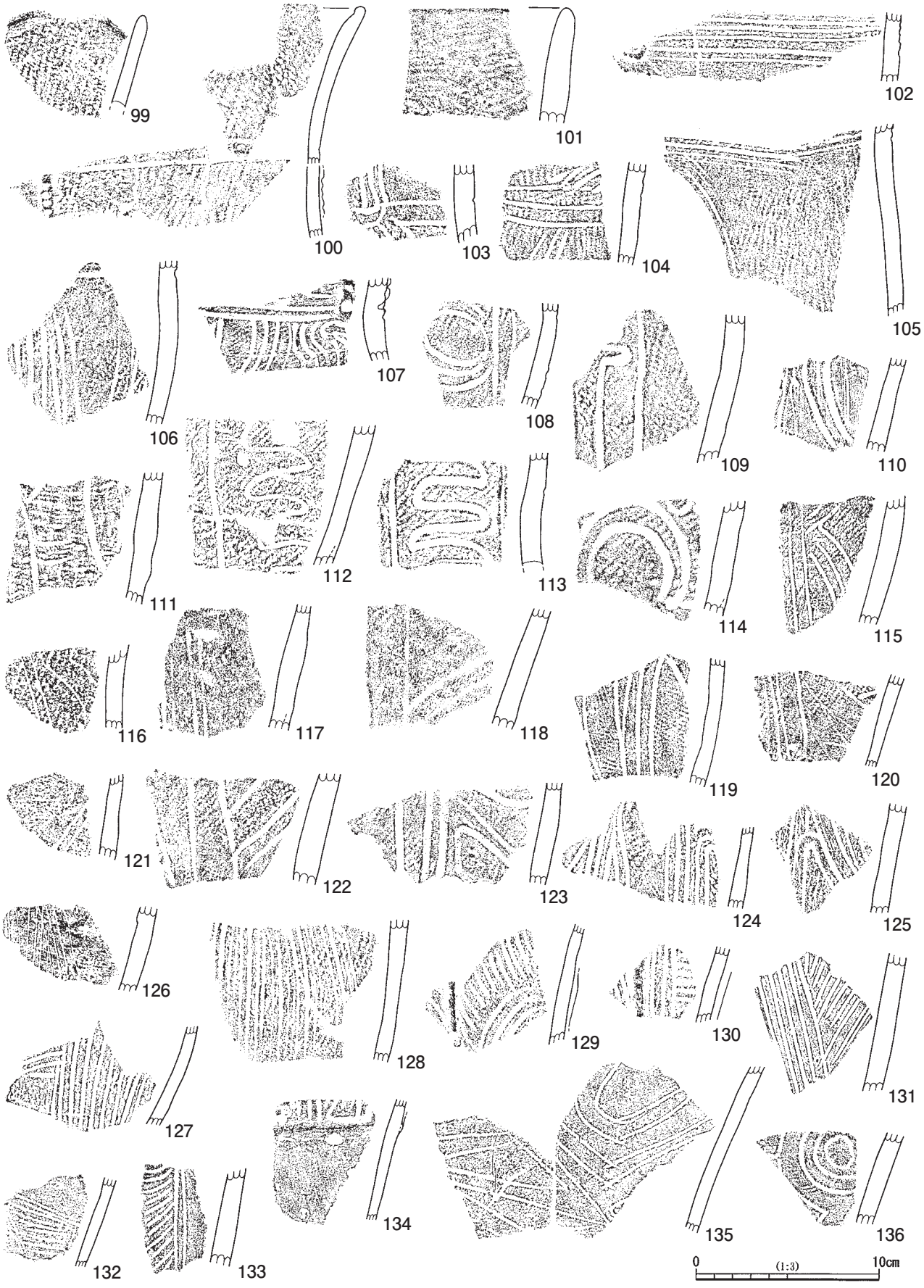
第 107 図　(13)SI012 住居跡出土遺物（２）



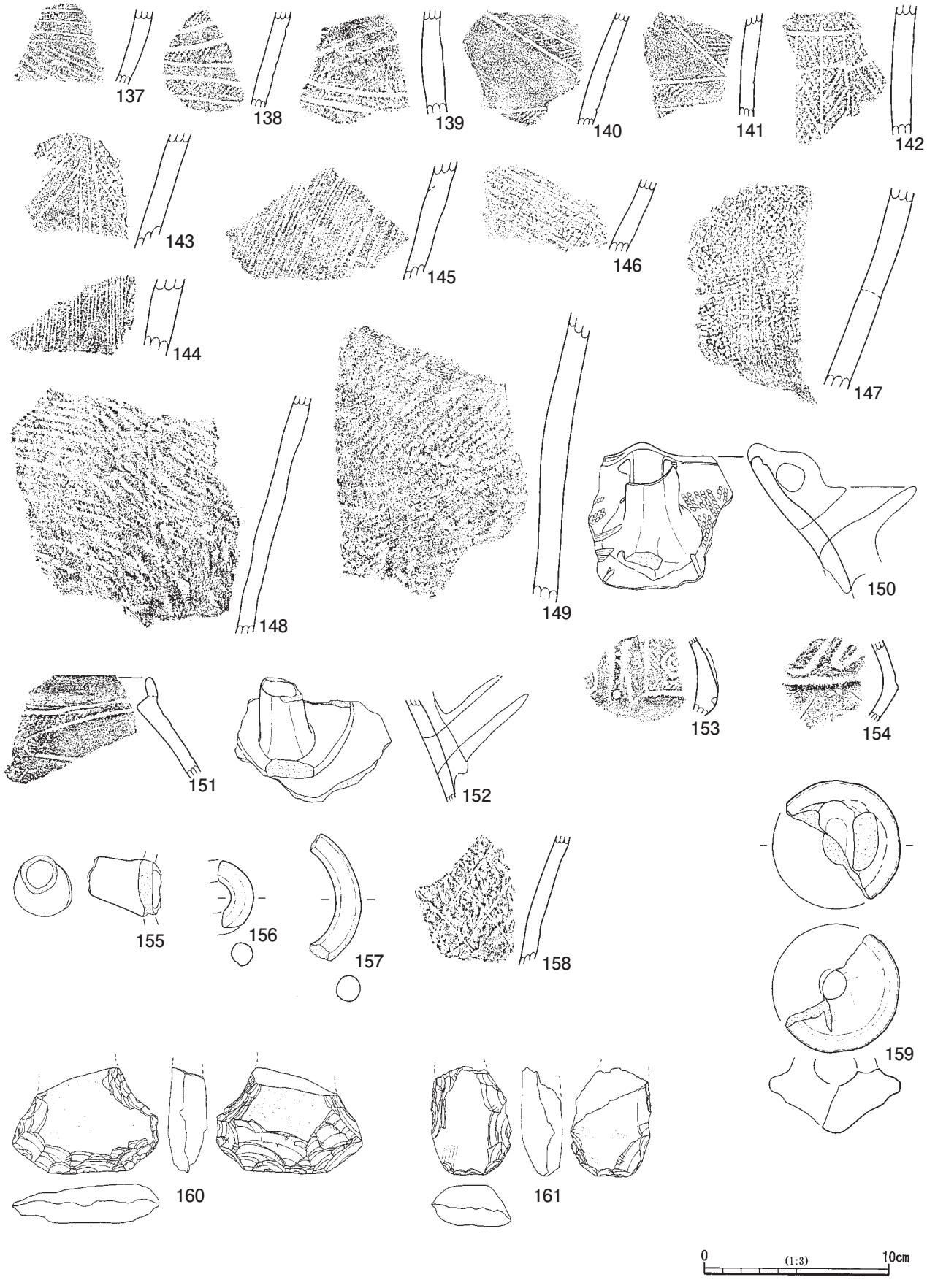
第 108 図　(13)SI012 住居跡出土遺物（３）、(13)SI013 住居跡出土遺物（１）



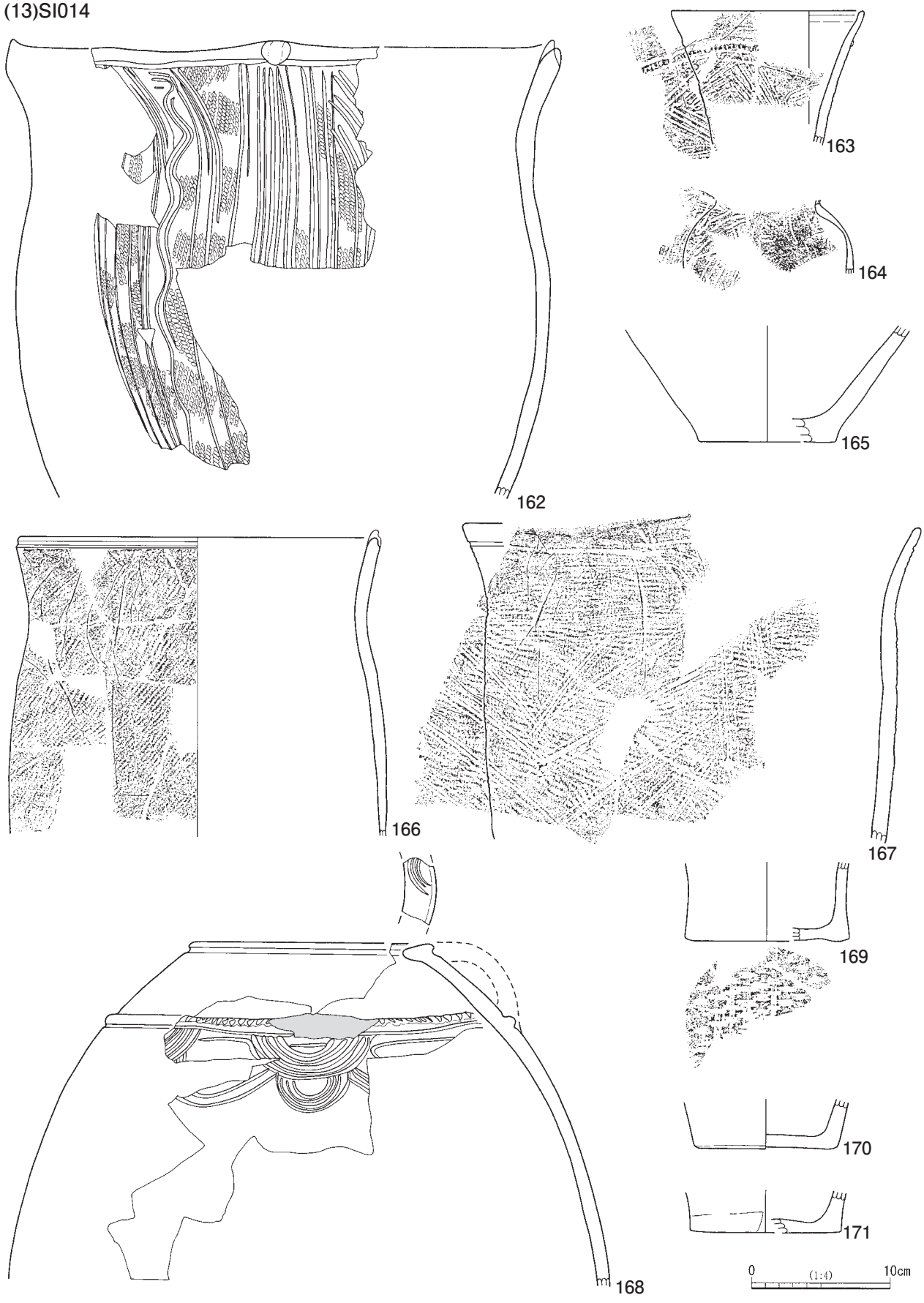
第 109 図　(13)SI013 住居跡出土遺物（２）



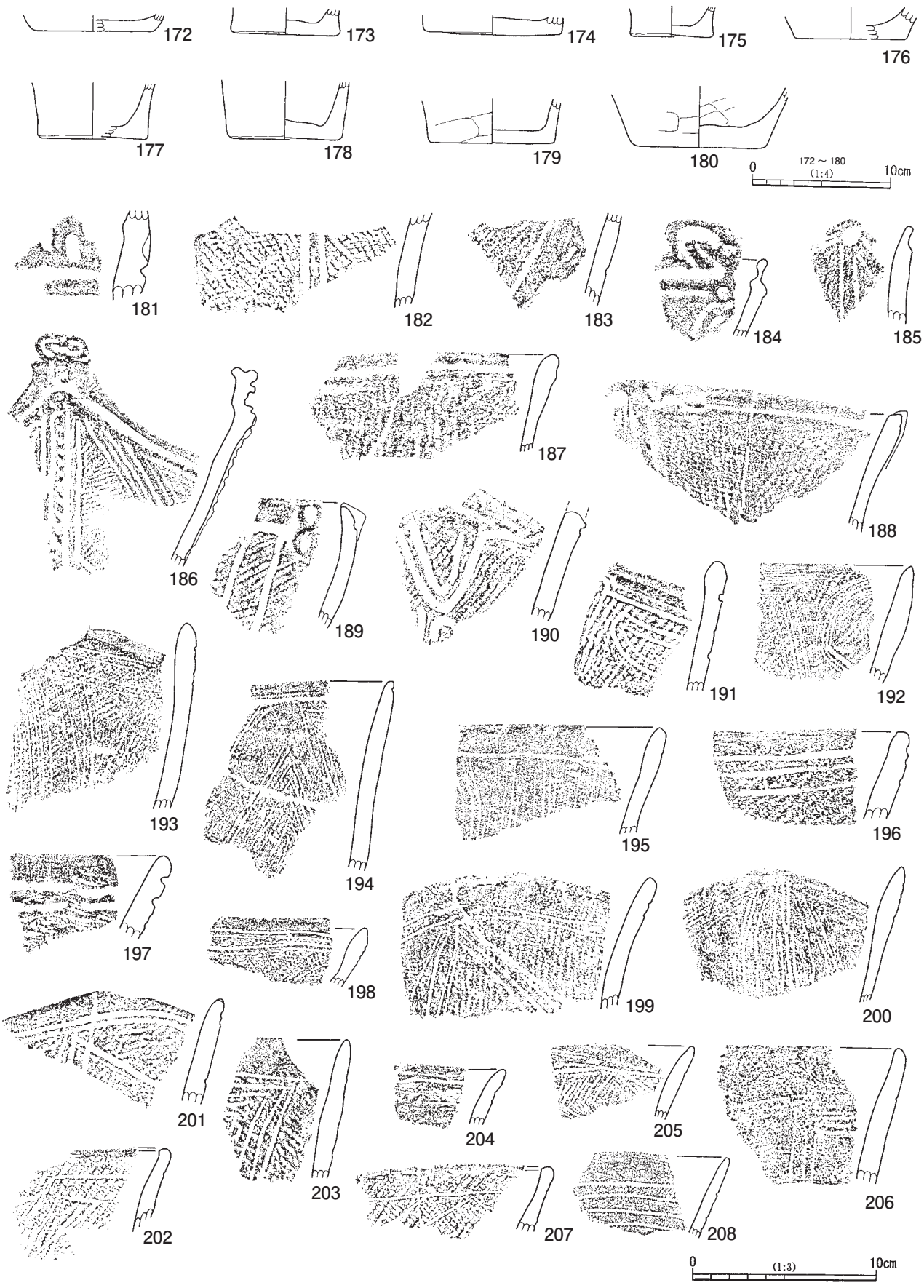
第 110 図　(13)SI013 住居跡出土遺物（３）



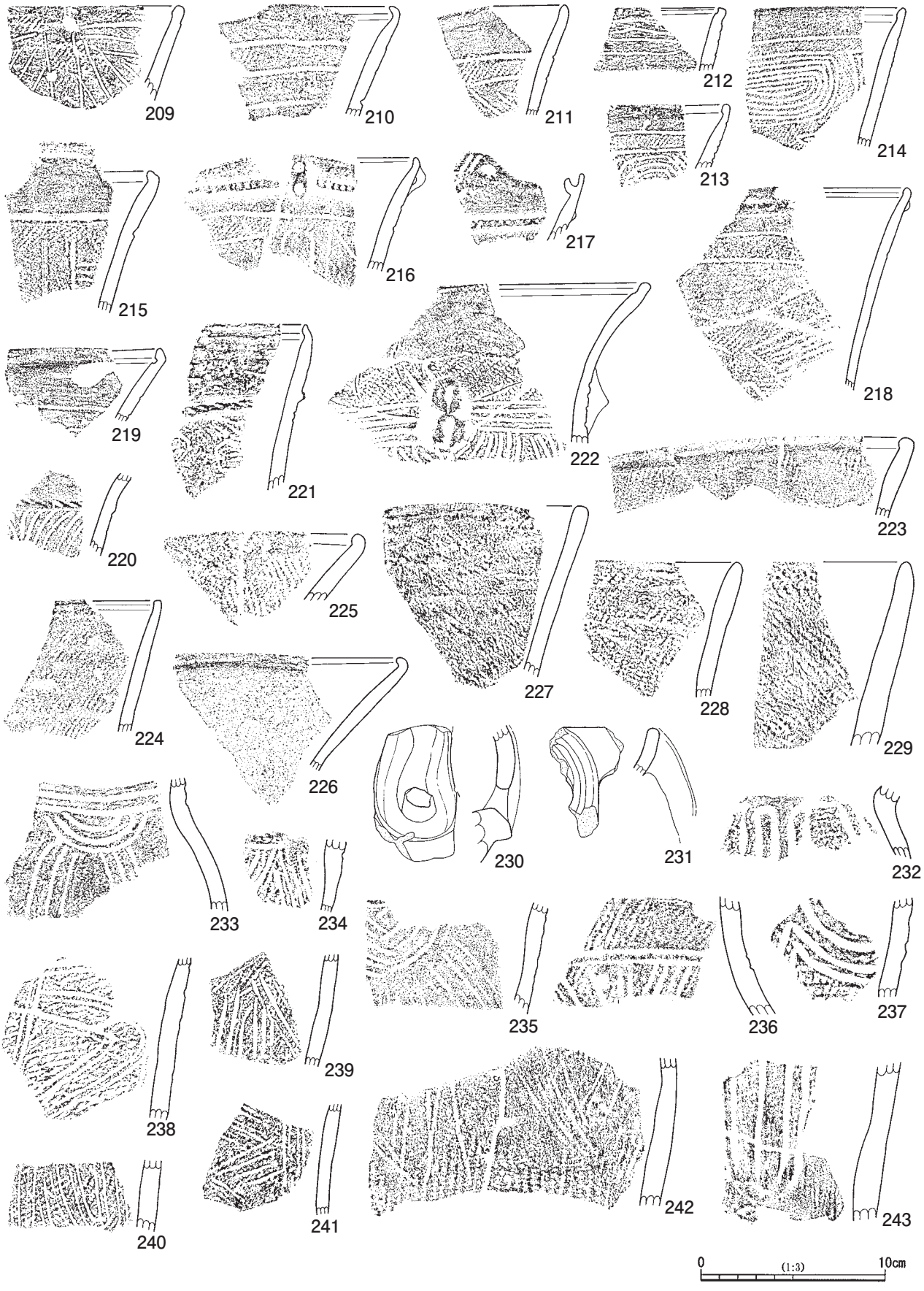
第 111 図　(13)SI013 住居跡出土遺物（４）



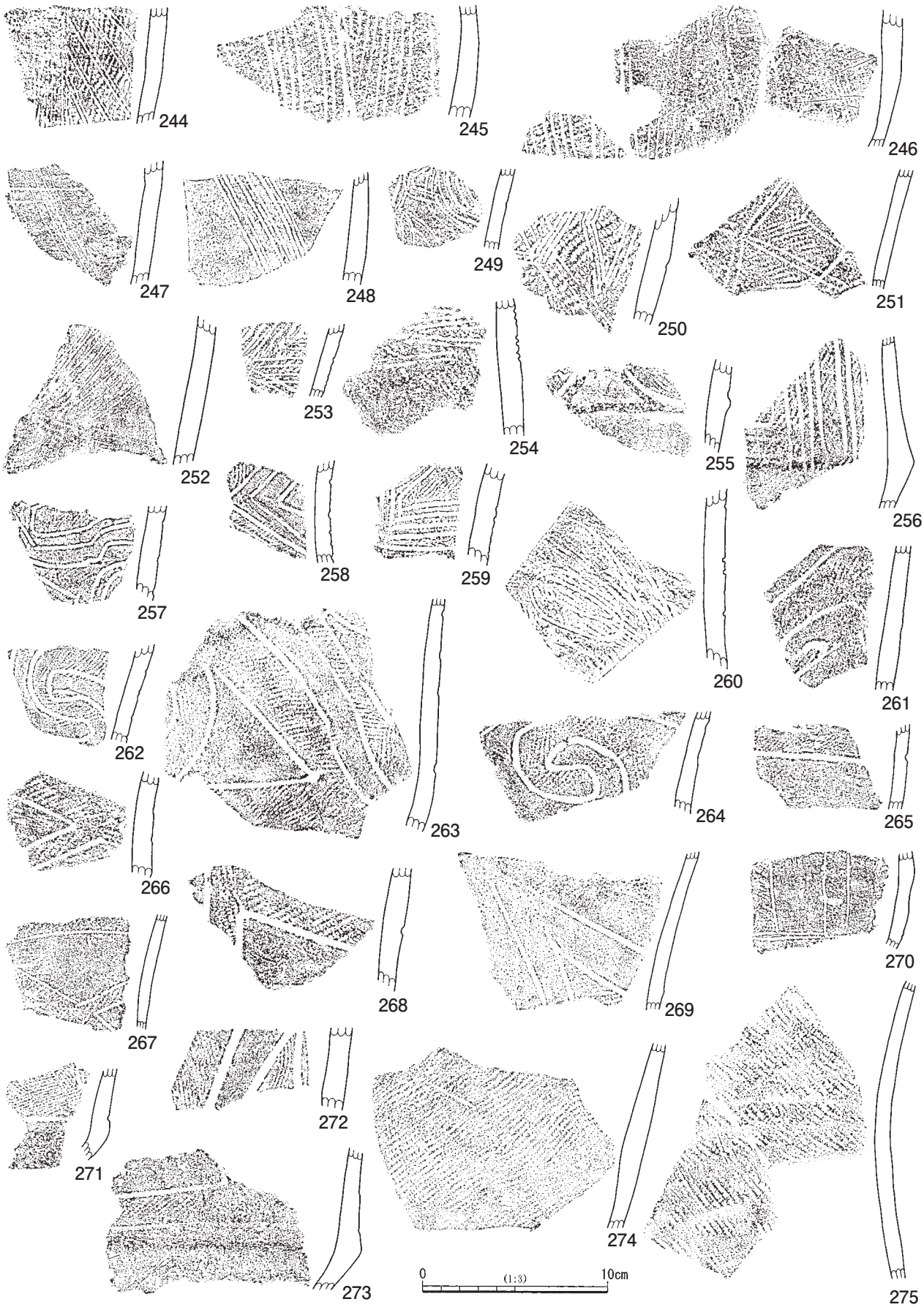
第 112 図　(13)SI014 住居跡出土遺物（１）



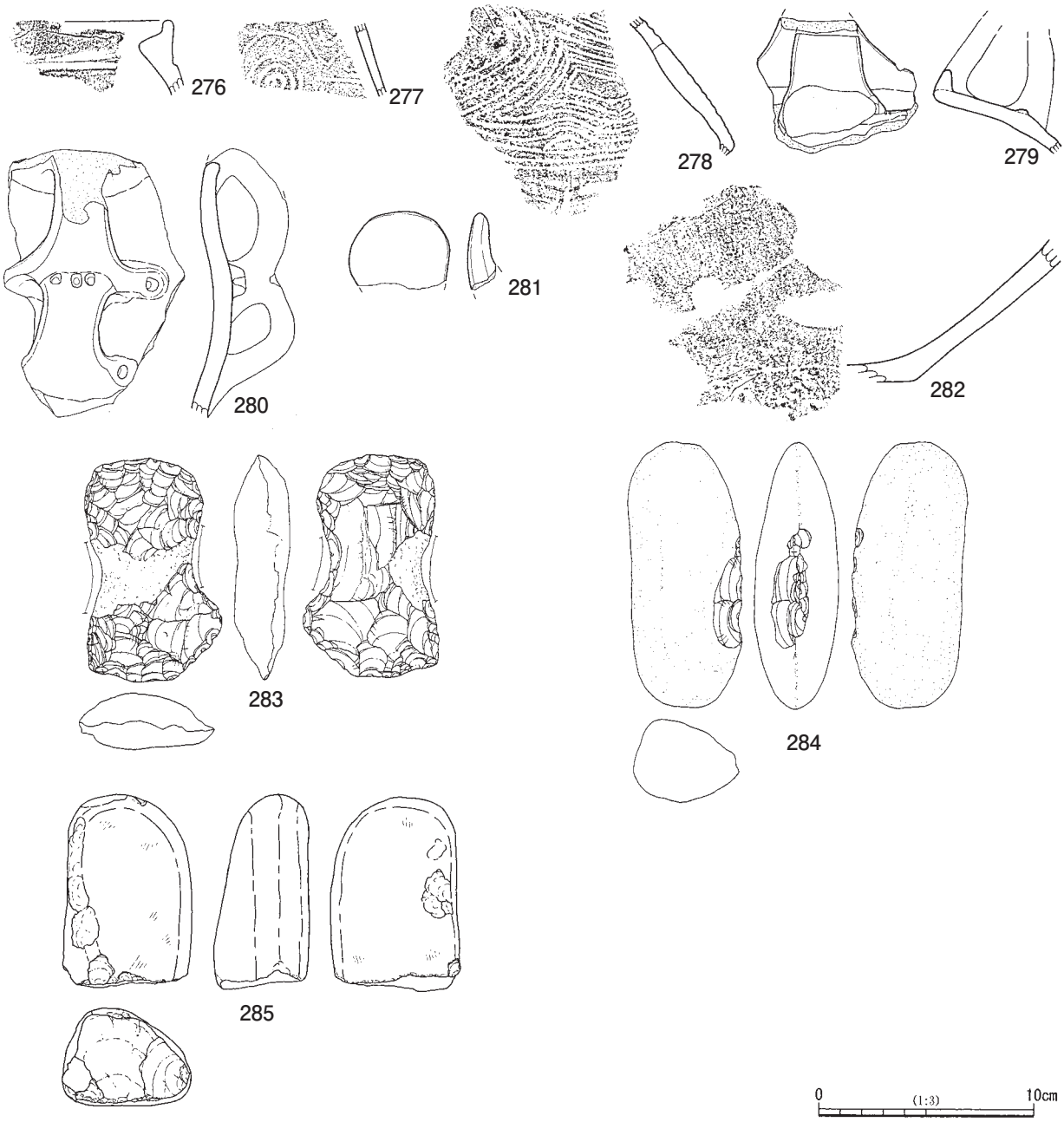
第 113 図　(13)SI014 住居跡出土遺物（２）



第 114 図　(13)SI014 住居跡出土遺物（３）



第 115 図　(13)SI014 住居跡出土遺物（４）

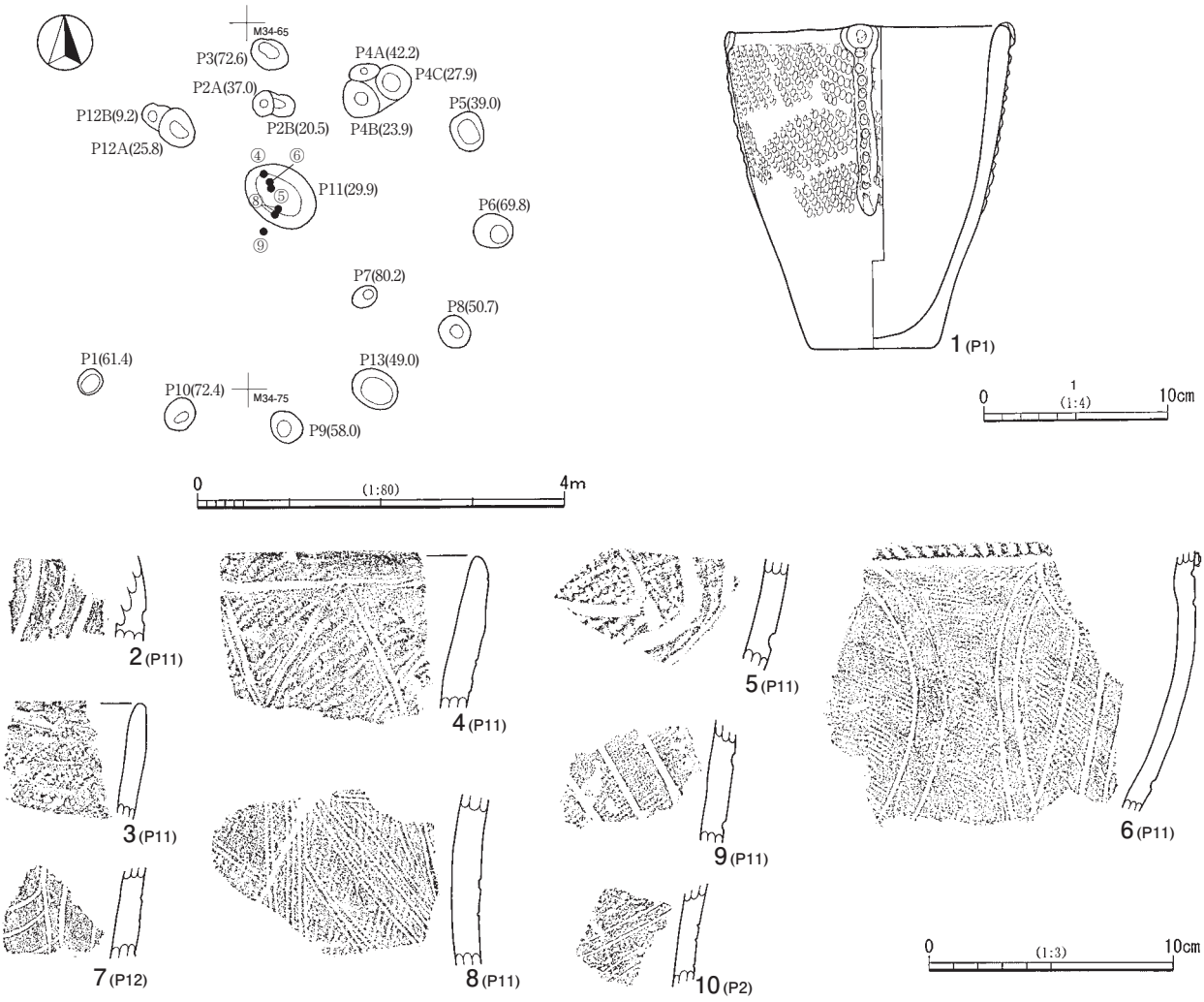


第 116 図　(13)SI014 住居跡出土遺物（５）

SI012が12㎝、(13)SI013・014が５㎝である。床面は３軒とも西側に向かって緩やかに下り傾斜するほか、(13)SI012は中央の炉付近がやや掘り窪められたようになっている。硬化面は検出されなかった。

炉　(13)SI012は中央よりやや南寄りに存在する。長軸長140㎝、短軸長88㎝である。(13)SI013・014から炉は検出されていない。

ピット　調査時の所見ではP1～16は(13)SI012、P17～31は(13)SI014、P32～47は(13)SI013に帰属するとしているが、P5～9は(13)SI012と(13)SI014、P30・40～46は(13)SI013と(13)SI014がそれぞれ重なる範囲に位置しており、どちらに帰属するかは判断が難しい。(13)SI012は概ね壁に沿って配置されるが、(13)SI013・014は不規則な配置である。



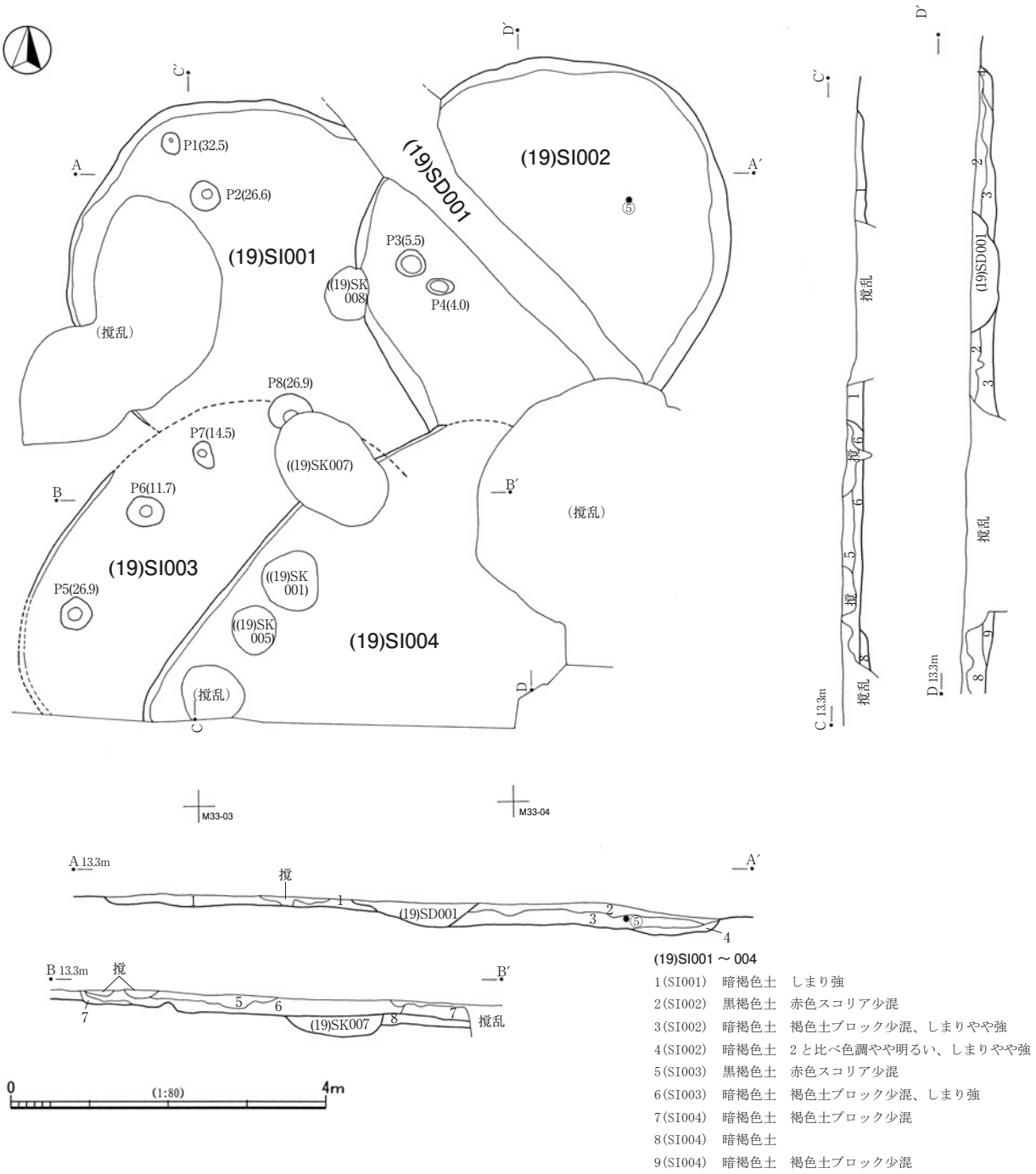
第 117 図　(15)SI127 住居跡、出土遺物

出土遺物　１～45は(13)SI012、46～161は(13)SI013、162～285は(13)SI014からそれぞれ出土した。１～３は堀之内式の器形復元できる深鉢である。４～７は後期土器の底部である。８～26は堀之内式の深鉢口縁部、27・28は注口土器の口縁部、29～41は深鉢胴部、42は注口土器胴部、43は注口土器把手である。44は打製石斧である。45は磨石で、熱を受けて破断している。

57は諸磯式の深鉢口縁部、58は胴部である。51は加曽利Ｅ式の深鉢底部、59は口縁部、60は胴部である。61・62・64は称名寺式の深鉢口縁部、63は胴部である。46・47は堀之内式の器形復元できる深鉢、48～50は注口土器である。65～101は堀之内式の深鉢口縁部、102～149は胴部、52～56は底部である。150・151は注口土器口縁部、152～154は胴部、155は注口部、156・157は把手である。158は加曽利Ｂ式の深鉢胴部である。159は蓋形土製品である。160・161は打製石斧である。

182は加曽利Ｅ式の深鉢胴部である。183は称名寺式の深鉢胴部である。162～167は堀之内式の器形復元できる深鉢である。168は鉢形土器で、南三十稲場式の影響が認められる。184～229は堀之内式の深鉢口縁部、230・231は把手、232～275は胴部、169～180は底部である。276は注口土器の口縁部、277・278は胴部、279～281は把手、282は底部である。283は打製石斧、284は敲石、285はスタンプ形石器である。

時期　３軒とも主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。



第 118 図　(19)SI001 ～ 004 住居跡

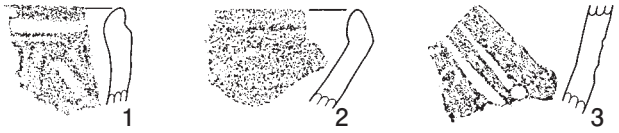
(15)SI127（第117図、図版８・63）

形状と規模　東西4.8m、南北4.5mの範囲に12基のピットが円環状に並び、中心にやや大きい土坑が存在する遺構群を竪穴住居跡として設定した。

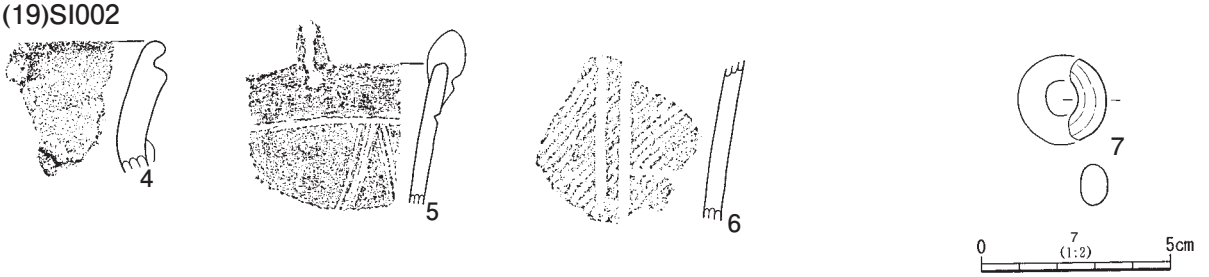
内部の状況　壁が失われているため覆土は残存していない。床面はどの程度遺存しているか不明である。

炉　検出されていない。

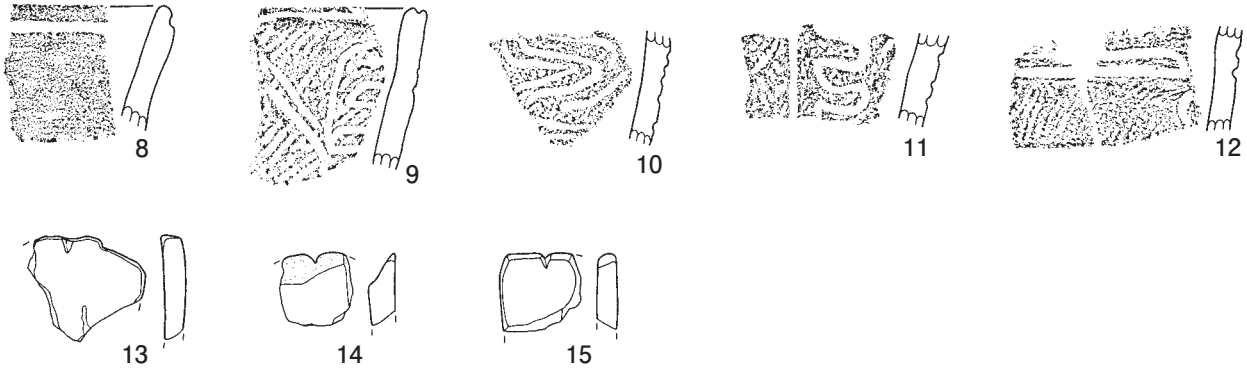
(19)SI001



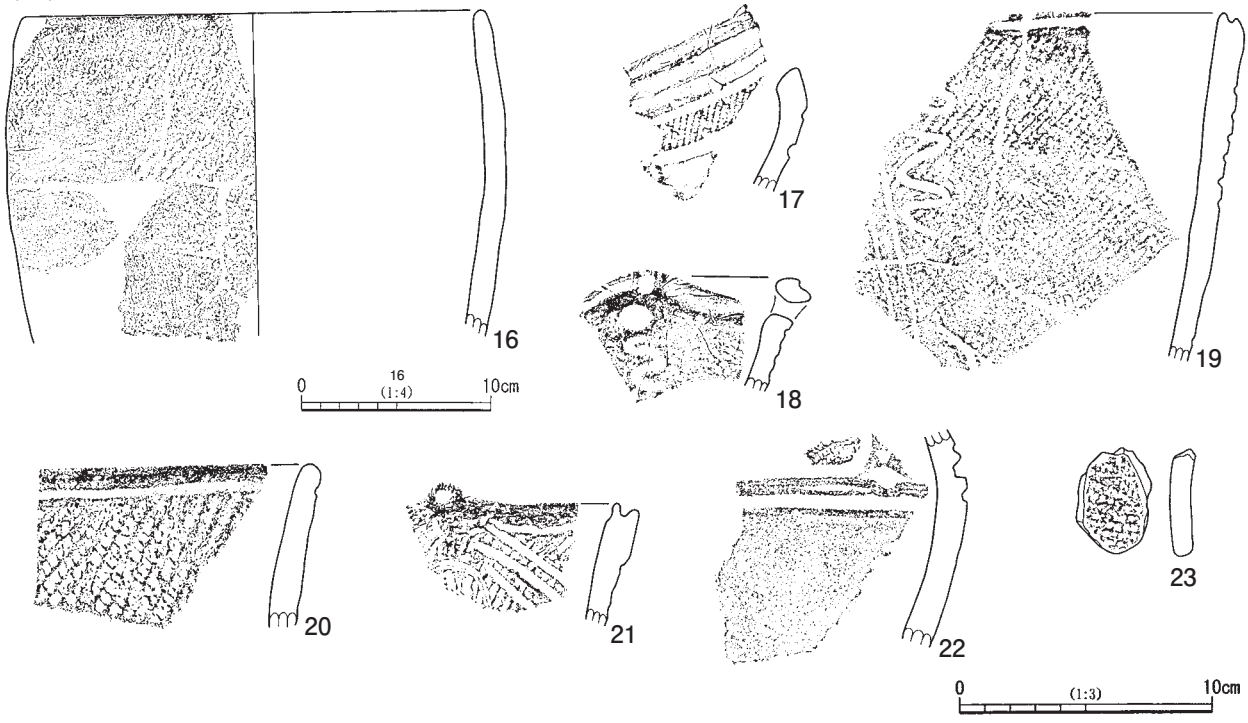
(19)SI002



(19)SI003



(19)SI004



第 119 図　(19)SI001 ～ 004 住居跡出土遺物

ピット　12基のピットのうちP2・12は２基、P4は３基重なっている。いずれのピットも深く柱穴と考えられる。

出土遺物　１はP1から出土したもので、堀之内式の器形復元できる深鉢である。２は称名寺式の深鉢胴部である。３・４は堀之内式の深鉢口縁部、５～10は胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(19)SI001～004（第118・119図、図版８・64・93・94）

形状と規模　４軒の竪穴住居跡が重なり合っており、かつ撹乱が著しいため規模や形状は分かりにくい。計測値は検出されている範囲で示す。(19)SI001は東西南北とも4.6m、(19)SI002は東西南北とも4.8m、(19)SI003は東西5.0m、南北4.8m、(19)SI004は東西5.4m、南北4.7mで、いずれも楕円形か不整円形である。

他遺構との重複関係　まず４軒の新旧関係であるが、土層観察から(19)SI003は(19)SI001・004より新しいことが分かる。そして遺構範囲確認時の所見から(19)SI004は(19)SI001・002より新しく、(19)SI002は(19)SI001より新しいとされている。それらを総合すると、(19)SI001→002→004→003の順に構築されたと推測される。住居群には(19)SK005～008の４基の土坑が重なり合っている。土層観察から(19)SK007は(19)SI004より新しく、(19)SI003より古い。(19)SK008は調査時の所見では(19)SI001・002の両住居より新しいとしている。(19)SK005・006については(19)SI004に伴うものではなく独立した土坑としているが、根拠は不明で住居との新旧関係も明らかではない。

内部の状況　いずれも壁の立上がりは緩やかである。床面はやや不安定で、全体に東方向に下るように緩やかに傾斜しているほか、(19)SI002はわずかに段状を呈して南方向へ緩やかに下る。深さは(19)SI001が15cm、(19)SI002が32cm、(19)SI003が24cm、(19)SI004が40cmである。

炉　検出されていない。

ピット　全部で８基のピットが検出されている。調査時所見ではP1・2・7・8が(19)SI001に、P3・4が(19)SI002に、P5・6が(19)SI003にそれぞれ帰属するとされている。いずれにしても配置は極めて不規則である。P1・2・5・8などは柱穴の可能性がある。

出土遺物　１～３は(19)SI001出土で、１・２は堀之内式の深鉢口縁部、３は胴部である。４～７は(19)SI002出土で、４・５は堀之内式の深鉢口縁部、６は胴部である。７は環状の土製品である。８～15は(19)SI003出土で、８・９は堀之内式の深鉢口縁部、10～12は胴部である。13～15は土器片錘である。16～23は(19)SI004出土で、17は称名寺式の深鉢口縁部である。16は堀之内式の器形復元できる深鉢、18～21は深鉢口縁部、22は胴部である。23は土器片錘である。

時期　４軒とも主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構群は該期と考えられる。

(19)SK005（第120図、図版８）

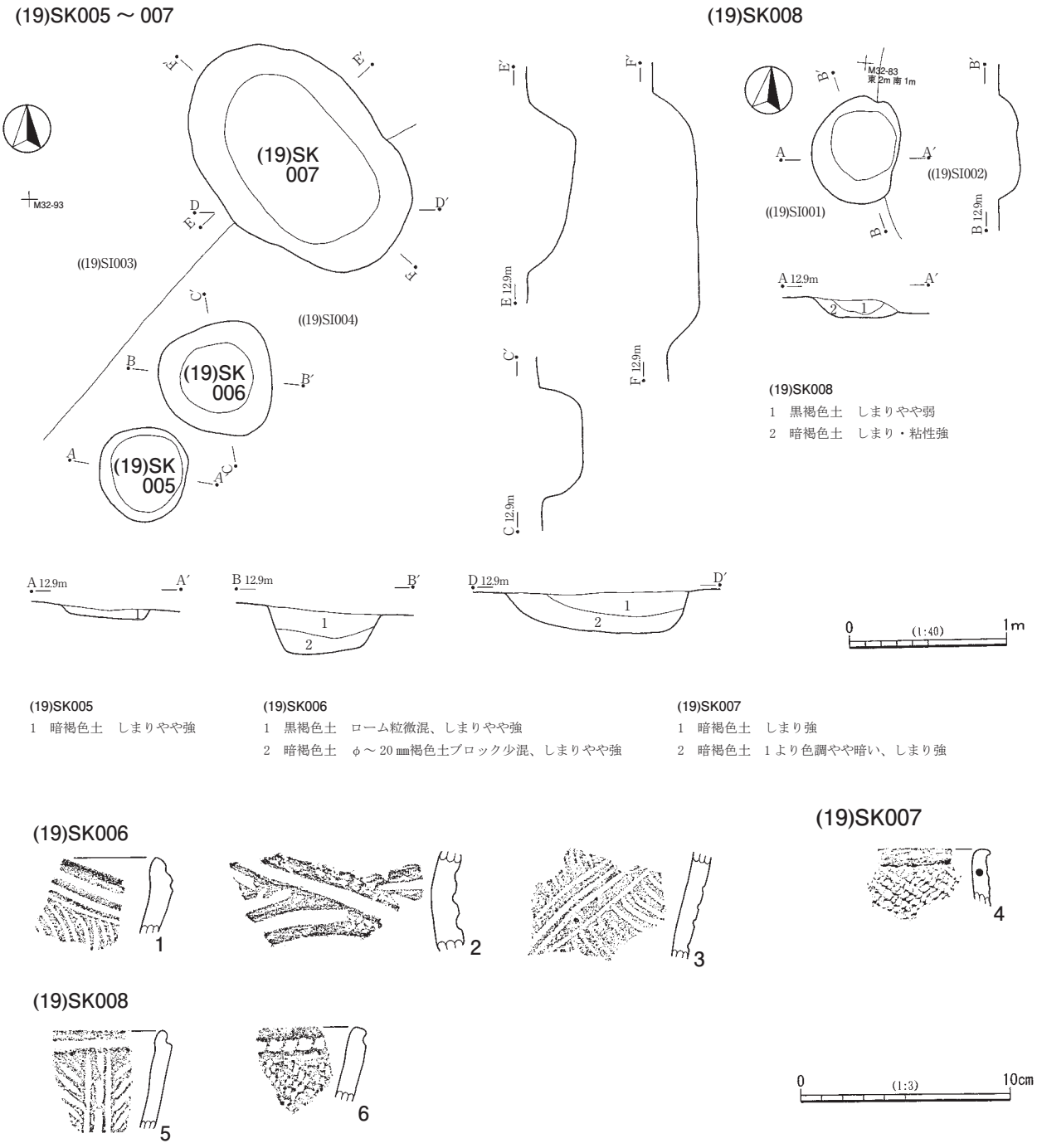
状況　先述したとおり(19)SI004の範囲内であるが、独立した土坑として扱う。なお、住居との新旧関係は不明である。東西長55cm、南北長60cmの不整円形を呈する。断面皿状を呈するが、床面は東方向に下り傾斜している。深さは７cmとごく浅い。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　不明であるが、住居や周囲の土坑と大きく隔たっていないと推測される。

(19)SK006（第120図、図版８・64）

状況　これも先述したとおり(19)SI004の範囲内であるが、独立した土坑として扱う。住居との新旧関係は



第 120 図　(19)SK005 ～ 008 土坑、出土遺物

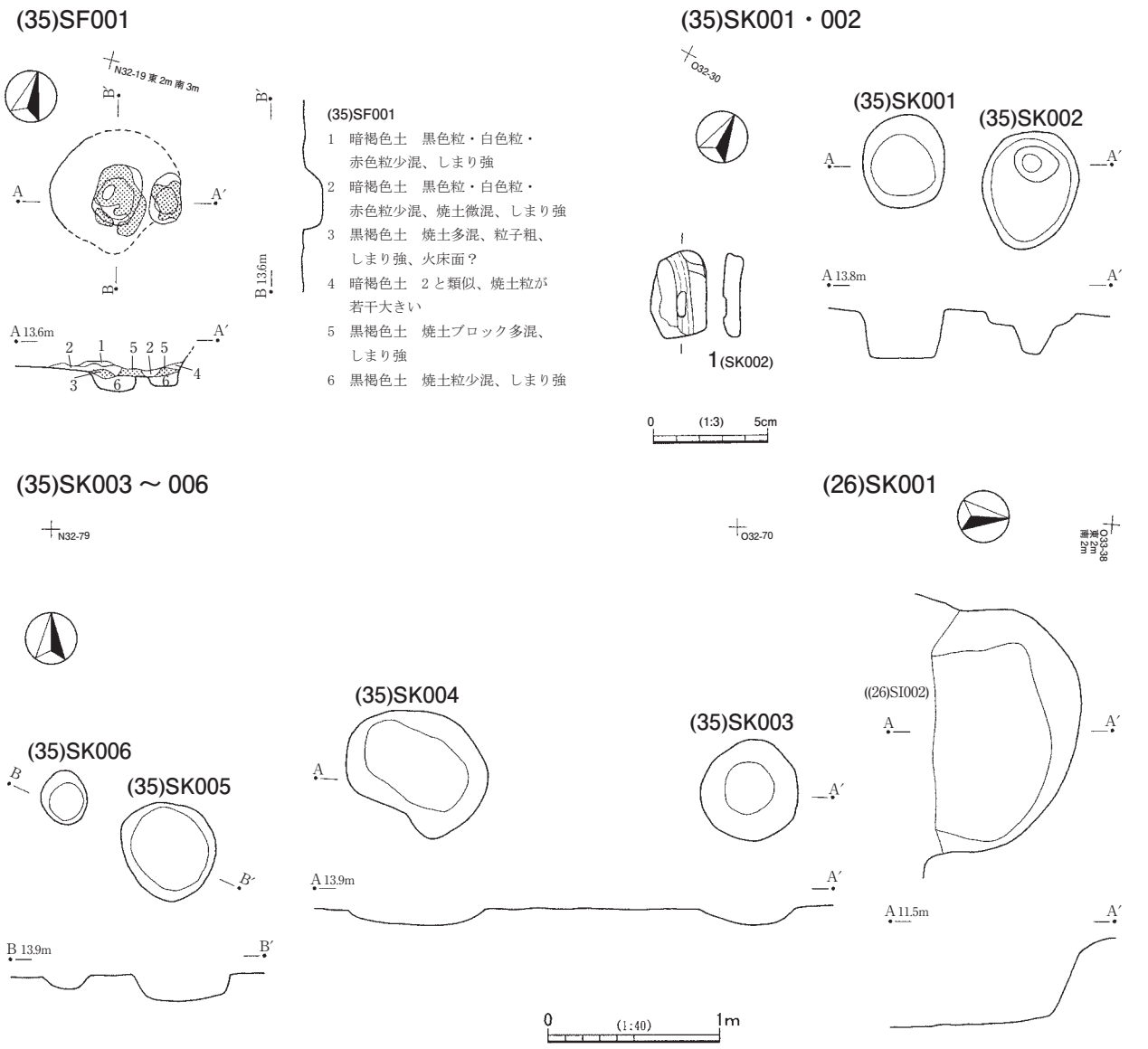
不明である。東西長72cm、南北長75cmの不整円形を呈する。開口部が傾斜しているが断面逆台形を呈し、深さは28cmである。

出土遺物　1は堀之内式の深鉢口縁部、２・３は胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(19)SK007（第120図、図版８・64）

状況　(19)SI003と004にまたがるように位置する。(19)SI003より古く(19)SI004より新しい。長軸長163cm、短軸長60cmの楕円形に近い不整円形を呈する。壁の立上がりは緩やかである。床面は北西方向に下るように緩やかに傾斜している。深さは33cmである。



第 121 図　(35)SF001 炉跡、(26)SK001、(35)SK001 ～ 006 土坑、出土遺物

出土遺物　４は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期　出土している遺物は黒浜式であるが、堀之内式の住居である(19)SI004より新しく(19)SI003より古い。当土坑の時期も堀之内式期と判断される。

(19)SK008（第120図、図版８・64）

状況　(19)SI001と(19)SI002にまたがるように位置し、両者よりも新しい。東西長55cm、南北長70cmの不整円形を呈する。断面皿状で、深さは10cmと浅い。

出土遺物　５・６は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

（２）その他の土坑・ピットなど

(35)SF001（第121図、図版８）

状況　縄文時代遺構群の最も北東端部から検出されたもので、竪穴住居の炉の可能性を考えて周辺を精査

したが、柱穴などは検出されず、単独の炉跡としたものである。東西長80cm、南北長70cmの不整円形を呈する土坑の中に、径30cm～35cmと20cm～30cmの２基のピットが掘り込まれる。土坑は深さ４cmとごく浅く、ピットも深さ８cmで浅い。ピットの上を中心に焼土が堆積しており、一部硬化してブロック状になっている。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(35)SK001（第121図）

状況　東西長50cm、南北長56cmの不整円形を呈する。断面は長方形に近い逆台形で、深さは28cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(35)SK002（第121図、図版93）

状況　(35)SK001の東側に位置する。東西長55cm、南北長72cmの不整円形を呈する。断面は皿状で深さは７cmである。底面北部には径20cm～25cm、深さ15cmのピット状の掘込みが存在する。

出土遺物　周縁が研磨された土器片が出土している。土器片錘への加工を意図したものかは不明である。

時期　細別時期は不明である。

(35)SK003（第121図）

状況　直径60cmのほぼ正円に近い不整円形を呈する。断面皿状で深さは10cmと浅い。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(35)SK004（第121図）

状況　長軸長85cm、短軸長70cmの不整円形を呈する。断面皿状で深さは10cmと浅い。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(35)SK005（第121図）

状況　直径65cmの正円に近い不整円形を呈する。断面逆台形で深さは16cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(35)SK006（第121図）

状況　長軸長30cm、短軸長26cmの楕円形を呈する。断面皿状で深さは８cmと浅い。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(26)SK001（第121図）

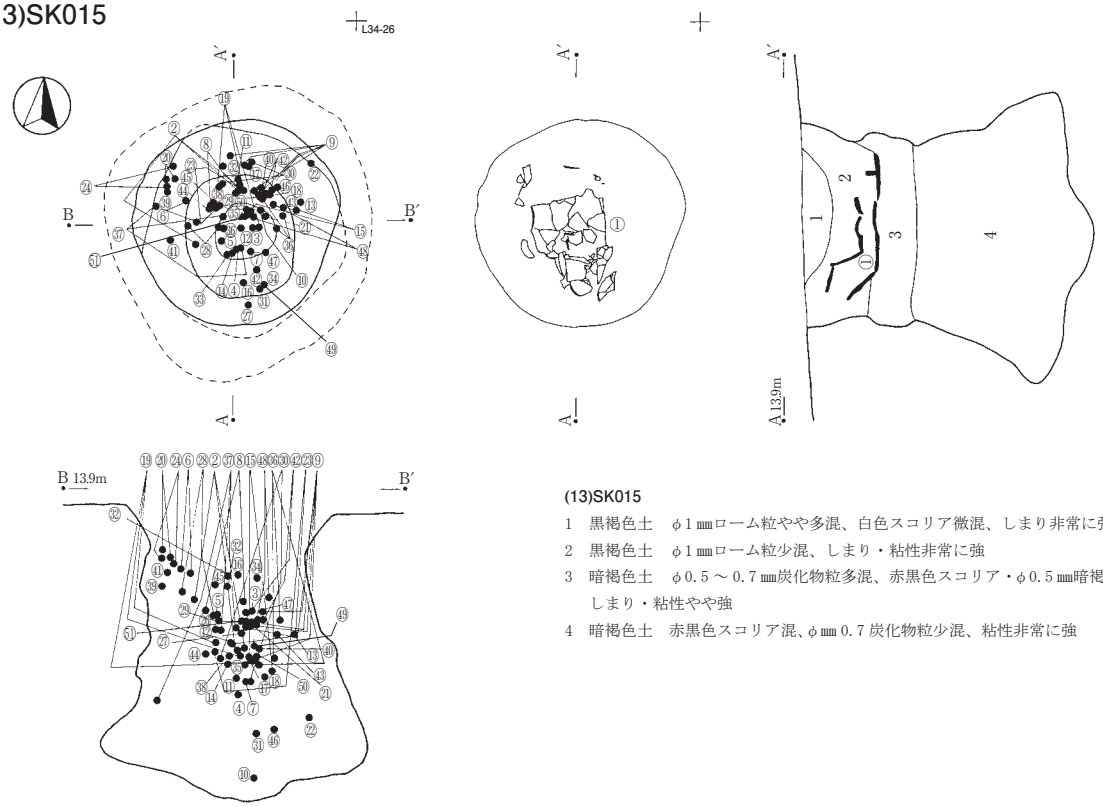
状況　一部が後世の遺構によって削平されている。残存している部分は東西長140cm、南北長85cmの不整円形を呈する。断面は逆台形であるが壁の立上がりは一定ではない。深さは50cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(13)SK010（第122・125図、図版８・66）

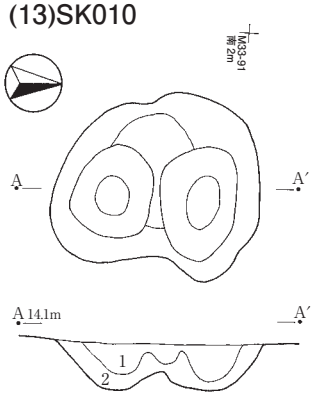
(13)SK015



(13)SK015

1　黒褐色土　φ1㎜ローム粒やや多混、白色スコリア微混、しまり非常に強、粘性強
2　黒褐色土　φ1㎜ローム粒少混、しまり・粘性非常に強
3　暗褐色土　φ0.5～0.7㎜炭化物粒多混、赤黒色スコリア・φ0.5㎜暗褐色粘土粒混、しまり・粘性やや強
4　暗褐色土　赤黒色スコリア混、φ㎜0.7炭化物粒少混、粘性非常に強

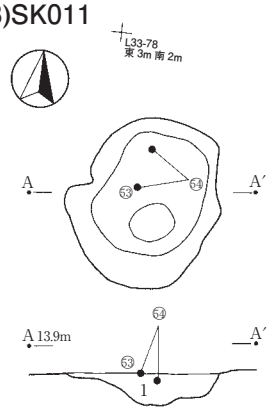
(13)SK010



(13)SK010

1　暗褐色土　φ3㎜ローム粒少混、しまり・粘性やや強
2　暗褐色土　φ1㎜ローム粒・φ10㎜ロームブロック少混、しまり・粘性やや強

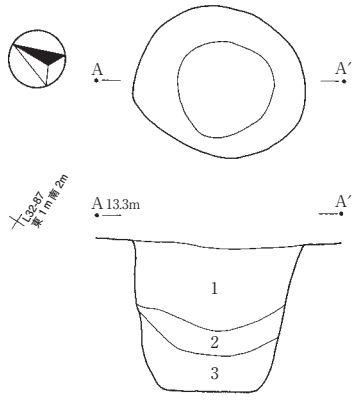
(13)SK011



(13)SK011

1　明褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性強

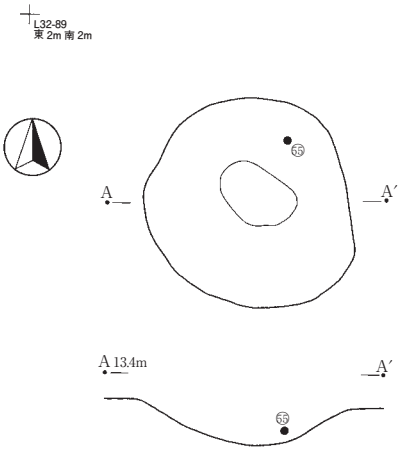
(22)SK002



(22)SK002

1　暗褐色土　　しまり・粘性強
2　暗黄褐色土　しまり・粘性強
3　褐色土　　しまり弱、粘性強

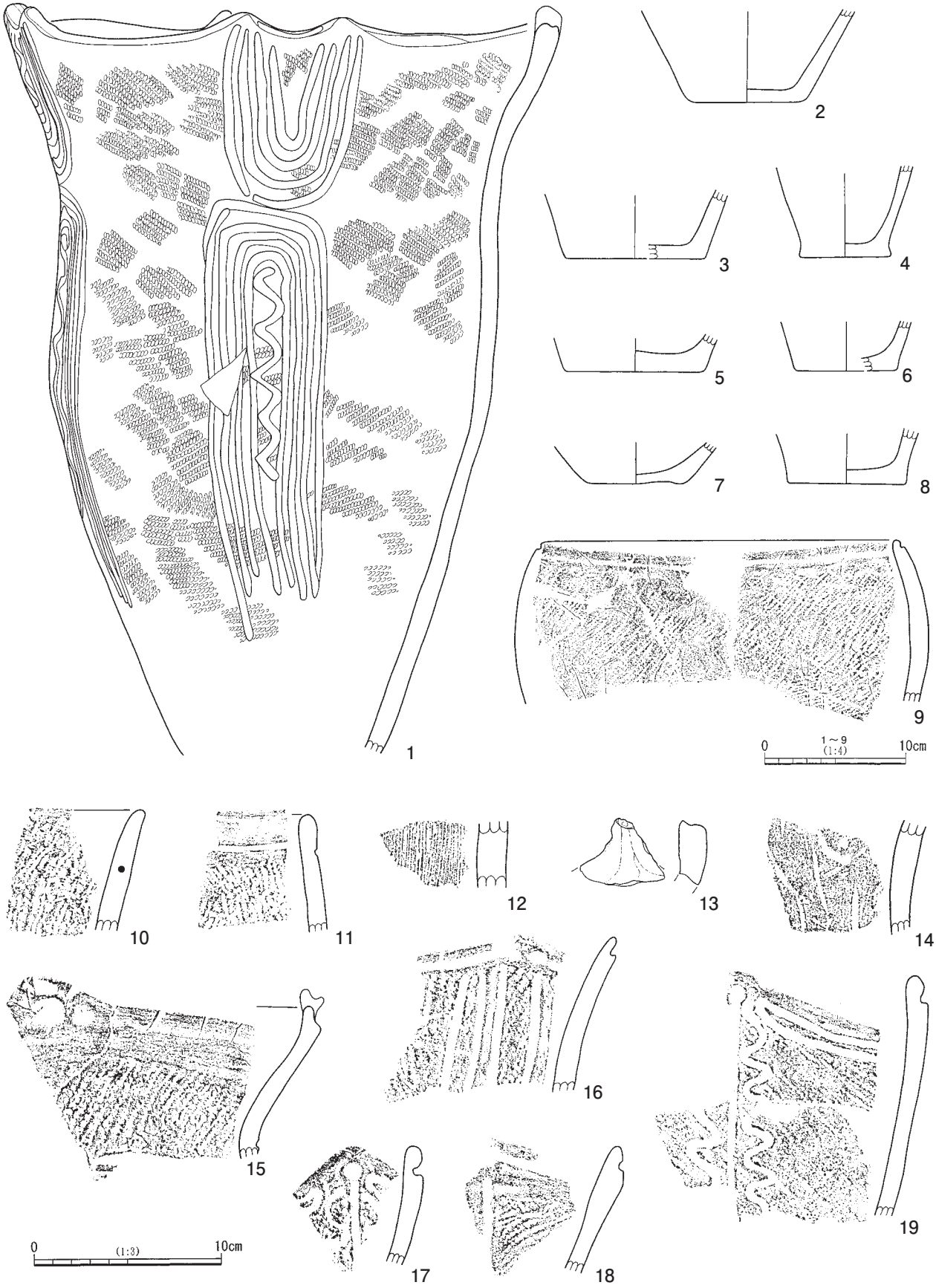
(22)SK001



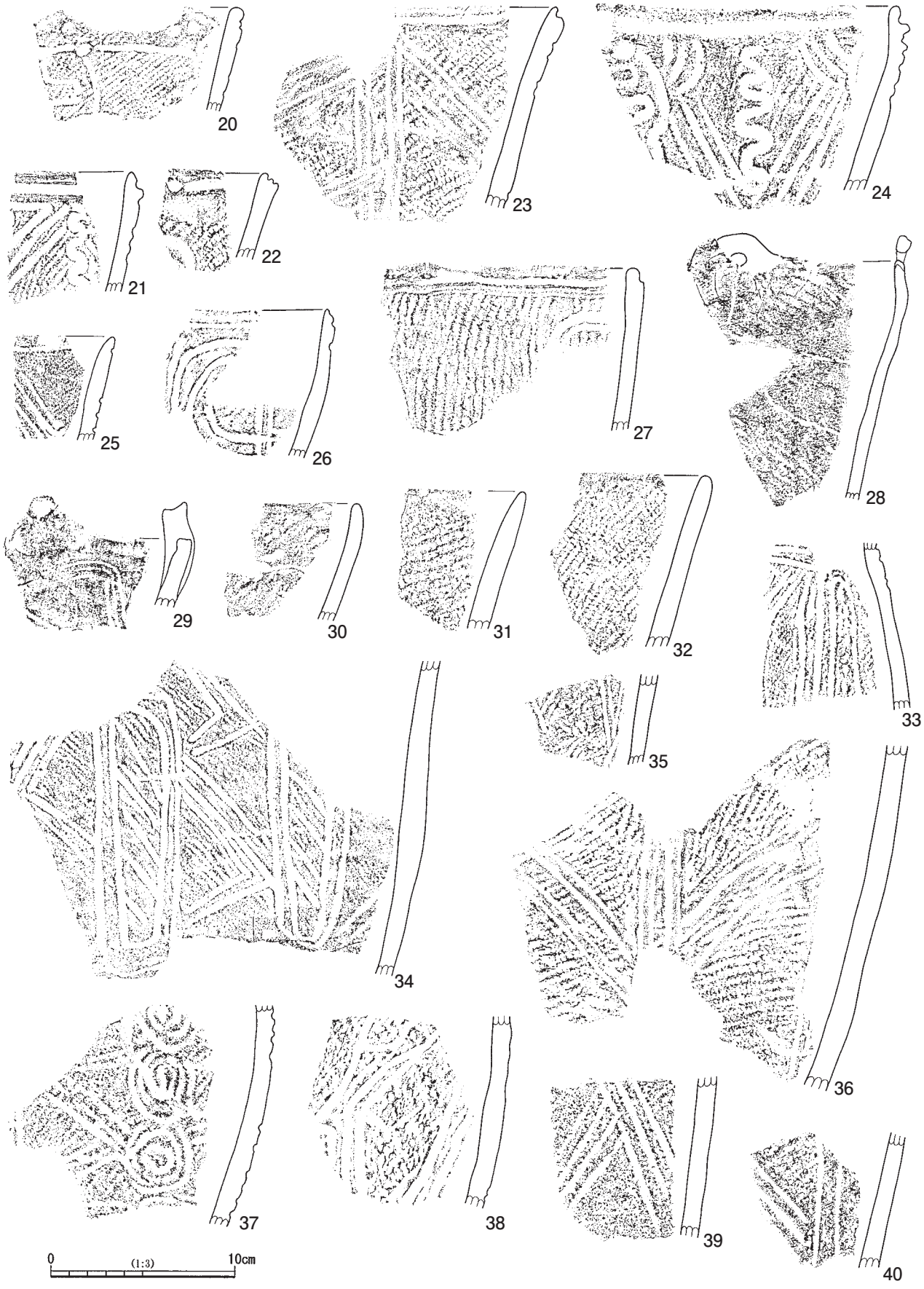
0　(1:40)　1m

第122図　(13)SK010・011・015、(22)SK001・002土坑

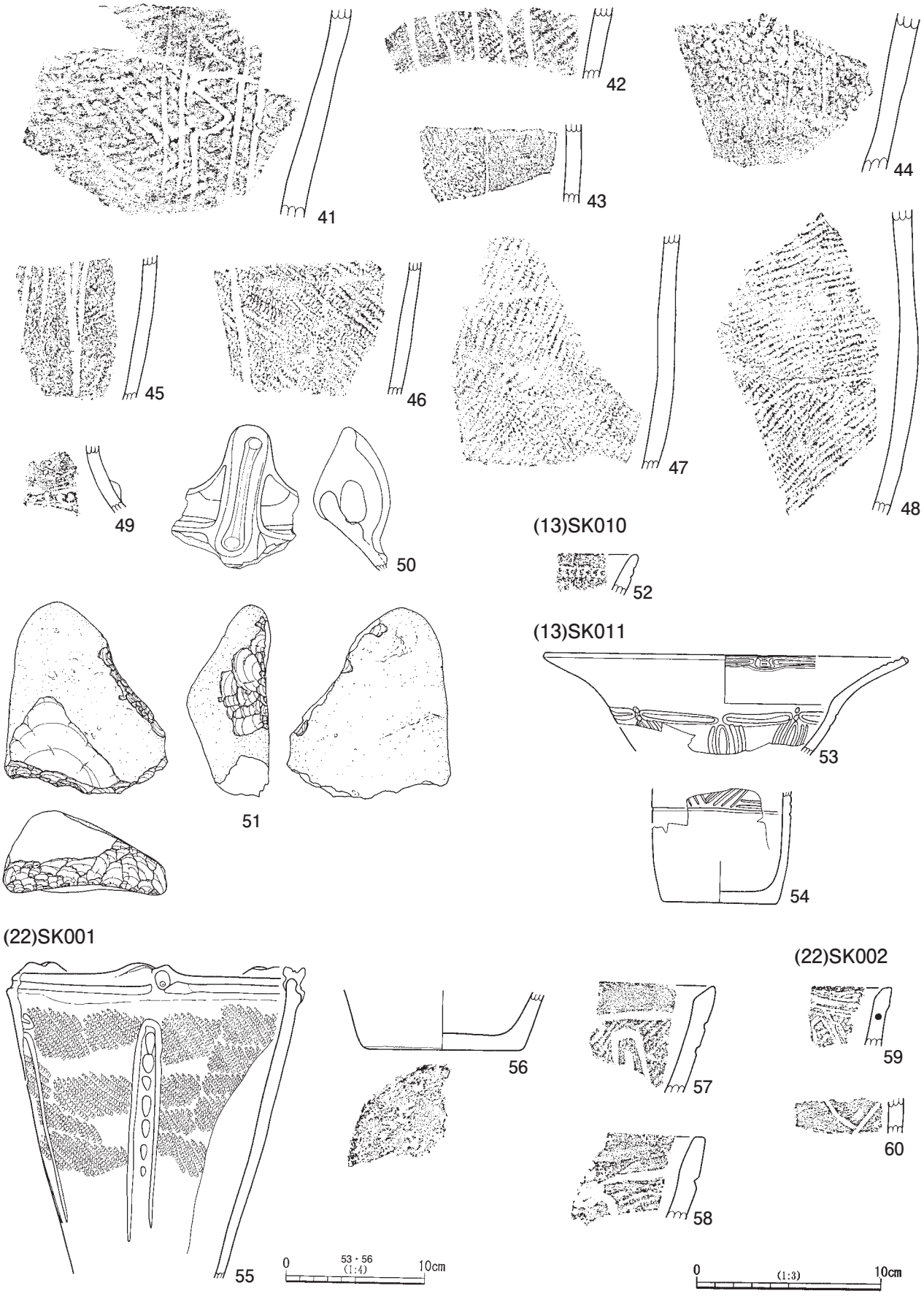
(13)SK015



第 123 図　(13)SK015 土坑出土遺物（1）

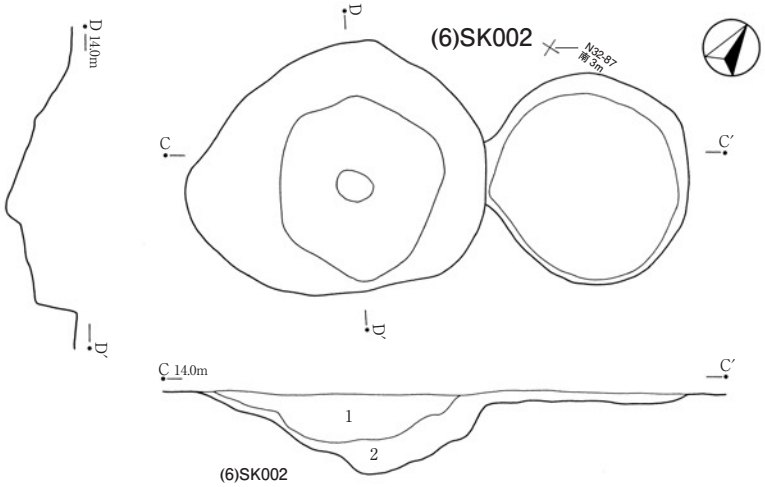


第 124 図　(13)SK015 土坑出土遺物（２）

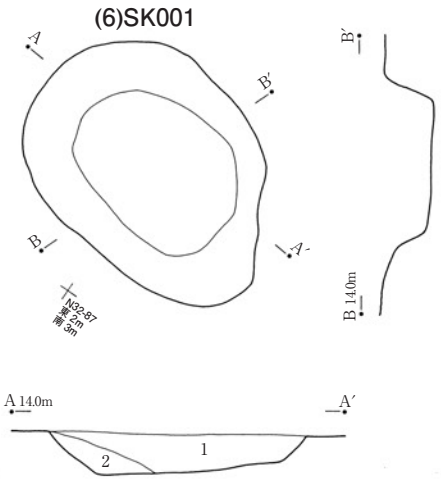


第 125 図　(13)SK015 土坑出土遺物（３）、(13)SK010・011、(22)SK001・002 土坑出土遺物

(6)SK001・002

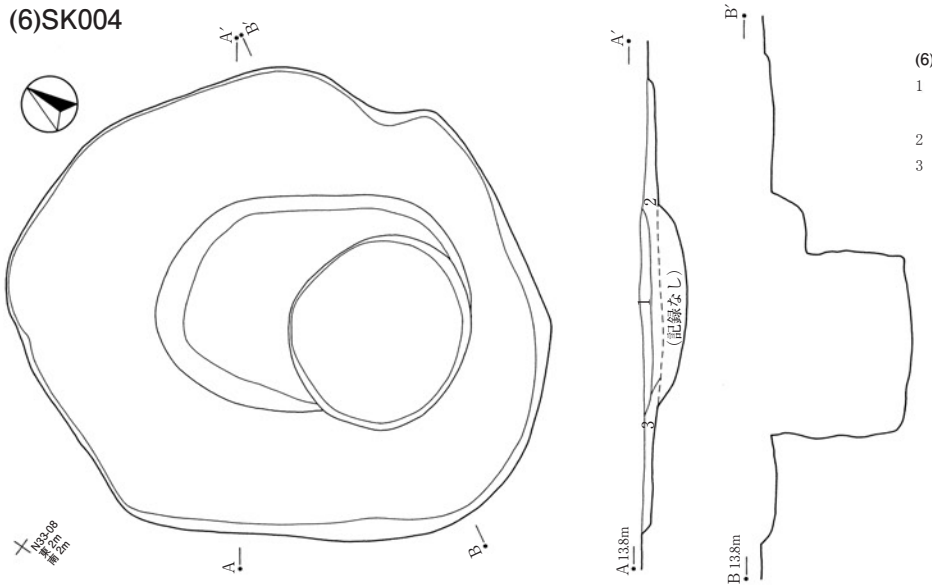


(6)SK002
1　黒色土　　ローム粒少混、しまり弱
2　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまり・粘性弱、水分を多く含む



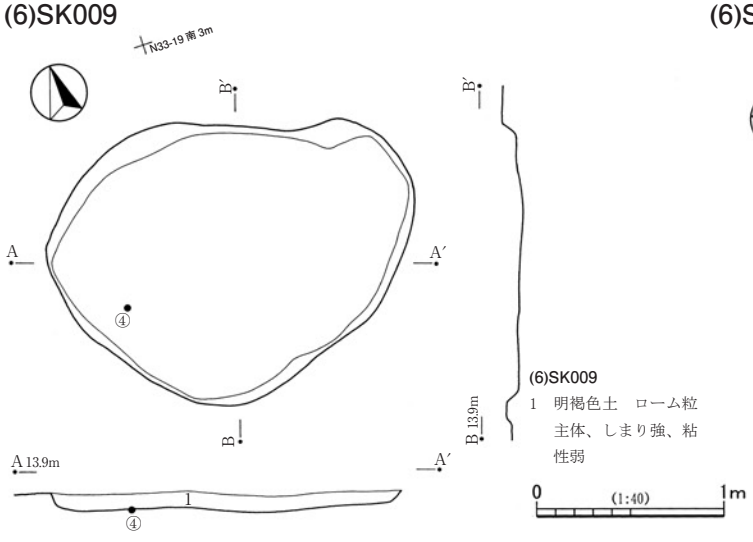
(6)SK001
1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり強、粘性弱
2　明褐色土　ローム粒少混、しまり強、粘性弱

(6)SK004



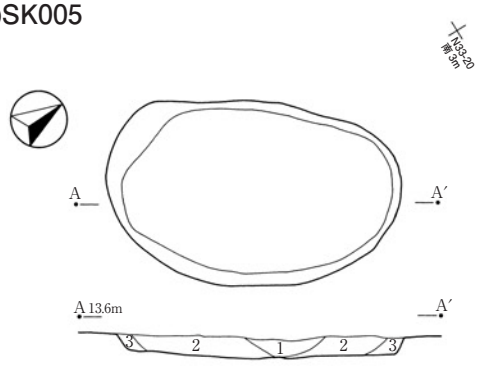
(6)SK004
1　暗褐色土　ローム粒主体、粒子密、しまりやや弱、粘性強
2　暗褐色土　φ2㎜ローム粒多混、しまり・粘性強
3　暗褐色土　φ1㎜ローム粒少混、しまり・粘性強

(6)SK009



(6)SK009
1　明褐色土　ローム粒主体、しまり強、粘性弱

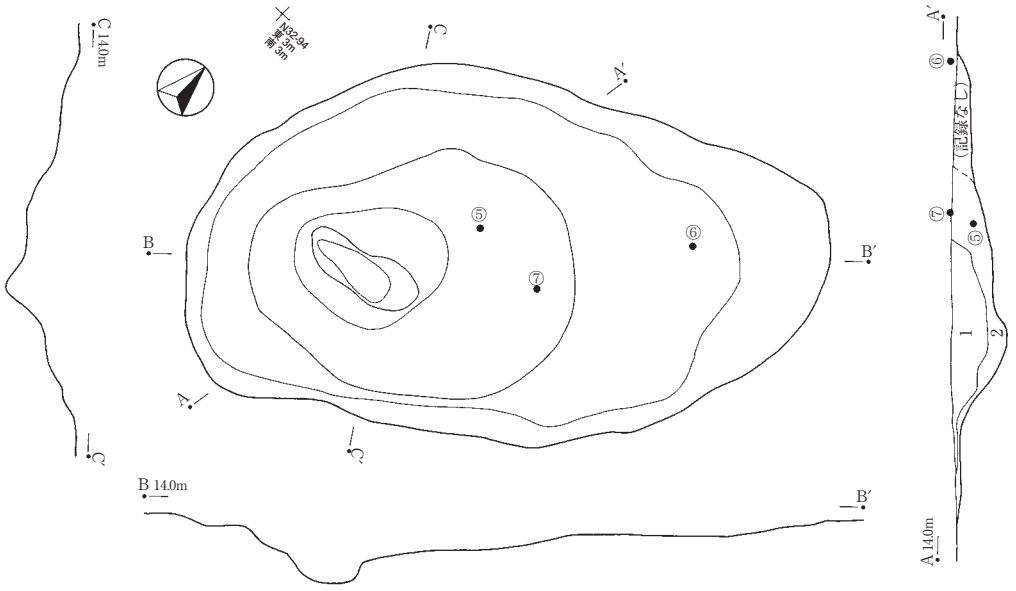
(6)SK005



(6)SK005
1　暗褐色土　ローム粒混、しまり弱、粘性強
2　暗褐色土　φ3㎜ローム粒少混、粒子密、しまり弱、粘性強
3　明褐色土　ローム粒主体（ブロック状）、しまり・粘性強

第 126 図　(6)SK001・002・004・005・009 土坑

(6)SK003

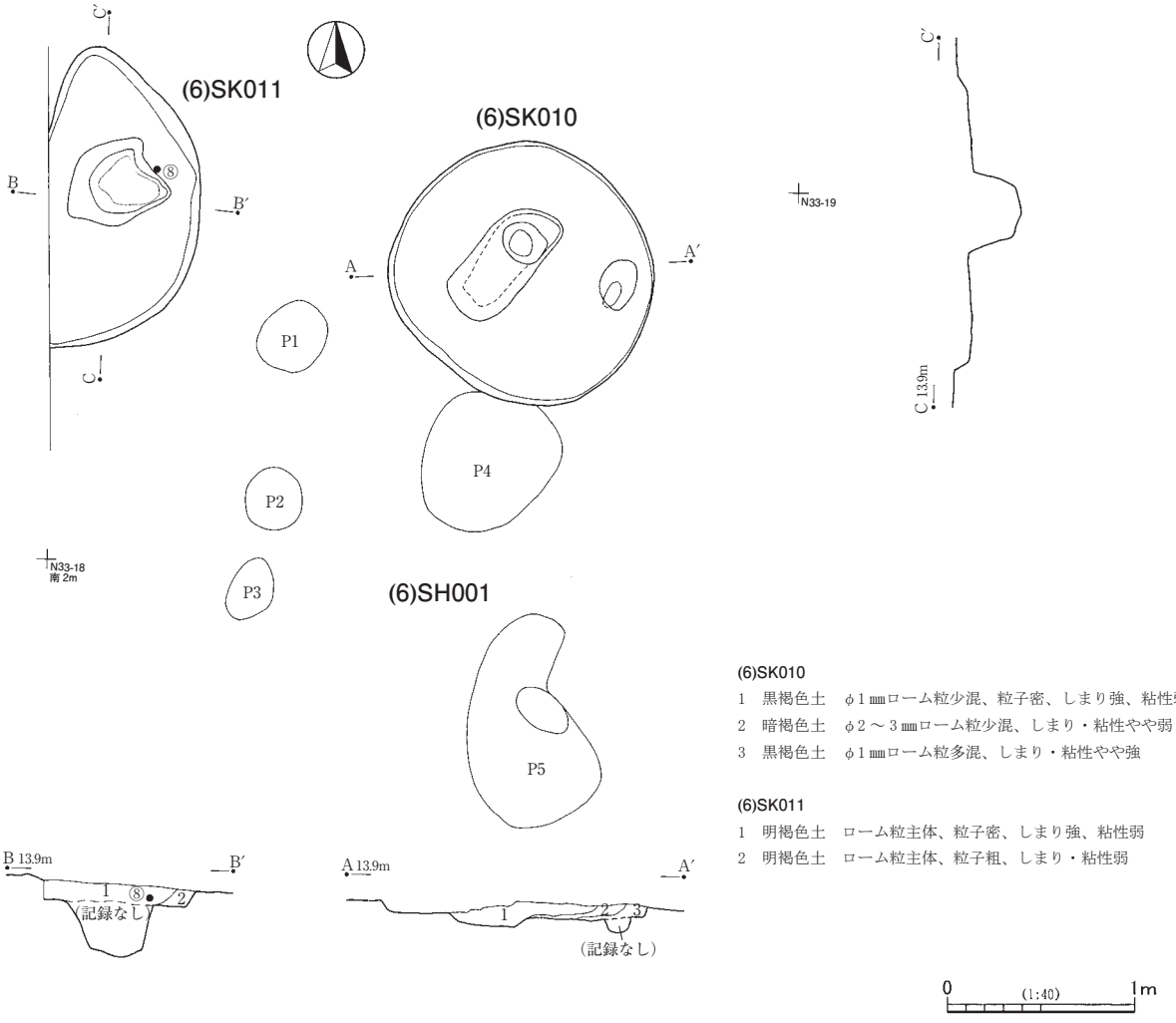


(6)SK003

1　黒褐色土　φ3㎜ローム粒混、しまり強、粘性弱

2　暗褐色土　φ1㎜ローム粒多混、しまり強、粘性弱

(6)SK010・011、(6)SH001



(6)SK010

1　黒褐色土　φ1㎜ローム粒少混、粒子密、しまり強、粘性弱

2　暗褐色土　φ2～3㎜ローム粒少混、しまり・粘性やや弱

3　黒褐色土　φ1㎜ローム粒多混、しまり・粘性やや強

(6)SK011

1　明褐色土　ローム粒主体、粒子密、しまり強、粘性弱

2　明褐色土　ローム粒主体、粒子粗、しまり・粘性弱

第 127 図　(6)SK003・010・011 土坑、(6)SH001 ピット

状況　長軸長110cm、短軸長100cmの不整円形を呈する。底面にはさらに径40cm～60cmのピットが２基並ぶように掘り込まれる。深さは25cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。52は諸磯式の深鉢口縁部である。

時期　出土遺物から諸磯式期と考えられる。

(13)SK011（第122・125図、図版８・66）

状況　東西長84cm、南北長90cmの不整形を呈する。断面も不整形で床面も安定しない。深さは27cmである。

出土遺物　53・54はいずれも堀之内式の深鉢で器形復元できるものである。

時期　出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(13)SK015（第122～125図、図版９・64～66・97）

状況　開口部は直径110cmの正円に近い不整円形、坑底部は東西長175cm、南北長160cmの不整円形を呈する。断面はいわゆるフラスコ状で、中央部はさらに一段掘り窪められている。深さは最深で155cmである。

出土遺物　極めて多量の遺物が出土した。10は前期中葉黒浜式の深鉢口縁部である。11は中期後葉加曽利Ｅ式の深鉢口縁部、12は胴部である。13は後期初頭称名寺式の深鉢口縁部、14は胴部である。１～９は後期前葉堀之内式の器形復元できる深鉢である。１は特に大形であるが、器面は摩耗している。15～32は堀之内式の深鉢口縁部、33～48は胴部である。49は堀之内式の鉢と思われる土器の胴部、50は注口土器把手である。51はスタンプ形石器である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(22)SK001（第122・125図、図版９・66）

状況　東西長120cm、南北長110cmの不整円形を呈する。断面皿状で底面に平坦面はほとんどない。深さは24cmである。

出土遺物　55は堀之内式の器形復元できる深鉢である。57・58は堀之内式の深鉢口縁部、56は底部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(22)SK002（第122・125図、図版９・66）

状況　長軸長90cm、短軸長77cmの不整円形を呈する。断面逆台形で深さは75cmである。

出土遺物　59は黒浜式の深鉢口縁部である。60は称名寺式の深鉢胴部である。

時期　いずれも小破片で時期も隔たっており、判断は困難である。

(6)SK001（第126図、図版９）

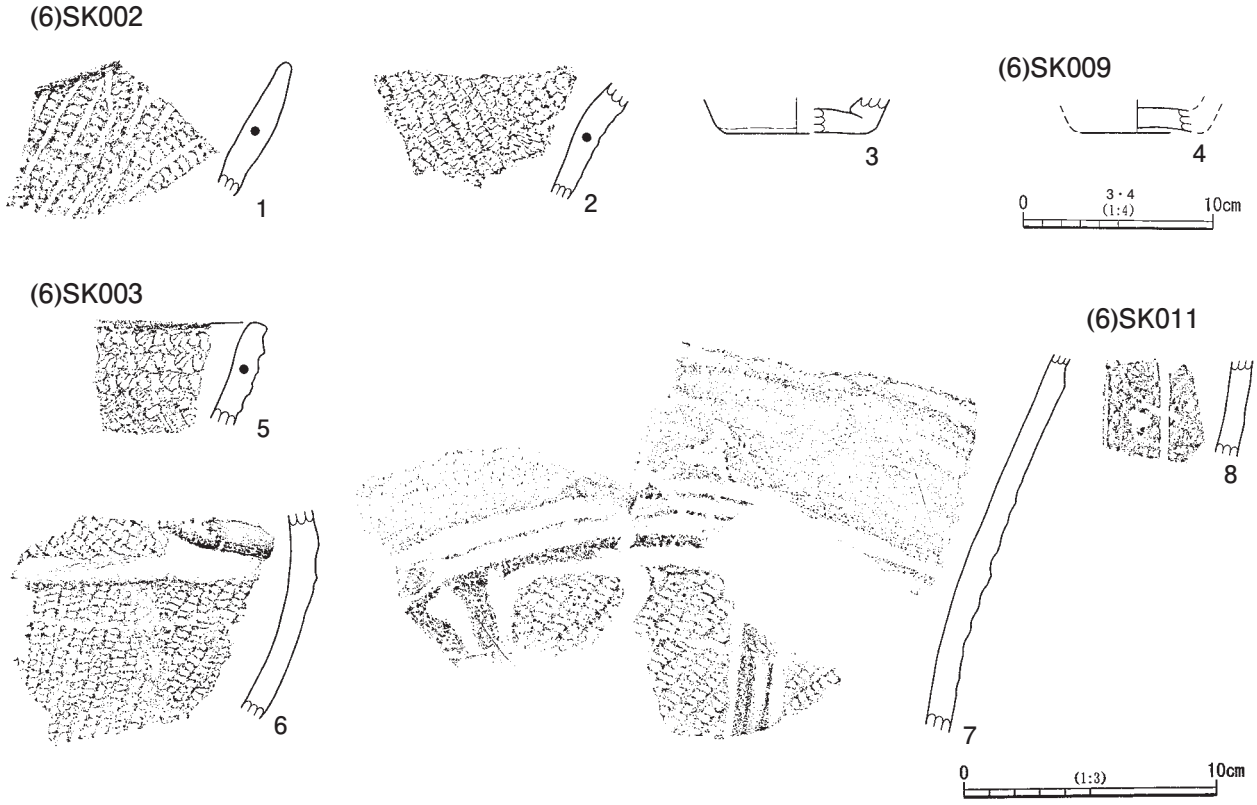
状況　長軸長155cm、短軸長110cmの不整円形を呈する。断面皿状であるが底面は東から西へ下るように緩やかに傾斜する。深さは最深で23cmを測る。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(6)SK002（第126・128図、図版９・67）

状況　長軸長160cm、短軸長130cmの不整円形土坑と、直径110cmの正円形土坑が連結した状況である。不整円形部は断面椀形を呈するものの床面は凹凸が目立ち不安定である。深さは42cmを測る。正円形部は断面皿状で床面は平坦である。深さは５cmとごく浅い。両者あわせた長軸方向はN-55°-Eである。



第 128 図　(6)SK002・003・009・011 土坑出土遺物

出土遺物　１は黒浜式の深鉢口縁部、２は胴部である。３は後期の深鉢底部と思われる。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と考えられる。

(6)SK003（第127・128図、図版９・67）

状況　長軸長342cm、短軸長195cmの不整円形を呈する。断面は歪な擂鉢形で、南西部が最も深い。深さは最深で30cmを測る。

出土遺物　５は黒浜式の深鉢口縁部である。６・７は加曽利Ｅ式の深鉢胴部である。

時期　主たる出土遺物は加曽利Ｅ式であり、当遺構は該期と考えられる。

(6)SK004（第126図、図版９）

状況　当遺構は複数の土坑が重なり合ったような状況を呈している。長軸長292cm、短軸長255cmの断面皿状を呈する不整形土坑のほぼ中心に、長軸長166cm、短軸長116cmの断面皿状を呈する不整円形土坑が掘り込まれ、さらにその南部に径96cm～106cmの断面長方形を呈する正円に近い不整円形が掘り込まれる。深さは順に深くなり、それぞれ10cm、24cm、100cmとなっている。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(6)SK005（第126図、図版10）

状況　長軸長160cm、短軸長100cmの楕円形を呈する。断面皿状で中心部に向かって緩やかに傾斜する。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(6)SK009（第126・128図、図版10）

状況　長軸長202cm、短軸長150cmの不整形を呈する。断面皿状で、深さは10cmと浅い。

出土遺物　４は後期と思われる深鉢底部である。

時期　出土遺物は小破片で判断が難しいが、後期と思われる。

(6)SK010（第127図）

状況　径142cmの正円に近い不整円形を呈する。中心部に長軸長70cm、短軸長35cmの不整形の掘込みが存在し、さらにその内側に直径25cmのピット状の掘込みが存在する。土坑東部にも径20cm～25cmのピット状の掘込みが存在する。深さは８cmと浅く、掘込みは14cmを測る。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(6)SK011（第127・128図、図版10・67）

状況　一部調査区外になるため全容は不明であるが、南北長160cm、東西長80cm以上の不整形を呈する。中央部には50cm四方の不整形の掘込みが存在する。断面は逆台形で、深さは10cm、掘込み部は38cmである。

出土遺物　８は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(6)SH001（第127図）

状況　(6)SK010・011周辺に存在する５基のピットである。P1は径約45cmの不整円形、P2は径約40cmの円形、P3は径30cm～40cmの不整円形、P4は径約90cmの不整円形、P5は長軸約140cm、短軸約90cmの不整形を呈する。当遺構は詳細な記録がないため、内部の状態や深さなどは不明である。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(15)SK101～113土坑群（第129・130図、図版10・67）

15次調査区は環状集落の内側と外側の２か所に分かれるが、そのうち内側の調査区で検出された遺構群を第129図の上側に示した。柱穴と思われる土坑も存在するが、建物の具体的な状況までは復元できなかった。説明は主要な遺構のみとする。第130図１～３は(15)SK101から出土した遺物で、いずれも後期前葉堀之内式の深鉢である。６は(15)SK113から出土した遺物で、後期と思われる深鉢底部である。

(15)SK102（第129・130図、図版10・67）

状況　東西長78cm、南北長70cmの不整円形を呈する。断面皿状で底面はほぼ平坦である。深さは18cmを測る。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。４は縄文施文のみの土器で判断が難しいが、後期と思われる深鉢胴部である。

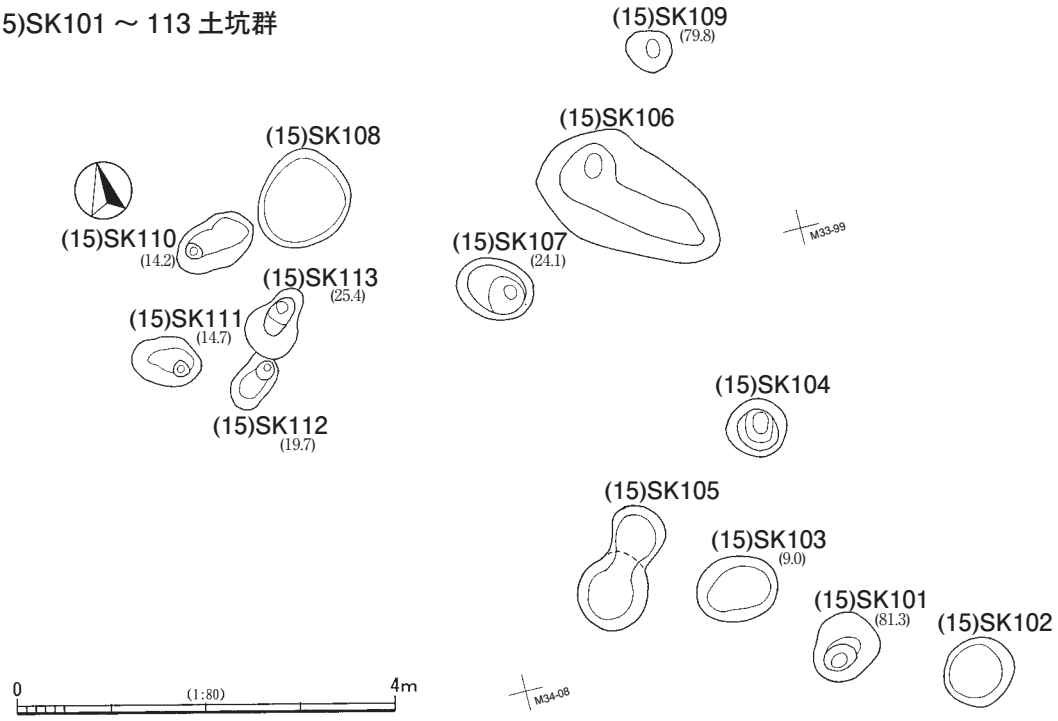
時期　出土遺物から後期と思われる。

(15)SK104（第129・130図、図版10・67）

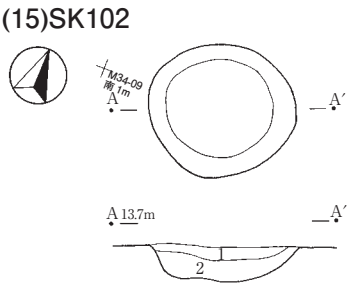
状況　開口部は直径62cmのほぼ正円形を呈し、深さ約15cmまで漏斗状にすぼまってから下は円筒状に掘り込まれる。深さは86cmを測る。上下は別遺構の可能性もある。

出土遺物　５は堀之内式の深鉢口縁部である。

(15)SK101 ～ 113 土坑群

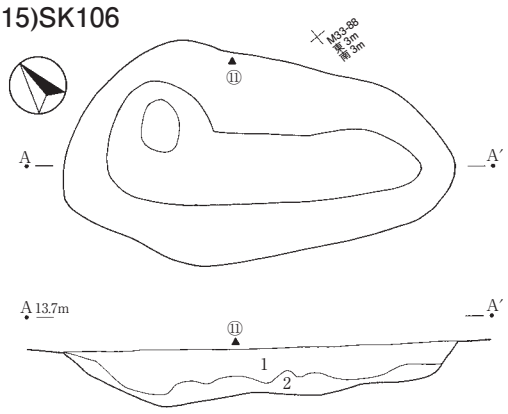


(15)SK102



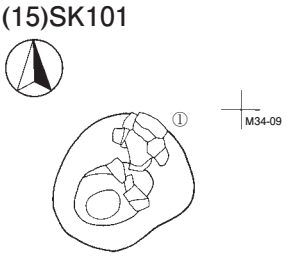
(15)SK102
1　褐色土　ローム粒少混、しまり強、粘性強
2　褐色土　1よりわずかに明るい色調、ローム粒少混、炭化物粒微混、しまり強、粘性強

(15)SK106

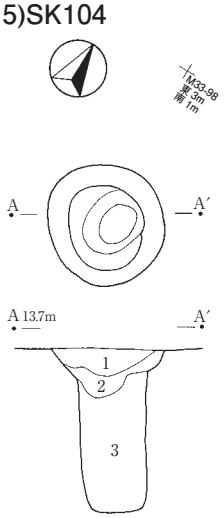


(15)SK106
1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性強、硬質
2　明褐色土　ローム粒多混、しまり・粘性強、硬質

(15)SK101

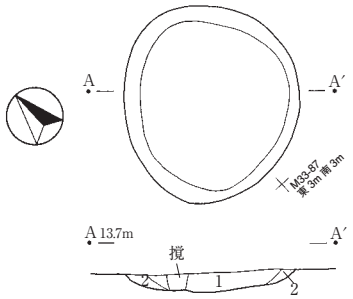


(15)SK104



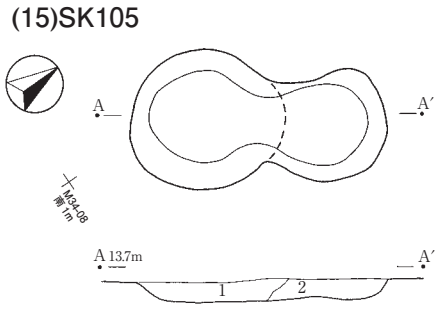
(15)SK104
1　褐色土　しまり・粘性強
2　褐色土　1よりわずかに明るい色調、焼土粒・炭化物粒微混、しまり・粘性強
3　暗褐色土　粒子粗、粘性極めて強

(15)SK108

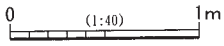


(15)SK108
1　暗褐色土　焼土粒（スコリア？）微混、しまり強
2　褐色土　ローム粒少混、しまり強

(15)SK105



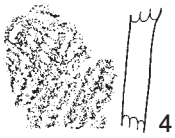
(15)SK105
1　褐色土　ローム粒微混、しまり・粘性強
2　明褐色土　ローム粒少混、しまり・粘性強



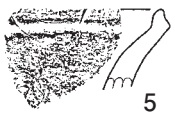
第 129 図　(15)SK101 ～ 113 土坑

(15)SK101

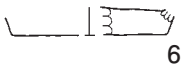
(15)SK102

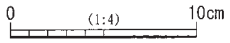


(15)SK104

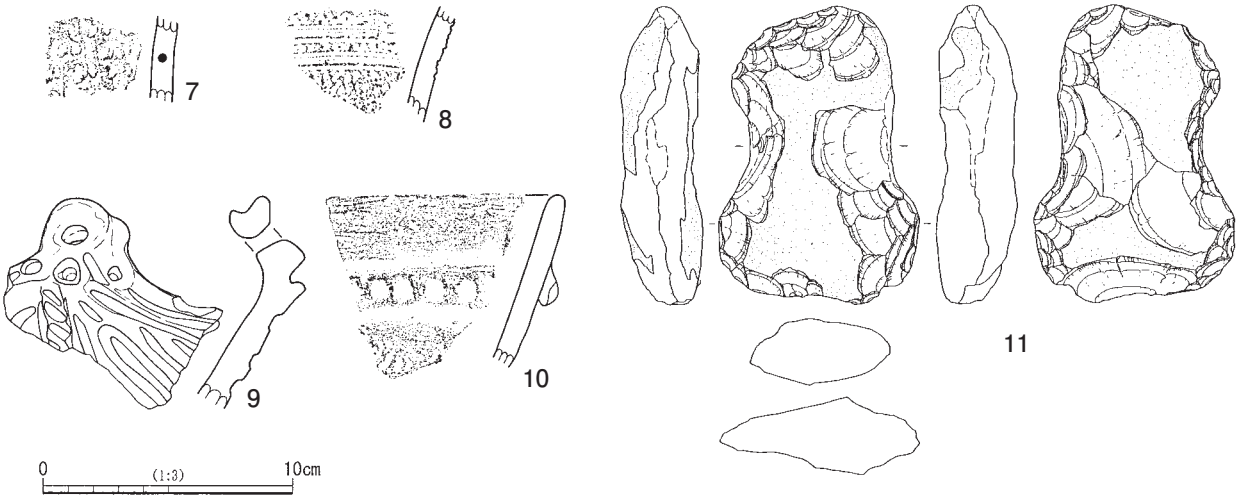


(15)SK113



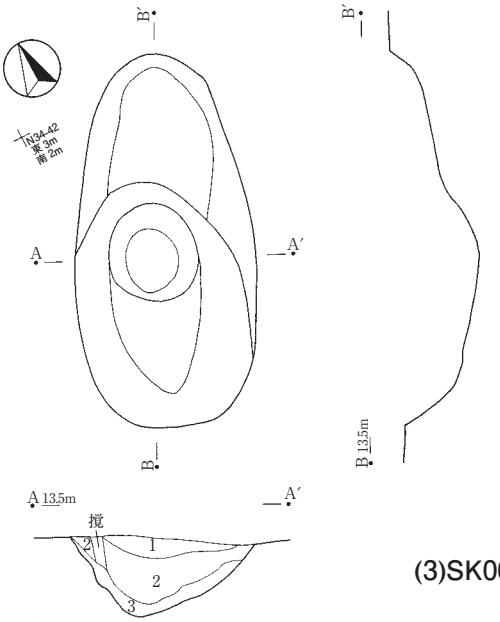


(15)SK106



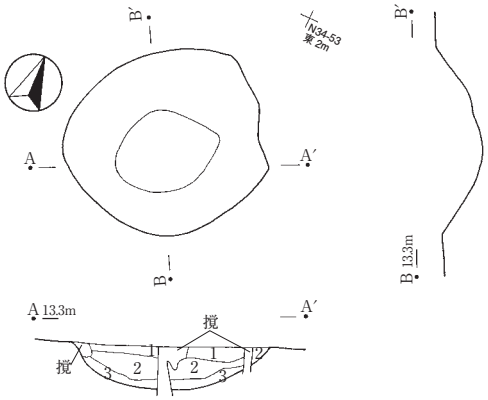
第 130 図　(15)SK101・102・104・106・113 土坑出土遺物

(3)SK004



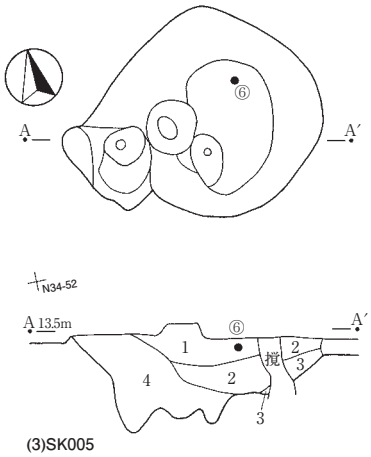
(3)SK004
1　暗褐色土　　ローム粒微混
2　暗褐色土　　1より黄色味を帯びる、ローム粒少混
3　暗黄褐色土　φ30㎜ロームブロック少混、しまり強

(3)SK010



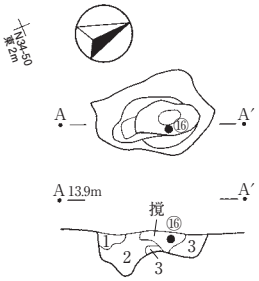
(3)SK010
1　暗褐色土　ローム粒微混
2　暗褐色土　φ5㎜暗黄褐色土少混（斑状）、緻密、しまり強
3　黄褐色土　暗褐色土との混土、ローム粒やや多混

(3)SK005



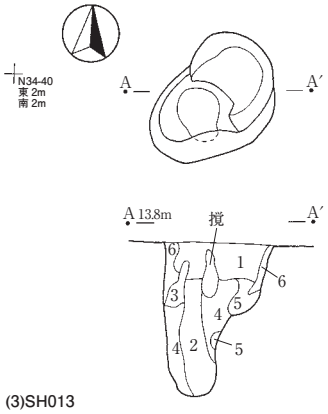
(3)SK005
1　黒褐色土＋暗褐色土斑状
2　暗褐色土　　φ5㎜ローム粒少混
3　黄褐色土　　φ30㎜ロームブロック混、しまり弱
4　暗黄褐色土　しまり極めて強

(3)SK014



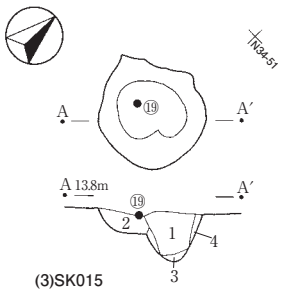
(3)SK014
1　黄褐色土　　黒褐色土との混土、しまり強
2　黒褐色土　　黄褐色土との混土、ローム粒やや多混、しまりやや強
3　暗黄褐色土　ローム粒微混、しまり極めて強

(3)SH013



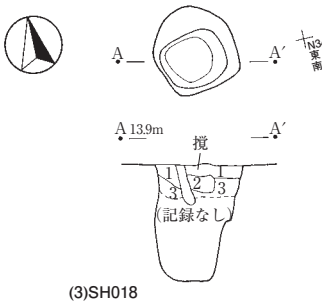
(3)SH013
1　暗褐色土　　φ5㎜ローム粒少混
2　黒褐色土　　ローム粒微混量、しまりやや弱、柱痕跡？
3　暗黄褐色土　ロームブロック少混
4　黒褐色土　　2より黒味弱い、ローム粒少混、炭化物粒・φ20㎜ロームブロック微混
5　黒褐色土　　ローム粒・炭化物粒微混、しまりやや弱
6　暗黄褐色土　φ10㎜ロームブロック多混、ローム粒少混

(3)SK015



(3)SK015
1　黒褐色土　　ロームブロック少混、黄褐色土やや多混
2　暗黄褐色土　ローム粒微混、しまり極めて強
3　暗褐色土　　φ10㎜ロームブロック少混
4　黄褐色土　　しまり極めて強

(3)SH018



(3)SH018
1　暗褐色土　ローム粒・炭化物粒微混、しまり強
2　黒褐色土　φ5㎜ローム粒少混
3　暗褐色土　しまり強

0　(1:40)　1m

第131図　(3)SK004・005・010・014・015土坑、(3)SH013・018ピット

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(15)SK105（第129図、図版10）

状況　径70cm～80cmの不整円形土坑と径60cm ～ 70cmの不整円形土坑が重なり合った状況である。土層観察から南西側の大きい土坑が新しい。ただし深さは両方ともほぼ同じで10cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(15)SK106（第129・130図、図版11・67・96）

状況　長軸長207cm、短軸長118cmの不整形を呈する。断面皿状であるが北西側が最も深くなるよう傾斜し、底面も平坦ではない。

出土遺物　７は黒浜式の深鉢胴部である。８は諸磯式の深鉢胴部である。９・10は堀之内式の深鉢口縁部である。11は打製石斧である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(15)SK108（第129図、図版11）

状況　径94cm～104cmの不整円形を呈する。断面皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。深さは10cmと浅い。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK004（第131・133図、図版11・68）

状況　長軸長195cm、短軸長96cmの楕円形に近い不整円形を呈する。中央部がピット状を呈して最も深く、そこに向かって両側から底面が急傾斜している。深さは最深で44cmを測る。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。１は縄文施文のみの土器で判断が難しいが、後期と思われる深鉢胴部である。

時期　出土遺物から後期と思われる。

(3)SK005（第131・133図、図版68）

状況　東西長138cm、南北長112cmの不整円形を呈する。底面にはさらにピット状の掘込みが複数認められるが、人為的なものかどうかは不明である。深さは最深で52cmを測る。１～３層と４層とは別遺構である可能性がある。

出土遺物　２は堀之内式の深鉢口縁部、３～６は胴部である。７・８は径が復元できる底部で、堀之内式であろう。

時期　主たる出土遺物は堀之内式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK010（第131・133図、図版11・68）

状況　東西長100cm、南北長105cmの不整円形を呈する。断面椀形で、深さは22cmである。

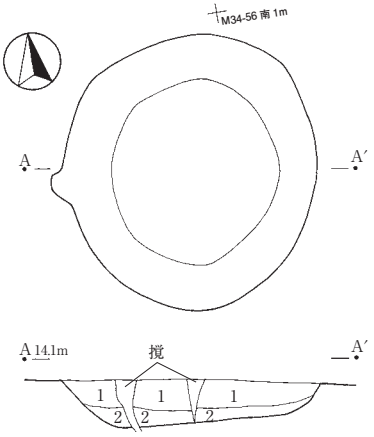
出土遺物　10は堀之内式の深鉢口縁部、11・12は胴部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH013（第131・133図、図版68）

状況　長軸長76cm、短軸長55cmの不整円形を呈する。直径約50cm、深さ81cmの円形ピットの北西側に、ほぼ同じ径で深さ38cmのピットが重なっているような状況である。土層図中の２層は柱痕跡の可能性がある。

(3)SK019

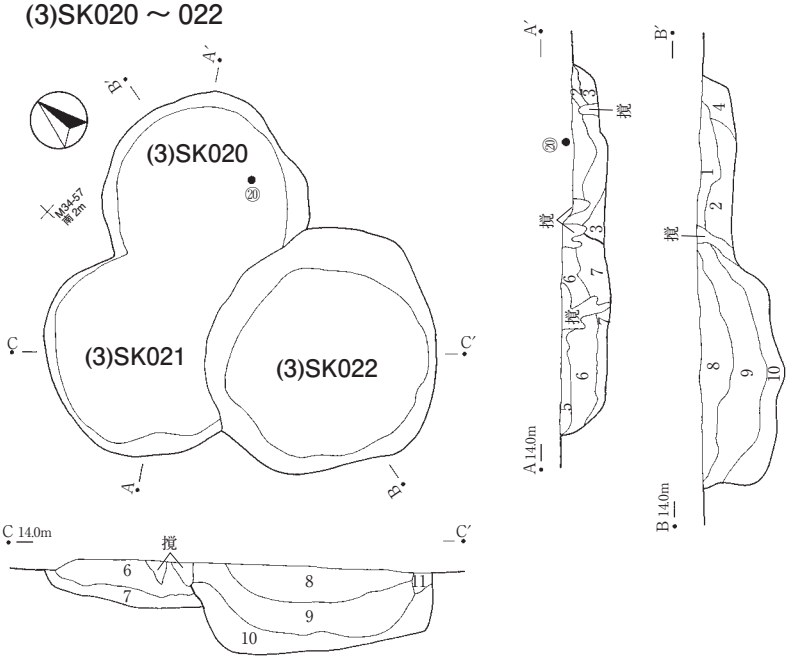


(3)SK019

1　暗褐色土　　ローム粒少混

2　暗黄褐色土　ローム粒・炭化物粒微混、しまり強、粘性強

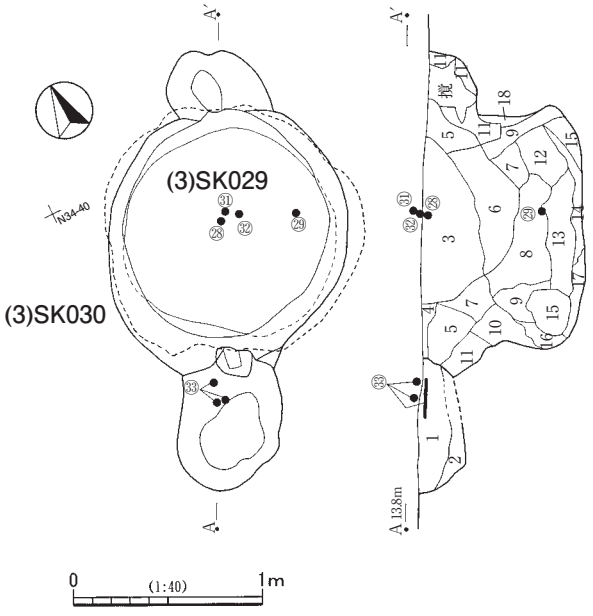
(3)SK020 ～ 022



(3)SK020 ～ 022

1(SK020)	暗褐色土	ローム粒多混、黒色土微混、しまりやや弱
2(SK020)	暗褐色土	ローム粒・φ5㎜焼土粒微混、しまりやや弱
3(SK020)	暗褐色土	褐色土斑状、しまり極めて強、粘性やや強
4(SK020)	黄褐色土	ローム粒主体、しまり極めて強
5(SK021)	暗褐色土	色調かなり明るい、黄褐色土との混土
6(SK021)	黄褐色土	φ2㎜のローム粒多混、粒子粗、しまり強
7(SK021)	暗黄褐色土	しまり強、粘性やや強
8(SK022)	暗褐色土	φ～5㎜ローム粒・焼土粒少混、しまり強
9(SK022)	黒褐色土	φ～5㎜ロームブロック少混、焼土粒微混、しまり強
10(SK022)	暗褐色粘質土	φ5㎜ロームブロック少混、しまり強
11(SK022)	黄褐色土	暗褐色土少混、しまり強

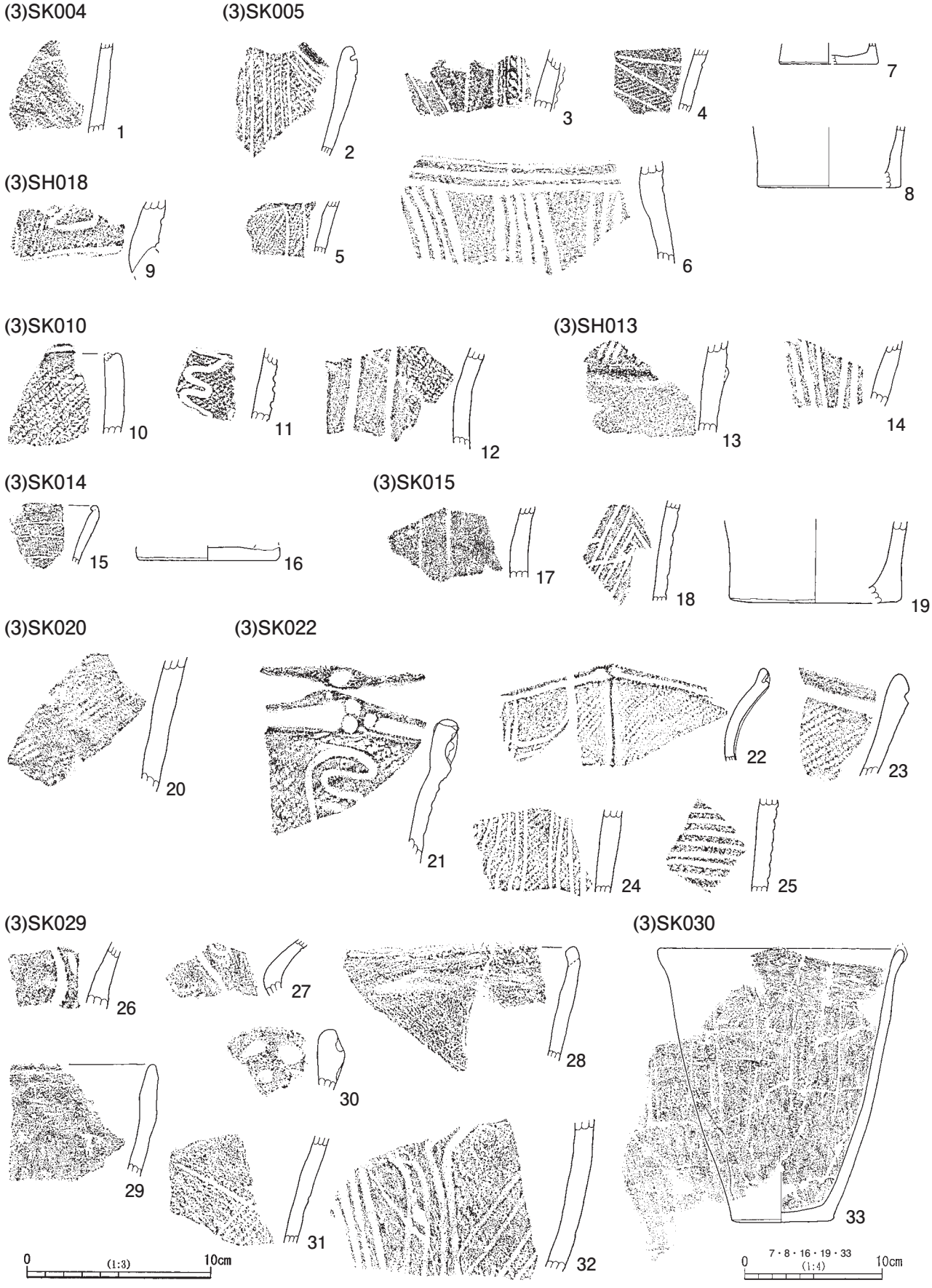
(3)SK029・030



(3)SK029・030

1(SK030)	暗褐色土	ローム粒多混、粒子粗、しまり弱
2(SK030)	暗黄褐色土	ローム粒主体、暗褐色土混、しまりやや強
3(SK029)	暗褐色土	φ10㎜ロームブロック少混、ローム粒微混
4(SK029)	暗褐色土	φ5㎜ローム粒やや多混、しまりやや強
5(SK029)	暗褐色土	4より色調明るい、φ5㎜ローム粒やや多混
6(SK029)	黒褐色土	ローム粒散在、炭化物粒少混
7(SK029)	黒褐色土	ローム粒多混
8(SK029)	黒褐色土	φ5㎜ローム粒少混
9(SK029)	黒褐色土	黄褐色土多混
10(SK029)	暗褐色土＋黄褐色土	ローム粒多混
11(SK029)	黄褐色土	焼土粒微混
12(SK029)	黒色土	φ5㎜ローム粒やや多混、φ30㎜黄褐色土混（斑状）
13(SK029)	黒色土	φ5㎜ローム粒多混
14(SK029)	暗褐色土	炭化物粒・ロームブロック多混（斑状）、しまり弱
15(SK029)	暗黄褐色土	ローム粒主体、ブロック状堆積、しまり弱、壁崩落土
16(SK029)	黒色土	オーバーハング下部の初期堆積土
17(SK029)	黒色土	炭化したように漆黒、底面南半に広がる、オーバーハング下部の最下部堆積層
18(SK029)	暗黄褐色土	ソフトローム主体、しまり弱、壁初期崩落

第 132 図　(3)SK019 ～ 022・029・030 土坑



第 133 図　(3)SK004・005・010・014・015・020・022・029・030 土坑、(3)SH013・018 ピット出土遺物

出土遺物　13・14は堀之内式の胴部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK014（第131・133図、図版68）

状況　長軸長65cm、短軸長44cmの不整形を呈する。底面は安定せず、南西部は一段深く掘り込まれている。深さは22cmである。

出土遺物　15は堀之内式の深鉢口縁部、16は底部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK015（第131・133図、図版68）

状況　東西長60cm、南北長55cmの不整円形を呈する。平面図では分からないが、東側が深く掘り込まれている。深さは最深で25cmを測る。

出土遺物　17・18は堀之内式の深鉢胴部、19は底部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH018（第131・133図、図版68）

状況　開口部は径45cmの不整円形を呈するが、坑底は隅丸方形に近い。断面逆台形で深さは60cmを測る。柱穴状であるが、柱痕跡があるか確認できていない。

出土遺物　９は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK019（第132図、図版11）

状況　直径135cmのほぼ正円形を呈する。断面皿状であるが、底面は東から西に向かってわずかに下り傾斜する。深さは最深で25cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK020～022（第132・133図、図版11・68）

状況　３基の円形土坑が重なった状況である。(3)SK020・021は直径110cm、(3)SK022は120cm～130cmのほぼ正円形を呈する。断面はいずれも皿状で、中心部に向かって緩やかに窪む。深さは(3)SK020が20cm、(3)SK021が26cm、(3)SK022が45cmである。土層断面の観察から新旧関係も把握されており、(3)SK020→021→022の順に構築されたと判断される。

出土遺物　(3)SK020出土遺物のうち図示できる遺物は１点のみである。20は後期と思われる深鉢胴部である。(3)SK021からは図示できる遺物は出土しなかった。(3)SK022出土遺物では、21 ～ 23は堀之内式の深鉢口縁部、24・25は胴部である。

時期　３基の中で最も新しい(3)SK022は出土遺物から堀之内式期と考えられる。他の２基は出土遺物からの判断は難しいが、(3)SK022より古いものの大きく遡ることはないと考えられる。

(3)SK029・030（第132・133図、図版67・68）

状況　２基の土坑が重なっている。(3)SK029は長軸長140cm、短軸長130cmの正円形に近い不整円形を呈する。北東側に張出し部分があり、土層観察から一体のものと考えられる。坑底は直径約110cmの円形であるが、壁の途中には開口部や坑底よりも張り出した部分もあり、断面はいわゆるフラスコ状を呈する。深さは88cmである。(3)SK030は(3)SK029の南西側に接する。長軸長72cm、短軸長54cmの不整円形を呈す

る。底面は南西側が最も深くなるよう傾斜しており、最深で25cmを測る。土層観察から(3)SK029が古く(3)SK030が新しい。なお、両者が接する部分の(3)SK029側には小さな段状の掘込みがあるが、これは北東側と同様の張出しであった可能性がある。

出土遺物　(3)SK029出土資料のうち、26・27は称名寺式の深鉢胴部である。28 ～ 30は堀之内式の深鉢口縁部、31・32は胴部である。(3)SK030出土の33は堀之内式の器形復元ができる深鉢である。

時期　いずれも主たる出土遺物は堀之内式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK023（第134・136図、図版11・68）

状況　長軸長112cm、短軸長55cmの不整円形を呈する。北側は円筒形で柱穴状といえるが、南側は平面・断面とも不安定な形状で人為的なものか疑わしい。深さは最深で58cmを測る。

出土遺物　１・２は堀之内式の深鉢口縁部、３・４は胴部、５は底部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK024（第134・136図、図版11・68）

状況　東西長・南北長とも80cmの不整円形を呈する。断面逆台形で深さは38cmである。平面形状では分からないが、土層断面からは１層と２層で別遺構となる可能性も指摘できよう。

出土遺物　６・７は堀之内式の深鉢口縁部、８は底部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH025（第134図）

状況　開口部は径50cm ～ 55cmの不整円形を呈するが、坑底は不整形でかなり不安定である。しかし土層断面では柱痕跡と思われる土層が確認でき、柱穴と考えられる。深さは45cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

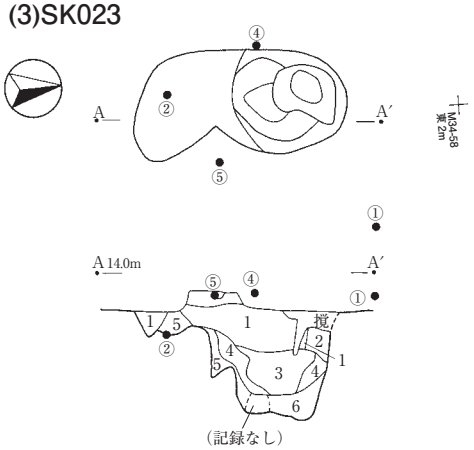
時期　細別時期は不明である。

(3)SK040～044（第134・136図、図版68）

状況　(3)SK040～043が南北に連結したような状況で検出され、(3)SK043の西側に(3)SK044が接している。(3)SK040～043の南北長は298cm、東西長は(3)SK040で113cm、(3)SK041で120cm、(3)SK042で110cm、(3)SK043で113cmとなる。043と044の東西長は180cm、044の南北長は79cmである。表面観察からは各遺構の境界を判別するのは不可能であるが、土層観察によって分別は可能である。よって掘上がりの状態と土層から、概ね(3)SK040は径約120cmの不整円形、(3)SK041は南北長約100cmの不整方形、(3)SK042は中心に存在する深いピットを中心とした径約70cmの円形、(3)SK043は径約100cmの不整円形、(3)SK044は径約90cmの不整円形と推測される。深さは最深で(3)SK040が60cm、(3)SK041が36cm、(3)SK042の中心ピットが114cm、(3)SK043が28cm、(3)SK044が34cmである。新旧関係は土層観察を根拠として、(3)SK041→042→043→040→044と判断される。なお、(3)SK040と(3)SK041の境に径約40cm、深さ約55cmの２基のピットが対になるように掘られているが、これらの帰属がどちらなのか（あるいは独立したものなのか）は明らかではない。

出土遺物　いずれの土坑からも出土遺物は少なかった。(3)SK040の９は黒浜式の深鉢胴部である。10は称名寺式の深鉢胴部である。(3)SK041の11は堀之内式の深鉢口縁部、12・13は胴部である。(3)SK042からは図示できる遺物は出土しなかった。(3)SK043の14は堀之内式の深鉢口縁部、15は胴部である。(3)SK044の16 ～ 19は堀之内式の深鉢口縁部である。16は沈線区画内を刺突で充填しており、三十稲場式土器の影響

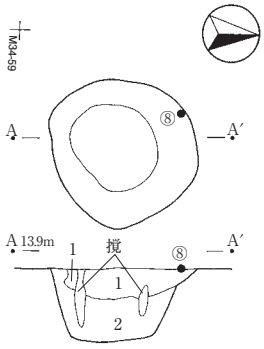
(3)SK023



(3)SK023

1	暗黄褐色土	ローム粒少混、しまり極めて強
2	黄褐色土	φ5㎜ローム粒多混
3	暗褐色土	炭化物粒・ローム粒やや多混、焼土粒微混、しまり強
4	暗黄褐色土	ローム粒多混、黒色土粒少混
5	黄褐色土	黄色味の強いローム粒多混
6	黄褐色粘質土	地山に似るが、炭化物粒が混入、しまり強

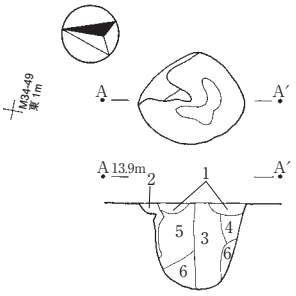
(3)SK024



(3)SK024

1	暗褐色土	炭化物粒やや多混、しまりやや弱
2	黄褐色土	ロームブロック多混、炭化物粒・ローム粒少混、しまり強

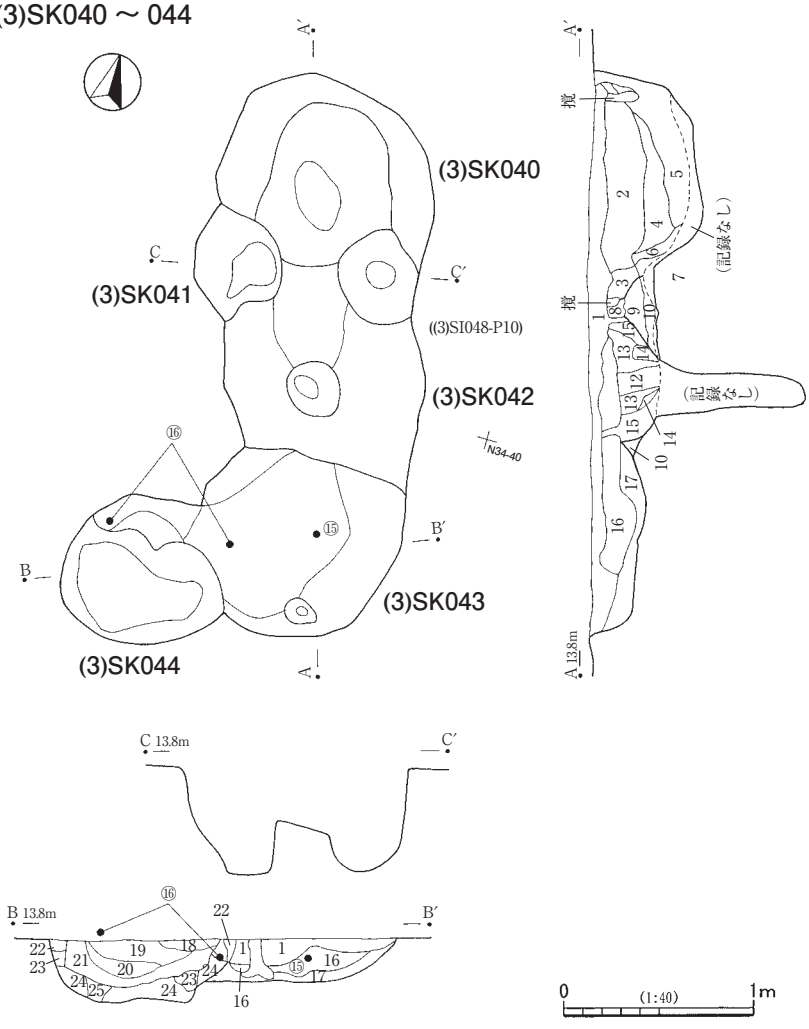
(3)SH025



(3)SH025

1	暗褐色土	ローム粒微混、しまりやや弱
2	黄褐色土	ローム粒微混、しまりやや強
3	暗褐色土	ローム粒・炭化物粒やや多混、しまりやや弱、柱痕跡？
4	暗褐色土	ローム粒微混、しまり極めて強
5	黄褐色土	ローム粒多混、しまりやや弱
6	暗黄褐色土	φ5㎜ロームブロックやや多混、炭化物粒少混

(3)SK040 ～ 044

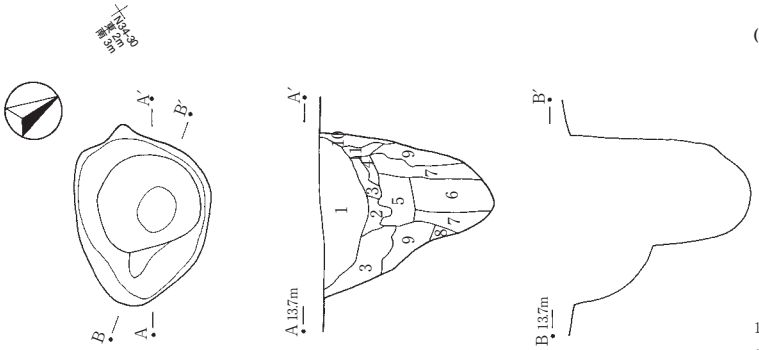


(3)SK040 ～ 044

1(SK040)	暗黄褐色土	φ5㎜黄褐色土やや多混（斑状）、しまり強
2(SK040)	暗褐色土	黒褐色土斑状、ローム粒微混
3(SK040)	暗褐色土	ローム粒多混、しまりやや弱
4(SK040)	暗褐色土	黄褐色土多混、ローム粒少混、しまり強
5(SK040)	暗黄褐色土	φ～5㎜ロームブロック微混、しまり強
6(SK040)	暗黄褐色土	5～7中最も黄色味が強い、ローム粒多混、しまり強
7(SK040)	暗黄褐色土	ローム粒多混
8(SK041)	暗褐色土	ローム粒やや多混、しまりやや弱
9(SK041)	暗褐色土＋黄褐色土	ローム粒多混、しまりやや弱
10(SK041)	暗黄褐色土	φ5㎜ロームブロックやや多混、しまり弱
11(SK042)	暗褐色土	褐色土少混、しまり弱
12(SK042)	黒褐色土	褐色土斑状に少混、しまり強
13(SK042)	黒褐色土	12より色調やや明るい、ローム粒やや多混、しまり強
14(SK042)	暗褐色土＋褐色土	斑状に半々くらい混
15(SK042)	黒褐色土＋黄褐色土	斑状、しまり弱
16(SK043)	暗褐色土	ローム粒少混
17(SK043)	黄褐色土	ローム粒少混、しまり強
18(SK044)	黒褐色土	ローム粒微混、しまり強
19(SK044)	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒微混、しまり強
20(SK044)	暗褐色土	ローム粒やや多混
21(SK044)	暗褐色土	黄褐色土との混土、しまり強
22(SK044)	黄褐色土	暗褐色土混
23(SK044)	暗黄褐色土	暗褐色土と黄褐色土半々くらい混、ローム粒多混、しまり弱
24(SK044)	黄褐色土	ソフトローム主体、φ2～3㎜ローム粒少混、しまりやや弱
25(SK044)	暗褐色土	粒子細、しまりやや弱

第 134 図　(3)SK023・024・040 ～ 044 土坑、(3)SH025 ピット

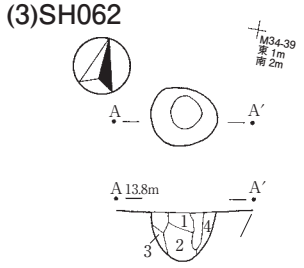
(3)SH047



(3)SH047

1　暗褐色土　ローム粒やや多混
2　暗褐色土　φ5㎜ローム粒少混
3　褐色土　φ10㎜ロームブロック少混
4　暗褐色土　2に類似
5　黒褐色土　ローム粒・炭化物粒・焼土粒微混、粒子粗、しまり弱、柱痕跡？
6　黒褐色土　ローム粒・炭化物粒多混、粒子粗、しまり弱、柱痕跡？
7　暗褐色土　ローム粒少混、しまり弱
8　暗黄褐色土　ローム粒多混、粒子粗、しまり弱
9　褐色土　ローム粒多混、粒子粗、しまり弱
10　黄褐色土　ローム粒多混、粒子緻密
11　黄褐色土　ローム粒多混、φ5㎜ロームブロック少混

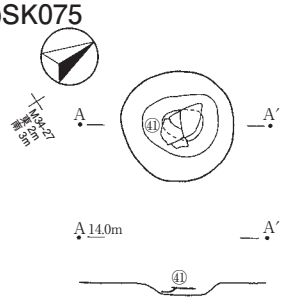
(3)SH062



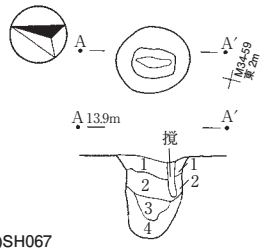
(3)SH062

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり強
2　暗褐色土　粒子緻密、しまり強、柱痕跡？
3　黒褐色土　粒子粗、しまり強
4　黄褐色土＋暗褐色土　斑状、しまり強

(3)SK075



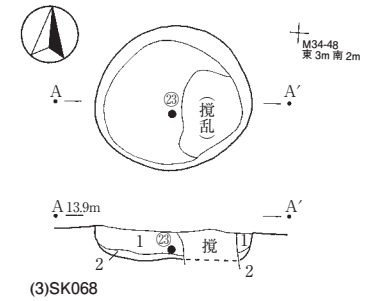
(3)SH067



(3)SH067

1　暗黄褐色土　ローム粒やや多混、しまり強
2　暗褐色土　ローム粒多混、焼土粒微混、しまり強
3　黄褐色土　φ5㎜ロームブロック少混、しまりやや弱
4　暗黄褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや弱

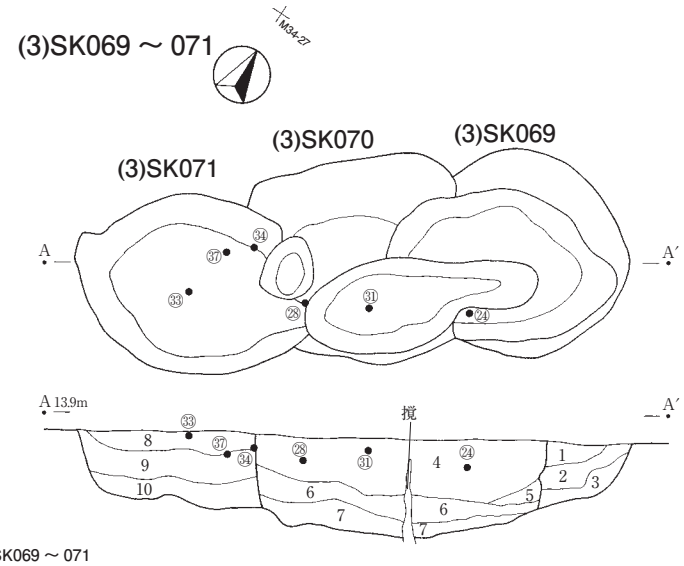
(3)SK068



(3)SK068

1　暗褐色土　ローム粒少混、黒色土粒微混、しまり強
2　黄褐色土　φ10㎜ロームブロック多混、しまり強

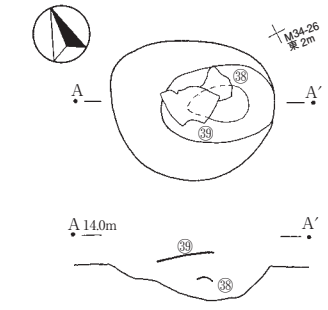
(3)SK069 ～ 071

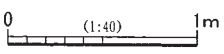


(3)SK069 ～ 071

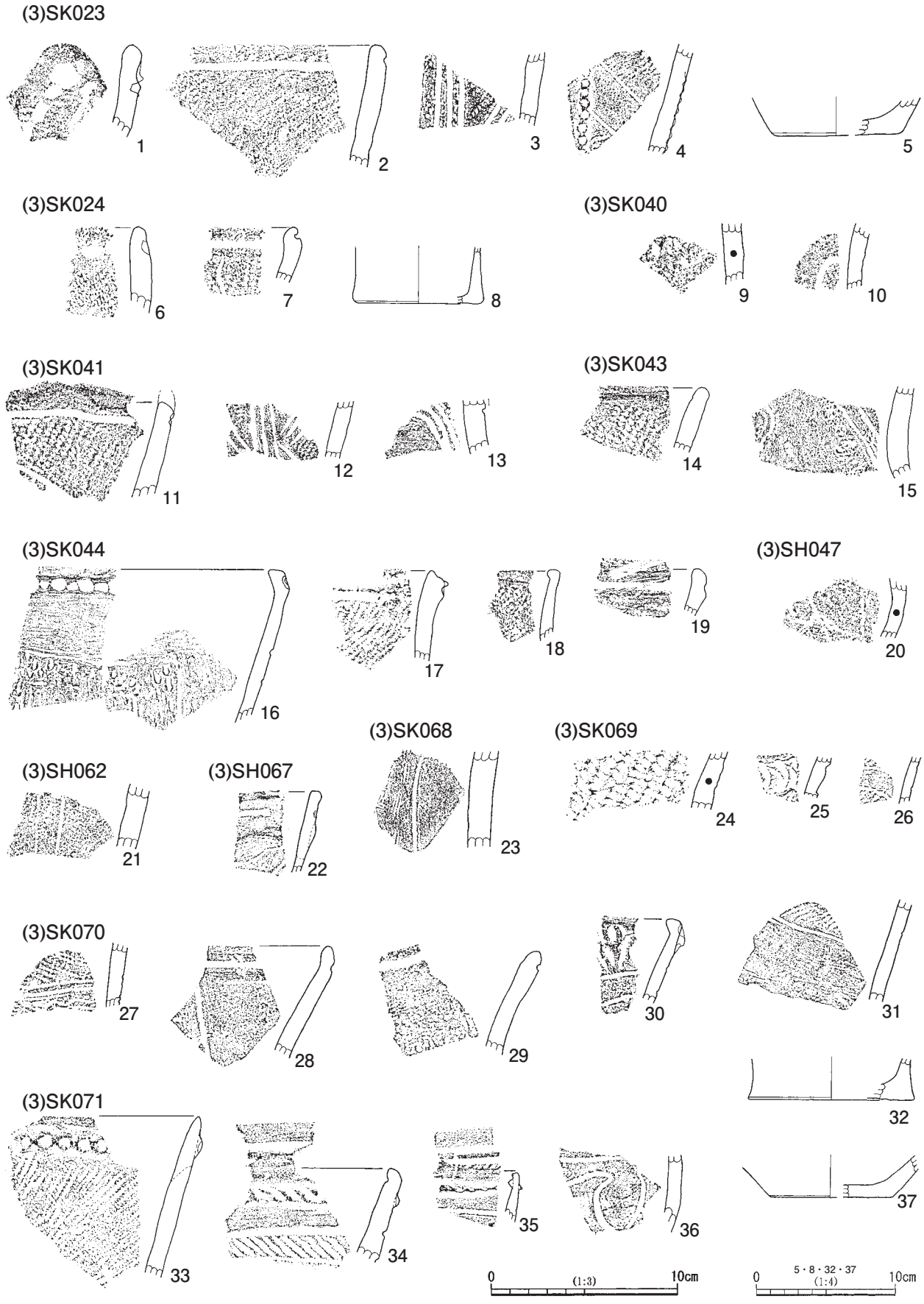
1(SK069)　暗褐色土　φ5㎜ローム粒少混、しまり強
2(SK069)　褐色土　φ30㎜ロームブロック微混、しまり強
3(SK069)　黄褐色土　φ10㎜ロームブロック多混、しまり強
4(SK070)　暗褐色土　φ5㎜ローム粒やや多混、焼土粒少混、しまり強
5(SK070)　暗褐色土　1より色調やや暗い、φ5㎜ローム粒やや多混、しまりやや弱
6(SK070)　黒褐色土　黒色土粒少混、しまりやや弱
7(SK070)　暗黄褐色土　φ10㎜ロームブロック少混、しまり強
8(SK071)　暗褐色土　炭化物粒微混、しまり強
9(SK071)　極暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや弱
10(SK071)　暗褐色土　しまり強、粘性やや強

(3)SK074



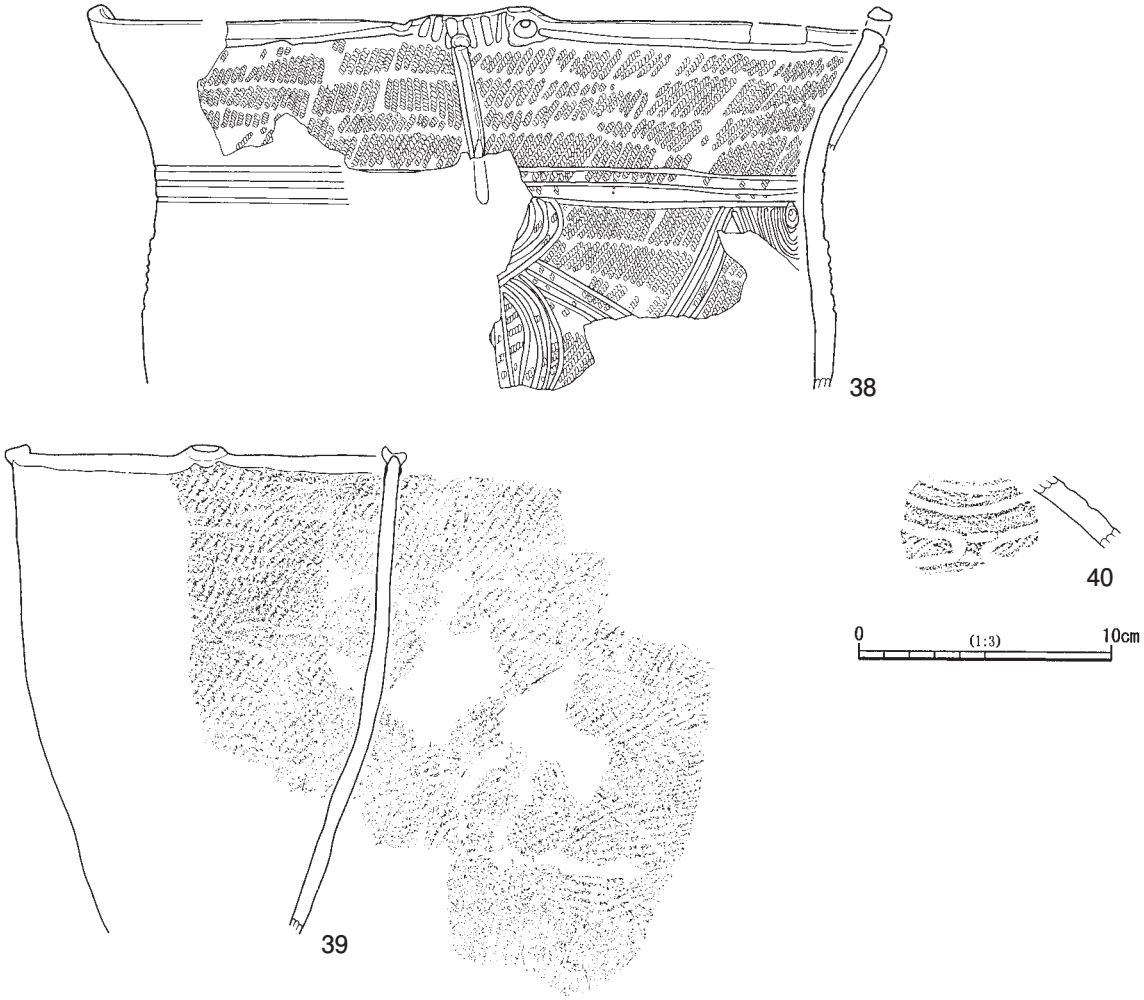


第135図　(3)SK068 ～ 071・074・075土坑、(3)SH047・062・067ピット

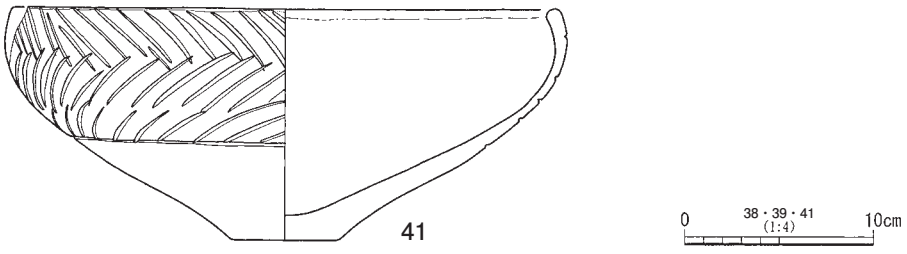


第 136 図　(3)SK023・024・040・041・043・044・068 ～ 071 土坑、(3)SH047・062・067 ピット出土遺物

(3)SK074



(3)SK075



第 137 図　(3)SK074・075 土坑出土遺物

かもしれない。

時期　最も古い(3)SK041と新しい(3)SK044のいずれも主体となるのは堀之内式であり、遺構群は堀之内式期と考えられる。

(3)SH047（第135・136図、図版68）

状況　長軸長95㎝、短軸長70㎝の不整円形を呈する。断面は漏斗状で丸底になっているが中間から下は壁がほぼ垂直に立ち上がるため、開口部南東側は崩落して広がったかもしれない。深さは92㎝を測る。土層観察では柱痕跡と思われる土層が検出されており、柱穴だったと思われる。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。20は黒浜式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(3)SH062（第135・136図、図版68）

状況　径30cm～34cmの楕円形を呈する。断面は椀形で丸底になっており、深さは25cmを測る。浅いが柱痕跡と思われる土層が認められ、柱穴と考えられる。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。21は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SH067（第135・136図、図版68）

状況　開口部は径35cm～40cmの楕円形を呈するが、坑底は長軸長20cm、短軸長６cmの紡錘形を呈する。断面椀形で丸底となり、深さは43cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。22は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK068（第135・136図、図版68）

状況　径76cm～82cmの楕円形を呈する。断面皿状で壁の立ち上がりは緩やかである。深さは15cmと浅い。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。23は称名寺式と思われる深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。

(3)SK069～071（第135・136図、図版12・69）

状況　３基の土坑が重なり合った状況である。全体の長軸長は296cm、短軸長は(3)SK069・070が共に110cm、(3)SK071が95cmである。形状はいずれも不整円形と思われるが、各遺構の境界が不明確なため断定できない。(3)SK070の南東部には更に長軸長125cm、短軸長50cmの不整形を呈する掘込みが存在するが、これが(3)SK070と同一か別遺構かは不明である。深さは(3)SK069が36cm、(3)SK070が52cm、(3)SK071は41cmである。新旧関係は(3)SK069・071が古く(3)SK070が新しい。

出土遺物　(3)SK069出土遺物では、24は黒浜式の深鉢胴部である。25は浮島式の深鉢胴部である。26は堀之内式の胴部である。(3)SK070では27は諸磯式の深鉢胴部である。28 ～ 30は堀之内式の深鉢口縁部、31は胴部、32は底部である。(3)SK071では33～35は堀之内式の口縁部、36は胴部、37は底部である。

時期　(3)SK069が前期主体であるものの、他の２基で主体となるのは堀之内式であり、３基とも時期の隔たりは少ないと考えられることから、遺構群は堀之内式期と考えられる。

(3)SK074（第135・137図、図版12・69）

状況　長軸長88cm、短軸長72cmの不整円形を呈する。断面は皿状を呈するが、南東部が最も深く北西壁が段状に傾斜する。深さは18cmである。

出土遺物　38・39は堀之内式の器形復元できる深鉢である。40は堀之内式の鉢もしくは注口土器の胴部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

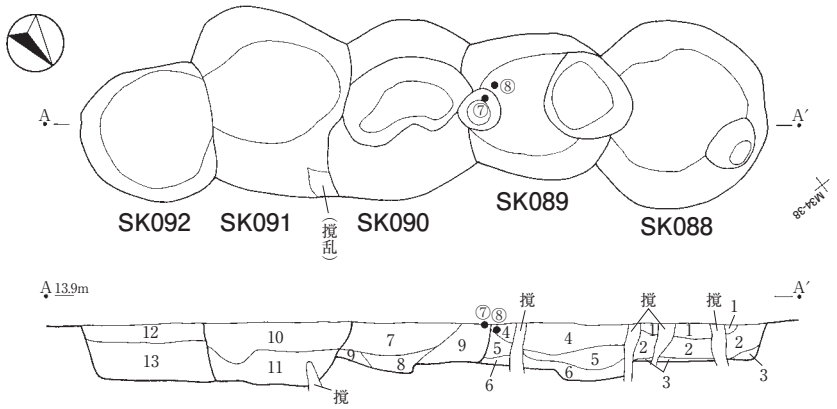
(3)SK075（第135・137図、図版69）

状況　直径60cmのほぼ正円形を呈する。断面皿状で深さは６cmとごく浅い。

出土遺物　41は加曽利Ｂ式の浅鉢である。

時期　出土遺物から加曽利Ｂ式期と考えられる。

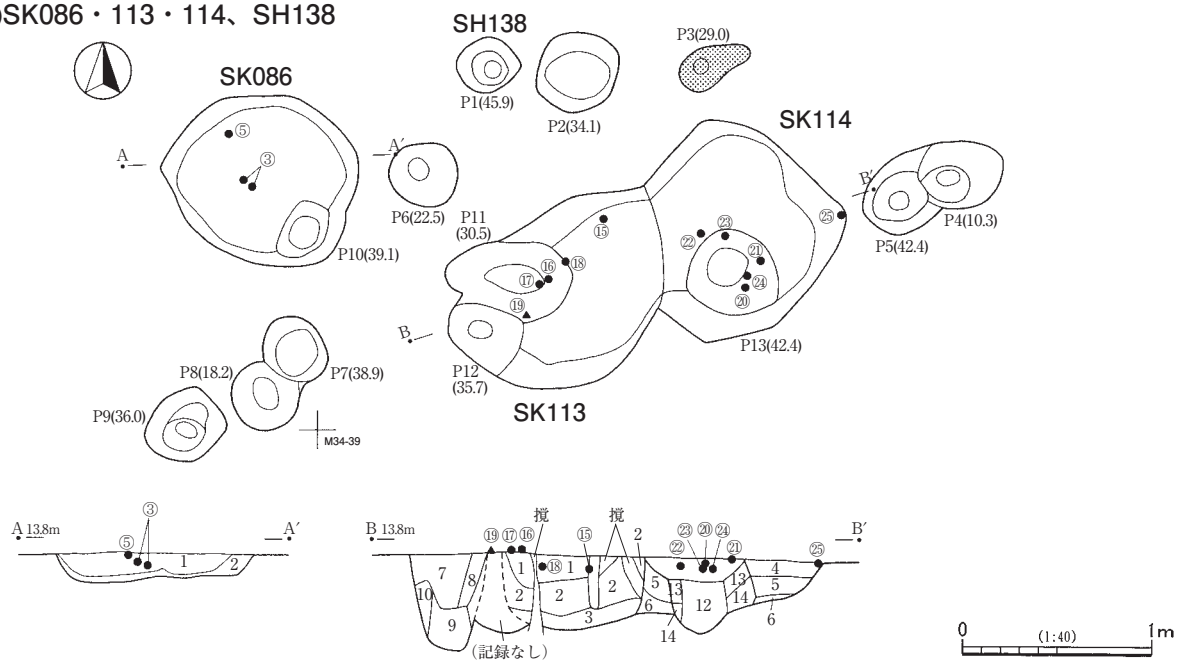
(3)SK088 ～ 092



(3)SK088 ～ 092

1(SK088)　暗褐色土　　ローム粒多混、しまり強
2(SK088)　暗褐色土　　1より色調暗い、黒色土粒少混、しまり強
3(SK088)　暗黄褐色土　ロームブロック混、しまり強
4(SK089)　暗褐色土　　ローム粒少混、しまり強
5(SK089)　暗褐色土　　黄褐色土少混（斑状）、しまりやや弱
6(SK089)　黄褐色土　　ローム粒少混、しまり強
7(SK090)　暗褐色土　　ローム粒少混、しまり強
8(SK090)　暗黄褐色土　黄褐色土混、しまり強
9(SK090)　黄褐色土　　黒色土粒少混
10(SK091)　暗褐色土　　φ10㎜ロームブロック少混、しまり強
11(SK091)　暗黄褐色土　φ10㎜ロームブロック微混、しまり強
12(SK092)　暗黄褐色土　ローム粒少混、しまり強
13(SK092)　黄褐色土　　φ5㎜ローム粒多混、しまり強

(3)SK086・113・114、SH138



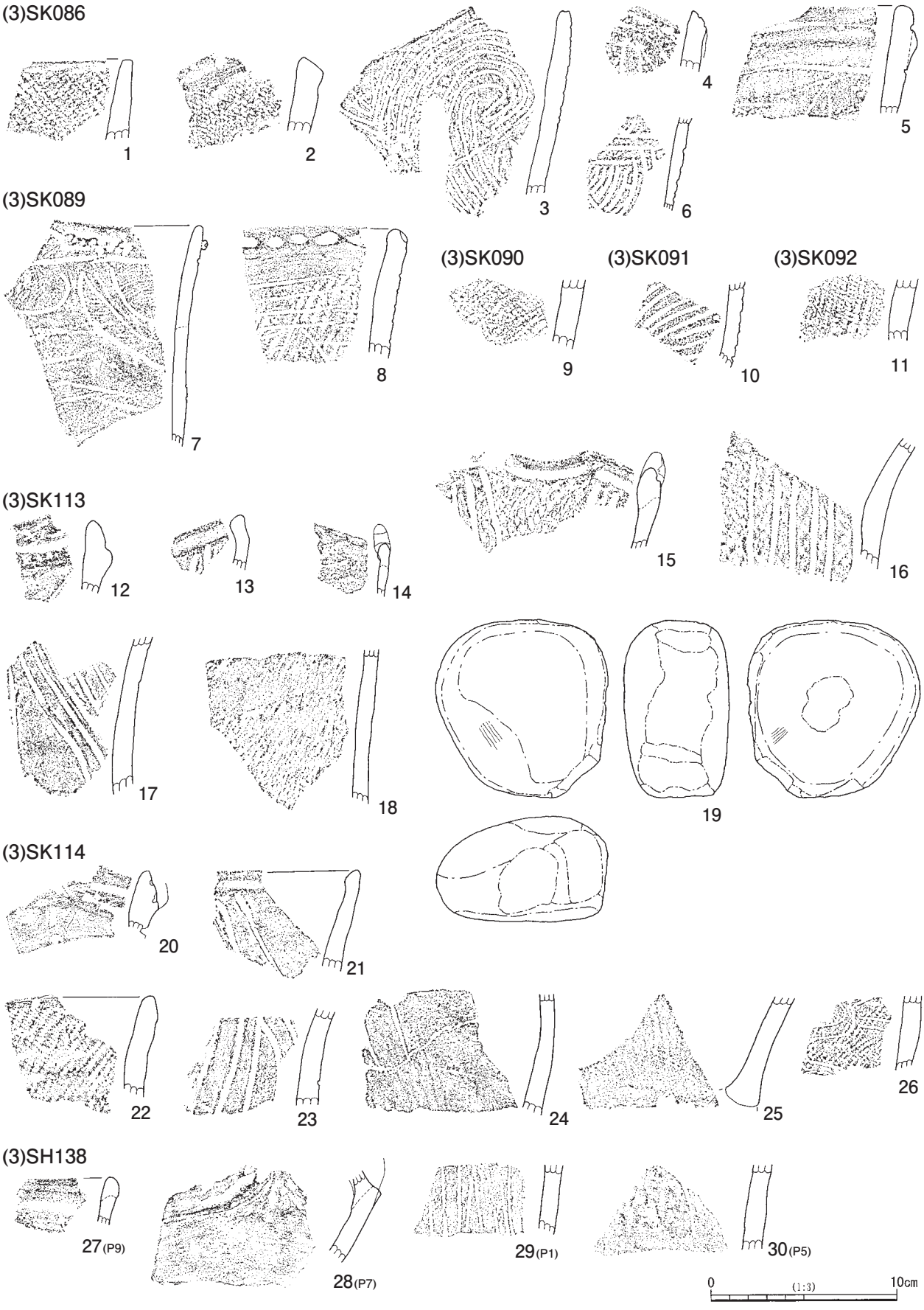
(3)SK086

1　暗褐色土　φ5㎜炭化物粒・ロームブロック少混
2　黄褐色土　暗褐色土斑状

(3)SK113・114、SH138

1(SK113)　暗褐色土　　φ5㎜ローム粒・炭化物粒やや多混、しまり強
2(SK113)　褐色土　　φ5㎜炭化物粒微混、しまり強
3(SK113)　黄褐色土　　ローム粒微混、しまり弱
4(SK114)　暗黄褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや弱
5(SK114)　黄褐色土　　暗褐色土混、しまり強
6(SK114)　黄褐色土　　ロームブロック多混、しまり強
7(SH138-P12)　暗褐色土　　ローム粒少混（散在）、炭化物粒微混、しまり強
8(SH138-P12)　暗褐色土　　1より黄色味強い、しまり強
9(SH138-P12)　暗黄褐色土　φ20㎜黄褐色土多混（斑状）、しまり弱
10(SH138-P12)　黄褐色土　　暗褐色土少混、しまり強
11(SH138-P13)　暗褐色土　　ローム粒微混、しまり強
12(SH138-P13)　暗褐色土　　1より黒味強い、ローム粒やや多混、しまり強、柱痕跡？
13(SH138-P13)　暗褐色土　　φ5㎜ローム粒多混、しまりやや強
14(SH138-P13)　暗黄褐色土　ローム粒散在、しまり弱

第138図　(3)SK086・088 ～ 092・113・114土坑、(3)SH138ピット群



第 139 図　(3)SK086・089 ～ 092・113・114 土坑、(3)SH138 ピット群出土遺物

(3)SK086（第138・139図、図版69）

状況　東西長106cm、南北長90cmの不整円形を呈する。断面皿状を呈し床面は平坦で、深さは16cmである。南東部には(3)SH138ピット群のP10が存在するが、新旧関係は不明である。

出土遺物　１～５は堀之内式の深鉢口縁部、６は胴部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK088～092（第138・139図、図版69）

状況　５基の土坑が一直線に連結されたような状況である。全長は365cm、短軸長は(3)SK088が100cm、(3)SK089が78cm、(3)SK090が95cm、(3)SK091が97cm、(3)SK092が72cmである。形状は(3)SK088が正円形で他は不整円形と推測される。(3)SK088・(3)SK089の坑底にはさらにピット状の掘込みが存在し、土層観察から土坑に伴うものと判断される。深さは(3)SK088が20cm、(3)SK089が30cm、(3)SK090が26cm、(3)SK091が33cm、(3)SK092が30cmである。新旧関係は古い順に(3)SK088→089→090・092→091となる。

出土遺物　(3)SK088からは図示できる遺物が出土しなかった。(3)SK089の７・８は堀之内式の深鉢口縁部である。(3)SK090の９と(3)SK092の11は後期と思われる深鉢胴部である。(3)SK091の10は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　全体に遺物の数量が少ないため判断が難しいが、全て堀之内式期と思われる。

(3)SK113・114（第138・139図、図版70・97）

状況　２基の土坑が連結したような状況である。両者あわせた長軸長は220cm、短軸長は(3)SK113が91cm、(3)SK114が112cmで、形状はいずれも不整形である。(3)SH138ピット群のP11・12・13が重複しており、全て(3)SK113・114より新しい。断面はいずれも椀形で、深さは(3)SK113が40cm、(3)SK114が30cmである。

出土遺物　(3)SK113出土遺物では、12～15は堀之内式の深鉢口縁部、16～18は胴部である。19は敲石で、熱を受けている。(3)SK114では20～22は堀之内式の口縁部、23～26は胴部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SH138（第138・139図、図版70）

状況　13基のピットから構成される。P3には焼土の堆積が認められる。竪穴住居跡の柱穴である可能性も考慮したが、配置が不自然なためピット群とした。P11～13は(3)SK113・114と重複しており、土坑より新しい。

出土遺物　出土したピットの番号は図中に記載した。27・28は堀之内式の深鉢口縁部、29・30は胴部である。

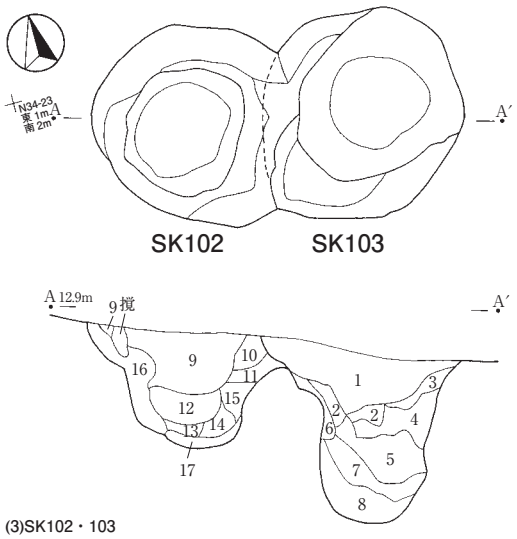
時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、遺物の出土がなかったピットも含めて堀之内式期と思われる。

(3)SK102・103（第140・143図、図版12・70）

状況　２基の土坑が連結したような状況である。(3)SK102は直径110cmのほぼ正円形、(3)SK103は東西長115cm、南北長110cmの不整円形を呈する。断面形状はいずれも開口部から漏斗状にすぼまり、中間から下は円筒形となって丸底の坑底へ至る。深さは(3)SK102が60cm、(3)SK103が87cmである。新旧関係は(3)SK102が古く(3)SK103が新しい。

出土遺物　図示できる遺物はいずれも１点のみである。(3)SK102の１は後期と思われる深鉢胴部である。(3)SK103の２は堀之内式の深鉢口縁部である。

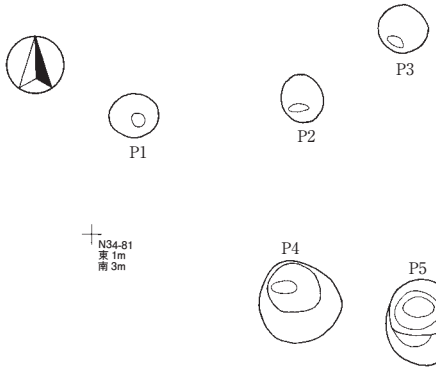
(3)SK102・103



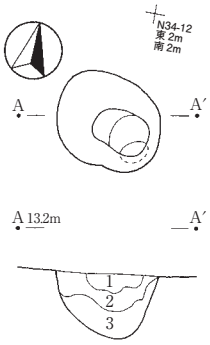
(3)SK102・103

1(SK102)　暗褐色土　褐色土多混（斑状）、焼土粒・ローム粒微混、しまり強
2(SK102)　黒褐色土　ローム粒少混、しまり強
3(SK102)　黒褐色土　2より色調明るい、褐色土斑状、しまり強
4(SK102)　暗褐色土　ローム粒やや多混、黄褐色土やや多混（斑状）、しまり強
5(SK102)　黒褐色土　φ5㎜ロームブロック微混、しまりやや強
6(SK102)　暗褐色土＋黄褐色土　ローム粒多混、しまりやや強
7(SK102)　黒色土　褐色土多混、しまり弱、粘性やや強
8(SK102)　褐色粘質土　φ10㎜ロームブロック多混、しまり弱
9(SK103)　褐色粘質土　ローム粒・黒色土粒やや多混、しまり強
10(SK103)　褐色粘質土　9より色調やや暗い、しまり強
11(SK103)　黒褐色土　ローム粒やや多混、黄褐色土混、しまり強
12(SK103)　黒色土　ローム粒少混、粒子密、しまり強
13(SK103)　黒色土　12より黒味強い、ローム粒やや多混、しまり強
14(SK103)　黒褐色土　12＋褐色土、しまり強
15(SK103)　暗黄褐色土　ローム粒微混、しまり強
16(SK103)　暗黄褐色土　φ5㎜ローム粒多混、しまり強
17(SK103)　褐色粘質土　黒色土やや混、しまり弱

(3)SH105



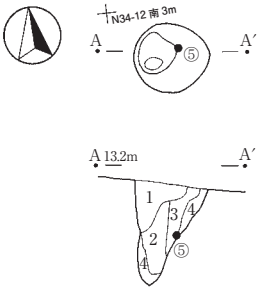
(3)SK110



(3)SK110

1　暗褐色土　φ10㎜黄褐色土少混（斑状）、しまりやや強
2　暗褐色土　φ10㎜黄褐色多混（斑状）、しまり弱
3　暗黄褐色土　黄褐色土主体、暗褐色土・褐色土混（斑状）、しまり弱

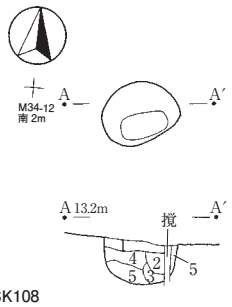
(3)SH109



(3)SH109

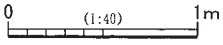
1　暗褐色土　黒色土粒少混、ローム粒微混、しまり弱
2　黒褐色土　φ5㎜ロームブロック少混、しまり弱、柱痕跡？
3　黒褐色土　ローム粒やや多混、黄褐色土少混（斑状）、しまり弱
4　黄褐色土　暗褐色土混（斑状）、しまりやや強

(3)SK108

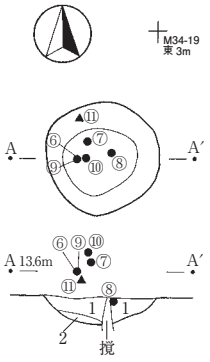


(3)SK108

1　褐色土　ローム粒やや多混、しまり弱
2　暗褐色土　褐色土混、しまり弱
3　暗褐色土　2より黒味やや強い、しまり弱
4　黄褐色土　暗褐色土混、しまり弱
5　黄褐色土　φ10㎜ロームブロック多混、しまり強



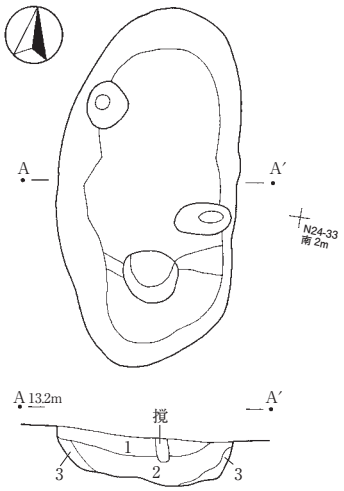
(3)SK112



(3)SK112

1　褐色土　ローム粒・炭化物粒微混
2　暗黄褐色土　黄褐色土少混（斑状）、しまり強

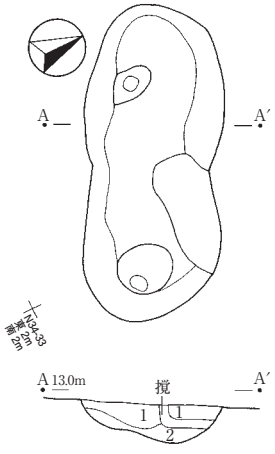
(3)SK106



(3)SK106

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや弱
2　褐色土　ローム粒やや多混、暗褐色土混（斑状）、しまりやや弱
3　黄褐色土＋暗褐色土　ローム粒多混、しまりやや弱

(3)SK107

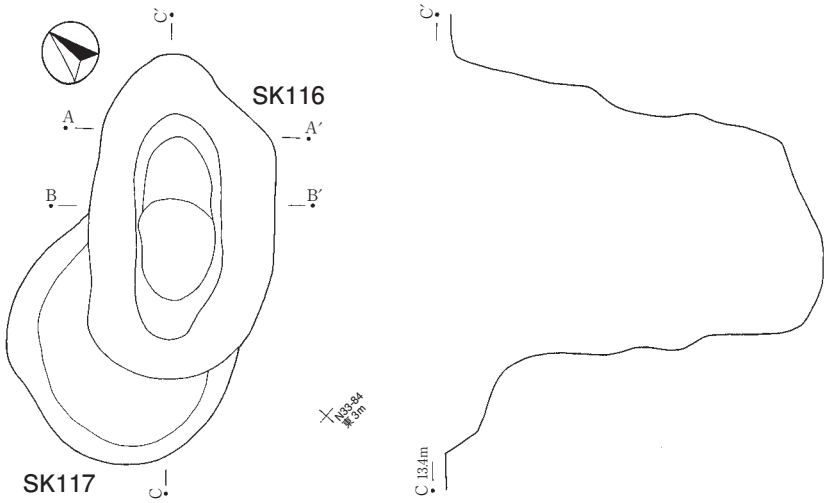


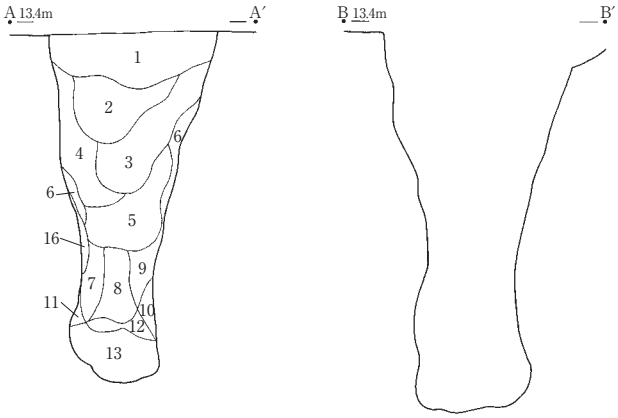
(3)SK107

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや弱
2　褐色土　ローム粒やや多混、暗褐色土混（斑状）、しまりやや弱
3　黄褐色土＋暗褐色土　ローム粒多混、しまりやや弱

第 140 図　(3)SK102・103・106 ～ 108・110・112 土坑、(3)SH105 ピット群、(3)SH109 ピット

(3)SK116・117

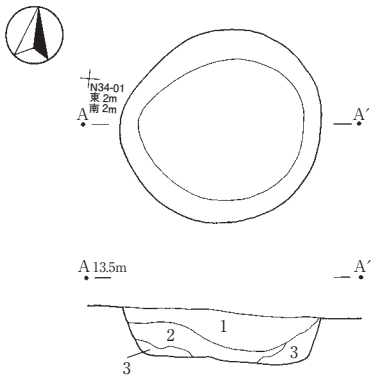




(3)SK116

1	暗褐色土	ローム粒多混、焼土粒微混、しまりやや強
2	暗褐色土	ローム粒やや多混、φ5㎜ロームブロック微混、しまりやや強
3	暗褐色土	ローム粒やや多混、φ10㎜ロームブロック微混、しまりやや強
4	暗褐色土	ローム粒多混、炭化物粒微混、しまり弱
5	黒褐色土	φ10㎜ロームブロック多混、しまり弱
6	褐色土	φ10㎜ロームブロック少混（やや粘質）、しまりやや強
7	暗褐色土	φ5㎜ローム粒多混、しまり弱
8	黒褐色土	φ10㎜ロームブロック多混、しまり弱
9	暗褐色土	青白色粘土多混（ブロック状）、しまり弱
10	青白色粘土	暗褐色土混、しまりやや強、粘質
11	黒褐色土	粒子粗、しまり弱
12	暗褐色土	φ10㎜ロームブロック少混、しまり弱
13	黒褐色土	

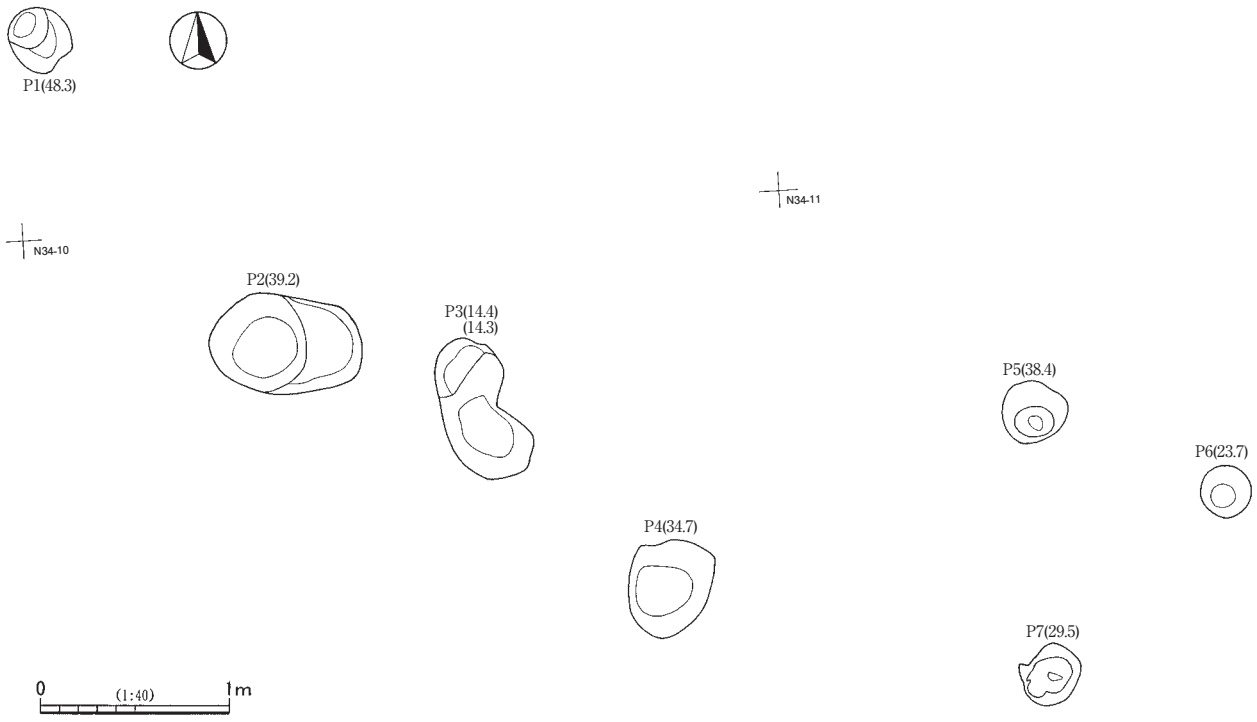
(3)SK119



(3)SK119

1	暗褐色土	ローム粒微混、しまり強
2	暗褐色土	φ5㎜ロームブロック少混、しまり強
3	褐色土	ローム粒やや多混、しまり強

(3)SH132



第 141 図　(3)SK116・117・119 土坑、(3)SH132 ピット群

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、両者とも堀之内式期と思われる。

(3)SH105（第140・143図、図版70）

状況　５基のピットから構成される。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。３はP1出土で堀之内式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK106（第140・143図、図版12・70）

状況　長軸長191cm、短軸長96cmの不整円形を呈する。断面皿状であるが底面はやや不安定で凹凸が見られる。深さは25cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。４は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK107（第140図、図版12）

状況　長軸長168cm、短軸長75cmの不整円形を呈する。断面不定形で底面は北東壁側が低くなっている。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SH108（第140図）

状況　長軸長40cm、短軸長30cmの不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり丸底である。深さは23cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SH109（第140・143図、図版70）

状況　径38cm～40cmのほぼ正円形であるが、断面は逆三角形を呈し、底は尖ったような形状となっている。柱痕跡らしい土層も観察される。深さは54cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。５は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK110（第140図）

状況　長軸長60cm、短軸長50cmの不整円形を呈する。断面椀形で丸底であり、深さは南東部のオーバーハングしている部分で46cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK112（第140・143図、図版69・70・95）

状況　径60cmのほぼ正円形を呈する。断面椀形で丸底であり、深さは15cmと浅い。確認面より上位の包含層中から多くの遺物が出土し、これらも当遺構に帰属するものと判断した。

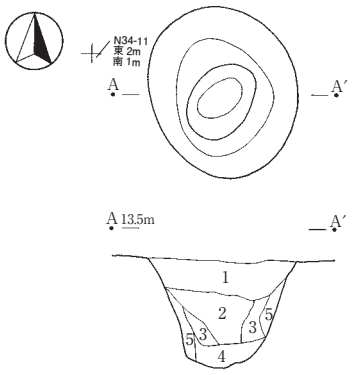
出土遺物　６は器形復元できる深鉢下半で、後期と思われる。７は堀之内式の深鉢口縁部である。８～10は後期と思われる深鉢胴部である。11はチャート製の石鏃である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK116・117（第141・143図、図版12・70）

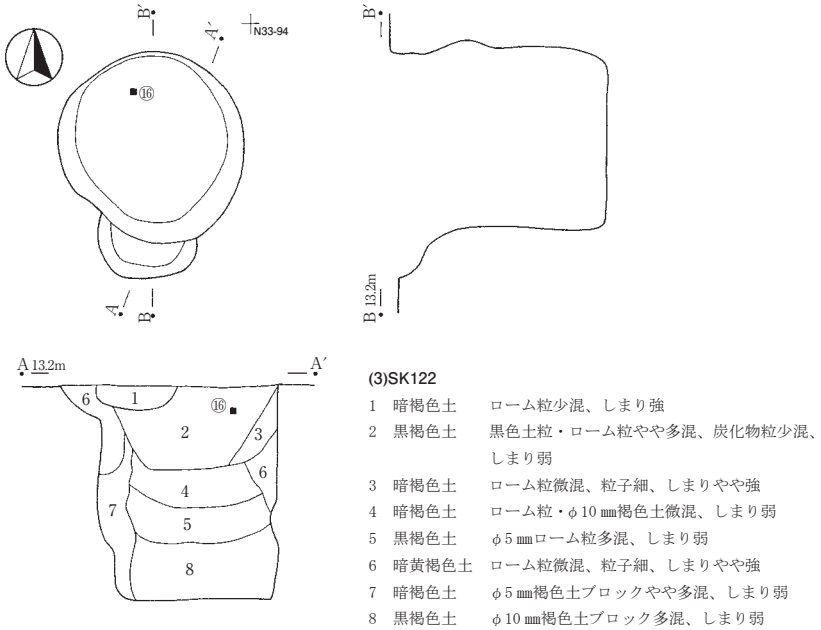
状況　２基が重なり合っている。116は陥穴で、長軸長165cm、短軸長98cmの不整円形を呈する。坑底は

(3)SK120



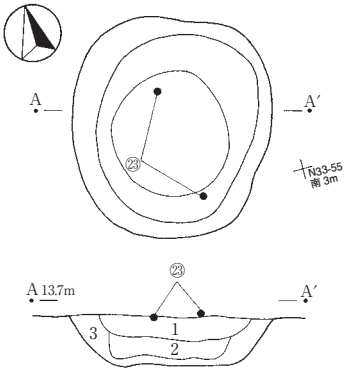
(3)SK120
1 暗褐色土　炭化物粒やや多混、ローム粒・焼土粒少混、しまり強
2 暗褐色土　ローム粒多混、焼土粒微混、しまり強
3 暗褐色土　褐色土混、φ5㎜ロームブロック微混、しまり弱
4 黒褐色土　φ5㎜ロームブロック微混、粒子粗、しまり弱
5 褐色土　暗褐色土混（斑状）、しまり強

(3)SK122



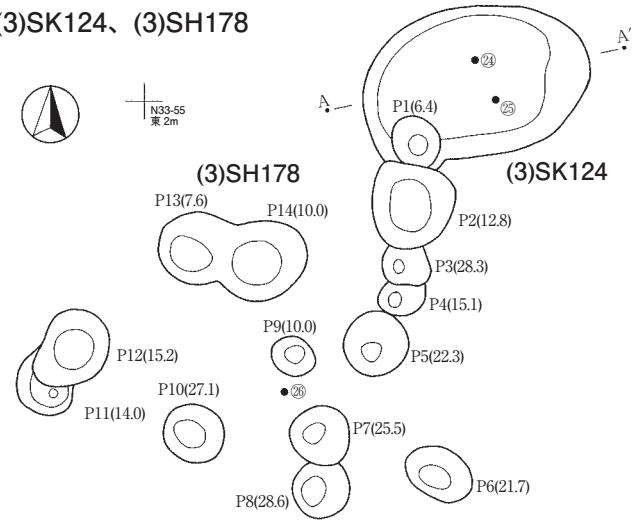
(3)SK122
1 暗褐色土　ローム粒少混、しまり強
2 黒褐色土　黒色土粒・ローム粒やや多混、炭化物粒少混、しまり弱
3 暗褐色土　ローム粒微混、粒子細、しまりやや強
4 暗褐色土　ローム粒・φ10㎜褐色土微混、しまり弱
5 黒褐色土　φ5㎜ローム粒多混、しまり弱
6 暗黄褐色土　ローム粒微混、粒子細、しまりやや強
7 暗褐色土　φ5㎜褐色土ブロックやや多混、しまり弱
8 黒褐色土　φ10㎜褐色土ブロック多混、しまり弱

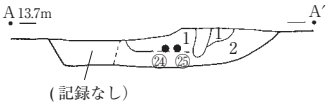
(3)SK123



(3)SK123
1 暗褐色土　ローム粒微混、粒子粗、しまり強
2 黒褐色土　ローム粒少混、炭化物粒微混、粒子粗、しまり弱
3 暗褐色土　1より色調明るい、黄褐色土多混、炭化物粒少混、しまり強

(3)SK124、(3)SH178

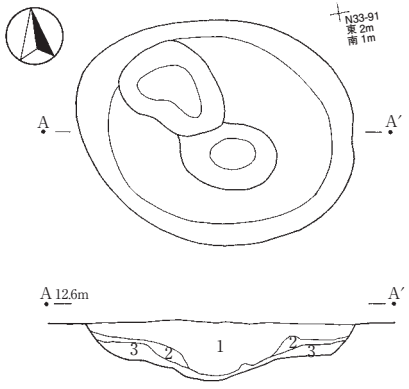




（記録なし）

(3)SK124
1 暗褐色土　φ5㎜ローム粒やや多混、炭化物粒少混、しまり弱
2 褐色土　φ～5㎜ローム粒多混、しまりやや強

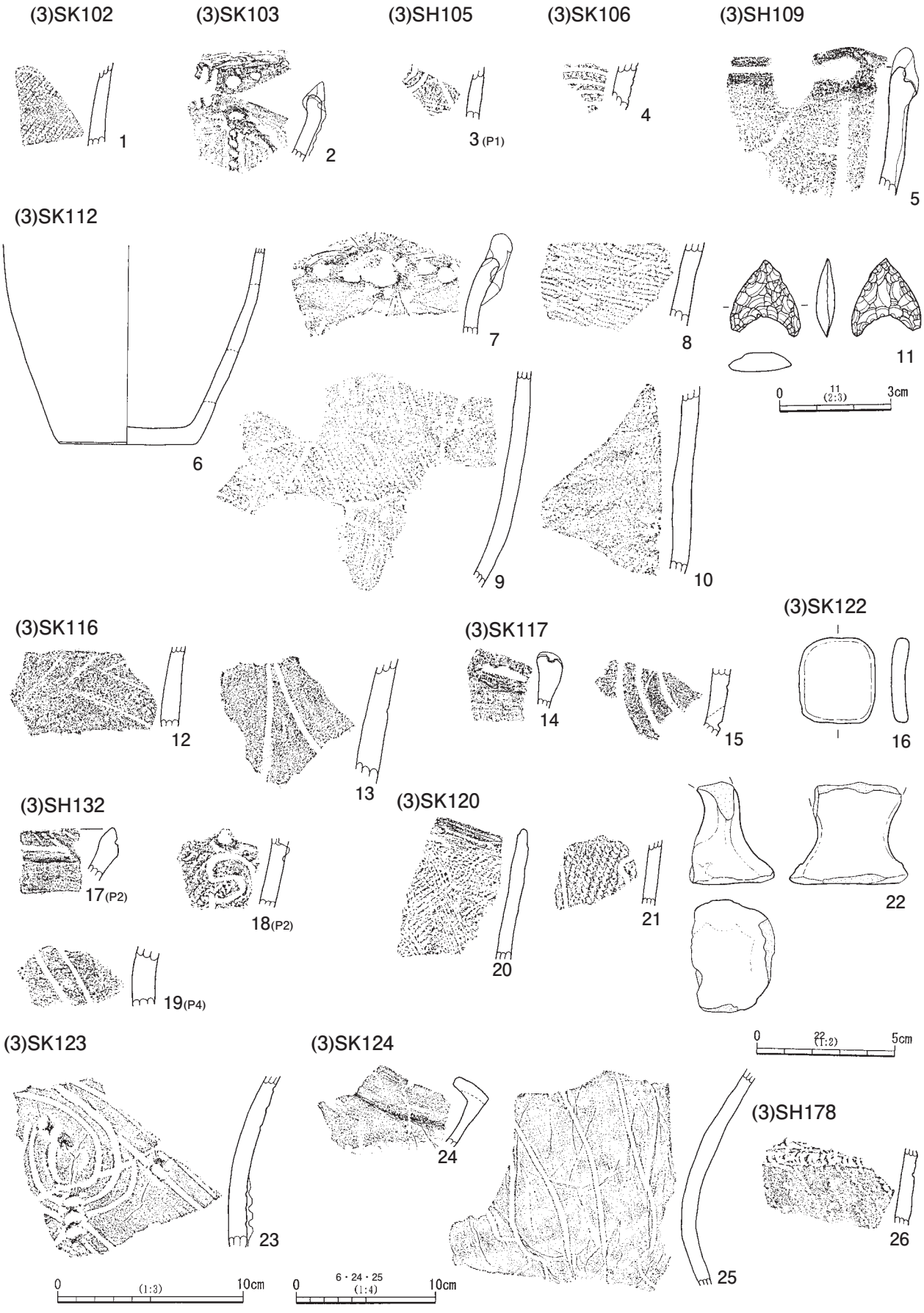
(3)SK125



(3)SK125
1 暗褐色土　ローム粒多混、炭化物粒微混、しまり強
2 暗黄褐色土　ローム粒やや多混、φ5㎜ロームブロック少混、しまり強
3 黄褐色土　ローム粒多混、φ20㎜ロームブロック少混、しまりやや弱

0 (1:40) 1m

第142図　(3)SK120・122～125土坑、(3)SH178ピット群



第 143 図　(3)SK102・103・106・112・116・117・120・122 ～ 124 土坑、
(3)SH105・132・178 ピット群、(3)SH109 ピット出土遺物

長軸長85cm、短軸長40cmで、南西側が一段低くなっている。深さは最深で197cmである。(3)SK117は(3)SK116の西側に存在する。径120cmのほぼ正円形を呈すると思われる。深さは20cmである。新旧関係は記録がないが、おそらく(3)SK116が古く(3)SK117が新しいと思われる。

出土遺物　(3)SK116からは12・13が出土している。いずれも堀之内式の深鉢胴部である。(3)SK117からは14・15が出土している。14は堀之内式の深鉢口縁部、15は胴部である。

時期　(3)SK117は遺物の数量が少ないため判断が難しいが、出土遺物から堀之内式期と考えられる。(3)SK116は堀之内式が出土しているものの遺構の形状などから該期とは考えにくく、前期以前と思われる。

(3)SK119（第141図）

状況　径105cmのほぼ正円形を呈する。断面は逆台形で深さは25cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は、不明である。

(3)SH132（第141・143図、図版70）

状況　７基のピットから構成される。

出土遺物　17・18はP2出土で堀之内式の深鉢口縁部である。19はP4出土で堀之内式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、遺物の出土がなかったピットも含めて堀之内式期と思われる。

(3)SK120（第142・143図、図版70・94）

状況　長軸長90cm、短軸長80cmの楕円形を呈する。断面は擂鉢形で壁が直線的に立ち上がる。坑底中央はさらに一段掘り窪められている。深さは56cmである。上層側は焼土粒・炭化物粒の混入が目立つ。

出土遺物　20は堀之内式の深鉢口縁部、21は胴部である。22はハート形土偶の脚と思われる。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK122（第142・143図、図版12・93）

状況　径100cmの正円形に近い不整円形を呈する。断面長方形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。南側には長さ30cm、幅55cmの張出しがある。深さは本体が111cm、張出しが15cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。16は土器片方形盤とでも言うべき土製品である。土器片を転用したもので四辺が研磨されている。

時期　出土遺物は無文の土製品で判断が難しいが、後期と思われる。

(3)SK123（第142・143図、図版12・70）

状況　長軸長115cm、短軸長105cmの不整円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さは25cmである。

出土遺物　23は称名寺式の深鉢胴部である。

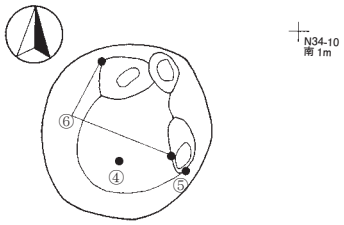
時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。

(3)SK124、SH178（第142・143図、図版70）

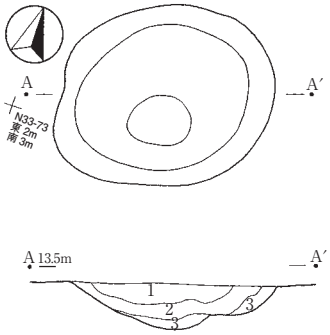
状況　(3)SK124と(3)SH178のP1・2が重なっている状況である。(3)SK124は長軸長155cm、短軸長100cmの楕円形を呈する。断面は皿状を呈し、深さは20cmである。(3)SH178は14基のピットから構成される。P1～5、7と8、11と12、13と14がそれぞれ接している。P1は(3)SK124内に位置するが、両者の新旧関係は不明である。

出土遺物　(3)SK124出土の24は称名寺式の深鉢口縁部、25は胴部である。(3)SH178の26はピットの中から

(3)SK131



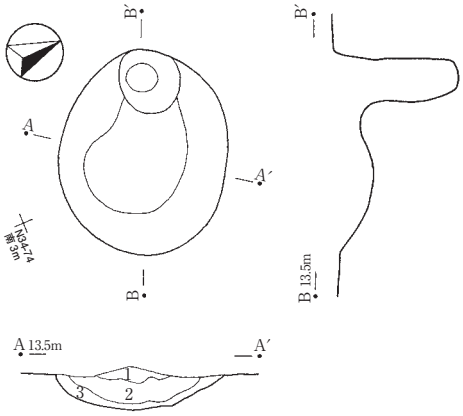
(3)SK133



(3)SK133

1　暗褐色土　　ローム粒・炭化物粒微混、しまり強
2　暗黄褐色土　ローム粒微混、しまり強
3　黄褐色土　　ローム粒微混、しまり強

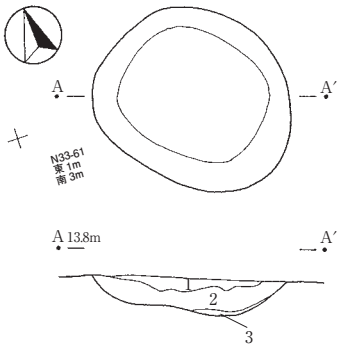
(3)SK134



(3)SK134

1　暗褐色土　　しまり強
2　暗褐色土　　φ5 ㎜ローム粒少混、しまり強
3　暗黄褐色土　φ30 ㎜黄褐色土少混（斑状）、しまり強

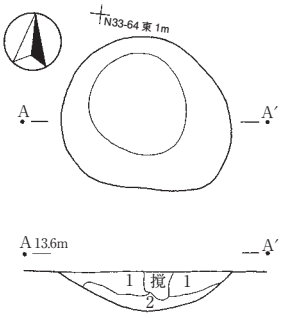
(3)SK146



(3)SK146

1　黒褐色土　　ローム粒少混、しまり強
2　暗褐色土　　ローム粒少混、φ10 ㎜ローム
　　ブロック微混、しまりやや弱
3　暗黄褐色土　ローム粒少混、しまり強

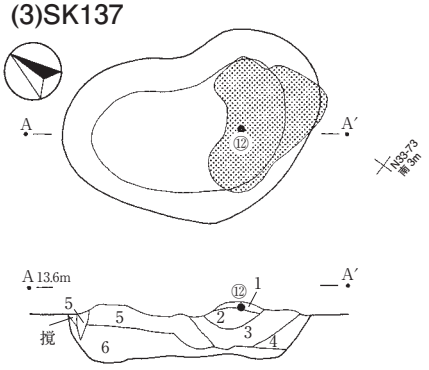
(3)SK135



(3)SK135

1　褐色土　　ローム粒・黒色土粒少混、粒子粗、しまりやや弱
2　褐色粘質土　しまり強

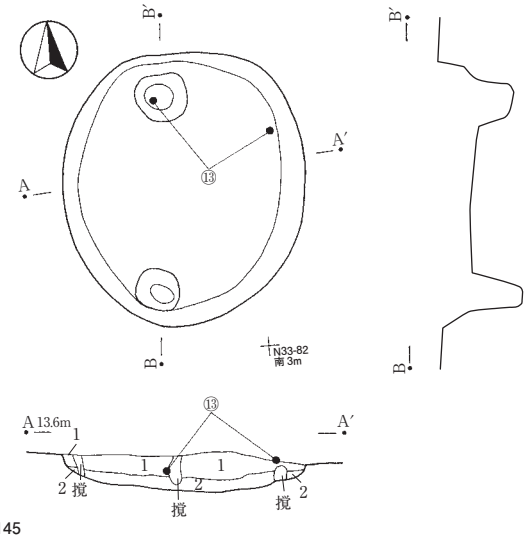
(3)SK137



(3)SK137

1　橙褐色土　　ローム粒やや多混
2　橙褐色土　　覆土全体で色調最も明るい、φ5 ㎜焼土粒やや多混
3　橙褐色土　　炭化物粒少混
4　暗褐色土　　焼土粒・ローム粒少量
5　暗黄褐色土　ローム粒・炭化物粒少混
6　黄褐色土　　φ10 ㎜ロームブロック少混

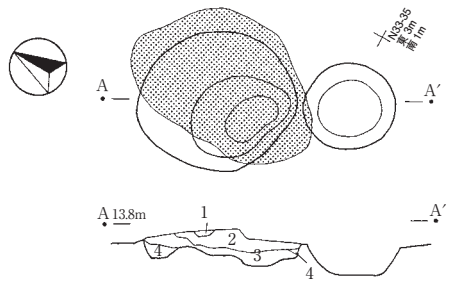
(3)SK145



(3)SK145

1　暗褐色土　　焼土粒微混、粒子細、しまりやや弱
2　暗黄褐色土　ローム粒やや多混、粒子細、しまりやや弱

(3)SK175

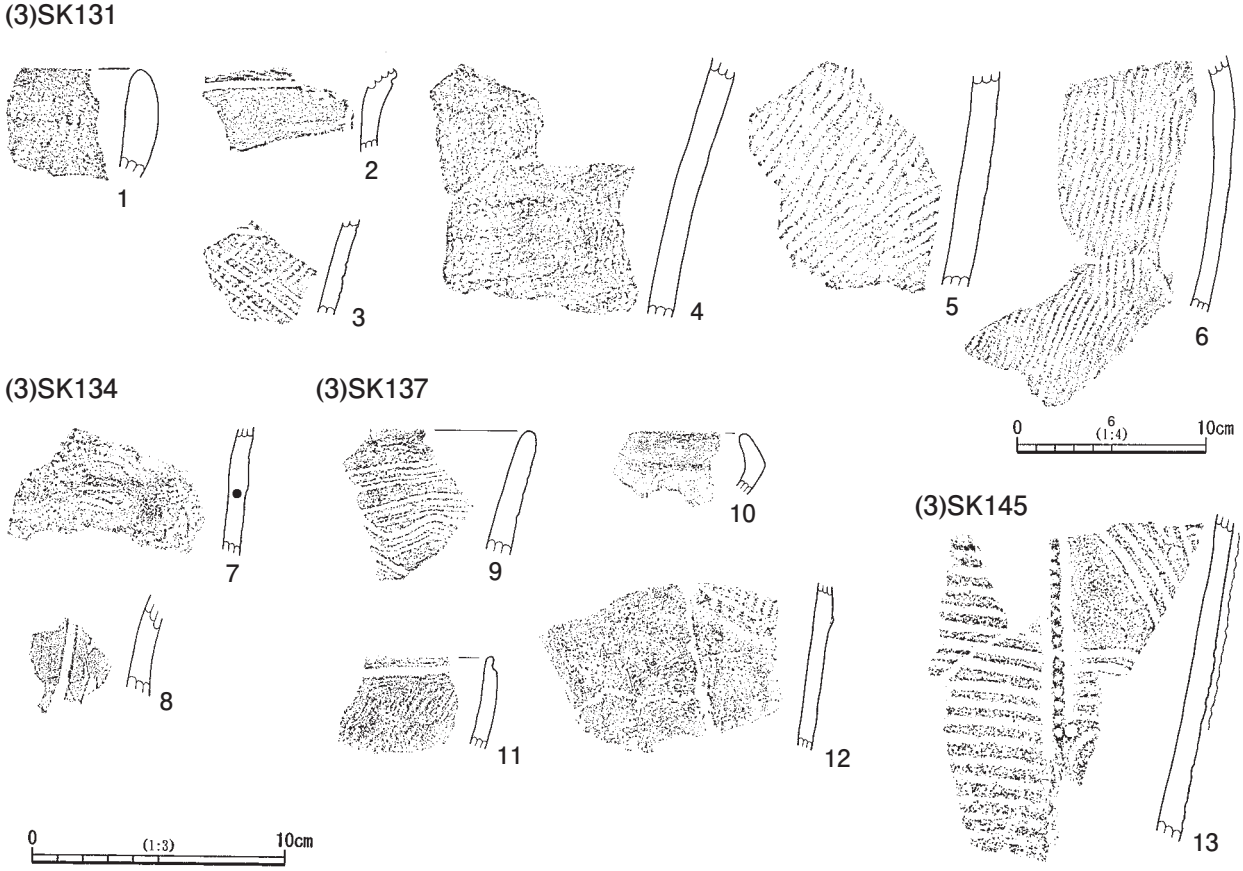


(3)SK175

1　橙褐色土　焼土粒・ローム粒多混、しまり強
2　暗褐色土　ローム粒少混、焼土粒微混、しまりやや弱
3　橙褐色土　焼土粒多混、しまりやや弱
4　暗褐色土　φ10 ㎜焼土ブロック・φ5 ㎜ローム粒多混、しまり強、本層上面が床面？

0　(1:40)　1m

第 144 図　(3)SK131・133 ～ 135・137・145・146・175 土坑



第 145 図　(3)SK131・134・137・145 土坑出土遺物

出土したものではないが、関連がある可能性があると考えて掲載した。浮島式の深鉢胴部である。

時期　(3)SK124は遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。(3)SH178についてはピット出土遺物がないため判断できないが、浮島式期である可能性を提示しておく。

(3)SK125（第142図）

状況　長軸長150cm、短軸長118cmの楕円形を呈する。中央部はさらに一段掘り窪められている。深さは最深で31cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK131（第144・145図、図版70）

状況　直径90cmのほぼ正円形を呈する。北と東の壁際には小ピット状の掘込みが３か所存在する。断面は逆台形であるが中央部がやや低くなっている。深さは33cmである。

出土遺物　１は加曽利Ｅ式の深鉢口縁部と思われる。２・３は堀之内式の深鉢胴部で、４～６も同時期と思われる深鉢胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式であり、遺構も該期と判断される。

(3)SK133（第144図）

状況　長軸長120cm、短軸長96cmの不整円形を呈する。断面は浅い椀形で丸底である。深さは24cmを測る。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK134（第144・145図、図版70）

状況　長軸長108cm、短軸長90cmの楕円形を呈する。断面は浅い椀形で丸底である。深さは20cmを測る。なお、北西端部に直径34cm、深さ70cmのピットが存在し、形状から柱穴と考えられるが、SK134に伴うものか別遺構かは不明である。

出土遺物　７は黒浜式の深鉢胴部である。８は称名寺式の深鉢胴部である。

時期　遺物は大きく２時期に分かれ、前期と後期の両方の可能性がある。

(3)SK135（第144図）

状況　東西長90cm、南北長80cmの不整円形を呈する。断面は浅い椀形で丸底である。深さは20cmを測る。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK137（第144・145図、図版71）

状況　長軸長140cm、短軸長90cmの不整円形を呈する。南東部を中心に焼土が混入するほか、全体に炭化物粒が散在する。断面皿状で、深さは30cmである。

出土遺物　９～11は堀之内式の深鉢口縁部、12は胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK145（第144・145図、図版71）

状況　長軸長145cm、短軸長130cmの楕円形を呈する。壁は北と南が直線的に立ち上がるのに対し、東と西は緩やかに立ち上がる。深さは20cmである。北と南の壁際に直径25cm、床面からの深さ20cm～30cmのピットが存在する。柱穴の可能性がある。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。13は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SK146（第144図）

状況　長軸長105cm、短軸長90cmの不整円形を呈する。断面皿状で、深さは18cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK175（第144図）

状況　２基の土坑より構成される。北西側の一つは長軸長85cm、短軸長72cmの不整円形を呈する。底面は不安定で平坦面がなく、深さも13cmと浅い。覆土には焼土粒・焼土ブロックが多量に混入していた。南東側のもう一つは径45cm～50cmの楕円形を呈する。断面逆台形で底面も平坦であり、深さは16cmを測る。本来なら別遺構として扱うところであるが、焼土が両者を覆うように堆積していたので一体のものと考えた。竪穴住居跡の炉に類似するが、近くに存在する(3)SI177住居跡の中心から大きく外れていること、他に周囲に柱穴など、竪穴を構成する遺構が存在しないことなどから、単独の土坑として扱った。

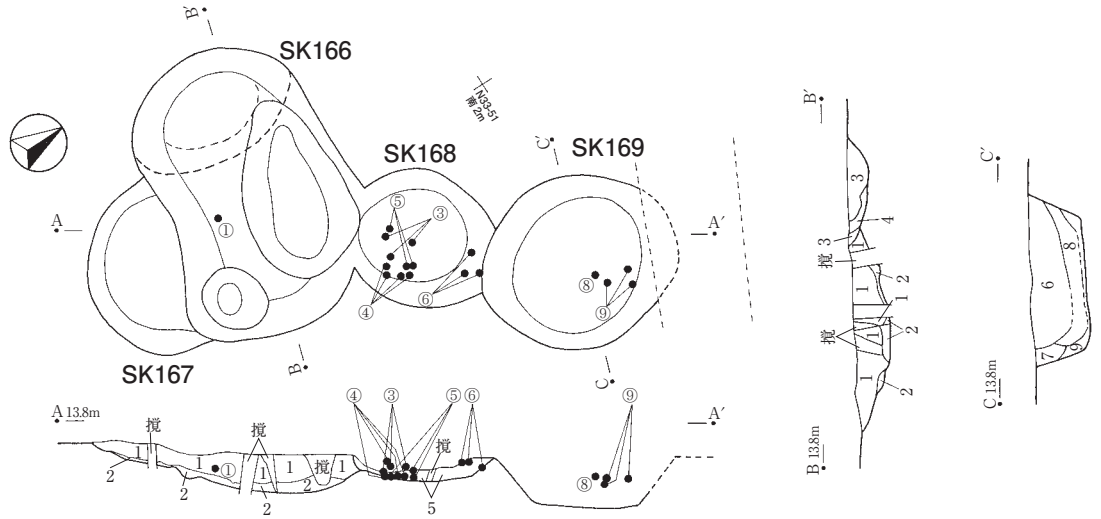
出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK166～169（第146・147図、図版12・71）

状況　４基の土坑が重なっている状況である。全体を通した長さは312cm、短軸長は(3)SK166・(3)SK167が155cm、(3)SK168が75cm、(3)SK169が90cmである。形状は一部推測となるが、(3)SK166・169が不整円形、

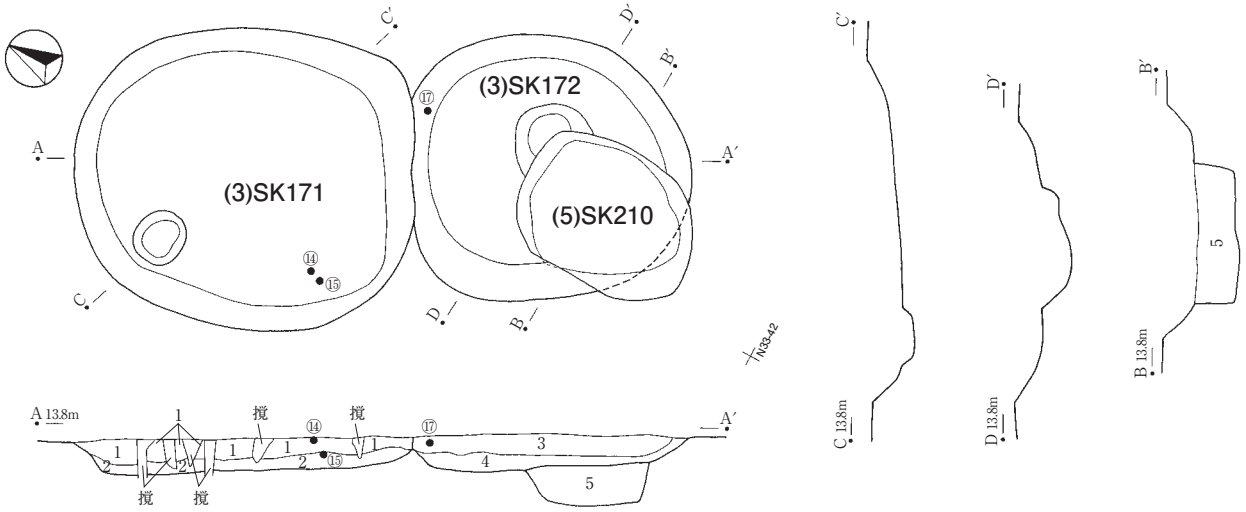
(3)SK166 ～ 169



(3)SK166 ～ 169

1(SK167)　暗褐色土　ローム粒・黒色粒微混
2(SK167)　暗黄褐色土　ローム粒微混
3(SK166)　暗褐色土　粒子粗、しまりやや弱
4(SK166)　暗褐色土　3より色調暗い、しまりやや弱
5(SK168)　暗褐色土　ローム粒多混
6(SK169)　暗褐色土　炭化物粒やや多混、ローム粒少混、焼土粒微混、しまりやや強
7(SK169)　黒褐色土　炭化物粒少混、しまりやや強
8(SK169)　暗褐色土　6より色調やや明るい、ローム粒やや多混、焼土粒微混、しまりやや強
9(SK169)　暗黄褐色土　φ10㎜ロームブロック少混、しまりやや強

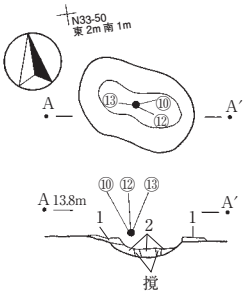
(3)SK171・172、(5)SK210



(3)SK171・172、(5)SK210

1(SK171)　暗褐色土　褐色土粒・黒褐色土粒少混、粒子粗、しまりやや弱
2(SK171)　褐色土　黒色土粒微混、しまり強
3(SK172)　暗褐色土　1～4の暗褐色土中色調最も暗い、しまり弱
4(SK172)　暗褐色土　しまり強
5(SK210)　暗褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混

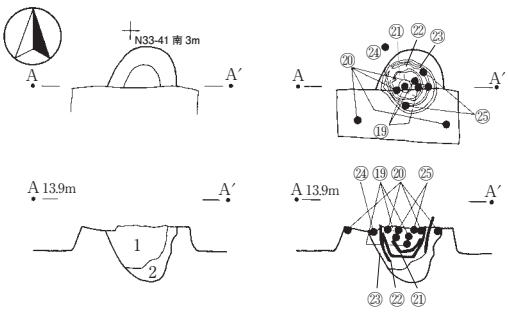
(3)SK170



(3)SK170

1　黒褐色土　粘性やや強
2　暗褐色土　ローム粒微混、しまり強

(3)SH186



(3)SH186

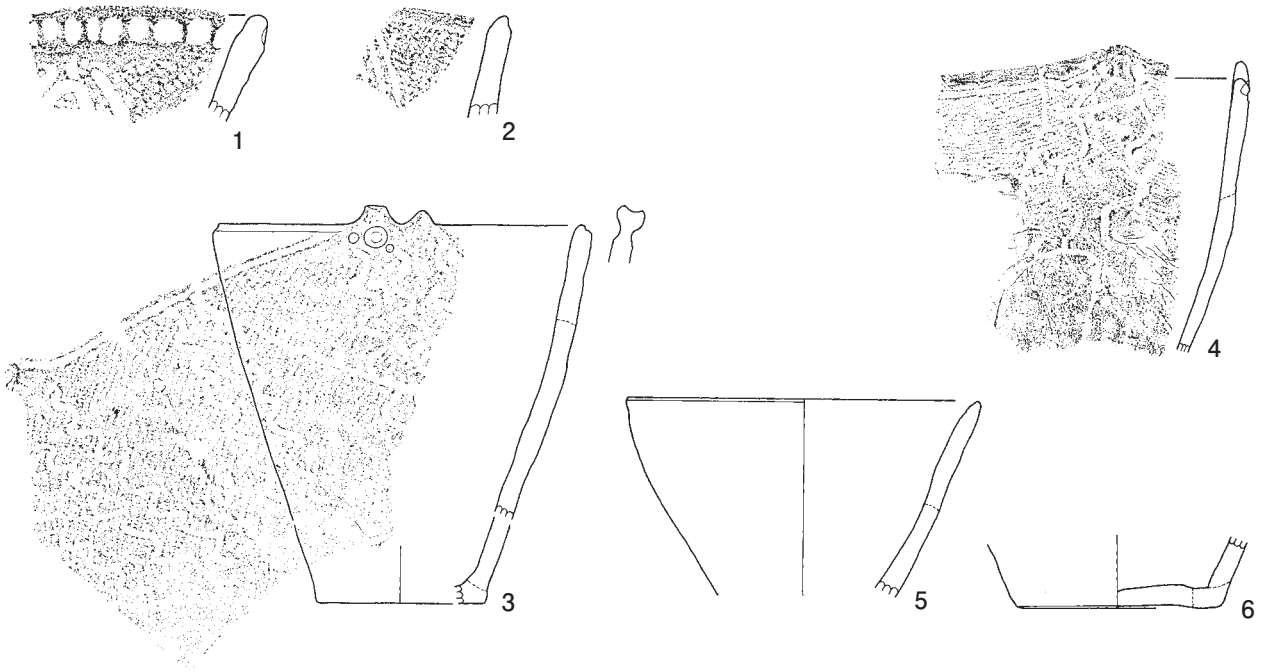
1　暗褐色土　黒色土粒・ローム粒微混、しまり強
2　黒褐色土＋黄褐色土

0　(1:40)　1m

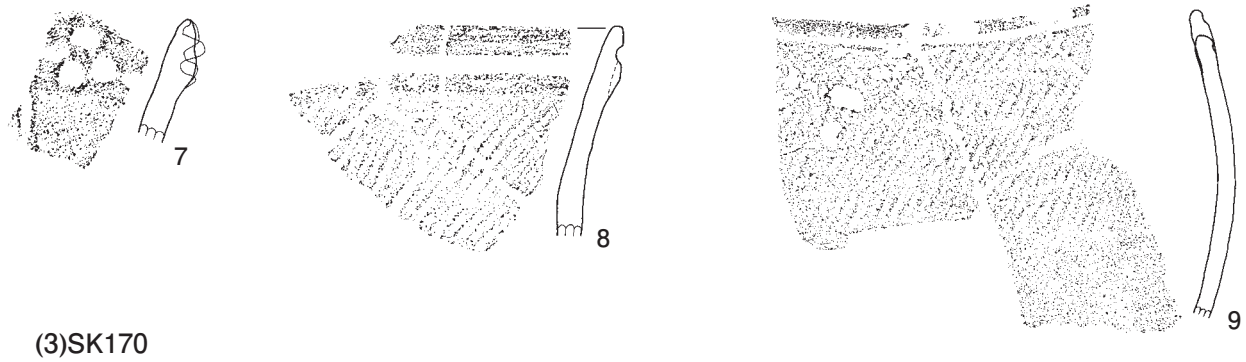
第146図　(3)SK166 ～ 172、(5)SK210 土坑、(3)SH186 ピット（埋設土器）

(3)SK167

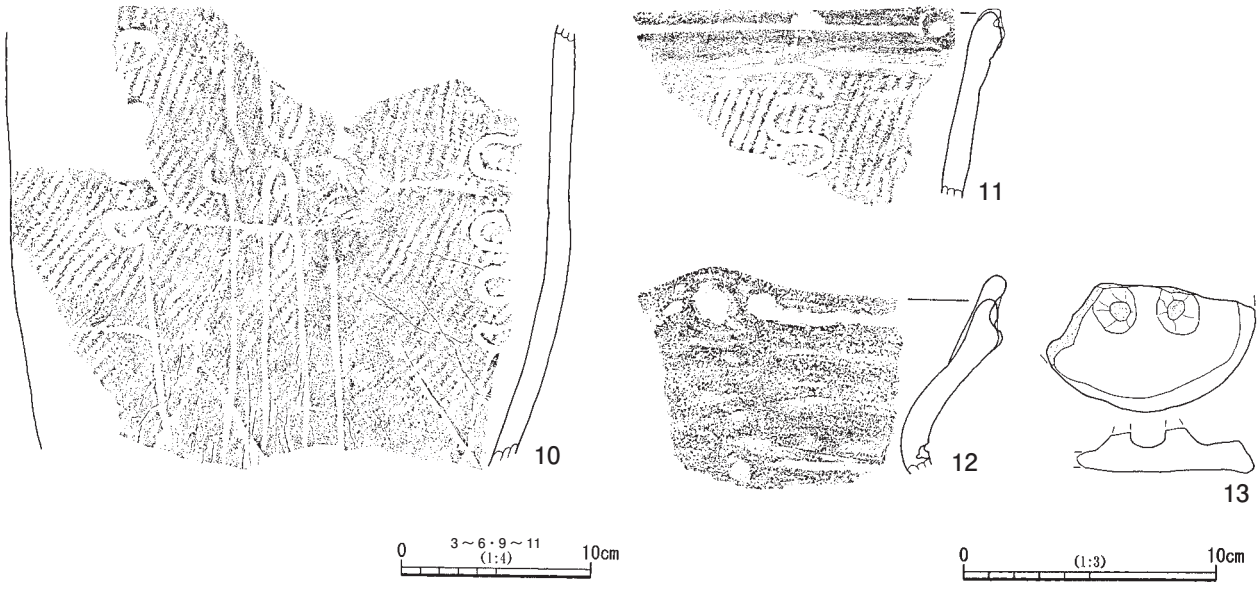
(3)SK168



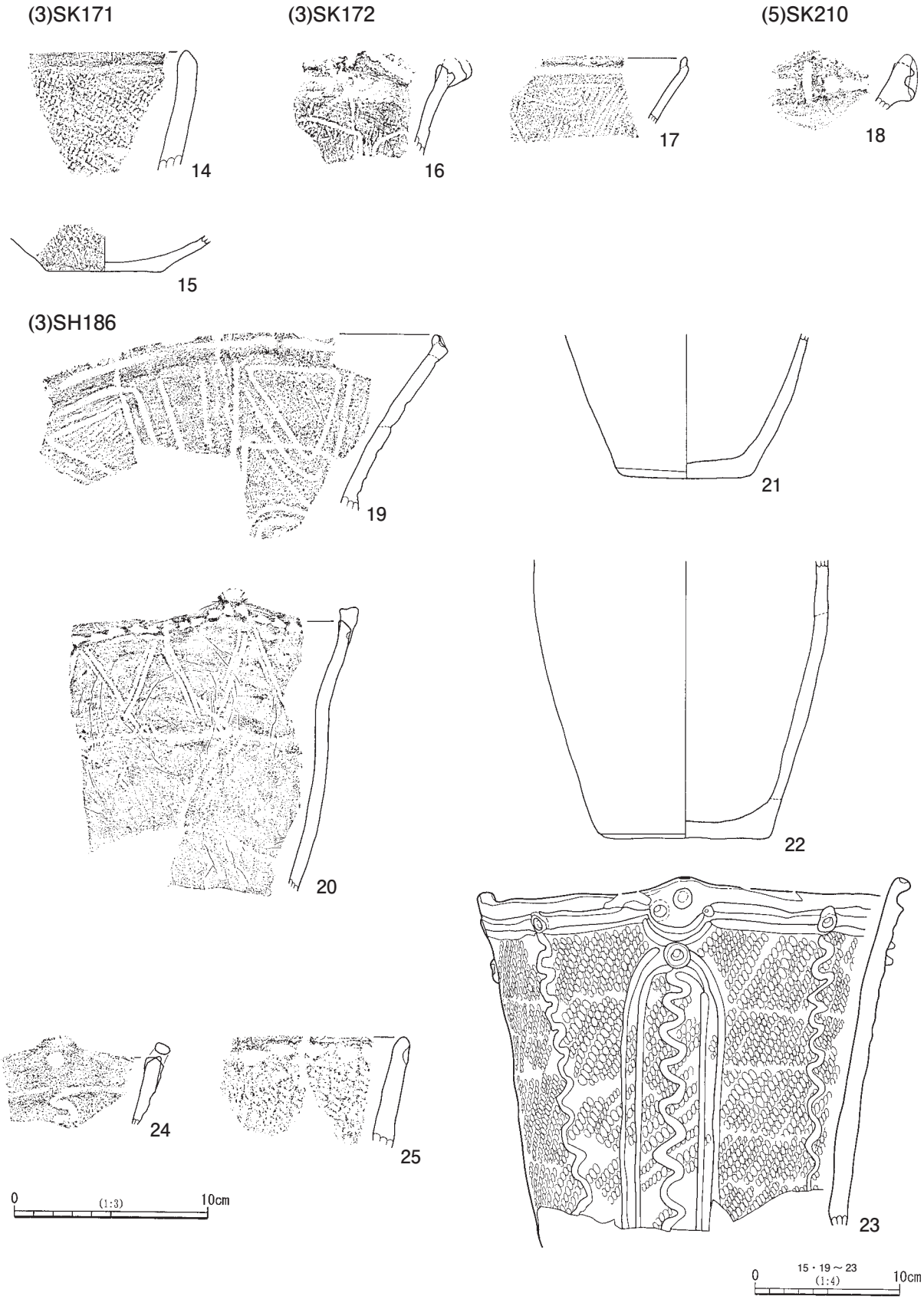
(3)SK169



(3)SK170



第 147 図　(3)SK167 ～ 170 土坑出土遺物



第 148 図　(3)SK171・172、(5)SK210 土坑、(3)SH186 ピット出土遺物

(3)SK168がほぼ正円形、(3)SK167は不整形である。断面形状は(3)SK166～168は緩やかな椀形、(3)SK169は逆台形である。深さは(3)SK166が12cm、(3)SK167が20cm、(3)SK168が12cm、(3)SK169が30cmである。新旧関係は(3)SK167→166・168となる。(3)SK168と(3)SK169との関係は不明である。

出土遺物　(3)SK166からは図示できる遺物は出土しなかった。(3)SK167では図示できる遺物は１点のみである。１・２は堀之内式の深鉢口縁部である。(3)SK168からは比較的まとまった出土があった。３・６は堀之内式の器形復元できる深鉢である。４は深鉢口縁部である。５は器形復元ができる無文の浅鉢で、時期は判断しにくいが後期であろう。(3)SK169の７～９は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　(3)SK167～169は出土遺物から堀之内式期と考えられる。(3)SK166は(3)SK167より新しいということしか分からないが、それでも大きく隔たることはないと思われ、近い時期であろう。

(3)SK170（第146・147図、図版12・71・72・93）

状況　長軸長63cm、短軸長40cmの楕円形を呈する。断面椀形で壁の立ち上がりが緩やかなため遺構の範囲が分かりにくい。深さは10cmとごく浅い。

出土遺物　10は堀之内式の器形復元できる深鉢である。11・12は堀之内式の深鉢口縁部である。13は蓋形土製品である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(3)SK171・172、(5)SK210（第146・148図、図版71）

状況　(3)SK171と(3)SK172は南北に隣接するように位置し、(5)SK210は(3)SK172に重なるように存在する。(5)SK210は上層本調査であった３次調査時に見逃され、下層調査である５次調査になって存在が確認されたものである。(3)SK171は長軸長180cm、短軸長160cmで北側は円形、南側は隅丸方形である。(3)SK172は長軸長150cm、短軸長140cmの不整円形を呈する。(5)SK210は長軸長100cm、短軸長74cmの不整方形を呈する。(3)SK171及び(3)SK172の断面形状は皿状であるが、床面はいずれも北西に向かって緩やかに下り傾斜する。(5)SK210は断面逆台形で床面は平坦である。深さは(3)SK171が18cm、(3)SK172が20cm、(5)SK210が40cmである。新旧関係は(5)SK210が(3)SK172より古いのは明らかであるが、(3)SK171と(3)SK172は判断できない。両者とも形状、規模など極めて相似しており、同時である可能性もある。

出土遺物　(3)SK171出土の14は、堀之内式の口縁部、15は底部である。(3)SK172出土の16・17、(5)SK210出土の18はいずれも堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　いずれも遺物の数量が少ないため判断が難しいが、堀之内式期と思われる。

(3)SH186（第146・148図、図版12・13・71）

状況　当遺構は土器が埋設されており、土器と壁との間にほとんど隙間がなかったため、断面実測に必要な幅のサブトレンチを設定して半分掘削した上で調査を行ったものである。そのため遺構の規模や形状は推定となるが、直径約35cmの円形を呈すると思われる。断面椀形で丸底を呈し、深さは30cmである。

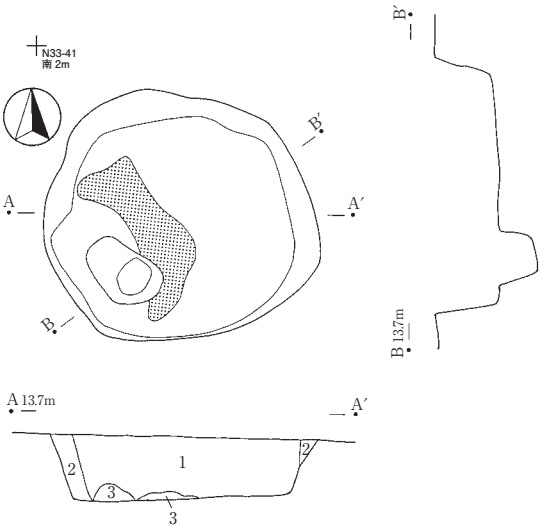
出土遺物　遺構の規模と比べると極めて多量の遺物が出土した。23は堀之内式の器形復元できる深鉢で、21・22も無文であるが同時期と思われる深鉢である。この３点が図で示した上下関係で入れ子状に埋設されていた。19・20・24・25は堀之内式の深鉢口縁部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(5)SK208（第149・152図、図版13・73）

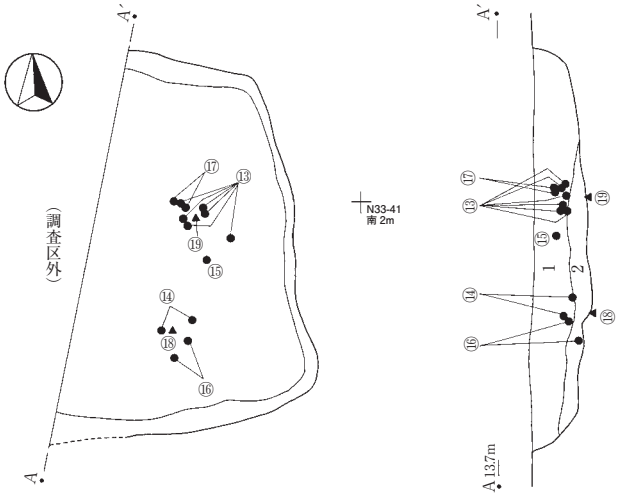
状況　径65cm～80cmの楕円形を呈する。断面椀形で、深さは20cmである。

(5)SK209



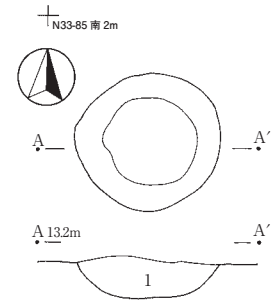
(5)SK209
1　暗褐色粘質土　　焼土粒・ロームブロック混
2　暗黄褐色粘質土　ロームブロック混
3　黄褐色粘質土　　焼土粒やや多混

(5)SK213



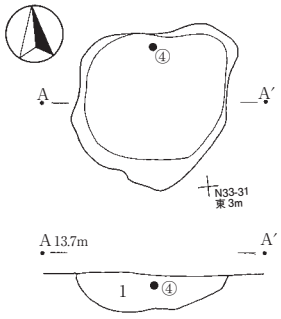
(5)SK213
1　暗褐色粘質土　　焼土粒・ロームブロック混
2　暗黄褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混

(5)SK208



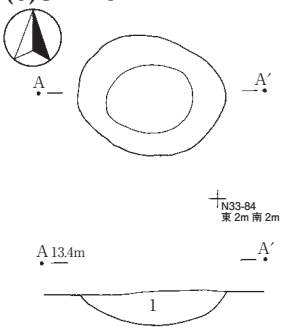
(5)SK208
1　暗褐色土　焼土粒・黄色ローム
　　ブロック混、粘性強

(5)SK211



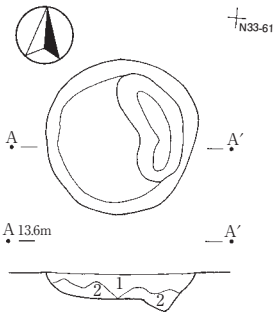
(5)SK211
1　暗褐色粘質土　焼土粒・ローム
　　ブロック混

(5)SK216



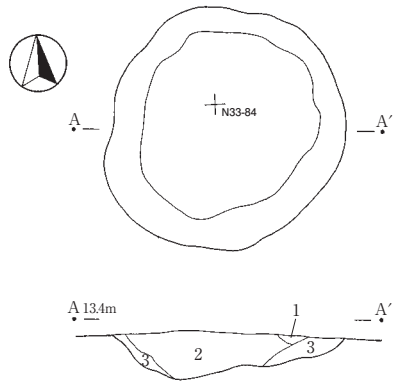
(5)SK216
1　暗褐色粘質土　焼土粒・ローム
　　ブロック混

(5)SK218



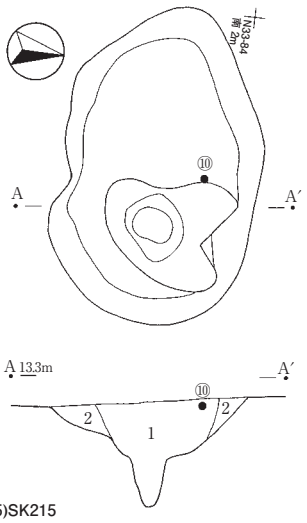
(5)SK218
1　暗黄褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混
2　暗黄色粘質土　　焼土粒・ロームブロック混

(5)SK214



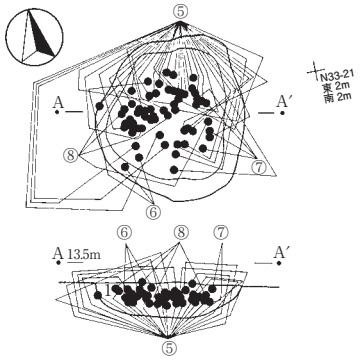
(5)SK214
1　ソフトローム
2　暗褐色土　　焼土粒・ロームブロック混
3　暗黄褐色土　焼土粒・ロームブロック混

(5)SK215

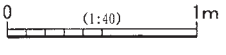


(5)SK215
1　暗褐色粘質土　　焼土粒・ロームブロック混
2　暗黄褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混

(5)SK212

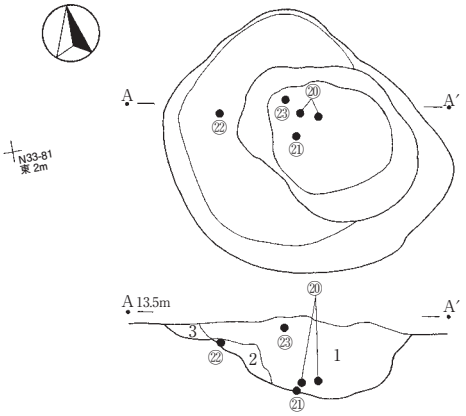


(5)SK212
1　暗褐色粘質土　焼土粒・ローム
　　ブロック混



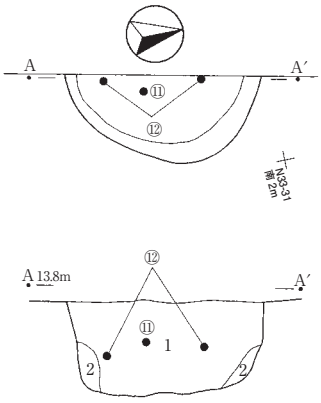
第 149 図　(5)SK208・209・211 ～ 216・218 土坑

(5)SK217



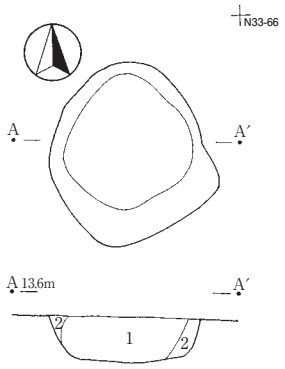
(5)SK217
1　黒褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混
2　黄褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混
3　暗褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混

(5)SK219



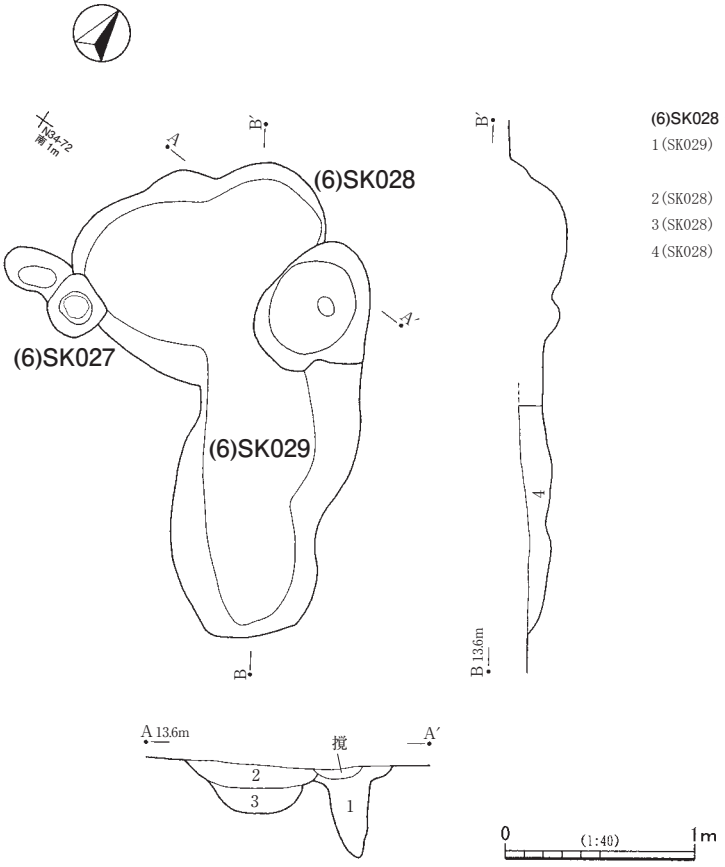
(5)SK219
1　暗褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混
2　暗黄褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混

(5)SK220



(5)SK220
1　暗褐色粘質土　　焼土粒・ロームブロック混
2　暗黄褐色粘質土　焼土粒・ロームブロック混

(6)SK027 ～ 029



(6)SK028・029
1(SK029)　暗褐色土　φ1 ～ 3㎜ローム粒混、φ1 ～ 3㎜焼土粒混、しまり・粘性弱
2(SK028)　暗褐色土　φ3 ～ 7㎜ローム粒少混、しまり弱、粘性強
3(SK028)　暗褐色土　しまり・粘性強（水つき粘土状）
4(SK028)　黒褐色土　φ5 ～ 7㎜ローム粒少混、下位はロームブロック多混、粒子粗、しまり弱、粘性やや強

第 150 図　(5)SK217・219・220、(6)SK027 ～ 029 土坑

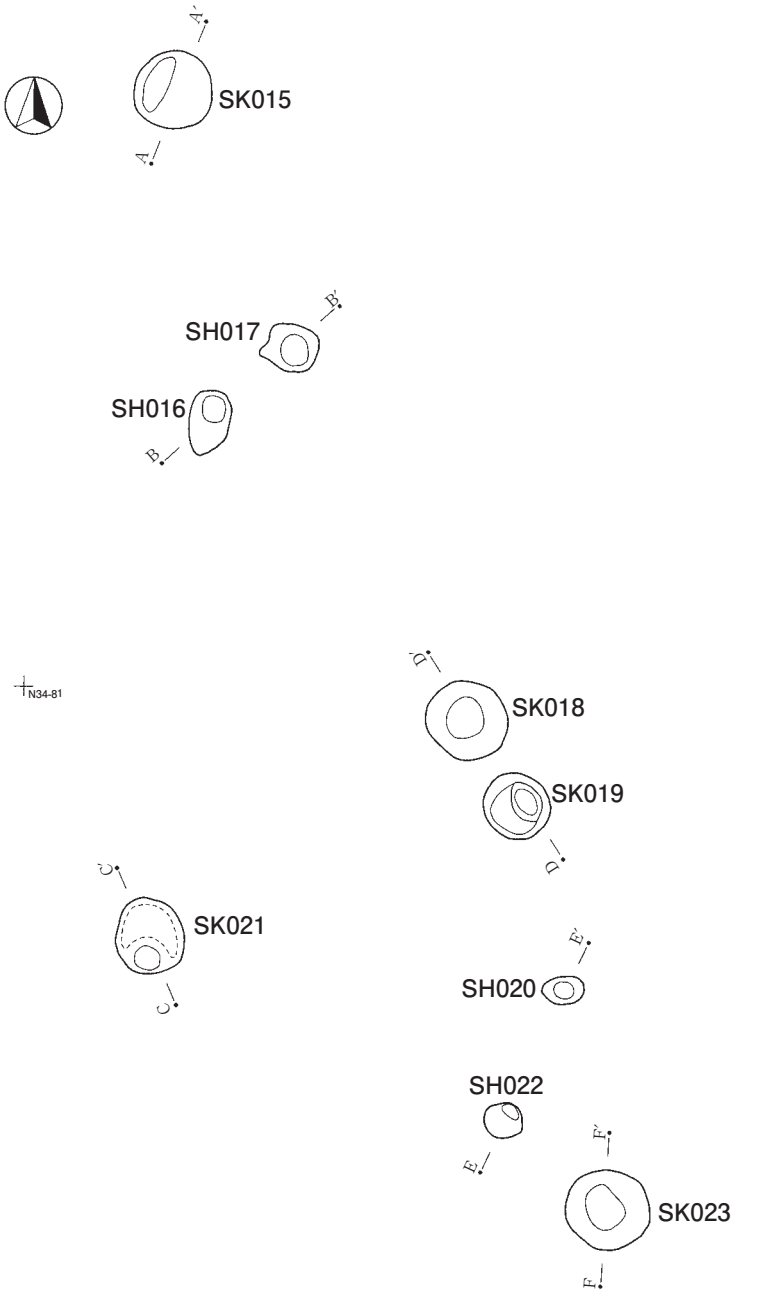
出土遺物　1は黒浜式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(5)SK209（第149・152図、図版13・73）

状況　東西長145cm、南北長130cmの不整円形を呈する。断面逆台形で、深さは35cmである。南西部に径30

(6)SK015・018・019・021・023、(6)SH016・017・020・022



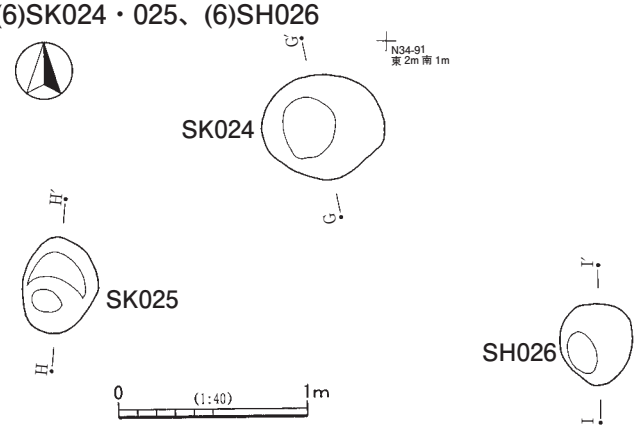
(6)SK015
1　黒褐色土　ローム粒少混、しまりやや強、粘性強
2　明褐色土　ローム粒主体、しまり弱、粘性強

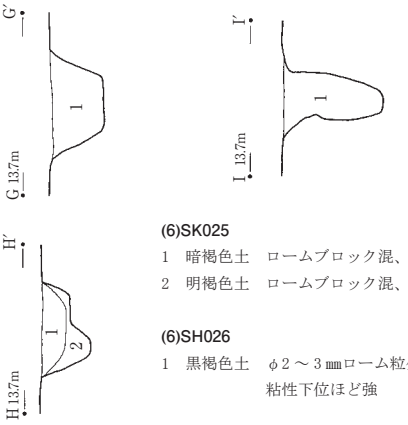
(6)SK021
1　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや強、粘性床側が特に強

(6)SK023
1　黒褐色土　暗褐色ローム粒混、しまり・粘性強
2　暗褐色土　暗褐色ロームブロック混、粘性強、しまり弱

(6)SK024
1　黒褐色土　ローム粒混、しまり・粘性極めて強

(6)SK024・025、(6)SH026





(6)SK025
1　暗褐色土　ロームブロック混、しまり弱
2　明褐色土　ロームブロック混、しまり・粘性強

(6)SH026
1　黒褐色土　φ2～3㎜ローム粒少混、しまり弱、粘性下位ほど強

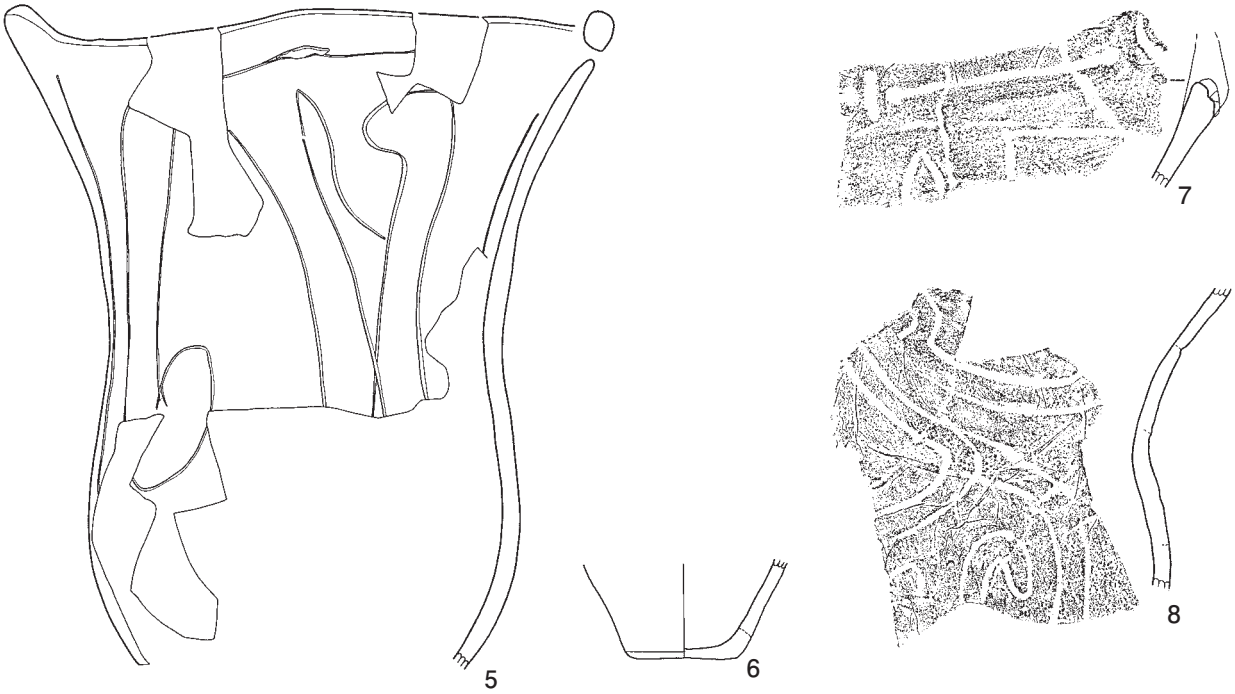
第 151 図　(6)SK015・018・019・021・023 ～ 025 土坑、(6)SH016・017・020・022・026 ピット

(5)SK208

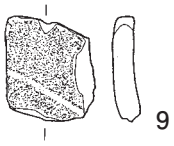
(5)SK209

(5)SK211

(5)SK212

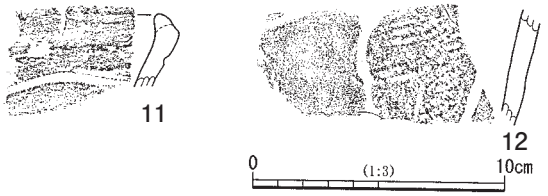


(5)SK214

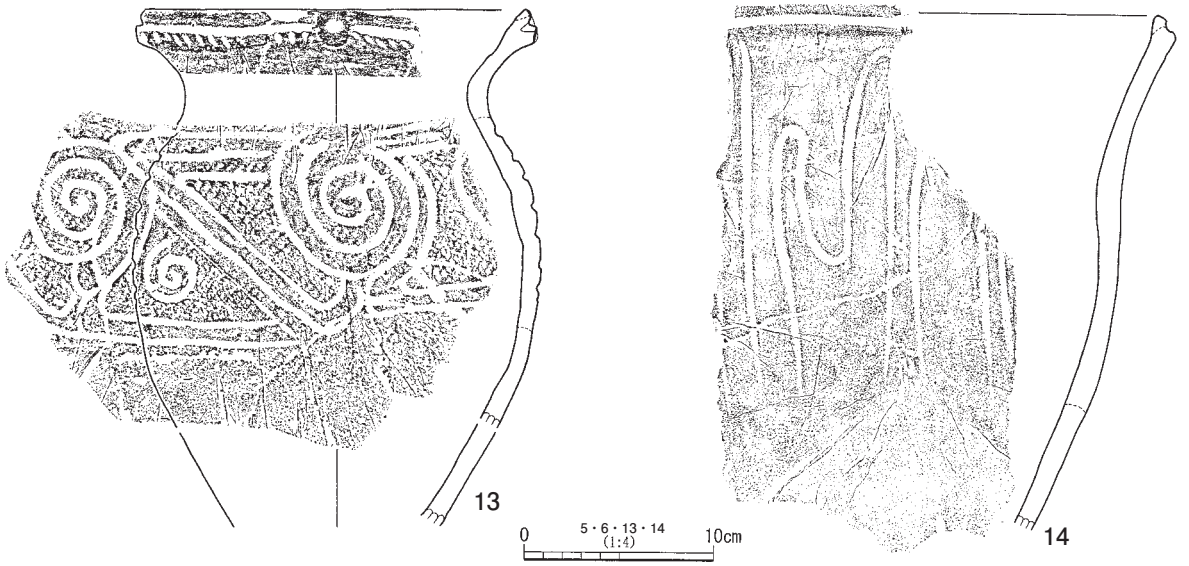


(5)SK215

(5)SK219



(5)SK213



第 152 図　(5)SK208・209・211 ～ 215・219 土坑出土遺物

cm～45cm、深さ22cmの柱穴状ピットが存在する。そのピット周辺に焼土が堆積している。

出土遺物　２は加曽利Ｅ式の深鉢口縁部、３は胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、加曽利Ｅ式期と思われる。

(5)SK211（第149・152図、図版13・73）

状況　東西長85cm、南北長90cmの五角形に近い不整方形を呈する。断面椀形で、深さは20cmである。

出土遺物　４は黒浜式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(5)SK212（第149・152図、図版13・71・73）

状況　東西長80cm、南北長90cmの不整形を呈する。断面椀形で、深さは18cmである。

出土遺物　５は称名寺式の器形復元できる深鉢である。器面は極めて摩耗しており文様がほとんど判別できないほどであった。６は後期土器の底部である。７は称名寺式の深鉢口縁部、８は胴部である。

時期　出土遺物から称名寺式期と考えられる。

(5)SK213（第149・152・153図、図版13・73・97・98）

状況　西側は５次調査の範囲外となるため全容は不明である。南北長205cm、東西長は南壁沿いで150cm検出されており、隅丸方形を呈する。断面逆台形であるが、底面は不安定で凹凸が目立つ。

出土遺物　13は堀之内式の器形復元できる深鉢である。14～16は堀之内式の深鉢口縁部、17は胴部である。18は磨石である。19は軽石で、製品への加工を意図して持ち込まれたものであろう。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(5)SK214（第149・152図、図版14・93）

状況　径125cmの不整円形を呈する。断面は浅い椀形であるが中心より西寄りが最も深く、底面も不安定である。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。９は土器片錘である。素材は後期と思われる土器片である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、後期と思われる。

(5)SK215（第149・152図、図版14・73）

状況　単一の番号しか付していないが、実際には２基の土坑が重なった状況である。長軸長168cm、短軸長106cmの不整円形土坑の内部に、東西長60cm、南北長70cmの不整形土坑が掘り込まれている。外側の土坑は断面椀形で深さ20cm、内側の土坑は断面漏斗状で深さ55cmをそれぞれ測る。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。10は黒浜式の深鉢胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式期と思われる。

(5)SK216（第149図、図版14）

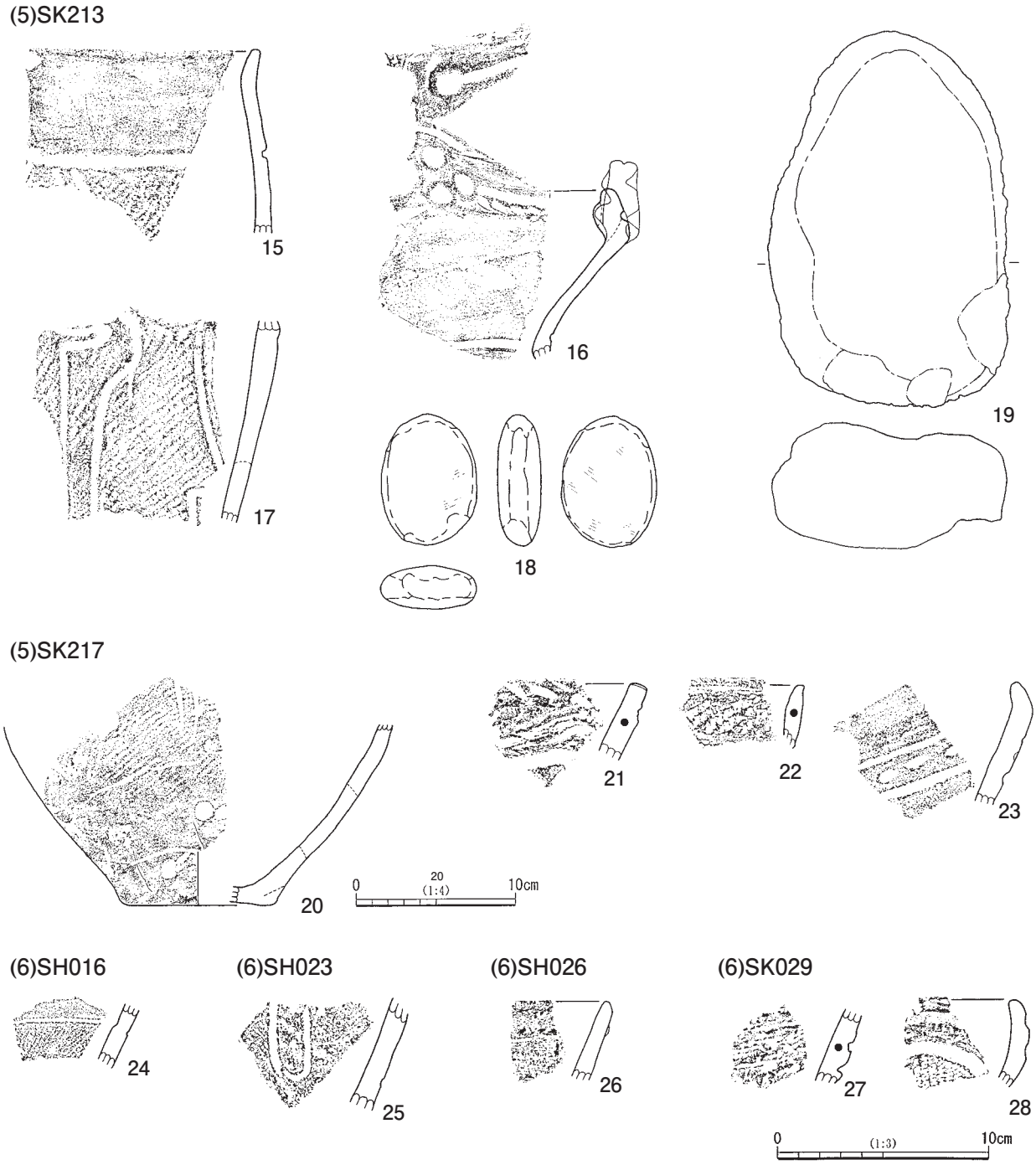
状況　長軸長80cm、短軸長65cmの楕円形を呈する。断面椀形で、深さは18cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(5)SK217（第150・153図、図版14・73）

状況　東西長155cm、南北長140cmの不整形を呈する。南東部には更に長軸長100cm、短軸長75cmの不整形の掘込みが存在する。２基の土坑が重なっている可能性がある。断面は不整形で深さは最深で40cmであ



第 153 図　(5)SK213・217 土坑、(6)SH016・023・026・029 ピット出土遺物

る。

出土遺物　21・22は黒浜式の深鉢口縁部である。23は称名寺式の深鉢口縁部である。20は堀之内式の器形復元できる深鉢底部である。

時期　遺物の時期が分散しているため判断が難しいが、最も遺存度が良く底面に近い位置から出土している20の堀之内式土器が遺構の時期を示していると考えられる。ただし２基の土坑の重複であるとすれば、もう１基は黒浜式期か称名寺式期になるかもしれない。

(5)SK218（第149図、図版14）

状況　直径85cmのほぼ正円形を呈する。底面の東壁沿いはさらに一段深く掘り込まれている。断面皿状であるが東側はＶ字状になる。深さは最深で18cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(5)SK219（第150・152図、図版14・73）

状況　西側は５次調査の範囲外となるため全容は不明である。調査した範囲内では径105cmの円形を呈している。断面逆台形であるが壁の立ち上がりは緩やかである。深さは50cmである。

出土遺物　11は称名寺式の深鉢口縁部、12は胴部である。

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、称名寺式期と思われる。

(5)SK220（第150図）

状況　東西長90cm、南北長98cmの不整円形を呈する。断面逆台形で、深さは25cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(6)SK027～029（第150・153図、図版73）

状況　３基の土坑が重なり合った状況である。(6)SK027は西部に位置し、直径30cmの円形ピットと径25cm～35cmの楕円形ピットの２基から構成される。断面漏斗状で深さは43cmである。(6)SK028は長軸長70cm、短軸長55cmの楕円形を呈する。断面逆三角形で深さは73cmである。(6)SK029は北東－南西長150cm、北西－南東長250cmで、アルファベット「Ｐ」の字を左右反転したような形状である。断面は南東側が皿状、北西側が椀形で、深さは最深で30cmである。(6)SK029については調査時には全体が単一の遺構として把握されたが、形状を観察する限り２基の土坑と考えるのが妥当であろう。新旧関係は、(6)SK028が古く(6)SK029が新しい。(6)SK027と(6)SK029の関係は不明である。

出土遺物　(6)SK027と(6)SK028からは、図示できる遺物は出土しなかった。029出土遺物では、27は黒浜式の深鉢胴部である。28は加曽利Ｅ式の深鉢口縁部である。

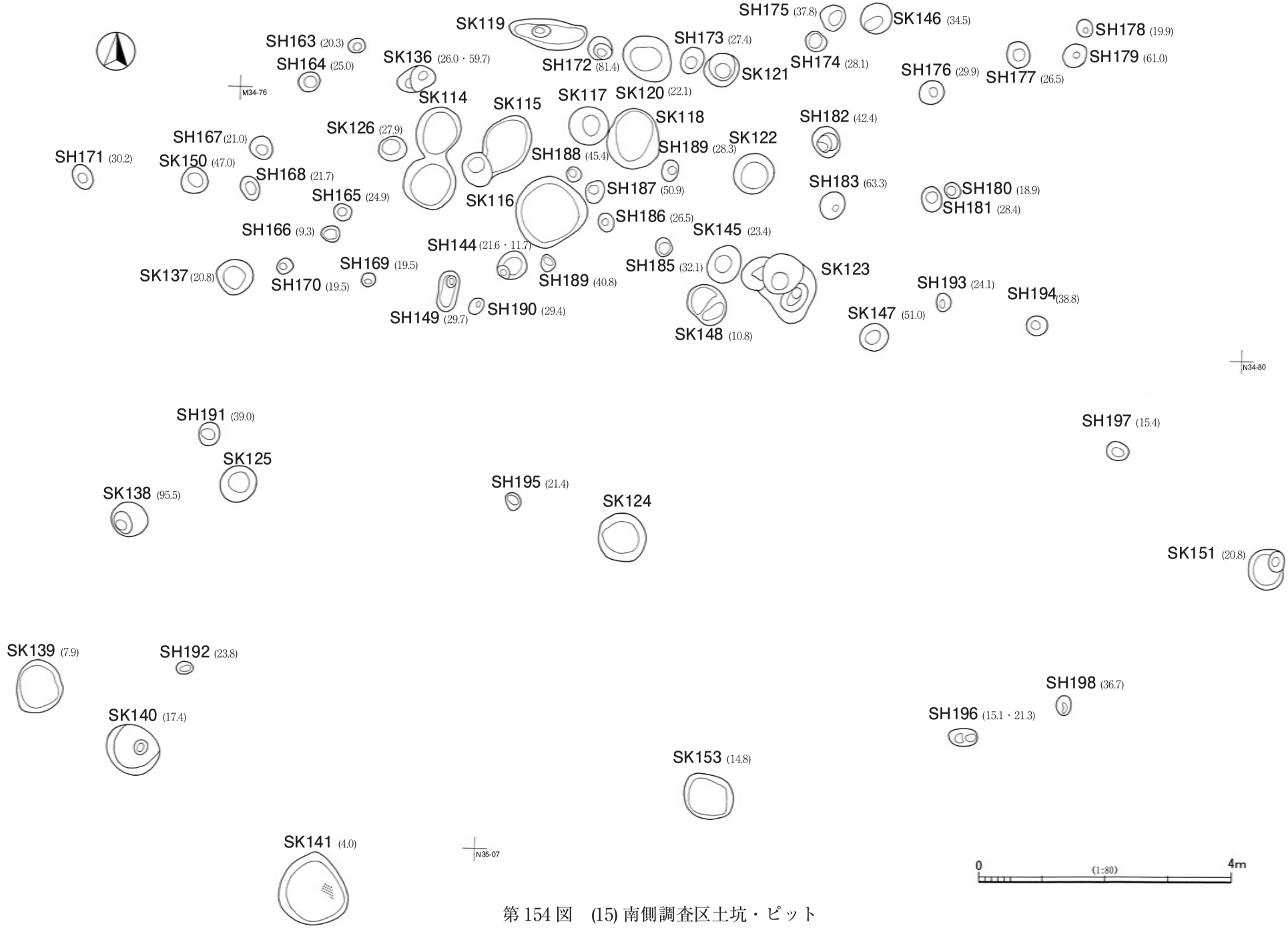
時期　黒浜式と加曽利Ｅ式それぞれほぼ同量の出土であり、遺物から時期を判断するのは難しい。

(6)SK015・018・019・021・023、(6)SH016・017・020・022（第151・153図、図版14・15・73）

状況　N34-71・81グリッド付近の遺構群である。(6)SK015は直径40cmの正円形で深さは25cmである。(6)SH016は長軸長35cm、短軸長20cmの不整円形で深さは60cmである。(6)SH017は径27cmの不整円形で深さは40cmである。(6)SK018は径44cmの正円に近い不整円形で深さは36cmである。(6)SK019は直径35cmの正円形で深さは16cmである。(6)SH020は長軸長22cm、短軸長16cmの不整円形で深さは24cmである。(6)SK021は開口部の径は35cm～40cmの楕円形であるが、坑底は径13cmと小さく北側が張出す。深さは18cmである。(6)SH022は径18cm～20cmの不整円形で深さは18cmである。(6)SK023は径42cm～44cmの正円に近い不整円形で深さは15cmである。これらの土坑やピットには柱穴状になるものもあり、全体で何らかの構造物であった可能性もあるが、掘立柱建物への復元は今のところ不可能である。

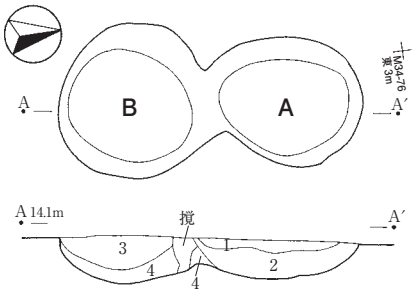
出土遺物　24は(6)SH016出土で堀之内式の深鉢胴部である。25は(6)SK023出土で堀之内式の深鉢胴部である。その他の遺構からは図示できる遺物は出土しなかった。

時期　遺物の出土があった遺構については、数量が少ないため判断が難しいが堀之内式期と思われる。そ



第 154 図　(15) 南側調査区土坑・ピット

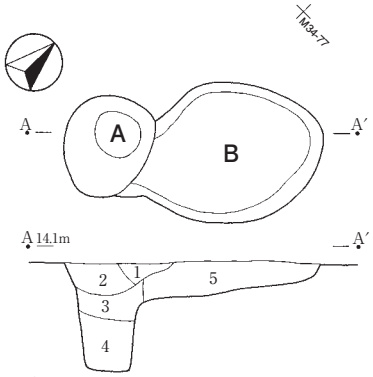
(15)SK114



(15)SK114

1　褐色土　しまり強
2　明褐色土　ローム粒多混、しまり強
3　暗褐色土　φ8㎜ロームブロック少混、しまり強
4　明褐色土　ローム粒多混、しまり強
5　明褐色土　ローム粒多混、しまり強

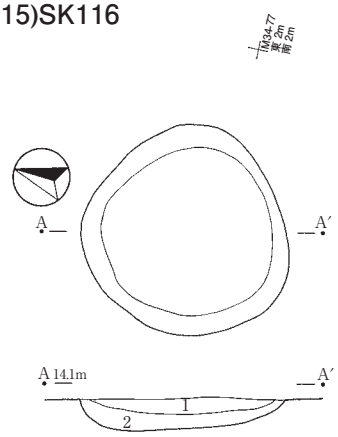
(15)SK115



(15)SK115

1　黒色土　粒子粗
2　褐色土　ローム粒少混、しまり強
3　暗褐色土　φ8㎜ロームブロック少混、しまりやや弱
4　褐色土　φ8㎜ロームブロック少混、しまり弱
5　褐色土　ローム粒微混、しまり強

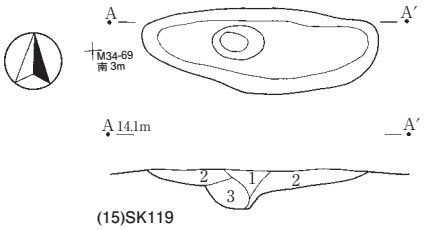
(15)SK116



(15)SK116

1　暗褐色土　ローム粒少混、粒子やや粗
2　褐色土　φ10 ～ 20㎜ロームブロック少混、粒子やや粗

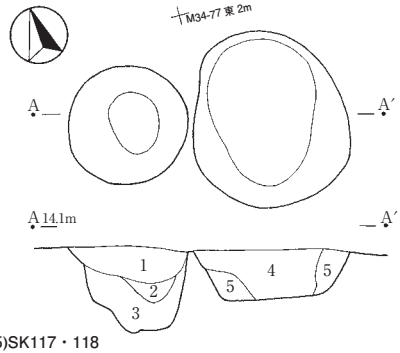
(15)SK119



(15)SK119

1　黒色土　粒子粗
2　明褐色土　ローム粒多混、しまり強
3　褐色土　ローム粒少混、しまり強

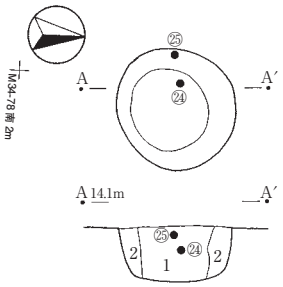
(15)SK117・118



(15)SK117・118

1　暗褐色土　しまり強
2　褐色土　ローム粒微混、しまり強
3　明褐色土　ローム粒多混、φ5㎜ロームブロック少混、しまり強
4　暗褐色土　φ5㎜ロームブロック微混、しまり強
5　褐色土　ローム粒多混、しまり強

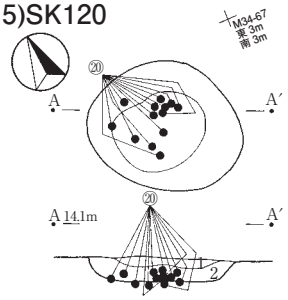
(15)SK122



(15)SK122

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり強
2　明褐色土　ローム粒多混、ロームブロック少混、しまり強

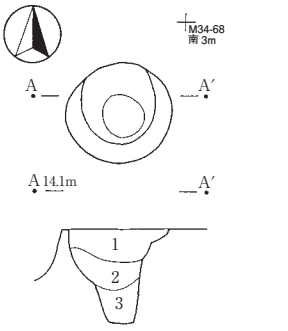
(15)SK120



(15)SK120

1　褐色土　ローム粒少混、しまり強
2　明褐色土　ローム粒多混、しまり強

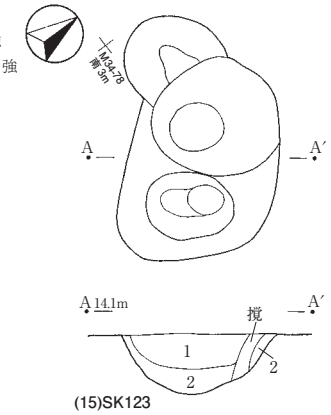
(15)SK121



(15)SK121

1　褐色土　ローム粒少混、しまり強
2　褐色土　色調は1と同じだが粒子1より粗、ローム粒少混
3　明褐色土　φ8㎜ロームブロック多混、粒子粗

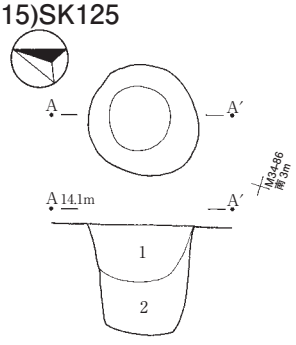
(15)SK123



(15)SK123

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまり強
2　明褐色土　ローム粒多混、しまり強

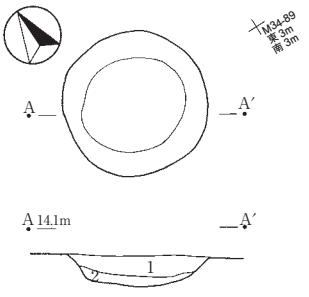
(15)SK125



(15)SK125

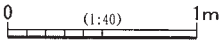
1　明褐色土　ロームブロック粒多混、粒子粗（人為堆積）
2　褐色土　ロームブロック粒多混、粒子粗（人為堆積）

(15)SK124



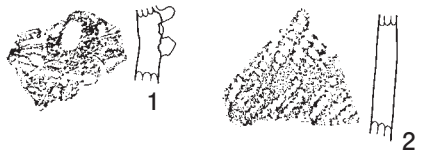
(15)SK124

1　褐色土　ローム粒少混、しまり強
2　明褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや弱



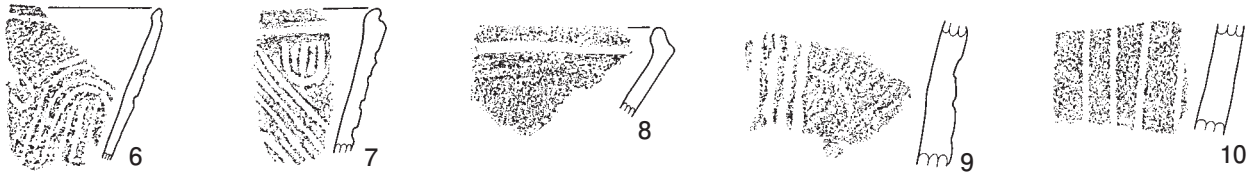
第 155 図　(15)SK114 ～ 125 土坑

(15)SK114

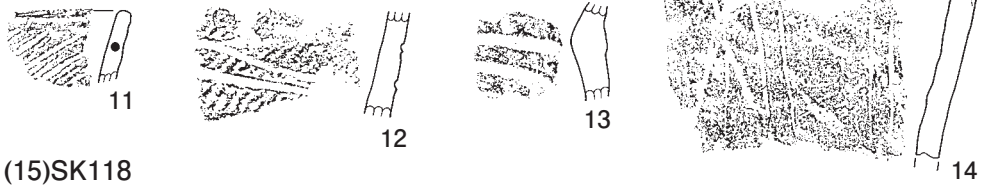


(15)SK117

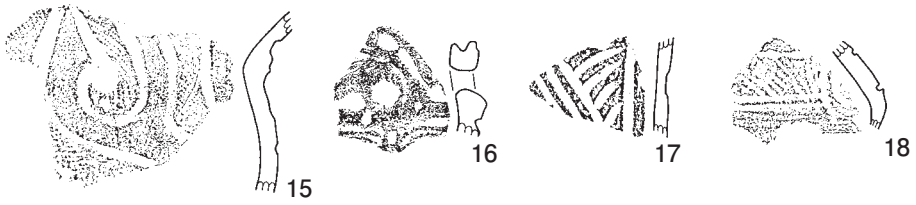
(15)SK115



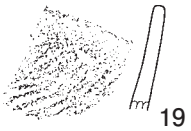
(15)SK116



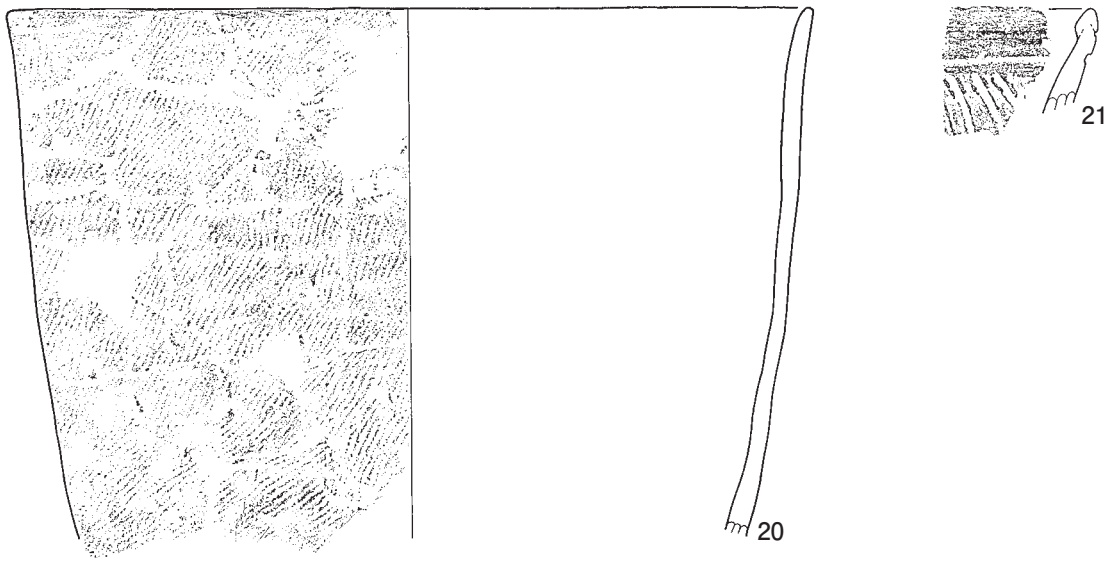
(15)SK118



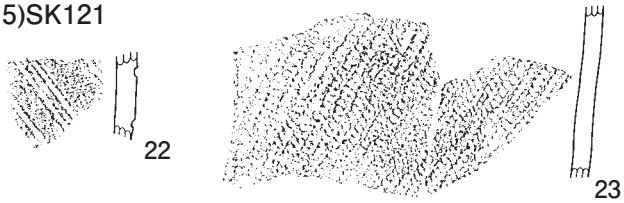
(15)SK119



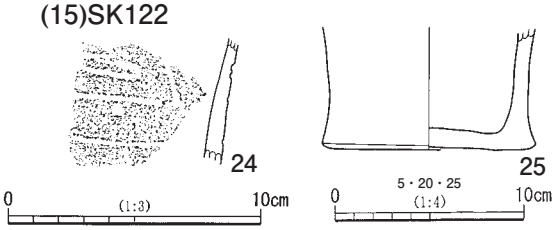
(15)SK120



(15)SK121



(15)SK122



第 156 図　(15)SK114 ～ 122 土坑出土遺物

れ以外の遺構もほぼ同じ時期と推測される。

(6)SK024・025、(6)SH026（第151・153図、図版15・73）

状況　N34-91グリッド付近の遺構群である。(6)SK024は長軸長64cm、短軸長56cmの不整円形で深さは38cmである。(6)SK025は長軸長50cm、短軸長40cmの不整円形で深さは最深で25cmである。(6)SH026は長軸長42cm、短軸長38cmの不整円形で深さ54cmである。

出土遺物　26は(6)SH026出土で堀之内式の深鉢口縁部である。その他の遺構からは図示できる遺物は出土しなかった。

時期　遺物の出土があった遺構については、数量が少ないため判断が難しいが堀之内式期と思われる。それ以外の遺構もほぼ同じ時期と推測される。

(15)調査区土坑・ピット（第154・155・157・158図、図版74・75）

状況　15次調査区の遺構群を第154図に掲載した。そのうち詳細図が作成されたものについては、第155図に拡大して再掲載している。これらの遺構については概ね径40cmを目安として、それより大きいものをSK、小さいものをSHとして遺構番号を付している。遺構の性格を反映したものではないことをお断りしておく。北側において特に密集している状況であるが、配列などに規則性は見出せず、掘立柱建物などの存在を想定するのは困難である。

出土遺物　遺物のうち詳細図があるものについてはそれぞれの項で述べることとし、ここでは第154図にしか掲載されなかった遺構から出土した遺物について説明する。36・37は(15)SK126出土の同一個体で、堀之内式の深鉢口縁部である。38は(15)SK136出土で、堀之内式の深鉢胴部である。39・40は(15)SK137出土で、39は称名寺式の深鉢口縁部、40は堀之内式の深鉢胴部である。41は(15)SK144出土で堀之内式の深鉢胴部である。42は(15)SK145出土で堀之内式の注口土器口縁部である。46は(15)SK146出土で後期と思われる器形復元ができる深鉢口縁部である。43は(15)SK147出土で称名寺式の深鉢胴部である。44は(15)SK148出土で黒浜式の深鉢胴部である。45は(15)SK150出土で後期と考えられる深鉢底部である。47・48は(15)SH161出土で、47は堀之内式の深鉢口縁部、48は胴部である。49は(15)SH165出土で堀之内式の深鉢口縁部である。50は(15)SH168出土で堀之内式か加曽利Ｂ式の深鉢口縁部である。51は(15)SH174出土で堀之内式の深鉢胴部である。52・53は(15)SH175出土で堀之内式の深鉢胴部である。54～56は(15)SH176出土で54は堀之内式の深鉢口縁部、55は胴部、56は底部である。57は(15)SH181出土で称名寺式の深鉢胴部である。58は(15)SH183出土で後期と思われる深鉢胴部である。59は(15)SH186出土で堀之内式の深鉢口縁部（ただし口唇は欠損）である。60は(15)SH198出土で後期と思われる深鉢胴部である。

時期　遺物の出土がなかった遺構も存在するので一概には言えないが、多くの遺構が堀之内式を中心とする後期であると考えられる。

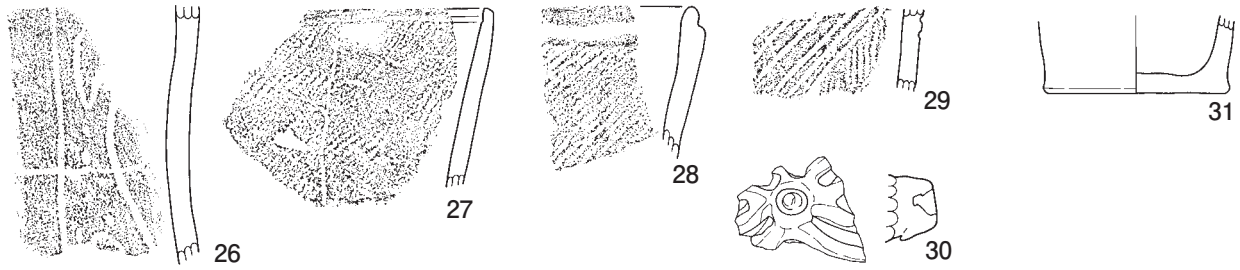
(15)SK114（第155・156図、図版15・74）

状況　２基の土坑が重なった状況である。北側をＡ、南側をＢとすると、Ａは長軸長約85cm、短軸長68cmの不整円形を呈する。断面は浅い椀形で深さは20cmである。Ｂは直径82cmの正円に近い不整円形である。断面は浅い椀形で深さは25cmである。土層断面からＢが古くＡが新しいと判断される。

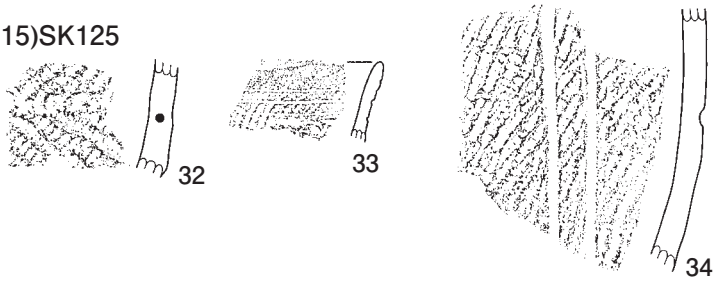
出土遺物　２点図示したが、ＡとＢのどちらに帰属するかは明らかでない。１は堀之内式の深鉢胴部である。２は縄文施文の深鉢胴部で、おそらく後期であろう。

時期　数量が少ないため判断が難しいが堀之内式期と思われる。

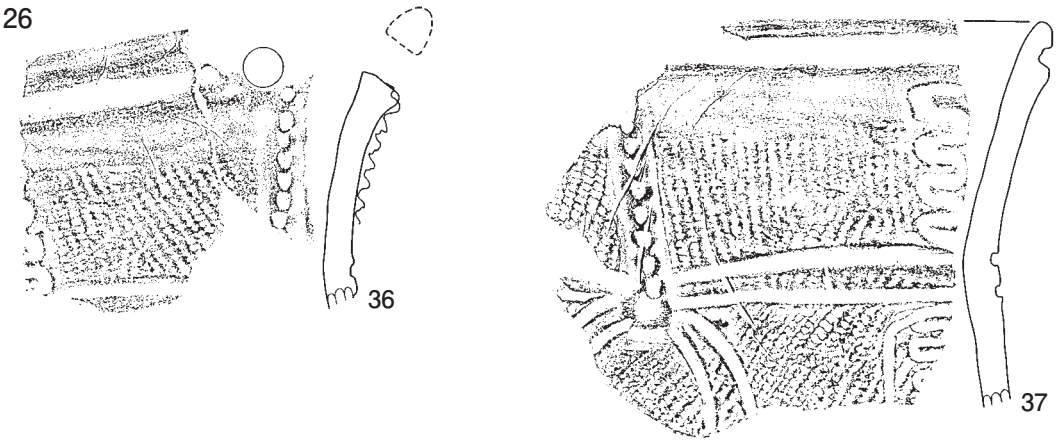
(15)SK123



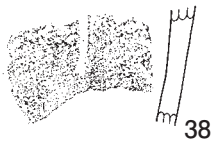
(15)SK125



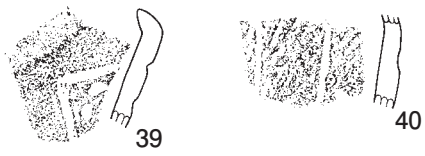
(15)SK126



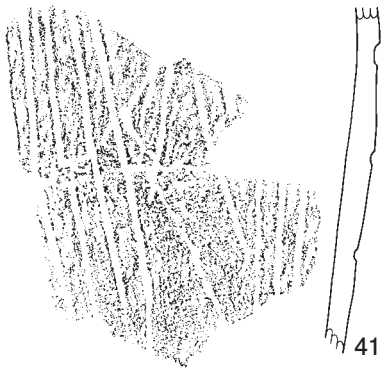
(15)SK136



(15)SK137



(15)SK144

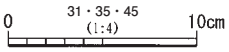


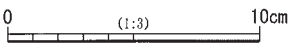
(15)SK145

(15)SK147

(15)SK148

(15)SK150





第 157 図　(15)SK123・125・126・136・137・144・145・147・148・150 土坑出土遺物

(15)SK115（第155・156図、図版15・74）

状況　これも２基の土坑が重なった状況である。南西側をＡ、北東側をＢとすると、Ａは径45cm～55cmの不整円形を呈し、断面方形で深さは55cmである。Ｂは長軸長約115cm、短軸長75cmの不整円形を呈し、断面皿状で深さは18cmである。Ｂが古くＡが新しい。

出土遺物　５点図示したが、ＡとＢのどちらに帰属するかは明らかでない。６～８は堀之内式の深鉢口縁部、９・10は胴部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK116（第155・156図、図版16・74）

状況　径110cmの不整円形を呈する。断面皿状で深さは17cmである。

出土遺物　11は黒浜式の深鉢口縁部である。12～14は堀之内式の深鉢胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

(15)SK117（第155・156図、図版16・74）

状況　開口部は直径62cmのほぼ正円形を呈する。断面は不整形で特に西側の壁は不安定である。覆土の１層と２・３層は別遺構かもしれない。深さは44cmである。

出土遺物　３・４は堀之内式の深鉢胴部、５は底部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK118（第155・156図、図版16・74）

状況　(15)SK117に隣接する。長軸長92cm、短軸長84cmの不整円形を呈する。断面逆台形だが床面は西方向に下り傾斜する。深さは最深で26cmである。

出土遺物　15は称名寺式の深鉢胴部である。16は堀之内式の深鉢口縁部、17は深鉢胴部、18は注口土器胴部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

(15)SK119（第155・156図、図版16・74）

状況　長軸長126cm、短軸長45cmの長楕円形を呈する。断面皿状であるが中央部にピット状の掘込みが存在する。深さは最深で20cmである。

出土遺物　19は後期と思われる深鉢口縁部である。

時期　縄文施文のみの深鉢口縁部しか出土していないので判断が難しいが、後期であろう。

(15)SK120（第155・156図、図版16・74）

状況　長軸長83cm、短軸長68cmの不整円形を呈する。断面皿状で深さは12cmと浅い。

出土遺物　20は器形復元できる深鉢である。縄文施文のみのため型式の判断は難しいが、後期であろう。21は堀之内式の深鉢口縁部である。

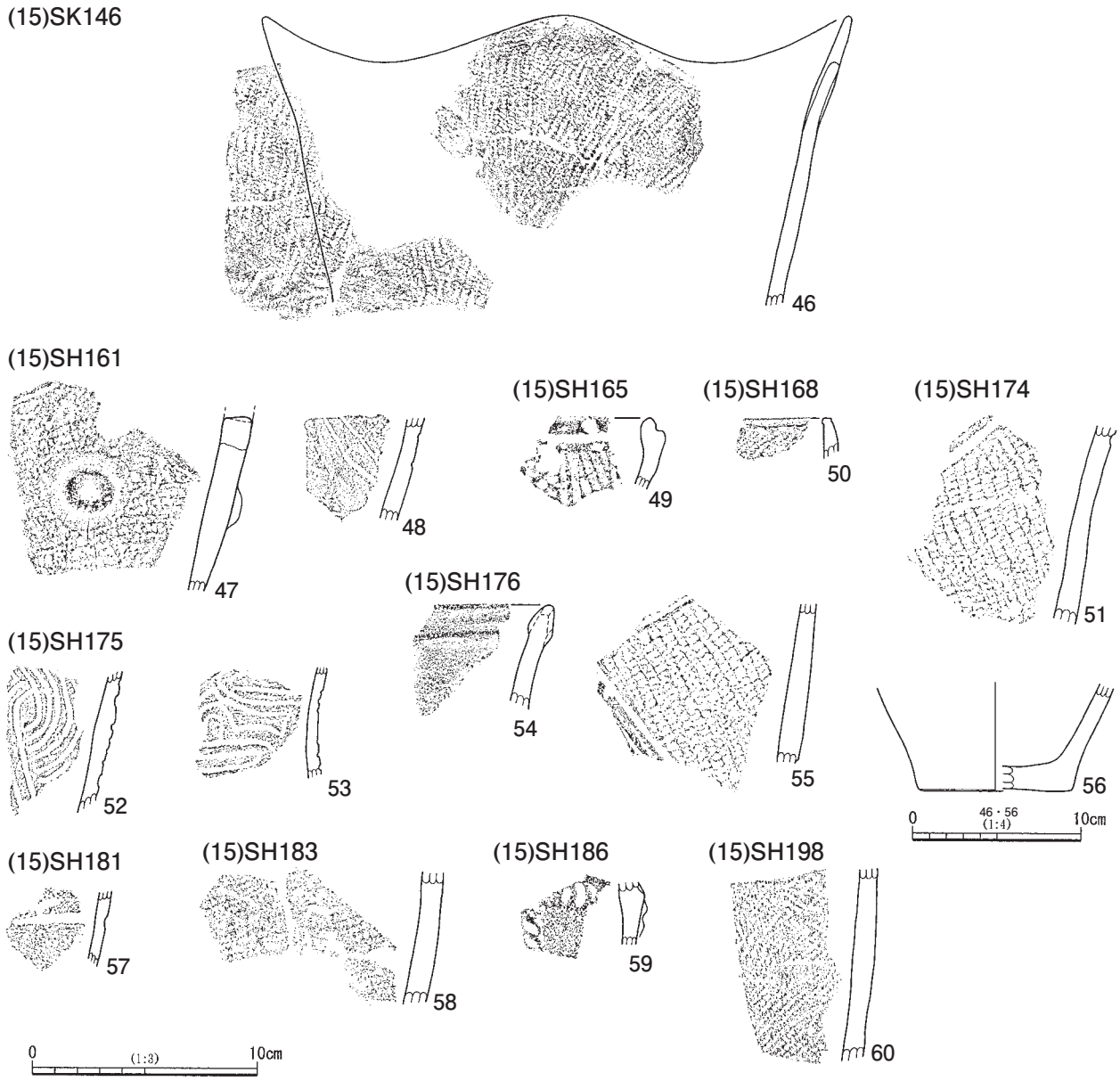
時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK121（第155・156図、図版74）

状況　開口部は径52cm～58cmの楕円形を呈する。壁の途中に段状の屈曲があり、それより上は断面椀形、下は逆台形を呈する。覆土の１・２層と３層は別遺構の可能性がある。深さは50cmである。

出土遺物　22は堀之内式の深鉢胴部である。23は縄文施文のみの深鉢胴部で、おそらく後期であろう。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。



第158図　(15)SK146土坑、SH161・165・168・174～176・181・183・186・198ピット土坑出土遺物

(15)SK122（第155・156図、図版74）

状況　径64cmのほぼ正円形を呈する。断面逆台形で深さは30cmである。

出土遺物　24は堀之内式の深鉢胴部、25は底部である。

時期　出土遺物から堀之内式期と考えられる。

(15)SK123（第155・157図、図版16・75）

状況　長軸長130cm、短軸長80cmの不整形を呈する。掘上がりは土坑３基が連なったような状況である。断面は椀形を呈する。深さは南東部が最も深く46cmである。

出土遺物　26は称名寺式の深鉢胴部である。27・28は堀之内式の深鉢口縁部、29・30は胴部である。30は円形の突起が剥落したものである。31の後期土器の底部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

(15)SK124（第155図）

状況　直径78㎝のほぼ正円形を呈するが、坑底はやや不整円形である。断面皿状で深さは16㎝である。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(15)SK125（第155・157図、図版75）

状況　径60㎝の正円に近い不整円形である。断面逆台形で、深さは56㎝である。

出土遺物　32は黒浜式の深鉢胴部である。33は堀之内式の深鉢口縁部、34は胴部、35は底部である。

時期　主たる出土遺物は堀之内式であり、該期と判断される。

2　南側調査区の遺構群

南側調査区の遺構は北側とは異なり、かなり散漫な検出状況である。全体としては南東側が開口した半円形の配置であるが、遺構密度は低い。ただし台地自体に浸食や後世の改変などが認められるため、当初の状態とは異なっている可能性はある。中心となる時期は前期中葉の黒浜式期である。なお、土坑については形状など不自然なものがあり、人為的な遺構ではない可能性もあるが、ここでは調査時の見解に従っている。

(21)SI001（第159～161図、図版16・17・76・96・98）

形状と規模　長軸は東壁5.2m、西壁が約5.6m、短軸は北壁が4.0m、南壁が約4.8mの台形に近い隅丸方形を呈する。軸方向はN-10°-Wである。全体に撹乱が多く遺存状況は悪い。

内部の状況　断面は逆台形を呈するが、遺構確認面は北方向及び東方向に向かって下り傾斜しており、北及び東壁はかろうじて立ち上がりが検出できる状況である。深さは最深で20㎝を測る。覆土中には貝層が堆積しており、特に東部にやや規模の大きな堆積が見られる。30㎝四方のコラムサンプルを２箇所で採取した。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉　北東隅近くから１基検出された。長軸長63㎝、短軸長55㎝の不整円形を呈する。断面皿状であるが南が浅く北方向へ下り傾斜する。深さは最深で13㎝である。覆土に焼土が含まれるものの量は少なく、使用頻度は低かったと思われる。

ピット　９基検出されている。東西それぞれの壁に沿って並ぶような配置である。いずれも深くて規模も大きく柱穴であろう。

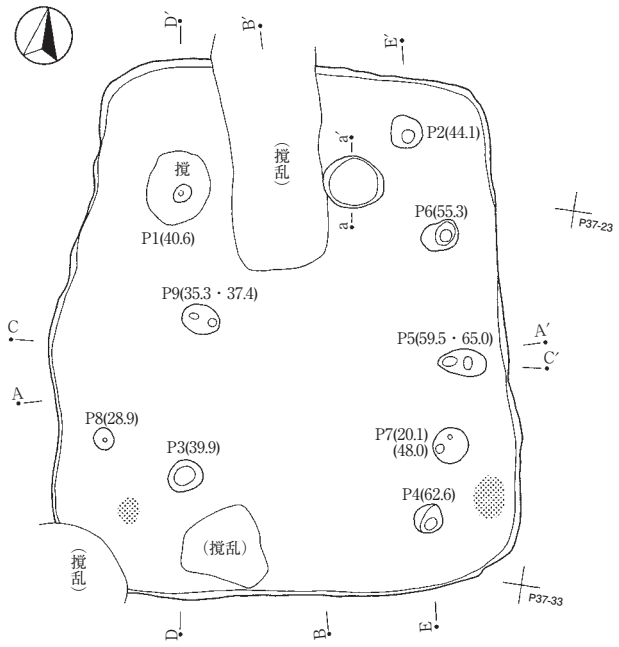
出土遺物　１～５は黒浜式の器形復元できる深鉢である。１は地文が撚糸文で、沈線で菱形の意匠を巡らせる。焼成は良好である。６～35は黒浜式の深鉢口縁部、36～46は胴部である。47は植房式とみられる。48は磨製石斧である。49・50は軽石製品である。

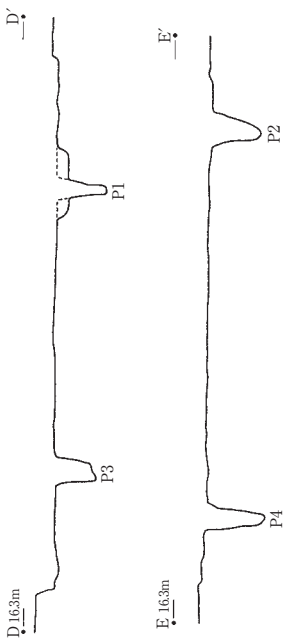
時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(21)SI003（第162～164図、図版17・77・78・96）

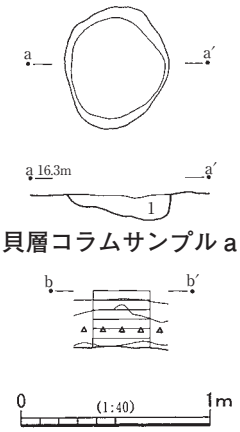
形状と規模　長軸は東壁が5.3m、西壁が5.6m、短軸は北壁が4.0m、南壁が4.4mの台形に近い隅丸方形を呈する。軸方向はN-30°-Wである。

内部の状況　断面は逆台形を呈するが、遺構確認面は北方向及び西方向に向かって下り傾斜しており、北及び西壁はかろうじて立ち上がりが検出できる状況である。深さは最深で36㎝を測る。覆土内には貝層が堆積しており、住居全体に広がるが、中央部にはやや大きな撹乱が見られる。30㎝四方のコラムサンプル





炉

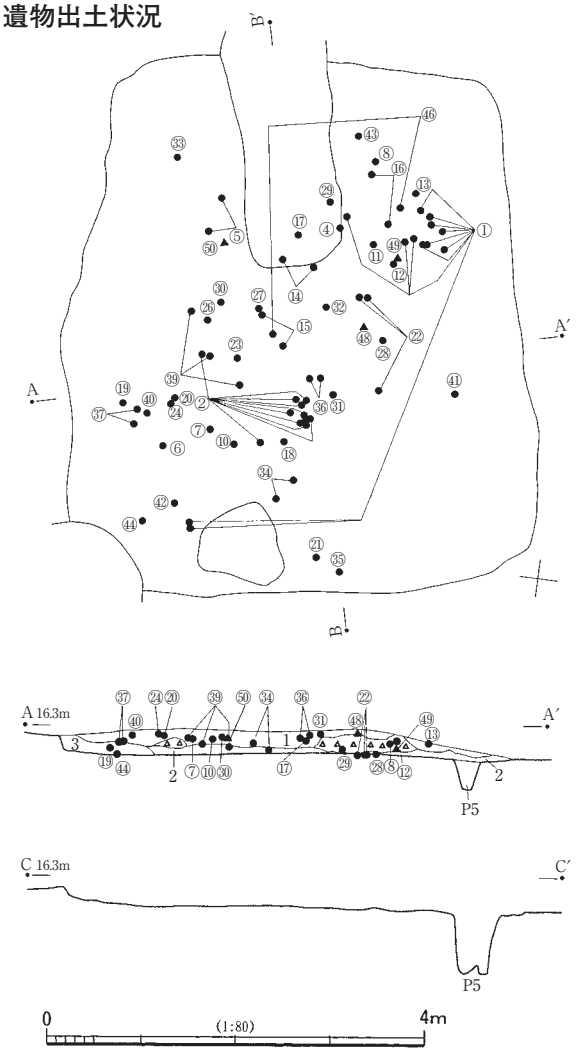


貝層コラムサンプル a

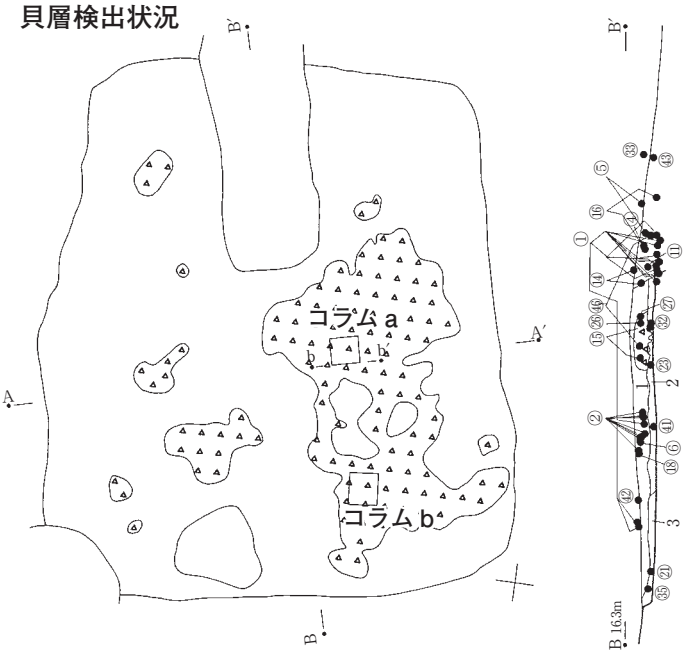
(21)SI001 炉

1　暗褐色土　φ～5㎜焼土粒・φ5～7㎜被熱ローム粒少混

遺物出土状況



貝層検出状況



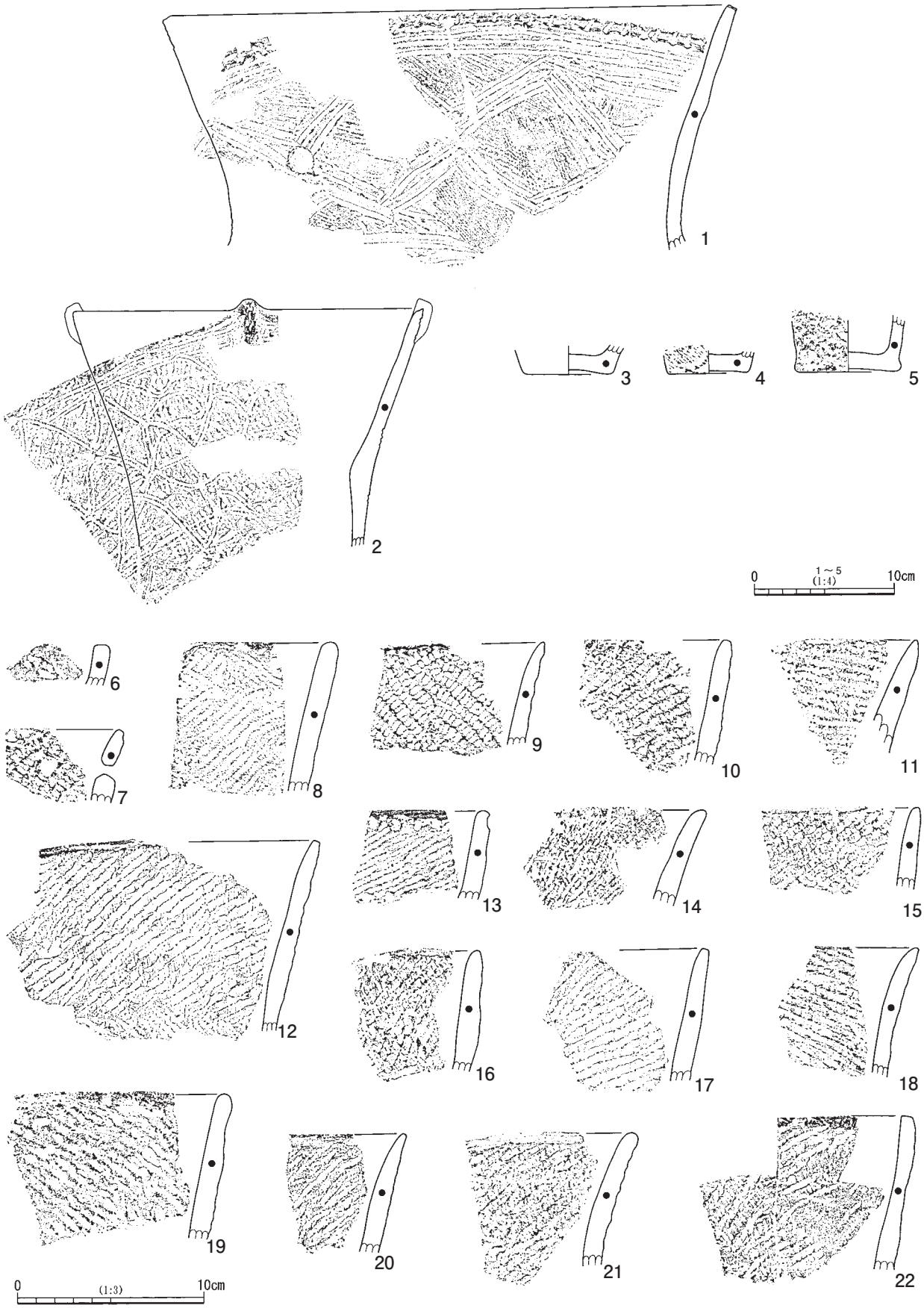
(21)SI001

1　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや弱

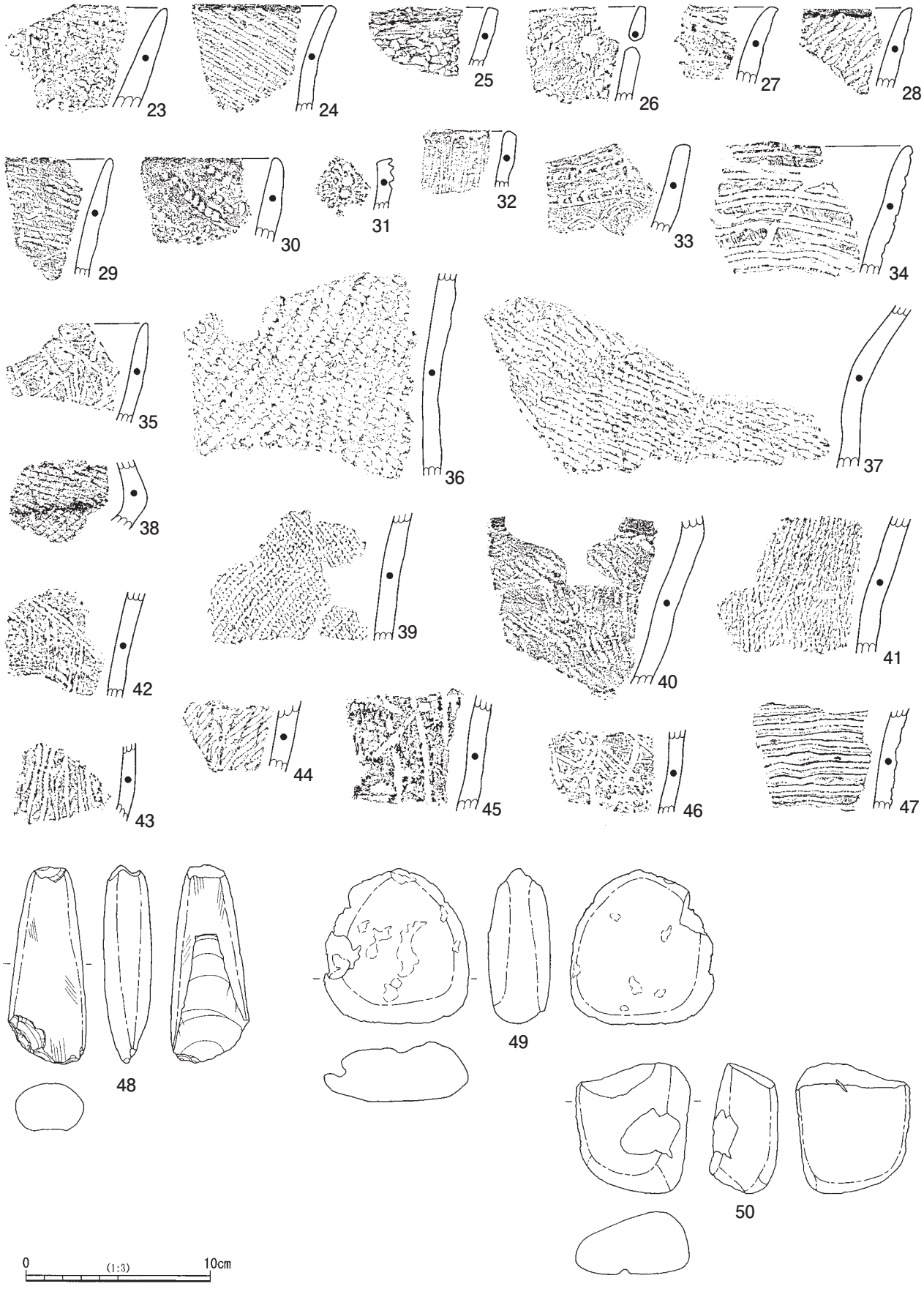
2　暗褐色土　ローム粒・褐色土ブロック少混、しまりやや弱いが1より強い

3　暗褐色土　ローム粒少混、ロームブロック微混、しまりやや強

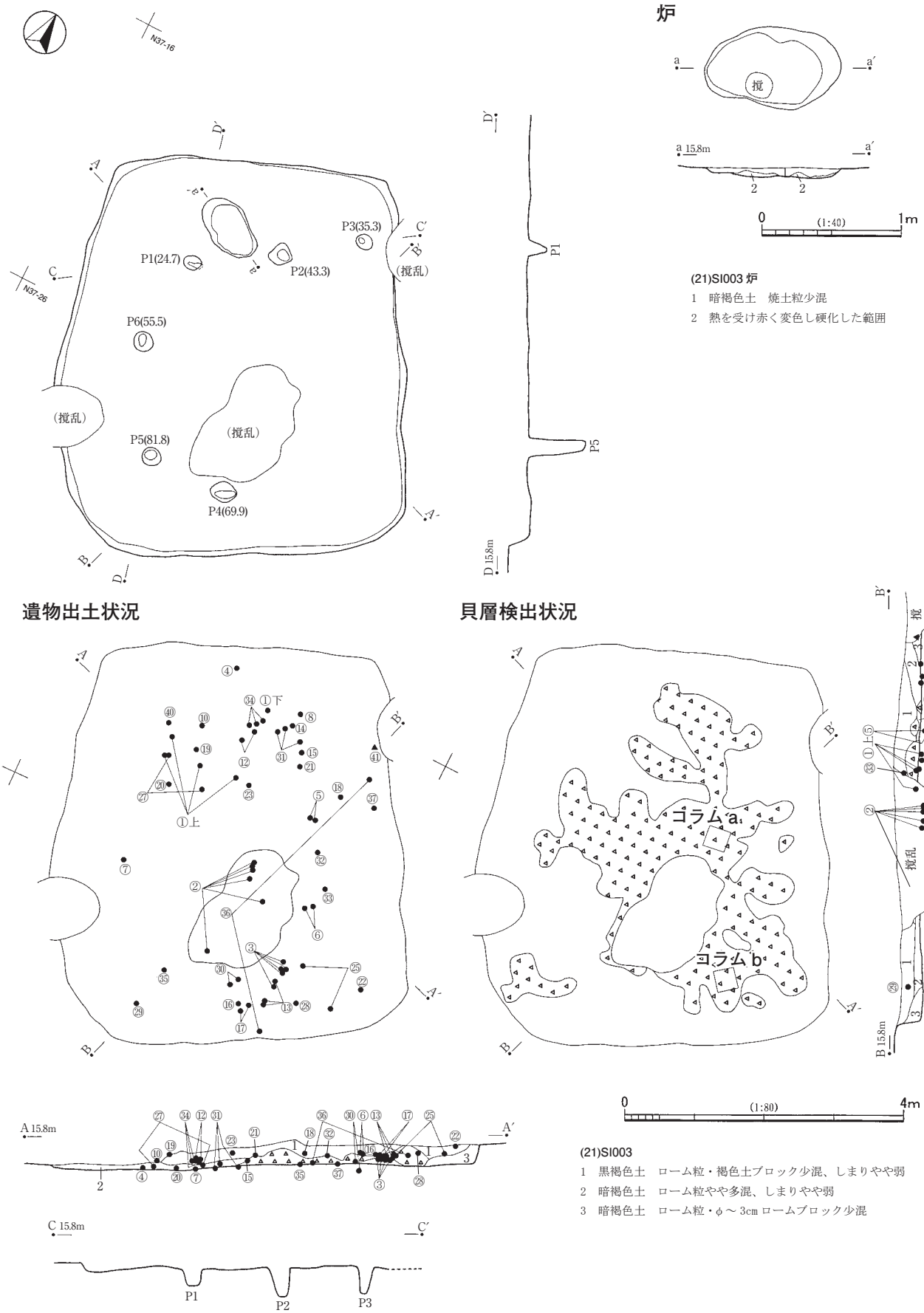
第 159 図　(21)SI001 住居跡



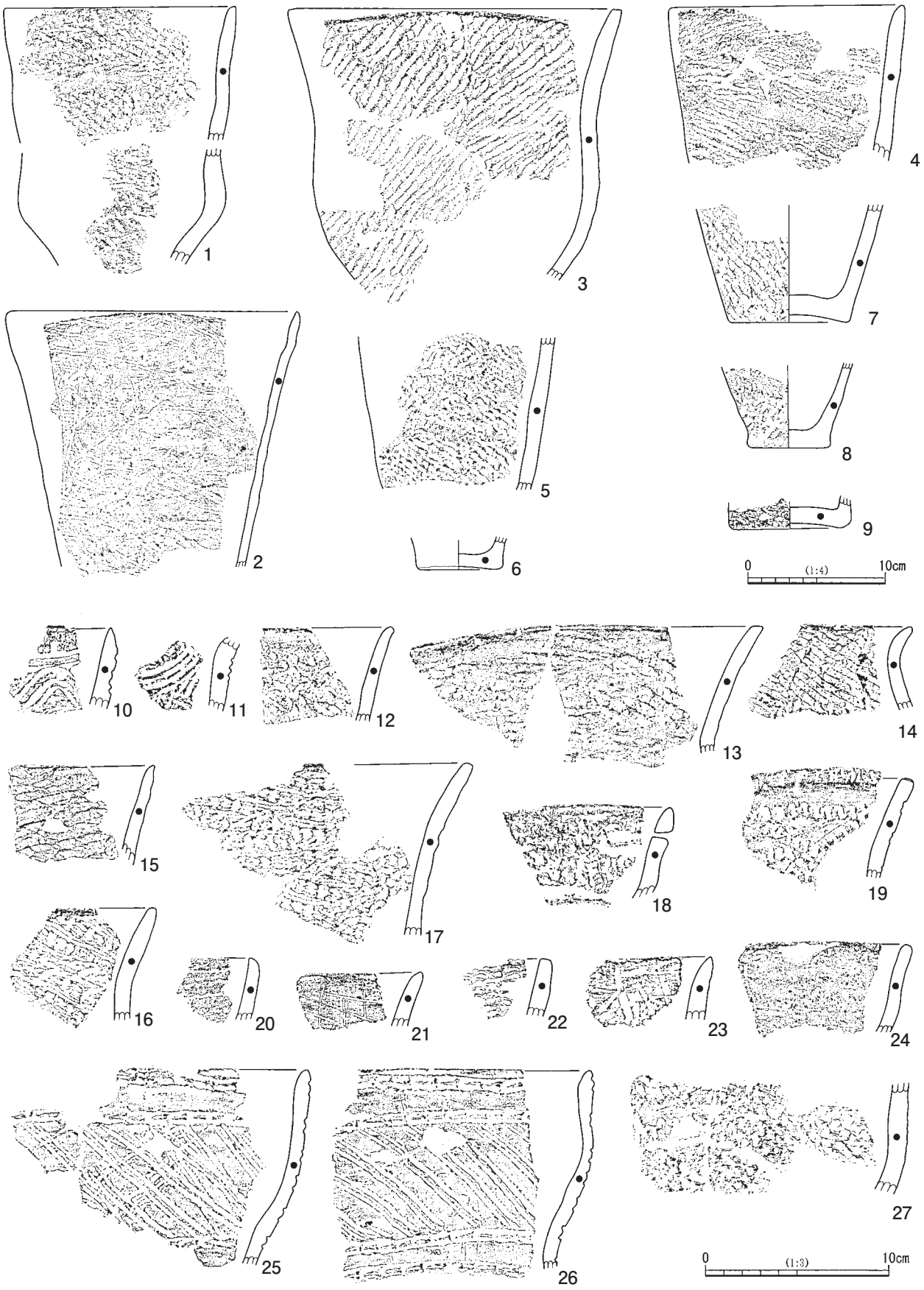
第 160 図　(21)SI001 住居跡出土遺物（１）



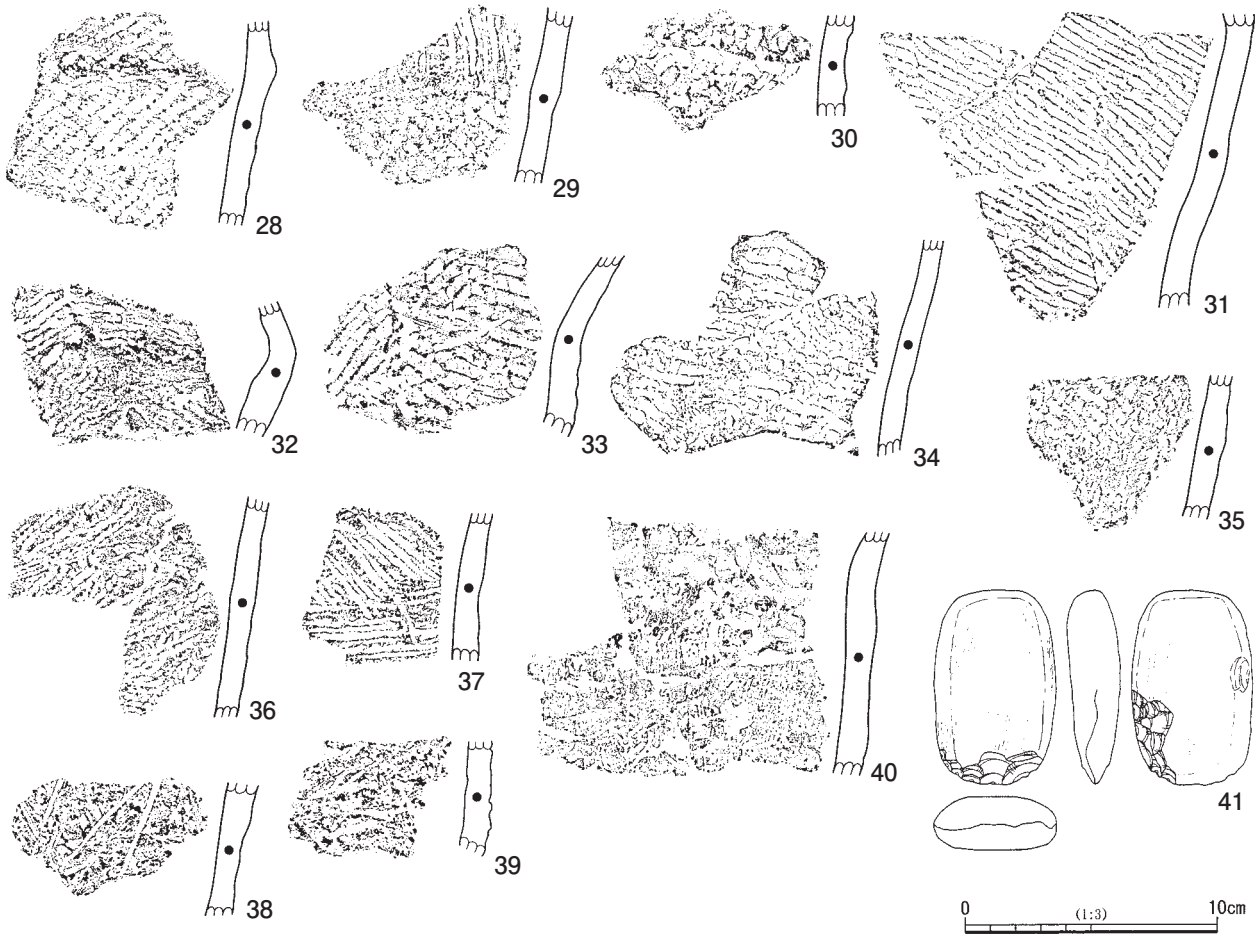
第 161 図　(21)SI001 住居跡出土遺物（２）



第 162 図　(21)SI003 住居跡



第 163 図　(21)SI003 住居跡出土遺物（１）



第 164 図　(21)SI003 住居跡出土遺物（２）

を２箇所で採取した。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

炉　北壁付近で１基検出された。長軸長98㎝、短軸長58㎝の不整円形を呈する。断面皿状で、深さは６㎝と浅い。床面は熱を強く受けて硬化が著しく、使用頻度は高かったと考えられる。

ピット　全部で６基検出されている。半円形を描くように配置されるが、東側は検出されなかった。いずれも深くてしっかり掘り込まれており、柱穴であろう。

出土遺物　10は関山式の深鉢口縁部、11は胴部である。１～９は黒浜式の器形復元できる深鉢である。12～26は黒浜式の深鉢口縁部、27～40は胴部である。41は片刃の礫斧である。

時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI156（第165図、図版17・78）

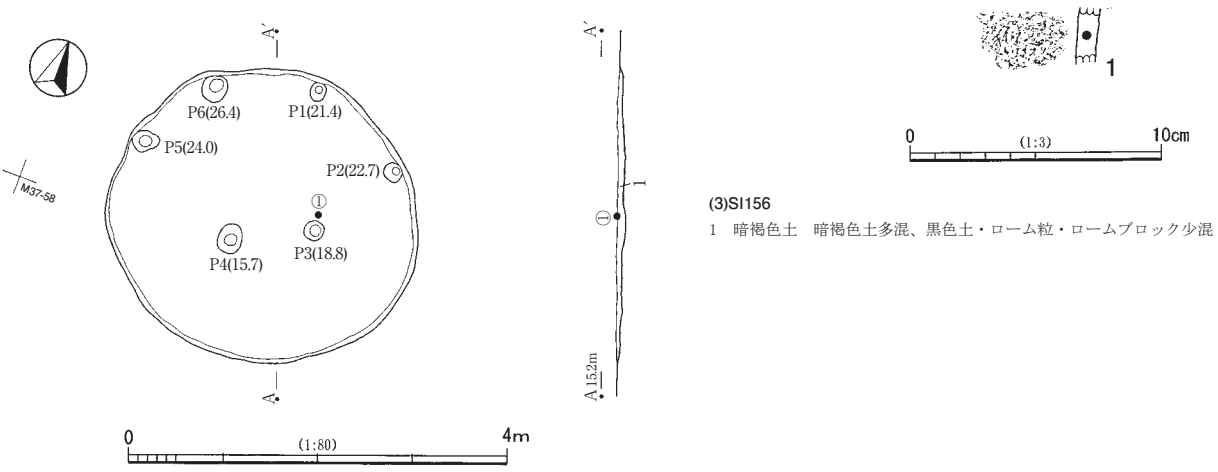
形状と規模　東西長3.3m、南北長3.1mの楕円形を呈する。

内部の状況　断面皿状で、壁の立ち上がりは緩やかである。深さは８㎝とごく浅い。床面は平坦で硬化面は検出されなかった。

炉　検出されていない。

ピット　全部で６基検出されている。住居のプランより一回り小さく円弧を描くように配される。全体に浅く柱穴かどうかは疑問が残る。

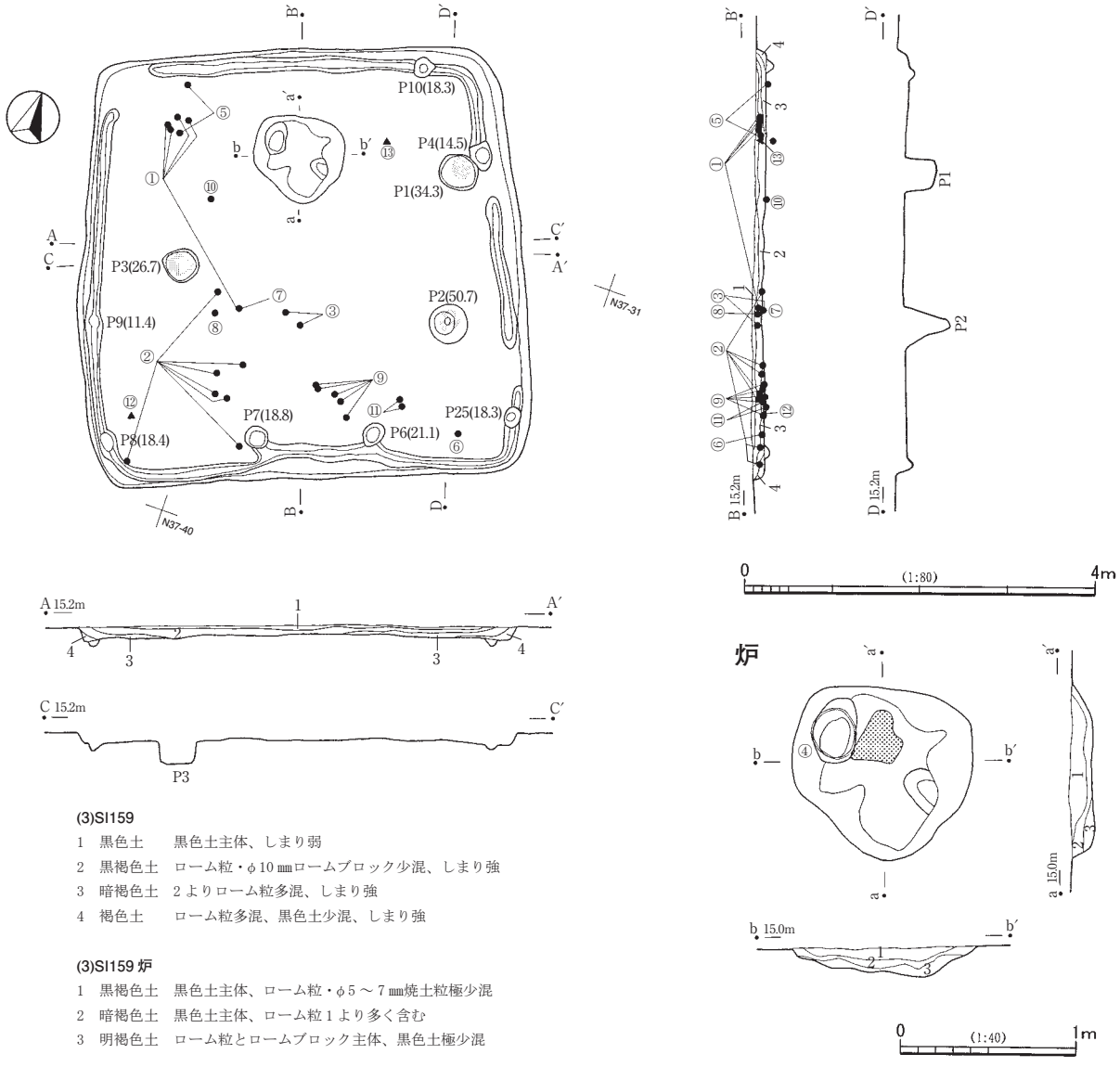
出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。１は黒浜式の深鉢胴部である。



(3)SI156

1　暗褐色土　暗褐色土多混、黒色土・ローム粒・ロームブロック少混

第 165 図　(3)SI156 住居跡、出土遺物



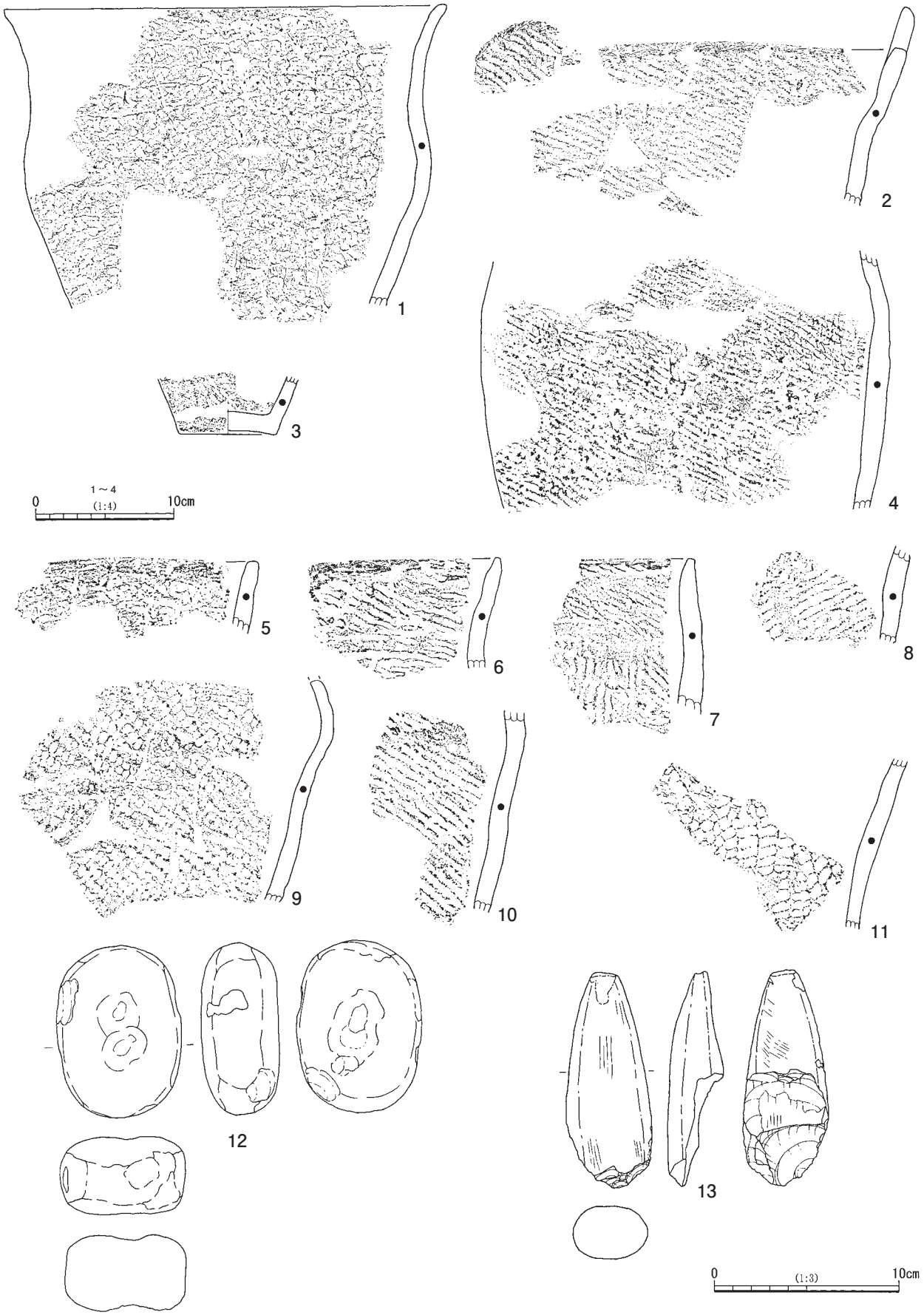
(3)SI159

1　黒色土　　黒色土主体、しまり弱
2　黒褐色土　ローム粒・φ10 ㎜ロームブロック少混、しまり強
3　暗褐色土　2 よりローム粒多混、しまり強
4　褐色土　　ローム粒多混、黒色土少混、しまり強

(3)SI159 炉

1　黒褐色土　黒色土主体、ローム粒・φ5 ～ 7 ㎜焼土粒極少混
2　暗褐色土　黒色土主体、ローム粒 1 より多く含む
3　明褐色土　ローム粒とロームブロック主体、黒色土極少混

第 166 図　(3)SI159 住居跡



第 167 図　(3)SI159 住居跡出土遺物

時期　遺物の数量が少ないため判断が難しいが、黒浜式と考えられる。

(3)SI159（第166・167図、図版17・78・79・96・97）

形状と規模　東西長5.1m、南北長5.0mの正方形に近い隅丸方形を呈する。南壁沿いにピットが２基存在し出入口施設と考えられ、北壁寄りに炉が存在することから、出入口の中心と炉の中心を結ぶ線を主軸と考えると、主軸方位はN-20°-Eである。

内部の状況　断面逆台形で、壁の立ち上がりは直立に近い。深さは最深でも16cmと浅い。壁に沿って周溝が掘られており、北西隅と東壁の一部を除いて全体に巡る。南側は住居のやや内側に入り込み、壁との間には20cmほどの隙間が生じている。床面はほぼ平坦であるが、中心が高く壁に向かってわずかに下り傾斜している。硬化面は検出されなかった。

炉　中央やや北寄りで１基検出された。東西長104cm、南北長98cmの不整形を呈する。断面皿状であるが床面は安定しない。深さは最深で18cmである。北西部に土器が埋設されている。覆土中には焼土が含まれるものの少量であり、床面にも熱を受けた痕跡はあまり認められず、使用頻度は低かったと思われる。

ピット　全部で10基検出されている。そのうちP1～3は径35cm～40cmと比較的大きく、主柱穴と思われる。P4～10は周溝内もしくは壁際に掘られているもので、壁柱穴と思われる。特にP6・7は炉と反対側の壁に沿って約１mの間隔を開けて配されており、出入り口である可能性が強い。

出土遺物　１・３・４は黒浜式の器形復元できる深鉢である。４は炉の中に埋設されていた。２・５～７は黒浜式の深鉢口縁部、８～11は胴部である。12は敲石である。13は磨製石斧である。

時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI160（第168・169図、図版17・18・79・80）

形状と規模　長軸長5.3m、短軸長4.9mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-30°-Eである。

他遺構との重複関係　西隅に(3)SK189が、南東壁際に(3)SK190が存在する。いずれも住居より新しい。

内部の状況　断面皿状で深さは最深でも10cmと浅い。中央やや西寄りに小規模な貝ブロックが存在する。床面はほぼ平坦で硬化面が検出されているが、この硬化面は住居の形状とは異なり、南北方向を軸とするような方形を呈している。覆土の観察では複数の竪穴住居が重なっている状況はうかがえないが、ピットは硬化面の境界に沿って掘られており、当初硬化面に即した形状の竪穴住居が構築され、後に拡張されて現在確認できる形状になったと推測される。

炉　住居中央よりやや北西へ寄った位置に存在する。長軸長65cm、短軸長60cmの不整円形を呈する。断面皿状であるが、北側はピット状に掘り窪められ、土器の胴部が埋設されている。深さは最深で20cmである。覆土に含まれる焼土粒は少量であり、床面に熱を受けた痕跡も少なく、使用頻度は低かったと思われる。

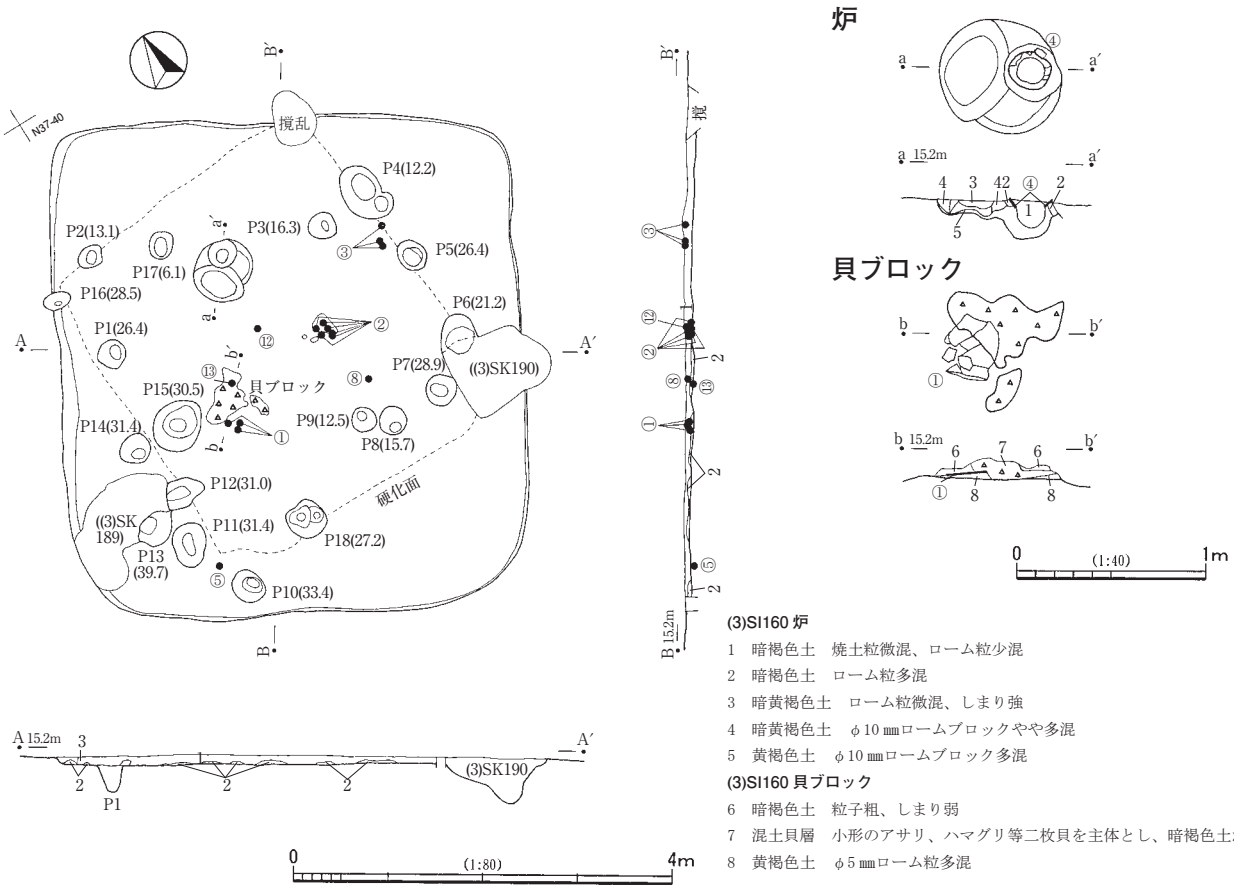
ピット　全部で17基検出されている。壁ではなく内部の硬化面に沿ったような配置となっている。P5・15・18などが主柱穴であろう。

出土遺物　１～４は黒浜式の器形復元できる深鉢である。４は炉に埋設されていた。５～11は黒浜式の深鉢口縁部、12は胴部、13は底部である。

時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK189（第168図、図版17）

状況　長軸長105cm、短軸長65cmの不整円形土坑と、長軸長70cm、短軸長40cmの不整円形土坑が２基重



(3)SI160 炉

1　暗褐色土　焼土粒微混、ローム粒少混
2　暗褐色土　ローム粒多混
3　暗黄褐色土　ローム粒微混、しまり強
4　暗黄褐色土　φ10 ㎜ロームブロックやや多混
5　黄褐色土　φ10 ㎜ロームブロック多混

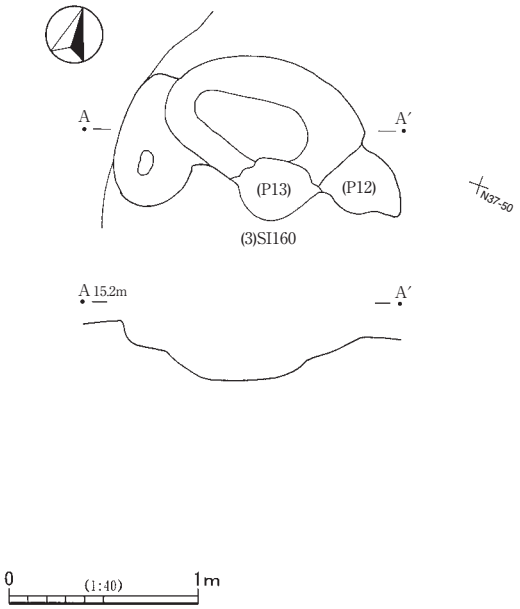
(3)SI160 貝ブロック

6　暗褐色土　粒子粗、しまり弱
7　混土貝層　小形のアサリ、ハマグリ等二枚貝を主体とし、暗褐色土が混入
8　黄褐色土　φ5 ㎜ローム粒多混

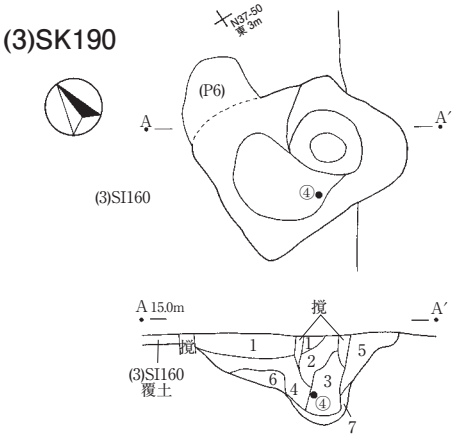
(3)SI160

1　暗褐色土　ローム粒多混、φ10 ㎜ロームブロックやや多混、プラン中心部ほど黒色土多混、しまりやや弱
2　黄褐色土　φ10 ㎜ロームブロック多混、しまりやや弱
3　黄褐色土　ローム粒微混、他の混入物僅少、粒子密、しまりやや弱

(3)SK189



(3)SK190



(3)SK190

1　暗褐色土　ローム粒微混、しまり強
2　暗褐色土　ローム粒少混、しまり強
3　暗黄褐色土　φ5 ㎜ロームブロック微混、しまり強
4　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまり強
5　黄褐色土　ローム粒微混、しまり強
6　黄褐色土　φ50 ㎜ロームブロック主体、暗褐色土混、しまり強
7　暗黄褐色土　φ30 ㎜ロームブロック混、しまりやや弱

第 168 図　(3)SI160 住居跡、(3)SK189・190 土坑

(3)SI160

(3)SK190

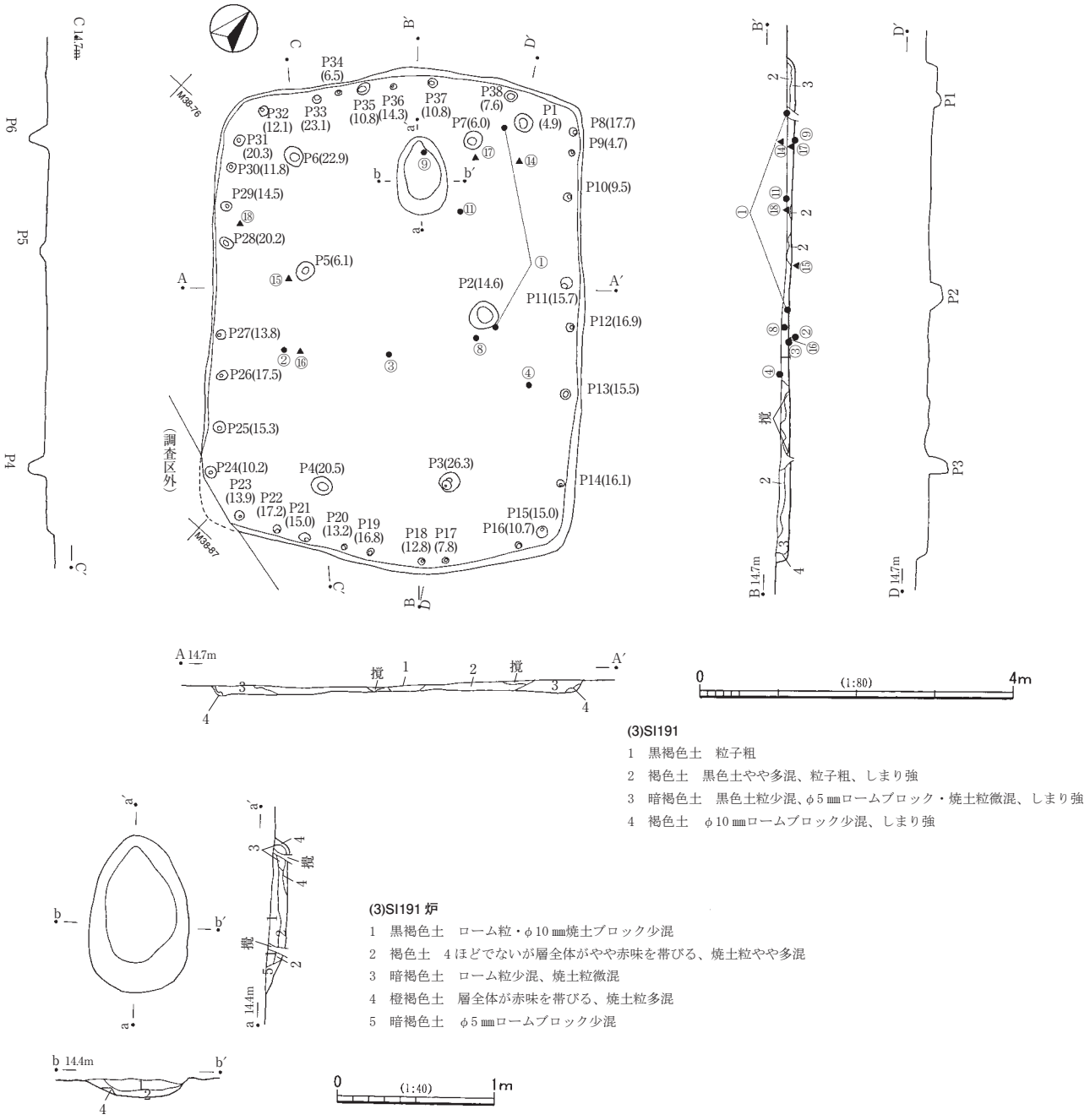
第 169 図　(3)SI160 住居跡、(3)SK190 土坑出土遺物

なったような状況である。断面椀形で深さは遺構確認面から30㎝を測る。記録はないが住居より新しいとの現場所見がある。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　遺物から時期の判断はできないが、(3)SI160の時期から大きく下ることはないと思われる。

(3)SK190（第168・169図、図版17・79）



第170図　(3)SI191 住居跡

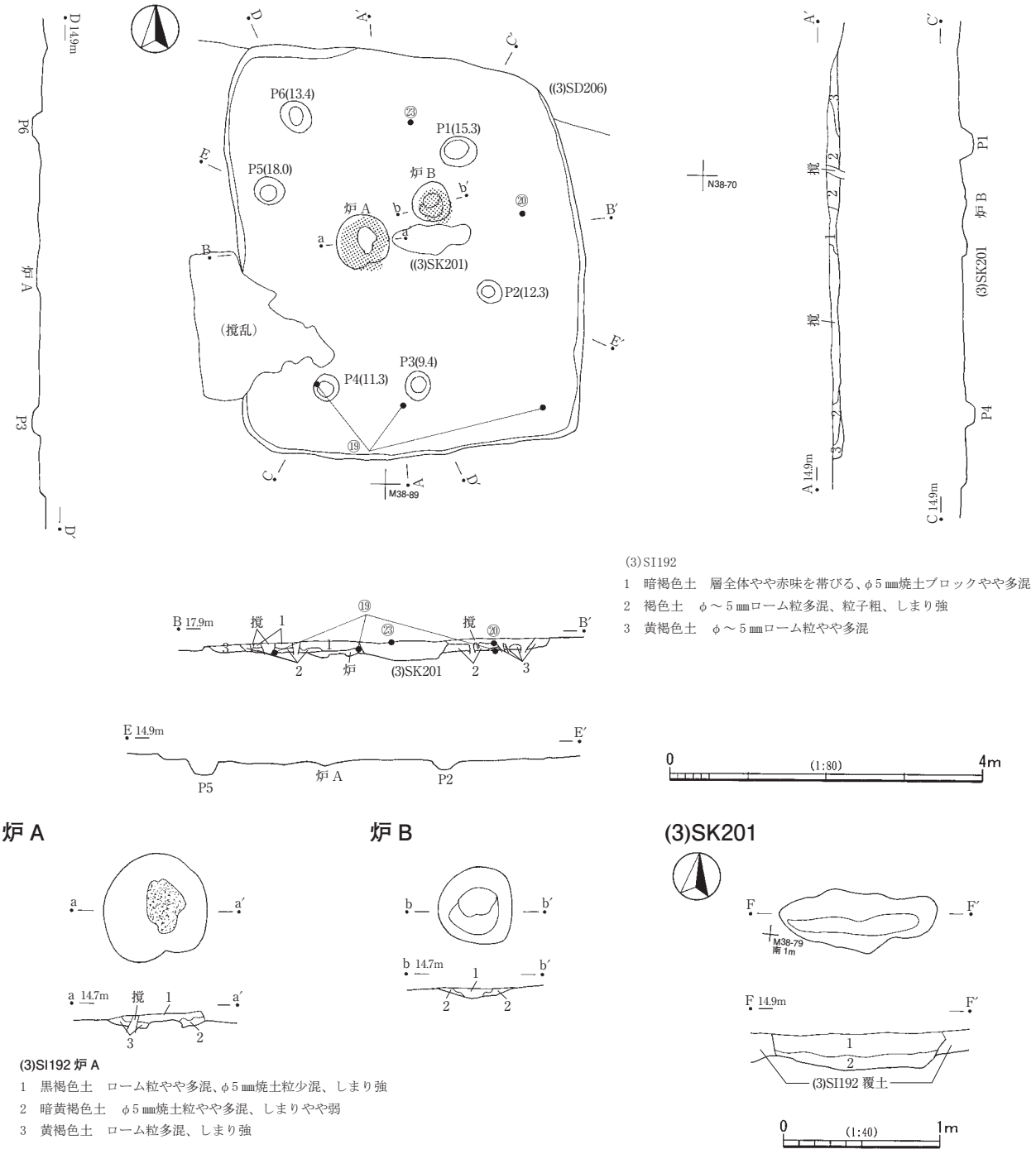
状況　東西長100㎝、南北長75㎝の不整形を呈する。断面椀形で、東側は柱穴状に深く掘り込まれている。深さは最深で47㎝である。住居より新しい。

出土遺物　14は黒浜式の器形復元できる深鉢である。

時期　出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI191（第170・172図、図版18・80・98）

形状と規模　長軸長6.4m、短軸長4.8mの隅丸六角形を呈する。北西壁と南東壁は直線ではなく中央がやや外側に膨らんでいる。主軸方位はN-40°-Wである。



(3)SI192

1　暗褐色土　層全体やや赤味を帯びる、φ5㎜焼土ブロックやや多混

2　褐色土　φ～5㎜ローム粒多混、粒子粗、しまり強

3　黄褐色土　φ～5㎜ローム粒やや多混

炉 A

(3)SI192 炉 A

1　黒褐色土　ローム粒やや多混、φ5㎜焼土粒少混、しまり強

2　暗黄褐色土　φ5㎜焼土粒やや多混、しまりやや弱

3　黄褐色土　ローム粒多混、しまり強

炉 B

(3)SI192 炉 B

1　暗赤褐色土　φ5㎜焼土粒多混、しまりやや弱

2　黄褐色土　被熱したロームブロック混、しまり強

(3)SK201

vv1　暗褐色土　ローム粒多混、やや砂質、しまり強

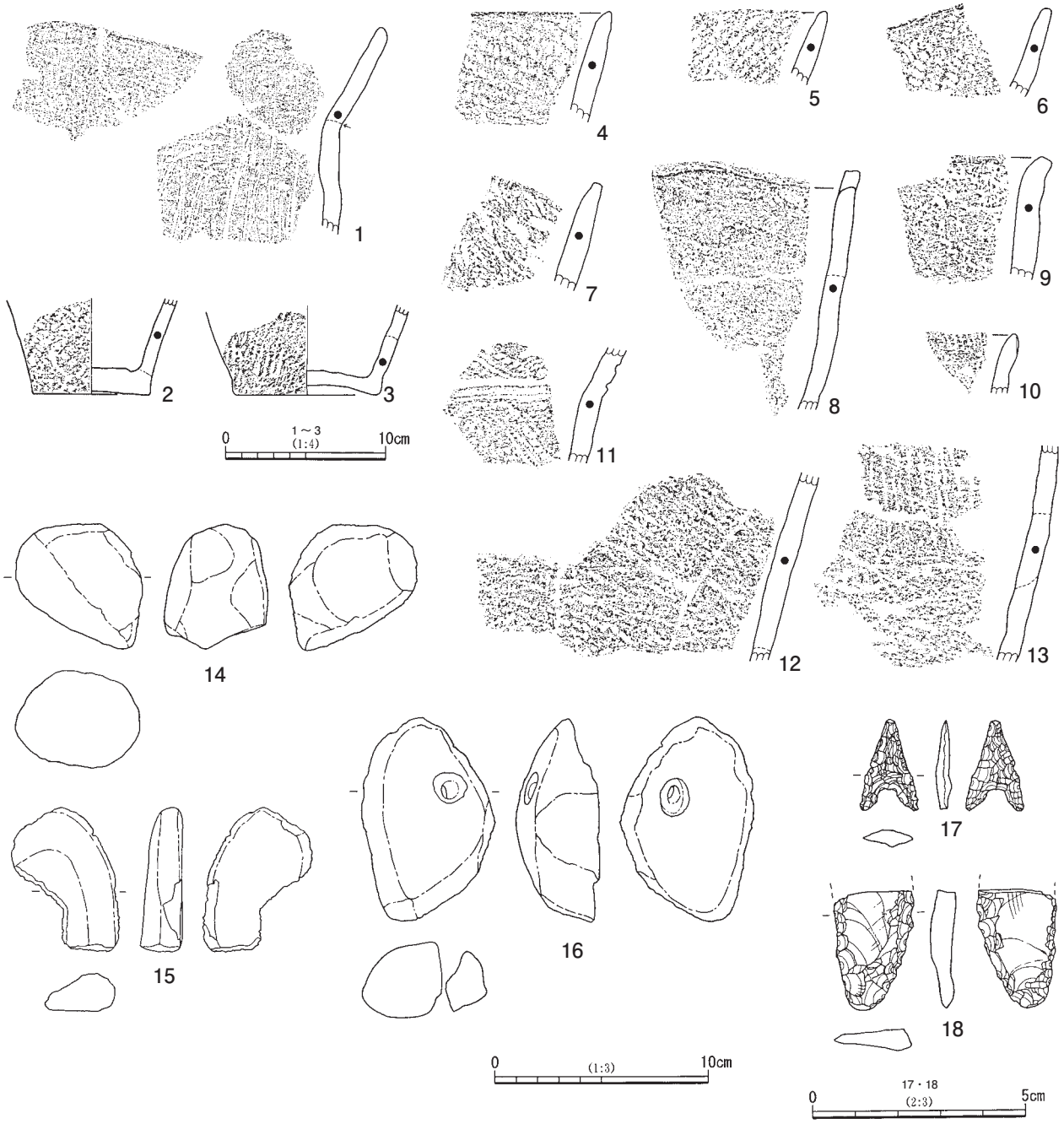
2　黄褐色土　焼土ブロック・φ5㎜ロームブロック少混、しまり強

第 171 図　(3)SI192 住居跡、(3)SK201 土坑

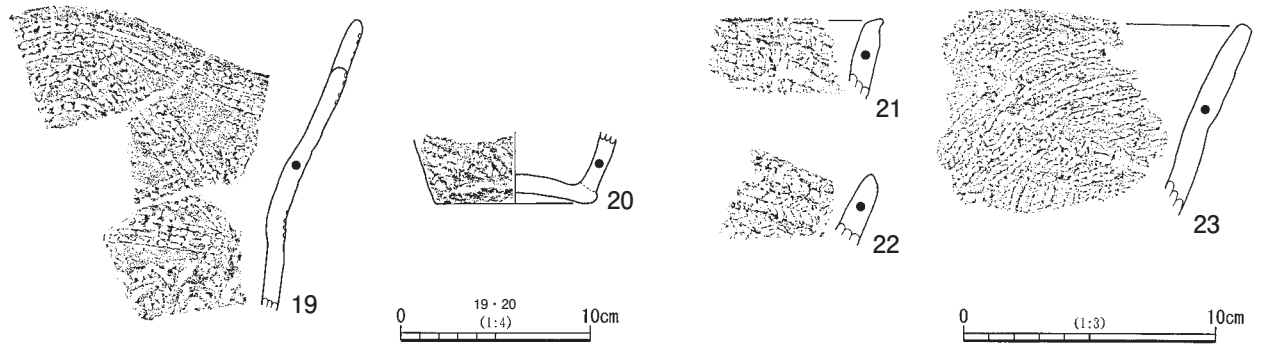
内部の状況　断面は逆台形を呈し、深さは16cmと浅い。床面は概ね平坦であるが中央部がやや高く壁に向かってわずかに下り傾斜する。硬化面は検出されなかった。

炉　北西壁寄りに位置する。長軸長100cm、短軸長64cmの不整円形を呈する。断面皿状で、深さは11cmである。覆土には焼土が多量に含まれ、使用頻度は高かったと考えられる。

(3)SI191



(3)SI192



第 172 図　(3)SI191・192 住居跡出土遺物

ピット　住居内に７基のピットが掘られるほか、壁に沿って31基の小ピットが規則正しく配される。やや浅いが内部のピットが主柱穴で、壁柱穴をもつ構造であろう。

出土遺物　２・３は黒浜式の器形復元できる深鉢底部である。１・４～９は黒浜式の深鉢口縁部、11～13は胴部である。10は浮島式の深鉢口縁部である。14・15は敲石である。16は穿孔のある軽石製品である。17はチャート製の石鏃である。18は縦長の石匙と考えられるが、つまみ部分を含む上部を欠損している。

時期　主たる出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SI192（第171・172図、図版18・80）

形状と規模　北側を中・近世の(3)SD206溝に切られているほか、西壁に大きな撹乱が存在するため、一部推定復元している。長軸長約5.4m、短軸長4.5mの隅丸方形を呈すると思われる。主軸方位はN-10°-Wである。

他遺構との重複関係　中央部に(3)SK201土坑が存在する。土坑の方が新しい。

内部の状況　断面逆台形で深さは15cmである。床面は西へ向かって緩やかに下り傾斜する。また、微妙な凹凸がありやや不安定である。硬化面は検出されなかった。

炉　住居中央よりやや北側と西側に計２基が存在する。西側の炉Aは径65cmの不整円形を呈する。中心に径25cm～35cmの火床面が存在し、周囲を深さ５cmのごく浅い掘込みが囲む。焼土がやや多く堆積しており、使用頻度は高かったと推測される。北側の炉Bは径50cmの不整円形を呈する。断面皿状で深さは６cmとごく浅い。焼土が多量に堆積しており、使用頻度は高かったと推測される。

ピット　全部で６基検出されている。配置は不規則で全体に浅く、柱穴とは考えにくい。

出土遺物　20は黒浜式の器形復元できる深鉢底部である。19・21～23は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期　出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK201（第171図、図版18）

状況　(3)SI192のほぼ中心に存在する。長軸長102cm、短軸長38cmの不整形を呈する。断面は一応逆台形であるが、底面は不安定である。深さは22cmを測り、住居より深い。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　遺物の出土はなく確定できないが、時期は(3)SI192住居より大きく下ることはないと判断される。

(3)SI195（第173・174図、図版18・81・96）

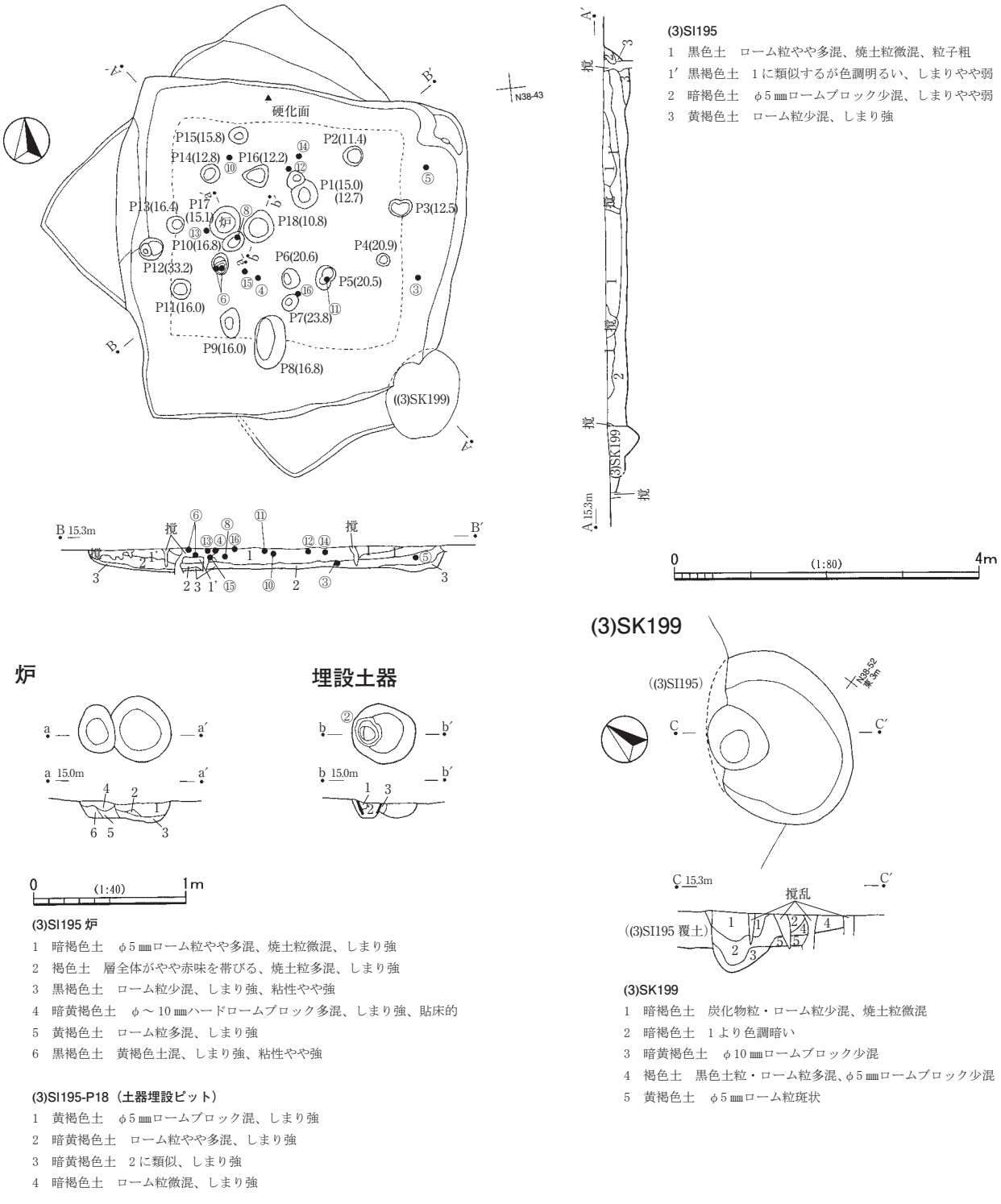
形状と規模　当遺構は２基の方形プランが重なり合ったような状況を呈している。一つは北壁と西壁がそれぞれ4.4m、東壁と南壁がそれぞれ4.0mの不整方形を呈するもので、主軸方位はN-５°-Eである（こちらをAと称する）。もう一つは長辺4.8m、短辺4.4mの長方形を呈するもので、主軸方位はN-30°-Wである（こちらをBと称する）。ただし東隅は検出されなかった。両者の新旧関係は不明である。

他遺構との重複関係　(3)SK199土坑が南西隅に存在する。土坑が新しい。

内部の状況　Aは断面逆台形ではあるが、壁の立ち上がりの状況は一定でなく、西壁はかなり乱れている。深さは最深で35cmである。北東隅に壇状の高まりがある。床面は平坦で、住居外形とほぼ同じ形状の2.8m四方の硬化面が検出されている。Bは断面皿状でごく浅く、特に北側は壁の傾斜がかなり緩やかである。

炉　住居中央よりやや西寄りで検出されている。径42cmの円形を呈し、断面逆台形で深さは12cmである。南側に径25cm～30cmのピットが存在し、炉より古い。また、東側には土器が埋設されている。

ピット　全部で18基検出されている。すべてAの内部である。ただし位置は不規則で、Aのプランとも内



(3)SI195

1　黒色土　ローム粒やや多混、焼土粒微混、粒子粗
1′　黒褐色土　1に類似するが色調明るい、しまりやや弱
2　暗褐色土　φ5㎜ロームブロック少混、しまりやや弱
3　黄褐色土　ローム粒少混、しまり強

(3)SI195 炉

1　暗褐色土　φ5㎜ローム粒やや多混、焼土粒微混、しまり強
2　褐色土　層全体がやや赤味を帯びる、焼土粒多混、しまり強
3　黒褐色土　ローム粒少混、しまり強、粘性やや強
4　暗黄褐色土　φ～10㎜ハードロームブロック多混、しまり強、貼床的
5　黄褐色土　ローム粒多混、しまり強
6　黒褐色土　黄褐色土混、しまり強、粘性やや強

(3)SI195-P18（土器埋設ピット）

1　黄褐色土　φ5㎜ロームブロック混、しまり強
2　暗黄褐色土　ローム粒やや多混、しまり強
3　暗黄褐色土　2に類似、しまり強
4　暗褐色土　ローム粒微混、しまり強

(3)SK199

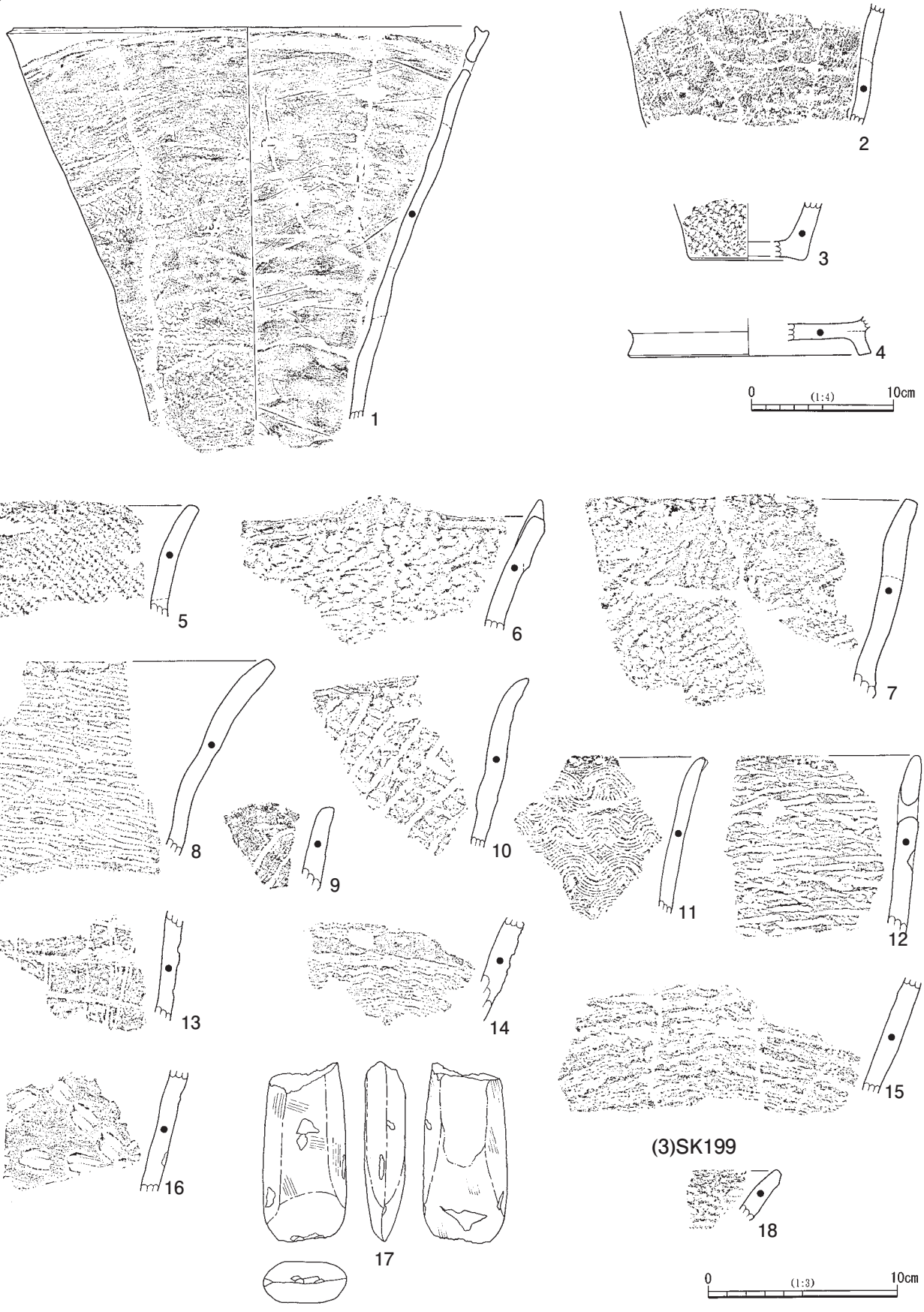
1　暗褐色土　炭化物粒・ローム粒少混、焼土粒微混
2　暗褐色土　1より色調暗い
3　暗黄褐色土　φ10㎜ロームブロック少混
4　褐色土　黒色土粒・ローム粒多混、φ5㎜ロームブロック少混
5　黄褐色土　φ5㎜ローム粒斑状

第173図　(3)SI195住居跡、(3)SK199土坑

部の硬化面ともあまり関係ないように見える。

出土遺物　1～3は黒浜式の器形復元できる深鉢である。1は直線的に外反する器形を呈するもので、焼成は良好である。2は炉の東側に埋設されていた。4は台付土器であるが、上部の構造は不明である。5～12は黒浜式の深鉢口縁部、13～16は胴部である。17は磨製石斧である。

(3)SI195



第 174 図　(3)SI195 住居跡、(3)SK199 土坑出土遺物

時期　出土遺物から黒浜式期に位置付けられる。ただし遺物出土位置はほとんどAの範囲に限られる。

(3)SK199（第173・174図、図版18・81）

状況　長軸長120cm、短軸長100cmの不整円形を呈する。断面椀形で、北西部の住居と接している部分にさらに深いピット状の掘込みが存在する。覆土にはこの掘込みを中心に焼土粒、炭化物粒が混入する。深さは最深で39cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。18は黒浜式の深鉢口縁部である。

時期　数は少ないが出土遺物は黒浜式に位置付けられ、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK151（第175図）

状況　長軸長120cm、短軸長60cmの不整円形で、数字の「８」の字に類似する。２基の土坑が重なっている可能性もある。断面は擂鉢形で深さは39cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK152（第175図、図版18）

状況　東西長145cm、南北長150cmの不整形を呈する。全体は浅い皿状であるが、西部と南東部が更に椀形に窪んでいる。深さは23cmを測る。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK153（第175図、図版18）

状況　長軸長283cm、短軸長35cmのかなり極端な長楕円形を呈する。断面皿状で深さは８cmとごく浅い。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK154（第175・179図、図版18・82）

状況　長軸長116cm、短軸長100cmの不整円形を呈する。断面椀形で深さは33cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。１は諸磯式の深鉢胴部である。

時期　数は少ないが出土遺物は諸磯式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK155（第175図、図版18）

状況　東西長114cm、南北長148cmの不整方形を呈する。北西と北東の隅にピット状の掘込みが認められる。断面椀形で深さは35cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK157（第175・179図、図版19・82）

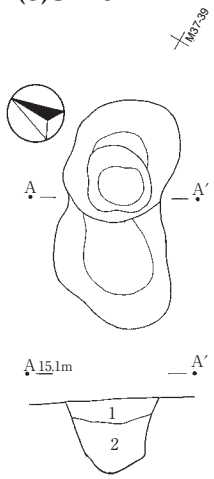
状況　長軸長370cm、短軸長180cmの不整形を呈する。全体としては楕円形であるが、南西部に張出しが存在する。断面皿状であるが、南西部は張出しに続くように一段低く掘り窪められている。深さは最深で40cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。２は黒浜式の深鉢胴部である。

時期　数は少ないが出土遺物は黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

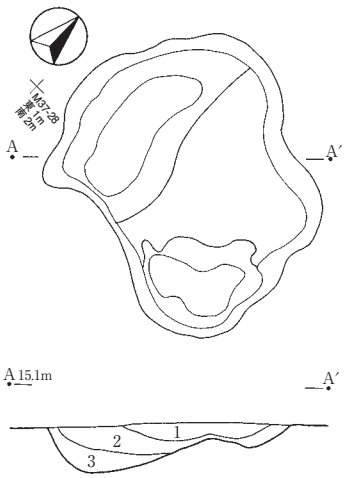
(3)SK158（第175・179図、図版19・82）

(3)SK151



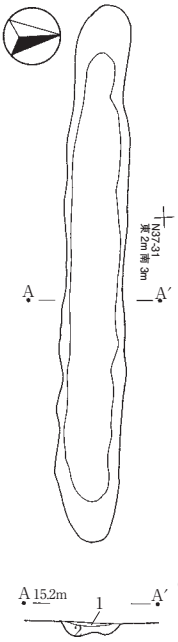
(3)SK151
1　黒色土　黒色土主体、ローム粒少混
2　褐色土　ローム粒主体

(3)SK152



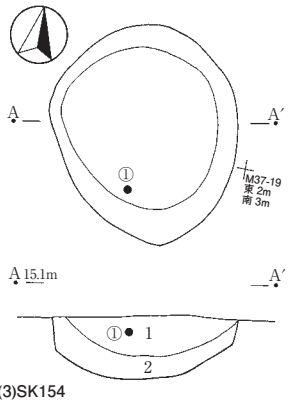
(3)SK152
1　暗褐色土　暗褐色土主体、しまり弱
2　暗褐色土　1よりしまり弱
3　褐色土　1・2よりややローム粒多混

(3)SK153



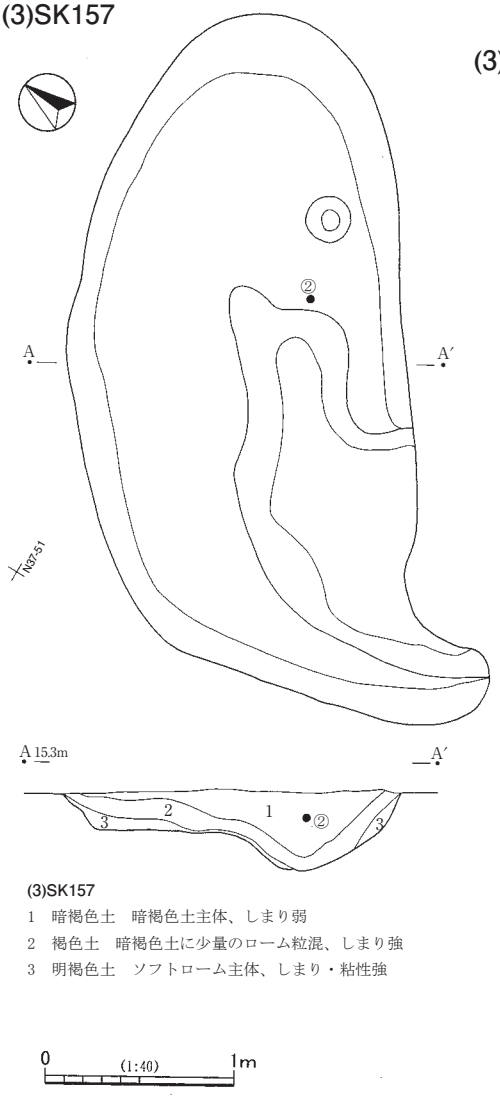
(3)SK153
1　黒色土　黒色土主体、しまり弱
2　黒褐色土　1よりローム粒やや多混、しまり弱

(3)SK154



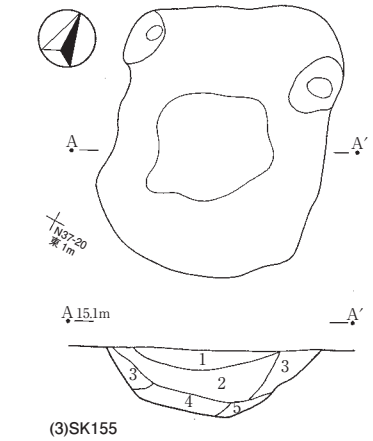
(3)SK154
1　黒色土　黒色土主体、ローム粒少混
2　暗褐色土　ローム粒主体、黒色土少混

(3)SK157



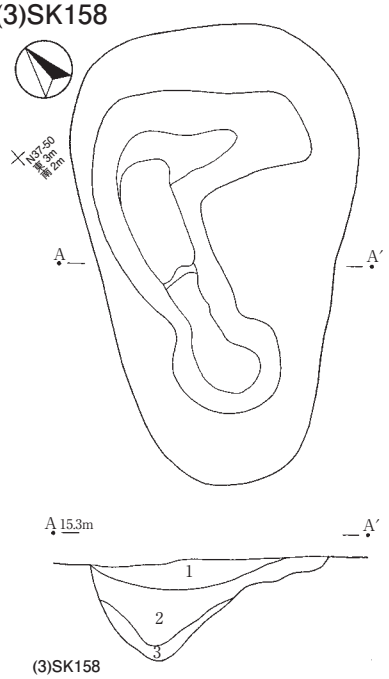
(3)SK157
1　暗褐色土　暗褐色土主体、しまり弱
2　褐色土　暗褐色土に少量のローム粒混、しまり強
3　明褐色土　ソフトローム主体、しまり・粘性強

(3)SK155



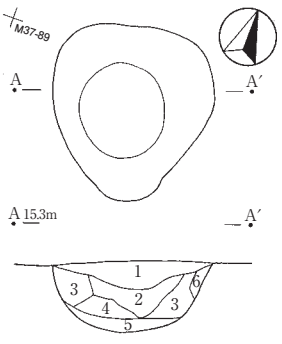
(3)SK155
1　黒褐色土　黒色土主体、しまり弱
2　黒褐色土　1よりしまりやや強
3　明褐色土　ローム粒と黒色土がほぼ同量
4　暗褐色土　黒色土多混、ローム粒少混
5　明褐色土　ロームブロックとローム粒主体

(3)SK158



(3)SK158
1　黒褐色土　黒色土多混、ローム粒少混、しまり弱
2　暗褐色土　1よりローム粒やや多混、1よりしまり強
3　褐色土　ローム粒主体、しまり強

(3)SK202



(3)SK202
1　暗褐色土　ローム粒微混、粒子粗、しまりやや強
2　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまり強
3　暗褐色土　ローム粒微混、粒子やや粗、しまりやや強
4　黒褐色土　粒子粗、しまりやや弱
5　暗褐色土　しまりやや強、粘性やや強
6　暗黄褐色土　黄褐色土と暗褐色土斑状、しまりやや強

0　(1:40)　1m

第 175 図　(3)SK151 ～ 155・157・158・202 土坑

状況　長軸長242cm、短軸長153cmの不整円形を呈する。内部は更に逆Ｌ字状に掘り窪められる。断面椀形で深さは50cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。３は黒浜式の深鉢胴部である。

時期　数は少ないが出土遺物は黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK188（第177・179図、図版19・82）

状況　長軸長210cm、短軸長133cmの不整円形を呈する。断面椀形で深さは55cmである。

出土遺物　５は黒浜式の深鉢口縁部、６は胴部である。７と８は同一個体で、浮島式の深鉢である。

時期　判断に迷うところであるが、下位の土層から出土しているのは黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK194（第177・179図、図版19・82）

状況　複数の遺構が重なり合っているような形状を呈する。長軸長157cm、短軸長130cm、深さ20cmの皿状土坑を中心として、北東側に径70cm～90cm、深さ62cmの断面フラスコ状土坑、西側に径55cm、深さ15cmの皿状土坑、南西側に径30cm～35cm、深さ30cmの柱穴状土坑が観察される。これらが同一の遺構なのか、別々の遺構が重なり合っているのかは判断できない。

出土遺物　９は黒浜式の深鉢胴部である。10は無文の小形深鉢口縁部である。

時期　はっきり時期が分かる遺物は黒浜式であり、該期の可能性が強いと思われる。

(3)SK196（第176・179図、図版19・82）

状況　長軸長132cm、短軸長115cmの楕円形を呈する。断面皿状で深さは22cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。４は浮島式の深鉢口縁部である。

時期　数は少ないが出土遺物は浮島式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK197（第176・179図、図版19・82）

状況　長軸長120cm、短軸長105cmの楕円形を呈する。断面椀形で深さは24cmである。

出土遺物　11は黒浜式の深鉢胴部、12は底部である。13は浮島式の深鉢口縁部である。

時期　黒浜式と浮島式が出土しているが、どちらの時期か判断するのは難しい。

(3)SK198（第176・179図、図版19・82）

状況　長軸長188cm、短軸長165cmの楕円形を呈する。断面皿状で深さは60cmである。

出土遺物　14は黒浜式の深鉢口縁部、15は底部である。16・17は諸磯式の深鉢口縁部、18は胴部である。

時期　黒浜式と諸磯式が出土しており、主体となるのは諸磯式と思われるが、確定するには決め手に欠ける。

(3)SK200（第176図、図版19）

状況　長軸長144cm、短軸長126cmの楕円形を呈する。断面椀形であるが、壁は不安定で階段状を呈する。深さは38cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

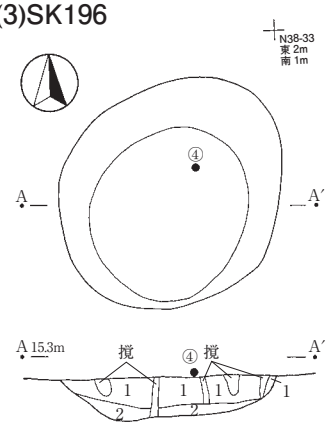
時期　細別時期は不明である。

(3)SK202（第175図、図版20）

状況　東西長86cm、南北長90cmの隅丸三角形を呈する。断面椀形で深さは37cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

(3)SK196

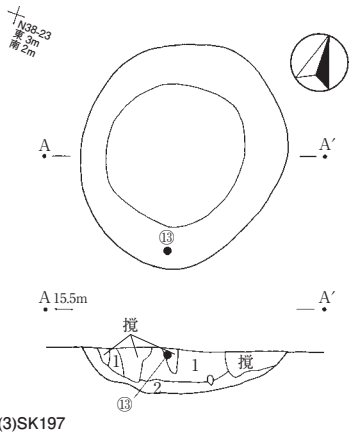


(3)SK196

1　暗褐色土　焼土粒・φ50 ㎜ロームブロック微混、しまりやや弱

2　褐色土　黒色土粒・ローム粒微混、しまり強

(3)SK197

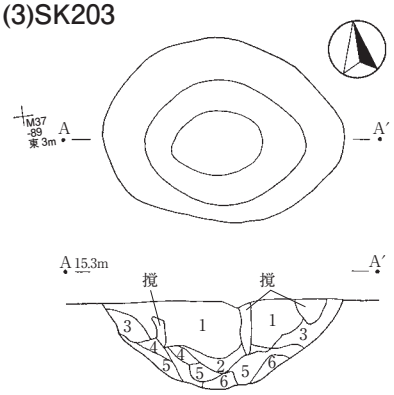


(3)SK197

1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒微混、しまりやや弱

2　褐色土　φ5 ㎜ローム粒少混、しまり強

(3)SK203



(3)SK203

1　暗褐色土　炭化物粒少混、ローム粒・焼土粒微混、しまりやや弱

2　黒褐色土　φ5 ㎜ロームブロック少混、褐色土少混（斑状）、しまりやや弱

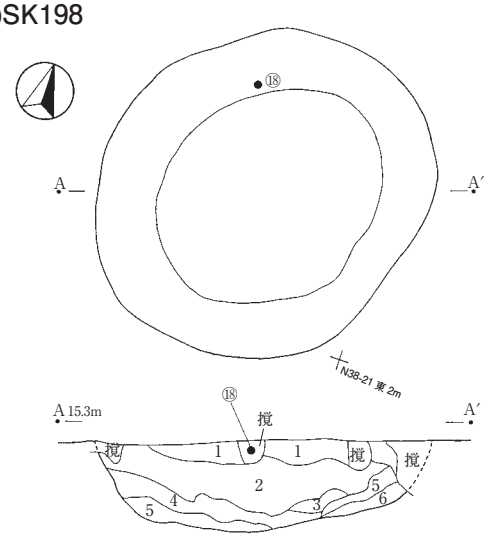
3　暗黄褐色土　ローム粒微混、粒子やや粗、しまり強

4　黒褐色土　2より黒味を帯びる、褐色土粒やや多混、しまりやや弱

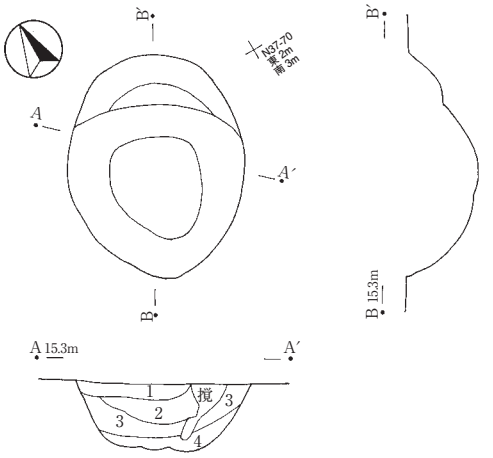
5　褐色土　φ5 ㎜ローム粒やや多混（斑状）、しまり弱

6　黄褐色土　φ10 ㎜ロームブロックやや多混、しまりやや強

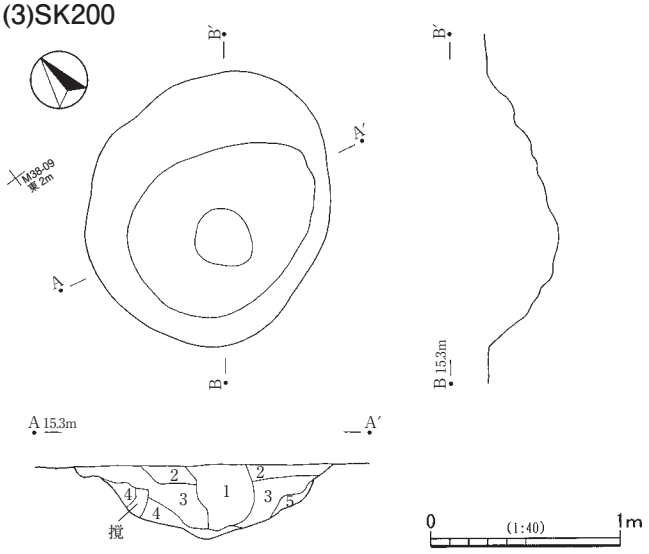
(3)SK198



(3)SK204



(3)SK200



(3)SK198

1　暗褐色土　色調最も暗い、しまりやや弱

2　褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや弱

3　暗黄褐色土　暗褐色土・黒色土粒等混在、しまりやや弱

4　暗褐色土　黄褐色土少混（斑状）、しまりやや弱

5　黄褐色土　暗褐色土混、φ5 ㎜ロームブロック少混、しまり強

6　黄褐色土　φ10 ㎜ロームブロック少混、しまり強

(3)SK200

1　暗褐色土　ローム粒少混、粒子粗、しまりやや弱

2　暗褐色土　ローム粒多混、黒色土粒少混、粒子粗、しまり強

3　暗褐色土　φ5 ㎜ロームブロック多混、粒子粗、しまり強

4　暗褐色土　ローム粒散在、粒子粗、しまり強

5　黄褐色土　φ5 ㎜ロームブロック多混、しまり強

(3)SK204

1　褐色土　黒褐色土混、粒子粗、しまりやや弱

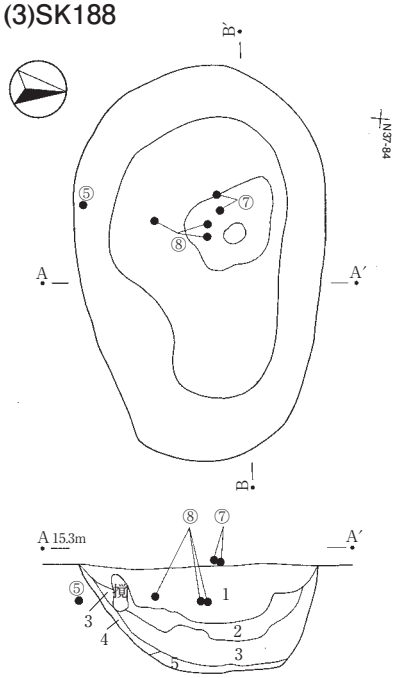
2　暗褐色土　炭化物粒少混、φ～5 ㎜ローム粒微混、しまりやや弱

3　暗褐色土　φ10 ㎜ロームブロック微混、しまりやや弱

4　暗黄褐色土　φ～5 ㎜ローム粒多混、しまりやや強、粘性やや強

第 176 図　(3)SK196 ～ 198・200・203・204 土坑

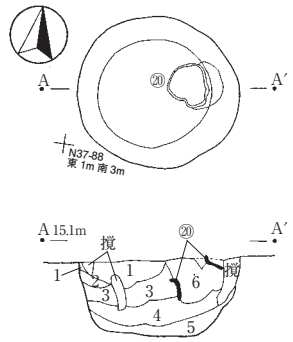
(3)SK188



(3)SK188

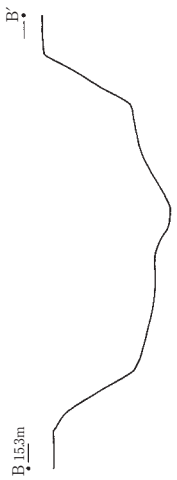
1 黒褐色土　ローム粒少混、粒子粗、しまりやや弱
2 暗褐色土　ローム粒やや多混、黒色土粒少混、しまり強
3 褐色土　暗褐色土斑状、ローム粒少混、しまり強
4 褐色土　ローム粒やや多混
5 暗褐色土　φ5㎜ロームブロック混、しまり強

(3)SK205

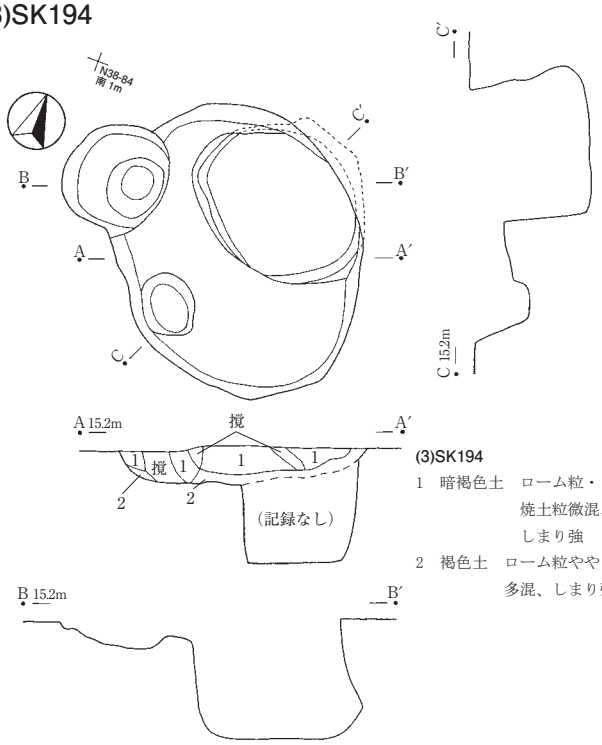


(3)SK205

1 褐色土　ローム粒多混、黒色土粒少混、しまり強
2 暗黄褐色土　黒色土粒微混、しまり強
3 暗褐色土　ローム粒やや多混、φ5㎜ロームブロック少混、しまり強
4 暗褐色土　3より色調やや明るい、φ5㎜ロームブロック少混、しまりやや弱
5 暗褐色粘質土　ローム粒微混、粒子緻密、しまり強
6 暗褐色土　3と類似するが色調やや暗い



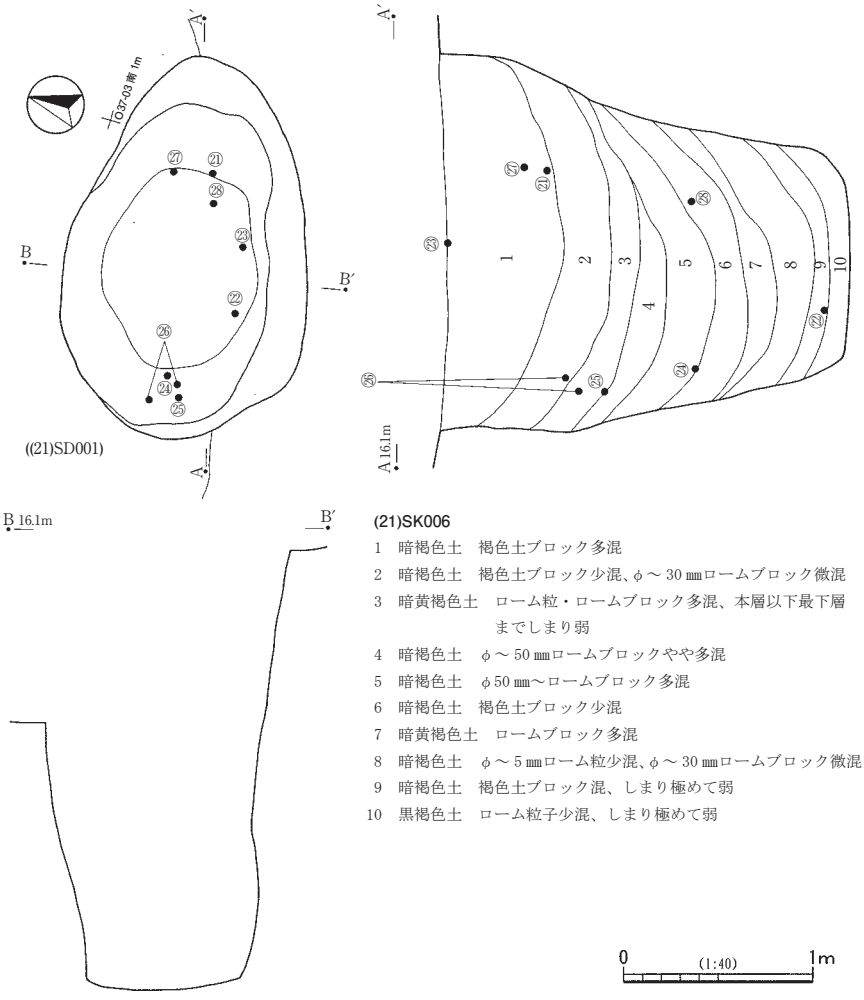
(3)SK194



(3)SK194

1 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微混、しまり強
2 褐色土　ローム粒やや多混、しまり強

(21)SK006

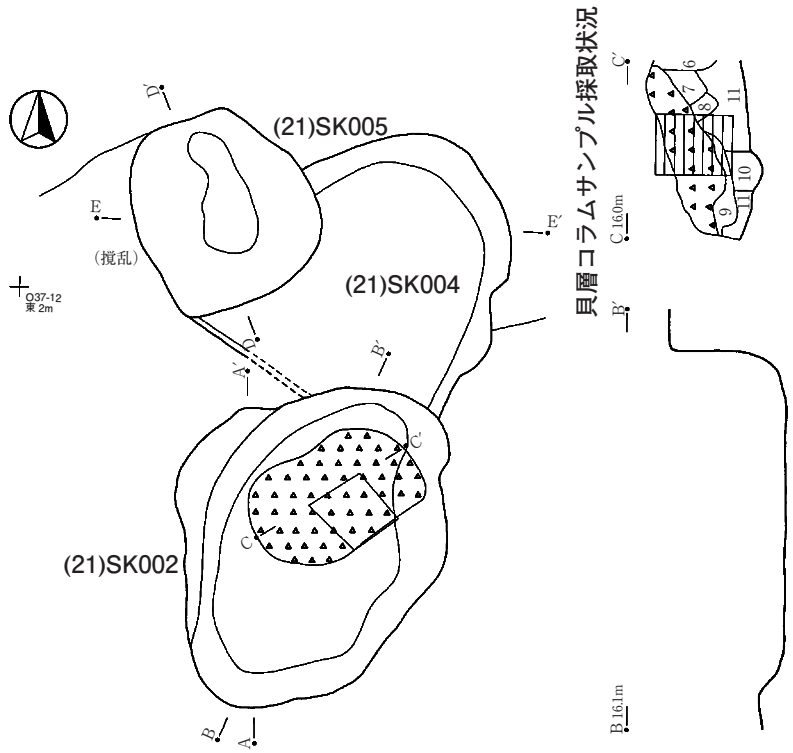


(21)SK006

1 暗褐色土　褐色土ブロック多混
2 暗褐色土　褐色土ブロック少混、φ～30㎜ロームブロック微混
3 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック多混、本層以下最下層までしまり弱
4 暗褐色土　φ～50㎜ロームブロックやや多混
5 暗褐色土　φ50㎜～ロームブロック多混
6 暗褐色土　褐色土ブロック少混
7 暗黄褐色土　ロームブロック多混
8 暗褐色土　φ～5㎜ローム粒少混、φ～30㎜ロームブロック微混
9 暗褐色土　褐色土ブロック混、しまり極めて弱
10 黒褐色土　ローム粒子少混、しまり極めて弱

0 (1:40) 1m

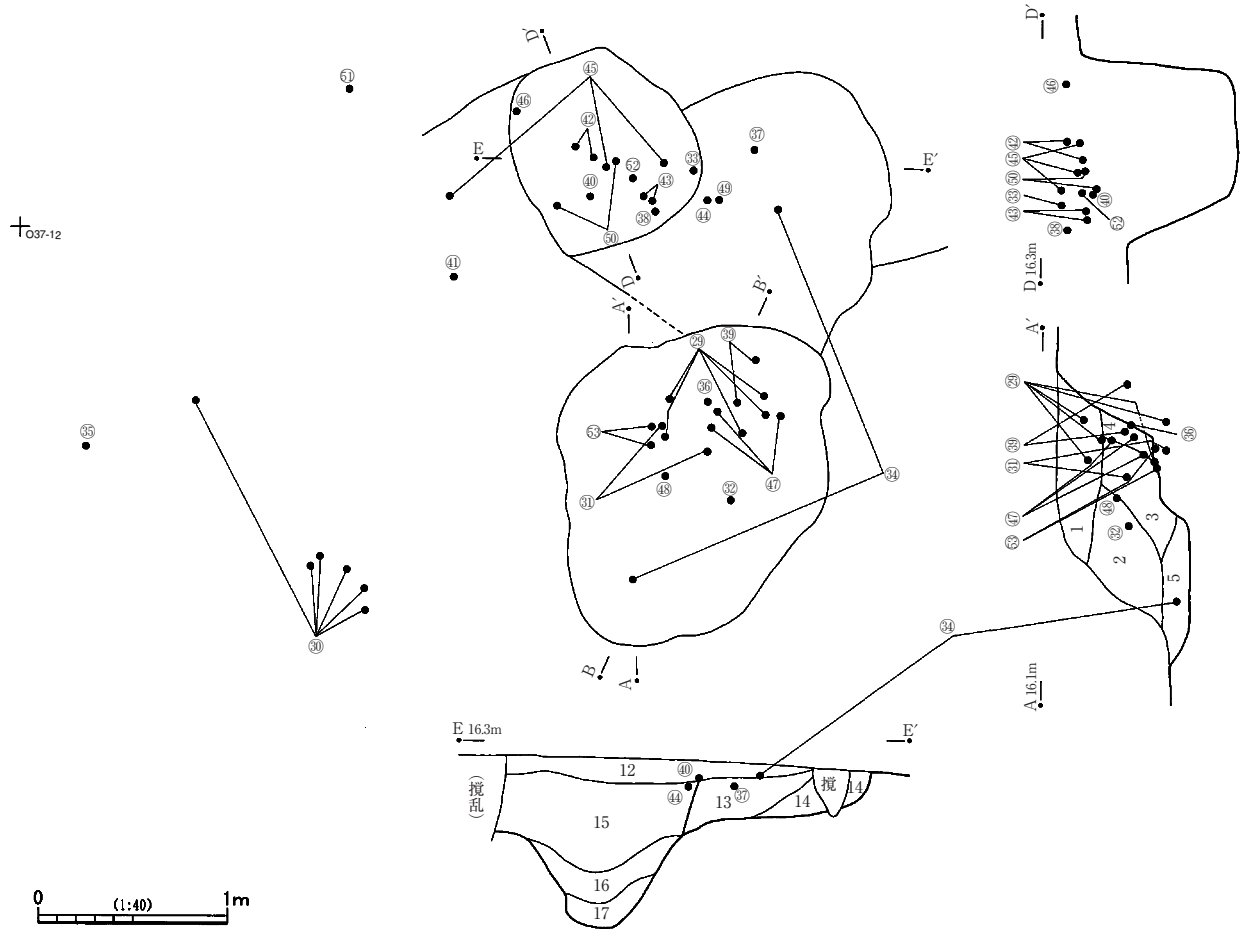
第 177 図　(3)SK188・194・205 土坑、(21)SK006 土坑



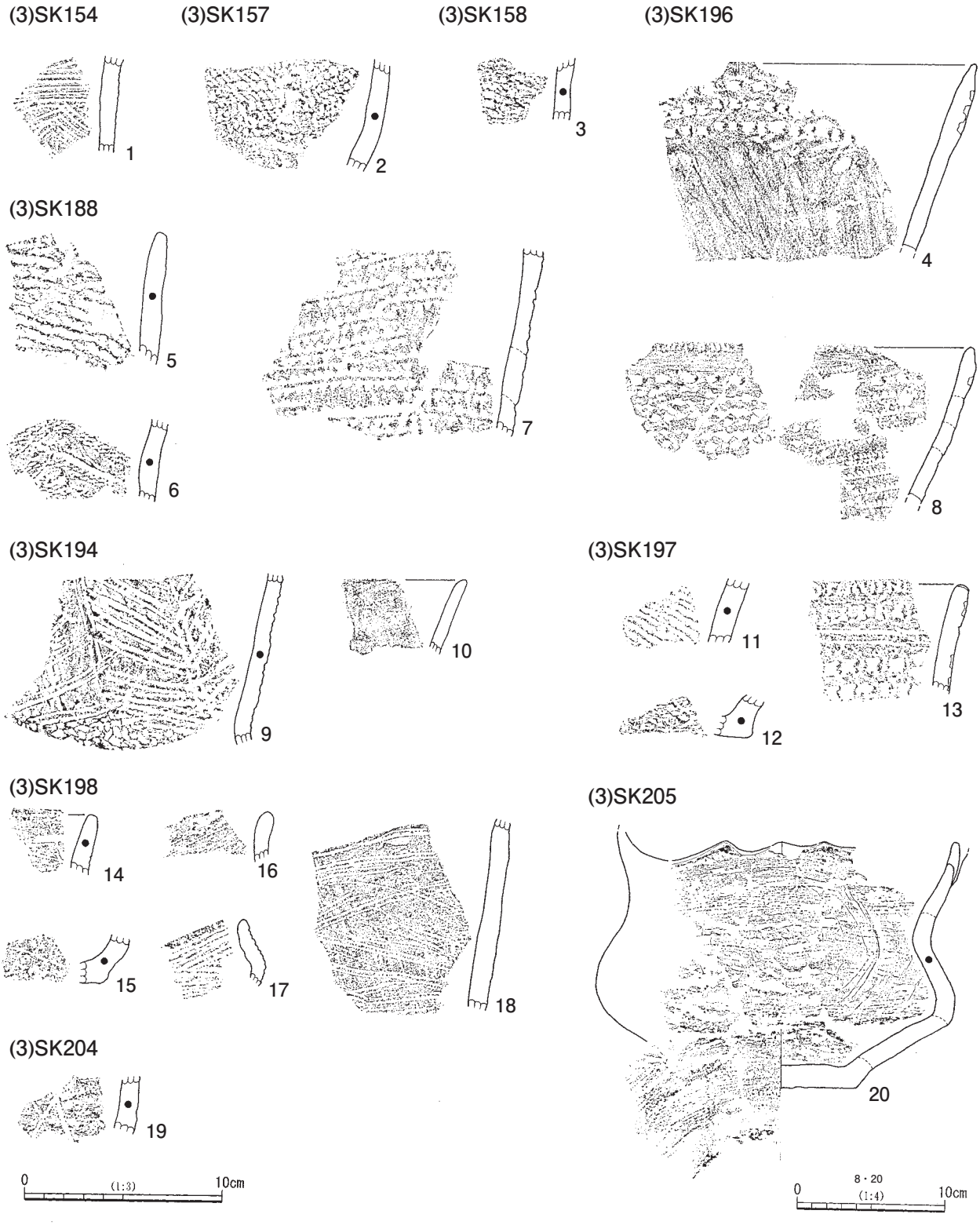
(21)SK002・004・005

1(SK002)　暗黄褐色土　ローム粒多混、しまりやや強
2(SK002)　暗褐色土　ローム粒多混、φ50 ㎜ロームブロック微混、しまりやや弱
3(SK002)　褐色土　ローム粒・φ～50 ㎜ロームブロック多混、しまりやや弱
4(SK002)　暗黄褐色土　ローム粒多混、φ50 ㎜ロームブロック微混、しまりやや強
5(SK002)　暗褐色土　ローム粒少混、φ～30 ㎜ロームブロック微混
6(SK002)　黒褐色土　ロームブロック少混、しまりやや弱
7(SK002)　暗褐色土　φ50 ㎜ロームブロック少混
8(SK002)　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや弱
9(SK002)　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや弱
10(SK002)　暗褐色土　φ50 ㎜～ロームブロック多混、しまりやや弱
11(SK002)　暗褐色土　しまり強
12(SX001 盛り土？)　暗褐色土　褐色土ブロック多混
13(SK004)　暗褐色土　ローム粒やや多混、φ～20 ㎜ロームブロック少混、しまりやや弱
14(SK004)　暗褐色土　16 と比べ色調若干明るい、ローム粒少混、しまりやや強
15(SK004)　暗褐色土　12 と比べ色調やや暗い、φ～5 ㎜ローム粒少混、しまり・粘性強
16(SK005)　黄褐色土　φ30 ㎜～ロームブロック極めて多混、ローム粒多混、しまりやや強
17(SK005)　暗褐色土　ローム粒微混、しまりやや強

遺物出土状況



第 178 図　(21)SK002・004・005 土坑



第 179 図　(3)SK154・157・158・188・194・196 ～ 198・204・205 土坑出土遺物

時期　細別時期は不明である。

(3)SK203（第176図、図版20）

状況　長軸長130cm、短軸長98cmの不整円形を呈する。断面椀形で深さは58cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

時期　細別時期は不明である。

(3)SK204（第176・179図、図版20・82）

状況　長軸長118cm、短軸長95cmの不整円形を呈する。断面椀形であるが北東部は段状に張り出しており、２基の土坑が重なっている可能性もある。深さは35cmである。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。19は黒浜式の深鉢胴部である。

時期　数は少ないが出土遺物は黒浜式であり、当遺構は該期と考えられる。

(3)SK205（第177・179図、図版20・81）

状況　長軸長85cm、短軸長80cmの楕円形を呈する。断面逆台形で深さは40cmである。鉢の上半部が斜位に埋設されていた。土坑墓である可能性がある。

出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。20は黒浜式の器形復元ができる鉢である。

時期　出土遺物から黒浜式期と判断される。

(21)SK002・004・005（第178・180図、図版20・82）

状況　３基が重なり合っているが、南側が中・近世溝(21)SD002によって削平されているため、形状は分かりにくい。(21)SK002は長軸長188cm、短軸長145cmの不整円形を呈する。上層に貝ブロックが堆積する。底面は北西部が高く南東部が低くなっている。深さは最深で75cmである。(21)SK004は東西長170cm、南北長150cmで、見かけ上半円形を呈しているが、南側の壁は削平されているため正確な形状は不明である。断面皿状で深さは30cmである。(21)SK005は長軸長102cm、短軸長95cmの不整円形を呈する。断面逆台形であるが坑底の形状は不安定である。深さは85cmである。新旧関係であるが、(21)SK004が古く(21)SK005が新しい。

出土遺物　遺構範囲内出土遺物だけでなく、溝や土塁から出土したものも関連すると思われる資料は掲載した。29～31は黒浜式の器形復元ができる深鉢である。29は多段の押引沈線を巡らせ、口縁部突起の下に弧状の押引沈線を配する。34～39は黒浜式の深鉢口縁部、40～52は胴部、32・33・53は底部である。

時期　出土遺物のほぼ全てが黒浜式であり、３基とも多少の時間差はあるにしても黒浜式期と考えられる。

(21)SK006（第177・180図、図版20・82）

状況　長軸長210cm、短軸長130cmの不整円形を呈する。断面逆台形で深さは215cmを測る。いわゆる陥穴である。

出土遺物　21～25は黒浜式の深鉢口縁部、26～28は胴部である。

時期　出土遺物から黒浜式期と判断される。

(12)SK006（第181図、図版20・81）

状況　東西長202cm、南北長205cmの不整円形を呈する。壁、床面とも安定せず凸凹が目立つ。深さは最深で75cmである。

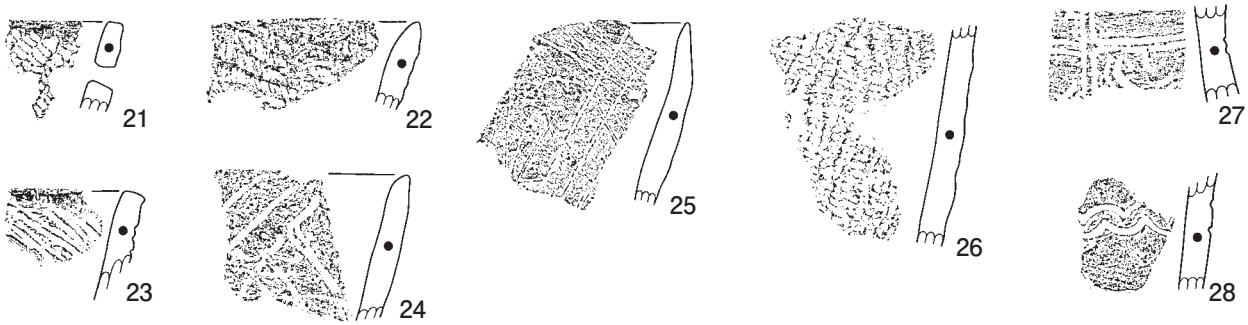
出土遺物　図示できる遺物は１点のみである。５は加曽利Ｅ式の深鉢胴部である。

時期　数は少ないが出土遺物は加曽利Ｅ式であり、当遺構は該期と判断される。

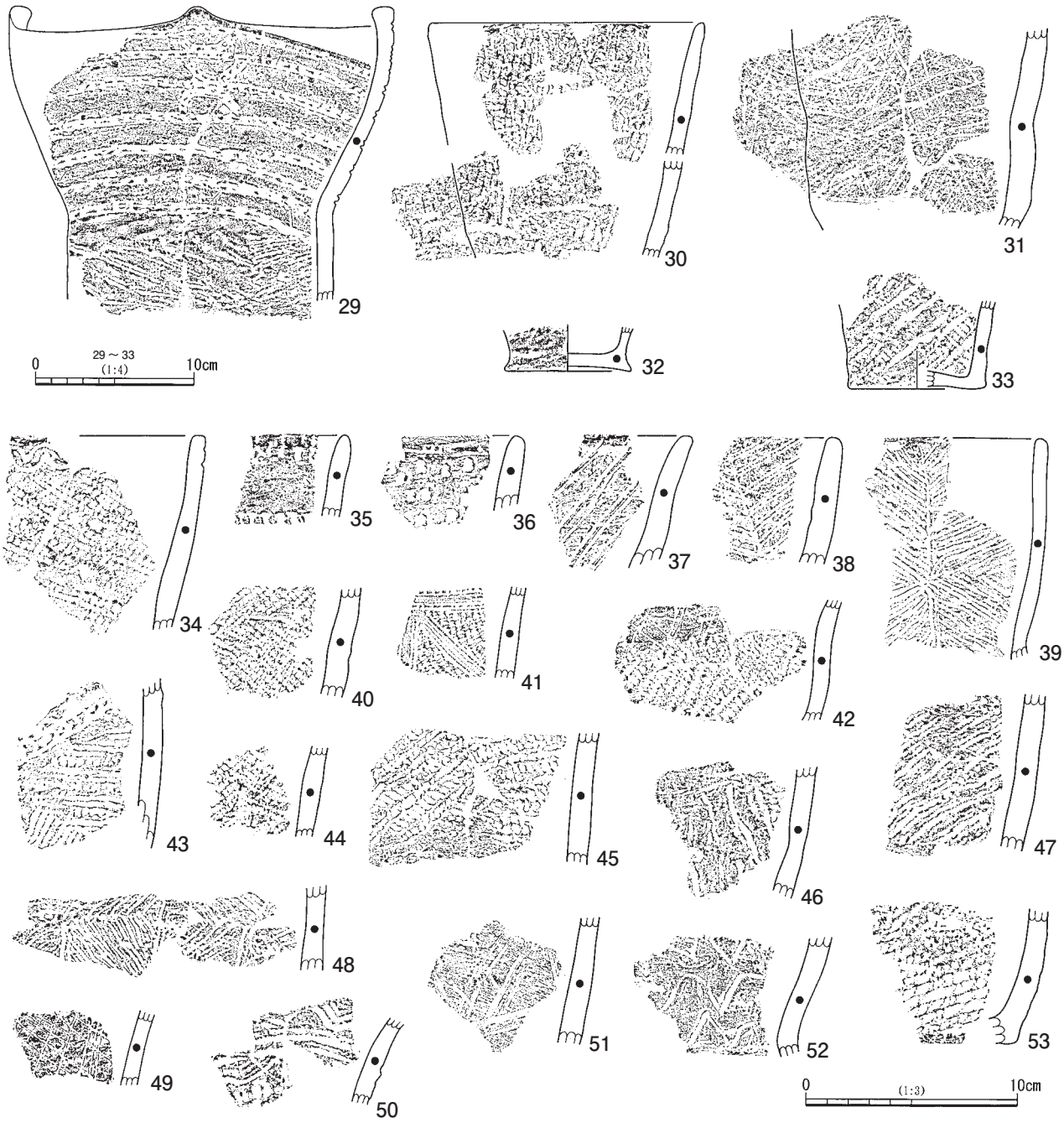
(12)SK008（第181図、図版20・81）

状況　東西長420cm、南北長440cmの不整円形を呈する。壁、床面とも安定せず凸凹が目立つ。深さは最深で170cmである。

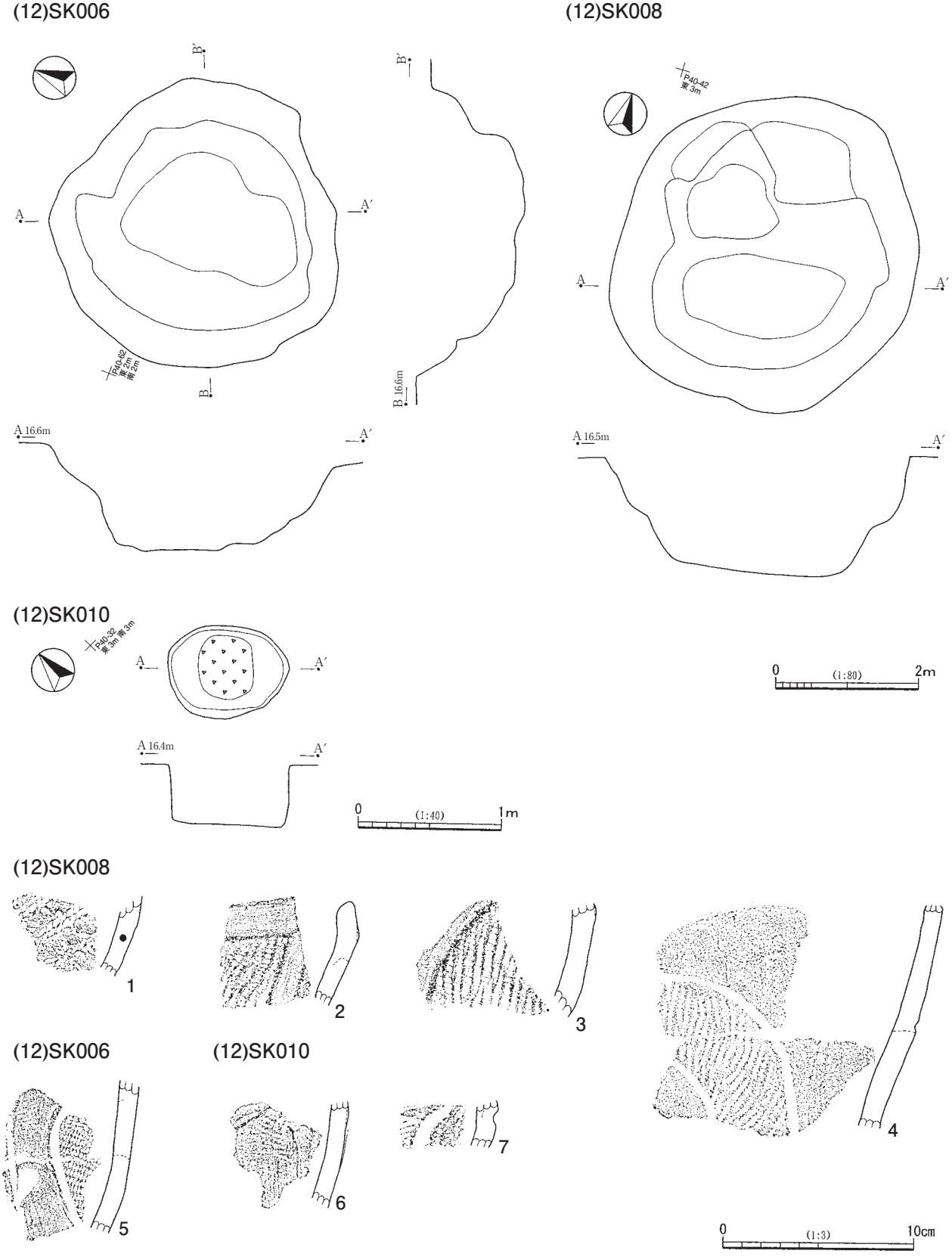
(21)SK006



(21)SK002・004・005



第 180 図　(21)SK002・004 ～ 006 土坑出土遺物



第 181 図　(12)SK006・008・010 土坑、出土遺物

出土遺物　１は黒浜式の深鉢胴部である。２は加曽利Ｅ式の深鉢口縁部、３・４は胴部である。

時期　主たる出土遺物は加曽利Ｅ式であり、当遺構は該期と判断される。

(12)SK010（第181図、図版81）

状況　長軸長86㎝、短軸長65㎝の楕円形を呈する。断面長方形で深さは45㎝である。貝ブロックが堆積していたが、厚さ約20㎝というメモがあるのみで土層断面が記録されておらず、詳細な状況は不明である。

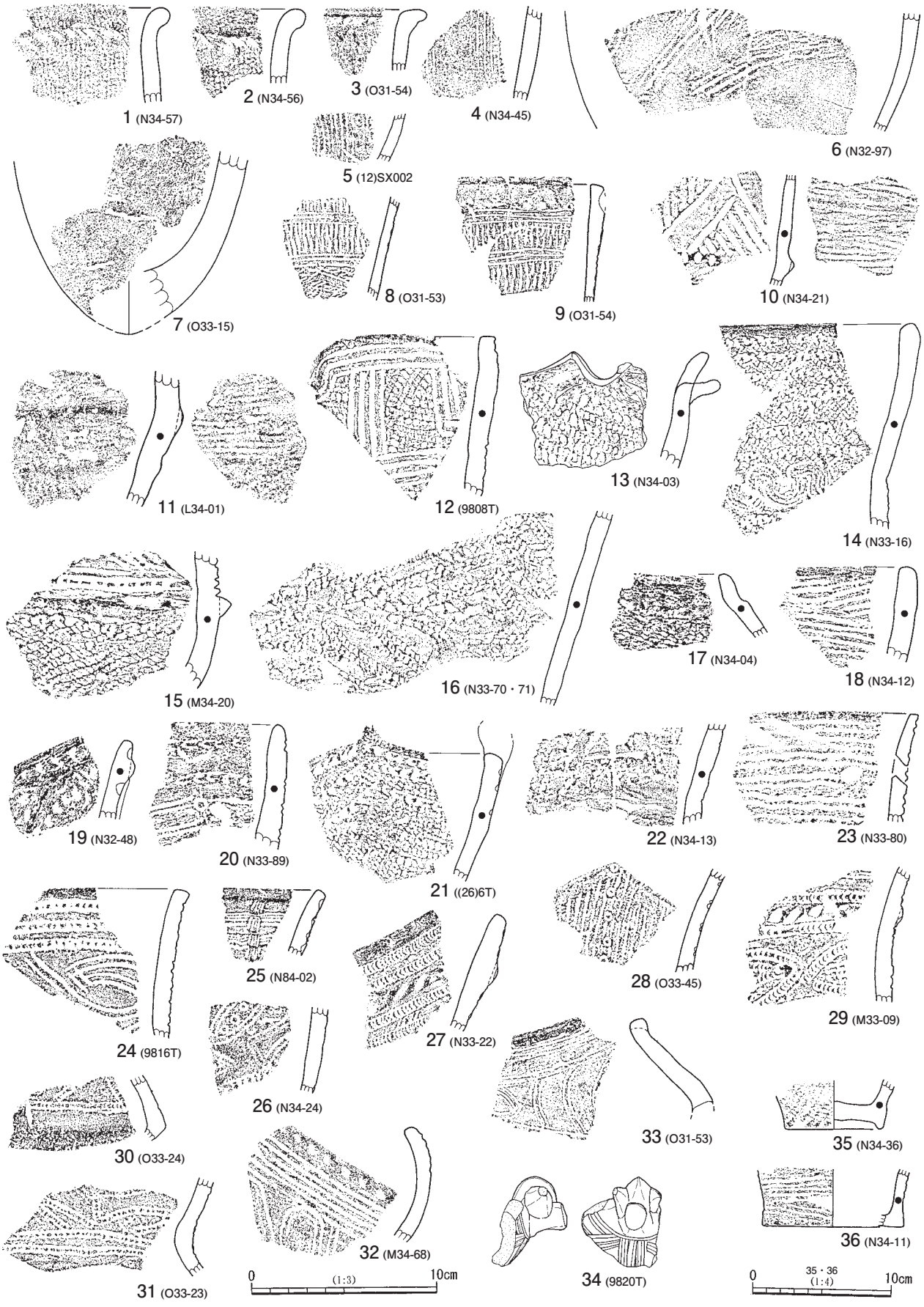
出土遺物　６は加曽利Ｅ式の深鉢胴部である。７は称名寺式の深鉢胴部である。

時期　加曽利Ｅ式と称名寺式が出土しており、中期末から後期初頭であろう。

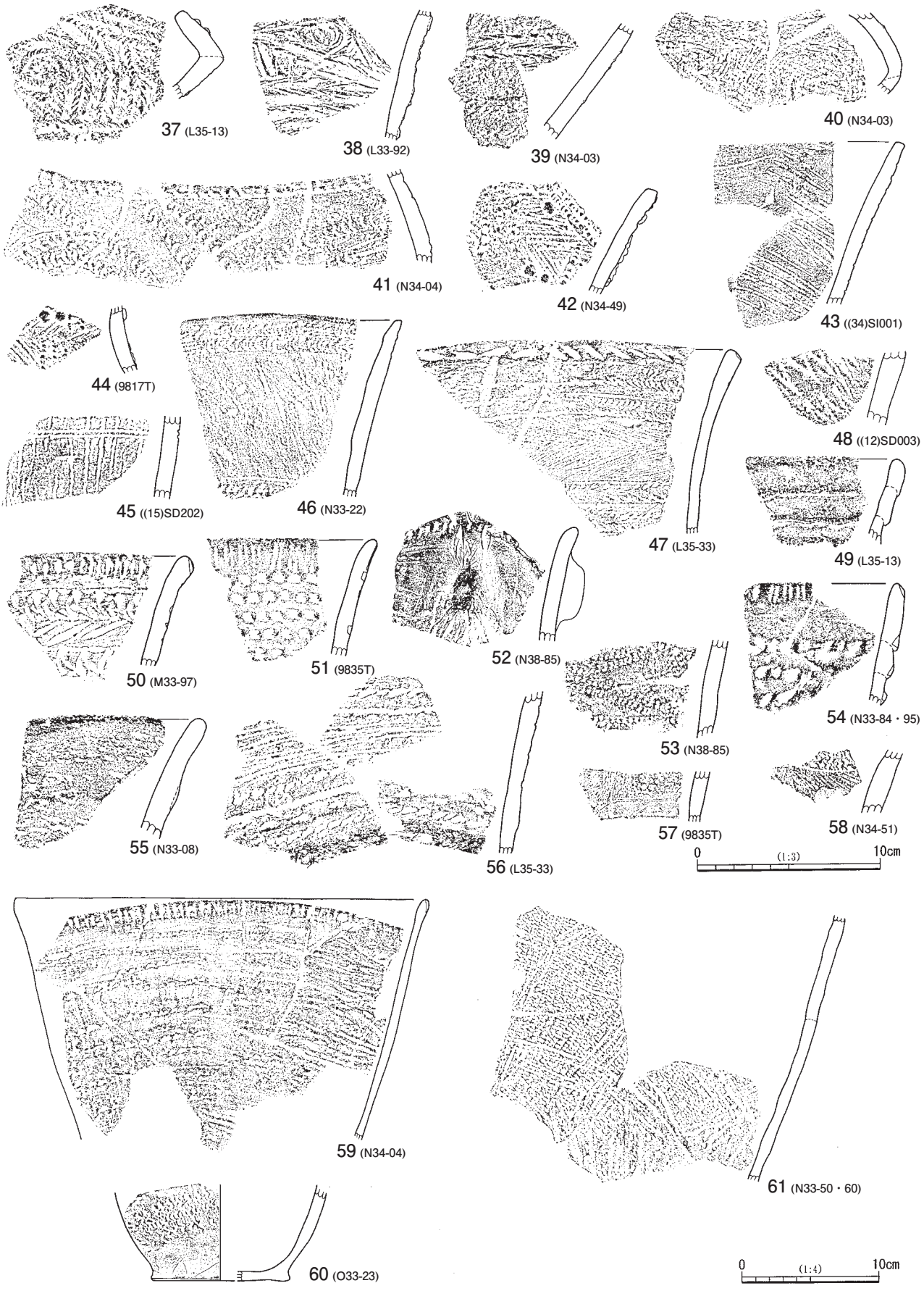
３　遺構外出土遺物

（１）縄文土器（第182～200図、図版83～93）

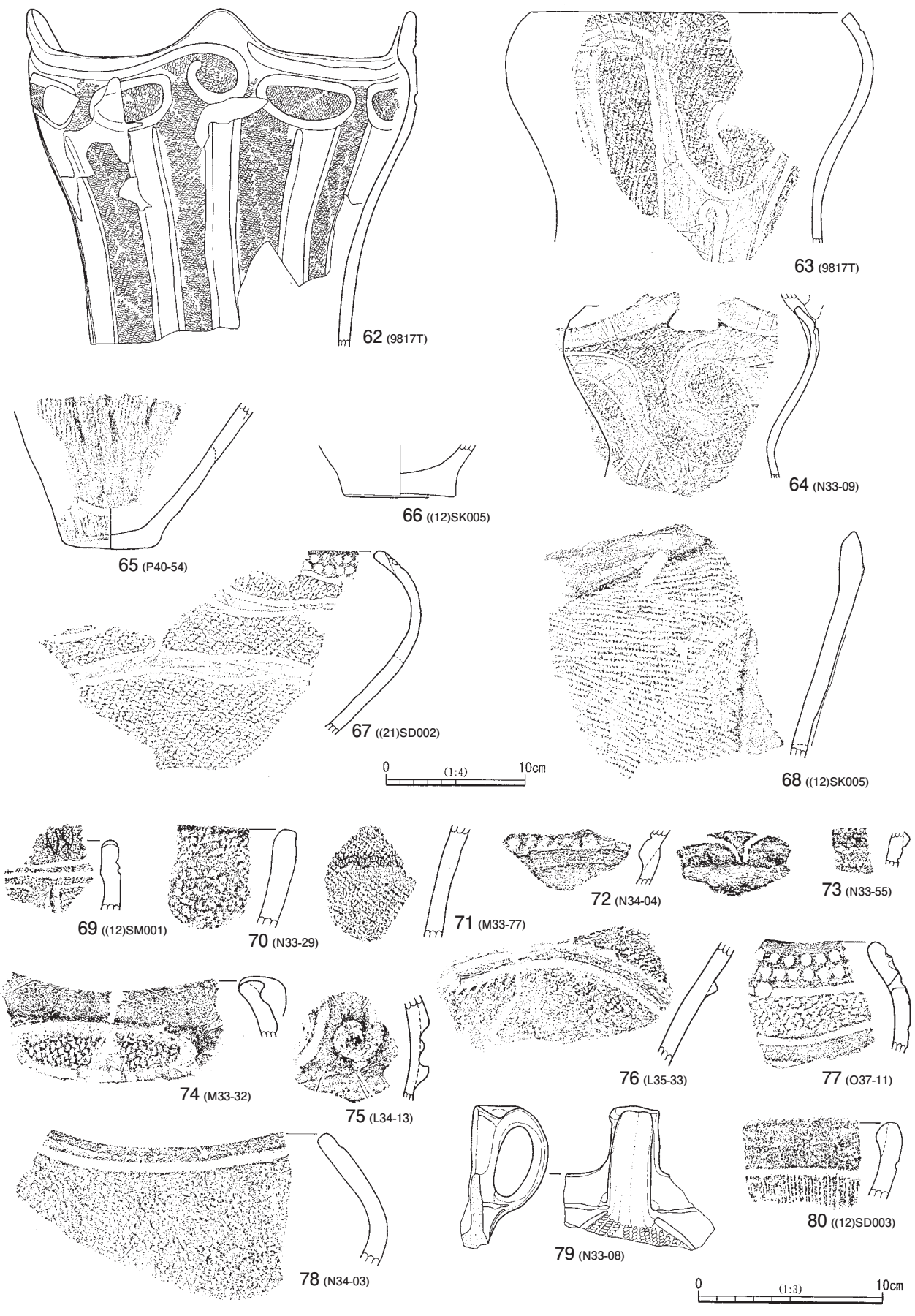
１～11は早期に属するものである。１～７は撚糸文土器で、いずれも深鉢である。１～３は井草Ⅱ式の口縁部、４・５はおそらく夏島式の胴部、６は大浦山式の胴部、７はおそらく出流原式の底部である。８・９は沈線文土器の深鉢で、いずれも三戸式である。８は胴部、９は口縁部で、口唇直下が帯状に剥落している。10・11は条痕文土器の深鉢で、10は鵜ガ島台式、11は茅山下層式のいずれも胴部である。12～61は前期に属するものである。12は関山Ⅱ式の深鉢口縁部で、鰭状の突起がつく。13～22・35・36は黒浜式である。13・14・18～21は深鉢口縁部で、13は片口がつく。15・16・22は胴部、35・36は底部である。17は強く内傾するもので、浅鉢もしくは鉢の口縁部と思われる。23は植房式の深鉢口縁部と考えられるもので、器面は摩滅が顕著である。24～31は諸磯ａ式である。24・25・27は深鉢口縁部、26・28・29・31は胴部、30は浅鉢胴部である。32～34・37～41・61は諸磯ｂ式である。32～34・37は深鉢口縁部、38～41・61は胴部である。34は簡略化されているが獣面把手と思われる。42・44は諸磯ｃ式で、42は深鉢口縁部、44は胴部である。43・45は撚糸施文の深鉢で43は口縁部、45は胴部である。浮島式に属するものであろう。46・47は浮島Ⅰ式の深鉢口縁部である。46は浮島Ⅰ式の深鉢口縁部、57は胴部である。47・50・52は浮島Ⅱ式の深鉢口縁部である。49・51・54・55・59は浮島Ⅲ式の深鉢口縁部、53・56は胴部である。48・60は貝殻文が施される深鉢の胴部と底部で、いずれも浮島式である。58は興津式の深鉢胴部である。69～88は中期に属するものである。69は五領ヶ台式の深鉢口縁部で、口唇上には絡条体が圧痕されてキザミ状を呈する。70・71は縄文施文のみであるが、胎土に小礫を多量に含み、71は結節縄文が施されるなどの特徴から中期初頭と考えられる。72は阿玉台Ⅰｂ式の浅鉢で、内面に押引文が施される。73は阿玉台Ⅱ式の深鉢胴部である。62～68・74～88は加曽利Ｅ式である。74・75は加曽利ＥⅡ式の深鉢口縁部とその直下、76は胴部である。62～64・79は加曽利ＥⅢ式の深鉢である。68・82～85は加曽利ＥⅣ式の深鉢口縁部、86・87は胴部、65は底部である。84にはわずかに赤彩が認められる。67・77はいわゆる連弧文土器である。89～173・175～177・179～189は後期前葉に属するものである。89～95は称名寺１式の深鉢口縁部、96～104は胴部である。105～108・110は称名寺２式の深鉢口縁部、109は胴部である。111～116は称名寺式の深鉢把手である。117は橋状把手を持つ鉢で、綱取Ⅰ式の影響を受けた土器と考えられる。118～173・175～177・179～189は堀之内式である。118～155は深鉢で、器形復元ができるものあるいは大形の破片である。118～124・126～128は底部から外反するように器壁が立ち上がり、頸部で一旦くびれて口縁部へ向かって外反する器形を呈する深鉢で、頸部で文様帯が上下に区画される。119は口縁直下の無文帯に、棒状工具による粗っぽいケズリ調整痕が残る。123は口縁部の４単位刺突と頸部の８字状貼付文の縦



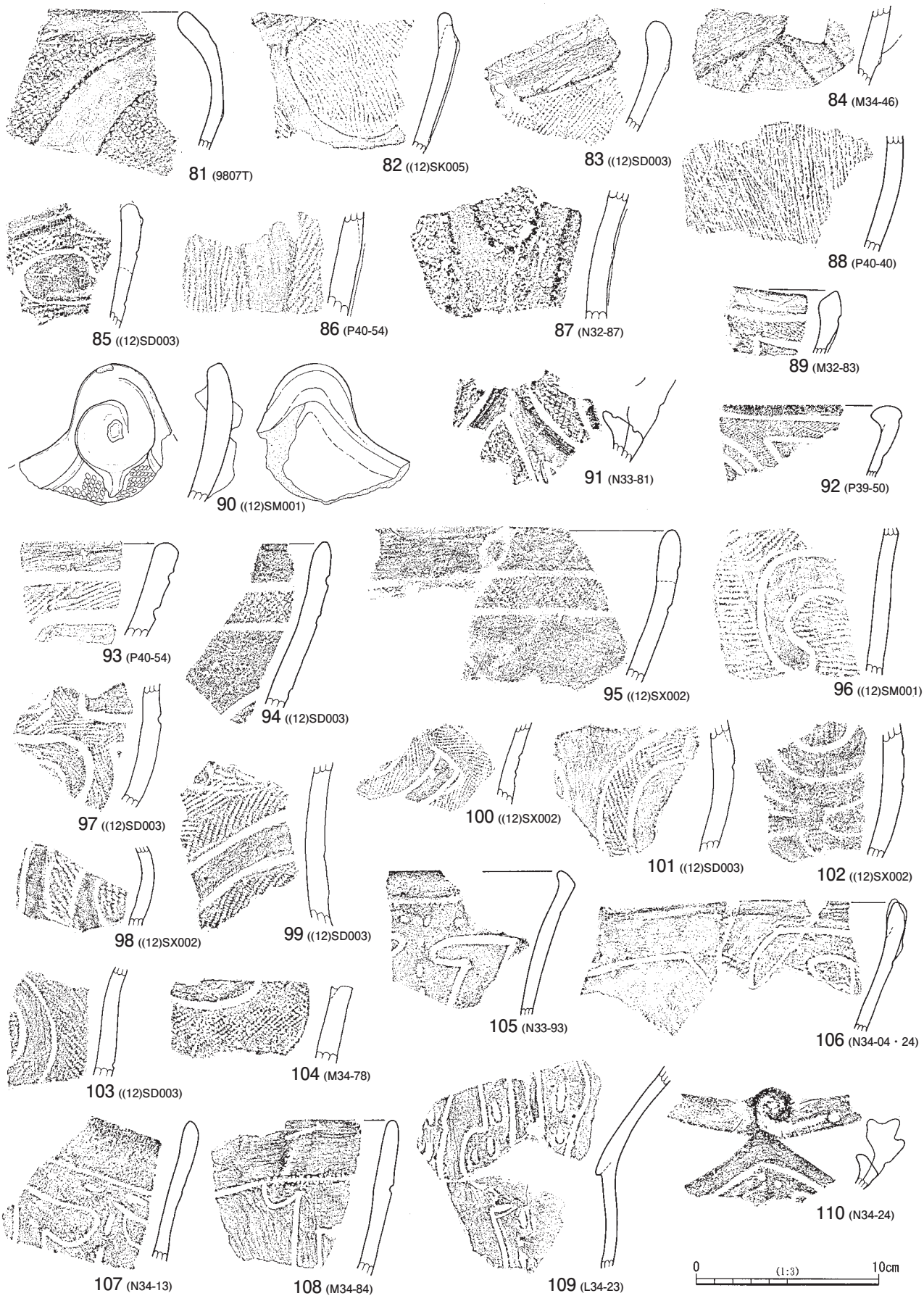
第 182 図　遺構外出土縄文土器（1）



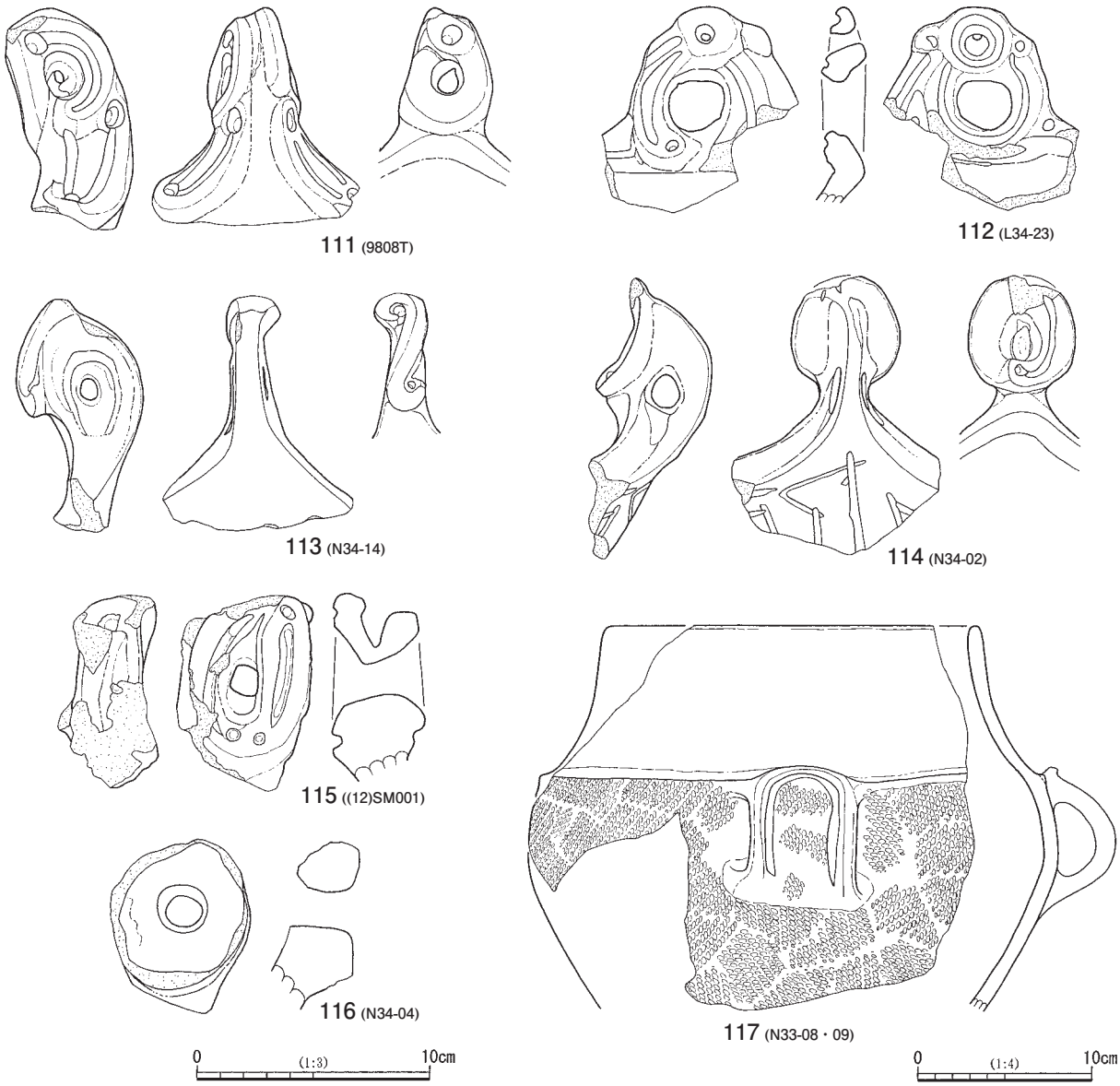
第 183 図　遺構外出土縄文土器（２）



第 184 図　遺構外出土縄文土器（３）



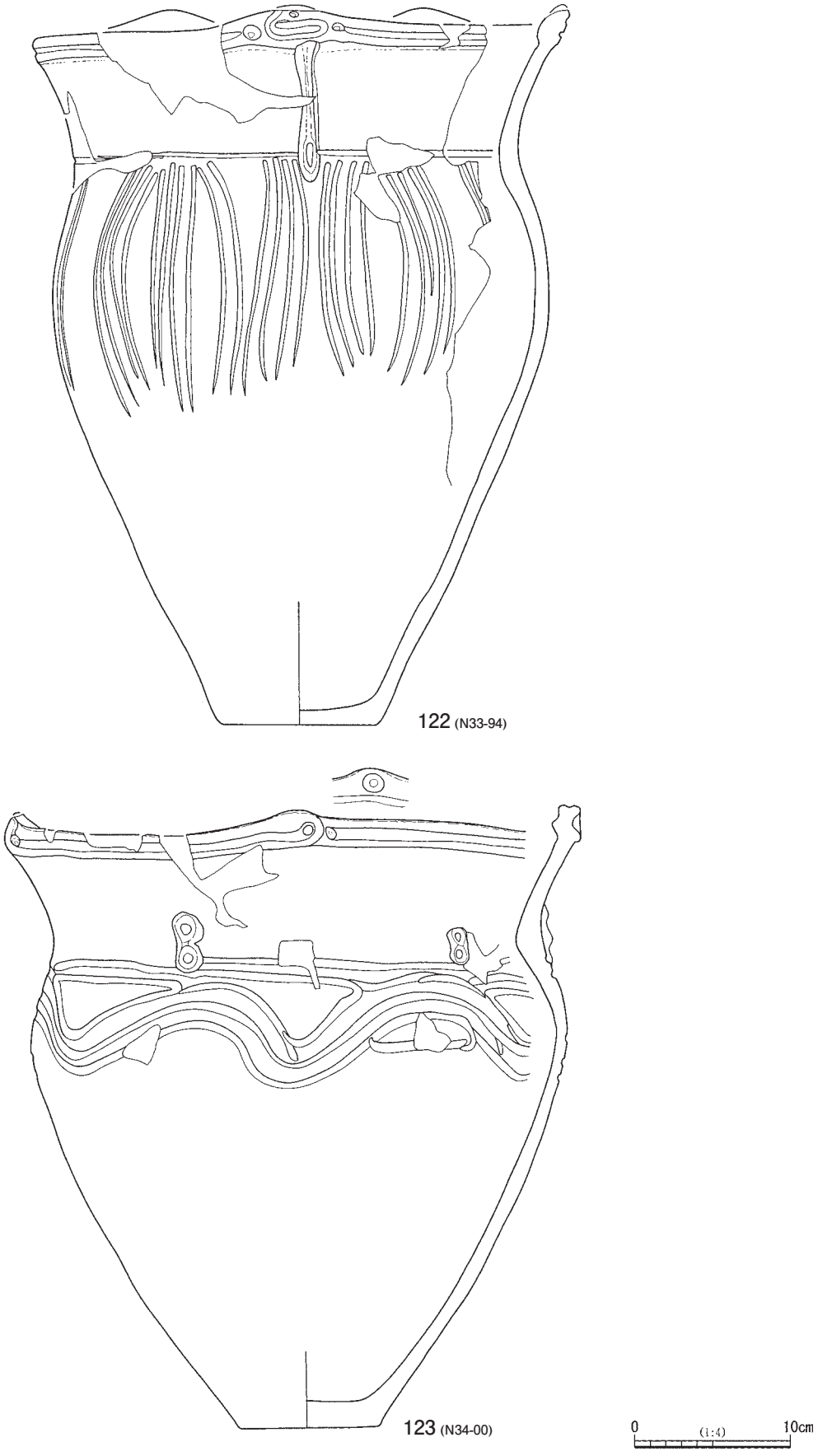
第 185 図　遺構外出土縄文土器（４）



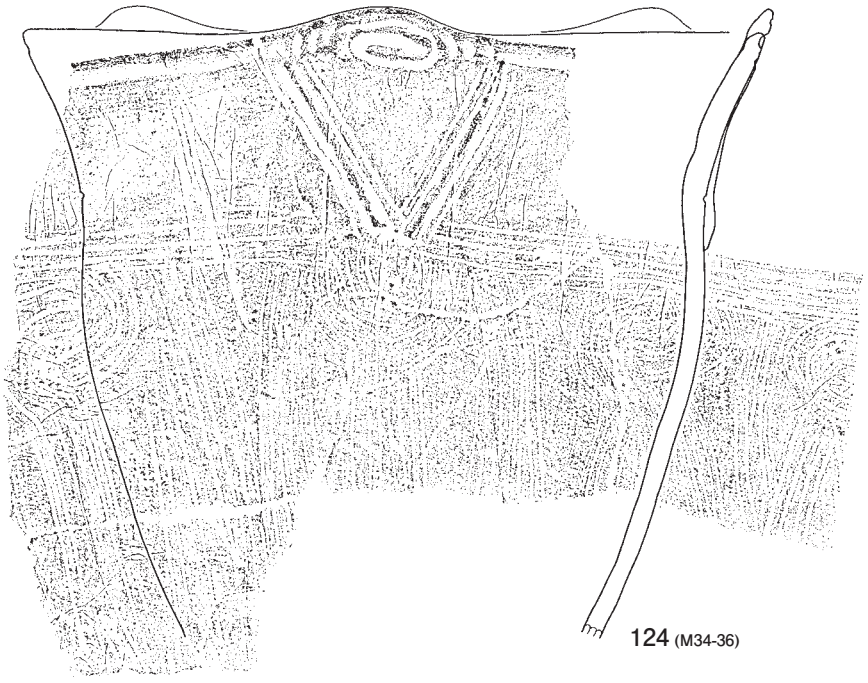
第 186 図　遺構外出土縄文土器（５）

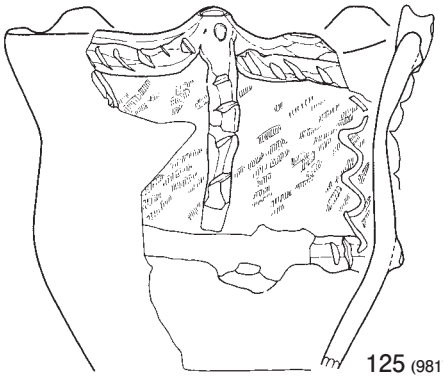
位置が全く合わず、胴部の文様も波状に横走する沈線のみで構成されるなど、かなり特異である。堀之内２式であろう。128は口縁部に幅の狭い無文帯があり、沈線で区画された頸部から下には単位文的な意匠が配される。やや古相を示している。125・129は先と器形は同じながら、文様帯の境が胴部の膨らんだ部分にある深鉢である。130～144は文様帯の区画がない深鉢で、器形は先と同様のもののほか、くびれがなく緩やかに立ち上がるものや直線的に外反するものなどがある。130・135・137は単位文を中心とした文様構成をとるもので、掲載した土器群の中では古相を示す。145・146・148は胴部上下で文様帯が区画されるもので、堀之内２式である。145は(15)SK107の上層から出土しており、この土坑に伴うものかもしれない。147は鉢で、この破片でも径の復元ができずかなり大きい。149～155は縄文施文のみの深鉢で、154・155は内面口唇直下の沈線から堀之内２式と判断される。156～178は深鉢の破片資料である。156～158・161～164は明瞭な単位文が認められるもので、堀之内１式でも古段階から中段階に位置付けられる。156・157には綱取式の影響が認められる。159は角棒状工具によるＵ字状もしくは逆Ｊ字状の刺突列が横

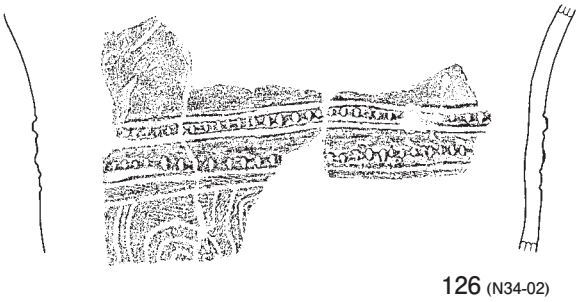
第 187 図　遺構外出土縄文土器（6）

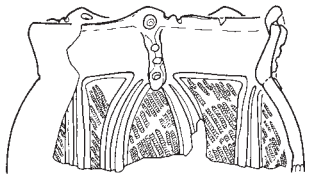


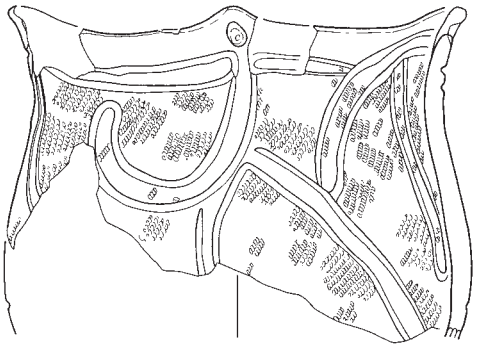
第 188 図　遺構外出土縄文土器（7）

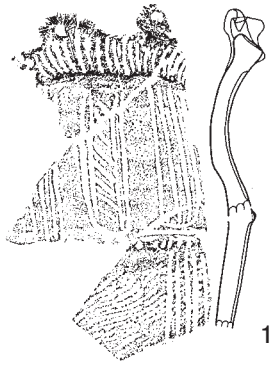


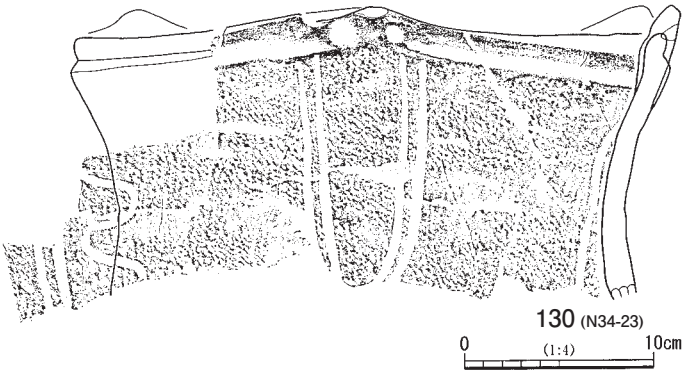




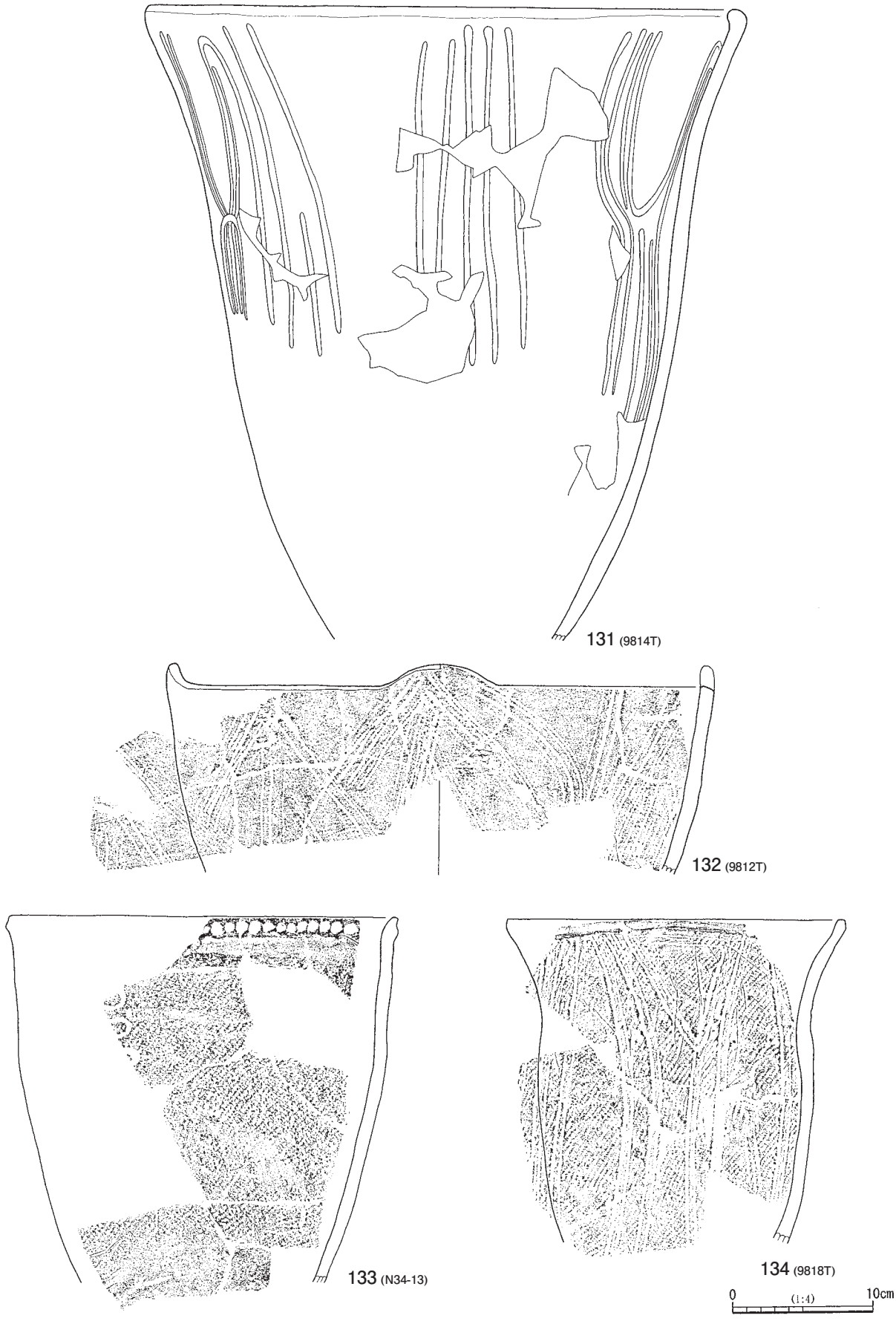




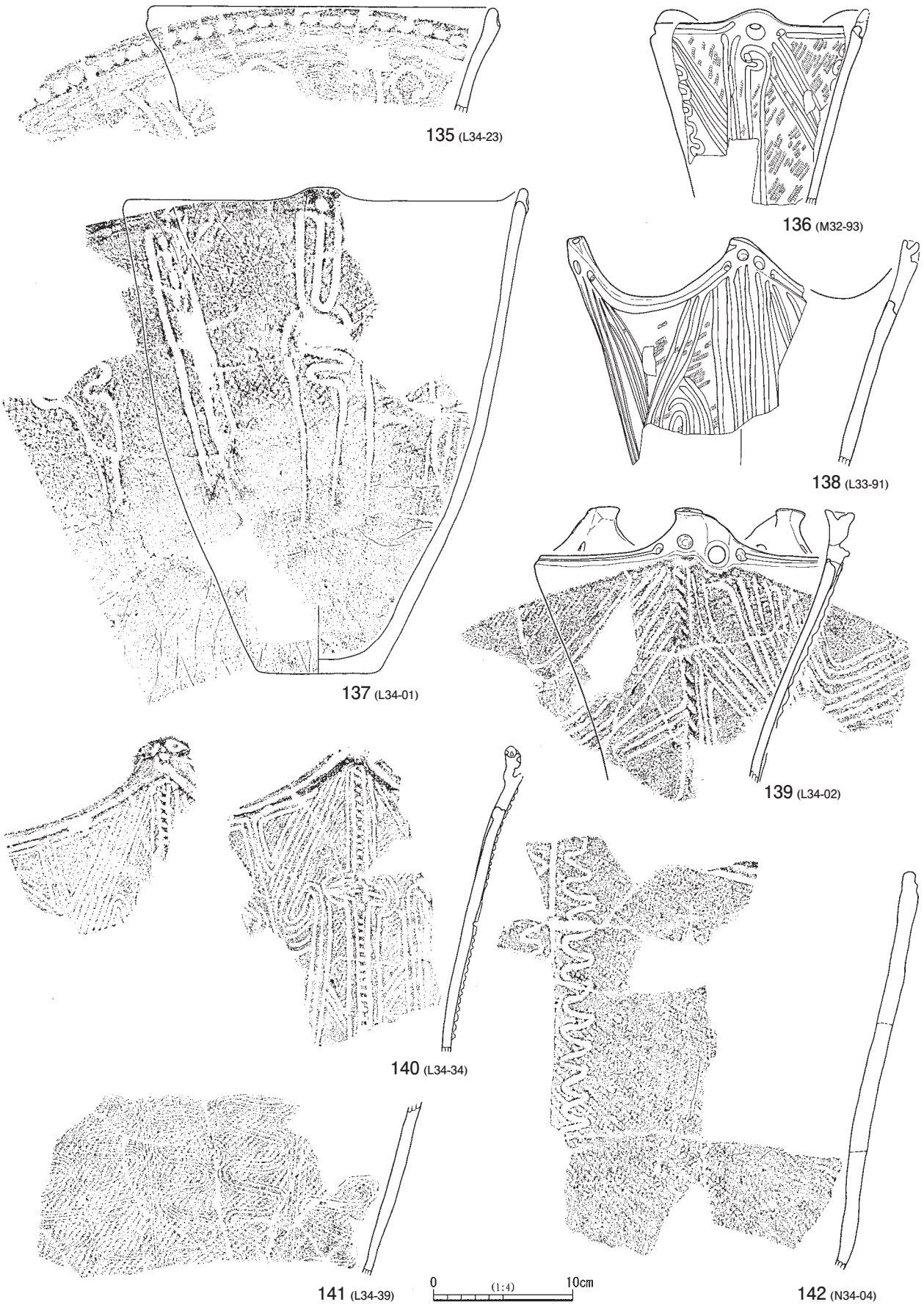




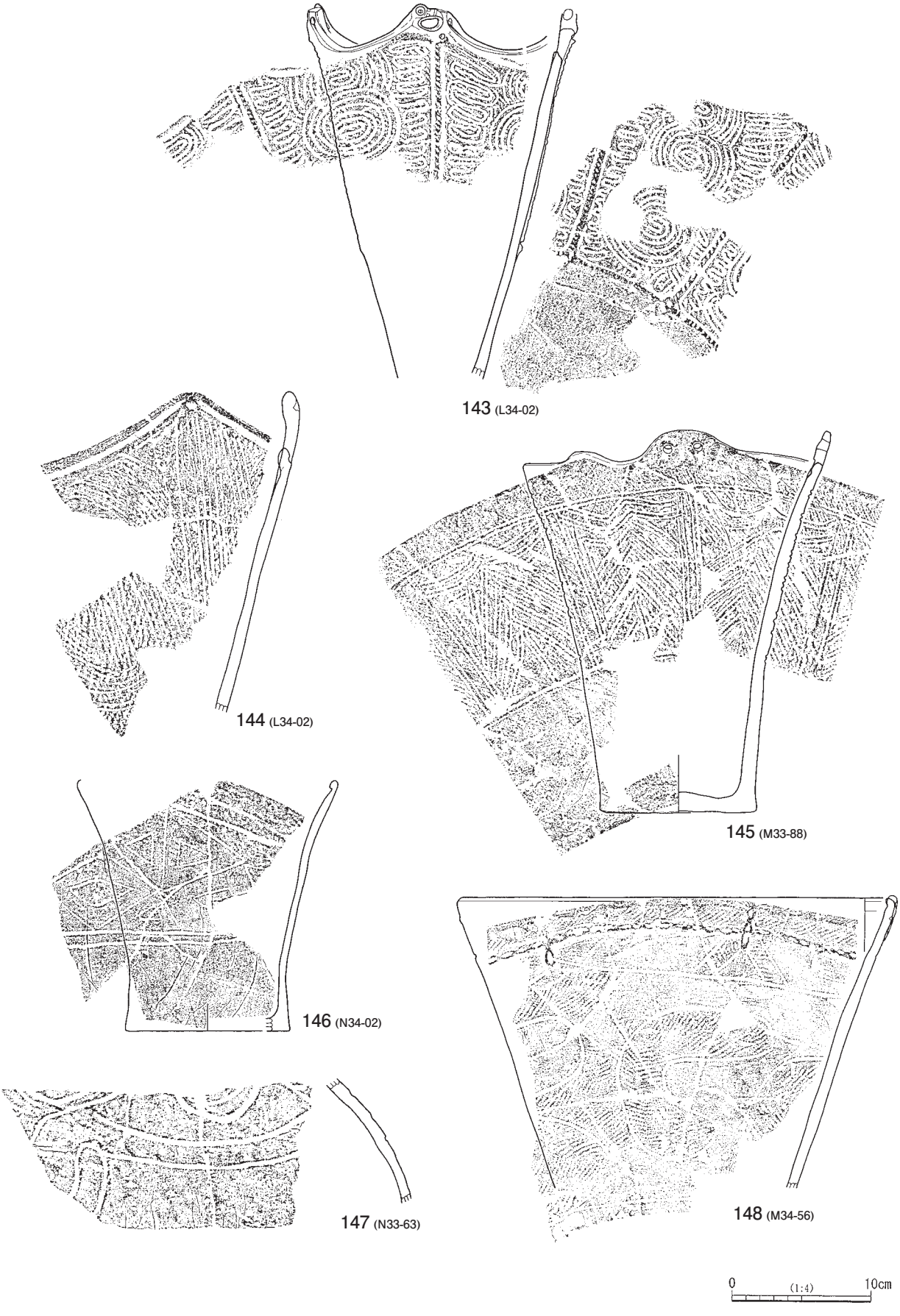
第 189 図　遺構外出土縄文土器（8）



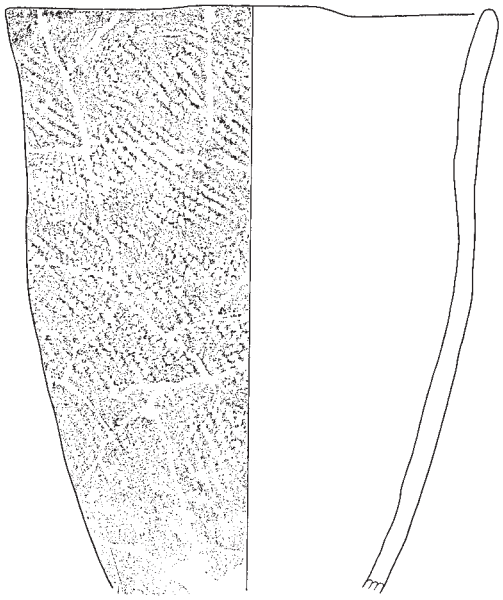
第 190 図　遺構外出土縄文土器（９）



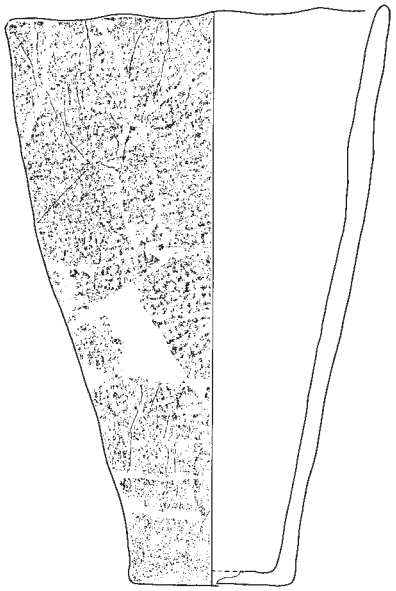
第 191 図　遺構外出土縄文土器（10）



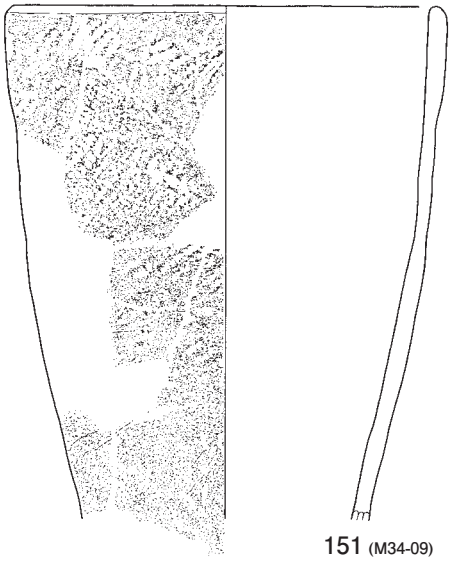
第 192 図　遺構外出土縄文土器（11）



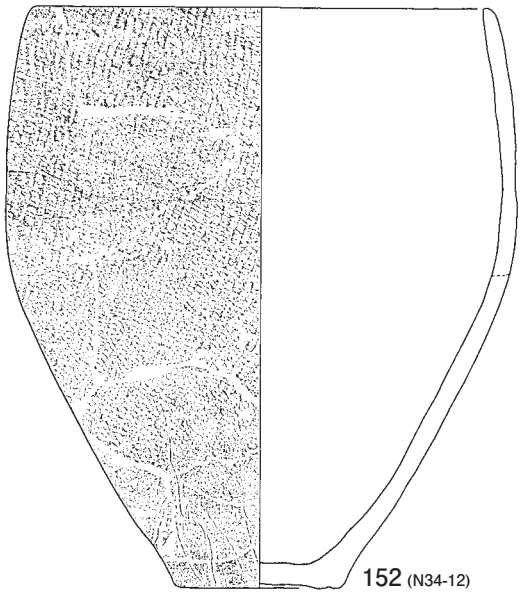
149 (M34-09)



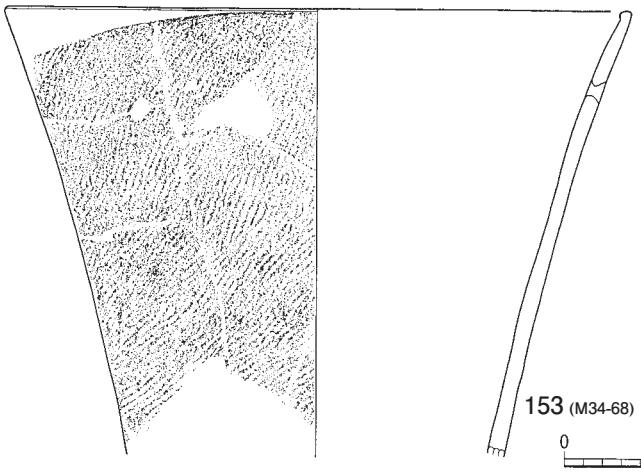
150 (M33-99)



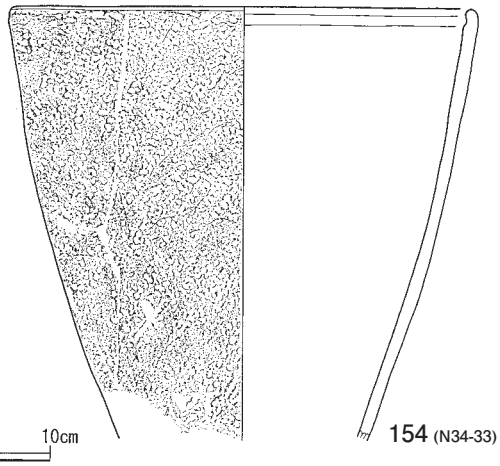
151 (M34-09)



152 (N34-12)



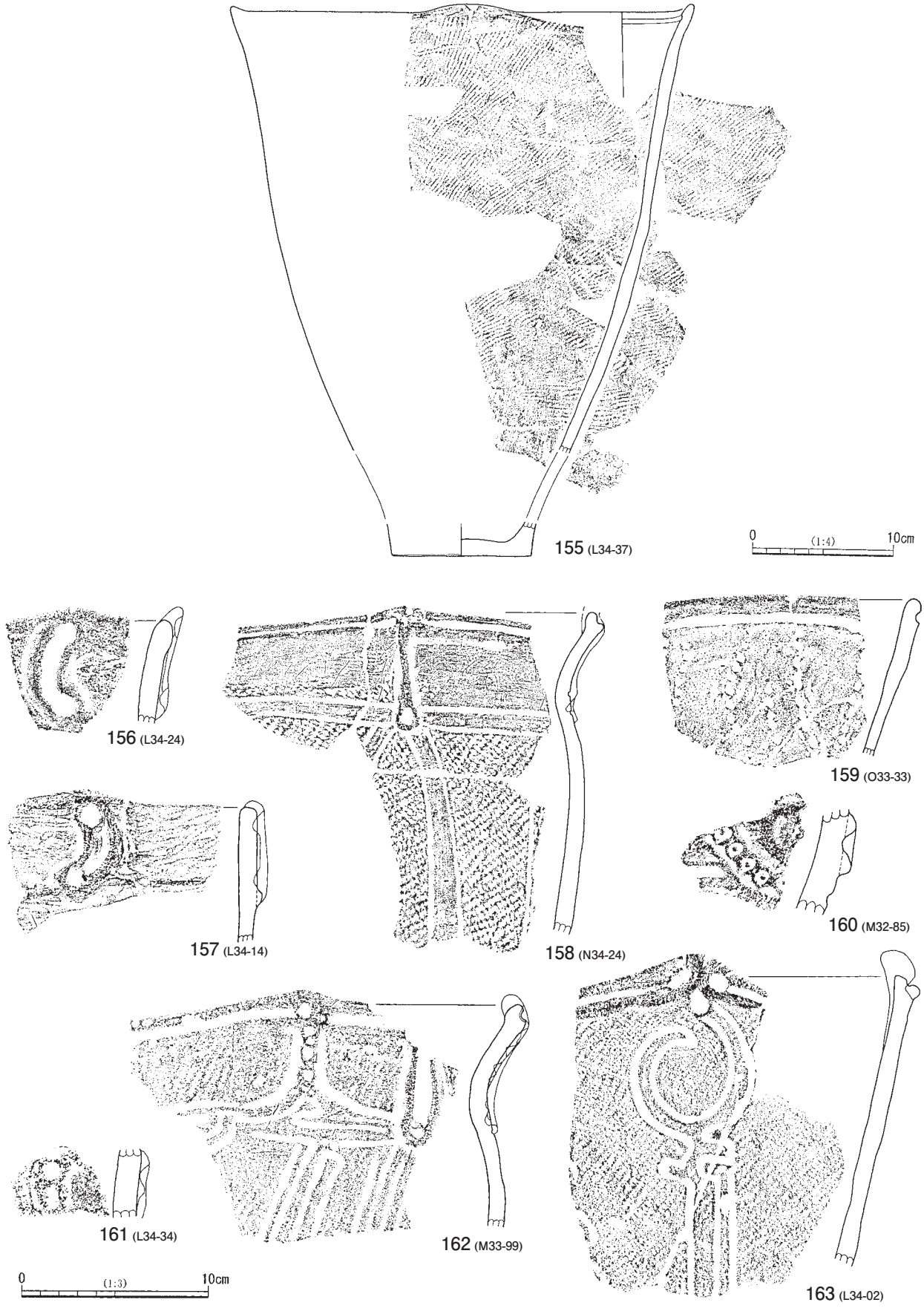
153 (M34-68)



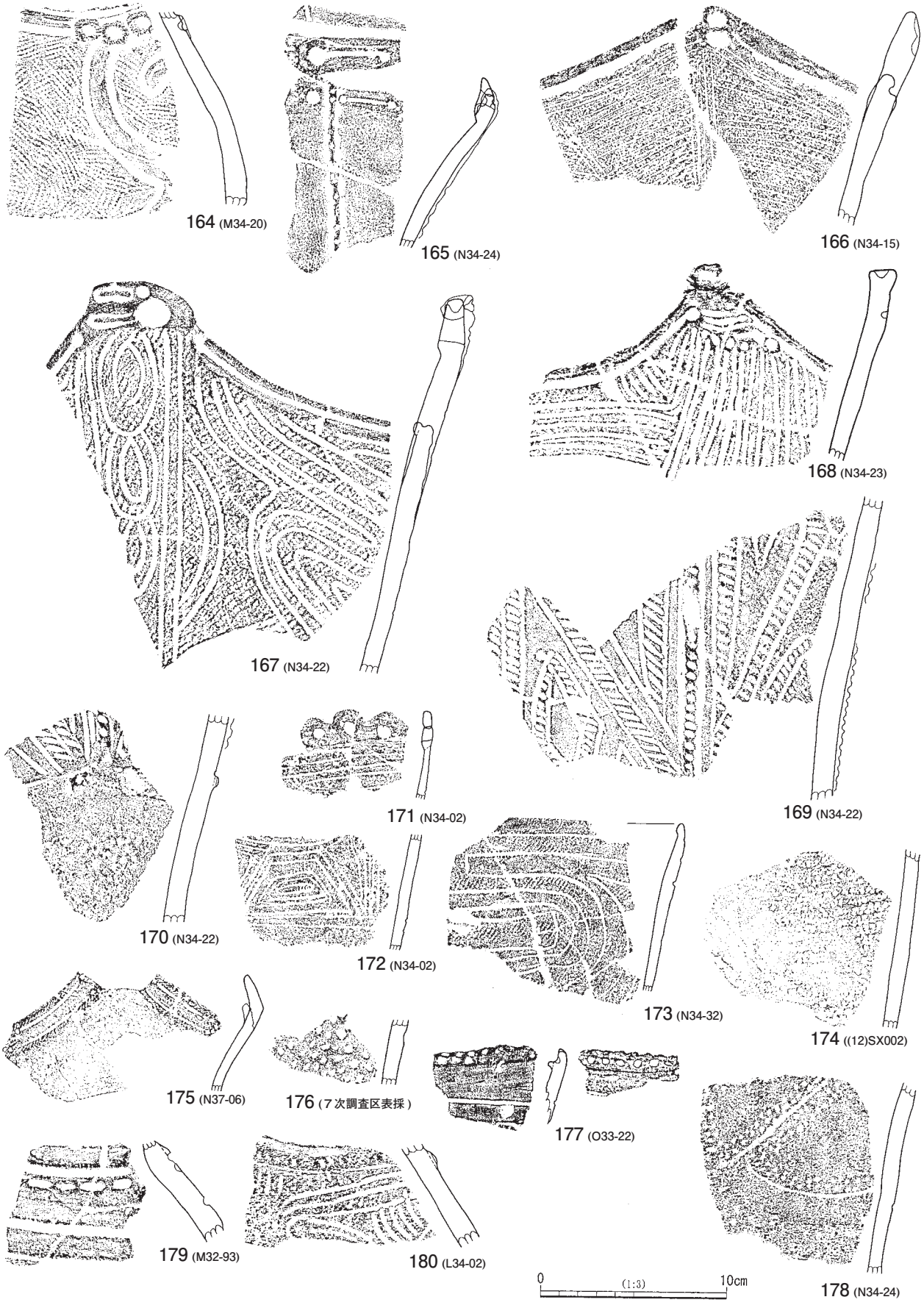
154 (N34-33)

0 (1:4) 10cm

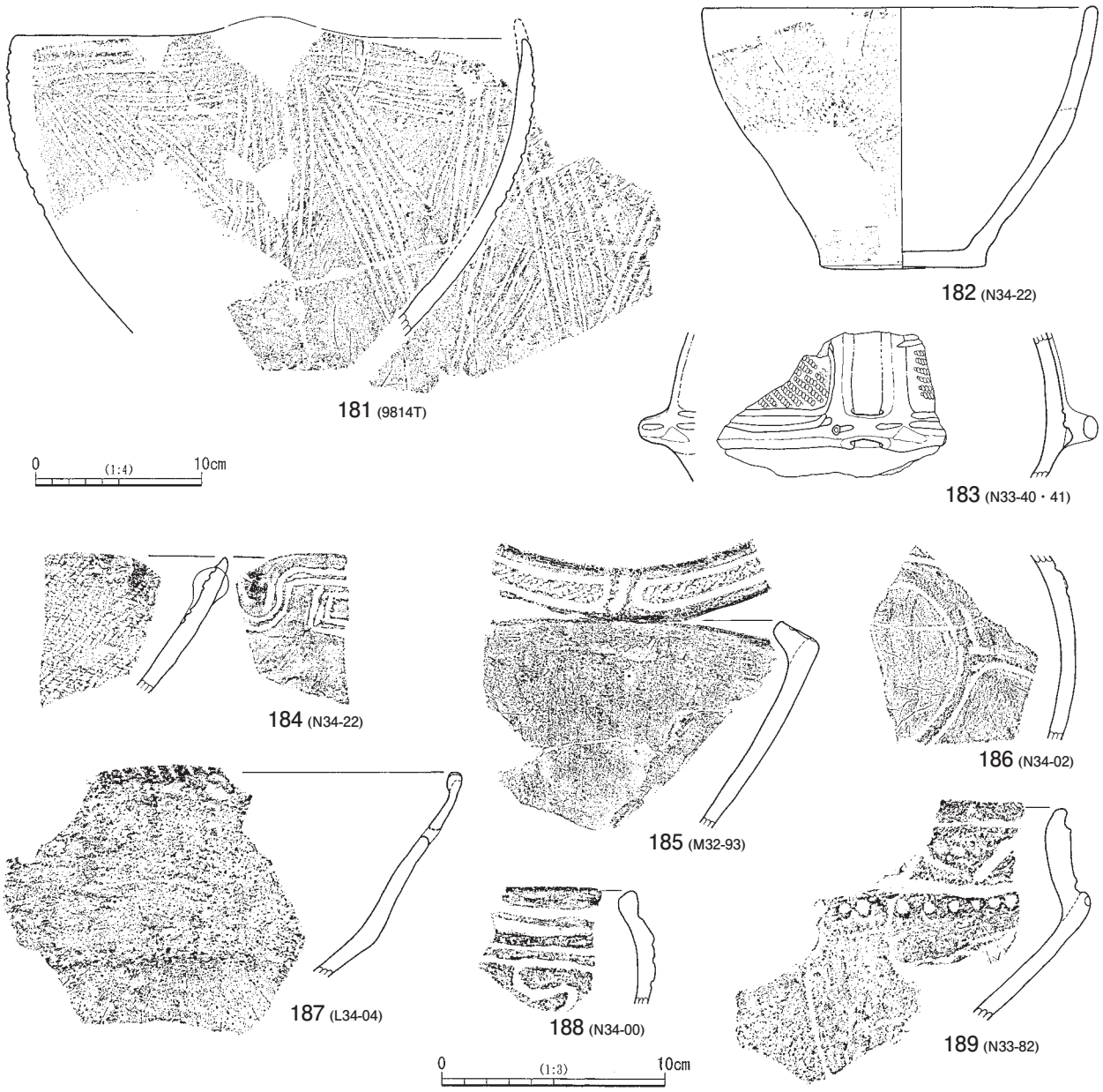
第 193 図　遺構外出土縄文土器（12）



第 194 図　遺構外出土縄文土器（13）

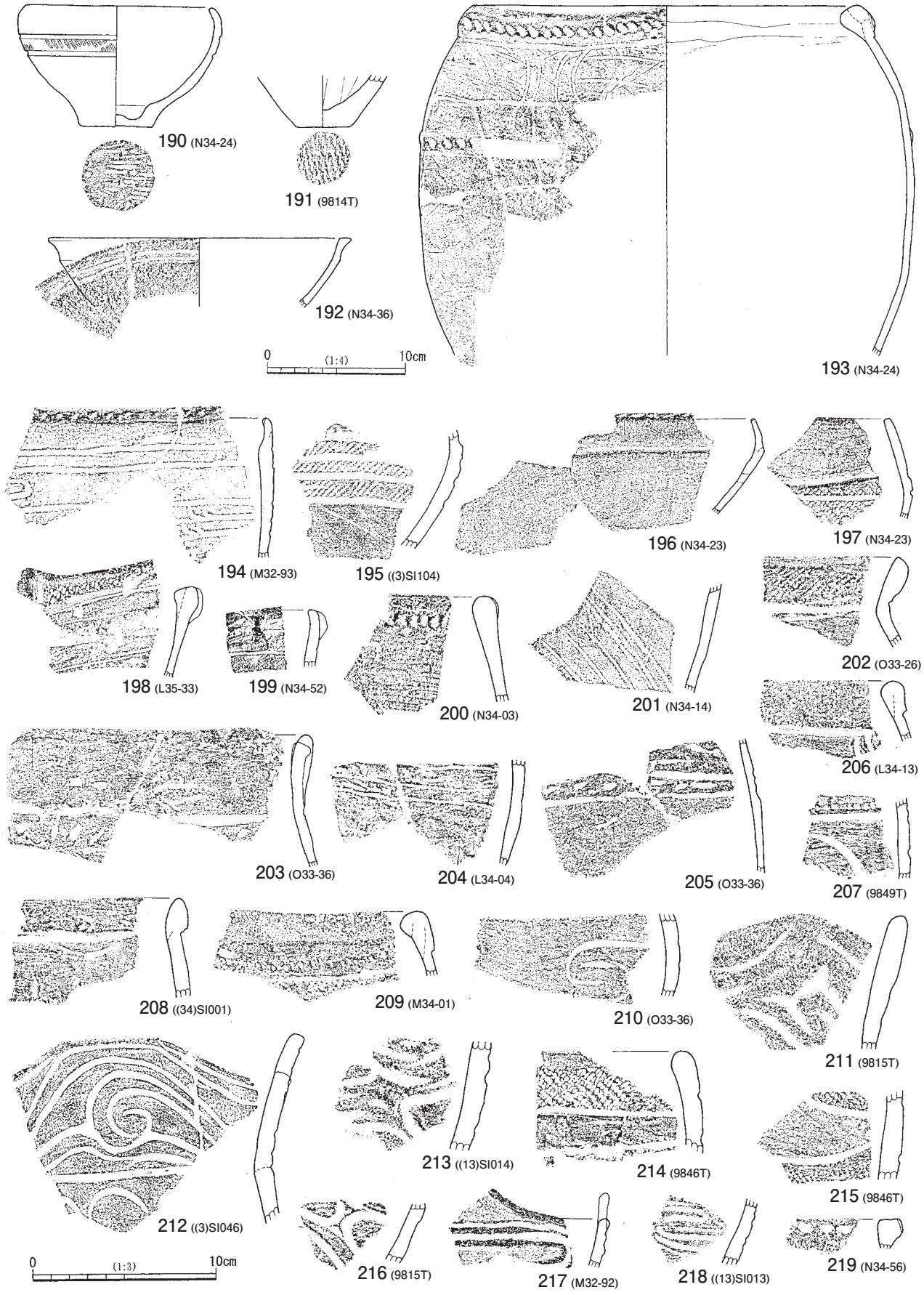


第 195 図　遺構外出土縄文土器（14）

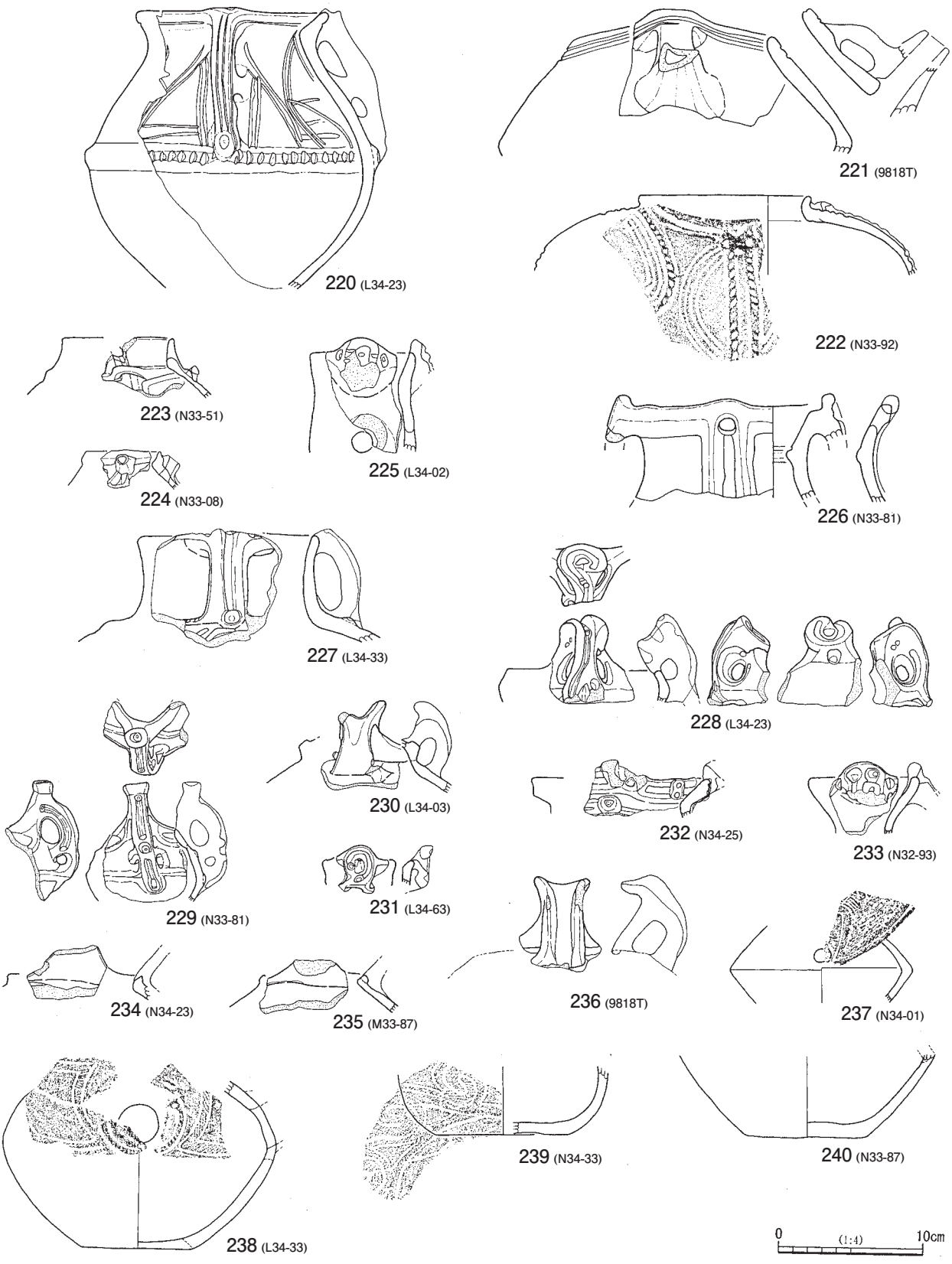


第196図　遺構外出土縄文土器（15）

位に配される。160は隆帯が円形に貼り付けられ、周りに円形刺突が配される。161は胎土に石英・長石粒が多量に混入するなど他の土器とは大きく異なっていることや、器壁が厚く復元するとかなりの大きさになると推測されることから、搬入された綱取式土器である可能性が考えられる。165～170になると単位文的要素は薄れ、集合沈線による幾何学的な意匠が器面を覆う。堀之内１式の新段階に位置付けられるもので、遺構出土土器でも主体を占める。171～173・175・177は堀之内２式の深鉢である。176は三十稲場式の影響を受けたと思われる深鉢である。179・180・183・186は鉢で、いずれもかなり大形である。181・182・184・185・187～189は浅鉢である。174・178・190～219は後期中葉以降に属するものである。194は加曽利Ｂ１式の精製深鉢口縁部、178・195は胴部、174は粗製深鉢胴部である。178は三角形を描く沈線に沿って刺突列が配されるもので、東北地方の宝ヶ峯式の影響を受けたものと思われる。190・196・197は加曽利Ｂ２式～３式の浅鉢である。192は安行１式の浅鉢、198・199は精製深鉢の口縁部である。202・



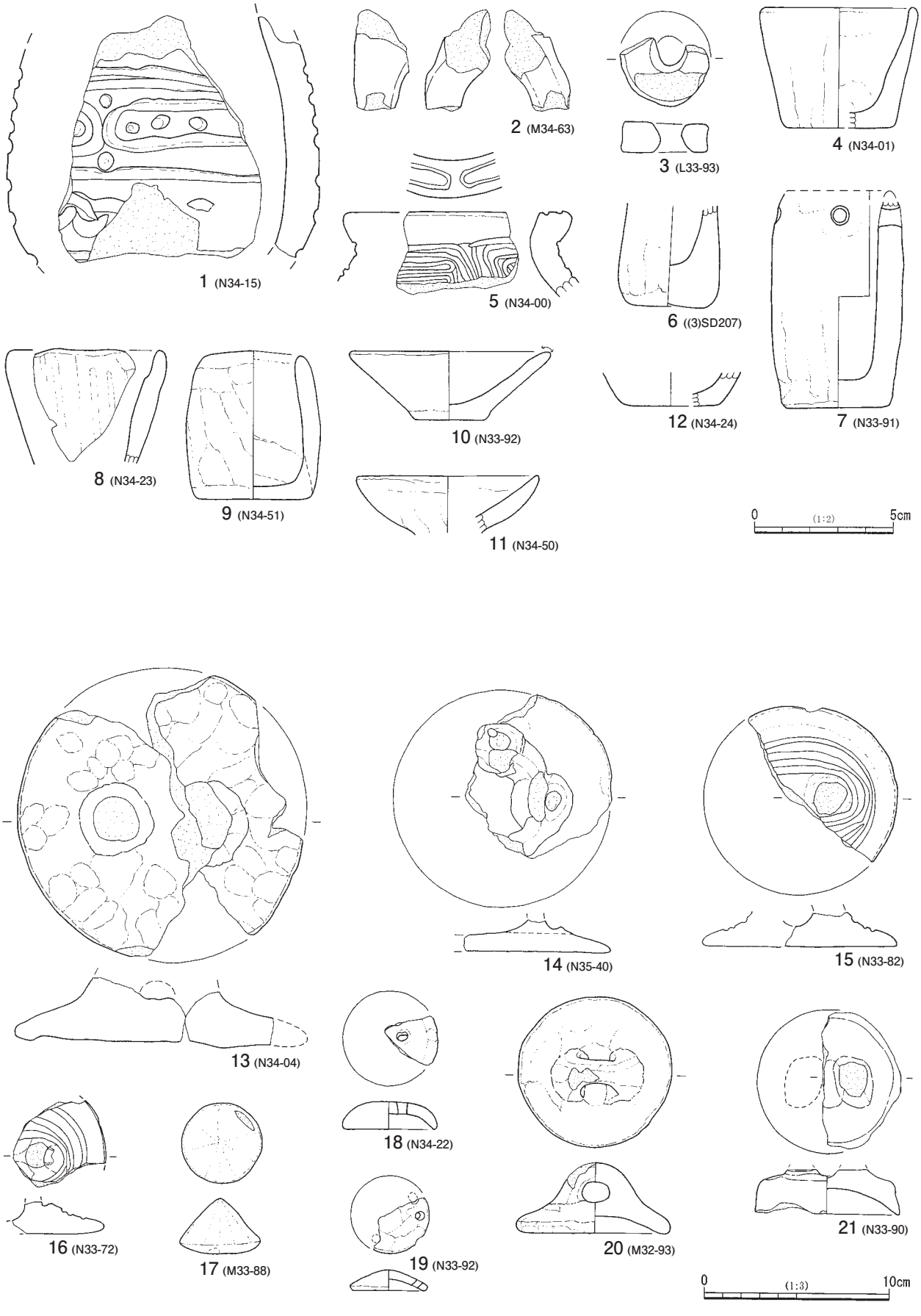
第 197 図　遺構外出土縄文土器（16）



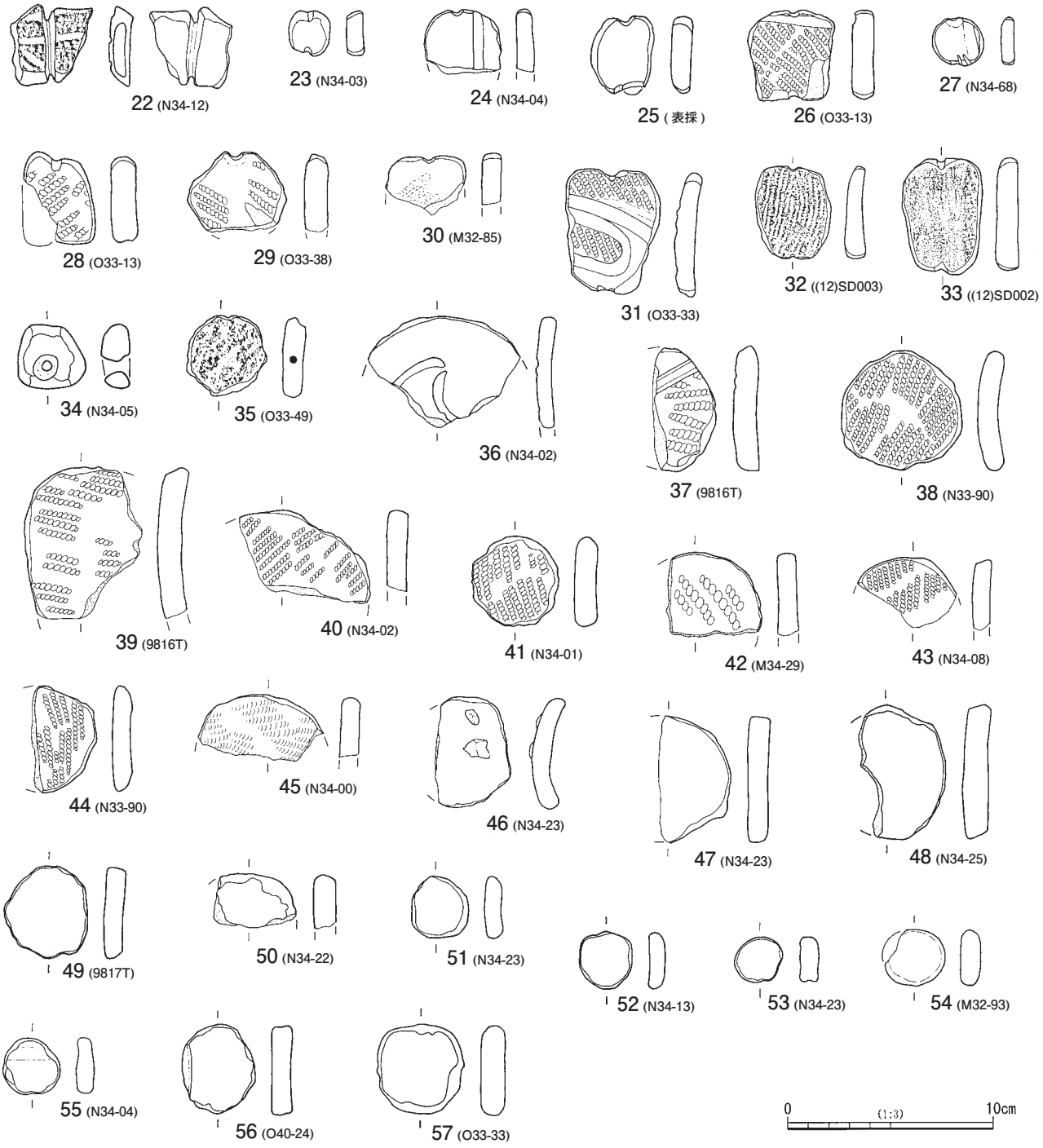
第 198 図　遺構外出土縄文土器（注口土器 1）

第 199 図　遺構外出土縄文土器（注口土器 2）

第 200 図　遺構外出土縄文土器（注口土器 3）



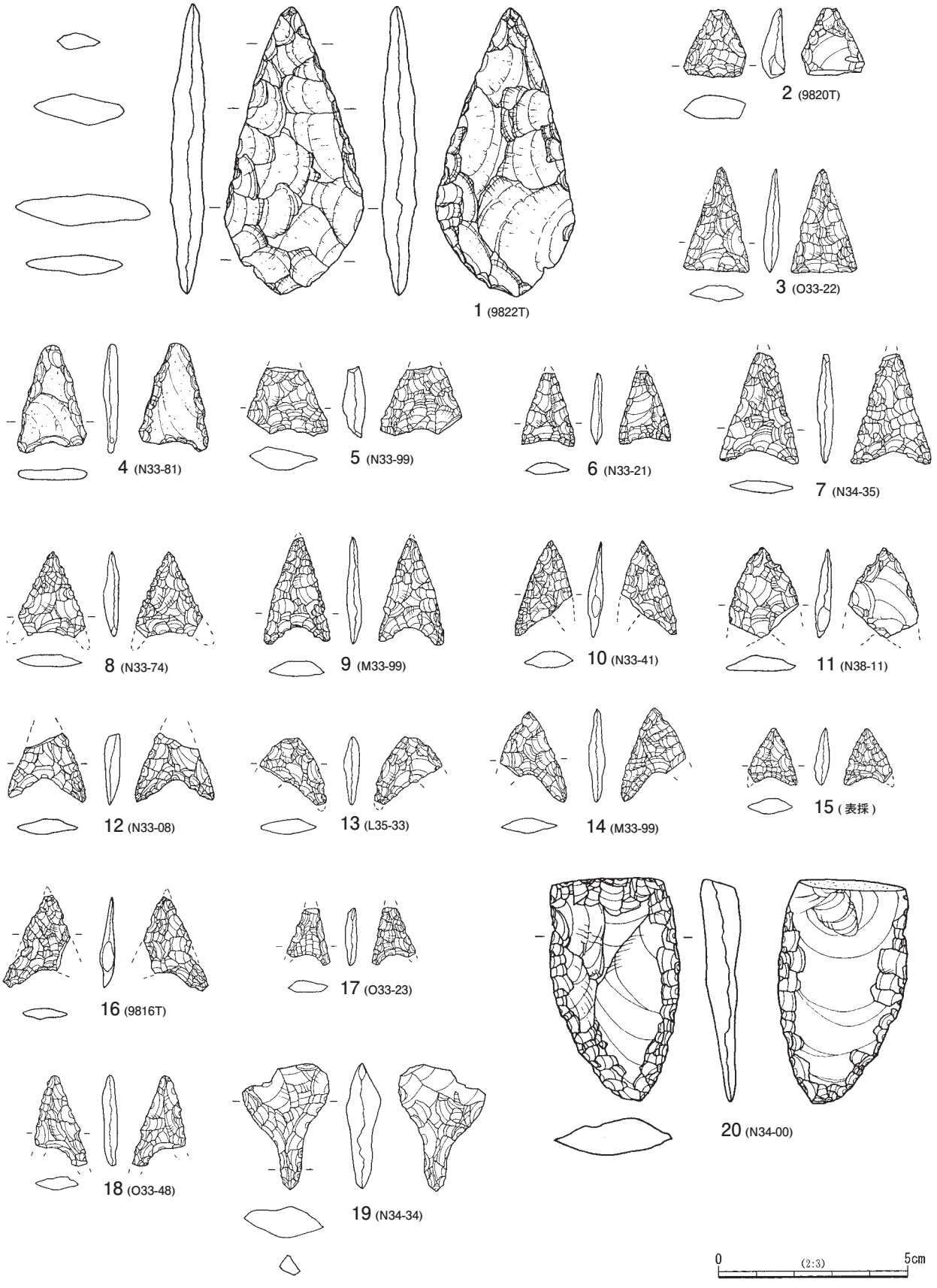
第 201 図　遺構外出土縄文時代土製品（1）、石製品



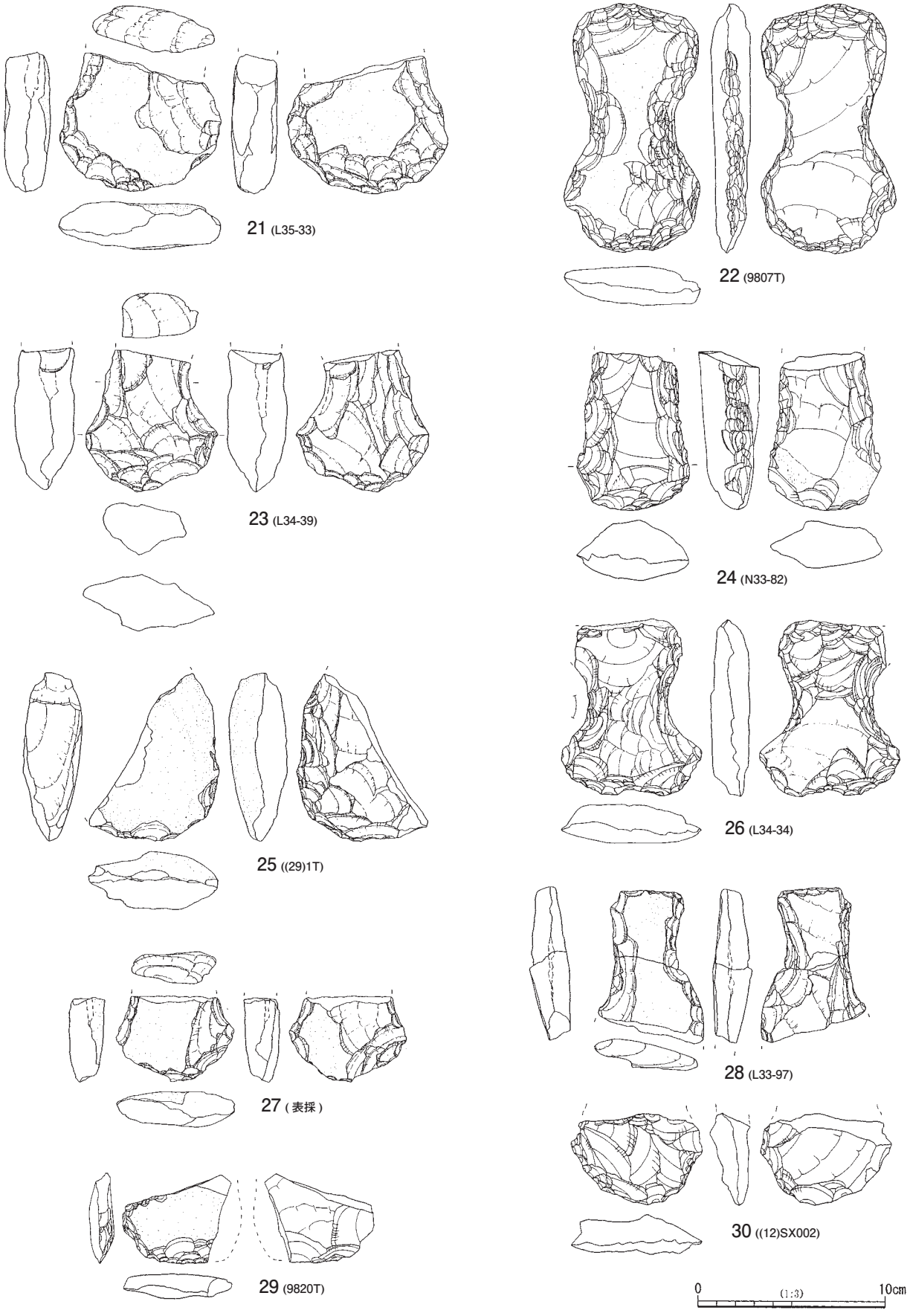
第 202 図　遺構外出土縄文時代土製品（２）

206は安行３ａ式の精製深鉢口縁である。193・200・201は後期末から晩期初頭の粗製深鉢である。203～205・210～213は安行３ｃ～３ｄ式の精製深鉢、207～209は粗製深鉢である。214・215は前浦式の深鉢である。216は大洞系土器の浅鉢胴部と考えられる。217・218は晩期後葉の浮線文土器で、それぞれ浅鉢の口縁部と胴部である。219は弥生土器の壷口縁部である。第198～200図は堀之内式を中心とした注口土器を抽出して掲載している。220～240は器形復元ができるもの、241～269は口縁部、270～280は把手、281～296は胴部、297～314は注口部である。

（２）縄文時代土製品（第201・202図、図版93・94）

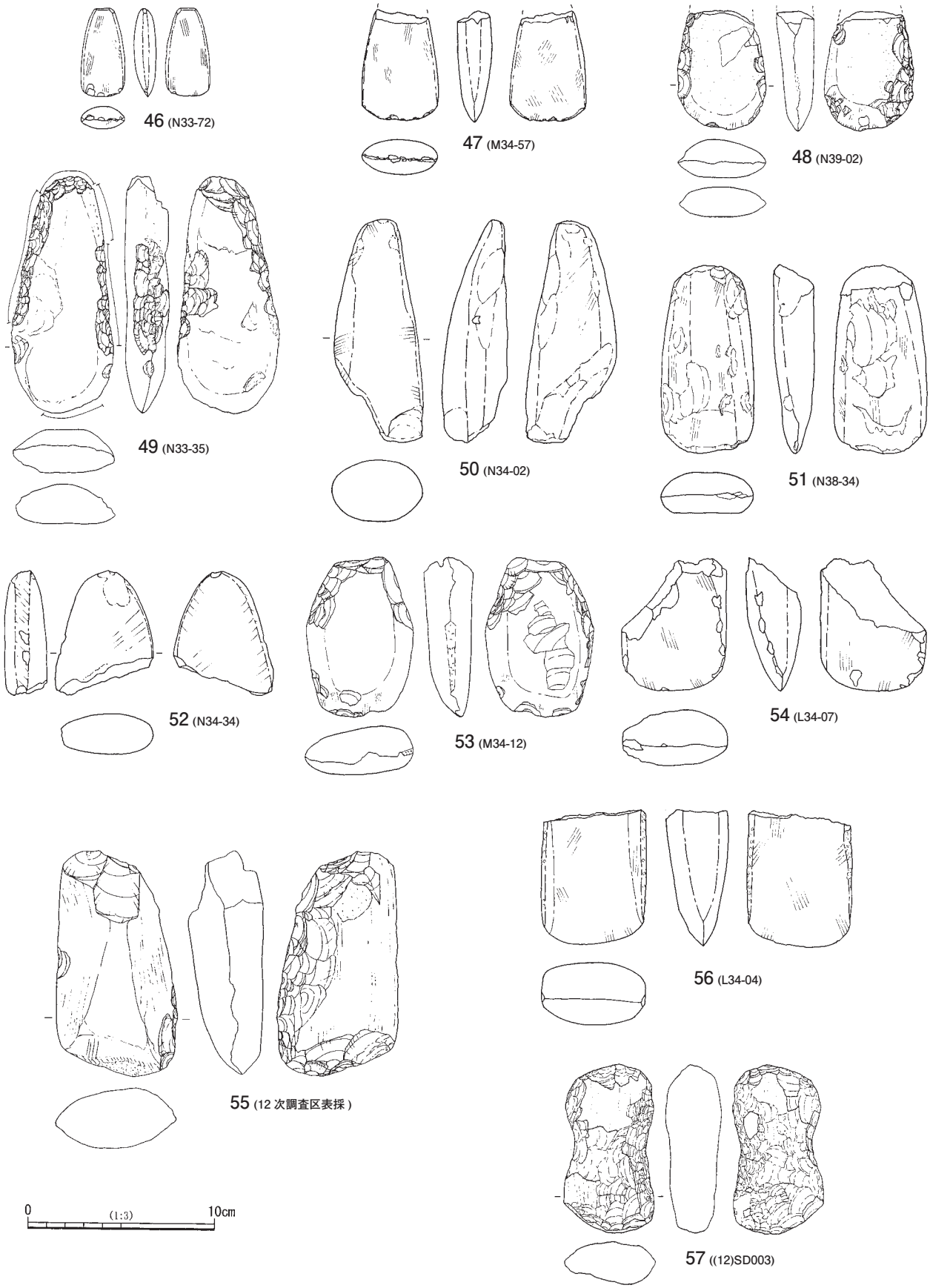


第 203 図　遺構外出土縄文時代石器（1）

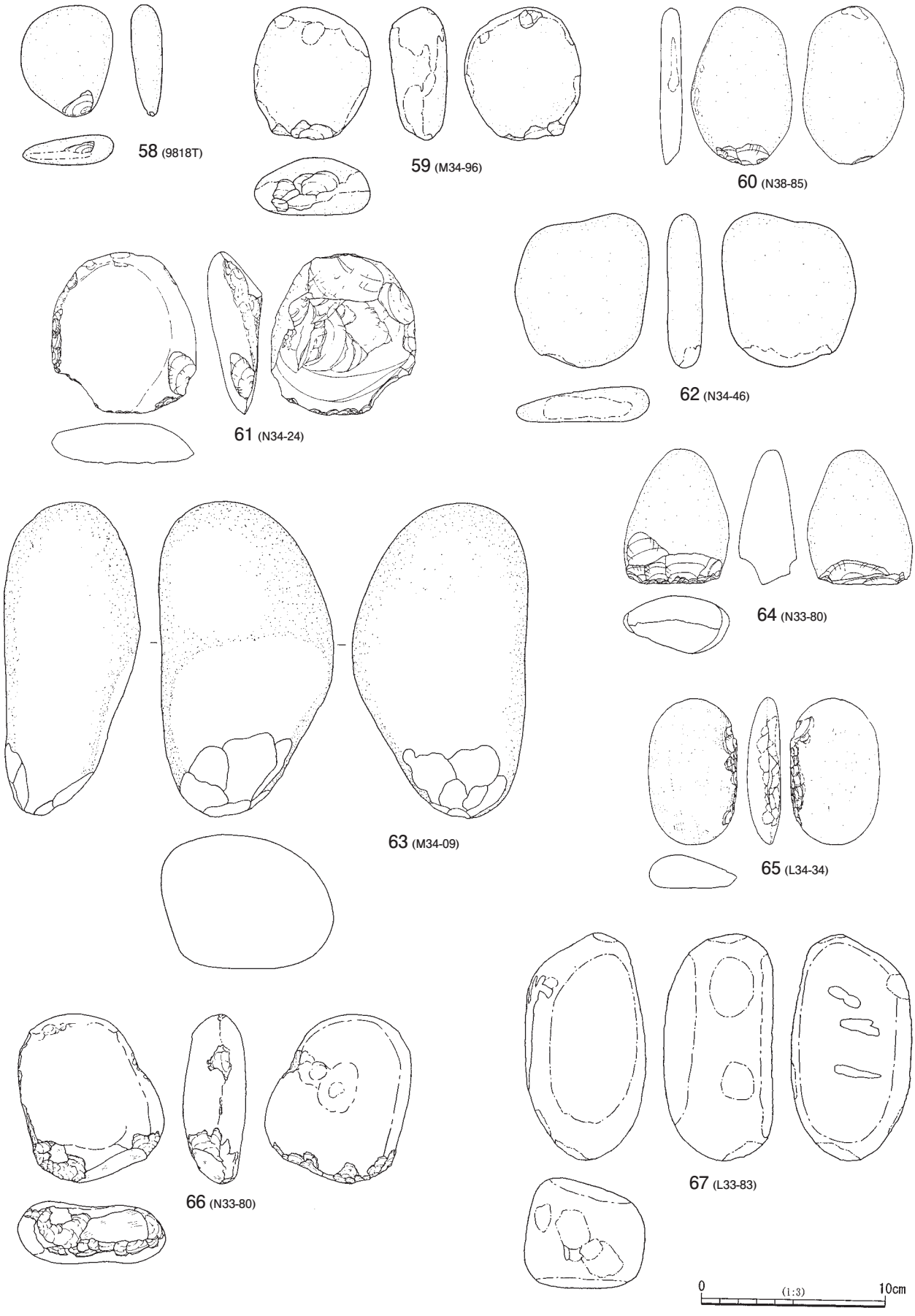


第 204 図　遺構外出土縄文時代石器（２）

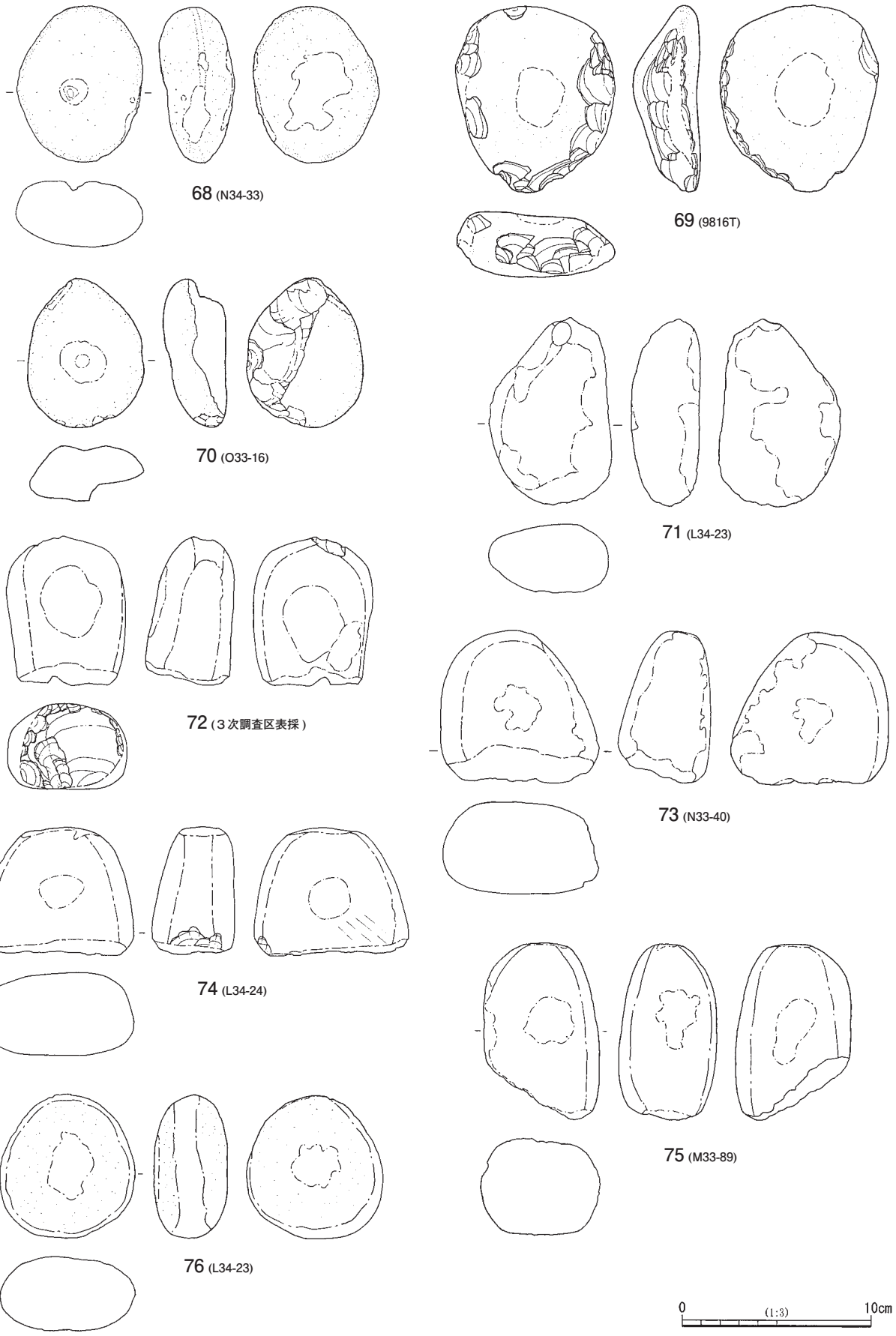
第 205 図　遺構外出土縄文時代石器（3）



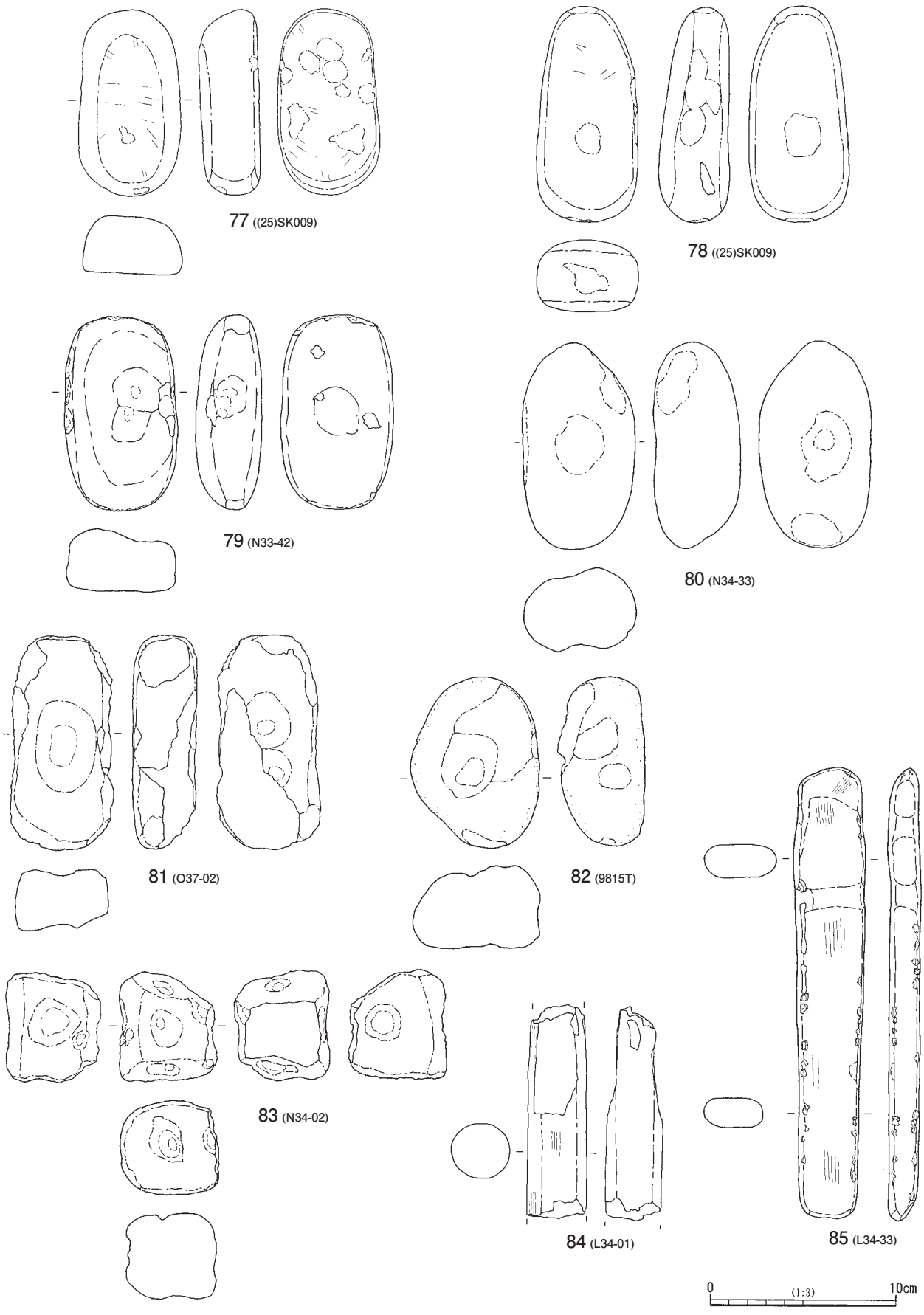
第 206 図　遺構外出土縄文時代石器（４）



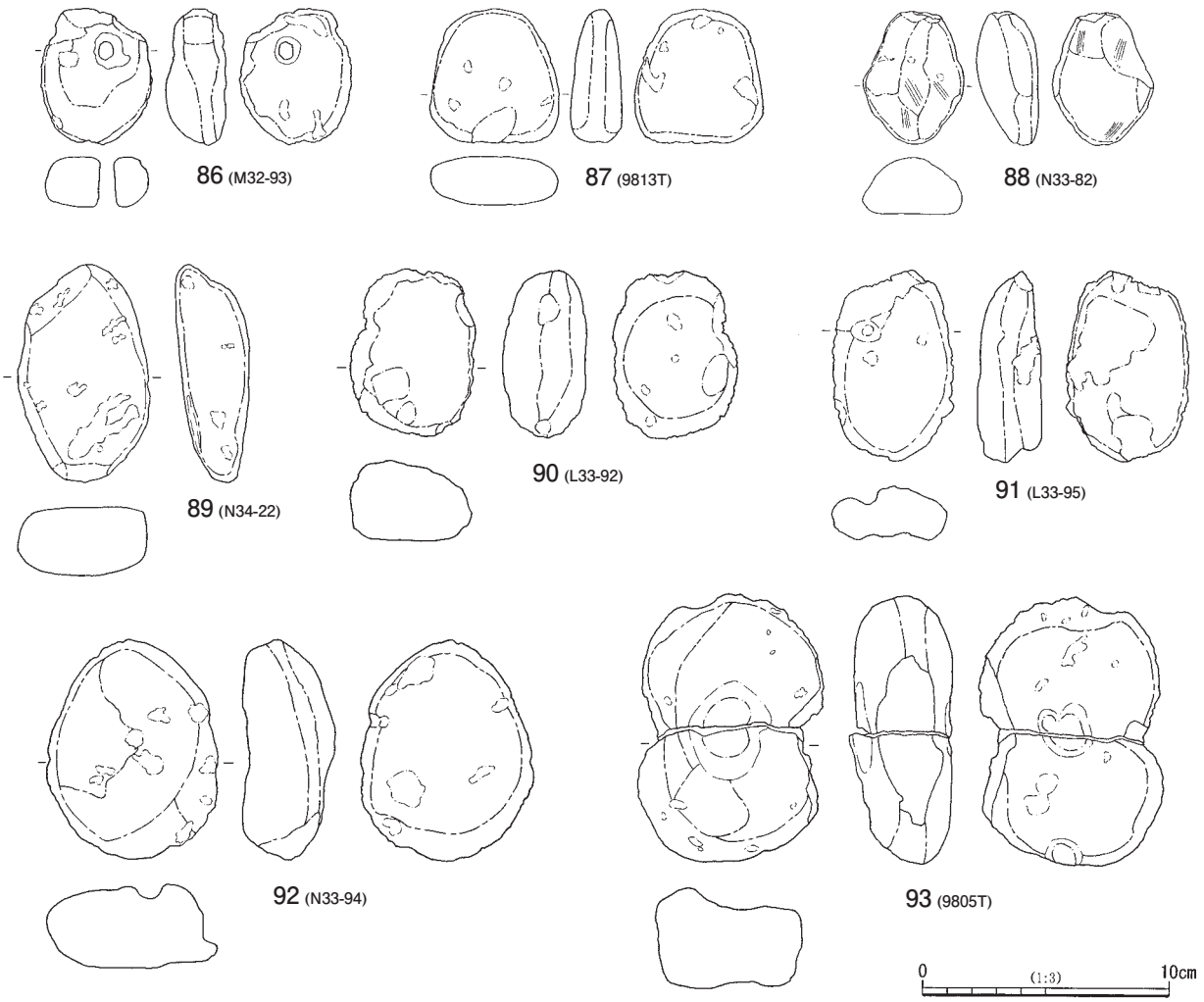
第 207 図　遺構外出土縄文時代石器（5）



第 208 図　遺構外出土縄文時代石器（６）



第 209 図　遺構外出土縄文時代石器（7）

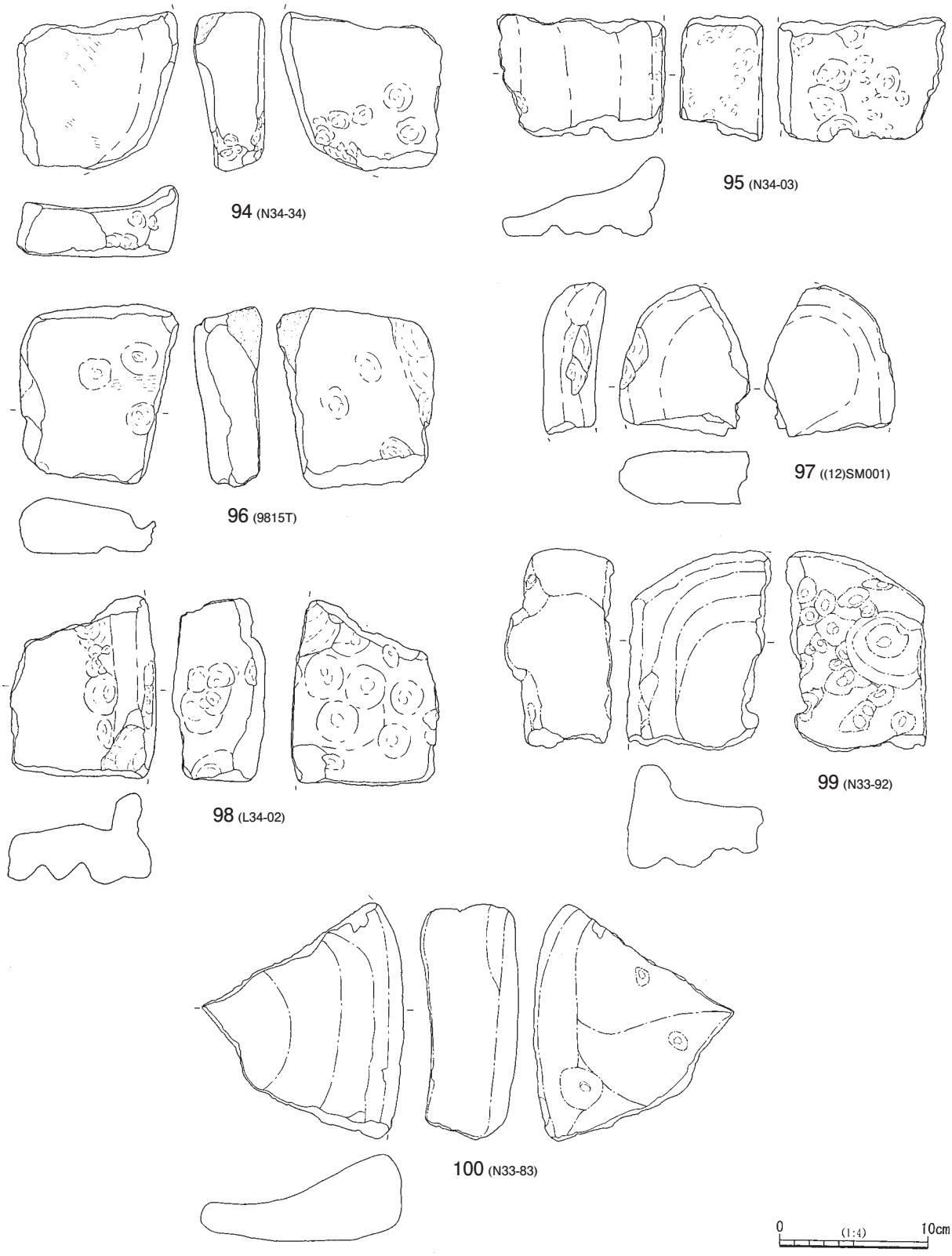


第210図　遺構外出土縄文時代石器（８）

１は筒形土偶の胴部であるが、全体に摩耗が顕著である。２は山形土偶の脚で、上端はソケット状になっている。３は有孔土製円盤で、摩耗が顕著である。４～12はミニチュア土器である。６は被熱が顕著である。７は口唇部を欠損するもののほぼ完形で、口唇直下の前後左右４か所に焼成前穿孔が認められる。８は内面口唇直下に沈線上のナゾリが入り、堀之内２式に相当すると思われる。13～16・18～21は蓋形土製品である。13は大形品であるが全体の調整は指頭とナデで処理しており、かなり雑な印象である。14も上面に指頭成形痕が残る。15と16は同一個体の可能性がある。18・21は上・下面とも丁寧に調整されている。19は右側に２か所の焼成前穿孔が認められるが、相対する左側も同じく２か所穿孔されている可能性が高い。17は三角錐形を呈する土製品で、時期は不明である。22～33は土器片錘である。素材は中期加曽利Ｅ式の土器が多く、加工時期もほぼ同じと考えられる。34は有孔土器片円盤である。35～57は土器片円盤である。素材は前期から後期までの土器が使われているが、加工時期は後期と思われる。

（３）縄文時代石器（第203～211図、図版95～104）

１は柳葉形尖頭器で、縄文時代草創期の所産であるが、摩耗が顕著で剥離の状況が不鮮明である。２～18は石鏃で、２・３は平基、４～18は凹基である。４は摩耗が顕著で剥離の状況が極めて不鮮明である。15は高原山産と思われる黒曜石が素材である。19は石錐である。20は石匙であるが、緑色に発色する頁岩を素材としており、儀礼用の製品だった可能性がある。石材は北関東産か。21～45は打製石斧で、欠



第 211 図　遺構外出土縄文時代石器（9）

損しているものが多い。21・27・31・34・36は素材に扁平礫を使用している。28は中央で破断されているほか、両側刃部も欠損している。42は石斧製作で発生した調整剥片と思われる。45は中央部に敲打痕があり、敲石としても使われていたと思われる。46～57は磨製石斧である。57は本来打製石斧だったものを研磨して転用している。58～83は磨石・敲石である。66は熱を受けている。84は石棒、85は石剣に類似する棒状製品である。84は熱を受けている。86～93は軽石製品である。94～100は石皿である。99・100は熱を受けている。

4　貝層

（1）貝サンプルの採取地点と分析方法

当遺跡では遺構の覆土を中心に小規模な貝ブロックが検出されている。概要については遺構の説明の中で述べているが、これらのうち遺存状況が良好なものについてはサンプルを採取している。サンプルの水洗から貝類の選別、同定、計測に至る作業は文化財課森宮分室で実施した。

貝サンプルの一覧は第８表の通りである。竪穴住居跡３軒５か所、土坑２基２か所の計７か所である。調査時は竪穴住居跡２軒４か所と土坑１基はコラムサンプルを採取し、竪穴住居跡１軒１か所と土坑１基は一括取り上げとした。コラムサンプルは基本的に平面30㎝四方で厚さ５㎝を１カットとして、貝層の上端から下端まで採取した。時期は(12)SK010土坑が中期末～後期初頭、それ以外が前期中葉の黒浜式である。貝サンプルは9.52㎜、４㎜、２㎜、１㎜、0.5㎜メッシュの試験篩による水洗分離を行った。選別したサンプルの量と水洗前の重量は第８表の通りである（一括取り上げサンプルは未計測）。貝類の選別は４㎜以上を対象とした。二枚貝類は殻長部の鋏歯が半分以上遺存するものを左右別に集計し、多い方を最小個体数とした。巻貝類は各軸下端が遺存するものを集計した。同定した貝種一覧は第９表、個体数の集計結果は第10表の通りで、各カットの種名ごとの個体数と割合を示している。この結果から主要な貝種を抽出して構成比をグラフ化したのが第212図である。

（2）分析結果

同定された貝は第９表の通り16科22種以上である。計測データについては遺構ごとに説明する。

(21)SI001（第159図）

住居跡の覆土中に形成された貝ブロックで、面積では住居のおよそ１/６程度を占める。住居内各所に大小様々なブロックが散在しているが、最も規模の大きい南東部のブロックは東西約2.1m、南北約3.6m、厚さは最大で約20㎝を測る。そのブロック中の２か所からコラムサンプルを採取した。サンプルａは住居中央部付近に設定し、確認面から床面まで６カット採取した。サンプルｂは南壁付近に設定し、同じく４カット採取した。ただしサンプルｂについては、断面実測はされていない。サンプルａの貝種構成はアサリが最多で37.5％、以下イボキサゴ23.3％、シオフキ14.9％、ハマグリ13.6％となってこの４種でおおよそ９割を占める。ただしカット別の出現頻度はかなり様相が異なっており、アサリとシオフキはほぼ全カットから偏りなく出現しているのに対し、イボキサゴとハマグリは上層側４カットまでがほとんどで、下層側は皆無である。サンプルｂもアサリが最多で73.5％、次いでハマグリが11.7％となりこの２種で８割以上を占める。カット別構成比はハマグリが下層側に偏っているのが目につく。また、ブロック状にヤマトシジミが出現しているのが特徴的である。

(21)SI003（第162図）

住居跡の覆土中に形成された貝ブロックで、面積では住居のおよそ１/４程度を占める。中央部が撹乱されているものの当遺跡では最大規模の貝ブロックで、東西約4.4m、南北約４mの範囲に及ぶ。厚さは最大約30cmを測る。他に南端部にも小規模な貝ブロックが存在する。床面直上から堆積しており、住居廃絶後時間をおかずに形成されたものと考えられる。コラムサンプルは２か所から採取した。サンプルａは住居中央部付近に設定し、確認面から床面まで６カット採取した。サンプルｂは南壁付近に設定し、同じく６カット採取した。ただしいずれも断面図が実測されていないため図示できない。サンプルａの貝種構成はマガキが最多で32.6%、次いでハマグリ28.5%、イボキサゴ10.2%と続いてこの３種で７割を占める。カット別の構成としては、上層側はハマグリが頻出し、下層側はマガキ、イボキサゴが頻出する傾向にある。特に最下層のカット６はマガキが６割近くを占める。サンプルｂもマガキが最多で65.5%、次いでハイガイ15.9%、オキシジミ7.2%で、この３種で９割近くを占める。カット別の構成では、ハイガイが中間カットで出現頻度が減るのが目につく程度である。

(3)SI160（第168図）

住居跡の覆土中に形成された貝ブロックである。平面的には60cm四方とごく小規模なもので、厚さも10cm程度であったため一括取り上げした。貝種構成はアサリが最多で70.4%、次いでハマグリ16.5%、シオフキ6.4%となり、この３種で９割以上を占める。

(21)SK002（第178図）

土坑の覆土中に形成された貝ブロックである。当遺構は中・近世溝状遺構(21)SD002に削平されているため南側の壁はほとんど残存していないが、当初から傾斜地だったらしく貝層も斜めに堆積している。コラムサンプルはブロック中央部から１か所、遺構確認面から貝ブロックの下端まで８カット採取した。貝種構成はイボキサゴが最大で31.0%を占め、次いでアサリが28.1%、ハマグリが25.6%、シオフキが9.5%と続き、この４種で全体の９割以上を占める。カット別でも概ね構成比は同じである。

(12)SK010（第181図）

土坑の覆土中に形成された貝ブロックである。平面的には径約40cm～45cmの範囲に広がっていることが分かっているが、断面図は作成されていないため堆積状況に関する情報は一切ない。貝の総数から、(3)SI160住居跡の貝ブロックよりやや規模が大きかっただろうと想像されるのみである。貝種構成はハマグリが85.5%と圧倒的多数を占める。以下、マガキ4.5%、シオフキ3.4%、ハイガイ2.9%と続くが、いずれも５%以下である。

第６表　縄文時代土製品属性表

挿図番号	出土	種別	最大長 ＊口径 ▲直径 (cm)	最大幅 ＊器高 (cm)	最大厚 ＊底径 (cm)	重量 (g)	時期	備考
第43図17	(3)SI012	ミニチュア土器	＊7.1	＊5.6	＊1.0	91.31	堀之内	
第43図18	(3)SI012	ミニチュア土器	＊4.7	＊4.8	－	20.41		
第44図42	(3)SI012	ミニチュア土器	＊4.5	＊4.0	－	12.53		
第49図44	(3)SK034	蓋形土製品	▲8.9	－	4.8	139.58	堀之内	
第91図５	(13)SI001	土製円盤	5.0	3.5	0.9	15.05		復元径7.8cm
第111図159	(13)SI013	蓋形土製品	▲6.9	－	4.0	54.68	堀之内	
第119図７	(19)SI002	土製耳飾り？	2.1	1.0	0.7	1.89		
第119図13	(19)SI003	土器片錘？	4.2	4.6	1.0	14.15		
第119図14	(19)SI003	土器片錘？	2.9	2.8	1.1	8.62		
第119図15	(19)SI003	土器片錘？	3.1	3.3	0.9	10.64		
第119図23	(19)SI004	土器片錘？	4.2	2.9	1.0	12.10	後期？	
第143図16	(3)SK122	土器片円盤	4.5	4.1	0.9	20.74		
第143図22	(3)SK120	土偶	3.6	3.0	4.2	30.76	堀之内	ハート形
第147図13	(3)SK170	蓋形土製品	▲8.8	－	1.8	44.15	堀之内	
第152図９	(5)SK214	土器片錘	4.1	3.5	0.9	14.75	称名寺	
第201図１	N34－15	土偶	胴部径11.2	8.7	－	84.88	堀之内	筒形
第201図２	M34－63	土偶	3.6	2.4	2.0	13.05	加曽利Ｂ	山形
第201図３	L33－93	土製耳飾り？	▲3.2	－	1.1	7.52		
第201図４	N34－01	ミニチュア土器	＊6.5	＊4.0	＊4.3	18.90		
第201図５	N34－00	ミニチュア土器	＊8.2	＊3.0	－	21.92	堀之内	
第201図６	(3)SD207	ミニチュア土器	－	＊3.7	＊2.8	36.61		
第201図７	N33－91	ミニチュア土器	－	＊3.8	＊7.4	129.03		中・近世遺構出土
第201図８	N34－23	ミニチュア土器	＊5.8	＊4.0	－	9.62	堀之内	
第201図９	N34－51	ミニチュア土器	＊3.4	＊5.4	＊4.0	45.66		
第201図10	N33－92	ミニチュア土器	＊7.2	＊2.5	＊2.4	24.54		
第201図11	N34－50	ミニチュア土器	＊6.4	＊2.1	－	7.57		
第201図12	N34－24	ミニチュア土器	－	＊1.2	＊3.4	4.73		
第201図13	N34－04	蓋形土製品	▲15.6	－	3.4	535.04	堀之内	
第201図14	N35－40	蓋形土製品	▲11.8	－		81.15	堀之内	
第201図15	N33－82	蓋形土製品	▲10.4	－	1.8	59.95	堀之内	
第201図16	N33－72	蓋形土製品	4.8	5.0	1.7	28.47	堀之内	
第201図17	M33－88	不明	4.4	－	3.0	38.70		
第201図18	N34－22	蓋形土製品	▲5.1	－	1.5	5.88	堀之内	
第201図19	N33－92	蓋形土製品	▲4.2	－	1.1	4.69	堀之内	
第201図20	M32－93	蓋形土製品	▲8.2	－	3.8	81.64	堀之内	
第201図21	N33－90	蓋形土製品？	▲7.8	－	2.4	52.22	堀之内	
第202図22	N34－12	土器片錘	3.9	4.0	1.1	13.30	加曽利Ｅ	
第202図23	N34－03	土器片錘	2.1	2.0	0.8	4.13	加曽利Ｅ？	
第202図24	N34－04	土器片錘	3.0	3.7	0.8	11.50	加曽利Ｅ	
第202図25	表採	土器片錘	3.7	2.8	1.0	12.43	加曽利Ｅ？	
第202図26	O33－13	土器片錘	4.3	4.1	1.0	23.13	加曽利Ｅ	
第202図27	N34－68	土器片円盤	2.3	2.5	0.6	4.01	加曽利Ｅ？	
第202図28	O33－13	土器片錘	4.5	3.0	1.2	16.95	加曽利Ｅ	
第202図29	O33－38	土器片錘	3.8	4.7	1.1	20.71	加曽利Ｅ	
第202図30	M32－85	土器片錘	2.8	3.8	0.9	10.92	加曽利Ｅ	
第202図31	O33－33	土器片錘	6.0	4.5	0.9	30.13	加曽利Ｅ	
第202図32	(12)SD003	土器片錘	4.5	3.7	0.9	18.40	加曽利Ｅ	中・近世遺構出土
第202図33	(12)SD002	土器片錘	5.6	3.9	1.1	25.40	加曽利Ｅ	中・近世遺構出土
第202図34	N34－05	有孔土器片円盤	3.0	3.3	3.1	14.07		
第202図35	O33－49	土器片円盤	3.9	3.8	1.0	16.34	黒浜	加工時期は後期？
第202図36	N34－02	土器片円盤	5.4	7.3	0.8	32.52	称名寺	
第202図37	9816T	土器片円盤	6.0	3.0	1.1	25.14	堀之内	
第202図38	N33－90	土器片円盤	5.8	5.8	1.0	47.99	後期	
第202図39	9816T	土器片円盤	7.8	5.6	1.2	59.42	後期	
第202図40	N34－02	土器片円盤	4.5	5.1	1.0	29.39	後期	
第202図41	N34－01	土器片円盤	4.4	4.2	1.0	23.17	後期	
第202図42	M34－29	土器片円盤	4.0	4.5	1.0	23.96	後期	
第202図43	M34－08	土器片円盤	3.3	4.5	0.8	13.84	後期	
第202図44	N33－90	土器片円盤	5.1	3.1	0.9	17.07	後期	
第202図45	N34－00	土器片円盤	3.0	6.0	0.9	18.21	後期	
第202図46	N34－23	土器片円盤	5.4	3.6	1.0	19.48	後期	
第202図47	N34－23	土器片円盤	6.0	3.5	1.0	24.40		
第202図48	N34－25	土器片円盤	6.5	4.1	1.2	34.82		
第202図49	9817T	土器片円盤	4.5	4.0	1.0	18.98		
第202図50	N34－22	土器片円盤	2.6	4.0	1.1	13.52		
第202図51	N34－23	土器片円盤	3.0	2.7	0.8	8.39		
第202図52	N34－13	土器片円盤	2.8	2.5	0.7	6.16		
第202図53	N34－23	土器片円盤	2.2	2.2	0.9	5.14		
第202図54	M32－93	土器片円盤	2.7	2.9	1.0	7.90		
第202図55	N34－04	土器片円盤	2.7	2.7	0.8	6.22		
第202図56	O40－24	土器片円盤	4.3	3.5	1.0	19.48		
第202図57	O33－33	土器片円盤	4.3	4.1	1.1	22.96		

＊ミニチュア土器の計測項目　▲蓋形土製品・耳飾りの計測項目

第７表　縄文時代石器属性表

挿図番号	調査次	報告時遺構名	遺物番号	器種	石材	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（g）	備考
第43図27	3	(3)SI012	006－2	石鏃	チャート	24.5	13.8	2.8	0.70	
第48図20	3	(3)SI032	032－3	磨製石斧	透閃石岩	44.4	27.6	10.3	20.22	
第48図21	3	(3)SI032	032－13	珠	翡翠	23.9	18.7	11.0	6.50	
第50図11	3	(3)SI035	035－2	磨製石斧	変成岩	118.8	28.5	32.3	167.13	
第55図５	3	(3)SI073	M34－06－2	垂飾	滑石製	29.8	13.9	6.4	4.26	
第60図55	3	(3)SI079	079－20	石鏃	チャート	21.6	15.2	3.5	0.70	
第60図60	3	(3)SI080	080－5	石鏃	黒曜石	13.8	13.4	2.9	0.30	
第64図53	3	(3)SI104	N34－21－90、表採－4	打製石斧	安山岩	135.3	81.4	19.6	298.80	
第64図54	3	(3)SI104	N34－11－24	打製石斧	ホルンフェルス	11.7	68.1	19.3	166.60	
第64図55	3	(3)SI104	N34－21－94	石皿	安山岩	198.0	142.0	74.5	1,215.40	
第72図11	3	(3)SI139	139－107	石皿	安山岩	236.0	125.0	70.5	1,321.70	
第72図12	3	(3)SK183	183－5	磨石	安山岩	59.0	51.5	31.5	102.79	
第76図51	3	(3)SI140	140－135	石皿	安山岩	219.0	164.0	53.0	1,475.20	
第78図10	3	(3)SI147	147－115	磨製石斧	緑色岩	50.7	24.8	11.7	27.96	
第78図11	3	(3)SI147	147－34	磨製石斧	粗粒玄武岩	93.4	48.4	24.0	192.96	
第78図12	3	(3)SI147	147－95	石棒	緑泥片岩	168.0	31.1	24.9	255.54	
第78図13	3	(3)SI147	147－83･116	石棒	結晶片岩	184.2	25.3	21.6	164.25	
第78図14	3	(3)SI147	147－118	敲石	砂岩	99.2	81.8	51.3	489.36	
第78図15	3	(3)SI147	147－93	軽石製品	軽石	124.2	77.6	21.1	34.76	
第80図12	3	(3)SI161	161－(不明)	軽石製品	軽石	55.0	53.5	19.5	14.17	
第80図13	3	(3)SI161	161－59	打製石斧	ホルンフェルス	100.5	59.3	23.3	154.20	
第80図14	3	(3)SI161	161－32	石皿	安山岩	125.0	71.5	58.5	264.15	
第83図33	3	(3)SI163	163－25	磨製石斧	緑色凝灰岩	127.7	37.2	21.2	150.21	
第83図34	3	(3)SI163	163－49	磨製石斧	緑色岩	56.5	41.5	25.5	65.85	
第83図35	3	(3)SI163	163－81	磨石	安山岩	118.5	67.0	34.0	396.79	
第83図36	3	(3)SI163	163－51	軽石製品	軽石	38.9	44.5	26.7	7.96	
第85図13	3	(3)SI130	130－5	磨製石斧	透閃石岩	42.2	24.4	7.7	13.67	
第100図９	13	(13)SI007	007－82	石皿	安山岩	203.0	155.0	63.0	1,564.60	
第108図44	13	(13)SI012	L33－94－1	打製石斧	凝灰岩	62.1	38.7	18.5	56.10	
第108図45	13	(13)SI012	012－73	磨石	砂岩	124.5	88.5	35.5	339.53	
第111図160	13	(13)SI013	013－475	打製石斧	珪質頁岩	55.7	88.9	19.7	107.00	
第111図161	13	(13)SI013	013－98	磨製石斧	緑泥片岩	60.0	43.4	20.6	67.00	
第116図283	13	(13)SI014	014－196	打製石斧	安山岩	102.6	62.2	25.7	195.90	
第116図284	13	(13)SI014	014－104	敲石	ホルンフェルス	122.8	50.8	34.9	329.00	
第116図285	13	(13)SI014	014－108	スタンプ形石器	石英斑岩	91.0	61.0	45.0	376.14	
第125図51	13	(13)SK015	015－142	スタンプ形石器	石英斑岩	105.0	89.0	45.0	399.47	
第130図11	15	(15)SK106	M33－88－21	打製石斧	砂岩	119.4	80.8	28.7	332.60	
第139図19	3	(3)SK113	113－2	磨石	安山岩	96.3	93.6	56.8	802.60	
第143図11	3	(3)SK112	112－13	石鏃	チャート	20.3	18.8	4.7	1.30	
第153図18	5	(5)SK213	213－37	磨敲石	砂岩	62.0	45.5	20.5	79.35	
第153図19	5	(5)SK213	213－44	礫	軽石	179.0	112.3	58.6	278.47	
第161図48	21	(21)SI001	001－73	磨製石斧	緑色岩	106.9	42.5	26.6	182.32	
第161図49	21	(21)SI001	001－438	軽石製品	軽石	84.5	77.9	33.1	56.48	
第161図50	21	(21)SI001	001－40	軽石製品	軽石	70.8	62.1	35.4	20.13	
第164図41	21	(21)SI003	003－291	磨製石斧	粗粒玄武岩	175.8	46.9	19.5	126.00	
第167図12	3	(3)SI159	159－61	磨石	安山岩	94.0	68.5	42.0	412.50	
第167図13	3	(3)SI159	159－5	磨製石斧	緑泥片岩	117.6	46.7	29.3	183.79	
第172図14	3	(3)SI191	191－42	軽石製品	軽石	59.0	60.8	48.8	31.67	
第172図15	3	(3)SI191	191－28	軽石製品	軽石	68.1	47.4	19.4	8.76	
第172図16	3	(3)SI191	191－26	軽石製品	軽石	95.8	60.2	39.7	34.78	
第172図17	3	(3)SI191	191－34	石鏃	チャート	20.9	13.9	3.9	0.70	
第172図18	3	(3)SI191	191－30	石匙	チャート	27.2	18.6	4.5	3.00	
第174図17	3	(3)SI195	195－70	磨製石斧	緑色岩	93.0	44.4	22.3	166.70	
第203図１	2	遺構外	9822T －1	木葉形尖頭器	ホルンフェルス	75.9	37.0	9.8	25.30	
第203図２	2	遺構外	9820T －1	石鏃	チャート	17.8	16.1	5.8	1.80	
第203図３	26	遺構外	O33－22－3	石鏃	流紋岩	27.0	16.9	3.7	1.20	
第203図４	3	遺構外	N33－81－266	石鏃	ホルンフェルス	27.8	17.5	4.3	2.20	
第203図５	9	遺構外	N32－99－7	石鏃	黒曜石	17.2	17.1	5.8	1.90	
第203図６	3	遺構外	N33－21－2	石鏃	チャート	18.8	13.7	2.6	0.70	
第203図７	3	遺構外	N34－35－19	石鏃	チャート	28.3	20.2	3.9	1.70	
第203図８	3	遺構外	N33－74－2	石鏃	チャート	22.1	17.3	3.8	1.20	
第203図９	3	遺構外	M33－99－72	石鏃	チャート	26.7	17.1	4.0	1.40	
第203図10	3	遺構外	N33－41	石鏃	チャート	25.1	14.7	3.6	0.90	
第203図11	3	遺構外	N38－11－1	石鏃	チャート	22.4	18.6	4.0	1.40	
第203図12	3	遺構外	N33－08－38	石鏃	チャート	18.4	20.5	3.8	1.10	
第203図13	13	遺構外	L35－33－1	石鏃	チャート	17.6	17.8	3.5	0.80	
第203図14	15	遺構外	M33－99－2	石鏃	チャート	23.7	18.7	3.3	0.80	
第203図15	22	遺構外	表採	石鏃	黒曜石	14.1	13.1	3.9	0.50	高原山産か
第203図16	3	遺構外	9816T －1	石鏃	チャート	24.7	17.1	3.7	1.60	
第203図17	26	遺構外	O33－23－2	石鏃	チャート	14.2	11.3	2.9	0.40	
第203図18	26	遺構外	O33－48－1	石鏃	チャート	23.7	13.8	3.8	1.00	
第203図19	3	遺構外	N34－34－9	石錐	チャート	32.1	22.7	8.1	4.50	
第203図20	3	遺構外	N34－00－3	石匙	珪質頁岩	59.5	38.2	9.2	18.40	北関東産か
第204図21	13	遺構外	L35－33－1	打製石斧	安山岩	66.1	83.2	22.8	205.70	
第204図22	3	遺構外	9807T －1	打製石斧	ホルンフェルス	131.2	70.5	20.7	244.20	

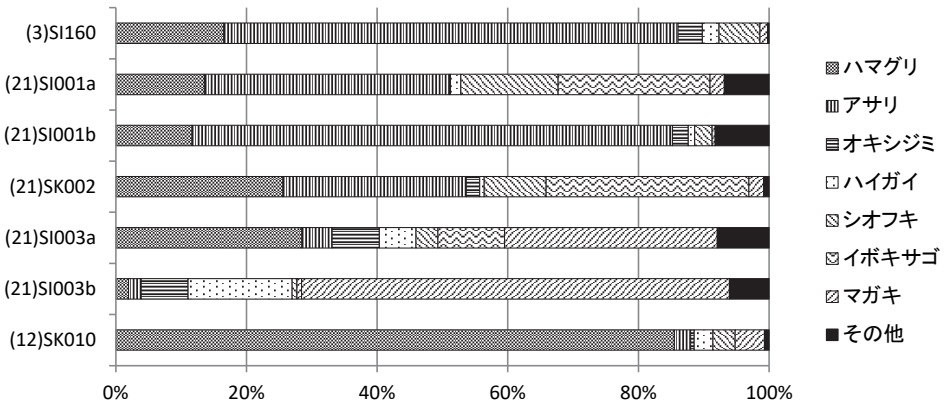
挿図番号	調査次	報告時遺構名	遺物番号	器種	石材	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（g）	備考
第204図23	13	遺構外	L34－39－1	打製石斧	ホルンフェルス	71.4	69.4	31.8	164.80	
第204図24	3	遺構外	N33－82－38	打製石斧	ホルンフェルス	84.7	59.0	33.1	184.40	
第204図25	29	遺構外	1トレンチ－1	打製石斧	頁岩	96.0	72.1	28.2	170.20	
第204図26	13	遺構外	L34－34－1	打製石斧	ホルンフェルス	92.4	73.4	20.2	154.90	多孔質
第204図27	16	遺構外	現場一括－1	打製石斧	安山岩	45.5	61.8	17.8	65.60	
第204図28	15	遺構外	L33－97－1	打製石斧	砂岩	80.8	56.8	19.7	91.10	
第204図29	2	遺構外	9820T －1	打製石斧	ホルンフェルス	46.4	59.7	12.5	36.20	
第204図30	12	遺構外	002－2	打製石斧	ホルンフェルス	49.1	68.8	16.1	58.20	中・近世遺構出土
第205図31	3	遺構外	N34－02－123	打製石斧	砂岩	56.7	62.9	16.7	83.20	
第205図32	3	遺構外	N33－50－19	打製石斧	ホルンフェルス	110.2	49.3	23.7	121.60	
第205図33	3	遺構外	M34－57－2	打製石斧	ホルンフェルス	89.5	54.9	16.6	88.40	
第205図34	13	遺構外	L34－03－1	打製石斧	安山岩	75.8	62.1	15.8	92.00	
第205図35	13	遺構外	L34－33－1	打製石斧	砂岩	67.3	58.7	18.9	93.30	
第205図36	3	遺構外	表採－3	打製石斧	安山岩	97.3	68.4	16.4	119.00	
第205図37	3	遺構外	N38－16－1	打製石斧	安山岩	53.2	65.5	17.4	86.70	
第205図38	13	遺構外	9813T －1	打製石斧	ホルンフェルス	49.4	42.6	8.8	22.00	
第205図39	3	遺構外	N34－64－5	打製石斧	安山岩	64.6	58.5	21.5	93.80	
第205図40	12	遺構外	003－7	打製石斧	ホルンフェルス	61.5	65.9	14.5	71.90	中・近世遺構出土
第205図41	13	遺構外	L33－96－1	打製石斧	片麻岩	45.2	53.1	13.9	43.40	
第205図42	3	遺構外	M34－09－2	打製石斧	ホルンフェルス	55.6	54.4	15.5	47.80	
第205図43	13	遺構外	L33－92－1	打製石斧	凝灰岩	123.8	35.2	21.1	110.40	
第205図44	13	遺構外	L33－83－1	打製石斧	片麻岩	100.2	52.8	20.6	152.80	黄鉄鉱が嵌入
第205図45	3	遺構外	表採	打製石斧	緑色岩	96.5	55.2	22.1	179.54	
第206図46	3	遺構外	N33－72－12	磨製石斧	粗粒玄武岩	46.3	23.0	12.0	17.70	
第206図47	3	遺構外	M34－57－3	磨製石斧	緑泥片岩	59.7	41.3	18.9	73.94	
第206図48	3	遺構外	N34－02－32	磨製石斧	砂岩	63.5	46.6	19.4	82.70	
第206図49	3	遺構外	N33－35－2	磨製石斧	緑色岩	125.7	54.2	23.8	242.90	
第206図50	3	遺構外	N34－02－124	磨製石斧	緑色凝灰岩	120.2	45.9	33.7	243.41	
第206図51	3	遺構外	N38－34－1	磨製石斧	緑色凝灰岩	101.2	50.1	22.9	204.15	
第206図52	3	遺構外	N34－34－7	磨製石斧	安山岩	57.5	52.0	22.5	117.16	
第206図53	3	遺構外	N34－12－26	磨製石斧	緑泥片岩	85.3	57.2	24.6	194.20	
第206図54	15	遺構外	L34－07－1	磨製石斧	粗粒玄武岩	70.7	56.4	29.8	147.78	
第206図55	12	遺構外	表採	磨製石斧	凝灰岩	118.8	64.5	40.2	370.58	
第206図56	13	遺構外	L34－04－1	磨製石斧	緑色岩	70.5	56.5	33.6	234.22	
第206図57	12	遺構外	003－1	敲石	緑泥片岩	89.1	47.7	29.8	198.90	中・近世遺構出土
第207図58	3	遺構外	9818T －1	敲石	安山岩	61.1	50.6	16.7	62.67	
第207図59	15	遺構外	M34－96－1	敲石	緑色岩	72.5	64.0	31.5	202.69	
第207図60	3	遺構外	N38－85－1	敲石	砂岩	84.3	54.1	11.1	89.80	
第207図61	3	遺構外	N34－24－116	敲石	凝灰岩	97.2	78.5	29.0	270.90	
第207図62	3	遺構外	N34－46－26	敲石	砂岩	83.9	73.4	20.1	186.61	
第207図63	3	遺構外	M34－09－18	敲石	砂岩	171.5	94.5	74.5	1,633.80	
第207図64	3	遺構外	N33－80－56	敲石	ホルンフェルス	72.9	54.5	29.3	147.00	
第207図65	13	遺構外	L34－34－1	敲石	安山岩	88.9	47.2	18.6	104.30	
第207図66	3	遺構外	N33－80－185	磨石	流紋岩	94.0	80.0	34.0	281.81	
第207図67	13	遺構外	L38－83－1	敲石	安山岩	123.6	66.3	59.7	735.40	
第208図68	3	遺構外	N34－33－25	敲石	流紋岩	83.4	65.8	37.4	283.28	
第208図69	3	遺構外	9816T －1	敲石	砂岩	99.8	84.3	35.5	347.80	
第208図70	26	遺構外	O33－16－2	敲石	砂岩	79.0	62.5	33.5	170.82	
第208図71	13	遺構外	L34－23－1	磨石	安山岩	99.5	63.5	36.0	333.58	
第208図72	3	遺構外	表採	スタンプ形石器	安山岩	89.0	63.2	45.0	338.45	
第208図73	3	遺構外	N33－40－58	磨石	安山岩	81.2	83.0	48.5	473.56	
第208図74	13	遺構外	L34－24－1	磨石	安山岩	66.5	81.6	43.8	385.93	
第208図75	3	遺構外	M33－89－65	磨石	安山岩	94.7	61.2	52.1	424.33	
第208図76	13	遺構外	L34－23－1	磨石	石英斑岩	76.1	72.9	39.9	304.00	
第209図77	25	遺構外	SK －009－1	磨石	粗粒玄武岩	100.5	56.0	32.5	332.05	中・近世遺構出土
第209図78	25	遺構外	SK －009－1	敲石	砂岩	117.0	55.0	39.0	388.75	中・近世遺構出土
第209図79	3	遺構外	N33－42－20	磨石	安山岩	105.5	61.5	35.5	374.61	
第209図80	3	遺構外	N34－33－21	磨石	安山岩	111.9	61.1	46.9	474.43	
第209図81	21	遺構外	O37－02－2	磨石	安山岩	116.5	56.0	35.0	315.29	
第209図82	2	遺構外	9815T －1	凹石	花崗岩	92.0	69.5	47.0	388.07	
第209図83	3	遺構外	N34－02－121	磨石	安山岩	58.5	52.5	50.4	205.76	
第209図84	13	遺構外	L34－01－1	石棒	緑泥片岩	116.0	32.4	29.7	180.37	
第209図85	13	遺構外	L34－33－1	棒状石製品	緑色岩	244.2	38.4	17.2	307.80	
第210図86	21	遺構外	M32－93－263	軽石製品	軽石	55.1	44.1	24.4	13.92	
第210図87	13	遺構外	9813T －1	軽石製品	軽石	53.4	51.5	20.8	17.47	
第210図88	3	遺構外	N33－82－9	軽石製品	軽石	53.3	24.9	24.9	9.37	
第210図89	3	遺構外	N34－22－233	軽石製品	軽石	88.9	52.8	28.6	25.60	
第210図90	13	遺構外	L33－92－1	軽石製品	軽石	67.6	50.1	33.6	39.02	
第210図91	13	遺構外	L33－95－1	軽石製品	軽石	77.6	49.1	26.8	28.52	
第210図92	3	遺構外	N33－94－2	軽石製品	軽石	89.5	71.5	35.8	62.72	
第210図93	2	遺構外	9805T －1	軽石製品	軽石	109.5	73.2	42.0	128.42	
第211図94	3	遺構外	N34－34－2	石皿	安山岩	165.0	190.0	48.0	536.50	
第211図95	3	遺構外	N34－03－37	石皿	安山岩	84.5	113.0	55.5	318.21	
第211図96	3	遺構外	9815T －1	石皿	緑泥片岩	121.5	106.0	46.0	850.50	
第211図97	12	遺構外	001塚－6	石皿	安山岩	102.0	98.0	42.0	470.93	中・近世遺構出土
第211図98	13	遺構外	L34－02－1	石皿	安山岩	124.0	98.5	62.0	644.00	
第211図99	3	遺構外	N33－92－105	石皿	安山岩	135.5	96.0	72.5	703.90	
第211図100	3	遺構外	N33－83－7	石皿	安山岩	160.0	130.0	66.0	1,015.30	

第８表　縄文時代貝サンプル一覧

No.	遺構名	遺構種別	時期	採取法	cut	採取量 (g)	分析量（ℓ）	備考
1	(21)SI001a	住居跡	黒浜	コラム	6	17,940	24.9	
2	(21)SI001b	住居跡	黒浜	コラム	4	10,180	12.3	
3	(21)SI003a	住居跡	黒浜	コラム	6	23,020	30.3	
4	(21)SI003b	住居跡	黒浜	コラム	6	23,030	32.4	
5	(3)SI160	住居跡	黒浜	一括	−	−	−	
6	(21)SK002	土坑	黒浜	コラム	8	17,590	23.8	
7	(12)SK010	土坑	中期末～後期初頭	一括	−	−	−	
合計						91,760	123.7	

第９表　出土貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*
	中腹足目	ウミニナ科	ウミニナ	*Batillaria multiformis*
		ウミニナ科	ウミニナ属	Batillaria sp.
		タマガイ科	ツメタガイ	*Glassaulax didyma*
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
		ムシロガイ科	アラムシロガイ	*Reticunassa festiva*
掘足綱	ツノガイ目	ツノガイ科	ツノガイ	*Antalis weinkauffi*
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	*Tegillarca granosa*
			サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
			イタボガキ	*Ostrea denselamellosa*
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*
			バカガイ	*Mactra chinensis*
		ニッコウガイ科	イチョウシラトリ	*Merisca capsoides*
		マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
		フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	*Trapezium liratum*
		シジミ科	ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*
		マルスダレガイ科	カガミガイ	*Phacosoma japonicum*
			アサリ	*Ruditapes philippinarum*
			ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			オキシジミ	*Cyclina sinensis*
	オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
	計	16 科		22 種



第 212 図　貝種組成グラフ

第10表　出土貝類同定結果

1　(21)SI001a

種　名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	23	41.1	174	48.7	78	21.8	2	1.1		0.0	1	5.0	278	23.3
ウミニナ科	1	1.8	3	0.8		0.0	1	0.6		0.0		0.0	5	0.4
ツメタガイ		0.0		0.0	1	0.3		0.0		0.0		0.0	1	0.1
アカニシ		0.0	1	0.3		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1
アラムシロガイ		0.0	1	0.3	1	0.3		0.0	1	0.4		0.0	3	0.3
ツノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.4		0.0	1	0.1
ハイガイ	1	1.8	5	1.4	3	0.8	4	2.3	5	2.2	1	5.0	19	1.6
サルボオ	1	1.8	1	0.3	1	0.3	1	0.6	1	0.4		0.0	5	0.4
マガキ	3	5.4	7	2.0	12	3.4	1	0.6	3	1.3		0.0	26	2.2
イタボガキ科		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
シオフキ	6	10.7	15	4.2	78	21.8	42	23.9	35	15.3	2	10.0	178	14.9
バカガイ	1	1.8	1	0.3		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.2
イチョウシラトリガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	5.0	1	0.1
マテガイ		0.0	2	0.6	1	0.3	2	1.1		0.0		0.0	5	0.4
ウネナシトマヤガイ		0.0	3	0.8	6	1.7	2	1.1	1	0.4		0.0	12	1.0
カガミガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ヤマトシジミ		0.0		0.0		0.0		0.0	46	20.1		0.0	46	3.8
アサリ	9	16.1	79	22.1	122	34.2	93	52.8	130	56.8	15	75.0	448	37.5
ハマグリ	11	19.6	65	18.2	54	15.1	28	15.9	4	1.7		0.0	162	13.6
オキシジミ		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.9		0.0	2	0.2
オオノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
合　計	56	100	357	100	357	100	176	100	229	100	20	100	1195	100

2　(21)SI001b

種　名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		合　計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ		0.0		0.0	1	0.5	1	2.0	2	0.5
ウミニナ科		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ツメタガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アカニシ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アラムシロガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ツノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ハイガイ		0.0		0.0	3	1.6	1	2.0	4	1.0
サルボオ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
マガキ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
イタボガキ科		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
シオフキ		0.0	6	3.4	4	2.2	1	2.0	11	2.7
バカガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
イチョウシラトリガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
マテガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ウネナシトマヤガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
カガミガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ヤマトシジミ		0.0	34	19.5		0.0		0.0	34	8.3
アサリ	5	71.4	129	74.1	139	76.4	30	61.2	303	73.5
ハマグリ	2	28.6	3	1.7	33	18.1	10	20.4	48	11.7
オキシジミ		0.0	2	1.1	2	1.1	6	12.2	10	2.4
オオノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
合　計	7	100	174	100	182	100	49	100	412	100

3　(21)SI003a

種　名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ		0.0	8	5.4	15	7.8	6	1.9	77	21.2	21	9.9	127	10.2
ウミニナ科		0.0		0.0		0.0	2	0.6	1	0.3	1	0.5	4	0.3
ツメタガイ		0.0		0.0	1	0.5		0.0		0.0		0.0	1	0.1
アカニシ		0.0	1	0.7	1	0.5	1	0.3	1	0.3		0.0	4	0.3
アラムシロガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ツノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ハイガイ	2	9.5	9	6.1	6	3.1	36	11.7	1	0.3	16	7.5	70	5.6
サルボオ		0.0	1	0.7		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1
マガキ	4	19.0	28	18.9	25	13.0	62	20.1	162	44.6	125	58.7	406	32.6
イタボガキ科		0.0		0.0	2	1.0	3	1.0	1	0.3	1	0.5	7	0.6
シオフキ	1	4.8	8	5.4	7	3.6	11	3.6	12	3.3	3	1.4	42	3.4
バカガイ		0.0		0.0	1	0.5		0.0		0.0		0.0	1	0.1
イチョウシラトリガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
マテガイ		0.0		0.0		0.0	7	2.3	16	4.4	8	3.8	31	2.5
ウネナシトマヤガイ		0.0		0.0		0.0	4	1.3	7	1.9	4	1.9	15	1.2
カガミガイ		0.0		0.0	1	0.5	1	0.3		0.0		0.0	2	0.2
ヤマトシジミ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アサリ	1	4.8	12	8.1	14	7.3	11	3.6	7	1.9	13	6.1	58	4.7
ハマグリ	8	38.1	56	37.8	93	48.2	132	42.7	54	14.9	12	5.6	355	28.5
オキシジミ	5	23.8	18	12.2	23	11.9	22	7.1	15	4.1	7	3.3	90	7.2
オオノガイ		0.0	7	4.7	4	2.1	11	3.6	9	2.5	2	0.9	33	2.6
合　計	21	100	148	100	193	100	309	100	363	100	213	100	1247	100

4　(21)SI003b

種　名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ		0.0	3	3.2	1	0.5		0.0	1	0.6	1	0.7	6	0.7
ウミニナ科		0.0	1	1.1	1	0.5	5	2.8		0.0		0.0	7	0.9
ツメタガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アカニシ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アラムシロガイ		0.0		0.0	2	1.0		0.0		0.0		0.0	2	0.2
ツノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ハイガイ		0.0	13	13.7	52	25.1	11	6.2	18	10.1	37	25.0	131	15.9
サルボオ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
マガキ	14	77.8	63	66.3	119	57.5	140	79.1	130	73.0	73	49.3	539	65.5
イタボガキ科		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
シオフキ		0.0	1	1.1		0.0	1	0.6		0.0	4	2.7	6	0.7
バカガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
イチョウシラトリガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.7	1	0.1
マテガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
ウネナシトマヤガイ	3	16.7	4	4.2	9	4.3	4	2.3	10	5.6	9	6.1	39	4.7
カガミガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.7	1	0.1
ヤマトシジミ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アサリ	1	5.6	5	5.3	7	3.4	2	1.1		0.0	1	0.7	16	1.9
ハマグリ		0.0	4	4.2	5	2.4	1	0.6	1	0.6	5	3.4	16	1.9
オキシジミ		0.0	1	1.1	11	5.3	13	7.3	18	10.1	16	10.8	59	7.2
オオノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
合　計	18	100	95	100	207	100	177	100	178	100	148	100	823	100

5　(3)SI160

種　名	一　括	
	個体数	(%)
イボキサゴ		0.0
ウミニナ科		0.0
ツメタガイ		0.0
アカニシ		0.0
アラムシロガイ		0.0
ツノガイ		0.0
ハイガイ	7	1.7
サルボオ		0.0
マガキ	5	1.2
イタボガキ科		0.0
シオフキ	27	6.4
バカガイ		0.0
イチョウシラトリガイ		0.0
マテガイ	1	0.2
ウネナシトマヤガイ		0.0
カガミガイ		0.0
ヤマトシジミ		0.0
アサリ	298	70.4
ハマグリ	70	16.5
オキシジミ	15	3.5
オオノガイ		0.0
合　計	423	100

7　(12)SK010

種　名	一　括	
	個体数	(%)
イボキサゴ		0.0
ウミニナ科		0.0
ツメタガイ		0.0
アカニシ		0.0
アラムシロガイ		0.0
ツノガイ		0.0
ハイガイ	16	2.9
サルボオ		0.0
マガキ	25	4.5
イタボガキ科		0.0
シオフキ	19	3.4
バカガイ		0.0
イチョウシラトリガイ	2	0.4
マテガイ		0.0
ウネナシトマヤガイ	1	0.2
カガミガイ		0.0
ヤマトシジミ		0.0
アサリ	14	2.5
ハマグリ	477	85.5
オキシジミ	3	0.5
オオノガイ	1	0.2
合　計	558	100

6　(21)SK002

種　名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	19	29.7	80	40.2	121	32.0	135	29.7	122	31.4	32	29.4	29	20.1	3	42.9	541	31.0
ウミニナ科		0.0	2	1.0	1	0.3		0.0	1	0.3		0.0		0.0		0.0	4	0.2
ツメタガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アカニシ		0.0		0.0	1	0.3		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1
アラムシロガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	1	0.9		0.0		0.0	2	0.1
ツノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.7		0.0	1	0.1
ハイガイ		0.0	3	1.5	2	0.5	4	0.9	1	0.3	1	0.9	1	0.7		0.0	12	0.7
サルボオ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
マガキ	4	6.3	4	2.0	5	1.3	10	2.2	5	1.3	3	2.8	8	5.6		0.0	39	2.2
イタボガキ科		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
シオフキ	8	12.5	15	7.5	22	5.8	45	9.9	35	9.0	9	8.3	30	20.8	1	14.3	165	9.5
バカガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.9		0.0		0.0	1	0.1
イチョウシラトリガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
マテガイ		0.0		0.0	1	0.3	2	0.4	1	0.3		0.0	1	0.7		0.0	5	0.3
ウネナシトマヤガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
カガミガイ		0.0	1	0.5		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1
ヤマトシジミ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
アサリ	15	23.4	53	26.6	116	30.7	126	27.8	107	27.6	27	24.8	43	29.9	2	28.6	489	28.1
ハマグリ	15	23.4	39	19.6	105	27.8	124	27.3	106	27.3	31	28.4	25	17.4	1	14.3	446	25.6
オキシジミ	3	4.7	2	1.0	4	1.1	8	1.8	9	2.3	4	3.7	6	4.2		0.0	36	2.1
オオノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
合　計	64	100	199	100	378	100	454	100	388	100	109	100	144	100	7	100	1,743	100

第４章　奈良・平安時代の遺構と遺物

第１節　概要（第213図）

奈良・平安時代の遺構の内訳は、竪穴住居跡４軒、土坑１基、埋設土器１基である。そのうち竪穴住居跡３軒、土坑１基、埋設土器１基が東へ舌状に突出する台地の北側先端部に立地する。調査次としては３・６・７・26次調査区が主に該当する。ただし全体に地山の削平が著しく、遺構が失われてしまった可能性も考えられる。西端部の34次調査区には１軒のみ竪穴住居跡が検出されているが、これは西側に隣接する前平井遺跡の集落の一部をなすものと考えられる。

図面の縮尺は、竪穴住居跡の全体図が１／80、竪穴住居跡のカマドと土坑類は１／40である。遺物の実測図は、器形復元ができる土器は１／４、土器の破片及び土製品は１／３である。出土土器に関する観察所見は第11表に掲載した。出土遺物の時期については、(財)千葉県教育振興財団『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器時代～奈良･平安時代編）－』（2010）における、栗田則久氏による奈良・平安時代の土器編年を参考としている。

第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

(26)SI001（第214･215図、図版105）

形状・規模　長軸は4.48m、短軸は4.4mである。平面形は方形を呈する。主軸方位はN-30°-Wである。確認面からの深さは32cm～38cmである。確認面の面積は14.74㎡、床面積は11.35㎡である。

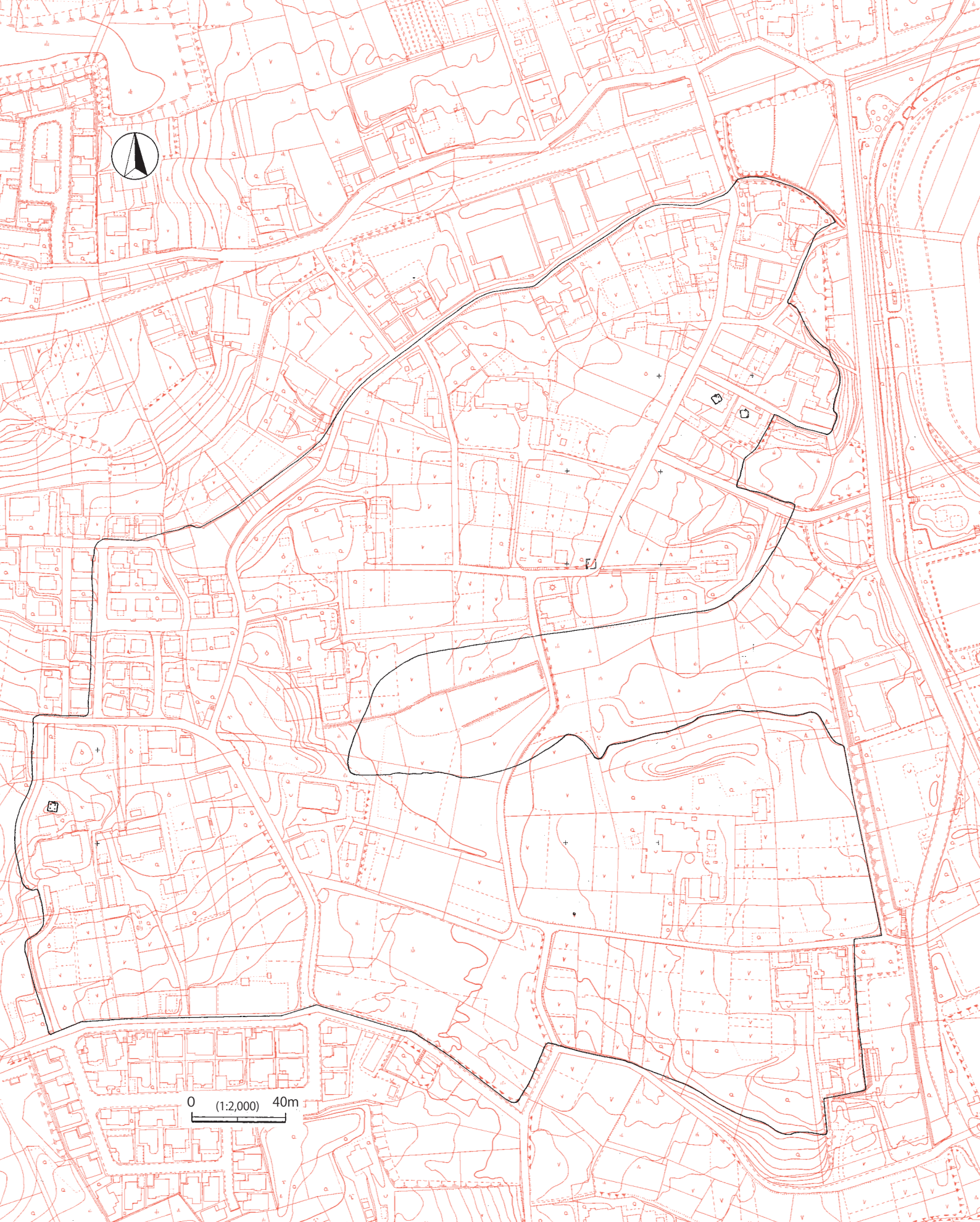
床面・壁溝　床面は概ね平坦であるが、踏み固められてはいない。壁溝は東西壁で検出され、一部南北壁まで巡っている。

覆土　上層は炭化物粒・焼土粒を含む黒色土、黒褐色土が主体である。下層は炭化材や黒灰色土の堆積がみられる。土層中に、炭化物粒・焼土粒、炭化材が含まれ、焼土範囲が遺構内全体に広がっていることから、焼失住居の可能性がある。

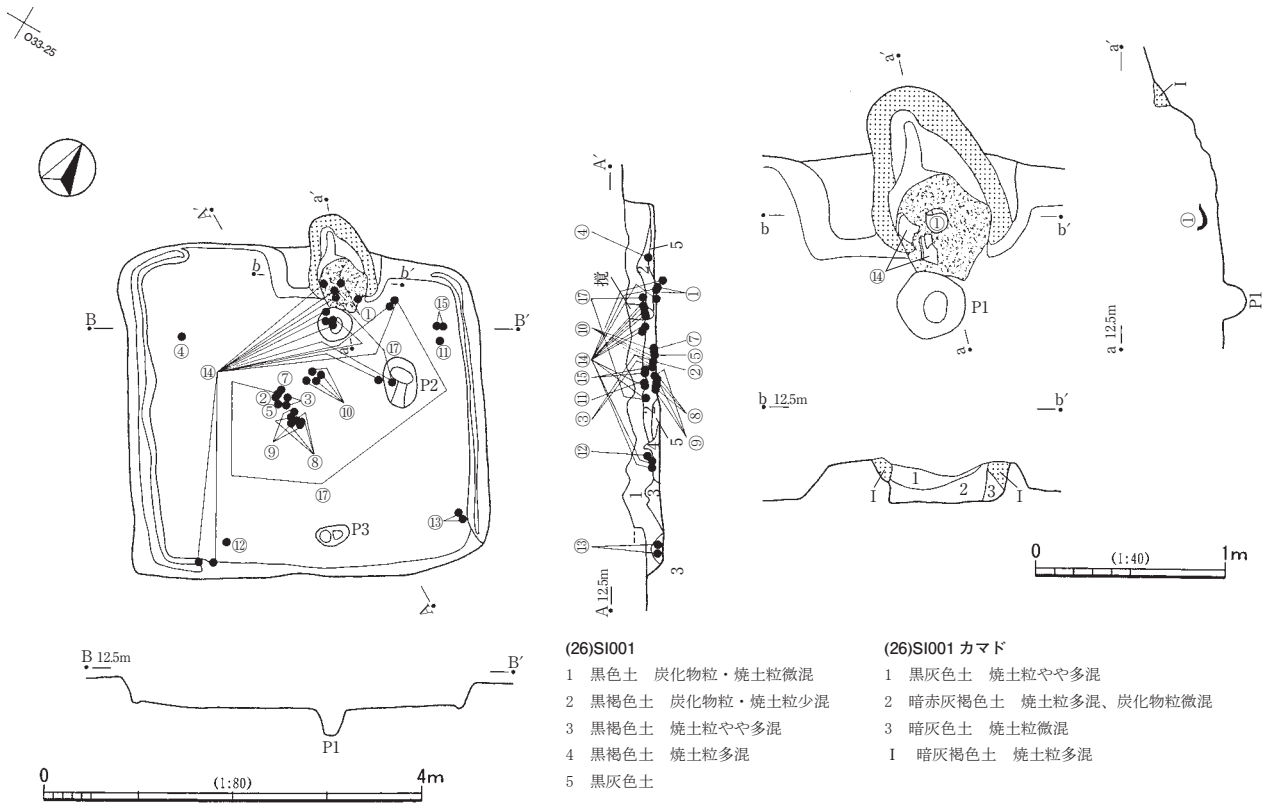
柱穴・ピット　柱穴は、カマドの手前で１基（P1）、東壁側で１基（P2）、南壁側で１基（P3）が検出されている。P1は、径36cm×32cm、深さ28.5cmである。P2は、径52cm×36cm、深さ20cmである。P3は径20cm×32cmで、２箇所の窪みがみられ、深さは西側が11.8cm、東側が７cmである。P2は主柱穴の可能性があるが、これに伴うものが検出されていないため明確ではない。

カマド　北東辺　北壁やや東寄りで１基が検出された。遺存は比較的良好である。火床部は床面とほぼ同じ高さで窪みは浅い。上部に焼土主体の土層の堆積がみられる。

出土遺物　１～８はロクロ土師器坏、９・10は内面に炭素吸着による黒色処理・ミガキが施されたロクロ土師器坏、11はロクロ土師器碗である。１～８は回転糸切未調整で、ロクロ目が明瞭に残り、体部下端のヘラケズリが施されていない。２～７は内外面が黒く炭化しているが、黒色処理によるものではなく、住居焼失時に土器が一括廃棄された際に付着したものと思われる。４は底部が高台状になるものである。11は高台が付いている。12は須恵器甕の口縁部の破片で、横位の櫛描き波状文が施文されている。13は須恵



第 213 図　奈良・平安時代遺構全体図



第 214 図　(26)SI001 住居跡

器甕胴部の破片である。外面にタタキ目後ナデの調整、内面に指圧痕がみえる。いずれも胎土中に小石を多く含む。色調は12が黒灰色、13が暗灰色を呈する。14はカマド内で出土した土師器の甕である。２／３程度遺存するもので、口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面上半から下半にかけて縦位のヘラケズリ、胴部外面下半から底部にかけて横位のヘラケズリ、胴部内面に横位のヘラケズリ、底面にヘラケズリの後、ヘラナデが施されており、丁寧に成形されている。胎土には雲母粒、砂粒を含んでいる。15は小型の土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部よりも胴部の径が大きい。内外面ともに胴部に横位のヘラケズリが施されている。16・17は土師器甕の底部の破片である。16は外面に縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。胎土中に雲母粒を少量含んでいる。17は外面にヘラナデ、内面にユビナデがみられる。胎土中に少量の長石粒、輝石粒を含んでいる。18は土師器甑の底部の破片である。内外面にヘラナデがみられる。胎土中に砂粒、少量の雲母粒を含んでいる。

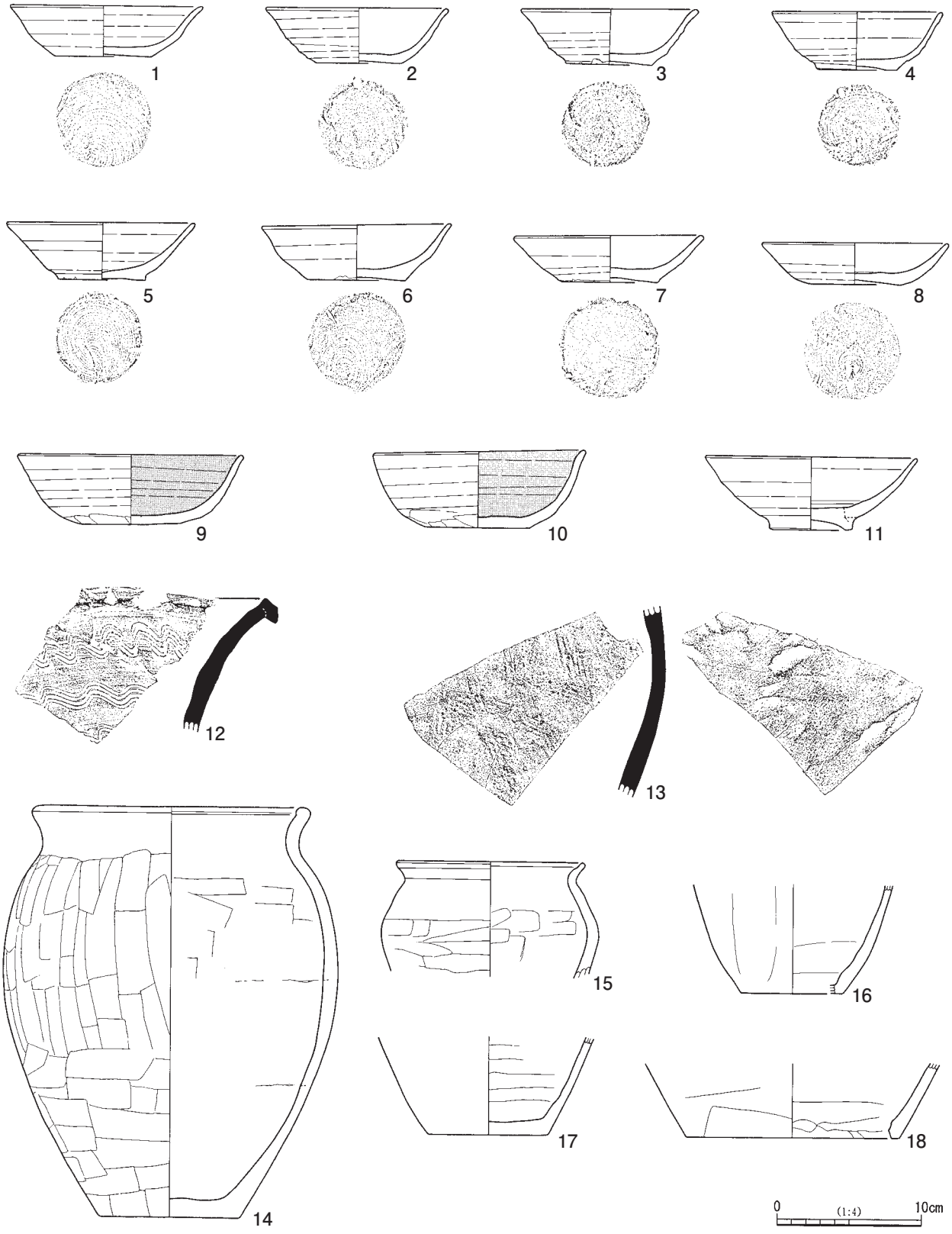
１～10、13が床面に近い位置から出土している。９、10は出土遺物の中でも若干古く、これら以外が本遺構の時期を示す遺物であると考えられる。

(26)SI002（第216図、図版106）

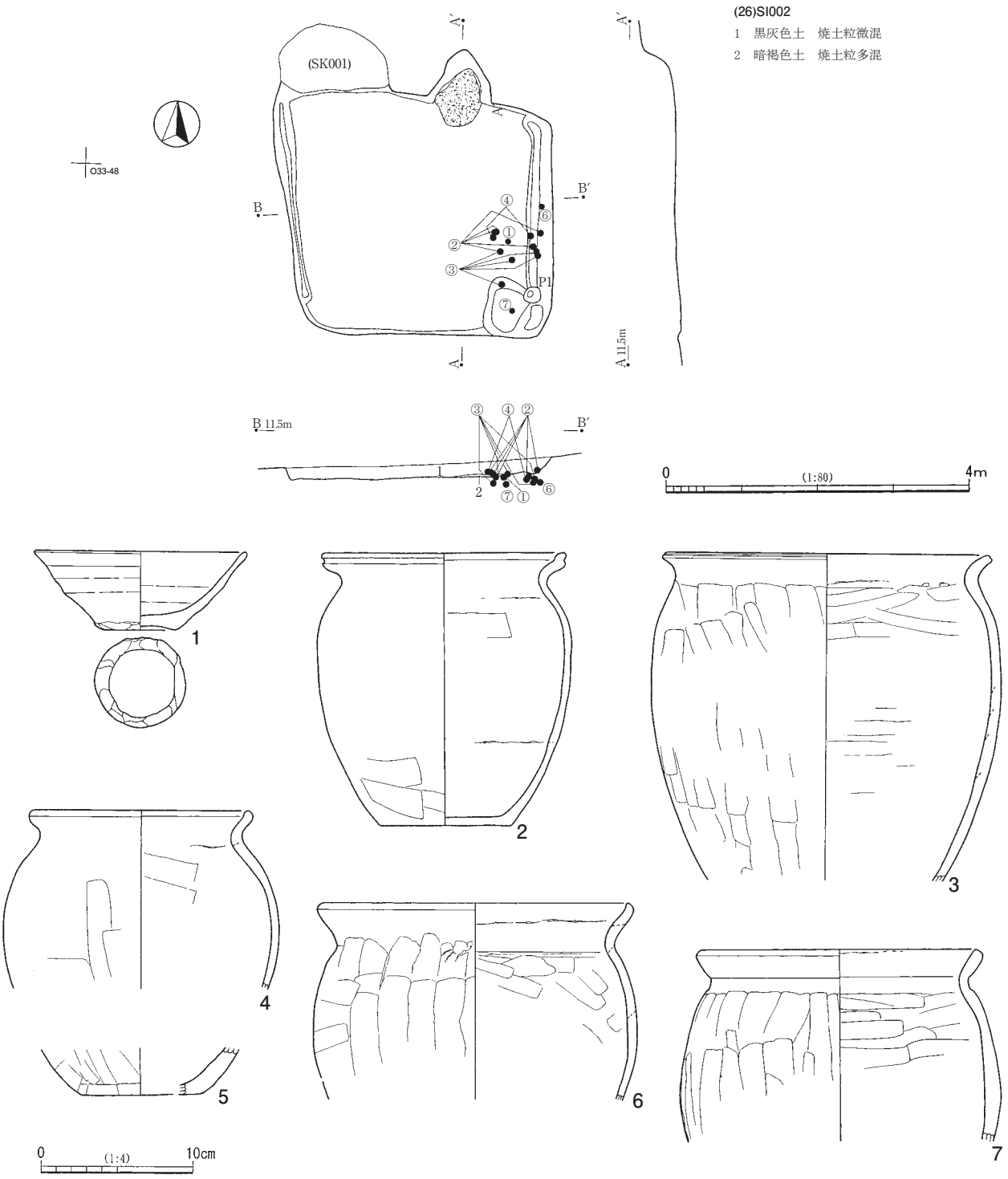
形状・規模　長軸は3.8m、短軸は3.6mである。平面形は方形を呈する。確認面からの深さは16㎝～20㎝である。主軸方位はN-５°-Wである。確認面の面積は13.68㎡、床面積は9.48㎡である。縄文時代の土坑である(26)SK001が北壁隅に重複して検出されている。

床面・壁溝　床面は概ね平坦であるが、東側から西側にかけて緩やかに傾斜している。壁溝は、東西壁のみ検出されている。

覆土　上層で焼土粒を微量に含む黒灰色土、床面に近い下層で焼土粒を多量に含む暗茶褐色土の堆積がみ



第 215 図　(26)SI001 住居跡出土遺物



第 216 図　(26)SI002 住居跡、出土遺物

られる。

柱穴・ピット　主柱穴は検出されなかった。P1が南東隅の浅い窪みと壁溝内に重複して検出されている。径20cm、深さは18cmで、位置関係から壁柱穴の可能性がある。

カマド　北壁北東寄りに位置する。袖は遺存せず、火床部がカマド内に確認されている。カマドの手前付近に焼土塊が固まって検出されており、カマドから流失した可能性がある。

出土遺物　１はロクロ土師器坏、２～７は土師器甕である。１は底部が低い高台状を呈しているもので、ほぼ破損のない完形の坏である。底部回転ヘラ切り後に、高台状を呈する部分を粗雑にヘラナデ調整している。色調は外面が黄褐色で、内面は褐色である。胎土中には多量の白色粒、小量の輝石粒、雲母粒が含まれる。２は口縁部から底部まで１／２程度遺存し、器面が一部磨耗している。調整がみえるところでは、胴部外面下半に横位のヘラケズリ、底部外面及び胴部内面にヘラナデが施されている。色調は内外面ともに赤褐色である。胎土中には小量の輝石粒、多量の小石を含む。３は口縁部から胴部にかけて全体の２／３程度が遺存する。口縁部内外面はナデ、外面の口縁部から胴部上半にかけては上から下方向への縦位のヘラケズリ、胴部下半は下から上への縦位のヘラケズリ、頸部内面には横位のヘラナデがみえる。色調は内外面ともに明赤褐色である。胎土中には小量の雲母粒、輝石粒、多量の白色砂粒が含まれる。４は口縁部から胴部にかけて１／４程度が遺存する。内外面ともに器面が一部摩耗している。調整がみえるところでは、胴部内外面にヘラケズリがみえる。色調は外面が黄褐色、内面が褐色である。胎土中には多量の砂粒が含まれる。５は底部の破片である。外面にヘラケズリ、内面にヘラナデがみえる。色調は外面が黄褐色、内面は黄灰褐色である。胎土中には雲母粒、砂粒が含まれる。６は口縁部から胴部にかけて全体の１／５程度が遺存し、器面が一部磨耗している。調整がみえるところでは、口縁部の内外面にヨコナデ、胴部外面に縦位のヘラケズリ、胴部内面にヘラナデが施されている。色調は外面が暗褐色、内面は明赤褐色である。胎土中には輝石粒、多量の白色砂粒が含まれる。７は口縁部から胴部にかけて全体の１／５程度が遺存し、器面が一部磨耗している。調整がみえるところでは、口縁部の内外面ヨコナデ、胴部外面に縦位のヘラケズリ、胴部内面にヘラナデが施されている。色調は外面が明褐色、内面はにぶい黄褐色である。胎土中に輝石粒、雲母粒、多量の砂粒が含まれる。

１～４が床面に近い位置から出土している。これらの遺物が本遺構の時期を示す遺物であろう。

(6)SI030（第217図、図版21・106）

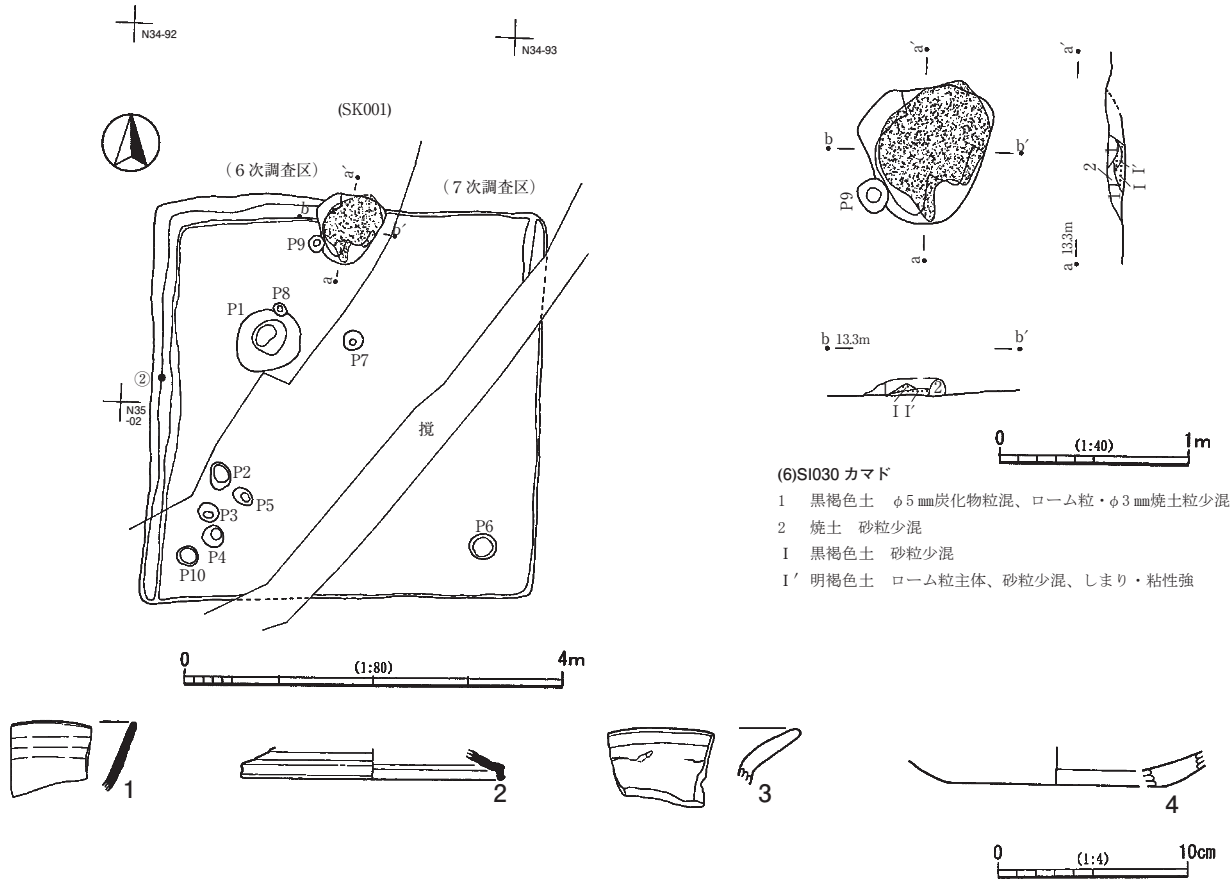
形状・規模　長軸は4.28m、短軸は4.16mである。平面形は方形を呈する。確認面からの深さは37cm～40cmである。主軸方位はほぼ北である。確認面の面積は約17.8㎡、床面積は15.2㎡である。検出遺構内の北東から南西にかけて斜め方向に近世の溝による撹乱があり、一部の規模は推定である。

床面・壁溝　遺存部分は概ね平坦である。壁溝は北側カマド部分から西側で検出されている。また、北東隅の一部でも検出されているが、この箇所については遺存状況が悪く不明確である。

柱穴・ピット　ピットは10基検出されている。このうち、主柱穴の可能性があるものは北西側で検出されたP1である。P1の規模は径62cm、深さ32cmである。径16cm×12cm、深さ８cmの規模のP8が重複し、P1の方が古い。このほか、西壁端部で５基、南東側で１基検出されている。西壁端部で検出されたP2～P5、P10は、径20cm前後、深さ10cm前後の同規模のもので、主柱穴の可能性は低い。また、南東側で検出されたP6の規模は、径28cm、深さ８cmであり、これについても主柱穴の可能性は低い。このほか、P9がカマドの南西部に重複して検出されている。深さ10cmと浅く、カマドよりも新しいものとみられるが、機能は不明である。

カマド　北壁中央に位置する。煙道部の突出は小さい。構築材の山砂は崩落・流失により一つにまとまっており、形状をとどめていない。底面は浅い窪みがみられるが、赤化した範囲はみられない。

出土遺物　１は須恵器坏、２は須恵器蓋、３・４は土師器甕である。１は口縁部の小破片である。内面は摩耗していて調整が不明であるが、外面にはロクロナデがみえる。色調は外面が暗灰色、内面は白灰色で



第 217 図　(6)SI030 住居跡、出土遺物

ある。胎土中には砂粒が含まれる。２は口縁部の小破片である。内外面ともにロクロナデがみえる。色調は内外面ともに灰白色である。胎土中には白色砂粒が含まれる。出土位置は東側の壁溝内である。３は東側の壁溝内から出土した口縁部の小破片で、内外面ともに摩耗している。調整がみえるところでは、口縁部外面にナデが施されている。胎土中には多量の雲母粒、砂粒が含まれる。４は底部の小破片で内外面ともに摩耗し、調整は不明である。色調は内外面ともに灰黄褐色である。胎土中には少量の輝石粒、砂粒が含まれる。

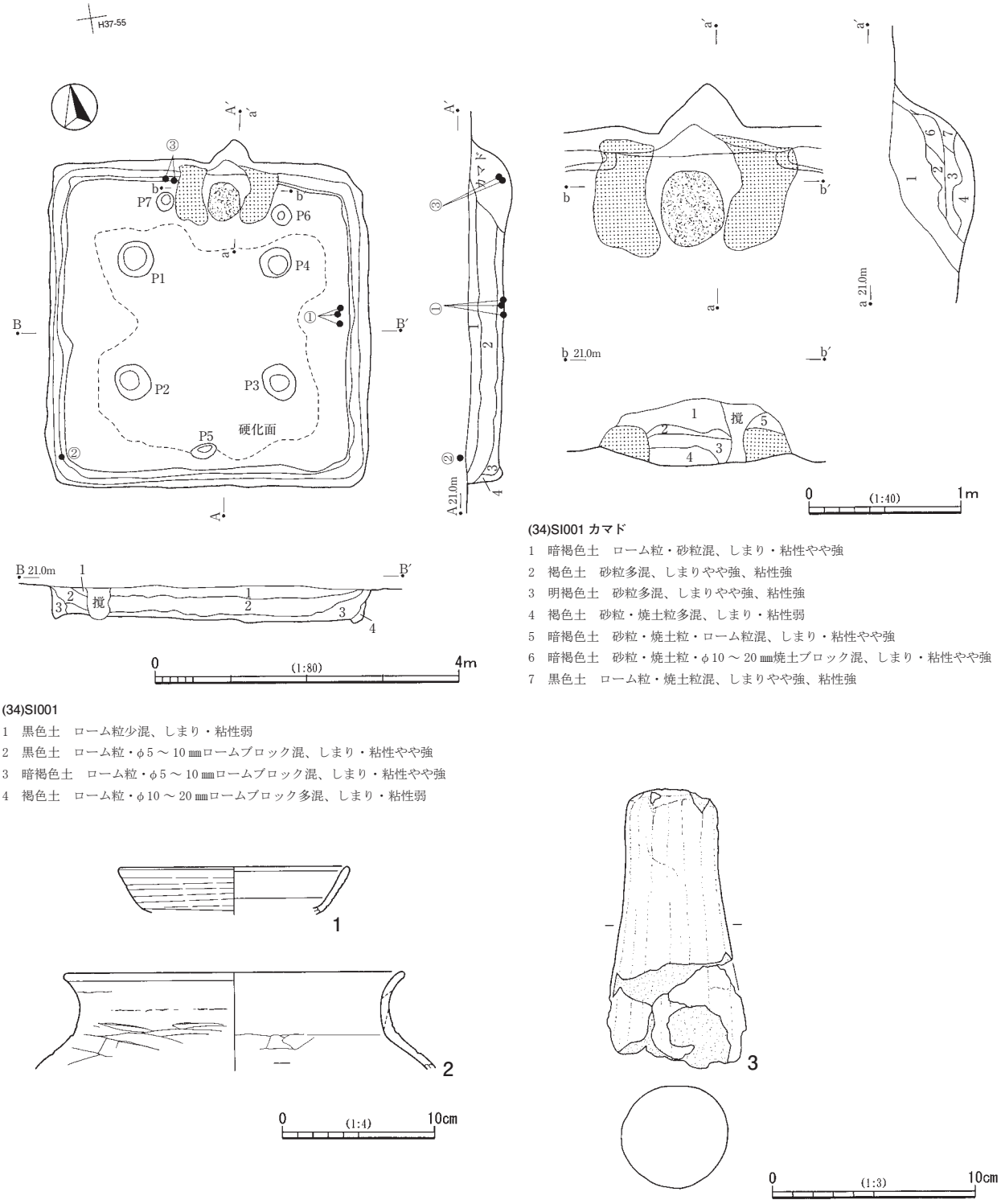
(34)SI001（第218図、図版21・106）

形状・規模　長軸は4.6m、短軸は4.28mである。平面形はほぼ方形を呈する。確認面からの深さは36cm～44cmである。主軸方位はN-７°-Eである。確認面の面積は19.32㎡、床面積は14.74㎡である。

床面・壁溝　床面は概ね平坦である。壁際を除いた範囲で広く硬化している。壁溝は全周する。

覆土　上層は、ローム粒・ロームブロックを含む黒色土主体、下層は、ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土が主体である。

柱穴・ピット　柱穴は７基検出されている。このうち主柱穴となる４基は、P1が深さ50cm、P2が深さ55cm、P3が深さ41cm、P4が深さ48cmである。南壁寄りの中央部で検出されたP5は、径30cm×35cm、深さ50cmのピットである。カマドに対向する位置であり、出入口ピットの可能性が考えられる。P6・7はカマドの脇で検出された小ピットで、西側が40cm、東側が40cmの深さのものである。この位置からみて、カマドの上屋構造に伴う柱穴になる可能性がある。



(34)SI001

1　黒色土　ローム粒少混、しまり・粘性弱
2　黒色土　ローム粒・φ5 ～ 10 ㎜ロームブロック混、しまり・粘性やや強
3　暗褐色土　ローム粒・φ5 ～ 10 ㎜ロームブロック混、しまり・粘性やや強
4　褐色土　ローム粒・φ10 ～ 20 ㎜ロームブロック多混、しまり・粘性弱

(34)SI001 カマド

1　暗褐色土　ローム粒・砂粒混、しまり・粘性やや強
2　褐色土　砂粒多混、しまりやや強、粘性強
3　明褐色土　砂粒多混、しまりやや強、粘性強
4　褐色土　砂粒・焼土粒多混、しまり・粘性弱
5　暗褐色土　砂粒・焼土粒・ローム粒混、しまり・粘性やや強
6　暗褐色土　砂粒・焼土粒・φ10 ～ 20 ㎜焼土ブロック混、しまり・粘性やや強
7　黒色土　ローム粒・焼土粒混、しまりやや強、粘性強

第 218 図　(34)SI001 住居跡、出土遺物

カマド　北壁ほぼ中央に位置する。両袖は山砂を主体として構築されている。カマド内に確認された火床部は、床面とほぼ同じ高さで窪みは浅い。カマド袖部分にも壁溝が巡り、カマドはその上部に構築されている。カマド内堆積土は、上層はしまりの強い褐色土が主体であり、下層は焼土粒を含む土層がみられる。

出土遺物　１は須恵器坏、２は土師器甕、３は土製支脚である。１は底面のみ欠損しているが、口縁部から底部までほぼ遺存している。色調は外面が暗灰色、内面は暗灰白色である。胎土中には細砂粒が含まれる。出土位置は床面近くである。２は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部内外面にナデ、頸部外面にヘラケズリ、頸部内面にヘラナデがみえる。色調は内外面ともに暗黒褐色である。胎土中には少量の輝石粒、多量の砂粒が含まれる。３はカマドの西側で、北側の壁溝から出土した。使用による被熱等によるものと考えられるが、遺存状態は悪く下端部を欠いている。胎土中には白色砂粒が多く含まれる。

２　土坑・埋設土器

(3)SK193（第219図、図版21）

状況　平面形はやや不整な長楕円形である。長径は1.2m、短径は0.94m、確認面からの深さは10㎝～15㎝である。底面の平面形態はやや不整形であり、南西側に最底面がある。断面でみると多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦な底面をしている。長軸方位はN-79°-Wである。覆土は、上層はローム粒を多く含む暗褐色土、下層はローム粒を少量含むしまりの強い褐色土が主体である。

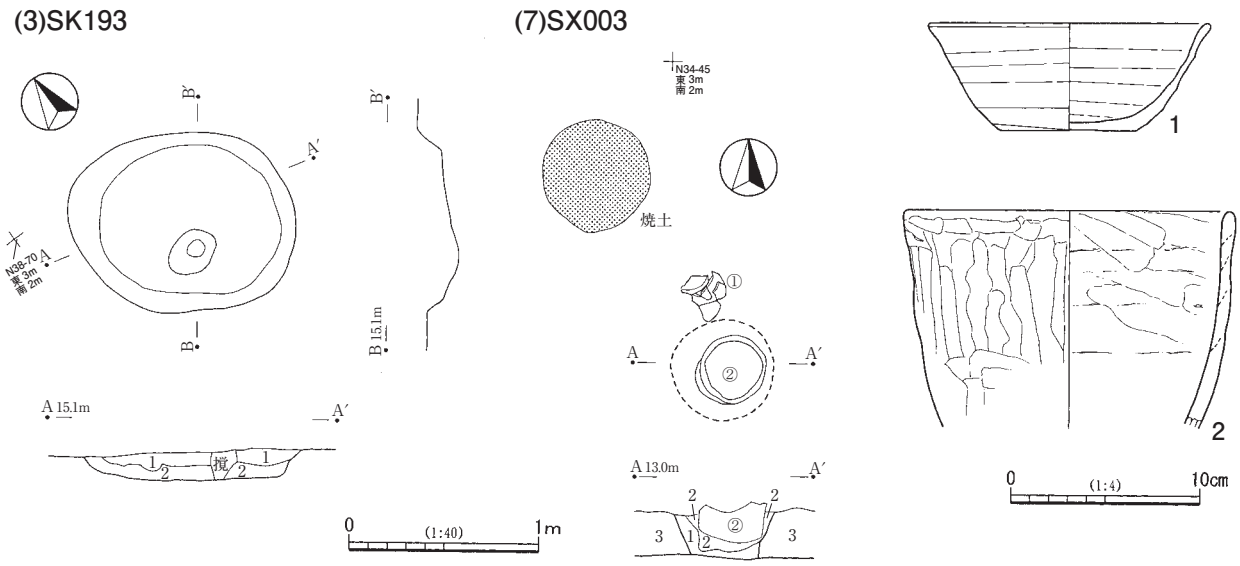
出土遺物　土師器の小破片のみで図示できるものはない。

(7)SX003（第219図、図版21・106）

状況　北西側に円形の焼土溜まりを伴う土器埋設遺構である。円形の焼土溜りは径58cm×56cmで、炉跡のような形状をしている。土器埋設箇所は径55cmの円形プランの掘込み内に２の土器が埋設されている。埋設土器が検出された確認面からの深さは30cmである。この付近から炭化物が検出されている。堆積土層でみると、埋設土器を含む上層はしまりの弱い黒色土を主体とし、下層は上層より粒子の粗い暗褐色土を主体とする。堆積土に焼土は含まれていない。人為的な埋め戻しであったと判断される。

埋設されたと推定される２の土器の向きは、底部を上方向にする逆位であった。この埋設土器の北側で、１の坏が出土している。

出土遺物　１はロクロ土師器坏、２は土師器鉢である。１は口縁部から底面にかけて全体の２／３程度遺存し、全体的に摩耗している。底面には回転糸切離し後、回転ヘラケズリが施されている。また底部外面にはヘラケズリがみえる。色調は外面が明褐色、内面は褐色である。胎土中には赤色粒、少量の輝石粒、砂粒が含まれる。２は口縁部から胴部にかけて全体の２／３程度が遺存する。粘土紐の巻上げによる成形がみえる。口縁部内外面及び胴部内面にナデ、胴部外面に縦位のヘラケズリが施されている。色調は内外面ともに明褐色である。胎土中には少量の輝石粒、砂粒が含まれている。



(3)SK193

1　暗褐色土　ローム粒多混、しまりやや弱

2　褐色土　ローム粒少混、しまり強

(7)SX003

1　暗褐色土　粒子やや粗、しまりやや弱

2　黒色土　粒子は1よりも密、しまり・粘性やや弱

3　明褐色土　ローム粒主体、しまり強、粘性弱、乾燥すると硬くなる、地山包含層

第 219 図　(3)SK193 土坑、(7)SX003 埋設土器、出土遺物

第11表　奈良・平安時代遺物観察表

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存度	計測値 口径 器高 底径	調整	胎土	色調 外面 内面	焼成	時期	備考
第215図 1	(26)SI001	土師器	坏	ほぼ完形	13.2cm 3.5cm 6.8cm	体部内外面ナデ	輝石粒少量、砂粒	明褐色 明赤褐色	良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整
第215図 2	(26)SI001	土師器	坏	ほぼ完形	12.5cm 4.9cm 5.9cm	体部内外面ナデ	輝石粒多量、砂粒	黒褐色 黒褐色	良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整
第215図 3	(26)SI001	土師器	坏	8/9	12.0cm 4.0cm 6.0cm	体部内外面ナデ	輝石粒少量、砂粒	黒褐色 にぶい橙色	良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整
第215図 4	(26)SI001	土師器	坏	1/4	11.9cm 4.1cm 5.6cm	体部内外面ナデ	雲母粒少量、輝石粒少量、砂粒	にぶい橙色 褐灰色	良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整、底部高台状
第215図 5	(26)SI001	土師器	坏	ほぼ完形	13.0cm 4.0cm 6.0cm	体部内外面ナデ	輝石粒多量、砂粒	黒褐色 黒褐色	良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整
第215図 6	(26)SI001	土師器	坏	8/9	13.1cm 4.0cm 6.8cm	体部外面ナデ、内面底部ナデ	輝石粒、砂粒	黒褐色 黒褐色	良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整
第215図 7	(26)SI001	土師器	坏	完形	12.9cm 3.3cm 6.6cm	体部内外面ナデ	輝石粒多量、砂粒	黒褐色 黒褐色	良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整
第215図 8	(26)SI001	土師器	坏	ほぼ完形	12.7cm 2.9cm 6.3cm	体部外面ナデ	輝石粒多量、砂粒	灰黄褐色 灰黄褐色	やや良	Ⅴ期	ロクロ、回転糸切未調整、内面摩耗
第215図 9	(26)SI001	土師器	坏	8/9	15.3cm 4.9cm 6.7cm	内面黒色処理、ミガキ、底部ヘラケズリ	輝石粒小量、小石少量、砂粒	明黄褐色 黒褐色	良	Ⅲ期	ロクロ
第215図 10	(26)SI001	土師器	坏	8/9	14.3cm 5.5cm 7.2cm	口縁部外面、内面黒色処理、ミガキ、底部ヘラケズリ	輝石粒小量、雲母粒少量、砂粒	黒色 黒褐色	やや良	Ⅲ期	ロクロ
第215図 11	(26)SI001	土師器	碗	1/3	14.5cm 5.1cm 5.8cm	内外面体部ナデ	輝石粒少量、赤色粒少量、砂粒	にぶい橙色 明褐色	良	Ⅴ期	ロクロ、底部高台
第215図 12	(26)SI001	須恵器	甕	口縁部破片	― ― ―	内面ナデ	小石	黒灰色 黒灰色	良	―	櫛描き波状文
第215図 13	(26)SI001	須恵器	甕	体部破片	― ― ―	内面指圧痕、外面タタキ目後ナデ	小石	暗灰色 暗灰色	良	―	
第215図 14	(26)SI001	土師器	甕	2/3	18.2cm 28.5cm 9.6cm	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面、底部外面ヘラケズリ	雲母粒、砂粒	赤褐色 赤褐色	良	Ⅴ期	底面ヘラケズリ後、ヘラナデ
第215図 15	(26)SI001	土師器	甕	破片	(12.8cm) (8.0cm) ―	胴部内外面ヘラケズリ	輝石粒少量、砂粒	橙色 赤褐色	良	Ⅴ期	
第215図 16	(26)SI001	土師器	甕	底部破片	(7.6cm) (7.0cm) ―	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	雲母粒少量	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良	Ⅴ期	
第215図 17	(26)SI001	土師器	甕	底部破片	― (6.8cm) 8.4cm	外面ヘラナデ、内面ユビナデ	長石粒、輝石粒少量	橙色 橙色	良	Ⅴ期	底面ヘラケズリ
第215図 18	(26)SI001	土師器	甑	底部破片	― (5.2cm) 14.9cm	内外面ヘラナデ	砂粒、雲母粒少量	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	Ⅴ期	
第216図 1	(26)SI002	土師器	坏	ほぼ完形	13.8cm 5.2cm 6.0cm	体部内外面ナデ	白色粒多量、輝石粒少量、雲母粒少量	黄褐色 褐色	良	Ⅴ期	ロクロ、底部高台状、回転ヘラ切り後、ヘラナデ
第216図 2	(26)SI002	土師器	甕	1/2	(15.8cm) 18.0cm (8.6cm)	胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	輝石粒少量、小石多量	赤褐色 赤褐色	やや良	Ⅳ～Ⅴ期	器面一部摩耗、底面ヘラナデ

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存度	計測値 口径 器高 底径	調整	胎土	色調 外面 内面	焼成	時期	備考
第216図 3	(26)SI002	土師器	甕	2/3	(21.2cm) [21.6cm] —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、頸部内面ヘラナデ、胴部内面ヨコナデ	輝石、雲母粒少量、白色砂粒多量	明赤褐色 明赤褐色	良	Ⅴ期	
第216図 4	(26)SI002	土師器	甕	1/4	(14.2cm) [11.8cm] —	胴部内外面ヘラケズリ	砂粒多量	黄褐色 褐色	やや良	Ⅴ期	器面一部摩耗
第216図 5	(26)SI002	土師器	甕	底部破片	— [3.1cm] [7.8cm]	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	砂粒、 雲母粒	黄褐色 黄灰褐色	良	Ⅴ期	
第216図 6	(26)SI002	土師器	甕	1/5	(20.0cm) 13.0cm —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	輝石粒、白色砂粒多量	暗褐色 明赤褐色	良	Ⅳ～Ⅴ期	器面一部摩耗
第216図 7	(26)SI002	土師器	甕	1/5	(18.0cm) [12.6cm] —	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	輝石粒、雲母粒、砂粒多量	明褐色 にぶい黄褐色	良	Ⅴ期	器面一部摩耗
第217図 1	(6)SI030	須恵器	坏	口縁部破片	— — —	内面摩耗し調整不明、外面ロクロナデ	砂粒	暗灰色 白灰色	良	—	器面一部摩耗
第217図 2	(6)SI030	須恵器	蓋	口縁部破片	(13.6cm) (1.6cm) —	内外面ロクロナデ	白色砂粒	灰白色 灰白色	良	—	
第217図 3	(6)SI030	土師器	甕	口縁部破片	— — —	口縁部外面ナデ	雲母粒多量、砂粒	明赤褐色 明赤褐色	やや良	—	器面一部摩耗
第217図 4	(6)SI030	土師器	甕	底部破片	— (2.0cm) (11.6cm)	内外面ともに摩耗し調整不明	輝石粒少量、砂粒	灰黄褐色 灰黄褐色	やや不良	—	
第218図 1	(34)SI001	須恵器	坏	底面のみ欠損	15.0cm — —	内外面ロクロナデ	細砂粒	暗灰色 暗灰白色	良	—	
第218図 2	(34)SI001	土師器	甕	破片	22.0cm — —	口縁部内外面ナデ、頸部外面ヘラケズリ、頸部内面ヘラナデ	輝石粒少量、砂粒多量	暗黒褐色 暗黒褐色	良	Ⅴ期	
第218図 3	(34)SI001	土製品	支脚	—	最大長 (18.4cm) 現存最大幅7.8cm	—	輝石粒少量、砂粒多量	全体赤褐色	やや不良	—	全体被熱、下半部欠損
第219図 1	(7)SX003	土師器	坏	2/3	14.7cm 5.7cm 7.1cm	底部外面ヘラケズリ	赤色粒、輝石粒少量、砂粒	明褐色 褐色	やや良	Ⅲ期	底面回転糸切後、回転ヘラケズリ、外面にスス付着、器面摩耗
第219図 2	(7)SX003	土師器	鉢	2/3	17.0cm 11.5cm —	口縁部内外面、胴部内面ナデ、胴部外面ヘラケズリ	輝石粒少量、砂粒	明褐色 明褐色	やや良	—	

＊時期凡例：Ⅰ期（８世紀後半）、Ⅱ期（９世紀前半）、Ⅲ期（９世紀中葉）、Ⅳ期（９世紀後半）、Ⅴ期（９世紀末～10世紀初）
（参考：（財）千葉県教育振興財団『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）－』(2010)）

第５章　中・近世の遺構と遺物

第１節　概要（第220図）

中・近世の遺構の内訳は、台地整形区画１基、建物跡１基、方形竪穴状遺構１基、地下式坑３基、土坑・ピット33基、ピット群１か所、井戸１基、塚１基、土塁４基、溝状遺構32条である。東へ突出する２つの舌状地のうち、南側台地と台地奥の西側に集中して分布する区域があり、他に調査地全体から溝状遺構が検出されている。

南側調査区として記載した(12)調査区は南側台地の南東端に位置し、塚、土塁及びそれらに伴う溝状遺構や土坑、井戸などが検出されている。(21)調査区は南側台地の北側、小支谷の開口部に位置し、土塁とそれに伴う溝状遺構が検出されている。西側調査区として記載した(25)調査区東側は台地に陥入する小支谷の奥に位置し、小規模な台地区画整形と方形竪穴状遺構、地下式坑、粘土貼り土坑、小ピットなどが検出されている。(25)調査区西側と(30)調査区はひとまとまりの遺構群を２次に分けて調査したものである。東西及び南北に延びる溝状遺構を中心として、地下式坑、土坑が検出されている。それ以外の調査区では全体に散漫な分布である。

図面の縮尺は、掘立柱建物跡、遺構群などは１／80、地下式坑、土坑、井戸は１／40、溝状遺構、塚、土塁の平面図は１／200、断面図は１／100である。確認調査で終了した遺構については、検出された範囲のみの実測にとどめているものや、離れた地点で検出された遺構を推定線で繋げたものがある。遺物の実測図は、板碑、石臼は１／４、土器・陶磁器類、石製品は１／３、金属製品は１／２である。土製品は土製円盤など特に小さなものは１／２、それ以外は１／３である。銭貨は出土遺構や各地区の遺物挿図に表面のみ２／３で掲載し、第253・254図に１／１で表裏の拓影図をまとめて再掲載した。各遺物については遺構別ではなく調査区別に記載した。第12～14表に属性をまとめてある。

第２節　遺構と遺物

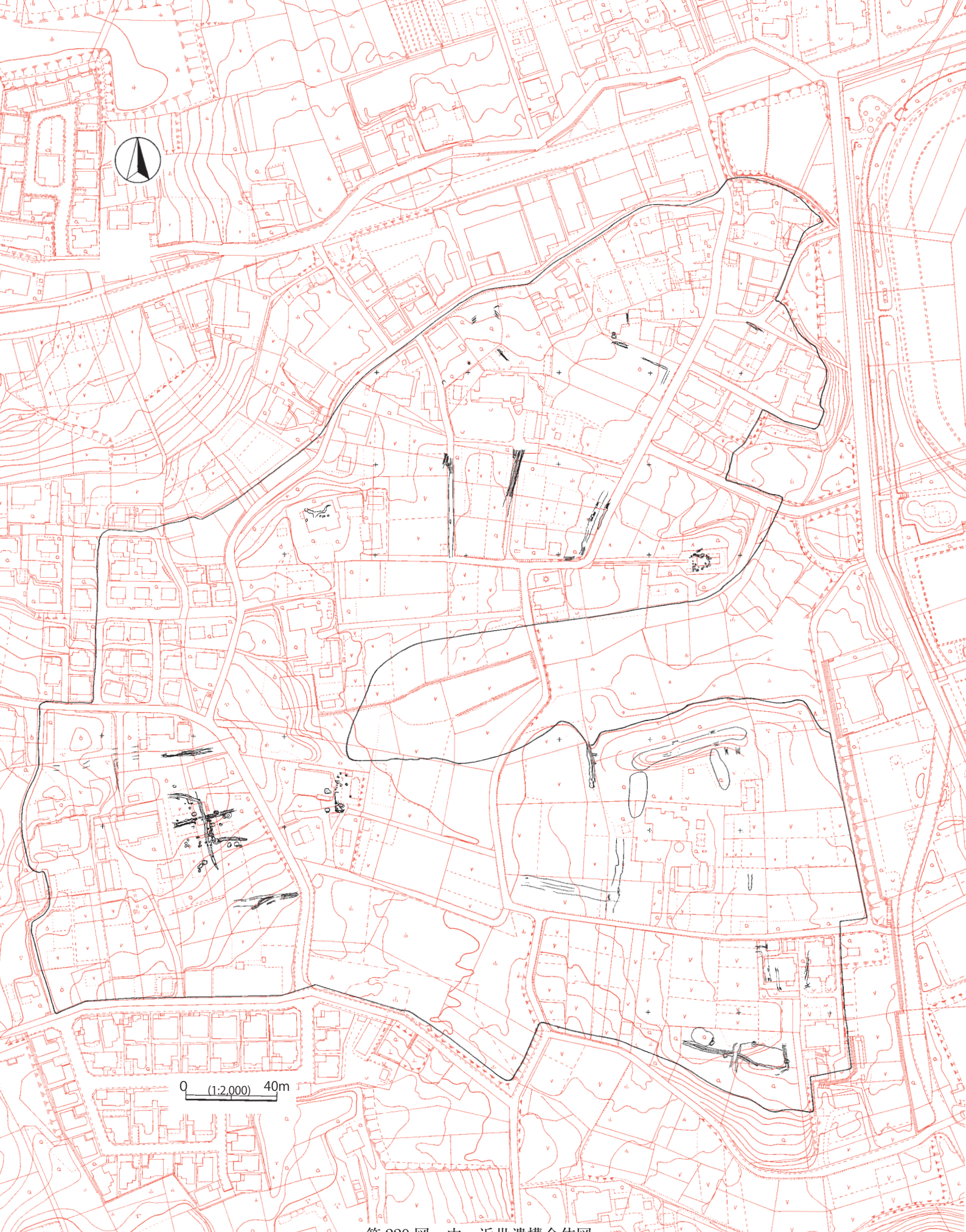
１　南側調査区の遺構群

（１）(12)調査区

南側台地の南東端部に当たる調査区である。塚１基、土塁１基、溝状遺構２条、井戸１基、土坑群１基、土坑２基が検出されている。

(12)SM001（第221・222図、図版22）

調査区西部に存在する塚である。東西長約13m、南北長約7.5m、高さ最大約1.3mの不整円形を呈する。東側は当遺構より低くなっているものの、土塁が続いていると思われる。当遺構の築造にあたって、土塁の一部を利用した可能性が考えられる。頂部は２か所見られ、塚２基の可能性もあるが、土層観察では明瞭な重複関係はつかめておらず、あるいは同時に築かれたものかもしれない。南側で(12)SD003Aと接するが、重複関係は認められない。また東側裾部には(12)SK004土坑があるが、これは盛土下で検出されており、当遺構に先行する遺構である。出土遺物として板碑、瀬戸鋲皿、擂鉢転用砥石、石臼、寛永通寶がある。板碑は破片であり、また砥石として再利用されたと思われるものもあり、当遺構に伴うものかは判



第 220 図　中・近世遺構全体図

然としない。ただ今回の調査区で板碑が出土したのは当遺構とその周辺のみである。(12)SK004から16世紀中頃と考えられる内耳土器が出土しており、重複関係や出土遺物から見ると当遺構は16世紀後半から17世紀のものと思われる。

(12)SX002（第221・222図、図版22）

調査区東側に存在する土塁である。東西方向に延びており、長さ約37m、幅約10m～15m、高さ最大約1.4mを測る。南側に沿って(12)SD003A溝が作られるが、当遺構より新しいと思われる。当遺構の土層観察で明確なロームブロックが見られないことからも、これが裏付けられよう。ただ溝の方向は当遺構と同じであることから、土塁を意識して作られたものであり、大きな時期差はないものと思われる。土塁裾から南側は更に比高差約1.3mの谷地形となっており、谷底から土塁頂部まで３m近い比高差となる。東端部で北へ折れ曲がっており、形状としてはＬ字状である。西側の(12)SM001との間は南北に延びる(12)SD003B溝に切られており、地形図上でもその痕跡が認められる。この部分は入口にあたり、溝は道跡となる可能性も考えられる。なお、(12)SM001の堆積土12層、当遺構の堆積土３・10～12層は溝のように見え、地形図にも溝らしい窪みが認められるが、調査では捉えられなかったようである。当遺構からは15世紀代と思われる内耳土器が、(12)SD003からは15世紀後半の擂鉢や古瀬戸平碗が出土しているので、中世の所産として間違いなかろう。

(12)SD003A（第221・222図、図版22）

(12)SX002を取り囲むようにＬ字状に延びる溝状遺構である。台地の南縁辺部の傾斜変換線に沿って東西に構築され、東端部で北側に向きを変えている。総延長約57m、幅約1.3m～2.6mであるが、P40-51・62・63グリッド付近は斜面側の壁が流出している。土層観察や地形図から土塁より新しいものと思われる。(12)SM001とは同時期、もしくはやや先行する遺構と考えられる。溝の断面は一部を除いてＶ字形を呈する。

(12)SD003B（第221・222図、図版22）

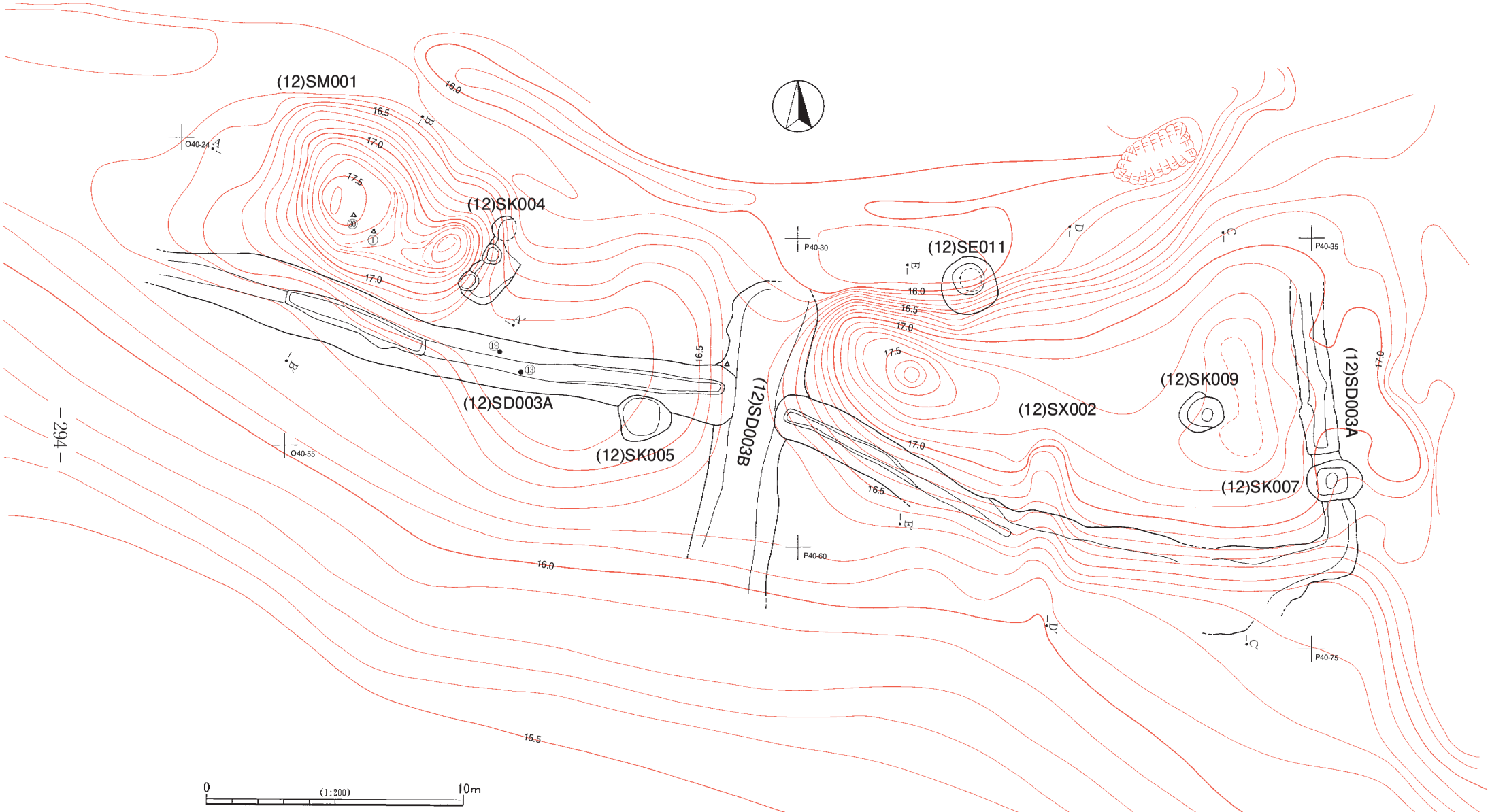
調査区中央部で(12)SD003Aと(12)SX002を直交する南北方向の溝状遺構である。総延長約12m、幅約3.0m～3.5mであるが、南端部は斜面にかかって消失している。この溝の断面形は箱形を呈しており、土塁内に入るための道跡の可能性が考えられ、(12)SD003Aとは性格が違うものと思われる。出土遺物は(12)SD003Aも含め一部近世のものが見られるが、土器擂鉢や内耳土器等15世紀後半から16世紀にかけてのものが主体を占めるので、中世の所産と考えて差し支えないと思われる。

(12)SK004（第224図）

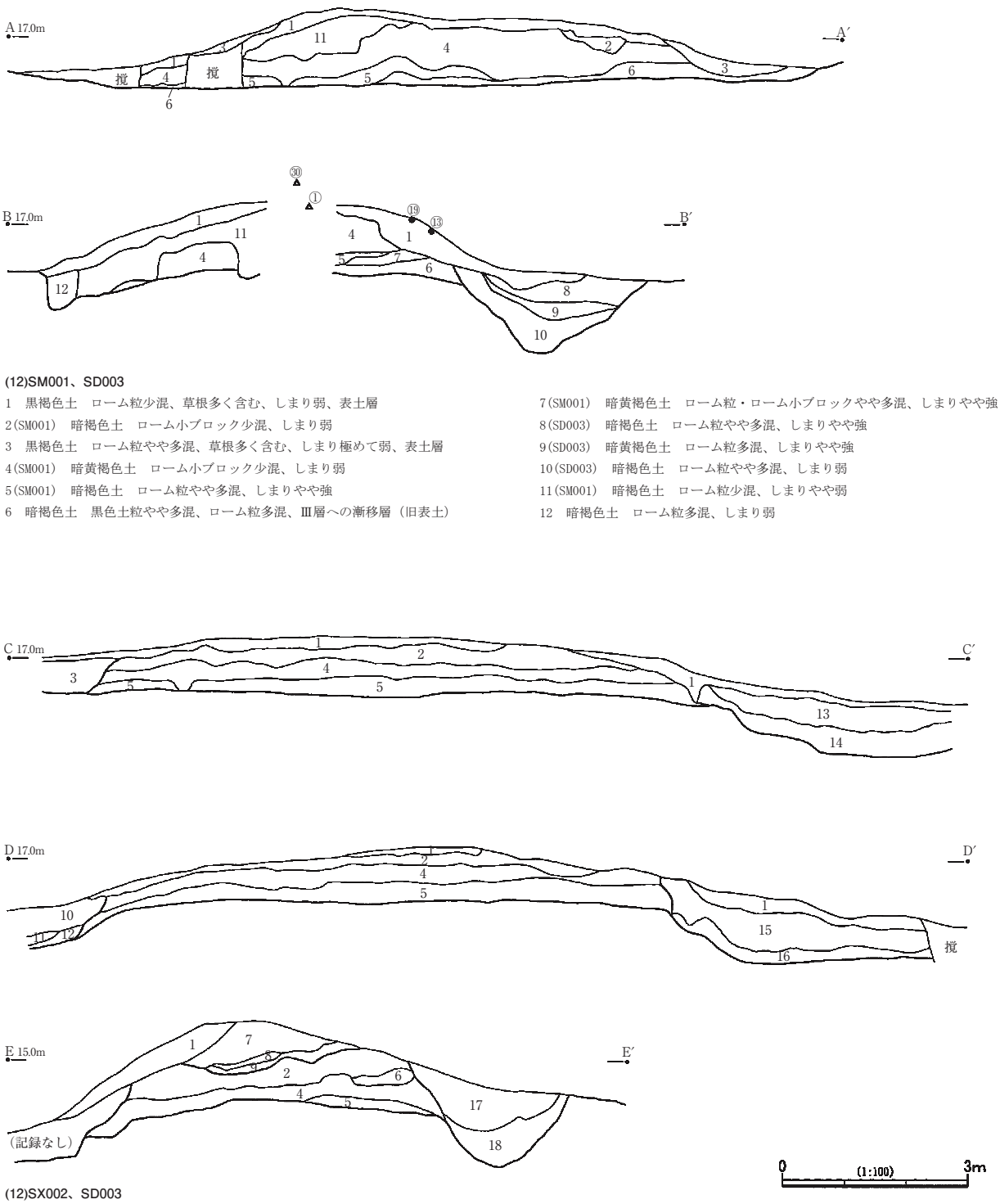
(12)SM001の東側に位置する土坑群である。(12)SM001の盛土下で検出されたことから、これより古いものと思われる。径約80cm～100cmの円形土坑が３基掘られ、それらをつなぐように方形の平場が設けられるが、北東側は流出しているため全体規模は不明である。４基の土坑の重複と考えられるが、新旧関係は不明である。16世紀中ほどの内耳土器が出土しており、当該期の遺構と考えられる。

(12)SK005（第223図）

調査区ほぼ中央、(12)SM001の東側に位置する土坑である。開口部は東西長210cm、南北長170cmの不整形を呈するが、坑底は140cm四方の隅丸方形に近い。断面は逆台形を呈すると思われ、深さは80cmを測る。北側は(12)SD003Aと重複しているが、新旧関係は不明である。遺構内からは砥石が出土しているが、時期を特定できる遺物は出土していない。



第 221 図　(12)SM001 塚、(12)SX002 土塁、(12)SD003A・B 溝状遺構（1）



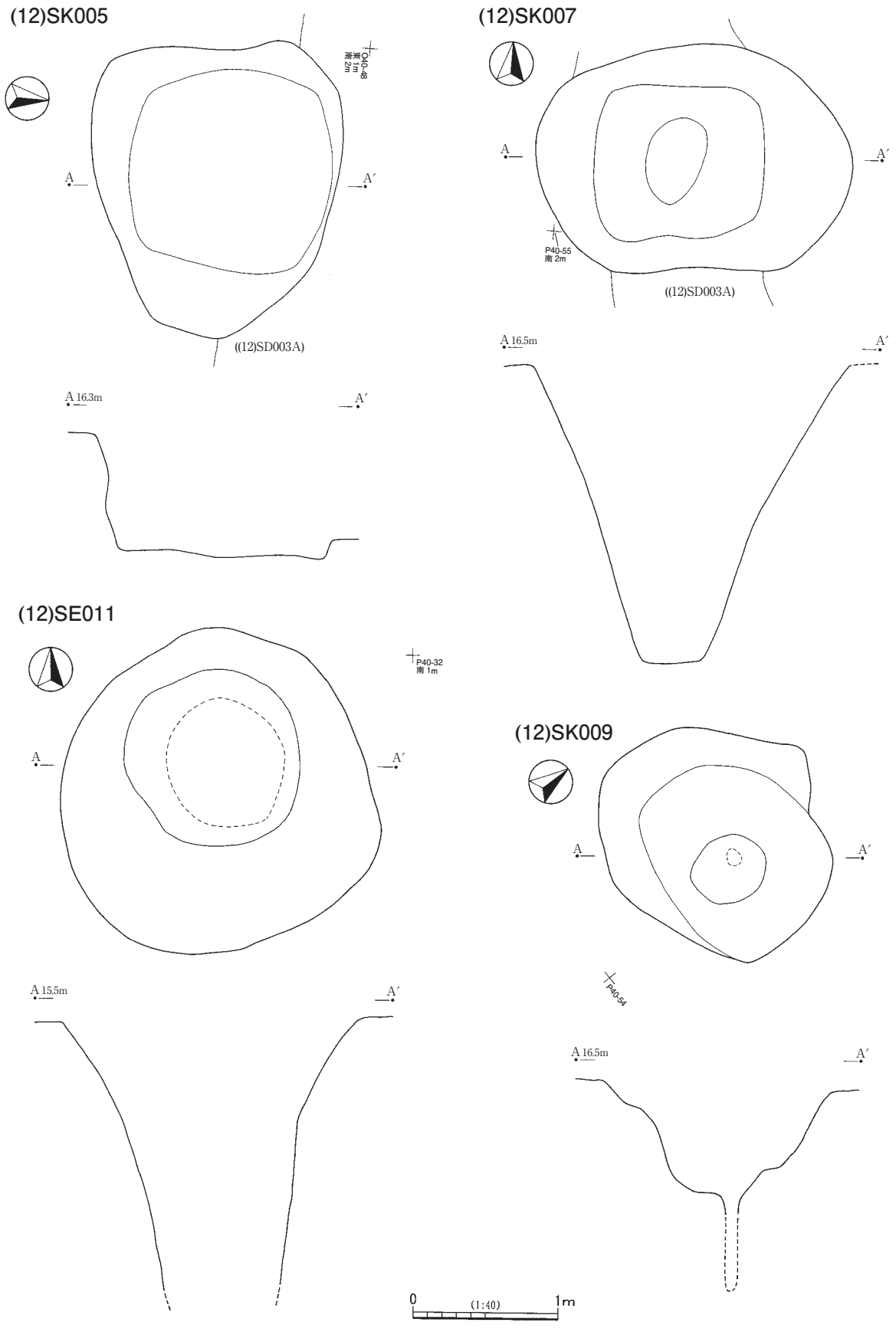
(12)SM001、SD003

1　黒褐色土　ローム粒少混、草根多く含む、しまり弱、表土層
2(SM001)　暗褐色土　ローム小ブロック少混、しまり弱
3　黒褐色土　ローム粒やや多混、草根多く含む、しまり極めて弱、表土層
4(SM001)　暗黄褐色土　ローム小ブロック少混、しまり弱
5(SM001)　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや強
6　暗褐色土　黒色土粒やや多混、ローム粒多混、Ⅲ層への漸移層（旧表土）
7(SM001)　暗黄褐色土　ローム粒・ローム小ブロックやや多混、しまりやや強
8(SD003)　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまりやや強
9(SD003)　暗黄褐色土　ローム粒多混、しまりやや強
10(SD003)　暗褐色土　ローム粒やや多混、しまり弱
11(SM001)　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや弱
12　暗褐色土　ローム粒多混、しまり弱

(12)SX002、SD003

1　黒褐色土　ローム小ブロック少混、草木根多く含む、しまり弱、表土層
2(SX002)　暗黄褐色土　ローム小ブロック・ローム粒主体、しまり弱
3　暗黄褐色土　ローム粒やや多混
4(SX002)　暗褐色土　やや黒味を帯びる、ローム粒・焼土粒少混
5　暗黄褐色土　Ⅲ層への漸移層（旧表土）
6(SX002)　暗黄褐色土　ローム小ブロック多混、しまり強
7　暗褐色土　ローム小ブロックやや多混、しまり弱、木根がからみ分層できない
8　暗褐色土　白色粘性土多混、しまり極めて強
9　暗黄褐色土　白色粘性土少混、ローム小ブロックやや多混、しまり強
10　暗褐色土　ローム小ブロック少混、しまり弱
11　暗黄褐色土　ローム小ブロック多混
12　暗褐色土　ローム小ブロック少混、しまり弱
13(SD003)　暗褐色土　ローム小ブロックやや多混、しまり弱
14(SD003)　暗黄褐色土　ローム小ブロック極めて多混、しまり弱
15(SD003)　暗褐色土　ローム粒多混、しまり弱
16(SD003)　暗黄褐色土　ローム小ブロックやや多混、しまり弱
17(SD003)　暗黄褐色土　ローム小ブロック多混、しまり極めて弱
18(SD003)　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや強

第 222 図　(12)SM001 塚、(12)SX002 土塁、(12)SD003A・B 溝状遺構（２）



第 223 図　(12)SK005・007・009 土坑、(12)SE011 井戸状遺構

(12)SK007（第223図、図版22）

調査区東端に位置する土坑で、(12)SD003Aと重複する。溝は当土坑の北側で壁が立ち上がって仕切り状を呈しており、両者一体の施設であると判断される。開口部は東西長220cm、南北長155cmの楕円形を呈するが、途中は隅丸方形、坑底は径40cm～60cmの南北に長い楕円形を呈する。断面は逆台形を呈し壁は一段稜をもって立ち上がる。深さは205cmを測る。砥石、石臼、陶器転用砥石が出土しており、砥石に転用された瀬戸擂鉢は17世紀代のものと思われる。

(12)SK009（第223図、図版22）

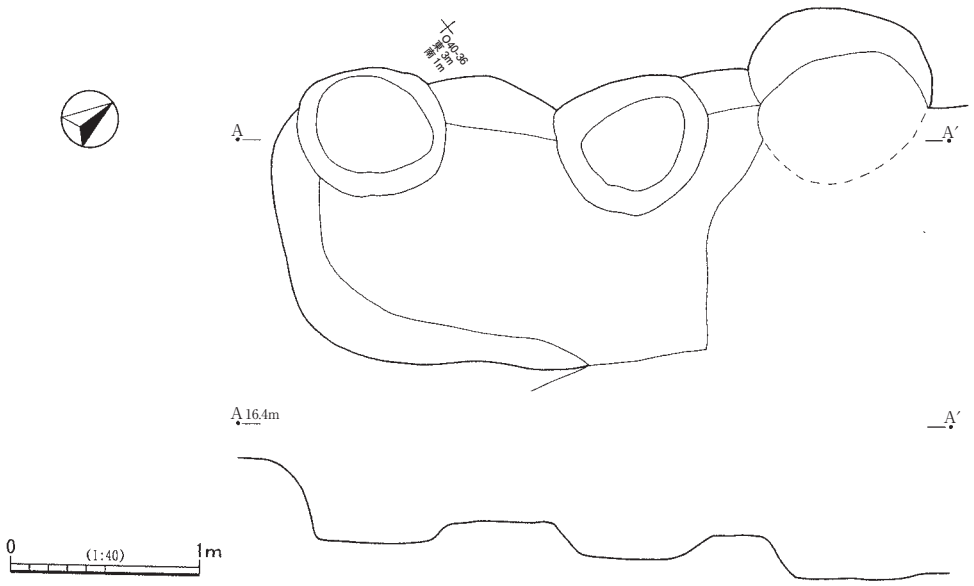
調査区東端付近、(12)SX002の下に位置する土坑である。東西長170cm、南北長160cmの不整形を呈するが、壁上部に崩落した痕跡が認められ、本来の規模は135cm×110cm程度であったと考えられる。断面は椀形で深さは80cmを測るが、中央部に径10cmの細い掘込みがあり、深さは70cm弱である。当遺構から出土した常滑片口鉢片が(12)SD003A出土のものと接合している。

(12)SE011（第223図、図版22）

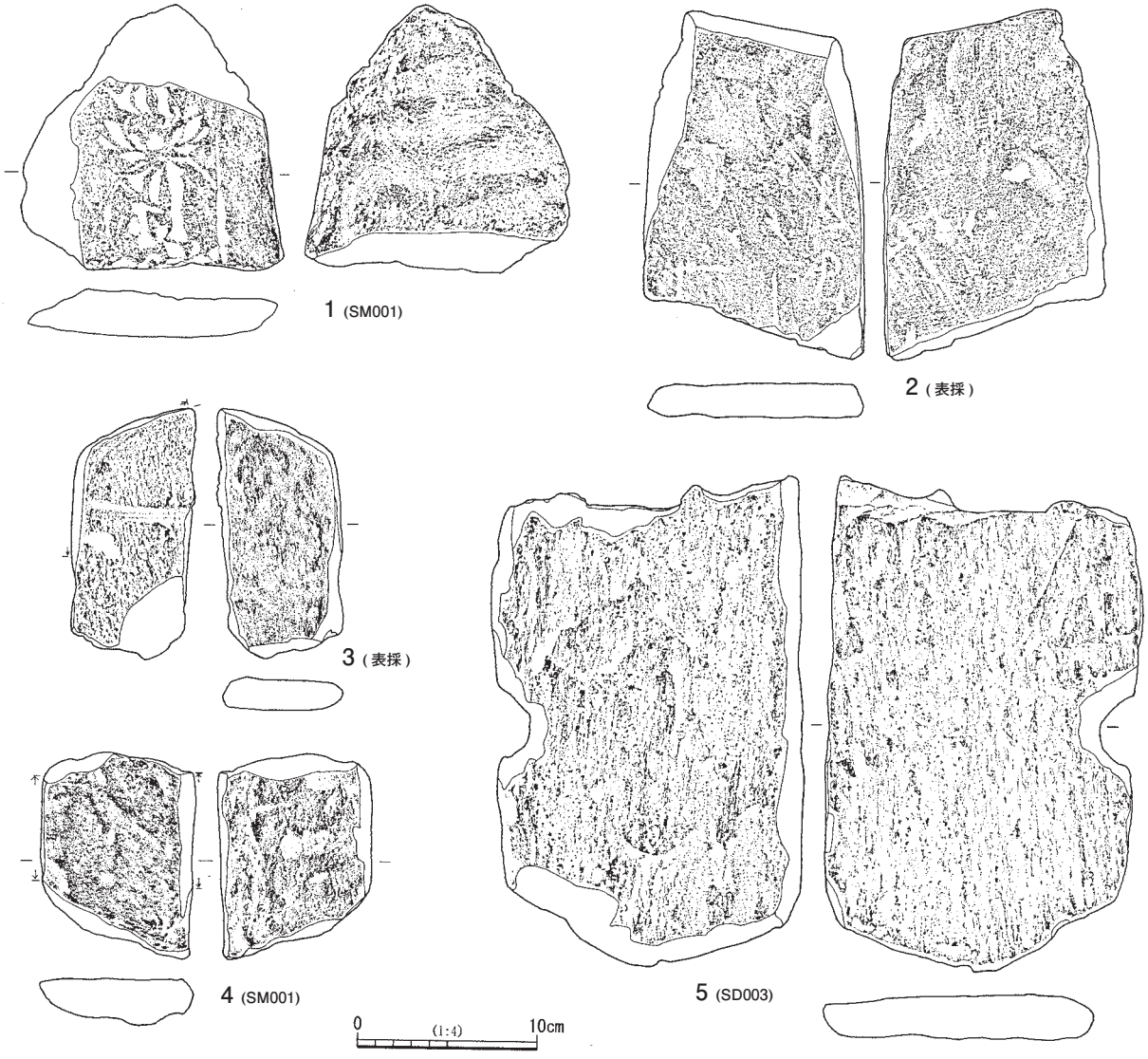
調査区東側北部に位置する井戸状遺構。径210cm～220cmの正円に近い不整円形を呈するが、上部の壁は崩落したものと思われる。深さ約180cmまで掘り進めたところで掘削を断念した。時期の特定できる遺物は出土していないが、(12)SX002の等高線は(12)SE011付近で乱れており、土塁より後出するものと思われる。

出土遺物（第225～227図、図版107・108・110～112）

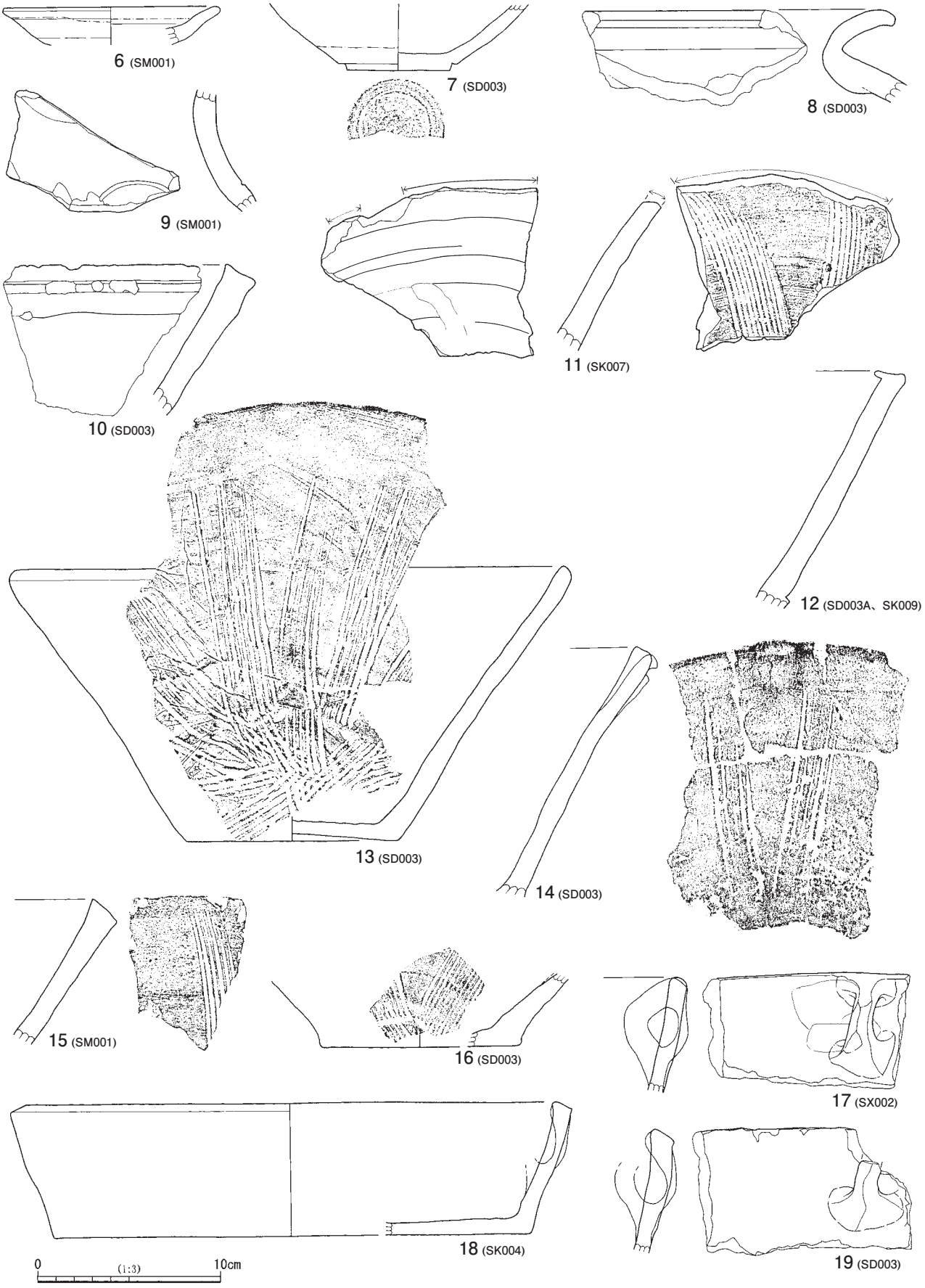
１～５は板碑である。１は(12)SM001出土で、塔身部の右側面が遺存する。連座と月輪、種子（ア　大日如来？）が見られるが、判然としない。この上にも連座が見られ、左側にも月輪が見られるので、多尊板碑の可能性がある。２は表採で、頭部及び右側面は外縁部が遺存する。表裏共２次的に磨かれており、砥石に転用している。そのため区画線とその右側に２文字みられるが判読できない。３も表採で頂部及び左側面は外縁部が遺存するが、他は欠損している。４は(12)SM001出土で右側面が遺存するが、他は欠損している。表面は磨いて整えられているが、裏面には製作時の鑿痕が残る。また左側面は磨られており、砥石に転用された可能性がある。５は(12)SD003出土で塔身部下端と基部が遺存する。表面は整えられているが、裏面は敲打痕が残る。右側面は半円形に打ち欠かれている。打欠きは表裏から行われており、意図的に行われたものであるが、その理由は不明である。６～12、15、16は中世陶器である。６は(12)SM001出土の瀬戸鍔皿で、体部から口縁部にかけ約40％遺存する。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部でやや屈曲する。口縁部の内外面に灰釉が施される。16世紀代の所産である。７は(12)SD003出土の古瀬戸の平碗で、底部から体部下端にかけ約35％遺存する。底部は削り出し高台で、体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。内外面に灰釉が施され、体部下端は露胎である。15世紀代の所産であろう。８は(12)SD003出土の渥美大甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部内面及び肩部に自然釉がかかる。12世紀代のものであろう。９は(12)SM001出土で、常滑大甕の頸部片を利用した転用砥石である。左及び上部の断面を利用しているが、上部断面の使用が顕著である。10・12は常滑片口鉢の口縁部片である。共に片口鉢２類で、10は(12)SD003出土、12は(12)SK009と(12)SD003A出土のものが接合している。10は15世紀代、12は14世紀代の所産と思われる。11は(12)SK007出土で、瀬戸擂鉢の体部下端片を利用した転用砥石である。上部の断面を使用している。擂鉢は17世紀代のものなので近世の所産である。15は(12)SM001出土の備前擂鉢で、口縁部が約５％遺存しており、内面には６本を単位とするすり目が施される。内面



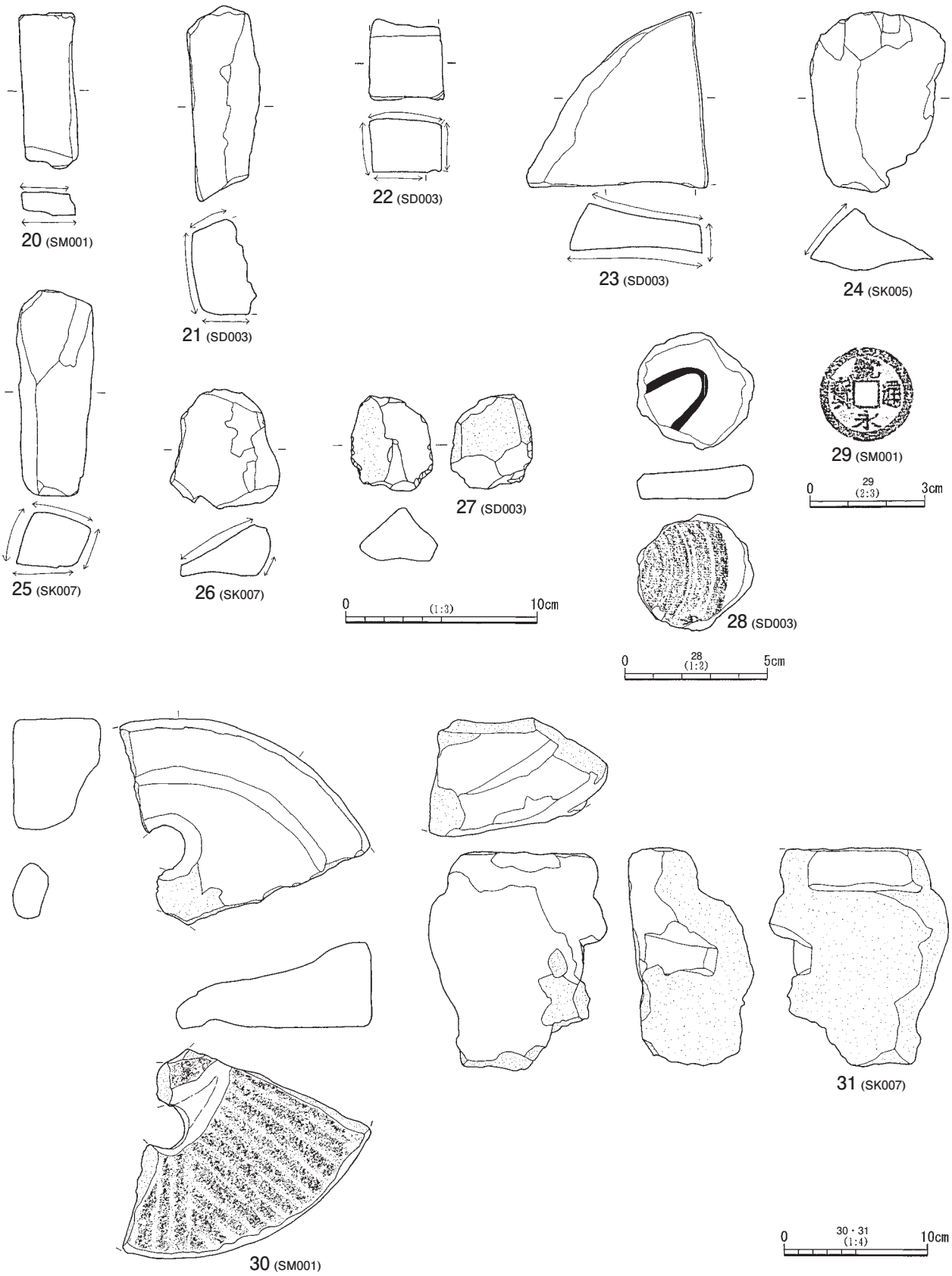
第 224 図　(12)SK004 土坑群



第 225 図　(12) 調査区出土中・近世遺物（1）



第 226 図　(12) 調査区出土中・近世遺物（２）



第 227 図　(12) 調査区出土中・近世遺物（３）

はよく磨られている。15世紀代の所産である。16は(12)SD003出土の瀬戸擂鉢で、底部が約７％遺存する。内外面に錆釉が施される。内面は磨られておらず、顕著な使用は認められない。13・14は土器擂鉢で、共に(12)SD003出土である。13は底部50％、体部から口縁部にかけ約15％遺存する。体部はハの字状に立ち上がり、底部は上げ底状になる。内面には６本を単位としたすり目が施されるが、雑な感じである。内面はあまり磨れておらず、擂鉢としてあまり使用されていないようである。色調は内外面とも褐灰色だが、胎土は赤褐色を示す。胎土は砂粒を含み、比較的硬質である。14は体部下端から口縁部にかけ約20％遺存する。底部は抜け落ちている。口縁部には片口がつけられ、内面には5本を単位とするすり目が施される。内面はよく磨られており、すり目の一部は消えている。色調は内外面とも灰褐色で、胎土は赤褐色を示す。胎土は砂粒を含み、比較的硬質である。15世紀後半の所産と思われる。17～19は内耳土器である。全て焙烙形で、内耳が底部まで達しないものである。17は(12)SX002出土で内耳部のみ遺存する。18は(12)SK004出土で、底部から口縁部にかけ約20％遺存するが、内耳部は欠損している。19は(12)SD003出土で、内耳部のみ遺存するが、耳が欠損する。これらは胎土に雲母を多く含んでおり、筑波周辺で製作されたものであろう。16世紀代と思われる。20～26は砥石である。20は(12)SM001、21～23は(12)SD003、24は(12)SK005、25・26は(12)SK007の出土である。27は(12)SD003出土の火打石で、下面に敲打痕が認められる。28は(12)SD003出土の陶器片円盤で、陶器皿の底部片周縁を打ち欠いて作っている。表面には墨書が認められる。近世の所産であろう。29（第252図１）は(12)SM001出土の寛永通寶で、古寛永である。30・31は石臼で、共に上臼である。30は(12)SM001出土で、もの入れが穿たれ、臼面は摩耗している。31は(12)SK007出土で、側面にひき手を取り付けるための穴が見られる。また側面は磨かれており、砥石に転用された可能性がある。

（２）(21)調査区

南側台地の北側に位置する調査区である。土塁３基、溝状遺構４条が検出された。

(21)SX001（第228・229図、図版23）

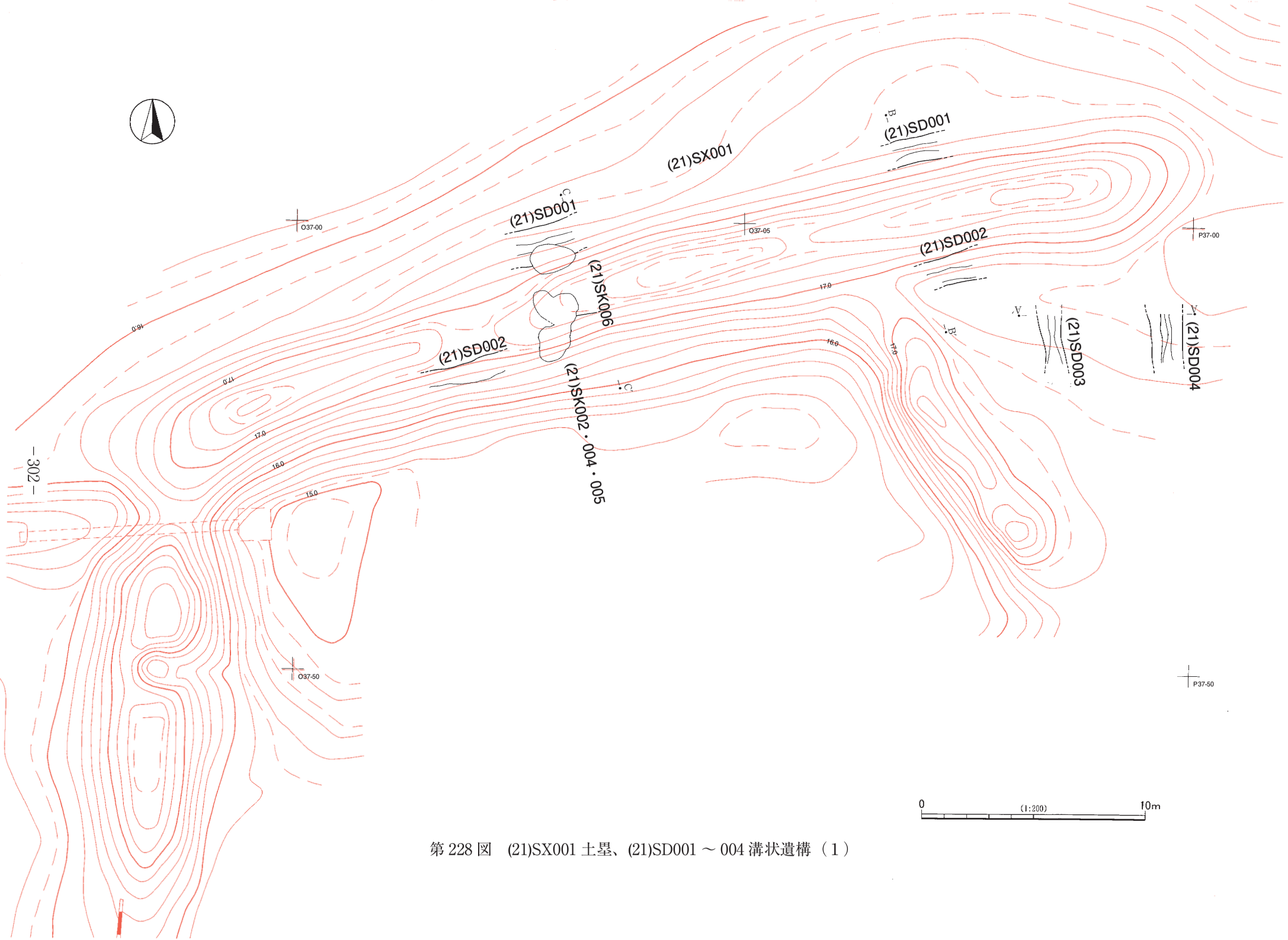
調査区内を東西方向に延びる土塁である。等高線を基にした全長は約52m、幅最大約10m、高さ最大約2.5mである。土塁脇に(21)SD001・002が掘られる。土層観察によればこの溝は土塁に伴うものと考えられる。土塁の構築土はロームブロックを主体とする黄褐色土層が認められるので、(21)SD001の掘削土が使われたものと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していない。なお、西端部とO37-16グリッド付近から南側へ土塁が延びているが、トレンチ調査を行っていないため詳細は不明である。

(21)SD001・002（第228・229図）

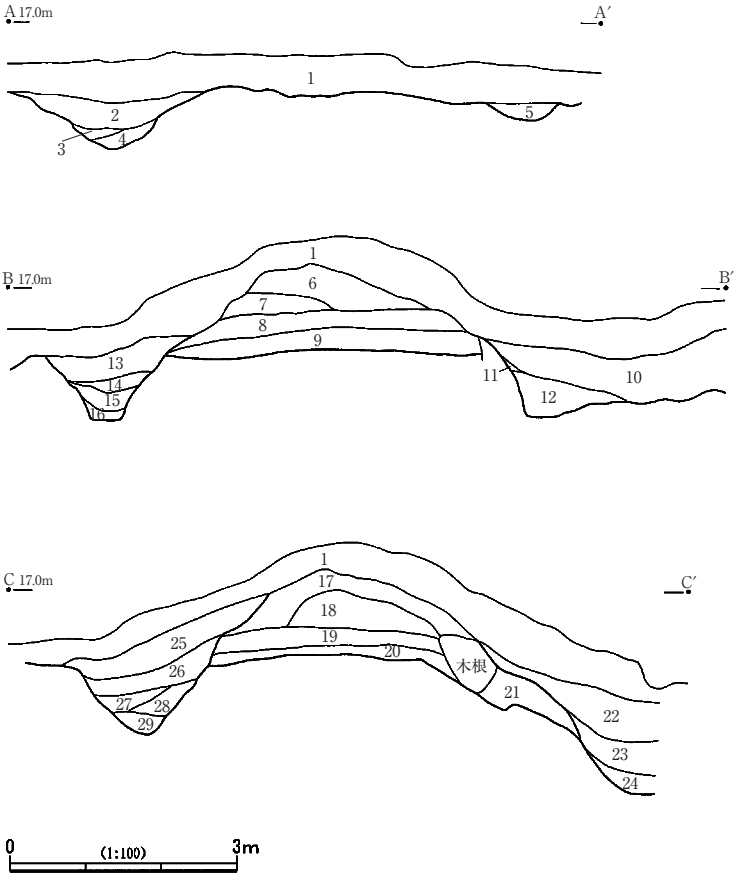
(21)SX001土塁に伴う溝状遺構で、いずれも確認調査で終了したため全長は不明である。土塁の北側から検出されたのが(21)SD001で、幅は最大1.8m、深さは最大1.0mを測る。土塁の南側から検出されたのが(21)SD002で、幅は最大1.0m、深さは0.4mを測る。断面は共にＶ字形を呈する。ただし土塁で区画された部分は外側より標高が１mほど低くなっており、(21)SD002も土塁中段を通る形になっているため、南側の壁は検出されなかった。時期を特定できる遺物は共に出土していない。

(21)SD003・004（第228・229図）

調査区東端部に位置し、南北に延びている溝状遺構であるが、これらも確認調査のみのため全長は不明である。(21)SD003は幅2.0m、深さ0.2m、(21)SD004は幅3.0m、深さ0.6mを測る。両者の配置をみると土塁に伴う溝のように見えるが、調査時には土塁らしいものは存在しなかった。

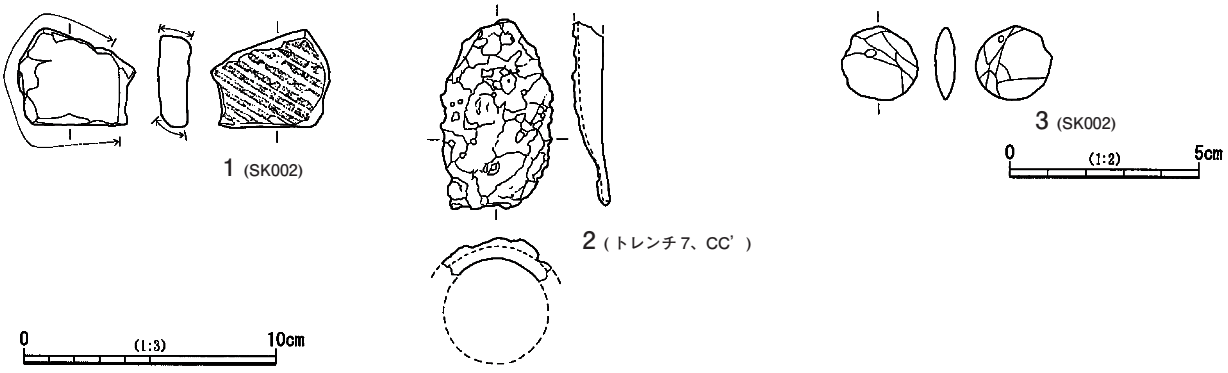


第 228 図　(21)SX001 土塁、(21)SD001 ～ 004 溝状遺構（１）



(21)SX001、SD001 ～ 004

1　暗褐色土　表土層
2(SD003)　暗褐色土　褐色土ブロック少混、しまりやや弱
3(SD003)　暗褐色土　ロームブロック多混、しまりやや弱
4(SD003)　暗褐色土　しまり弱
5(SD004)　暗褐色土　しまり弱
6(SX001)　黄褐色土　ロームブロック主体、しまりやや弱
7(SX001)　暗褐色土　しまりやや弱、粘性弱
8(SX001)　黒褐色土　褐色土ブロック多混、しまりやや強
9(SX001)　暗黄褐色土　褐色土ブロックやや多混、ロームブロック少混、しまりやや強
10(SD002)　暗褐色土　しまりやや弱
11(SD002)　黄褐色土　ロームブロック主体、しまりやや弱
12(SD002)　黒褐色土　褐色土ブロック微混、しまりやや弱
13(SD001)　暗褐色土　しまりやや弱
14(SD001)　暗褐色土　ローム粒微混、しまりやや弱
15(SD001)　暗褐色土　褐色土ブロックやや多混、φ～ 10 ㎜ローム粒子少混、しまりやや弱
16(SD001)　暗褐色土　15 に比べやや黄色味を帯びる、ロームブロック多混、しまりやや弱
17(SX001)　暗褐色土
18(SX001)　黄褐色土　ローム粒主体、しまりやや弱
19(SX001)　黒褐色土　褐色土ブロック少混、旧表土？
20(SX001)　暗褐色土　ローム粒少混、しまりやや強
21(SX001)　暗褐色土　ロームブロック多混、しまりやや弱
22(SD002)　暗褐色土　ローム粒微混、しまりやや弱
23(SD002)　暗褐色土　褐色土ブロック少混、ローム粒微混、しまりやや弱
24(SD002)　暗褐色土　ロームブロック微混、しまりやや弱
25(SD001)　暗褐色土　しまり弱
26(SD001)　暗褐色土　褐色土ブロック少混、しまりやや弱
27(SD001)　暗褐色土　25・26 と比べ若干黄色味を帯びる、ローム粒少混、しまりやや弱
28(SD001)　黒褐色土　ローム粒少混、しまりやや弱
29(SD001)　暗褐色土　ロームブロックやや多混、しまりやや弱



第 229 図　(21)SX001 土塁、(21)SD001 ～ 004 溝状遺構（２）、出土遺物

出土遺物（第229図、図版108・111）

１は縄文土坑の(21)SK002に混入していた転用砥石で、瀬戸・美濃の擂鉢片の断面を砥石として使用している。近世の所産であろう。２は(21)SX001のCC′トレンチから出土した鞴羽口で、下端の一部が遺存し、表面には発泡滓が付着する。３は土製円盤で、碁石の可能性も考えられる。表面には製作時の指紋が見られる。近世の所産であろう。

（３）(3)南側・(8)調査区

南側台地の中央部に当たり、21次調査区に隣接する。溝状遺構４条が検出されている。

(3)SD206・207（第230図、図版23）

(3)SD206は３次調査区南部を東西方向に延びる溝状遺構で、検出部分の総延長約39m、幅約4.2m～5.0m、深さ約0.6m～0.7mである。溝底はほぼ平坦で、２か所で小ピットが見られる。断面は箱形を呈する。常滑片口鉢片を再利用した砥石が出土しているが、時期を特定することはできない。(3)SD207は調査区東部を南北に走る溝で、検出部分の総延長約32m、幅約2.0m～3.3mである。深さや断面形状はトレンチを設定していないため不明である。近世の陶器が出土している。両者の新旧関係は不明である。また(3)SD207の北側には(21)調査区の土塁が位置するが、当遺構と関係は不明である。

(8)SD001・002（第231図）

８次調査区は三角形を呈する狭い調査区であるが、(8)SD001はその中央部を南北方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約19.5m、深さ約0.6m～0.8mである。溝底は丸みを帯び、断面はU字形を呈する。調査前の地形では北側の谷津に向かうように開削されたような痕跡が認められ、道路もしくは水路であった可能性がある。(8)SD002はN37－13グリッド付近を東西方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約2.0m、深さ約0.2mである。両者は重複するが、新旧関係は不明である。両遺構とも遺物は出土していない。

出土遺物（第232図、図版109・111・112）

１は(3)SD207出土の志野丸皿で、底部外面には墨書が見られる。２は香炉の脚部、３は瀬戸擂鉢胴部片である。４は土器擂鉢の口縁部片で、片口が作られる。15世紀代のものであろう。５は土器の口縁部片で、焙烙であろうか。近世の所産である。６は常滑片口鉢の口縁部片、７は土器擂鉢の胴部片である。共に15世紀代のものであろう。８は転用砥石で、常滑片口鉢底部片を砥石に転用している。片口鉢自体は中世のものだが、砥石として利用した時期は不明である。10・11は砥石である。11は自然石の全面が磨かれている。12・13は陶器片を利用した円盤で、擂鉢胴部片の周縁を打ち欠き成型している。近世の所産であろう。14は土製の球で45％程遺存する。近世の所産と思われる。15（第252図２）は寛永通寶で、新寛永である。

（４）(16)・(17)・(29)調査区

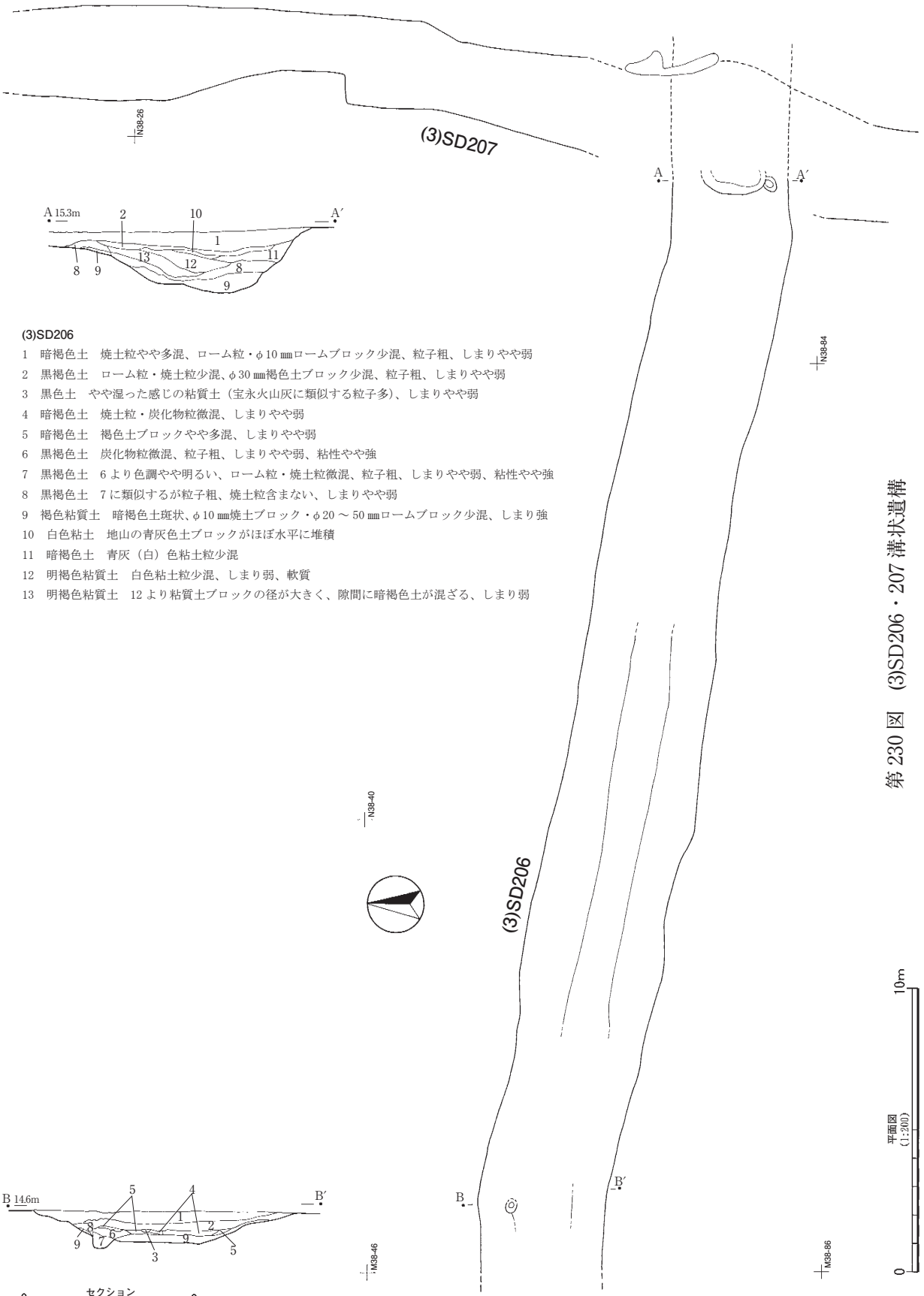
南側台地のその他の調査区をまとめて報告する。

(16)SD001（第231図）

調査区西側のトレンチ内を南北に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約16m、深さ約0.3mである。断面はV字形で、底面はやや凹凸が見られる。南端部には交差する別の溝が検出されているが、トレンチ調査のみで範囲が狭いため詳細は不明である。時期を特定できる遺物は出土していない。

(17)SD001・002（第231図）

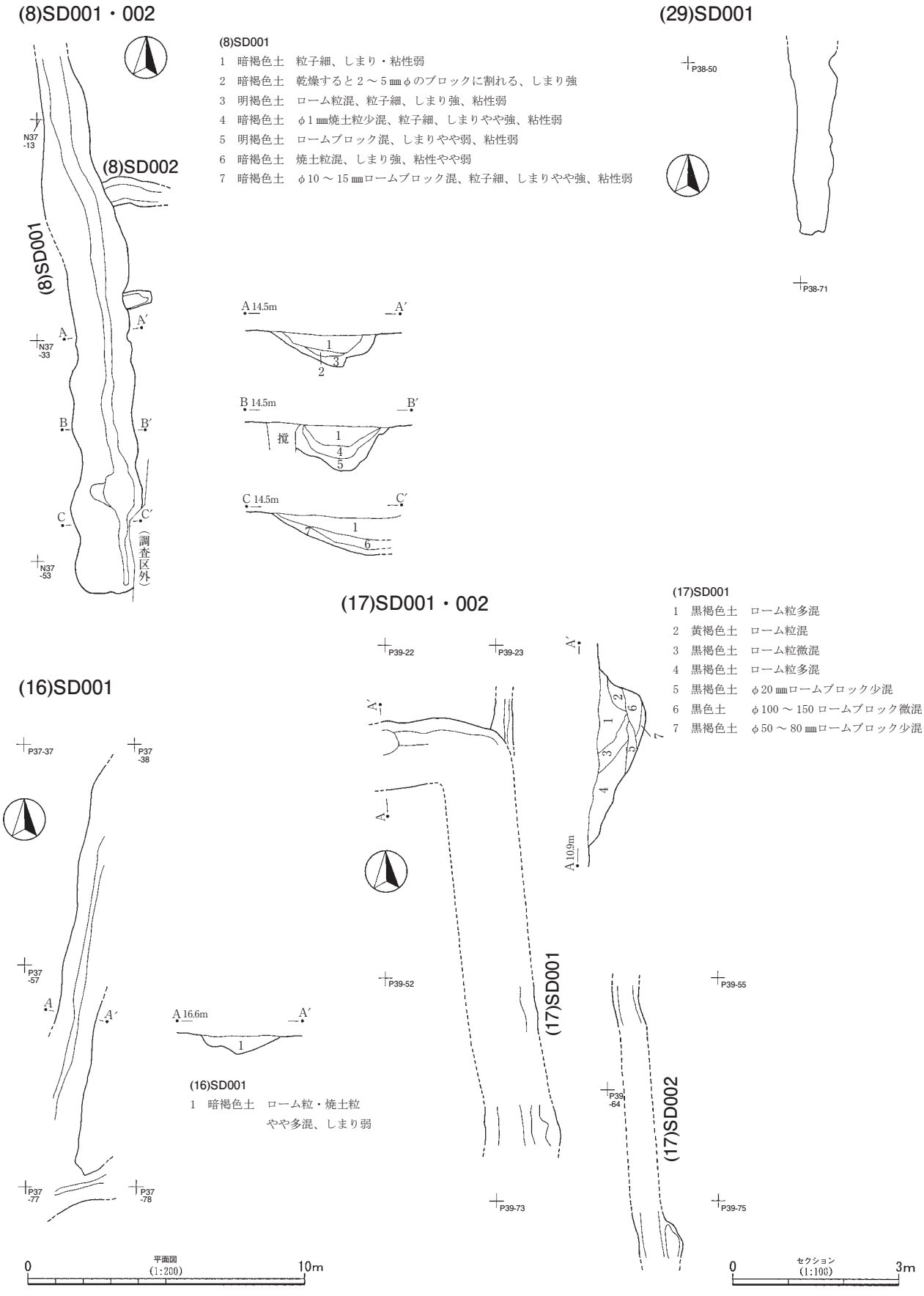
(17)SD001は調査区内を南北方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約17m、深さ約0.8mである。北



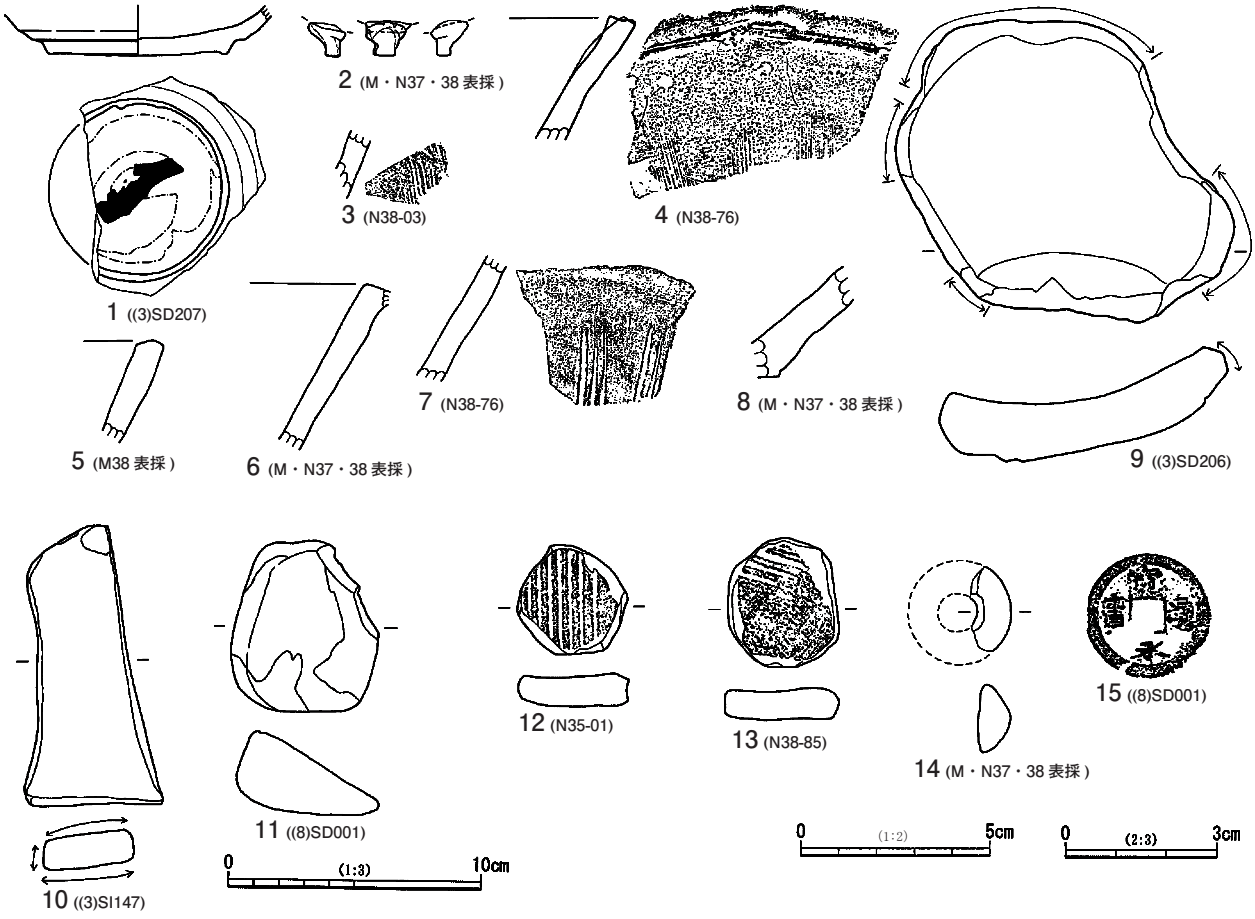
(3)SD206

1　暗褐色土　焼土粒やや多混、ローム粒・φ10㎜ロームブロック少混、粒子粗、しまりやや弱
2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒少混、φ30㎜褐色土ブロック少混、粒子粗、しまりやや弱
3　黒色土　やや湿った感じの粘質土（宝永火山灰に類似する粒子多）、しまりやや弱
4　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒微混、しまりやや弱
5　暗褐色土　褐色土ブロックやや多混、しまりやや弱
6　黒褐色土　炭化物粒微混、粒子粗、しまりやや弱、粘性やや強
7　黒褐色土　6より色調やや明るい、ローム粒・焼土粒微混、粒子粗、しまりやや弱、粘性やや強
8　黒褐色土　7に類似するが粒子粗、焼土粒含まない、しまりやや弱
9　褐色粘質土　暗褐色土斑状、φ10㎜焼土ブロック・φ20～50㎜ロームブロック少混、しまり強
10　白色粘土　地山の青灰色土ブロックがほぼ水平に堆積
11　暗褐色土　青灰（白）色粘土粒少混
12　明褐色粘質土　白色粘土粒少混、しまり弱、軟質
13　明褐色粘質土　12より粘質土ブロックの径が大きく、隙間に暗褐色土が混ざる、しまり弱

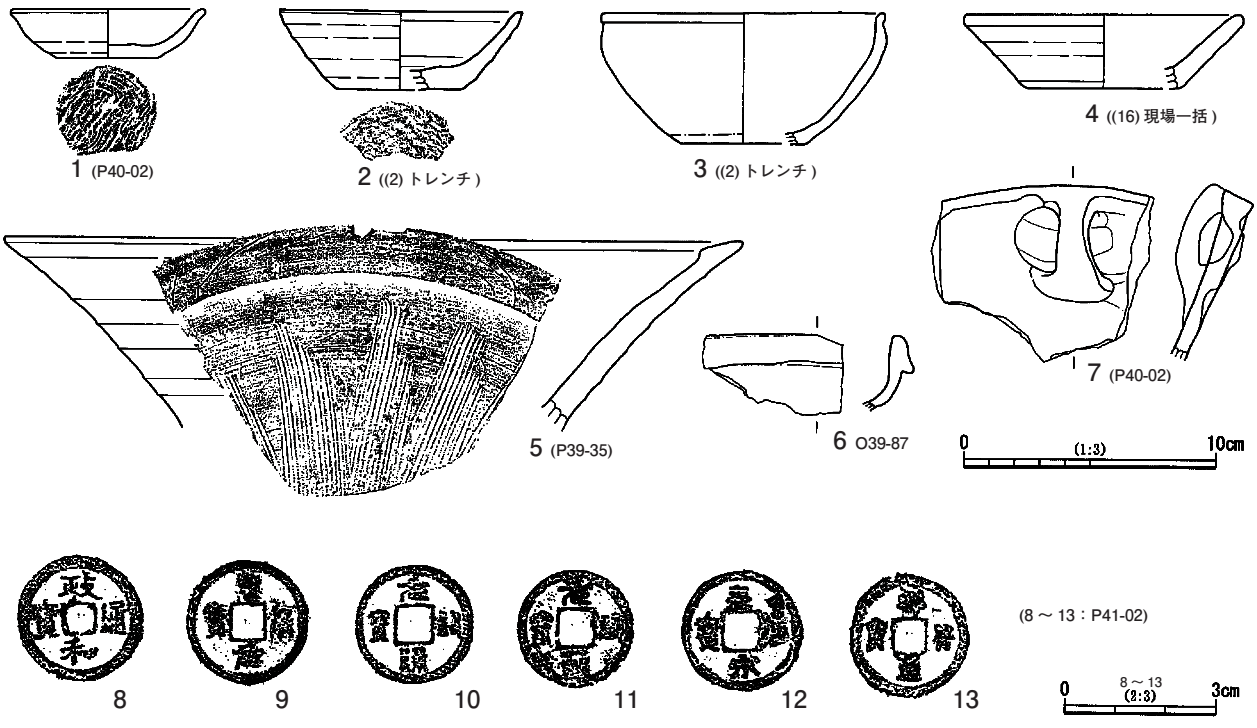
第230図　(3)SD206・207溝状遺構



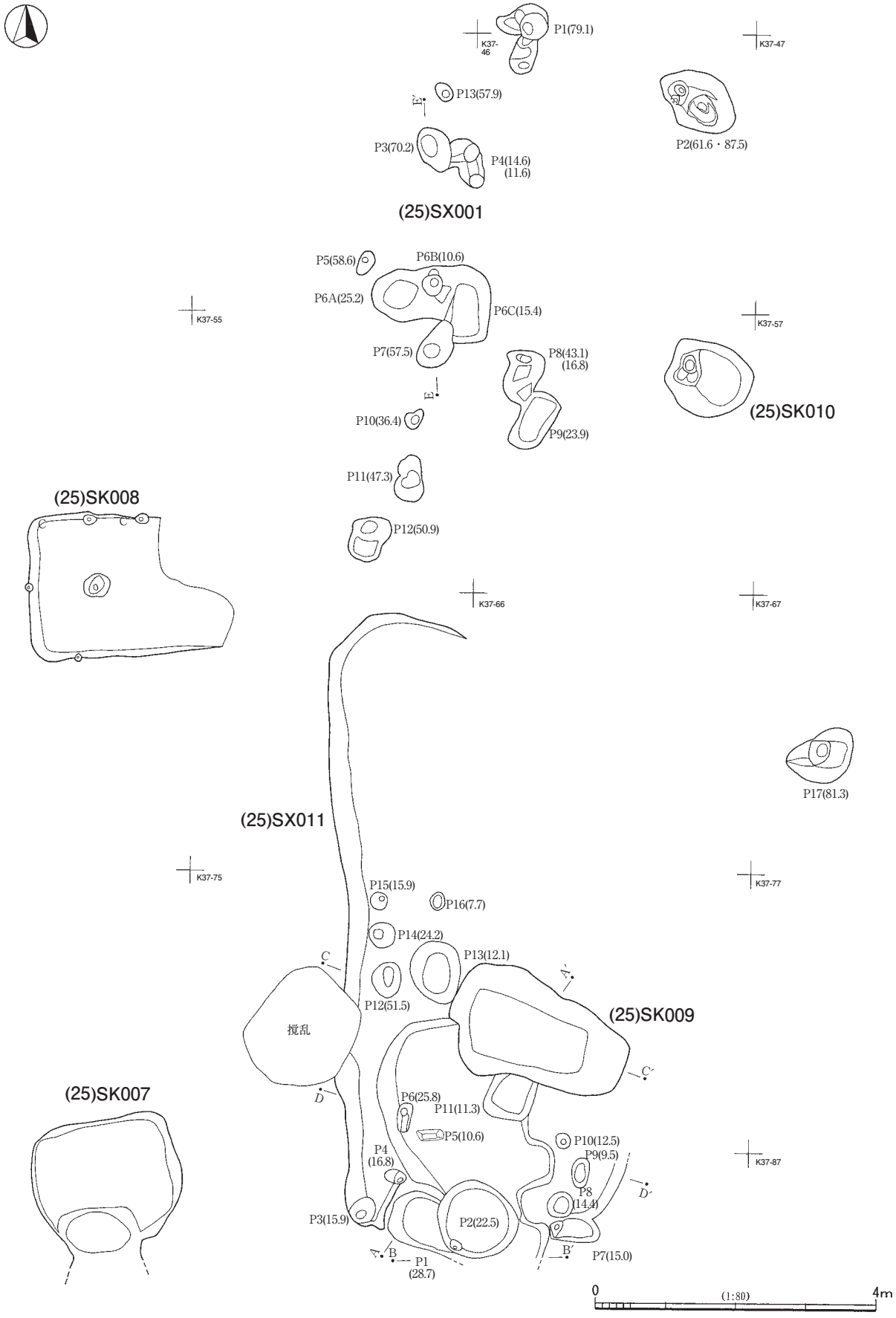
第 231 図　(8)SD001・002、(16)SD001、(17)SD001・002、(29)SD001 溝状遺構



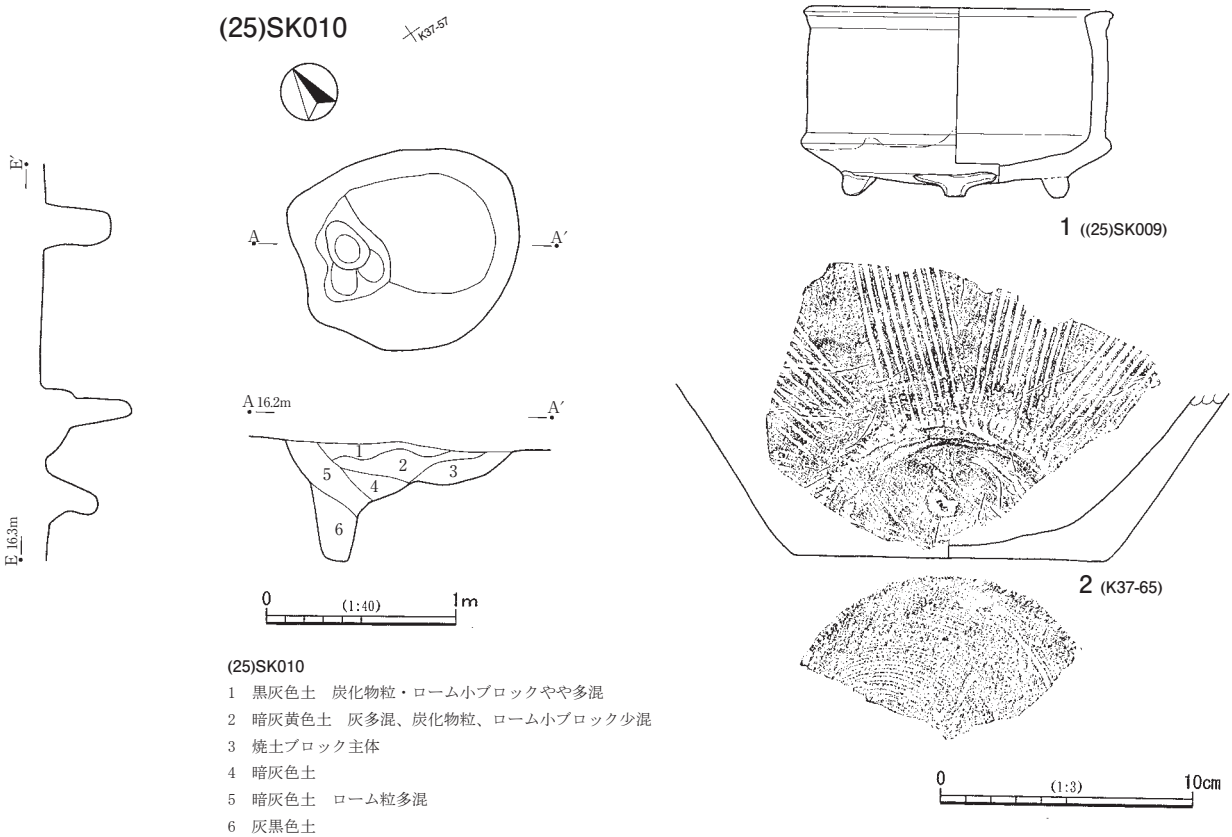
第 232 図　(3)(8) 調査区出土中・近世遺物



第 233 図　(3)(8)(12)(21) 以外の南側調査区出土中・近世遺物

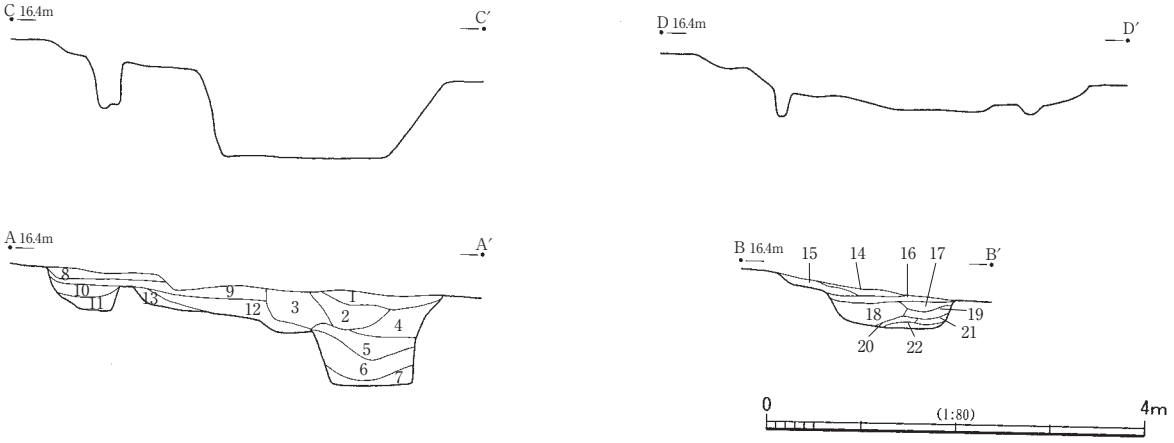


第 234 図　(25)SX001 柱穴群、(25)SX011 台地整形、(25)SK009 土坑（１）



(25)SK010

1　黒灰色土　炭化物粒・ローム小ブロックやや多混
2　暗灰黄色土　灰多混、炭化物粒、ローム小ブロック少混
3　焼土ブロック主体
4　暗灰色土
5　暗灰色土　ローム粒多混
6　灰黒色土



(25)SK009・SX011

1(SK009)　灰黒色土
2(SK009)　灰黒色土　ローム粒・ロームブロック混
3(SK009)　暗灰褐色土　ローム粒、ロームブロック混、しまり弱
4(SK009)　暗灰褐色土　ローム粒・ロームブロック混、しまり強
5(SK009)　明灰褐色土　ロームブロック多混
6(SK009)　暗褐色土
7(SK009)　暗褐色土　灰白色粘土ブロック少混
8　灰褐色土　硬質
9　暗褐色土　硬質
10　灰黒色土
11　灰黒色土　ロームブロック多混
12　暗灰色土
13　黒灰色土
14　暗灰褐色土　ロームブロック混、硬質
15　暗灰色土　硬化層
16　暗褐色土　ロームブロック多混、硬質
17　明灰褐色土　ロームブロック多混、硬質
18　褐色土　ロームブロック、灰白色粘土粒混
19　灰白色粘土ブロック
20　暗灰色土　灰白色粘土粒混
21　暗灰色土

第 235 図　(25)SX001 柱穴群、(25)SX011 台地整形、(25)SK009 土坑（２）、出土遺物、(25)SK010 土坑

側は西に向かって90度屈曲し、幅約0.8mの細い溝がそこから分岐して北へ延びる。断面はU字形を呈する。(17)SD002は(17)SD001の東側約2.5mの位置を南北方向に走る溝状遺構で、検出部分の総延長約10m、深さ約0.2m～0.3mである。検出範囲を見る限る両者は平行しており、一体のものである可能性がある。また(17)SD002の南方には(12)SD003Aが存在するが、繋がっているかは不明である。両者とも時期を特定できる遺物は出土していない。

(29)SD001（第231図）

P38-51・61グリッド付近を南北に走る溝状遺構である。検出部分の総延長約7.0m、幅約1.5mであるが、遺存状態は悪く範囲を確定できただけである。時期を特定できる遺物は出土していない。

出土遺物（第233図、図版109・110・112）

１・２・４はかわらけである。１は小ぶりのもので、近世の所産であろう。２・４は16世紀代のものと思われる。３は瀬戸天目茶碗で、16世紀後半のものであろう。５・６は瀬戸・美濃の擂鉢で、共に内外面に鉄釉が施される。近世の所産である。７は内耳土器で、鍋形になるものと思われる。胎土には雲母が含まれ、筑波山周辺で製作されたものであろうか。15世紀後半の所産であろう。８～15（第252図３～８）は銭貨ですべて北宋銭である。これらは同じP41-02グリッドから吸着した状態で出土しており、本遺跡出土の他の銭貨が近世銭なのに対し、この一群だけが北宋銭で組成されることから六道銭であった可能性が強く、土坑墓が存在したものと考えられる。

２　西側調査区の遺構群

（１）(25)調査区東側

遺跡地中央の小さい谷津の頭に位置する。台地整形区画とそれに伴う土坑・ピット群、方形竪穴状遺構１基、地下式坑１基が検出された。

(25)SX011（第234・235図）

調査区南部に位置する台地整形区画であるが、南側は調査区境となるため完掘できなかった。規模は南北約9.2m、東西約4.4mである。整形された区画内には土坑やピットが存在するが、明確な規則性はみいだせない。南端部の長方形土坑の覆土には粘土が含まれており、粘土貼り土坑であった可能性が強いが、平面図には粘土の範囲が記録されていないため断定できない。

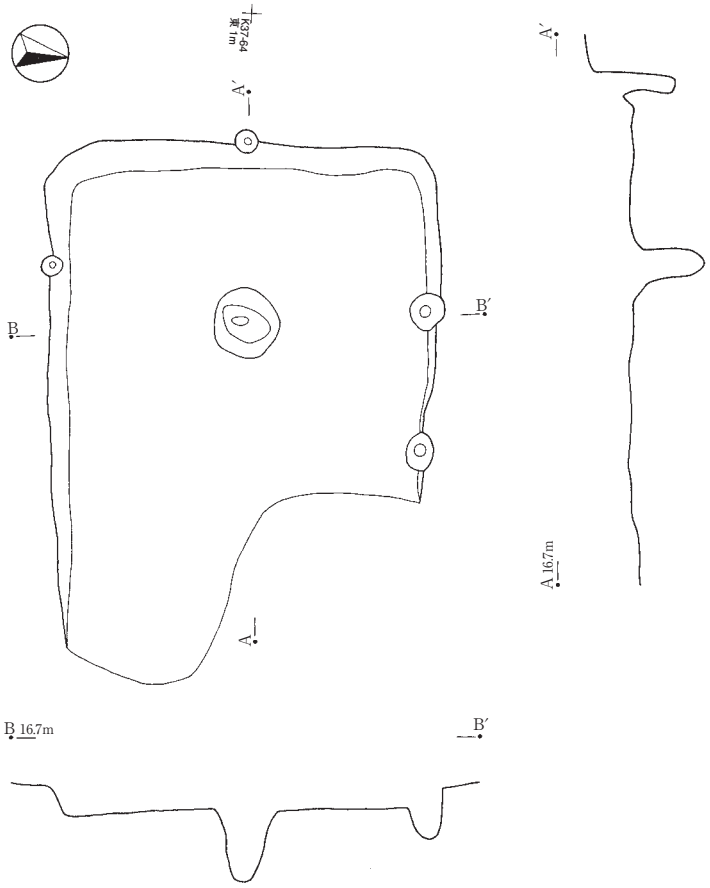
(25)SK007（第234・236図）

調査区南西部に位置する地下式坑であるが、南側は調査区境となるため完掘できなかった。主軸長は検出範囲で210㎝、横軸長は212㎝、深さは最深で112㎝を測る。竪坑の平面は円形で、竪坑底面は地下室床面より下る。地下室の平面は横長の長方形である。土層観察では竪坑からの流れ込みが確認でき、廃絶後しばらく竪坑が開口した状態であった後、天井部が崩落したものと思われる。時期を特定できる遺物は出土していない。

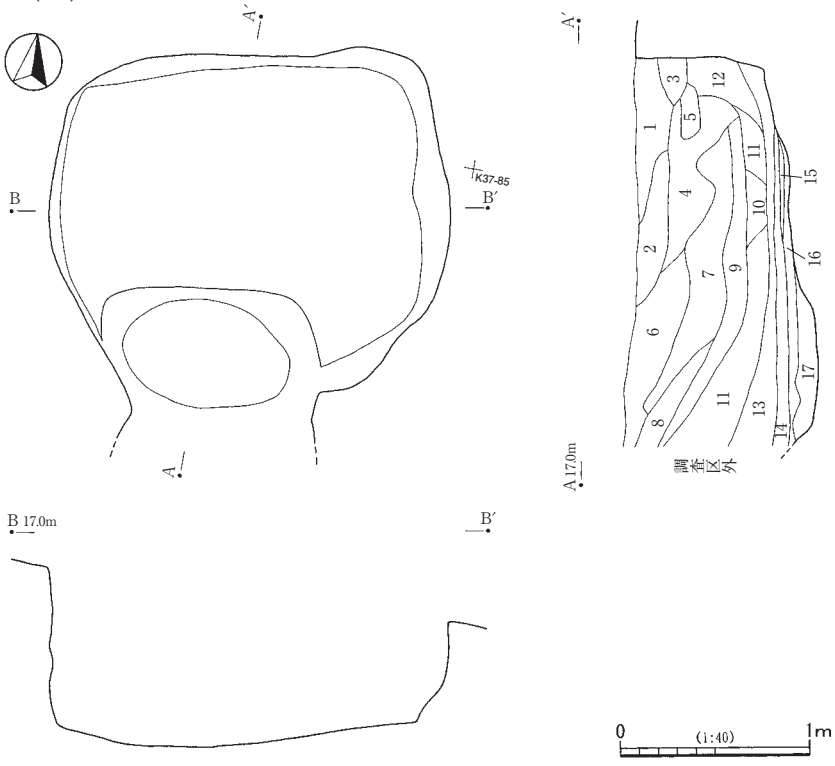
(25)SK008（第234・236図）

遺構群の西部に位置する方形竪穴遺構である。遺構の東側は地山が傾斜しており床面が流出しているが、平面は長方形を呈するものと思われる。東西残存長288㎝、南北長208㎝、深さ最深で25㎝を測る。底面はやや凹凸が見られる。中央および壁に５か所のピットが見られ、中央のものの規模が大きい。時期を特定できる遺物は出土していない。

(25)SK008



(25)SK007



(25)SK007

1　灰褐色土　ロームブロックやや多混
2　黒色土
3　黒色土　ローム粒・ロームブロック少混
4　明灰褐色土　ローム粒多混
5　灰褐色土　ローム粒やや多混
6　明灰褐色土　ローム粒主体、天井崩落土
7　暗灰色土
8　灰黒褐色土
9　暗灰黄色土　ローム粒主体
10　褐色土
11　褐色土　しまり極めて弱
12　黒灰色土
13　暗褐色土
14　明褐色土　白色粘土粒少混、緻密に硬くしまっている、貼床状
15　黒灰色土　緻密に硬くしまっている、貼床状
16　暗灰褐色土　白色粘土粒少混、緻密に硬くしまっている、貼床状

第 236 図　(25)SK007 地下式坑、(25)SK008 方形竪穴遺構

(25)SK009（第234・235図）

台地区画整形(25)SX011内に位置する土坑である。長軸長260㎝、短軸長164㎝、深さは最深で95㎝を測る。平面は長方形を呈し、底面はほぼ平坦である。土層観察では(25)SX011より新しいものと思われる。近世の香炉が出土している。

(25)SX001・SK010（第234・235図）

(25)SX001は調査区北側に所在するピット群である。南北方向に連なるピットが検出されたが、建物に組むことはできなかった。柵列の可能性も考えられる。径は30㎝～50㎝で、ピット間の距離は30㎝～100㎝程と一定ではない。(25)SK010は(25)SX001の南東側に位置しており、独立した遺構番号が付されているもののピット群と一体のものである可能性が強いと考えた。平面は楕円形で東西長127㎝、南北長105㎝を測る。西端にピットが見られるが、土層観察から先にピットが構築され、後から皿状の土坑が構築された可能性が考えられる。深さはピット部が62㎝、皿状の部分が20㎝～30㎝である。

出土遺物（第235図、図版109）

１は(25)SK009出土の瀬戸・美濃の香炉である。２は瀬戸・美濃の擂鉢で、内面はよく使用されている。共に近世の所産である。

（２）(25)西側・(30)・(34)・(24)調査区

西側台地中央部に位置する。地下式坑２基、土坑18基、溝状遺構６条などが検出されている。このうち溝２条については25次と30次をまたいでいるが、同一の遺構であるためまとめて報告する。また、(30)SD003については34次調査区で検出された溝状遺構と同一である可能性が強いため、合わせて報告する。

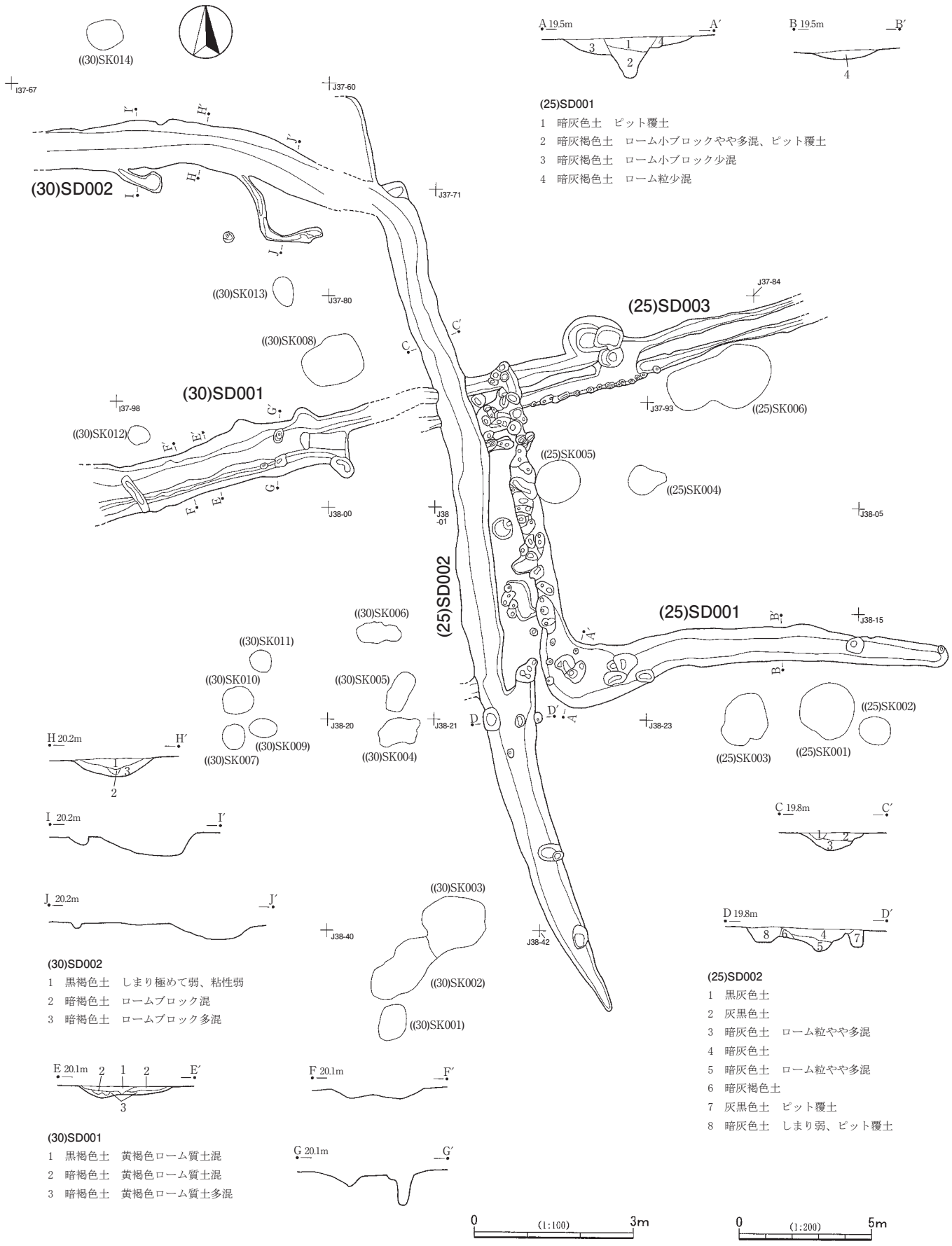
(25)SD001～003、(30)SD001・002（第237図、図版24）

(25)SD001は調査区東部から西に向かって延びる溝状遺構で、J38-12グリッド付近で北に90度屈曲し、(25)SD003と重複するまで延びる。総延長約26ｍ、幅約0.8ｍ～3.0ｍ、深さ最深で約0.3ｍである。(25)SD003との新旧関係は不明である。断面皿状で、南北に走る部分では多くのピットが見られるが、土層観察から溝とは時期差があるピットもある。時期を特定できる遺物は出土していない。(25)SD002は調査区中央部を南北に縦断する溝状遺構で、J37-70グリッド付近で西側へ向きを変えて、(30)SD002として続く。両者を合わせた総延長約44ｍ、幅約0.5ｍ～2.0ｍ、深さ最深で約0.4ｍである。(25)SD003と重複するが、新旧関係は不明である。溝の断面はＵ字形で、溝底はほぼ平坦だが南側ではピットが見られる。時期を特定できる遺物は出土していない。(25)SD003は調査区中央部を東西に走る溝状遺構で、平行する２本の溝により構成されている。(25)SD002と交差して更に西へ延び(30)SD001として続いており、両者合わせて総延長約28ｍ、幅約1.2ｍ～2.2ｍ、深さは最深で約0.4ｍである。(25)SD001・002と重複するが、新旧関係は不明である。J37－90グリッド付近のみ南側の溝が確認できない。断面皿状で溝底はやや凹凸が見られる。J37-82グリッド付近では柵列状の小ピットが多数検出されている。近世の瀬戸香炉が出土している。

(25)SK001（第238図）

調査区南東部、(25)SD001の南側に位置する地下式坑である。主軸長215㎝、横軸長210㎝、深さ120㎝を測る。竪坑の平面形は円形で、地下室床面とは60㎝の段が作られる。地下室の平面は横長の長方形である。東西北壁に沿って浅い周溝が掘り込まれる。土層観察から竪坑からの土の流入がほとんど認められず、廃絶後時間を置かずに天井部が崩落したものと思われる。

(25)SK003（第238図）



(25)SD001
1 暗灰色土　ピット覆土
2 暗灰褐色土　ローム小ブロックやや多混、ピット覆土
3 暗灰褐色土　ローム小ブロック少混
4 暗灰褐色土　ローム粒少混

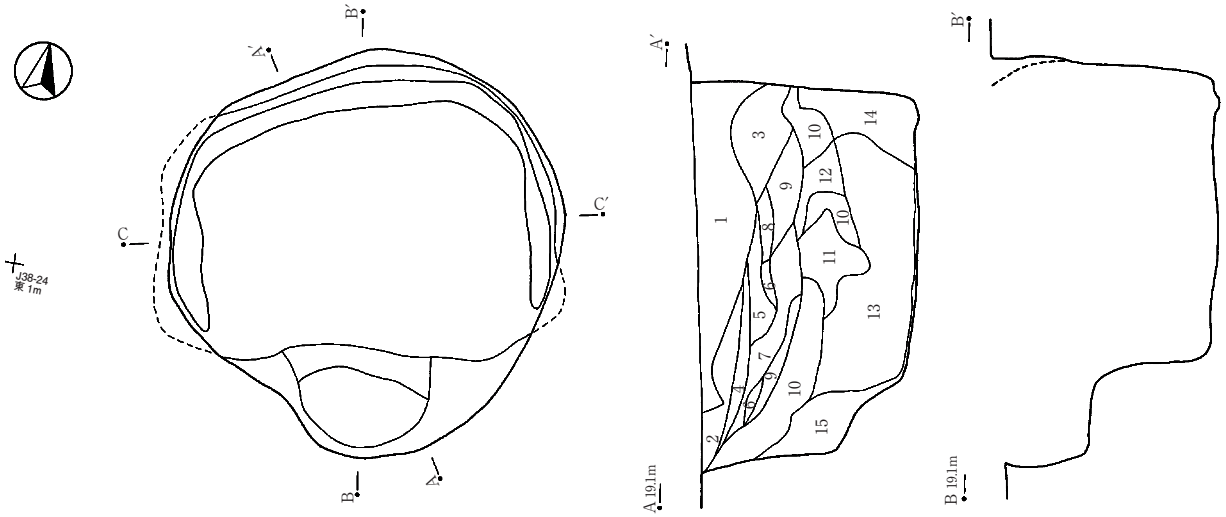
(30)SD002
1 黒褐色土　しまり極めて弱、粘性弱
2 暗褐色土　ロームブロック混
3 暗褐色土　ロームブロック多混

(30)SD001
1 黒褐色土　黄褐色ローム質土混
2 暗褐色土　黄褐色ローム質土混
3 暗褐色土　黄褐色ローム質土多混

(25)SD002
1 黒灰色土
2 灰黒色土
3 暗灰色土　ローム粒やや多混
4 暗灰色土
5 暗灰色土　ローム粒やや多混
6 暗灰褐色土
7 灰黒色土　ピット覆土
8 暗灰色土　しまり弱、ピット覆土

第 237 図　(25)SD001 ～ 003、(30)SD001・002 溝状遺構

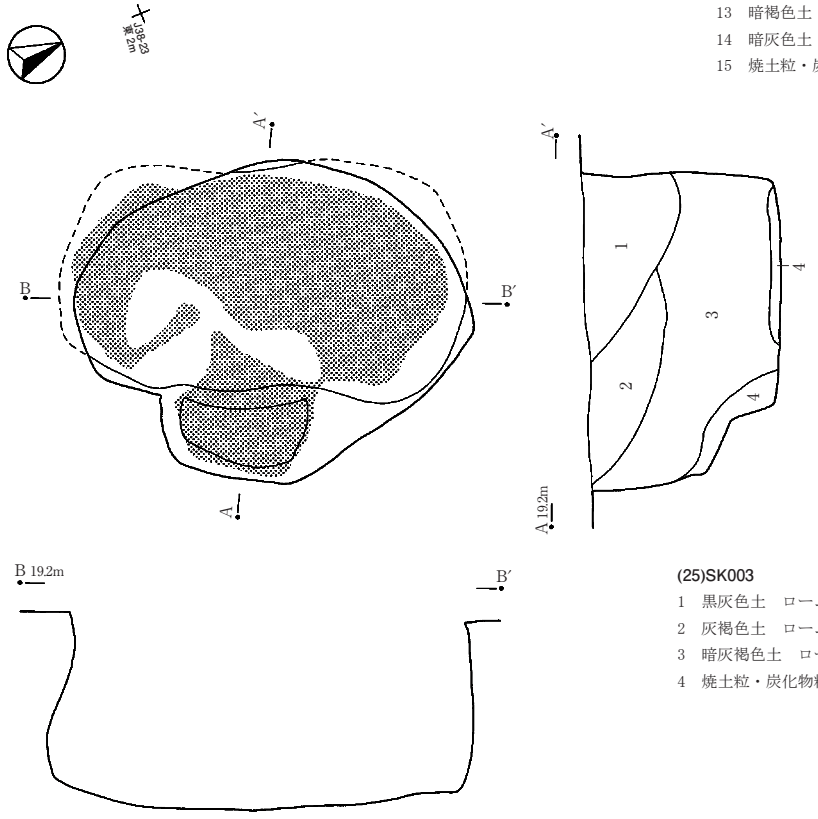
(25)SK001



(25)SK001

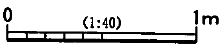
1　黒灰色土
2　ローム粒主体
3　黒灰色土　ロームブロック多混
4　暗灰褐色土　ローム粒やや多混
5　黒灰色土
6　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック主体
7　黒灰色土　ローム粒少混
8　黒色土
9　暗灰褐色土
10　暗褐色土
11　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック主体
12　暗灰褐色土　ロームブロック多混
13　暗褐色土　10 よりしまり強
14　暗灰色土　しまり極めて弱
15　焼土粒・炭化物粒主体

(25)SK003



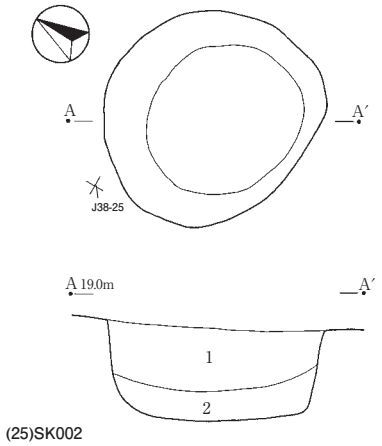
(25)SK003

1　黒灰色土　ローム小ブロック少混
2　灰褐色土　ローム粒主体
3　暗灰褐色土　ローム粒主体、しまり極めて弱
4　焼土粒・炭化物粒主体



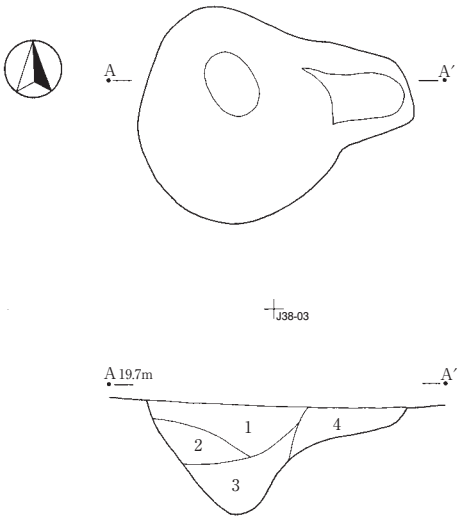
第 238 図　(25)SK001・003 地下式坑

(25)SK002



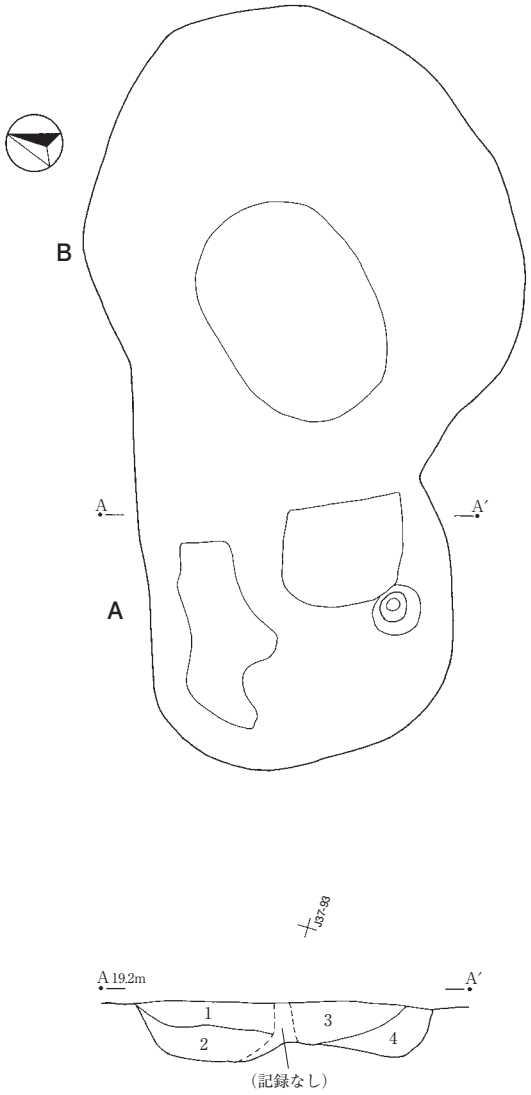
(25)SK002
1　暗灰色土　しまり強
2　暗灰色土　しまり弱

(25)SK004

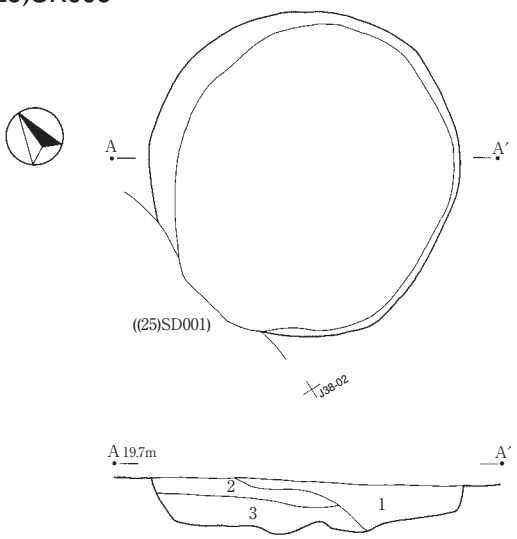


(25)SK004
1　灰黒色土　ローム粒・ローム小ブロックやや多混
2　灰黒色土　ローム粒やや多混
3　灰黒色土
4　暗灰色土　ローム粒やや多混

(25)SK006A・B

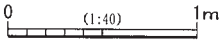


(25)SK005



(25)SK005
1　暗灰色土　ローム小ブロックやや多混
2　ローム粒・ロームブロック主体
3　暗灰色土　ローム小ブロック微混

(25)SK006A・B
1　灰褐色土
2　暗灰褐色土　ローム粒やや多混
3　灰褐色土　ローム粒多混
4　暗灰褐色土

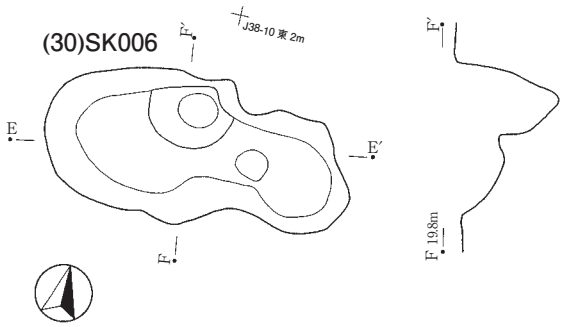


第 239 図　(25)SK002・004 ～ 006 土坑

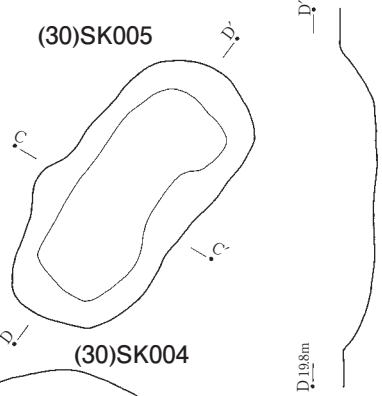
第 240 図　(30)SK001 ～ 003 土坑

(30)SK004 ～ 006

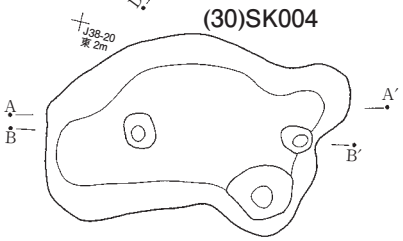
(30)SK006

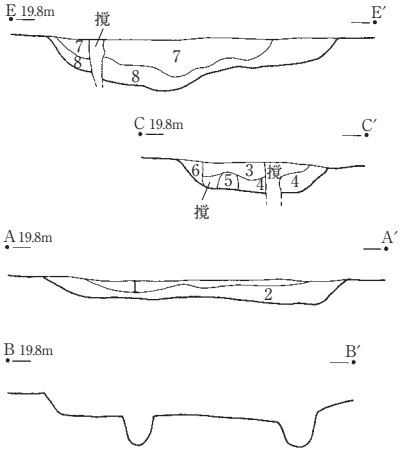


(30)SK005



(30)SK004

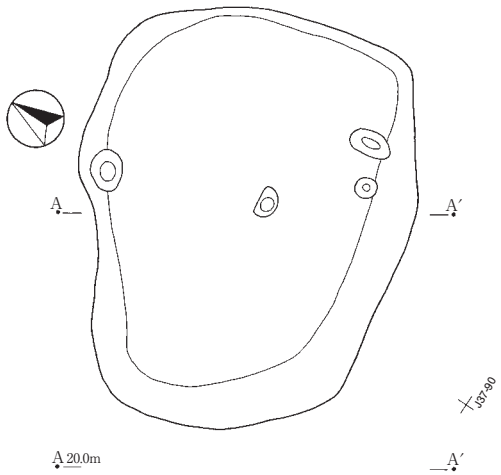




(30)SK004 ～ 006

1(SK004)　暗褐色土　赤褐色ローム質土混
2(SK004)　暗赤褐色土　黒褐色土混
3(SK005)　黒褐色土　黄褐色ローム質土混
4(SK005)　暗褐色土　黄褐色ローム質土混
5(SK005)　黄褐色ロームブロック
6(SK005)　黄褐色土　ロームブロック
7(SK006)　暗褐色土　黄褐色ローム質土混
8(SK006)　暗褐色土　ロームブロック混

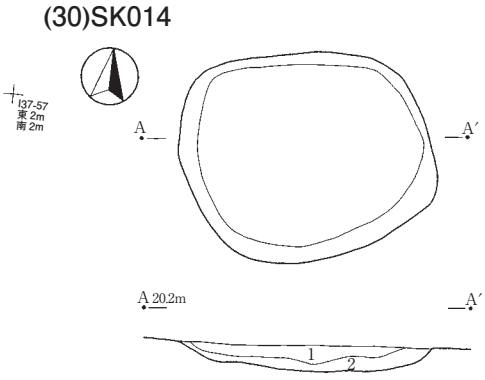
(30)SK008



(30)SK008

1　黒褐色土　黄褐色ローム質土少混
2　暗褐色土　粘性弱
3　暗黄褐色土　ローム質土、粘性強

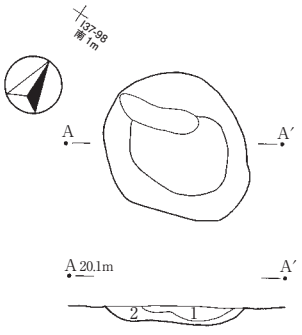
(30)SK014



(30)SK014

1　黒褐色土　ローム粒混
2　暗褐色土　ローム粒混、粘性強

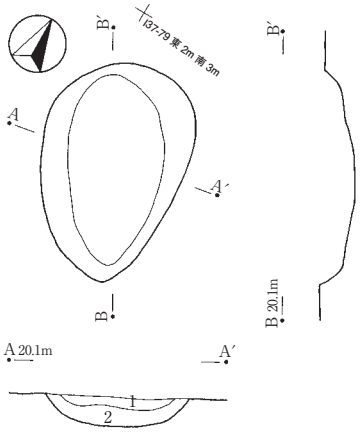
(30)SK012



(30)SK012

1　暗褐色土　ローム質土
2　暗黄褐色土　ローム質土

(30)SK013



(30)SK013

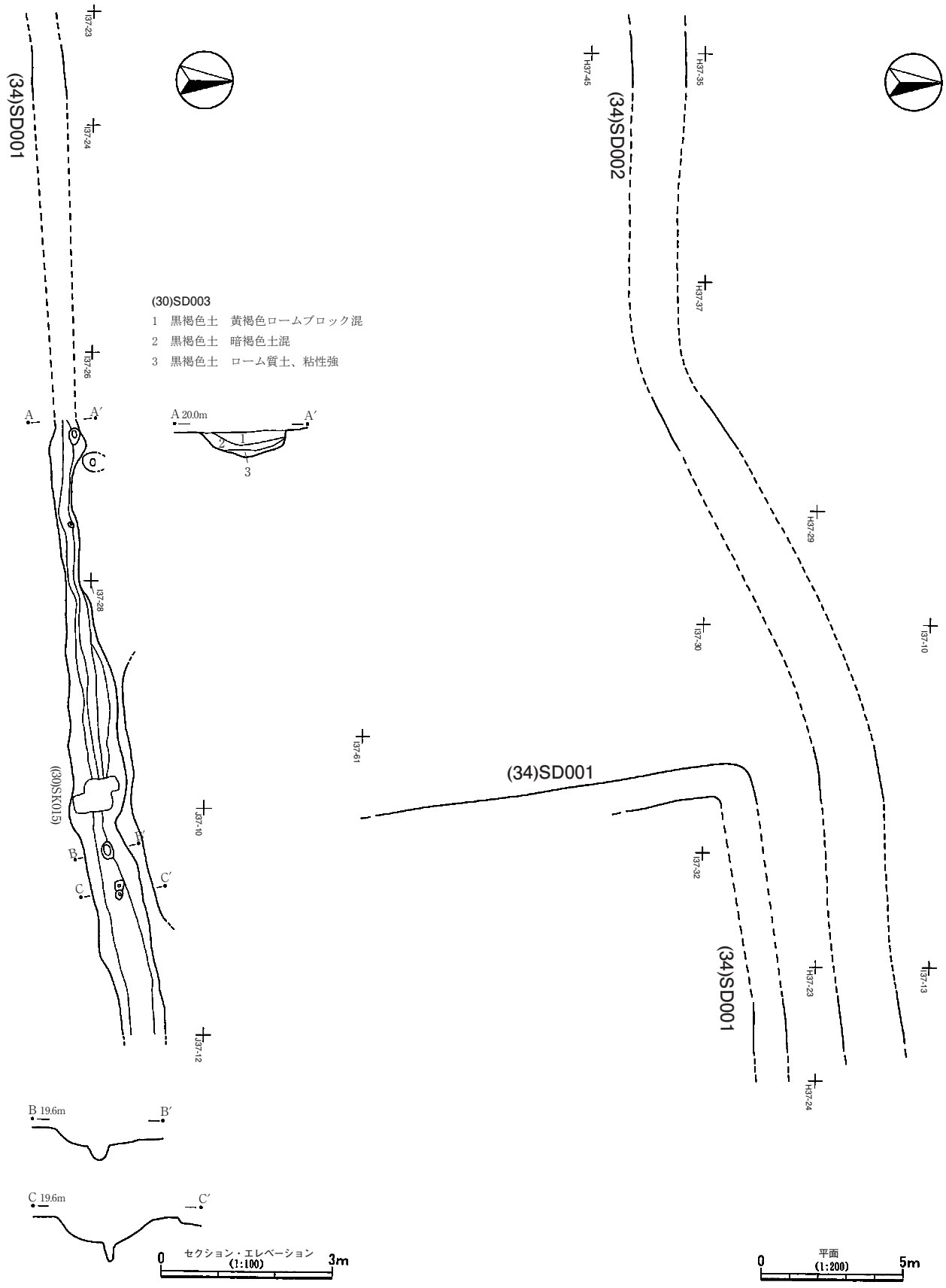
1　暗褐色土　黄褐色ローム粒混、しまり強
2　暗黄褐色土　ローム質土

0　(1:40)　1m

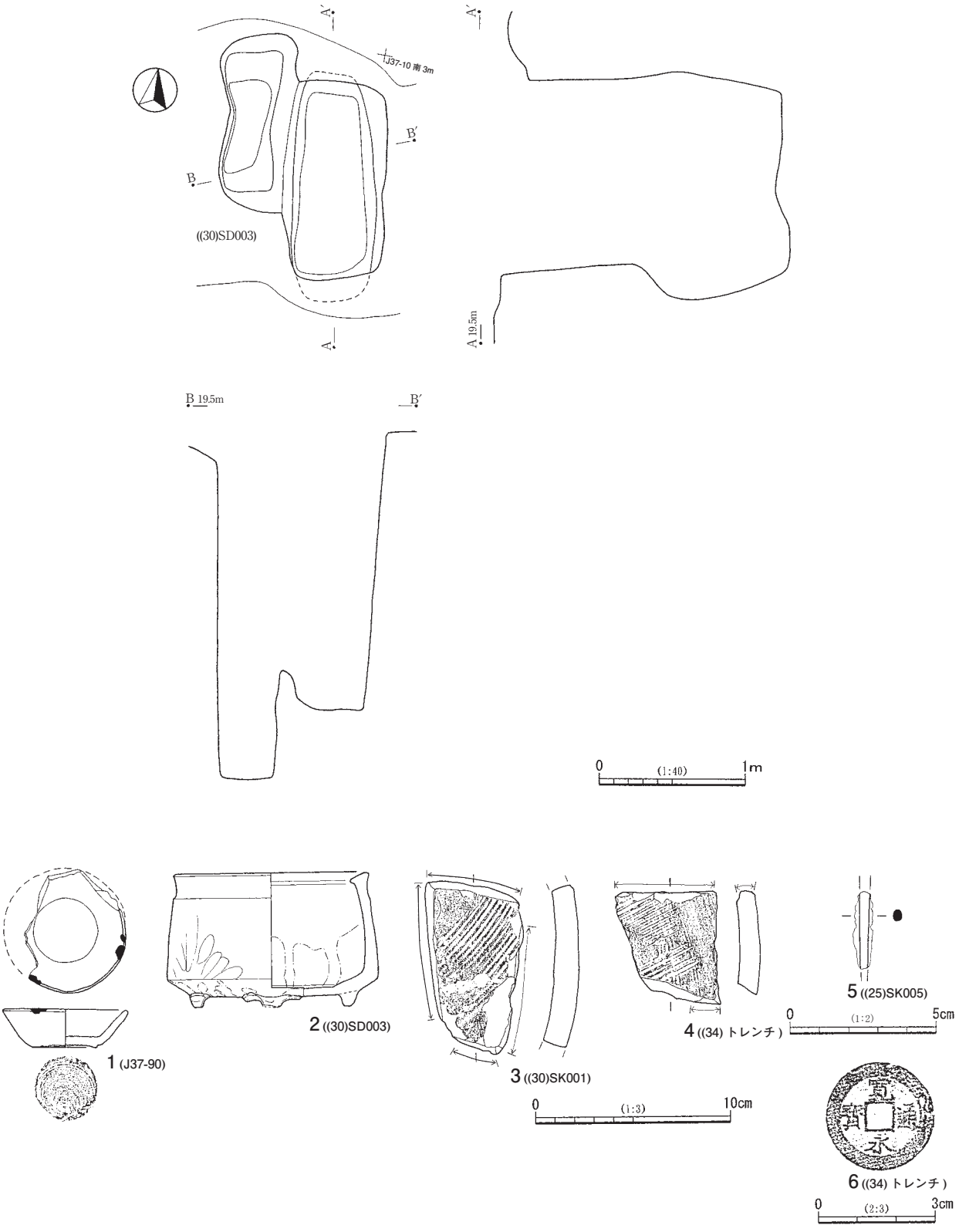
第 241 図　(30)SK004 ～ 006・008・012 ～ 014 土坑

(30)SD003+(34)SD001

(34)SD001・002



第 242 図　(30)SD003、(34)SD001・002 溝状遺構



第 243 図　(30)SK015 土坑、(25)(30) 調査区出土遺物

調査区南東部、(25)SD001の南側、(25)SK001の西側に位置する地下式坑である。主軸長170cm、横軸長210cm、深さ105cmを測る。竪坑の平面は方形で、地下室床面とは約60cmの段が作られる。地下室の平面は胴の張る横長の長方形である。最下層に炭化物と焼土が見られ、他の堆積土も自然堆積の状況を示していない。

(25)SK002（第239図）

調査区南東部、(25)SD001の南側、(25)SK001の東側に位置する土坑である。東西長118cm、南北長106cm、深さ48cmを測る。平面は楕円形で、断面は箱形である。

(25)SK004（第239図）

調査区中央部、(25)SD001の北側、(25)SD003の南側に位置する土坑である。不整形を呈し、東西長148cm、南北長115cm、深さ58cmを測る。２基の土坑の重複と考えられ、西側の円形で深さのある土坑が新しい。

(25)SK005（第239図）

調査区中央部に位置する土坑で、西側が(25)SD001に接する。平面は径170cmの円形で、深さは最深28cmである。皿状の断面で、底面は凹凸が見られる。鉄鏃の茎部が出土している。

(25)SK006（第239図）

調査区中央部、(25)SD003の南側に位置する。２基の土坑の重複で西側をＡ、東側をＢとする。Ａ・Ｂの新旧関係はつかめなかった。両者を合わせた長軸長は405cm、短軸長はAが160cm、Bが232cmである。(25)SK006Aは丸みを持った方形を呈するが、底面に段差が見られ、重複の可能性も考えられる。深さは最深48cmである。径30cm程のピットが穿たれる。(25)SK006Bは楕円形の平面形を呈する。深さは最深93cmである。

(30)SK001（第240図、図版23）

調査区南部、(25)SD002の西側に位置する土坑である。平面は隅丸の長方形で、断面は皿状を呈する。長軸長130cm、短軸長105cm、深さ15cmを測る。近世の瀬戸擂鉢を転用した砥石が出土している。

(30)SK002・003（第240図、図版23）

重複している２基の土坑をまとめて記述する。調査区南部、(25)SD002の西側に位置し、(30)SK001に近接する。(30)SK002の平面は楕円形を呈し、断面は皿状である。底面は凹凸が見られる。(30)SK003の平面は不整円形で、底面はほぼ平坦である。長軸長は両者合わせて532cm、短軸長と深さは(30)SK002が147cmと45cm、(30)SK003が210cmと39cmである。土層観察では(30)SK002の覆土上層と(30)SK003の覆土が同一とされており、両者の新旧関係は不明である。

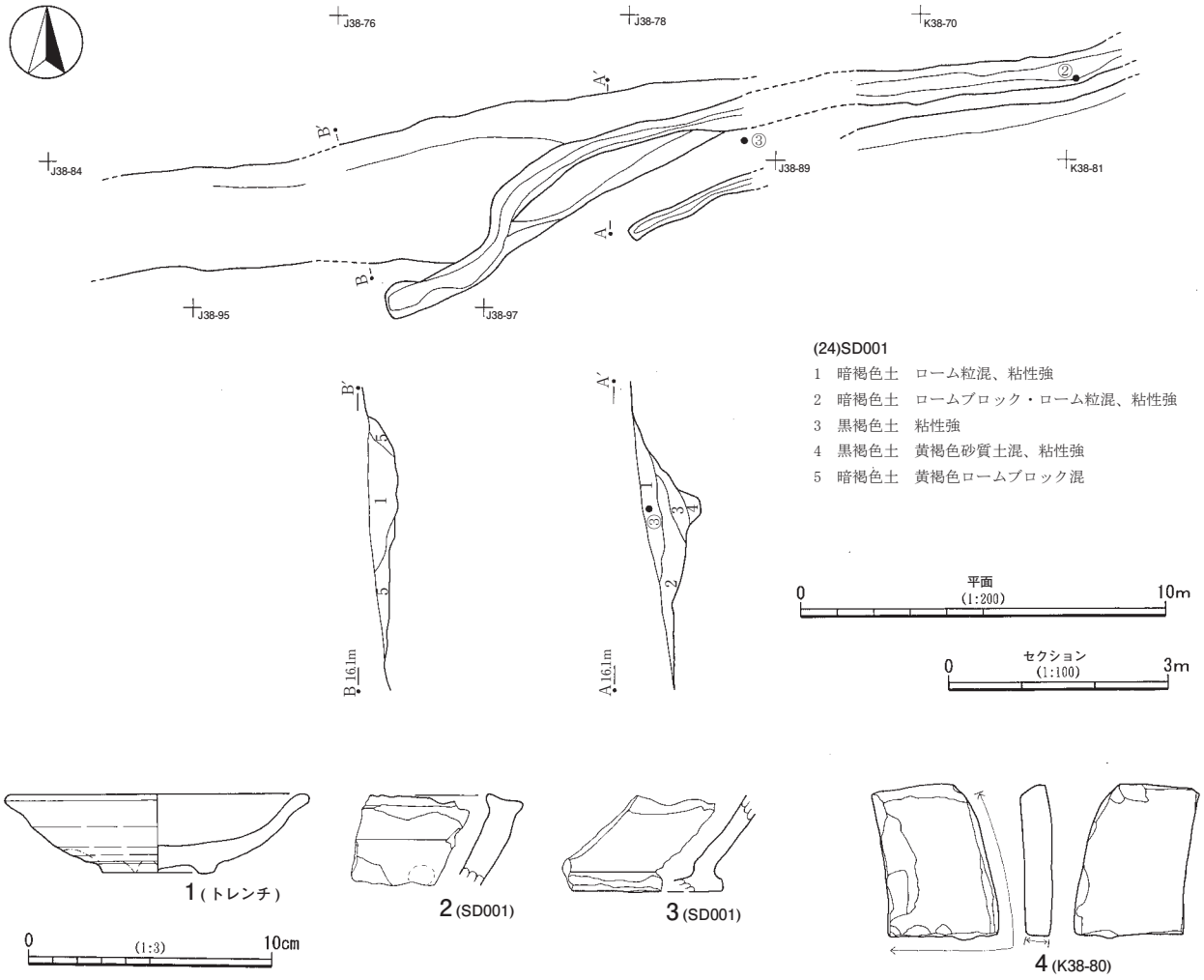
(30)SK004（第241図）

調査区中央部、(25)SD002の西側に位置する土坑である。長軸長160cm、短軸長110cm、深さ12cmを測る。平面は不整形を呈し、断面は椀形で底面は凹凸が見られる。底面には３か所ピットが存在するが、土坑とは時期差があるかも知れない。

(30)SK005（第241図）

調査区中央部、(25)SD002の西側に位置する土坑で、(30)SK004に近接する。長軸長160cm、短軸長80cm、深さ20cmを測る。平面は隅丸長方形である。断面は皿状で、底面はやや凹凸が見られる。

(30)SK006（第241図）



第 244 図　(24)SD001 溝状遺構、(24) 調査区出土遺物

調査区中央部、(25)SD002の西側に位置する土坑で、(30)SK005に近接する。平面は不整形で、長軸長168cm、短軸長80cmを測る。底面には２か所のピットが存在する。土坑とは重複している可能性もある。深さはピット部で56cmである。

(30)SK008（第241図、図版23）

調査区北西部、(25)SD002の西側、(30)SD001の北側に位置する土坑である。長軸長223cm、短軸長180cm、深さ15cmを測る。平面は不整長方形、断面は皿状である。底面に４基の小ピットが認められるが、これらが当遺構に伴うかは不明である。

(30)SK012（第241図）

調査区西部、(30)SD001の北側に位置する土坑である。東西長85cm、南北長75cm、深さ10cmを測る。平面は楕円形で、底面は段差が見られる。

(30)SK013（第241図）

調査区西部、(30)SD002の南側に位置する土坑で、(30)SK008に近接する。長軸長116cm、短軸長80cm、深さ20cmを測る。平面は楕円形で、断面皿状である。底面にはやや凹凸が見られる。

(30)SK014（第241図、図版23）

調査区北西部、(30)SD002の北側に位置する土坑である。東西長140㎝、南北長110㎝、深さ14㎝を測る。平面は隅丸長方形である。断面皿状で、底面にはやや凹凸が見られる。

(30)SD003、(34)SD001・002（第242図、図版24）

(30)SD003は30次調査区北部を東西に走る溝状遺構である。西側は(34)SD001につながるものと思われ、その場合総延長約54ｍの逆Ｌ字状になる。幅は約0.6ｍ～1.8ｍ、深さは約0.4ｍを測る。断面はＵ字形で、溝底はやや凹凸が見られる。溝中に(30)SK015が存在するが、新旧関係は不明である。また４か所でピットが確認された。(34)SD002は34次調査区北部を東西に走る溝で、I37-13グリッド付近では(34)SD001の北側約2.0ｍの位置を平行するように位置する。西側は屈曲せずそのまま西方へ延びており、検出部分の総延長約36ｍ、幅約1.6ｍ～2.2ｍである。掘削は行っていないため深さや断面形状は不明である。

(30)SK015（第243図、図版24）

調査区北部、(30)SD003溝状遺構の内部に位置する土坑である。溝との新旧関係は不明である。また当遺構は２基の土坑の重複と思われるが、掘込みが３ｍ近くあり、新旧関係等を明らかにする事はできなかった。共に平面は長方形を呈し、壁の一部はオーバーハングする。底面は凹凸が見られる。

(24)SD001（第244図、図版24）

西側台地遺構群の南端部を東西に延びる溝状遺構である。検出部分の総延長は約28ｍである。３条の溝が重複していると思われ、幅は最も細い南の溝が約0.5ｍ、中央から東側の溝が約1.0ｍ、西側の溝が約2.5ｍ～4.0ｍである。土層観察では同時に埋没していることが確認され、溝の作り替えが行われたと推測される。出土遺物として常滑片口鉢片２点を図化した。

出土遺物（第243・244図、図版109・110・111）

第243図１はかわらけで、燈明皿として使用されている。近世の所産である。２は(30)SD003出土の瀬戸・美濃の香炉で、体部に印花文が見られる。内外面に鉄釉が施される。近世の所産である。３・４は転用砥石で、擂鉢胴部片の断面を砥石として使用している。近世の所産であろう。５は(25)SK005出土の鉄鏃で茎部のみ遺存している。６（第253図９）は34次確認トレンチで出土した寛永通宝である。第244図１は陶器皿で、内外面に灰釉が施される。近世の所産である。２・３は(24)SD001出土の常滑の片口鉢で、共に中世の所産である。４は転用砥石で、常滑大甕の胴部片の断面を砥石として使用している。大甕自体は中世の所産だが、砥石として使用された時期は不明である。

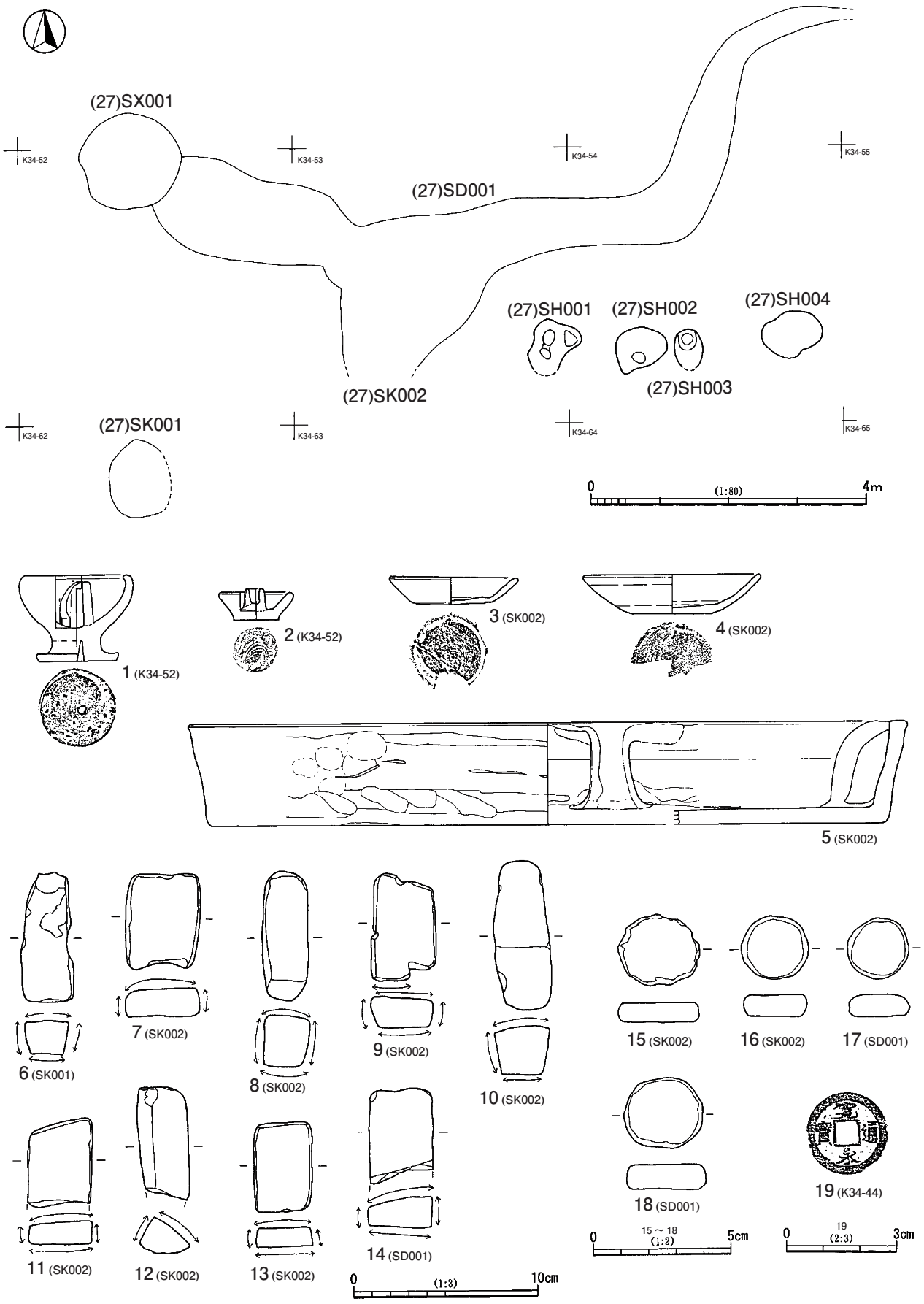
３　北側調査区の遺構

（１）(27)調査区（第245図）

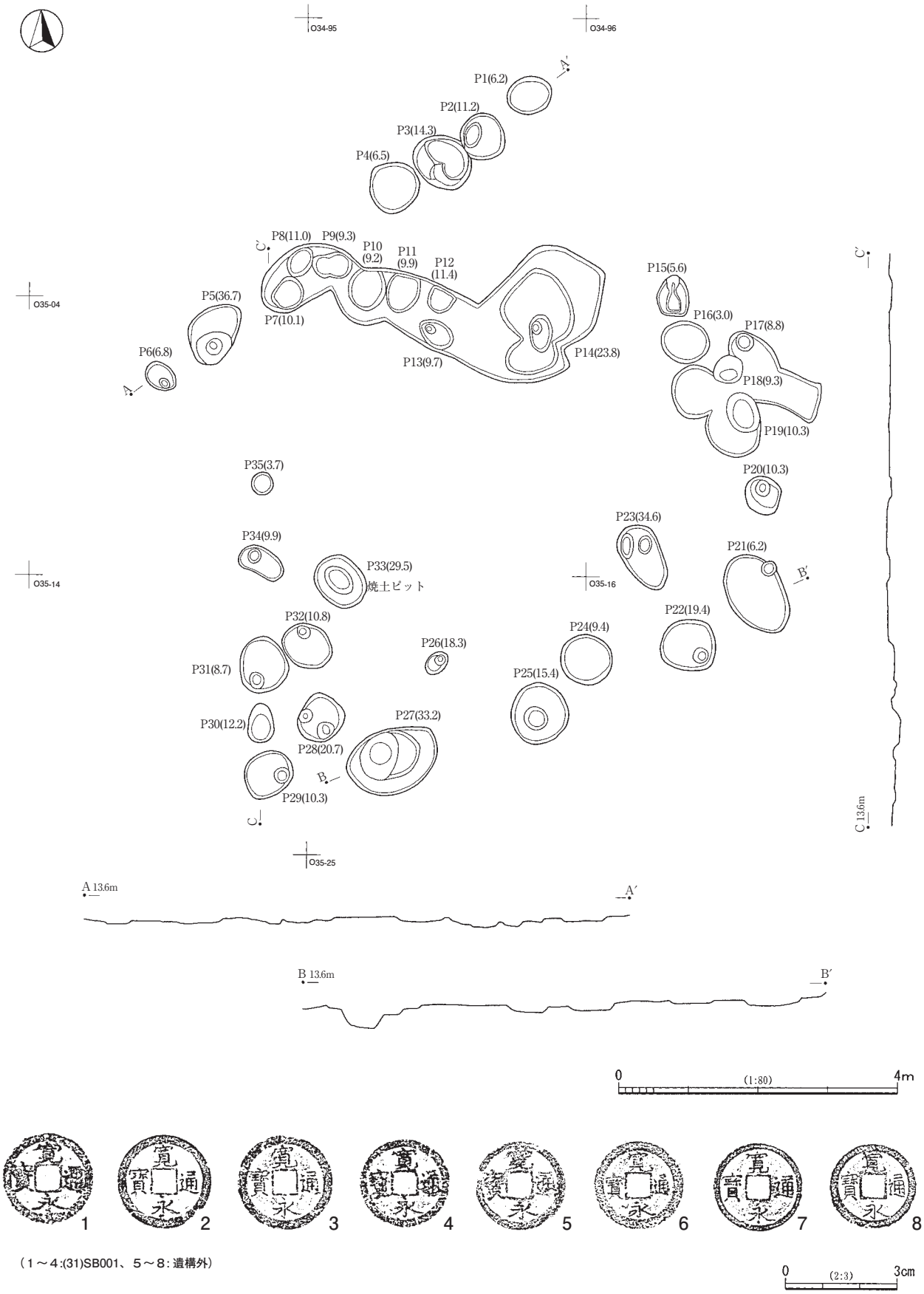
北側台地北西部に位置する。確認調査の時点で多数の近世遺物が出土したため、検出された遺構も近世のものと推測された。部分的な掘削を実施したところそのことが裏付けられたため、本調査対象とはせず遺構輪郭線の実測と遺物の回収を行って終了した。完掘したのはピット３基（SH001～003）のみである。各遺構の性格や重複している遺構の新旧関係などは不明である。

出土遺物（第245図、図版110・111・112）

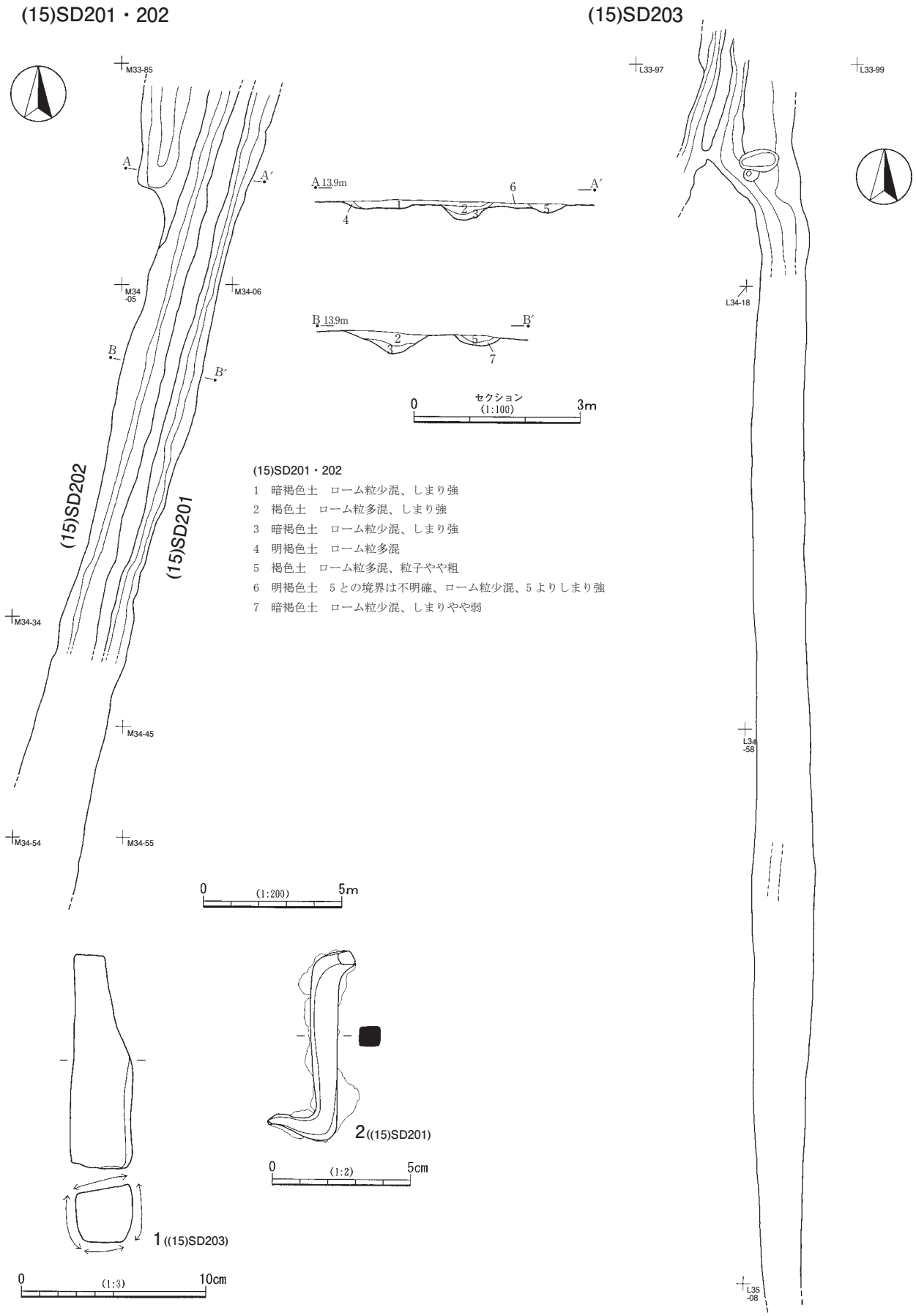
１は瀬戸・美濃の秉燭（ひょうそく）で、内外面に鉄釉が施される。底面裏には提灯などに取り付けるための釘穴があけられる。２は土器製の秉燭である。３・４はかわらけで、薄手に作られている。共に近世の所産である。５は内耳土器で、焙烙形のものである。体部は直線的に立ち上がり、耳は底部について



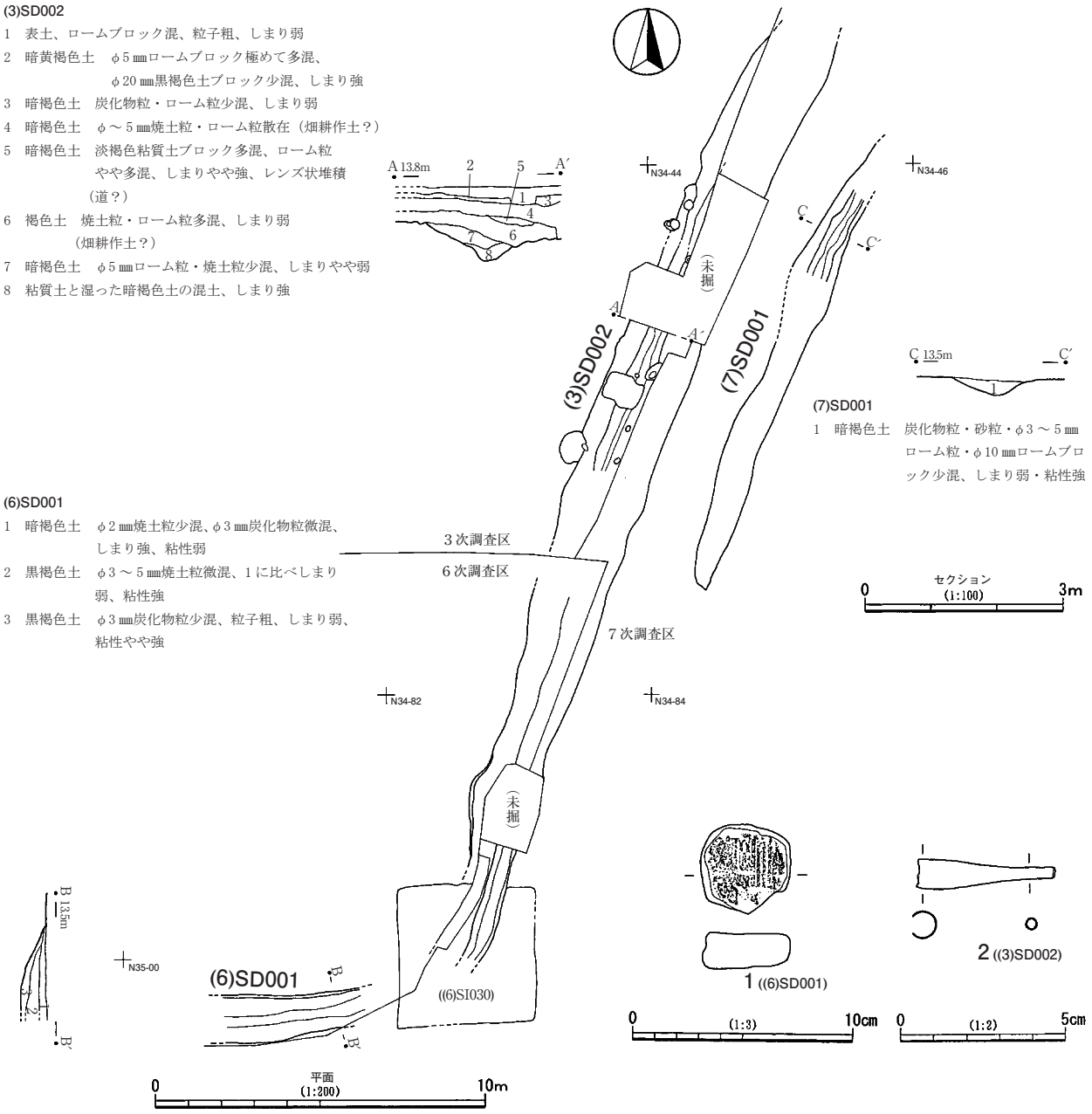
第 245 図　(27) 調査区遺構群、出土遺物



第 246 図　(31) 調査区遺構群、出土遺物



第 247 図　(15)SD201 ～ 203 溝状遺構、出土遺物



第 248 図　(3)SD002、(6)SD001、(7)SD001 溝状遺構、出土遺物

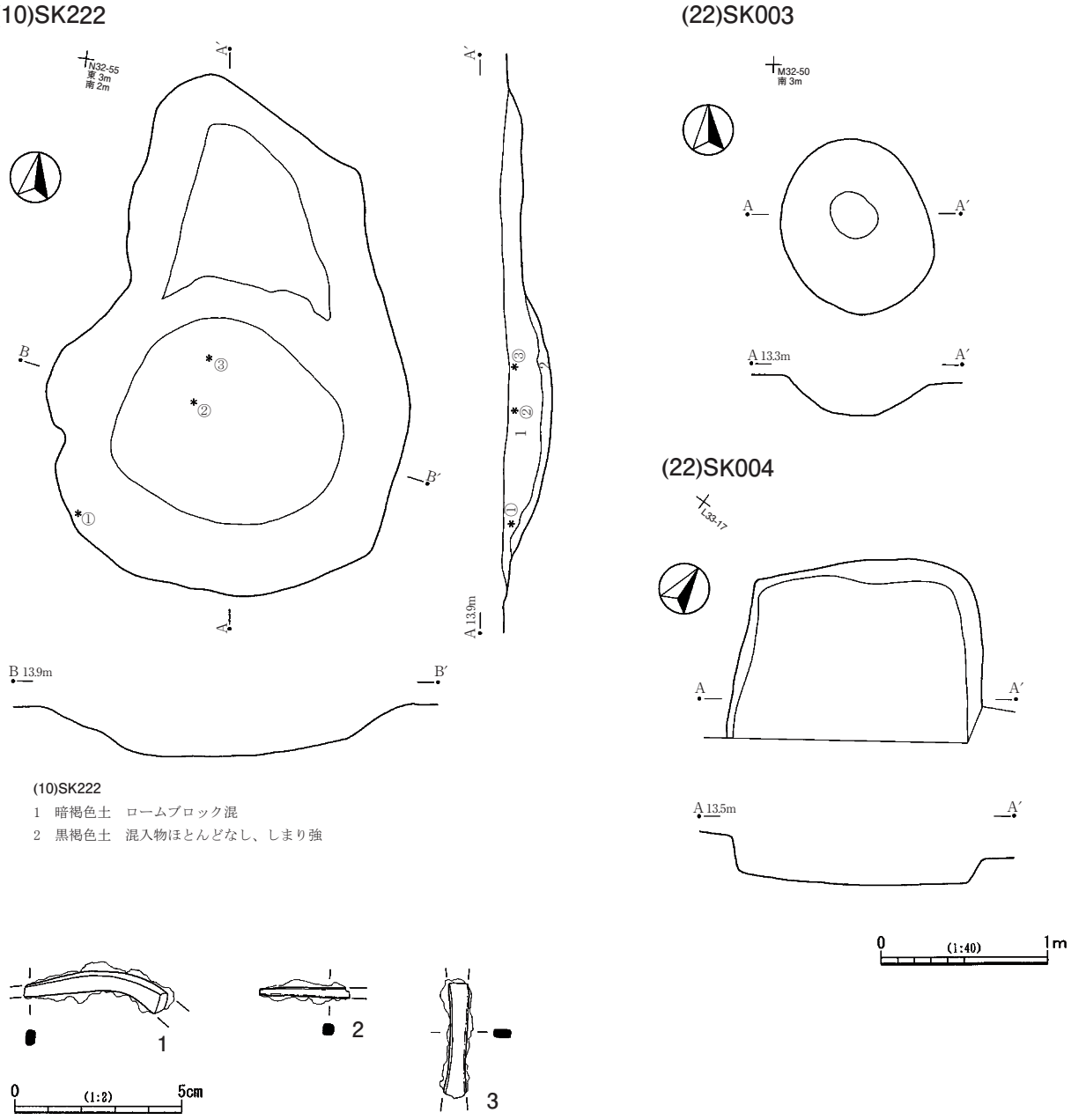
いるもので、19世紀代のものと思われる。６～14は砥石である。15～18は土器片を加工した円盤である。全て周縁を磨き、成形している。17・18は中・近世の土器片を加工しているが、15・16は土師器片を加工している。19（第252図10）は寛永通寶である。

（２）(31)調査区

北側台地の南西部に位置する。柱穴と思われるピット群が検出された。

(31)SB001（第246図、図版24）

調査区中央部、12m四方の範囲から35基のピットがまとまって検出された。数棟の建物が所在するものと思われるが、明確な建物として組むことはできなかった。恐らく３間４間程の建物であろう。ピットの掘込みはすべて浅く、礎石建物だった可能性もある。ピット内から寛永通寶が出土しており、地鎮に関わ



第 249 図　(10)SK222、(22)SK003・004 土坑、出土遺物

るものだろう。また焼土ピットも見られた。

出土遺物（第246図、図版112・113）

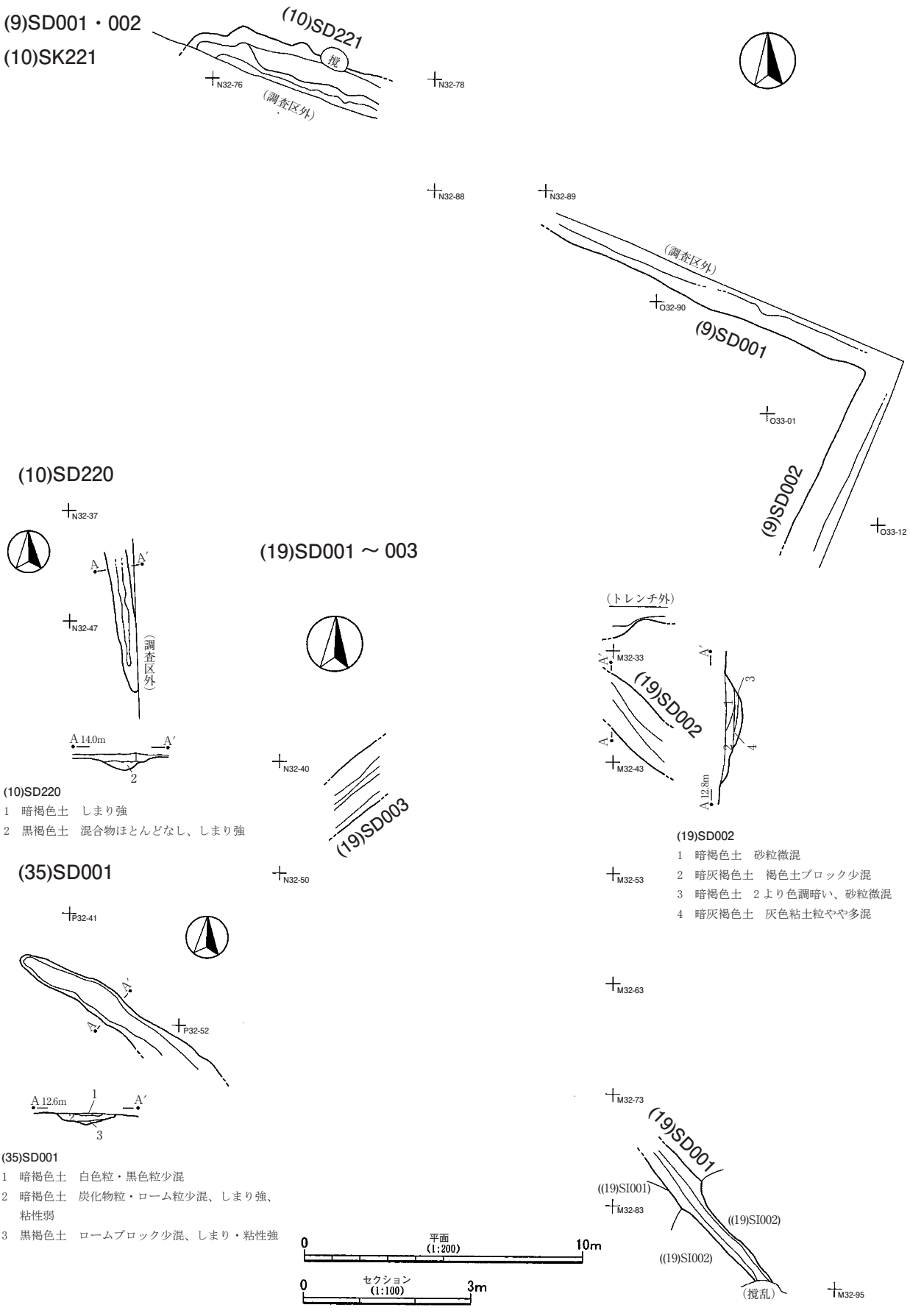
１～８（第252図11～15、第253図16～18）は出土銭貨で、全て寛永通寶である。１～４は(31)SB001から出土しているが、どのピットから出土したかは不明である。

（３）その他の調査区

その他の調査区では単独で検出されたものがほとんどなので、調査区の区別なく記載する。

(15)SD201・202（第247図、図版24）

北側台地中央部を南北に並走する２本の溝状遺構である。(15)SD201は総延長約30m、幅約0.6m～1.0m、深さは最深約0.4m、(15)SD202は総延長約26m、幅約1.0m～1.5m、深さは最深約0.2mである。M33-85グ



第 250 図　(9)SD001・002、(10)SD220・221、(19)SD001 ～ 003、(35)SD001 溝状遺構

リッドから北側ではもう１本溝が存在するが、詳細は不明である。(15)SD201より鉄釘が出土している。

(15)SD203（第247図、図版24）

(15)SD202の約20m西側に位置する南北に延びる溝状遺構である。総延長約45m、幅約1.8m～2.4m、深さ約0.4mである。北端部で別な溝が分岐しているが、詳細は不明である。また、北側中央に長さ約1.5m、深さ約0.7mの楕円形土坑が存在するが、当遺構に伴うものかは不明である。砥石を１点図化した。

(3)SD002、(6)SD001（第248図）

調査区が異なるため別の遺構番号が付されているが、両者は同一の溝状遺構である。N34-34グリッド付近からN35-02グリッド付近まで南北方向に延び、そこから西へ向きを変えてN35-00グリッド付近まで延びる。調査区境であることや、現道の下だったため遺存状況は悪いが、総延長約36m、幅約1.3m～2.5m、深さ最深で約0.6mを測る。陶器擂鉢を加工した円盤、煙管の吸い口が出土している。

(7)SD001（第248図）

(3)SD002の東側約２mの位置を、(3)SD002と平行するように延びる溝状遺構であるが、N34-74グリッド付近が末端となっている。総延長約14m、幅約0.8m～1.4m、深さ最深で約0.2mを測る。

(10)SK222（第249図）

北側台地北東部に位置する土坑である。長軸長310㎝、短軸長220㎝、深さ28㎝を測る。平面は不整形で断面は皿状を呈する。２基の土坑の重複の可能性も考えられる。刀子の柄と鉄鏃の茎部が出土している。

(22)SK003（第249図）

北側台地北西部に位置する土坑である。長軸長104㎝、短軸長92㎝、深さ25㎝を測る。平面は楕円形で断面は皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

(22)SK004（第249図）

北側台地北西部に位置する。平面は長方形を呈するものと思われるが、南側は調査区外で調査できなかった。検出長110㎝、幅152㎝、深さ22㎝を測る。断面は箱形で底面はほぼ平坦である。

(9)SD001・002、(10)SD221（第250図）

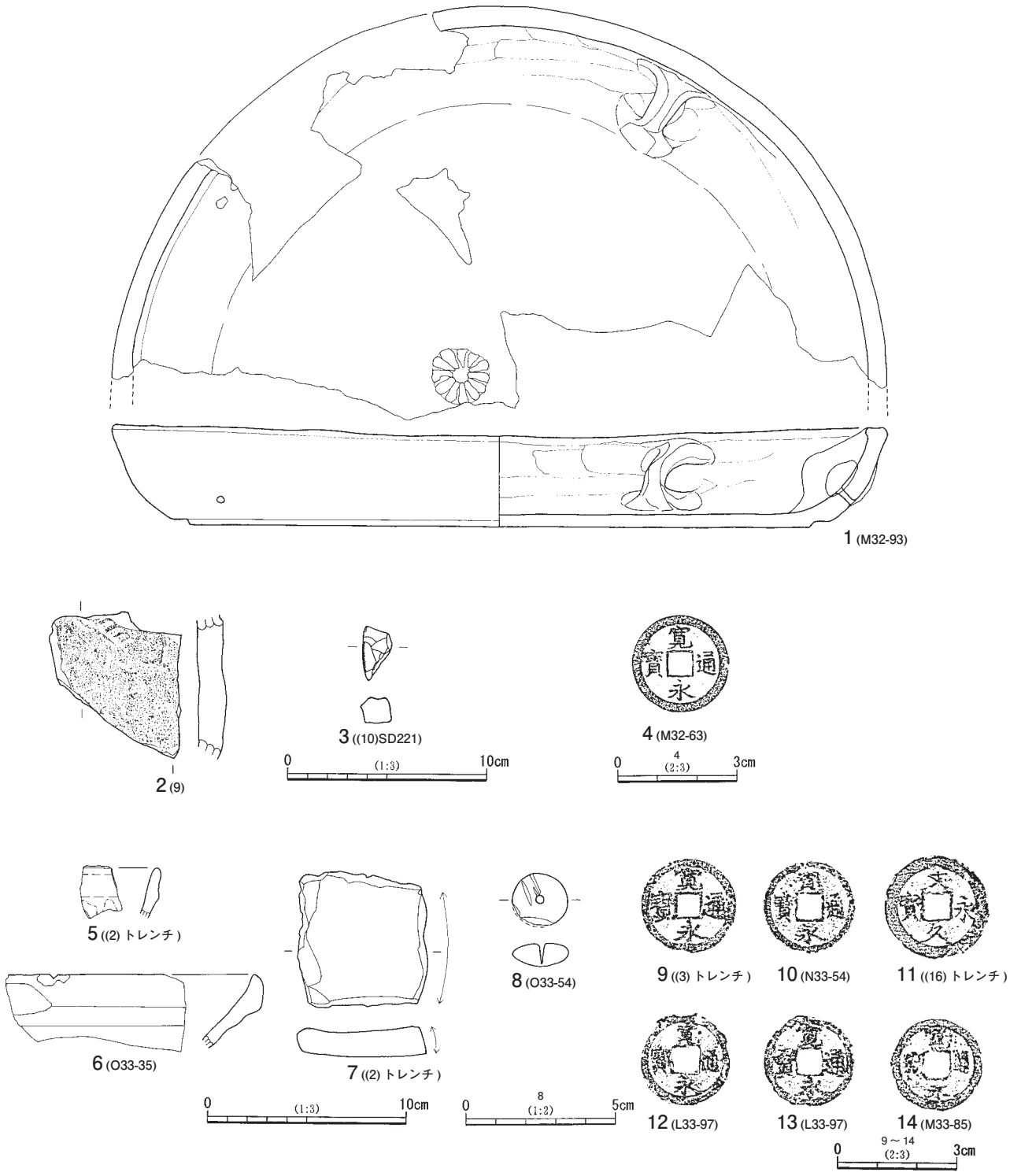
(9)SD002は北側台地北部に位置する溝状遺構で、O33-11グリッド付近から北東方向に延び、O32-92グリッド付近で90度屈曲して、(9)SD001として北西方向N32-89グリッド付近まで延びる。調査区外で未掘の場所を隔てて約８m先、(10)SD021が同じ方向に延びる。両遺構は同一遺構の可能性も考えられ、そう想定した場合総延長は約35mとなる。深さは最深約0.5m、幅は不明である。(10)SD221から火打石が出土している。

(10)SD220（第250図）

(10)SD221の北方約10mに位置する溝状遺構である。ほぼ南北方向に延びており、検出部分の総延長約5.0m、幅約0.8m、深さ約0.2mである。

(19)SD001～003（第250図）

19次調査区から検出された溝状遺構はいずれもトレンチ部分の調査のみであり、またいずれも別なトレンチへ続く状況が認められなかったため、総延長などは不明である。(19)SD001は調査区南東部で検出され、総延長約6.5m、幅約1.1m、深さ0.3mである。(19)SD002は調査区北東部で検出され、幅約1.5m、深さ約0.3mである。(19)SD003は調査区北西部で検出され、幅約1.7m、深さ約0.4mである。この溝は断面Ｖ字形と箱形の２本の溝が重複している状況で、(19)SD002の北側に存在する落込みまで続いている可能性

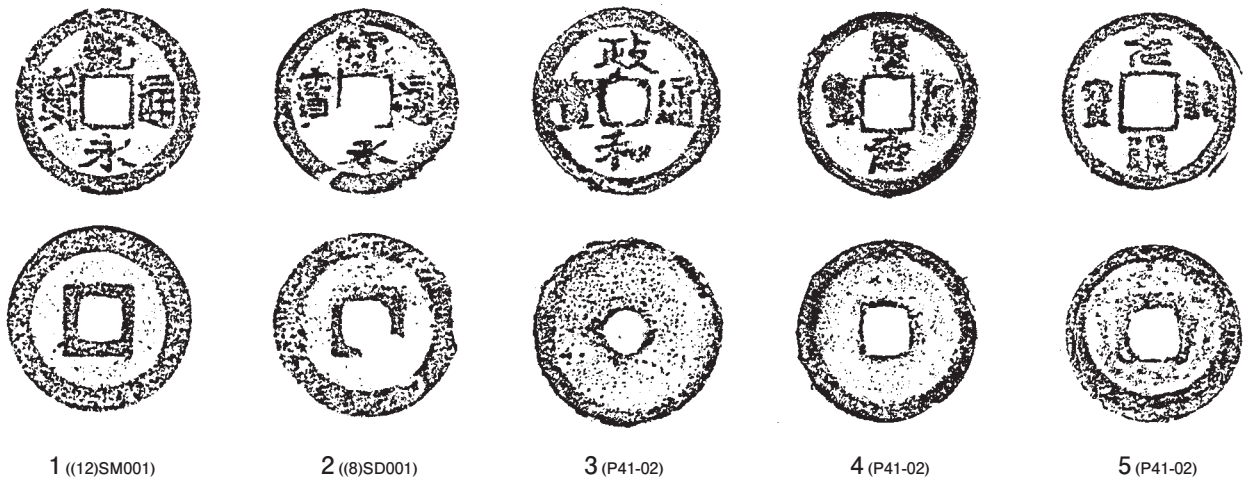


第 251 図　北側調査区出土中・近世遺物

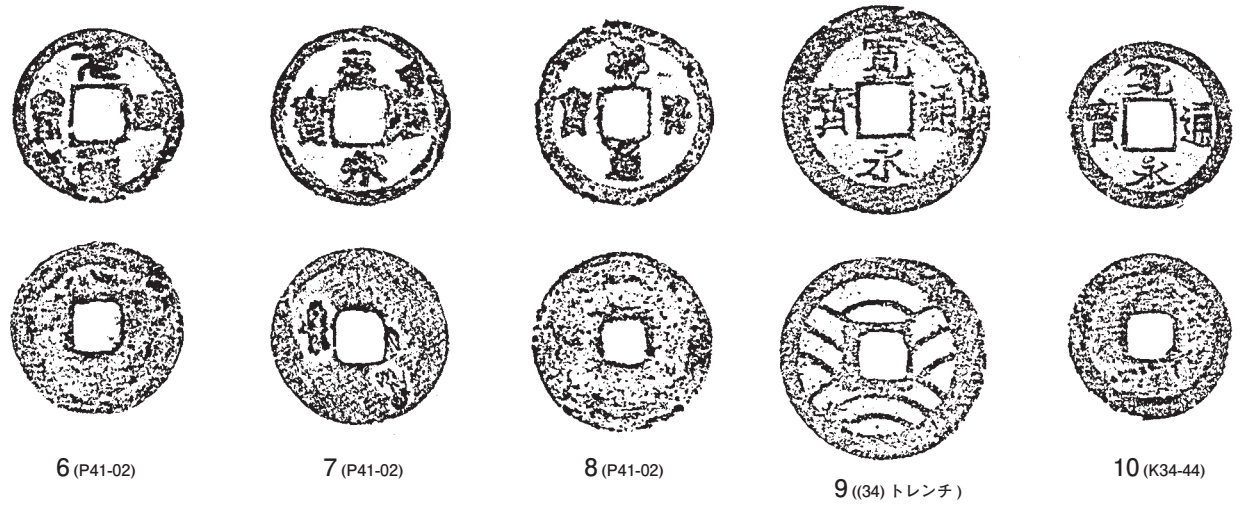
がある。

(35)SD001（第250図）

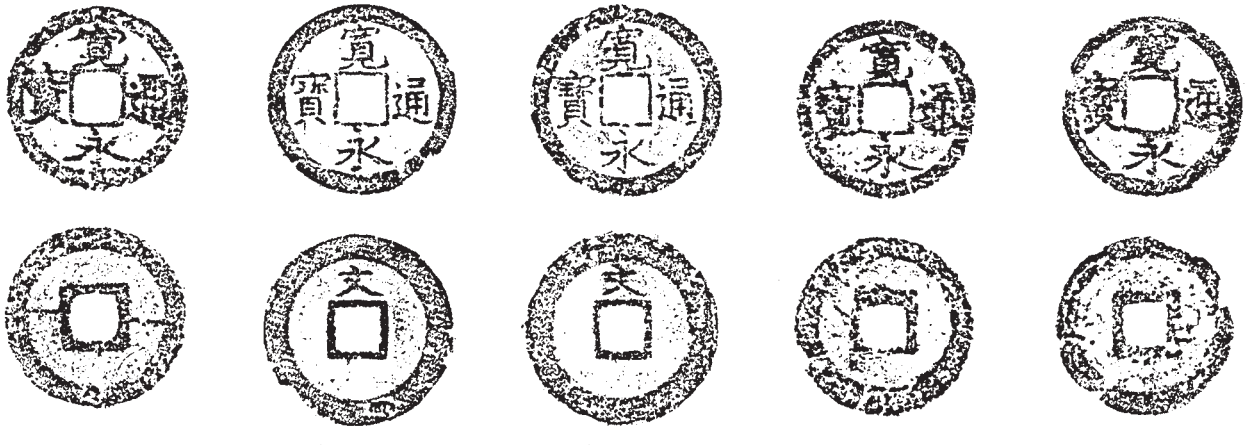
北側台地北東端部に位置する溝状遺構である。総延長約8.0m、幅約1.1m、深さ約0.2mを測る。覆土３層の上面が硬化しており、道路の可能性がある。



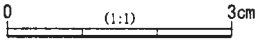
1 ((12)SM001)　2 ((8)SD001)　3 (P41-02)　4 (P41-02)　5 (P41-02)



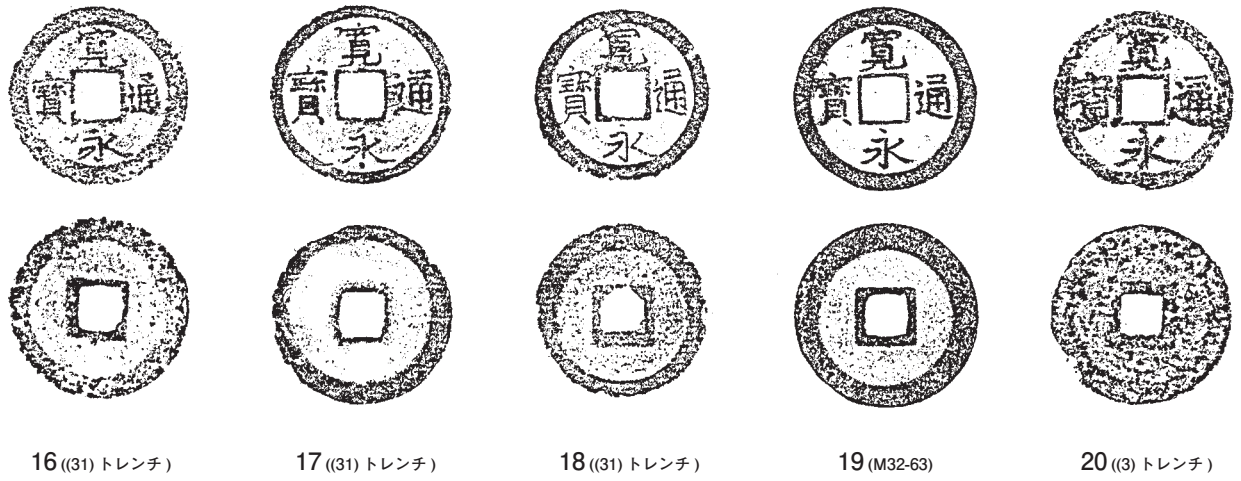
6 (P41-02)　7 (P41-02)　8 (P41-02)　9 ((34) トレンチ)　10 (K34-44)



11 ((31)SB001)　12 ((31)SB001)　13 ((31)SB001)　14 ((31)SB001)　15 ((31) トレンチ)



第 252 図　出土銭貨（1）



第 253 図　出土銭貨（２）

出土遺物（第247～249・251図、図版109～111・113）

第247図１は砥石で(15)SD203、２は鉄釘で(15)SD201出土である。第248図１は(6)SD001出土の陶器片を加工した円盤で、擂鉢の胴部片の周縁を打ち欠き成形している。２は(3)SD002出土の煙管の吸い口で、ほぼ完形品である。共に近世の所産である。第249図１～３は(10)SK222出土の鉄製品である。１・３は刀子で、柄の部分であろうか。２は鉄鏃で、茎部のみ遺存している。第251図１は内耳土器で、焙烙形のものである。約40％遺存する。体部は丸みを持って立ち上がり、内耳は１耳残るので、３耳になろうか。底部内面に印花文が施され、胴部には焼成後の穿孔が１か所見られる。18世紀代の所産と思われる。２は常滑大甕の胴部片である。３は(10)SD221出土の火打ち石である。４（第253図19）は銭貨で、新寛永である。５は古瀬戸製品で、小片なので不明な点があるが、灰釉の施された碗であろう。６は転用砥石で、瀬戸擂鉢の口縁部片を転用している。口唇部のみ磨られており、使用頻度は多くない。７も陶器転用砥石で、常滑大甕の胴部片を再利用している。６・７とも中世の陶器だが、砥石として使われた時期は不明である。８は土製円盤で、未貫通の孔が見られる。９～14（第253図20～25）は銭貨で、11は文久永寶、他は寛永通寶である。

第12表　中・近世土器・陶磁器観察表

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存率	計測値 口径 底径 器高	技法	胎土	色調	焼成	備考
第226図6	(12)SM001	陶器	瀬戸 鉄皿	全体40% 口縁40% 底部0%	(13.6)cm — 〔2.0〕cm	ロクロ成型 口縁部内外面に灰釉	砂粒、黒色粒	釉：灰オリーブ 胎土：白灰色	良好	16世紀後半
第226図7	(12)SD003	陶器	古瀬戸 平碗	全体35% 口縁0% 底部50%	— 5.6cm 〔5.6〕cm	ロクロ成型　底部削り出し高台	砂粒有り	内面：褐色 外面：明褐色＋ス ス	良好	15世紀代
第226図8	(12)SD003	陶器	渥美 大甕	口縁部片	— — —	口縁部ナデ	砂粒、黒色粒	内面：黄灰色 外面：黄灰色＋灰白色の自然釉	良好	12世紀代
第226図10	(12)SD003	陶器	常滑 片口鉢	口縁部片	— — —	内外面ナデ	砂粒、小石	内外面褐色	良好	2類　15世紀代
第226図12	(12)SD003 (12)SK009	陶器	常滑 片口鉢	口縁8% 胴部8%	— — —	内外面ナデ	砂粒、小石	内面：褐灰色 外面：褐灰色	良好	2類　内面磨られる (12)SD003と (12)SK009の破片が接合　14世紀代
第226図13	(12)SD003	土器	擂鉢	口縁15% 胴部15% 底部50%	(29.7)cm 11.5cm 14.8cm	内外面ナデ　6本単位のすり目が施される	砂粒	内外面黒褐色	良好	15世紀後半
第226図14	(12)SD003	土器	擂鉢	口縁20% 胴部20%	— — —	内外面ナデ　5本単位のすり目が施される	砂粒	内面：灰褐色 外面：黒褐色	良好	片口あり　内面磨られる　15世紀後半
第226図15	(12)SD003	陶器	備前 擂鉢	口縁5%	— — —	内外面ナデ　6本のすり目が施される	砂粒、小石	内面：暗褐色 外面：極暗褐色	良好	15世紀代
第226図16	(12)SD003	陶器	瀬戸 擂鉢	底部7%	— (11.0)cm —	内外面ナデ　10本単位のすり目が施される	砂粒	釉：暗赤灰色 胎土：浅黄色	良好	
第226図17	(12)SX002	土器	内耳土器	口縁部片	— — —	内外面ナデ	砂粒、雲母多	内面：にぶい赤褐色 外面：黒褐色	良好	焙烙形　外面スス付着　16世紀代
第226図18	(12)SK004	土器	内耳土器	口縁20% 胴部15% 底部20%	(28.8)cm (26.0)cm 7.2cm	内外面ナデ	砂粒、雲母多	内面：にぶい赤褐色 外面：黒褐色	良好	焙烙形　内耳欠損　外面スス付着　16世紀代
第226図19	(12)SD003	土器	内耳土器	口縁部片	— — —	内外面ナデ	砂粒、雲母多	内面：にぶい赤褐色 外面：黒褐色	良好	焙烙形　内耳欠損　外面スス付着　16世紀代
第232図1	(3)SD207	陶器	志野 丸皿	底部80%	— (7.1)cm 〔1.9〕cm	ロクロ成型 削り出し高台	砂粒	釉：白灰色 胎土：浅黄色	良好	底部外面に墨書
第232図2	３次調査区 表採	陶器	香炉(脚部)	脚部	高1.4cm 幅0.8cm 厚さ0.4cm	粘土を底部に張り付後ヘラと指頭で調整する	砂粒	淡黄色	良好	近世
第232図3	N38-03 グリッド	陶器	瀬戸 擂鉢	胴部片	— — —		砂粒	釉：暗赤灰色 胎土：浅黄色	良好	
第232図4	N38-76 グリッド	土器	擂鉢	口縁部 10%	— — —	内外面ナデ	砂粒、小石	内面：にぶい赤褐色 外面：黒褐色	良好	15世紀代
第232図5	３次調査区 表採	土器	焙烙？	口縁部 10%	— — —	内外面ナデ	砂粒やや多	内面：灰褐色 外面：にぶい赤褐色	良好	近世
第232図6	３次調査区 表採	陶器	常滑 片口鉢	口縁部片	— — —	内外面ナデ	砂粒、長石粒	内面：灰褐色 外面：にぶい橙色	良好	
第232図7	N38-76 グリッド	土器	擂鉢	胴部片	— — —	内外面ナデ	砂粒	内外面黒褐色	良好	
第232図8	３次調査区 表採	土器	鉢	底部片	— — —	内面ナデ	砂粒多	内面：褐灰色 外面：にぶい褐色	良好	近世

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存率	計測値 口径 底径 器高	技法	胎土	色調	焼成	備考
第233図1	P40-02 グリッド	土器	かわらけ	口縁40% 底部90%	(7.5)cm 4.0cm 1.9cm	ロクロ成型　回転糸切	砂粒、赤色粒	内面：褐灰色 外面：褐灰色	良好	近世
第233図2	２次調査区 確認トレンチ	土器	かわらけ	口縁20% 底部15%	(9.6)cm (5.0)cm 3.1cm	ロクロ成型　回転糸切	砂粒、赤色粒	内面：浅黄橙色 外面：浅黄橙色	良好	16世紀代
第233図3	２次調査区 確認トレンチ	陶器	瀬戸 天目茶碗	口縁25%	(11.0)cm (5.0)cm 5.1cm	内外面鉄釉　体部下端露胎	砂粒	釉：赤黒色 胎土：灰白色	良好	16世紀代後半
第233図4	16次調査区 現場一括	土器	かわらけ	口縁40%	(10.8)cm (6.0)cm 2.9cm	ロクロ成型　回転糸切	砂粒、赤色粒 微量	内面：浅黄橙色 外面：浅黄橙色	良好	16世紀代
第233図5	P39-35 グリッド	陶器	瀬戸・美濃 擂鉢	口縁25%	(29.0)cm — 〔7.5〕cm	内外面鉄釉	砂粒多	釉：赤灰色 胎土：浅黄橙色	良好	近世
第233図6	O39-87 グリッド	陶器	瀬戸・美濃 擂鉢	口縁部片	— — —	内外面鉄釉	砂粒	釉：暗赤灰色 胎土：にぶい橙色	良好	近世
第233図7	P40-02 グリッド	土器	内耳土器	口縁部片	— — —	内外面ナデ	砂粒多、雲母粒	内面：にぶい橙色 外面：黒褐色	良好	鍋　15世紀後半
第235図1	(25)SK009	陶器	瀬戸・美濃 香炉	口縁20% 底部30%	(11.2)cm (8.7)cm 7.4cm	ロクロ成型　切り離し後脚を貼り付け　底部露胎　体部内外面飴釉	砂粒	釉：褐色 胎土：灰褐色	良好	近世
第235図2	K37-65 グリッド	陶器	瀬戸・美濃 擂鉢	底部35%	— (6.6)cm 〔12.4〕cm	ロクロ成型　内外面鉄釉10本単位のすり目が施される	砂粒、黒色粒	釉：赤褐色 胎土：明褐灰色	良好	近世
第243図1	J37-90 グリッド	土器	かわらけ	口縁80% 底部100%	(6.4)cm 3.3cm 2.0cm	ロクロ成型	砂粒、雲母粒	内面：にぶい橙色 外面：にぶい橙色	良好	口縁部にスス付着　燈明皿として使用　近世
第243図2	(30)SD003	陶器	瀬戸・美濃 香炉	口縁20% 底部40%	(9.7)cm 8.0cm 6.8cm	ロクロ成型　切り離し後脚を貼り付け　底部露胎　体部内外面飴釉	砂粒	釉：褐色 胎土：浅黄橙色	良好	近世
第244図1	24次調査区 確認トレンチ	陶器	皿	口縁20% 底部40%	(9.7)cm 8.0cm 6.8cm	ロクロ成型　内外面灰釉	砂粒	釉：灰白色 胎土：灰黄色	良好	近世
第244図2	(24)SD001	陶器	常滑 片口鉢	口縁部片	— — —	内外面ナデ	砂粒多	内外面にぶい赤褐色	良好	
第244図3	(24)SD001	陶器	常滑 片口鉢	底部片	— — —	内外面ナデ	砂粒多	内外面褐灰色	良好	内面磨られる
第245図1	K34-52 グリッド	陶器	秉燭（ひょうそく）	100%	5.7cm 4.2cm 4.7cm	ロクロ成型　体部内外面鉄釉　台は露胎	砂粒多	釉：暗褐色 胎土：灰白色	良好	底部に穿孔　近世
第245図2	K34-52 グリッド	土器	秉燭（ひょうそく）	100%	4.0cm 2.4cm 1.7cm	ロクロ成型	砂粒多	内面：にぶい橙色 外面：にぶい橙色	良好	近世
第245図3	(27)SK002	土器	かわらけ	口縁70% 底部100%	7.0cm 3.7cm 1.5cm	ロクロ成型	砂粒多	内面：にぶい橙色 外面：にぶい橙色	良好	近世
第245図4	(27)SK002	土器	かわらけ	口縁40% 底部50%	(9.4)cm 4.3cm 2.2cm	ロクロ成型	砂粒多	内面：灰褐色 外面：灰褐色	良好	近世
第245図5	(27)SK002	土器	内耳土器	口縁15% 底部10%	(38.6)cm 5.5cm (36.4)cm	体部内面ナデ 体部外面下端ヘラ削り　口縁部ナデ	砂粒多、黒色粒、雲母粒	内面：褐灰色 外面：明褐灰色	良好	焙烙形　19世紀代

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	遺存率	計測値 口径 底径 器高	技法	胎土	色調	焼成	備考
第251図1	M32-93 グリッド	土器	内耳土器	口縁40% 底部40%	(38.5)cm 5.0cm (30.0)cm	体部外面ナデ、体部内面ヘラナデ	砂粒多、黒色粒、雲母粒	内面：褐灰色 外面：にぶい褐色	良好	焙烙形　体部に補修孔　底部内面に印花文　18世紀代
第251図2	９次調査区 表採	陶器	常滑 甕	胴部片	— — —	内面に自然釉	砂粒多	内面：褐灰色 外面：にぶい黄橙色	良好	
第251図5	２次調査区 確認トレンチ	陶器	古瀬戸 灰釉碗	口縁部片	— — —	内外面に灰釉	砂粒	釉：灰オリーブ 胎土：灰白色	良好	平碗？　15世紀代

第13表　中・近世遺物(石製品等)観察表

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 厚さ 重量	技法	石材	色調	備考
第 225 図 1	(12)SM001	石製品	板碑	月輪 種子 蓮座	破片 塔身部右側違存	〔14.5〕cm 〔14.0〕cm 2.4cm 769.8g	切り出し後 表裏磨く	緑泥片岩	暗緑灰色	裏面に僅かに鑿痕残る 種子は３尊以上
第 225 図 2	12 次調査 区表採	石製品	板碑	□□	破片 山形及び左側 面違存	〔19.4〕cm 〔12.2〕cm 1.8cm 918.5g	切り出し後 表裏、側面 を磨く	緑泥片岩	緑灰色	沈線による区画あり 裏面磨かれる　砥石に 転用か
第 225 図 3	12 次調査 区表採	石製品	板碑		破片 頂部及び左側 面違存	〔14.2〕cm 〔6.6〕cm 1.7cm 313.8g	切り出し後 表裏磨く	緑泥片岩	黄灰色	
第 225 図 4	(12)SM001	石製品	板碑		破片 右側面違存	〔11.2〕cm 〔8.4〕cm 1.6cm 444.1g	切り出し後 表裏磨く	緑泥片岩	オリーブ灰 色	左断面は磨られてお り、砥石に転用か
第 225 図 5	(12)SD003	石製品	板碑		30% 基部及び塔身 部下端違存	〔27.3〕cm 〔17.2〕cm 2.5cm 1,962.9g	切り出し後 表及び側面 を磨く	緑泥片岩	オリーブ灰 色	裏面は敲打痕残る　右 側面に打ち欠きあり
第 226 図 9	(12)SM001	土製品	陶器 転用砥石		100%	6.6cm 9.4cm 1.2cm 72.3g	常滑大甕頸 部片を転用		内外面褐色	頸部片 断面を砥石と して使用
第 226 図 11	(12)SK007	土製品	陶器 転用砥石		100%	9.2cm 11.1cm 1.1cm 158.4g	瀬戸擂鉢胴 部片を転用		内外面暗赤 褐色	断面を砥石として使用 17 世紀代
第 227 図 20	(12)SM001	石製品	砥石		両端及び右側 欠損	8.2cm 2.8cm 〔1.8〕cm 59.3g		砂岩	暗灰黄色	
第 227 図 21	(12)SD003	石製品	砥石		両端及び右側 欠損	10.1cm 〔3.4〕cm 〔4.9〕cm 236.4g		砂岩	暗灰黄色	
第 227 図 22	(12)SD003	石製品	砥石		両端を欠損	〔4.1〕cm 3.8cm 2.8cm 80.8g		凝灰岩	灰黄色	
第 227 図 23	(12)SD003	石製品	砥石			9.0cm 9.5cm 2.3cm 260.2g		砂岩	灰黄色	
第 227 図 24	(12)SK005	石製品	砥石		左側面のみ違 存	〔9.0〕cm 〔6.7〕cm 〔3.1〕cm 168.2g		凝灰岩	灰黄色	
第 227 図 25	(12)SK007	石製品	砥石			10.7cm 3.7cm 2.8cm 154.9g		凝灰岩	灰白色	
第 227 図 26	(12)SK007	石製品	砥石		表面のみ違存 両端、左右側 欠	〔6.0〕cm 〔5.7〕cm 〔2.6〕cm 78.2g		砂岩	灰黄褐色	
第 227 図 27	(12)SD003	石製品	火打石			4.4cm 4.1cm 2.6cm 57.3g		チャート	青黒色	

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 厚さ 重量	技法	石材	色調	備考
第 227 図 28	(12)SD003	土製品	陶器片円盤		100%	3.6cm 3.5cm 1.0cm 19.2g	皿底部片の周縁を打ち欠き加工	碗底部を転用	浅黄橙色	表面に墨書　近世
第 227 図 30	(12)SM001	石製品	石臼 上臼		20%	〔16.8〕cm 〔14.4〕cm 6.2cm 1,765.6g		花崗岩	にぶい黄橙色	
第 227 図 31	(12)SK007	石製品	石臼 上臼		10%	〔8.1〕cm 〔12.2〕cm 〔15.2〕cm 1,655.8g		砂岩	灰黄褐色	側面が磨られており、砥石に転用か
第 229 図 1	(21)SK002	土製品	陶器 転用砥石		100%	3.8cm 4.6cm 1.2cm 27.0g		瀬戸擂鉢胴部を転用	褐色	断面を砥石として使用 近世
第 229 図 2	21 次調査区確認トレンチ	土製品	鞴羽口		10%	〔7.5〕cm 〔4.3〕cm 〔0.5〕cm 32.3g		砂粒を多く含む胎土	灰黄褐色	表面発泡滓付着　滓の厚さは 0.4cm
第 229 図 3	(21)SK002	土製品	土製円盤		100%	1.9cm 2.0cm 0.5cm 1.8g	表裏ナデ 指紋残る	雲母微量含む胎土	橙色	碁石？近世
第 232 図 9	(3)SD206	土製品	陶器 転用砥石		100%	11.5cm 12.8cm 2.2cm 288.6g	常滑片口鉢を転用		内面：褐灰色 外面：褐色	断面を砥石として使用
第 232 図 10	(3)SI147	石製品	砥石		100%	10.9cm 5.2cm 1.2cm 107.8g		砂岩	灰褐色	
第 232 図 11	(8)SD001	石製品	砥石？		100%	6.1cm 5.9cm 3.0cm 146.8g			灰黄褐色	全面磨かれる
第 232 図 12	N35-01 グリッド	土製品	土器片円盤		100%	2.8cm 2.8cm 0.8cm 8.8g	擂鉢胴部片の周縁を打ち欠き成型		釉：褐色 胎土：にぶい黄橙色	近世
第 232 図 13	N38-85 グリッド	土製品	土器片円盤		100%	3.3cm 2.9cm 0.8cm 10.0g	擂鉢胴部片の周縁を打ち欠き成型		釉：暗褐色 胎土：にぶい橙色	近世
第 232 図 14	３次調査区表採	土製品	土玉		45%	〔1.0〕cm 〔2.3〕cm 0.9cm 3.8g			にぶい褐色	近世
第 243 図 3	(30)SK001	土製品	陶器 転用砥石		100%	8.8cm 4.8cm 1.2cm 65.8g	瀬戸擂鉢を転用		褐灰色	断面を砥石として使用 近世
第 243 図 4	34 次調査区	土製品	陶器 転用砥石		100%	5.5cm 5.2cm 1.0cm 41.6g	瀬戸擂鉢を転用		にぶい褐色	断面を砥石として使用 近世
第 243 図 5	(25)SK005	鉄製品	鉄鏃		茎部	2.1cm 0.3cm 0.4cm 1.18g				
第 244 図 4	K38-80 グリッド	土製品	陶器 転用砥石		100%	6.2cm 4.7cm 1.2cm 56.2g	常滑甕胴部を転用		褐灰色	断面を砥石として使用

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 厚さ 重量	技法	石材	色調	備考
第 245 図 6	(27)SK001	石製品	砥石			6.8cm 2.3cm 1.8cm 62.7g		凝灰岩	灰褐色	
第 245 図 7	(27)SK002	石製品	砥石			5.1cm 3.9cm 1.5cm 57.4g		凝灰岩	灰褐色	
第 245 図 8	(27)SK002	石製品	砥石			7.0cm 2.3cm 2.8cm 79.1g		凝灰岩	にぶい黄橙色	
第 245 図 9	(27)SK002	石製品	砥石			5.3cm 3.4cm 1.7cm 53.0g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 10	(27)SK002	石製品	砥石			8.0cm 2.9cm 2.6cm 80.3g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 11	(27)SK002	石製品	砥石		下端欠	〔4.5〕cm 3.4cm 1.2cm 35.0g		凝灰岩	灰黄色	
第 245 図 12	(27)SK002	石製品	砥石		下端欠	〔6.0〕cm 2.7cm 2.0cm 43.3g		凝灰岩	にぶい褐色	
第 245 図 13	(27)SK002	石製品	砥石			4.8cm 3.1cm 1.0cm 33.4g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 14	(27)SK002	石製品	砥石		下端欠	〔4.5〕cm 3.5cm 1.7cm 53.5g		凝灰岩	灰白色	
第 245 図 15	(27)SK002	土製品	土器片円盤		100%	3.0cm 2.5cm 0.8cm 5.5g	周縁を打ち欠き成型		灰黄褐色	土師器片を利用
第 245 図 16	(27)SK002	土製品	土器片円盤		100%	2.3cm 2.2cm 0.7cm 4.7g	周縁を磨き成型		褐灰色	土師器片を利用
第 245 図 17	(27)SD001	土製品	土器片円盤		100%	2.2cm 2.2cm 0.8cm 4.1g	周縁を磨き成型		褐灰色	
第 245 図 18	(27)SD001	土製品	土器片円盤		100%	2.8cm 2.5cm 0.9cm 7.8g	周縁を磨き成型		にぶい褐色	
第 247 図 1	(15)SD203	石製品	砥石			11.6cm 2.3cm 3.1cm 186.5g		凝灰岩	灰黄色	
第 247 図 2	(15)SD201	金属製品	釘			〔7.2〕cm 1.1cm 0.8cm 19.45g				
第 248 図 1	(6)SD001	土製品	陶器片円盤		100%	2.7cm 2.8cm 1.1cm 9.6g	擂鉢胴部片の周縁を磨き成型		釉：暗赤黒 胎土：明褐灰色	近世

挿図番号	遺構番号 出土位置	種別	器種	銘文	遺存率	計測値 縦 横 厚さ 重量	技法	石材	色調	備考
第 248 図 2	(3)SD002	金属製品	煙管（吸い口）		ほぼ完形	4.2cm (長) 0.8cm (幅) 0.8cm (径) 1.77g				
第 249 図 1	(10)SK222	金属製品	刀子？		柄	〔4.2〕cm (長) 0.7cm (幅) 0.4cm (厚) 4.76g				
第 249 図 2	(10)SK222	金属製品	鉄鏃		茎部	〔2.6〕cm (長) 0.3cm (幅) 0.3cm (厚) 0.88g				
第 249 図 3	(10)SK222	金属製品	刀子？		柄	〔3.5〕cm (長) 0.6cm (幅) 0.3cm (厚) 2.56g				
第 251 図 3	(10)SD221	石製品	火打石			2.7cm 1.4cm 1.3cm 5.9g		石英	灰白色	
第 251 図 6	O33-35 グリッド	土製品	陶器 転用砥石		100%	3.8cm 8.9cm 1.1cm 43.1g	砂粒		釉：暗褐色 胎土：にぶい黄橙色	瀬戸擂鉢の口唇部を磨る　16 世紀代
第 251 図 7	２次調査区 トレンチ	土製品	陶器 転用砥石		100%	6.6cm 6.5cm 1.5cm 85.8g	常滑甕胴部片を使用		褐灰色	断面を砥石として使用 近世
第 251 図 8	O33-54 グリッド	土製品	土製円盤		100%	1.8cm 2.0cm 0.7cm 2.2g	中央に未貫通の孔		にぶい橙色	

第14表　中・近世銭貨一覧表

挿図番号	遺構番号 出土位置	銭種	鋳造年	書体	計測値 径 内郭 厚さ 重量	背文	備考
第227図29 第252図1	(12)SM001	寛永通寶	1626～1659年鋳		2.4cm 0.7cm 1.4㎜ 2.86g		古寛永
第232図15 第252図2	(8)SD001	寛永通寶（新寛永）	1697年初鋳		2.5cm 0.65cm 0.95㎜ 1.57g		新寛永、一部破損
第233図8 第252図3	P41-02グリッド	政和通寶	1111年鋳（北宋）		2.4cm 0.6cm 1.0㎜ 3.67g		
第233図9 第252図4	P41-02グリッド	熙寧元寶（篆書）	1068年初鋳（北宋）	篆書	2.4cm 0.7cm 1.12㎜ 3.36g		
第233図10 第252図5	P41-02グリッド	元佑通寶	1086年初鋳（北宋）	篆書	2.4cm 0.7cm 1.12㎜ 2.87g		
第233図11 第252図6	P41-02グリッド	元佑通寶	1086年初鋳（北宋）	篆書	2.4cm 0.8cm 0.61㎜ 1.71g		
第233図12 第252図7	P41-02グリッド	皇宋通寶	1038年初鋳（北宋）	真書	2.4cm 0.8cm 0.9㎜ 2.41g		
第233図13 第252図8	P41-02グリッド	祥符通寶	1009年初鋳（北宋）	真書	2.4cm 0.7cm 1.2㎜ 3.37g		
第243図6 第252図9	34次調査区確認トレンチ	寛永通寶	1769年初鋳		2.8cm 0.8cm 1.1㎜ 3.56g	11波	波銭　四文銭
第245図19 第252図10	K34-44グリッド	寛永通寶	1697年初鋳		2.2cm 0.7cm 1.0㎜ 1.99g		新寛永
第246図1 第252図11	(31)SB001	寛永通寶	1626～1659年鋳		2.4cm 0.7cm 1.0㎜ 2.0g		古寛永
第246図2 第252図12	(31)SB001	寛永通寶	1668～1683年鋳		2.5cm 0.7cm 1.2㎜ 2.32g	文	新寛永　文銭
第246図3 第252図13	(31)SB001	寛永通寶	1667年初鋳		2.5cm 0.7cm 1.2㎜ 2.01g		新寛永
第246図4 第252図14	(31)SB001	寛永通寶	1667年初鋳		2.4cm 0.7cm 1.22㎜ 2.04g		新寛永？
第246図5 第252図15	31次調査区確認トレンチ	寛永通寶	1626～1659年鋳		2.4cm 0.8cm 1.3㎜ 2.25g		古寛永

挿図番号	遺構番号 出土位置	銭種	鋳造年	書体	計測値 径 内郭 厚さ 重量	背文	備考
第246図6 第253図16	31次調査区確認トレンチ	寛永通寶	1667年初鋳		2.4cm 0.8cm 1.0㎜ 2.20g		新寛永
第246図7 第253図17	31次調査区確認トレンチ	寛永通寶	1667年初鋳		2.4cm 0.8cm 0.9㎜ 2.07g		新寛永
第243図8 第253図18	31次調査区確認トレンチ	寛永通寶	1667年初鋳		2.3cm 0.8cm 1.12㎜ 2.47g		新寛永
第251図4 第253図19	M32-63グリッド	寛永通寶	1667年初鋳		2.5cm 0.7cm 1.21㎜ 3.35g		新寛永
第251図9 第253図20	３次調査区確認トレンチ	寛永通寶	1626～1659年鋳		2.4cm 0.7cm 1.2㎜ 2.55g		古寛永
第251図10 第253図21	N33-54グリッド	寛永通寶	1667年初鋳		2.3cm 0.7cm 1.2㎜ 2.23g		新寛永？
第251図11 第253図22	16次調査区確認トレンチ	文久永寶	1863年鋳	真文	2.4cm 0.7cm 1.2㎜ 3.02g		
第251図12 第253図23	L33-97グリッド	寛永通寶	1667年初鋳		2.2cm 0.7cm 1.0㎜ 1.66g		新寛永
第251図13 第253図24	L33-97グリッド	寛永通寶	1626～1659年鋳		2.3cm 0.7cm 0.7㎜ 1.51g		古寛永？
第251図14 第253図25	M33-85グリッド	寛永通寶	1667年初鋳		2.3cm 0.7cm 1.3㎜ 2.72g		新寛永？
－	(24)SD001	不明			0.15g		破片
－	(27)SD001	不明			5.13g		鉄銭
－	K34-53グリッド	□永□□			0.51g		破片

第６章　まとめ

第１節　旧石器時代

後平井中通遺跡の調査では、５地点の石器集中地点を検出した。各々石器組成、石器製作技術に相違が認められ、５か所の石器集中地点が異なる文化層に属すると考えられる。ここでは５か所の石器集中地点を文化層に分類し、まとめとしたい。

第１文化層（Ⅲ層下部）

第２ブロックが該当する。定型的な石器の出土は認められないが、縦長剥片を作出する技術基盤を持つ文化層である。石材は北関東系の黒色頁岩・流紋岩が使用される。

第２文化層（Ⅳ層上部）

第１ブロックが該当する。小型不定形剥片のみ出土しているため、技術基盤を明確に提示できないが、信州系の黒曜石、埼玉県荒川上流のチャートを使用する。

第３文化層（Ⅳ層）

第５ブロックが該当する。縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器を有する。素材剥片の縦長剥片は黒色頁岩の資料にみられるように連続的に作出されたものであり、同一方向に設定された打面から連続的に剥片剥離を行っていることが理解できる。黒色安山岩についても同様であり、小型ながら１点出土する石核にその痕跡が認められる。石材は黒色頁岩が主体となり、またホルンフェルス・黒色安山岩を有することから、北関東産の石材を多用する傾向が認められる。また、定型的な石器は認められないが頁岩製の石器を石材組成に含み、北陸方面との繋がりもうかがえる。

第４文化層（Ⅳ層～Ⅵ層）

第４ブロックが該当する。定型的な石器の出土が無く、小型不定形剥片のみ出土するため技術基盤を明確に提示できない。黒色安山岩・チャート・凝灰岩といった北関東産の石材が多用される。礫群を伴い、砂岩・安山岩・チャート・石英斑岩の利根川・荒川流域にみられる石材からも北関東の様相が強く感じられる。

第５文化層（Ⅸ層）

第３ブロックが該当する。定型的な石器は認められないが、黒色安山岩製の剥片・接合資料があり、大型の不定形剥片を作出する技術基盤が明瞭にうかがえる。出土地点のローム層の層序が不明なため、周辺の層序と出土標高を対比させⅨ層としたが、Ⅸ層の中でも上部（Ⅸa層）に所属すると考えられる。拳大の転石を素材とし、打面を頻繁に転移し剥片を作出する剥片剥離技術である。石材は黒色安山岩が主体となるが、石材産地の特定には難がある。唯一出土する黒曜石は不純物を多く含み、おそらく高原山産のものと考えられる。

以上、各文化層について触れたが、定型的な石器が少ないことから各文化層の定義付けが非常に困難であるため、第２章第２節の記載と重複する説明となった。各文化層の枠を越え指摘できる点は、下総台地のなかでも西端に位置する立地のためか、北関東系の石材が多用される傾向が強いことである。

第２節　縄文時代

１　時期ごとの様相について（第254・255図）

第３章で掲載したが、縄文時代の遺構について改めて述べると、竪穴住居跡もしくは竪穴状遺構54軒、炉跡の可能性が強い焼土遺構１基、土坑123基、柱穴状ピット７基、ピット群４群、陥穴４基である。そして遺物が出土しなかったものの縄文時代の可能性が強いと判断される遺構は、竪穴状遺構３基、土坑101基、ピット47基、ピット群１群を数える。その他包含層からも多量の遺物が出土した。時期も草創期から晩期まで及び、数多くの視点を与える良好な集落遺跡といえる。今後の分析のための視座を提示すべく、当遺跡の縄文時代の様相について簡単ではあるが改めて確認したい。

最も古い時期の遺物としては草創期の柳葉形尖頭器の出土があり、撚糸文土器から沈線文土器・条痕文土器までの出土も認められることから、縄文時代初頭から当地は縄文人の活動の場であったことが推察される。ただし草創期、早期の出土遺物は本書に掲載したものがほぼ全てであり、散漫な状況であると言わざるを得ない。一方でより奥東京湾に近接した思井堀之内遺跡、思井上ノ内遺跡、中中屋敷遺跡などでは条痕文期から多数の炉穴が構築されるなど、より積極的な活動状況がうかがえる。当地は海進前には生業の場としてあまり魅力的ではなかったのであろうと推察される。

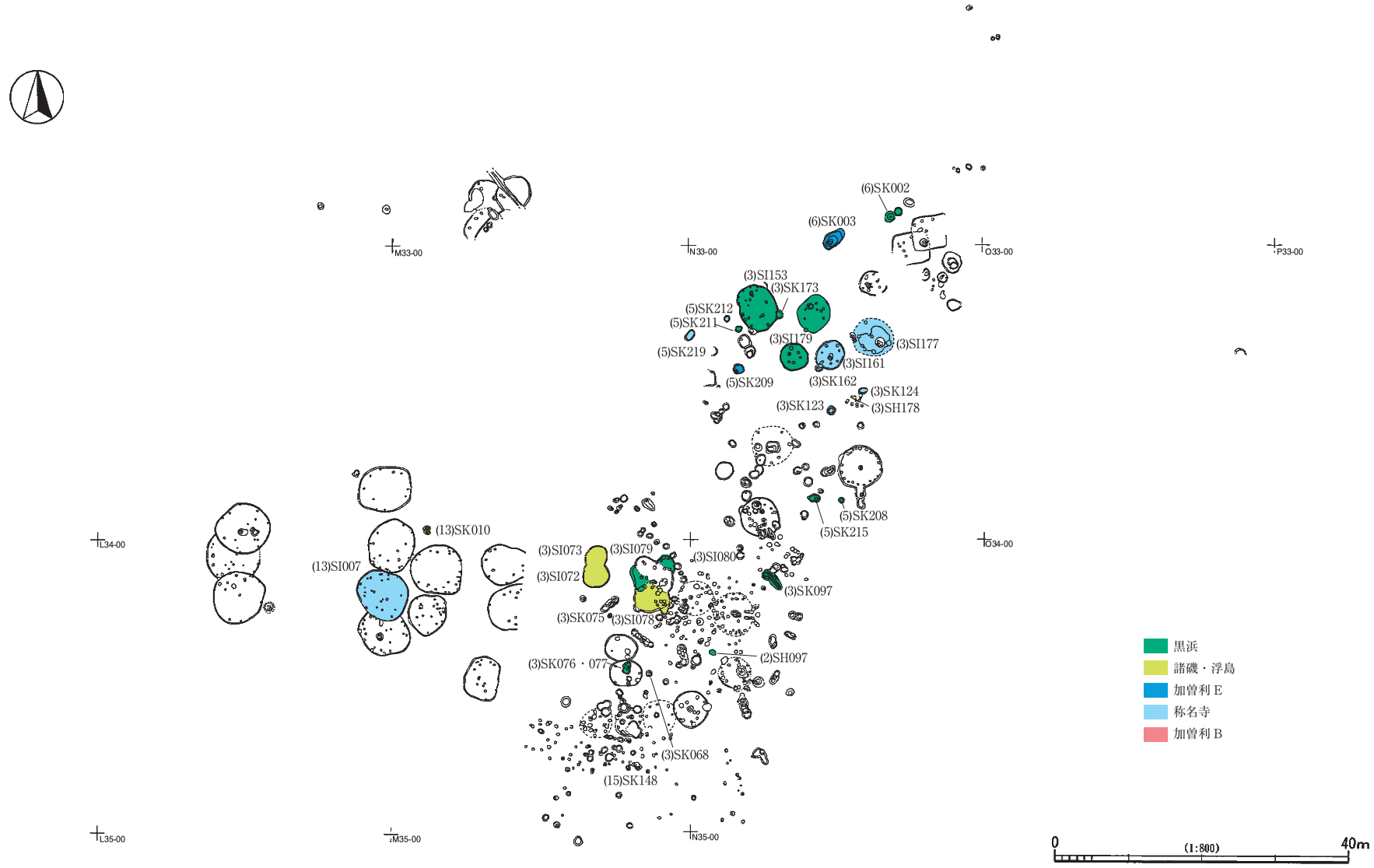
本格的な集落の形成が始まるのは前期中葉の黒浜式期に至ってからである。竪穴住居跡は主として南側台地上に展開する。坂川の低地は遺跡地南側に広がっており、奥東京湾へのアクセスも良好であることから占地されたものと思われる。北側台地を含めても住居跡の数は多いとは言えないが、各住居の使用頻度は高かった状況が見て取れ、拠点集落とは言えないまでも安定した居住空間であったと推測される。出土遺物を見ると、古段階を特徴付けるループ文、組紐文などは少数で、単節縄文もしくは無節縄文によるものが主体となっている。前段階の関山式期には、坂川の対岸にあたる松戸市の幸田貝塚で大規模な集落が形成されるが、周辺には同時期の集落は少ない。黒浜式期以降環境が安定し、居住地が台地の奥まで広がっていった様相が推測される。なお、当遺跡で検出された貝ブロックは１か所を除いて全て黒浜式に属するものである。貝種は大多数が内湾砂底種もしくは内湾泥底種であり、当時の環境を物語っていると言える。

前期後葉の諸磯式期には集落の規模が縮小し、竪穴住居は北側台地のごく一角に形成されるのみとなる。遺物も諸磯ａ式からｂ式にかけては比較的安定した出土状況であるが、諸磯ｃ式以降は激減する。周辺でも坂川流域の長崎遺跡の他、三輪野山地区で住居の検出が報告されているが、前期末はほとんど遺構が見られなくなる。

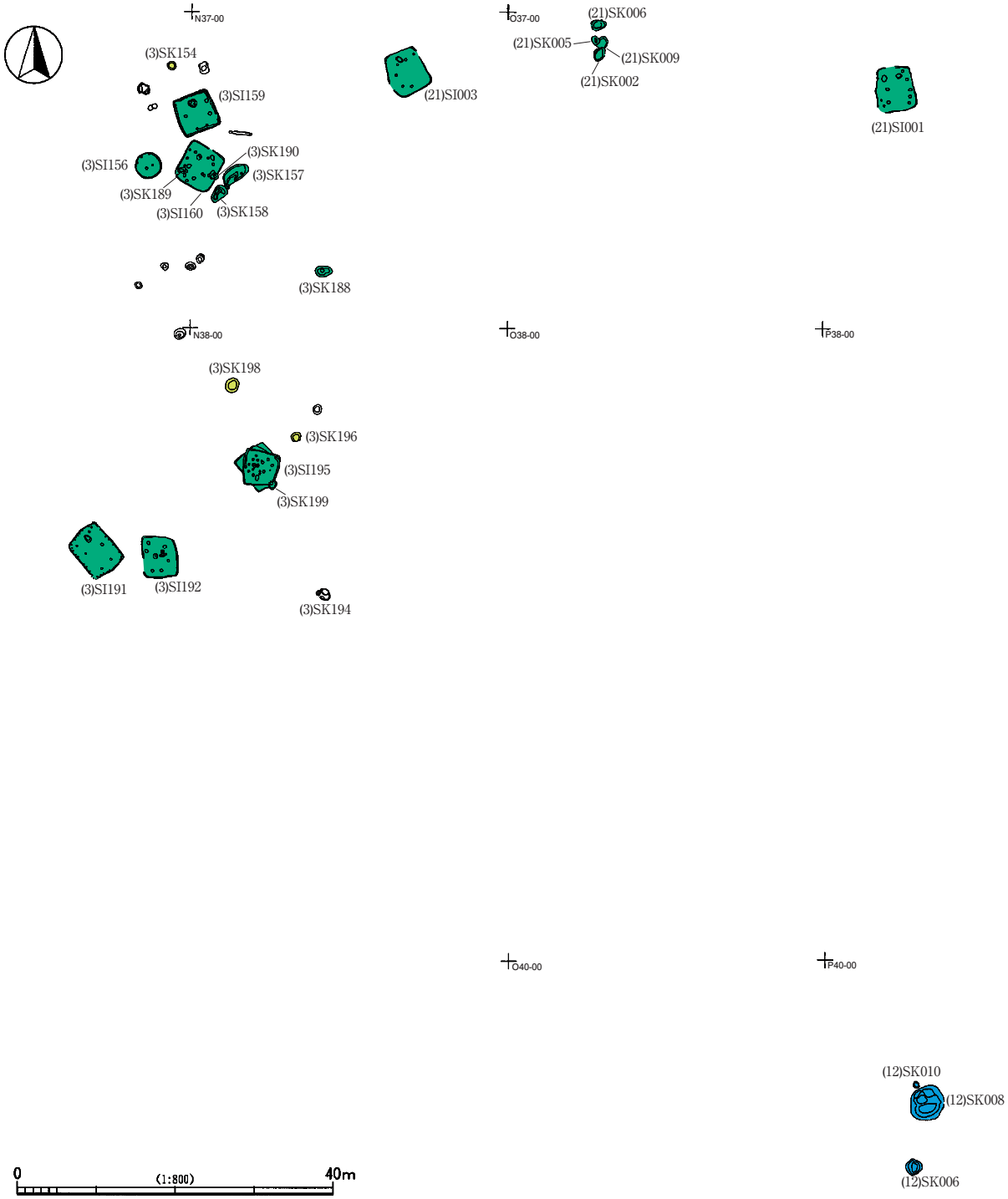
中期も前半はほぼ皆無であるが、後半の加曽利Ｅ式になると遺物の出土が認められるようになる。しかしはっきりとした遺構が出現するのは中期末になってからで、北側台地、南側台地とも先端部のごく限定された区域にのみ土坑が構築される。竪穴住居はなく、安定した生活の場といった状況はうかがえない。

後期初頭になると、ようやく竪穴住居が出現するようになる。北側台地の先端部に３軒の竪穴住居と数基の土坑が構築される。一方で時期は称名寺２式であり、中期から継続して営まれているとは言えない状況である。当該期はより台地奥側に当たる市野谷向山遺跡で中期後半から比較的規模の大きな集落が構築されており、分村のようなものだったのかもしれない。

これが堀之内１式期になると飛躍的に遺構が増加する。第254図で示したとおり、直径約100ｍの環状集落を構成する。南東部は緩やかな谷状の下り傾斜となっており、遺物を多量に含んだ土が堆積していた。

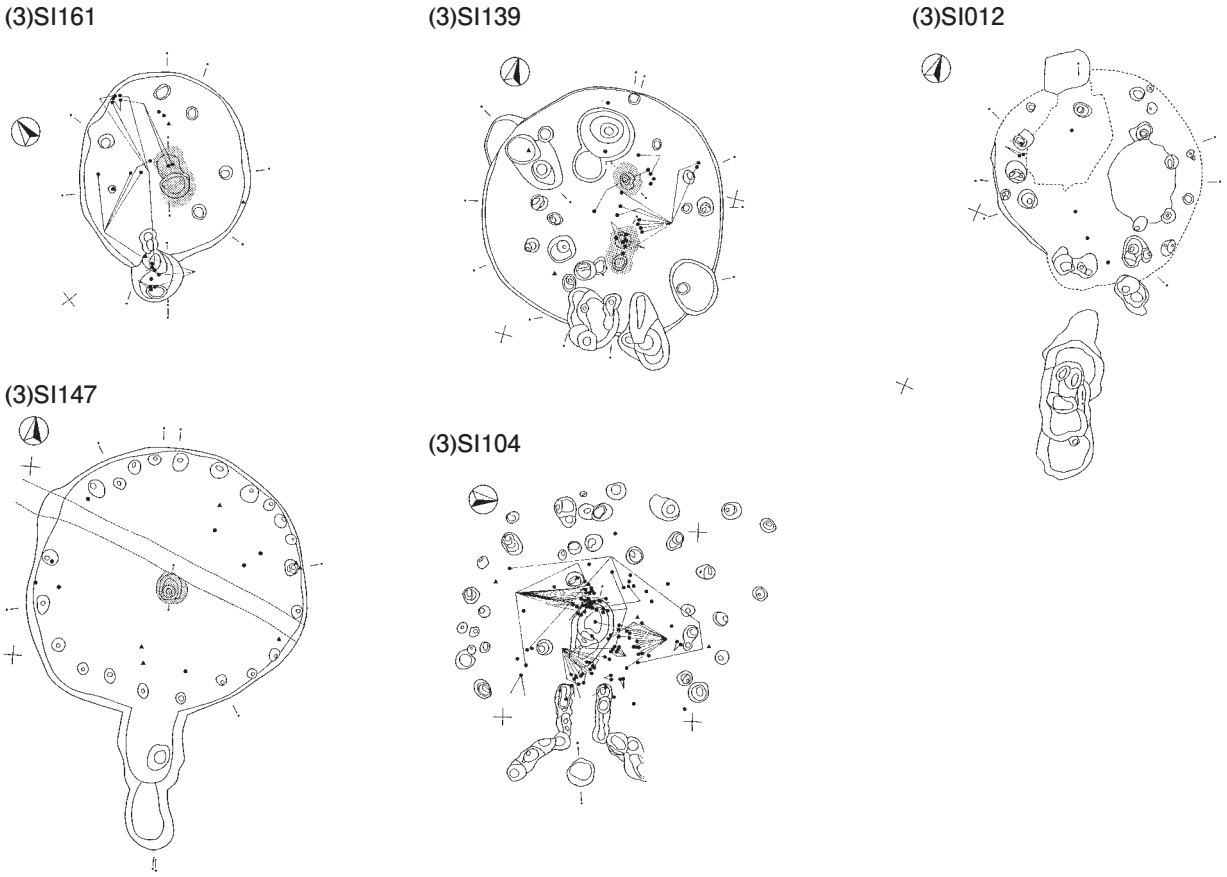


第 254 図　北側調査区縄文時代遺構



第 255 図　南側調査区縄文時代遺構

従ってそこに構築された住居はプランが確認できなかった可能性が強く、実際にはもっと多くの住居が存在したと思われる。遺物の時期から考えると、堀之内１式でも明瞭な単位文をもつ古段階のものは少なく、多重沈線と横帯化した文様帯をもつ新段階が圧倒的多数である。一方で堀之内２式は縦位区画をもつ古段階がある程度認められるものの、内文が発達し横帯区画化が進行する新段階はほとんどない。堀之内１式新段階から堀之内２式古段階の、限定された時期に構築された集落と言える。これだけの遺構が検出



第 256 図　出入口施設を持つ竪穴住居（S=1/160）

されていながら貝ブロックが全く形成されないのも特徴的で、漁撈の中心は思井上ノ内遺跡に移っていったのかもしれない。

加曽利Ｂ式期になると一転して遺構は少なくなる。明瞭なものは土坑１基のみであり、遺物量も激減する。後期中葉から晩期に至る遺物は掲載したもの以外は小破片であり、生活の場として利用された痕跡はほぼなくなる。奥東京湾沿いの三輪野山貝塚などに生活の拠点が移っていったと考えられる。

2　竪穴住居跡について

前期の竪穴住居は円形、楕円形、隅丸方形の各プランが認められるが、時期において大きな差はなく、機能差の可能性が強い。円形プランの(3)SI156・(3)SI179は使用頻度が低く、遺物量も少ないのに対し、隅丸方形プランの住居は床に硬化面が発達し炉の使用頻度も高いなど、明白な違いが認められる。一方で方形プランを呈する(3)SI159は壁際に周溝が巡り、出入口と思われるピットが認められるなど、他の住居とは異なる特徴を示しており、炉の使用頻度は低かったと調査所見で報告されている。特殊な用途の建物だった可能性がある。また、(3)SI160・(3)SI195のように、２軒の切合いであるが主軸を約45度振って重複する住居が存在する。位置から考えて両者無関係とは思われず、建替えの可能性が強いが、いかなる理由で主軸を振ったかは不明である。

後期の竪穴住居において、出入口施設をもつと思われるものを第256図にまとめた。ただし調査において出入口施設とされたものは(3)SI104のみであり、明白に柄鏡形住居と言える(3)SI147さえも、調査時は土

坑との切合いと認識されていた。それ以外の３軒については筆者が可能性ありと判断してまとめたものである。以下、その根拠について少し述べておく。 (3)SI161は円形プランの竪穴住居に土坑状の出入り口施設がつくと思われるもので、当遺跡では唯一、称名寺２式に属する。炉の長軸方向から出入り口に相当するものと考えた。当該期の柄鏡形住居についてはまだ不明な点が多いが、可能性の一つとして提示しておく。(3)SI139は円形プランに２基の土坑状出入り口施設がつくと思われるもので、これも炉の長軸方向とほぼ一致する。(3)SI104との形態上のつながりをうかがわせるものである。(3)SI012は円形プランに柄状の出入口施設がつくと思われるものである。本来ならつながっていたものが、床面に近いレベルまで削平されてしまったため分離された状態で検出されたと思われる。竪穴本体側にはこの柄状の施設をはさむ位置にピットが２基構築されており、柄鏡形住居であることは間違いないと思われる。(3)SI147は円形プランに柄状の出入口施設がつくもので、先の(3)SI012と系統を同じくする柄鏡形住居と判断される。(3)SI104は円形もしくはＤ字形のプランにハの字状の出入口施設がつくもので、この形態の住居は後期中葉以降も県内各地の集落で構築されている。以上、調査所見に反する形となったが、思い違いや事実誤認があるかもしれない。ご批判賜れば幸いである。

３　出土遺物について

遺物については多くの問題を孕んでいると考えるが、残念ながら詳しく述べることはここではできない。後期堀之内式の遺物について少し述べておく。前項で大多数が堀之内１式新段階に属すると考えられると述べたが、主体となるのは頸部にくびれを持ち口縁部と胴部の文様帯が区画されるものである。東関東の堀之内式に主体的な器種であり、東北地方の綱取式の影響によることはすでに多く述べられている。この点については当遺跡でも変わりなく、称名寺式に由来する沈線を主体とする西関東系の土器が少数であるのも同様である。一方で日本海側由来の三十稲場式や南三十稲場式に影響を受けたと思われる資料も認められる。第112図168などは良好な例であるが、文様は在地のものながら同様の器形をもつ土器も散見される。そして当遺跡で特徴的なのは注口土器の多さで、遺構外出土土器については分類している最中にその点に気付き、意識して抽出するよう努めたが、遺構出土分については破片資料など抽出できていないものがあるものと思われる。遺構外出土土器種図の最後を注口土器でまとめたのは数の多さを強調する意図があったためだが、こうした状況も三十稲場式土器文化圏の影響かもしれない。ただし、そもそも一集落遺跡あたりどれほどの量の注口土器が存在するのかという点について不明なため、主観的な物言いに終始している可能性はある。この点についてもご批判賜れば幸いである。

第３節　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡４軒、土坑１基、埋設土器１基という内容で、遺跡地の面積を考慮すると極めて散漫な状況である。この時代の当遺跡の性格を考えるには材料に乏しいが、周辺遺跡の成果と照らし合わせて少しだけまとめておきたい。

各遺構の時期をみると、埋設土器(7)SX003が９世紀中葉、竪穴住居跡(26)SI001・002、(34)SI001が９世紀末～10世紀初頭と判断される。竪穴住居跡(6)SI030と土坑(3)SK193は判断できない。このうち最初に出現する遺構は埋設土器(7)SX003である。埋設された鉢の傍らから坏が出土しており、状況を見る限り蔵骨器である可能性が高い。おそらく坏は本来２点存在し、１点に火葬骨を収めてもう１点で蓋をし、土中に

埋納した上で外側を覆うように鉢を逆位で埋設したものであろう。この鉢は日常生活で使われるものでなく、専用器として製作された可能性が高い。遺跡地内には同時期の住居跡は皆無であり、被葬者が居住していた集落は外にあることは明白である。その候補としては西側に隣接する前平井遺跡がまず挙げられるが、この遺跡は現在整理作業中であり、現段階で判断することはできない。ただ、官道に面していたと思われる大規模な集落である前平井遺跡に対し、この埋設土器は集落から外れてかなり奥まった場所に位置している。１基のみの検出ではあるが、当地が墓域となっていた可能性は指摘できよう。

９世紀末～10世紀初頭には竪穴住居が３軒出現する。そのうち西端部に位置する(34)SI001は、実質的には前平井集落の一部といっていいだろう。北東部に位置する(26)SI001・002の２軒については、遺構の構造や出土遺物などに特異な点は認められず、これだけで性格を判断するのは難しい。周辺遺跡の成果をみると、小支谷を隔てて南側に位置する前平井堀米遺跡では、７世紀後葉に竪穴住居が出現し８世紀代にピークを迎えるが、９世紀に入ると急速に規模を縮小し９世紀後葉には居住の痕跡がなくなる。坂川に面した南側の台地上に位置する思井上ノ内遺跡では、８世紀前半に竪穴住居や掘立柱建物が出現し、９世紀代にピークを迎えるが、９世紀末になると急速に遺構が消滅していく。台地南端部の思井堀ノ内遺跡では、８世紀後半に竪穴住居や掘立柱建物が出現し、９世紀前半にピークを迎えるが、９世紀後半から規模を縮小し、10世紀初頭になると遺構もなくなる。これらの遺跡の動向をみると、古墳時代後期に前平井堀米において村落の形成が始まり、８世紀になると思井上ノ内、次いで思井堀ノ内において、掘立柱建物を伴う規格性の強い村落が誕生する。同時期の前平井堀米には掘立柱建物は存在せず、両者の性格は異なっていたと考えられる。第１章でも述べたが、葛飾郡桑原郷の中核に近いのは思井上ノ内・思井堀ノ内、周縁に当たるのが前平井堀米という位置付けかもしれない。それらの集落も早くは９世紀前半から、遅くとも10世紀初頭で消滅していく。社会の変容と人口の流動を示している。そうした中で、後平井中通において出現する９世紀末から10世紀初頭の住居は、こうした変容・流動の過程で生まれた居住の一形態と理解されよう。ただし、中心的な集落である前平井遺跡の成果によっては、見解が変わることも予想される。あくまで現段階での知見に即した理解であることをお断りしておく。

第４節　中・近世

検出された遺構のうち中世の所産と思われるのは、土塁(12)SX002・(21)SX001、塚(12)SM001、台地整形(25)SX011、土坑(12)SK004・(12)SK009・(25)SK008、地下式坑(25)SK001・(25)SK003・(25)SK007、井戸(12)SE011、溝(21)SD001・(21)SD002・(12)SD003である。この他の土坑、溝状遺構は近世の所産と考えられる。

土塁は２基調査したが、(21)SX001は溝を掘り、その掘削土を利用し築いたのに対し、(12)SX002は溝を掘らずに築いており、築造方法に違いがある。同時に築かれたものではなく、時間差があるものと思われる。ただ、大きな時間差は考えられず、どちらも15～16世紀のものであろう。(21)SX001と(12)SX002に挟まれた地区を土塁内部と仮定すると、内部には明瞭な中世遺構は認められない。後述する出土遺物と併せて考えると、屋敷や館に伴うものではなく別の用途を考えるべきであろう。

溝状遺構の(21)SD001、(21)SD002は土塁に伴うものと考えられる。(12)SD003は(12)SX002を築いた後に作られているが、(12)SX002を意識しているのは間違いなく、(12)SX002とともに機能したと思われる。

塚(12)SM001は、土塁(12)SX002の一部を利用して築かれたものと思われる。(12)SX002の裾を壊して掘

られた(12)SD003はこの塚を壊していないので、溝が掘られた後に築かれたものであろう。

土坑(12)SK004は16世紀中頃の内耳土器が出土しており、中世の所産と考えられるが、その性格は不明である。(12)SK009も出土遺物から中世の所産と思われるが、性格は不明である。(25)SK008からは時期を特定できる遺物は出土していないが、中世の方形竪穴遺構になるものと思われる。

地下式坑は(25)SK001・(25)SK003・(25)SK007の3基が検出された。時期を特定できる遺物は出土していないが、中世に築かれたものであろう。これらは地下室、竪坑の形態は同じだが、竪坑の掘り方に違いが見られる。また(25)SK003は底面に焼土や炭化物が堆積し、遺構の堆積状況も自然に埋没した状況でなく、意図的に埋め戻した様子がうかがえる。また(25)SK001は廃絶後、時間を置かずに天井が崩落しており、人為的に壊された可能性も考えられる。これに対して(25)SK007は廃絶後、ある程度時間が経過してから天井部が崩落しており、しばらく放置されていたようで、構築や廃絶の方法にも変化が見られる。

ピット群(25)SX001は、台地整形(25)SX011の北側で検出された。建物を構成する柱穴と思われるが、建物として復元することはできなかった。

台地整形(25)SX011の周辺では、土坑、ピット群、地下式坑が検出されている。周辺の遺構からは遺物は出土していないが、ピット群(25)SX001や地下式坑(25)SK007、方形竪穴遺構(25)SK008などが関連し形作っている中世遺構群であろう。

溝状遺構は(21)SD001・(21)SD002・(12)SD003以外は近世の所産と思われる。近世の溝の方向等に規則性は認められず、その性格は不明であるが、L字に曲がり何らかの区画を意図したと思われるものも見られる。

土坑に関しても前述のもの以外は近世の所産と考えるが、その性格は不明である。

調査区遺構群(31)SB001は明確な建物跡に復元できなかったが、ピット内から寛永通寶が出土しており、近世の建物跡であろう。多くのピットが見られるので、建て替え或いは補修が行われたのであろう。

次に遺物を見ていきたい。中・近世の遺物として、土器、陶磁器、石製品、土製品、鉄製品が出土した。古いものでは12世紀代の渥美甕や、14世紀代の常滑片口鉢が出土しているが、他は15世紀代から近世にかけてのものが主体を占める。中世の遺物では15世紀後半から、16世紀中頃の遺物が多いが、16世紀後半のものも見られる。また遺物の組成も日常雑器が主体で、貿易陶磁等の良品や特殊な器種は認められない。検出された遺物や遺構から見ると、15世紀後半以降に築かれた村落と考えるのが妥当であろう。

報告書抄録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	流山市後平井中通遺跡
巻次	6
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第３７集
編著者名	安井健一　落合章雄　齋藤修佑
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町1-1　　TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2021年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うしろひらいなかどおり 後平井中通	うしろひらいなかどおり 流山市後平井字中通	12220	032	35度51分16秒	139度55分08秒	19980216～20161104	77,412㎡	土地区画整理事業
				日本測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後平井中通	包蔵地	旧石器	石器集中地点　５か所	ナイフ形石器、槍先形尖頭器、剥片、RF、UF、石核、接合資料、礫	
	集落跡	縄　文	竪穴住居跡　57軒 焼土遺構　１基 土坑・ピット　278基 ピット群　５群 陥穴　４基 貝ブロック　５地点	縄文土器(早期～晩期)、縄文時代石器(石鏃、石匙、石錐、削器、打製石斧、磨製石斧、磨石類、石皿)、土製品(土偶、ミニチュア土器、土器片錘、土器片円盤)、石製品(垂飾)	
	包蔵地	弥　生		弥生土器(後期)	
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡　４軒 土坑　１基 埋設土器　１基	土師器、須恵器、支脚	
	集落跡	中・近世	台地整形区画　１基 地下式坑　３基 方形竪穴状遺構　１基 土坑・ピット　33基 井戸　１基 溝状遺構　32条 塚　１基 土塁　３基 建物跡　１棟 ピット群　１箇所	陶磁器、カワラケ、焙烙、土製品(土製円盤・転用砥石)、石製品(板碑、石臼、砥石、火打ち石)、金属製品(刀子・煙管・釘・鏃)、銭貨	

要　約

旧石器時代の遺物は５文化層から検出され、定型的な石器は乏しいものの、北関東産の石材を多用する傾向が認められた。縄文時代の遺構は前期中葉、後葉、後期初頭、前葉の４時期に分かれる。前期中葉は南側台地を中心に小規模な集落が形成される、前期後葉と後期初頭は小規模な遺構群が局所的に構築されるが、後期前葉になると環状集落が展開する。奈良・平安時代の遺構はごく散漫な分布である。中・近世の遺構は15～16世紀を中心とする塚、土塁、台地区画整形を中心とする遺構群が検出された。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第３７集

流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書６

－流山市後平井中通遺跡－

令和３年３月25日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印　　刷　三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397